生田春月全集

第五巻

相寄る魂

——後——

生死相伴

新潮社

大正十五年二月熱海海岸にて寫す

目次

相寄る魂（後編）

第四巻

裏日本の秋

定業は早し。貪る墳墓はかしこに待つ。
ああ君が膝にわが額を押當てて、
暑くして白き夏の昔を嘆き、
軟くして黄き晩秋の光を味はしめよ。

シヤアル・ボオドレエル
永井荷風氏譯

一

これ迄の生活の始末に一日をすごして、その夜の十時過ぎ、純一は新しいバスケット一個、メリンスの風呂敷包み一個、この二つを結び合せたのを提げて、東京驛前の停留所で、これも長い旅路に就く人と思はれる、神田あたりの商店員らしい男の後から電車を降りた。軌道を横ぎつて歩き出すと、後から女連れが小さな女の兒などを交へて、二三人の聲とりどりに話しながらおくれて來る。何とはなしに振返つて見ると、彼の乘つて來た電車はもう行つてしまつて、反對の方から來た電車がそこにとまつて、それからも四五人それぞれ荷物を持つて降りるのが、闇い濠端の夜景に物寂しく光つてゐる電燈の光の下に、浮き上つて見えるのである。これ等の人々が目ざして行く驛の右手の乘車口は、人影稀れな左手の降車口とは、同じ宏大な建物の翼の兩翼でありながら、その中がずつと明るく、生々として見える。乘り捨てた自動車が七八臺、黒影を並べてゐるのも、いかにも大停車場らしく見えるのである。

純一はグングンと歩いて行つて、ホオルの中央に立つと、一わたり場内を見廻し、どやどやしい場内の空氣に浸りながら、列車發着表の掲げられたところに近づいて、「神戸行十一時三十分の急行列車の條にゆつくり目をとめてから、左方にある三等待合室へ入つて行つた。

四方の壁が眞白で、たつた一つ大きな時計がかかつてゐる外に、何一つ眼にとまるもののない、ガランとした、地下室めいた此の待合室の腰掛には、餘地もない迄に一杯に、種々樣々の風態をした待合客が腰掛けてゐた。彼等はもう神戸行の旅客ばかりであると言つてもよかつた。その多くは、夫婦に子供、姉と妹と云つたやうな、家族らしい組で、とりどりな訛のある言葉で喋つたり、雜誌を讀んだり、ただぢつと眼を瞑つてゐたりしたが、中には腰掛の上に横になつて、その顏にハンケチを當ててゐる女なども見えた。

隅の方の腰掛の端に、バスケットと風呂敷包を置いた純一は、袂から煙草の袋を出して、その中から抜いた一本に、パッとマッチの火をうつして、すぱすぱとくゆらしながら、ずつと壁際を行つたり來たりした。

彼がかうして二三本煙草を吸ひ切つた時分、彼が荷物を置いた隣の席で、十七八になる怜悧さうな顔をした女學生上りらしい女が、誰か連れがあつて、その連れが買物にでも行つたと見え、二人分位の荷物をひかへて、愼ましやかにうつむいてゐたのが、ふと思ひ付いたやうに目を純一の方に向けて、きまりが惡さうに聲をかけた、

「一寸すみませんが……この荷物を一寸御願ひいたします、本當にすみませんけれど……すぐ歸つてまゐりますから……」

彼女はかう言つて、純一が承諾の會釋をするのを見ると、安心したやうに、少し小腰を屈めるやうにして待合室から出て行つた。

見ず知らずの間のかうした親しみが、何とはなしに純一の心に影を曳いた。どんな境遇の娘か知らないが、彼は彼女が何となくいぢらしかつた。彼は今度は腰を掛けて、また新しい煙草に火をつけて、立ちのぼる煙を靜かに見た。

間もなく娘は手に切符を持つて歸つて來て、純一の方に輕く會釋して、愼ましやかに以前の通り腰をかけた。純一は娘が手に持つて眺めてゐる二枚の切符、二枚の急行劵を見て、自分も切符を買ひに行かうと思つて、バスケットと風呂敷包とを提げて、待合室を靜かに出た。

重なり合つてゐる人の後から、かなり長い間順を待つて、彼が切符と急行劵とを買つた時分には、二つの改札口の前には、もう集まるともなく集まり、相寄るともなく相寄つて、もう二條の鎖のやうに行列が編まれかかつてゐたので、純一もその後端に立つた。立つてゐると、後へ後へと人が加はつて、暫くして後を見ると、一番後だつた自分は既に眞中どころになつて、自分の後にはもう四五十人もガヤガヤ言つてゐた。あの娘は何處に立つてゐるのだらう、

そんなことが輕く心を掠めた。
かなり長い間待つて、この行列が改札口へと動きはじめた。ひた押しに後から押して來はじめた。切符を切つて貰つたものは、豆のはじけるやうにはじけ出して、我れ勝ちにとけたたましい下駄の音を立てながら、ずつとずつと奥をめざして駈け出して行く――。
純一は少しも駈けなかつた。昂奮した氣持はありながら、彼はずつと落着いて、底に一味の痛快感をさへも持つてゐた。プラットフォムに上つて行くと、これから四百哩の長驅疾走をしようとする非常に長い列車は、窓をすつかり開かれて、扉は全體に乘客を呑み込んでゐた。
純一は一番近い列車に乘り込んだ。そして洗面所に近い端の方に、辛うじて空席を見出したので、そこに腰を下して、他の乘客のするやうに、バスケットと風呂敷包とを頭の上の網棚に上げた。
二つ先きの窓から、上半身を乘出しさうにした若い男の面前には、男女七八人のいづれも若い連中が見送りに立つてゐて、めいめい口早やに笑つたり、話しかけたりしてゐる。その見送られてゐる若い男は、いかにも得意さうに、才人振つた樣子で、
「諸君に感謝する、どうぞ健在でゐてくれ給へ！」と、はずんだ聲で言つてゐる。
ガランガランと發車のベルが鳴つてから、あたふたと降りて行つた見送人が、今度は窓から覗き込む時分に、氣が付いて見ると、汽車はもう動いてゐるのだ。見送人の顏が、順々に、靜かに右へ移る。顏と顏とはすれ違ふ、聲と聲とは別辭を投げ合ふ、ハンケチは振られる。これらのシインを純一は靜かな眼をしてぢつと見てゐた。
純一にはたつた一人の見送つてくれる人間もないのだ。たとひ見送りに來ようといふものがあつても、彼はことわつたに違ひなかつた。戰敗者といふよりも、むしろ勝利者の感を抱いてゐる彼は、たつた一人誰にも知らさないで、

その孤獨と矜持とを徹底的に味はひながら、この東京を見棄てたいのである。さうした彼のややわざとらしく思ひ上つた眼に、やがて東京の灯影もつひに全く消えてしまつた。

一番最後の、しかも急行列車なので、次々に現はれる小驛の灯のかたまりを、數驛と云はず迅く通過して、宛かも眞闇をつんざくやうに、刻々に速度を增して汽車は走る。轟々と音立てて鐵橋をわたり、寂しい箱根山中を貫いて汽車は走る……

東京は既に去つてしまつた、もう五六十哩もの後方になつてしまつた時分、

『東京は行つてしまつた、多分永久にであらう……だが、自分には何の感想もない』と純一は自分に言つた。

事實、彼には東京に對する愛着と云ふものは、殆んど心に浮ばなかつた。十年に近い間、種々の哀歡を閲した彼の東京の生活は、殆んど無意味であると思はれた。心に殘るものは、ただ一味のビタアネスである。それすら今は單に心の疲勞と云ふ程のものに過ぎない、その空寞感は、丁度惡夢の醒め際の心持に近い。然し、その底から、闇の彼方に遠ざかり行く幸福と不幸との大都會に住む人達――一昨日別れを告げた養老院の江添忠治、林田先生や細谷氏、彼が愛した女、彼が愛された女――これ等すべての人に幸ひのあるようにと彼は祈つた。

駿遠の野を通る時分に、列車の窓に斜めに雨が降りかかつた。乘客の殆んど凡ては、薄暗い電燈のもと、濁り澱んだ空氣の中に、肩と肩とを靠れ合はせたり、腰掛の後にもたれたりして、前後正體なく寢入り込んで、はつきりとした氣持で、この雨の音を聽いてゐるものは、純一の外にあらうとは思はれなかつた。硝子戸をぢつと見てゐると、外部の漆黑に裏打ちされたその硝子の面には、雜然たる車內の光景が折り重つて映し出されてゐる。鏡にでもむかふやうに、純一はその硝子面にうかぶ自分の顏をぢつと見つめた。それは細長い瘠せた顏であつた。

彼は立上つて、網棚からバスケットを取下して、それを自分の細長い膝の上に置いて、二つの金具をはづして、蓋を

あけた。一番上にある假綴の佛蘭西本は、今日買つたばかりのアミエルの『ジュルナアル・アンティーム』である。この本は彼が長い間讀みたいと思つてゐたもので、世間的の欲望を擲たうと決しただけに、とりわけ今の場合、このジュネエヴの隱遁的な哲人の生活に心を惹かれたのである。それからアミエルと一緒に買ひ込んだセガンティニの畫集や、なほ二三册の書物の下に、一綴りの詩稿があり、これ迄の書きかけの原稿の中から、特に捨て難く取殘して置いたものがあつた、その中には小說の未定稿の二三と、かの不幸な『二重の叛逆』の稿とがあつた。これらの原稿の中に挾まつて、出發の前日、彼が細谷氏から返して貰つた『自死自葬論』の草稿もあつた。純一はかの自死自葬論者渡邊虎造が、あんなにも熱烈に、公刊して世に問はうとねがつてゐたこの自死自葬論の稿本を、自ら一讀することさへ出來ないで、その所志とたがふ死を遂げて、最早既に此世には存在してゐないのだと考へると、漠然とした一般的不如意といふ感じが、彼の心に閃いた。と同時に、彼は今こそこの論文が或る深奧な攝理によつて自分自身の手にゆだねられたことを考へて、そして、何か或る不思議な力をもつて、自分の心がこの奇矯な所信へと惹き寄せられるのを感ぜずにはゐられない。

彼の心がこんな風にはたらきつつある間に、彼の手は殆んど機械的に、バスケットの中のその所持品を丹念に一々讀みあげてゐた。彼の詩集『裂けた靑絹』に對する二三の新聞の簡單な新刊紹介――それはいづれも詩壇の好收穫とか、近時の注目すべき詩集であるとかいつたやうな紋切形の評語をもつてゐる――の切拔や、その校正刷の綴込みや、細谷出版部から來た謝禮の包紙や、さうした彼の詩人としての貧しい收穫をひつくり返してゐると、その一番下の方に厚い二通の手紙がある。純一はこの手紙を取上げて、その封筒に書かれた自分の名前をぢつと見た。そして、彼の手はその手紙の一通を開くともなく開いた、幾度びとなく讀んだ手紙を、彼の目はまた追うて行つた、

「あなたは逃げて來いとおつしやる、私はそれを知つてゐます、とてもとても、それより外に道のないことはわかり

ます。今日……明日……明後日……いやいや、私には今何が出來るでせうか！

　私は今、病床に横たはつてゐるのです。一昨日友一郎にドンと突かれたあの肩の打撃がこたへたのです（わるい事をした、おまへは病氣だつたのに、わるいところを打つた、許してくれ）と友一郎が昨夜も枕もとにすわつて、あやまつてゐましたツけが、あの友一郎の手の當つた肩や肋膜のところが痛いのです。その痛みが、何だか身體の組立を一つこはしたやうな氣がします、どうもただではないのです。今度こそ肺をやられてゐるやうな氣がします。死ぬかも知れないと思ひます、血をはくかも知れないと思ひます。

　あなたのところへ逃げて行つたその日その時、私はどんなになるか知れないと云ふことを覺悟して下さい。逃げて行くことは逃げて行きます。けれど、またもう一つ考へ直すと、あなたのところへ行つた匆々私が病んで、血をはいて死ぬなんて云ふことは、あなたに對して、どんなに考へても、あまりにすまないのです。こんなに考へるのは、病氣からの神經過敏だとも思ひます。あなたはどんなにじれつたくお思ひになるか知れませんが、當分の間、小波村へ行つて靜養して、もつと健康を取り戻して、この秋のはじめあたりに、あなたを喜ばせるやうな健かな明るい顏をして、お目にかかりたいと思ひます。あなたに對して、とやかくと云ふ氣持からではありません。女の身になつて考へて見て下さい。こんな自分をあなたにお目にかけるのは、あまりにみじめで悲しいのです……」

　濕んだ眼を、純一はぢつと夜の硝子戸に凝らした。

「逃げて來なくてもいい……あなたはもう逃げて來なくてもいい、敏子さん、私が歸つて行く、私があなたを奪ひ出してあげる……」

　彼には酷しい嶮難と悲しい狂歡との粘着し合つた種々の事件と情景とが豫想されてくる。それは自分の生涯を決すべき戰ひでなければならない。彼は一月前には豫想だもしなかつた、こんな息づまるやうな期待の中に、今こそ自分

が本當の男性であることを示すべき時であると、彼は考へる。
「敏子さん、あなたはただ私の方にその瞳をぢつと注ぎ、その手を一杯に私の方に差出してくれさへすればいい、然し、私が言ふことを聞いてくれなければいけない。あなたは賢い、けれどもその賢さは、やはり女性の弱さから出て來る。それにあなたはいくら愛してゐないとは言つても、あなたの良人に私よりもずつと親密な狀態に置かれてゐるのだから、長い間の惰性に惹かれて、この前さうであつたやうに、愈々となつて、私を裏切るといふ虞れがある。言ふ迄もなく、裏切つておいて、すまないと言つてあなたは泣く女だ。然し、今度こそはさうなつて貰ひたくない、いや、僕がさうはさせない！」

純一は敏子の手紙をもとのバスケットの底に藏めてから、すべてをもとのままに直して、蓋をしめたそのバスケットの上に兩肱を立てて、指先きを痛む顳顬の脈の上に押へ付けて、ぢつと思ひ耽つた。雨はますます強く降り出して來た。風さへ吹いてゐるやうな樣子だ。梅雨の時分とはいつても、こんなに降ると、やがて河も氾濫するであらう。雨に濡れしよぼれてゐる小さな遠い町の灯が、妙に永遠的な悲哀の情をそそる。窓硝子に吹きつけられた雨粒が、タラリタラリと流れ落ちるので、その黑い幾條もが格子のやうに見えるのである。

夜明に名古屋を通り、九時頃京都に着いた時分は、雨は小降りになつて、空は異樣な灰白の光に蔽はれて、低くどんよりと垂れてゐた。長い間かけずめなので、背や腰のあたりが痛いのであつたが、純一は京都に一泊すると云ふ氣にはならないで、雨傘をさしかざして右往左往する京都驛前の混雜を見すごして、そのまま山陰線に乘り替へた。此の間敏子がその良人とともに此處で下車して、此處で一泊したといふことが、妙に心に翳をさして、彼は發車の遲いことがとりわけ焦立たしかつた。

丹波、丹後、但馬、——山は山につづき、隧道は隧道につづく、大小の溪流はすさまじい激流となつて、車窓に迫

りまた遠ざかり、右に見えたり左に見えたりする。

この山陰線の軌道が、純一の故郷の米子を起點として起工されたのはかなり古いことであるが、それが今のやうに京都まで全通したのは割りに新らしく、勿論純一はこの列車には始めて乘つたのである。彼が上京した時には、境から舞鶴まで連絡船に乘つて、その舞鶴から大阪行の汽車に乘つて、大阪で東海道線に乘り替へるといふ工合なので、隨分不便でもあり、とりわけ少年の彼にとつては寂しい旅でもあつたのである。

あまり澤山隧道を出たり入つたりするので、山地の少ない東海道線に比べると、ずつと氣分が暗い。それに乘客の少ないことが、一層陰氣な氣持を起させる。汽關車から吐き出す黒煙が、左右の隧道の內壁に壓されて、車窓を點々と這ひ流れるので、隙間から湧き込む煤煙が、乘客の顏にも肩にも降りかかつてくる。

城崎を出ると、これまでの山間地方とは違つて、山は海に近くあつた。その海は、その日本海の海は、降りかかる烟雨のために、濁つて、灰がかつてゐる。その海は死んだもののやうに靜かで、一隻の船影も認められない。海といふよりは氷河といふ感じである。やがて餘部の大陸橋も過ぎた。西へ西へと——汽車は走つて行く。因幡の國に入つて行くと、砂丘が絶えず右手に盛り上つて、つい車窓の傍らにその裁斷面を見せ、それに靑黒く伸びた小松が奇妙に彎曲した長い姿を橫たへてゐる。遙かに一帶の松林が連つてゐたり、また山がその平面を隱したり、再び海がその化石したやうな面を見せたりしながら、近く右手の砂丘の間に小さな湖水が見える時分には、汽車は旣に伯耆の國に入つてゐた。

山陰線に入つてから、乘客が少なくはなつたが、その代り、始終入れ變つて、それと同時に、一驛また一驛と、次第に鄕音が耳につき出して、見覺えのある鄕里の顏の型さへ見分けられるやうな氣持がする。それにも拘はらず、純一はあだかも異鄕のやうな氣持で周圍を見まはすのであつた。

「こんな寂しい片田舍に自分は生れたのかしら……こんな寂しい暗いところで、自分はこれから生きて行くのかしら……」

から考へると、彼の心には、一瞬、佗しいやうな、みじめなやうな、たよりないやうな思ひが漂うたが、すぐそのあとから、然し、敏子と共に、この僻遠の地で、自分達の生命感の高調を味はふことが、それがこんな地方であるだけに、一層意味のあることでもあり、その生活が一層生き甲斐のあることに感じられるのであつた。

日は雨とともに徐々と暮れはじめた。一つ一つ、どんな小さな停車場にでも汽車はとまるので、長途の汽車旅行に疲勞した純一にとつては、もどかしく、いらいらしかつた。八橋、赤碕、下市、御來屋、淀江、――やがて汽車は遲遲として淀江驛の構內に入つて行つた。彼は小さい時なくなつた祖母と叔父の家に來る度に乘り降りしたこの昔馴染の停車場で、雨に濡れた窓をあけて外を見まはした。ぼんやりとした電燈のともつてゐるプラットフォオムの、丁度時計のかかつてゐる柱の下の腰掛には、雫の垂れる雨傘を立てた二三人の客が上りを待ち合せてゐる。その中の、雨傘を石疊の上に突いて、ぼんやり此方を眺めてゐる四十年配の男の頰骨の高い顏は、純一には見覺えがあつた。その男は廣田の叔父の家に出入をしてゐる男で、純一が叔父の家で厄介になつてゐた時分には、まだ三十格好の血氣盛りで、手まめな男で、氣むづかしい叔父の浩藏に妙に氣に入つて、酒代の借りが餘程かさんでも、それ程に嚴しい催促もされないでゐた。純一は本來ならば此の驛で下車して、叔父の家に眞直ぐに行くべきであつた、さうしたら、叔父がどんなに喜んで迎へるかと云ふ事は目にも見えるのである、叔父の浩藏が純一を南の家へ養子にと云つて、手紙を彼のところによこしてから、今にも必ず歸つて來ると樂しみにして待ち構へてゐる矢先きなのだから。下りようかどうしようかと、一寸の間、純一は自問自答した。そして、彼は俥一臺見えない驛の前に降つてゐる白い雨脚を眺め、そこに一軒ぽつねんと立つてゐる茶屋の暗い火を眺めてゐると、さつと雨が彼の頰へふりかかつた。彼はつと首を引込め

て、窓をビシヤリとしめてしまつた。

二三人どかどかと入り込んで來た乘客の中の髭面をした一人が、純一の近くまで來た時に、顔見知りの男を見出して、

「これは御來屋の綱田の旦那、今日はまたこげな降りに何處へお出でなさいますナ？」と聲をかけながら、その傍らに腰をかけた。

「エヽ、一寸急用で米子まで……どうもえらい降りで困りますナ」

二人は汽車が動き出すと、この頃の不順な天候の事や、世間の不景氣な事や、米子の銀行の話などを聲高に話し續けた。年嵩で事によつたら三百代言のやうな事をやつてゐさうな髭面の男は、年のやや若い、かなりの資産家の若主人らしい御來屋からの乘客に、妙に媚びてゐる樣子で、急に調子を變へて、最近此の地方で起つた事件を面白可笑しく話してゐる。切れ切れなその言葉から、純一はその事件を綜合した。

米子近在の農家の四十女が、年の若い情夫をこしらへて、十年も連れ添つてゐる自分の良人を嫌つて、良人がそれをうすうす知りながらも、見のがしてゐるのをいい事にして、好き放題に振舞つてゐたのが、世間や親類の口がうるさくなるにつれて、良人がますます邪魔でならなくなり、いつそ一思ひにといふ氣になつて、その良人をたうとう毒害してしまつたと云ふのである。

話し手も聞き手も、さうした情痴の事件に興味をもつてゐるばかりでなく、周圍の者も耳を傾けて聞いてゐる。それだけに、髭面の男は愈々皆に滿足を與へたいと云つたやうに、その事件のいきさつを、もつと下品な情慾の話に持つて行つたりした。いかにもそれがこの男の揑造であることが見え透いてゐるやうなつまらない話である。

「時に君」と若い方の男が、そんな話に辟易したやうな樣子で、話頭を轉じた、「此間ナ、西尾惣兵衞さんから、米子

に今度病院をこしらへるので、その株主に入らんかつて勸誘に來ましてナ、どうもことわり切れんで、ちよつこりなら持ちませうと返事はしたが、さて、そげな立派な病院がこの米子邊で成り立つて行きませうかナ」

「アア、あの共愛病院ですかい、そりや旦那、西尾のあの金力と押しとで行きや、成り立つも何もない、どげにしてでも遣つて行きますわい。何しろあすこぢや病人が替りばんこに出來るちうことだもん、東京から醫學博士だとかドクトルだとか云ふ先生方を仰山に招いたら、さしづめ割安のお抱へ醫者を置いとくやうなもんで、何しても食へん狸爺ですもんナ」と言つて、にやにやと笑つた。

純一は先刻からこの二人の話を聞くともなく聞いてゐたが、西尾惣兵衞の名が出ると、一層耳をすました。彼は既に故鄕の關門に於て、早くもこの名を耳にしたことを、意味深く考へた。

「病人ツて、そげに替り替りありますかナ、誰かこの頃わるいですナ？」

「どうも若奥樣がようないツてことでしてナ、此間もそれで東京へ診て貰ひに行かんしたげナ。何しろあの若奥樣はあすこの家ぢや大切にしとるちうから、まあ今度の病院も、そげなところから思ひ付かんした事かも知れんで……」

「成程ナ……あすこの若奥樣ちうのは、えらい美え女だげなが、何處が惡いんですナ？」

「どうもここらしいで……」と言つて、その髭面の男は自分の胸のところを輕く抑へた、「氣の毒なもんで、こればつかりはなんぼ金持でもナ、それに……」と言つて、彼は更に前屈みになつて、勿體らしく聲をひそめて、何か言ひ出すと、相手の男は眼を据ゑながら、フンフンと返事をして聞いてゐる。純一はそれが敏子に關する何事かであるとは思つたが、その何事かはわからなかつた。

急に汽笛が鳴つて、汽車は轟々たる音響とともに、鐵橋の上にさしかかつた、日野川の幅廣い河面に架つたこの長い鐵橋の、ずつと下流に、鐵橋とほぼ同じ長さの木橋が、暮色の中に模糊として横たはつてゐる。

「ああ、あの橋だ……あの橋を敏子が夜家を逃出して、たつた一人で、小波村へ駈けて行くとき渡つたのだ……」

彼はぢつと眼を凝らして、蒼然たる暮色の中に烟つてゐる兩岸の松林や、河中の砂丘や、その砂丘のほとりに白く激する水流やを、痛ましい心持でぢつと見てゐた。忽ち、それらの景が退き去つたかと思ふと、右手の方、黒くうかぶ山の麓からかけて、この寂しい山陰道の小都會――彼の生れた町――の點々たる燈影が、軌道の前後にきらめきはじめた。

彼の胸は、急にドキドキとその鼓動を高めた。

二

改札口を出ると、純一はそこの廣場のはしに彳んで、そのあたりを見渡した。もう雨はやんでゐたが、目前の廣場から伸びてゐる一條の大通りは、雨にたたかれた路上に、その兩側につらなる大きな旅館や休憩所の電燈の光を映して、家並は黒く薄白い夕空をかぎつてゐる。曾つて彼がその祖母に送られて、この驛を發つた時分には、茶町からこの驛前までつけられたこの廣い新道路には、ところどころ路上に雜草さへも生えてゐたのに、今は左右の田圃はもうすつかり町づくられて、目の届く限りは、殆んど寸尺の空地をも見出すことが出來ないほど櫛比してゐる。

「何といふ變り方であらう！」

彼がかうした故郷の變遷に對して、浩歎の思ひに包まれて立つてゐるのを、宛かも遠方から來て、始めて此の地に降り立つた不知案内の旅客と思つたらしく、停車場の建物の廂下を行つたり來たりして、客待ちをしてゐる車夫の一人が、

「旦那、まゐりませうか、わしが知つとります親切なええ旅館へ、お送りしてもようございますが……」と聲をかけ

た。

「乘つてもいい……」と、純一が釣り込まれたやうに言ふと、車夫はよちこよちこと走つて行つて、構内の左側に並んでゐる澤山の俥の中から、自分の俥を引き出して來た。その俥は古びてゐた、車夫自身も年とつてゐた。何だか此の男は自分の見知りの男ではないのかしらと、純一はふと思つた。

「岩佐旅館にしませうか、それとも米伍にしませうか、岩佐は此間改築したばつかりで、なかなか立派なお座敷もあつて、大した旅館でございますから、岩佐の方へお伴しませうか……」

「いや」と純一は言つた、「僕は旅館へは行かない……尾高町四十九番地といふと、どのあたりだらうね、多分河端のところを入つた裏通りだらうと思ふが……」

「それぢや旦那は此の土地の方でございますナ……」と車夫は心易すさうに言つて、まじまじと純一の顔を見て、「わしは大阪から來なすつた始めてのお客さんだと思つとりましたがナ」

かう言ひながら、車夫は梶棒をあげて、泥濘の廣場を、彼が走れるだけの早さで、すとこすとこと走り出した。

「旦那は何處の方へお出でになつとりました？」と、俥が二三町その廣い通りを走つた時、老車夫は振返つて訊いた。

「僕かね、僕は東京から歸つて來たのだ」

「東京から……ぢやお江戸からお出でになつたので……さうでございますか。そりやまた大したところへお出でになつとりましたナ……お江戸からお歸りになつたんぢや、こげな米子の町なんか、見られたものぢやございますまい、米子もこれで此の近年家も增えましたし、隨分繁華になりはしましたが……」と車夫は走りながら言つた。

純一が別に返事をしなかつたので、車夫はそれきり默つて、草鞋の音をぴしやぴしやさせながら走つて行く。そのぴよいぴよいとをどる小さな背中を、純一は暫くぢつと見戍つてゐたが、再びその眼を左右の街並に轉じた。そこの

街並は彼にはすべて目新らしいものであつた。突當つた茶町の通りは、そこで切り開かれて、大道路は一直線に公園の方へ走つてゐるのである。然し、俥はそこを右に折れて、昔ながらの老廢した通りを、町の目貫の大通りへと走つた。それは純一が小學校に通ふをりに通つた町筋であるが、今見ると、その道幅のあまりに狹いことが彼の注意を惹いた。その道には雨水がところどころに水溜りをこしらへて、そこを通る人影は極く稀れで、兩側の店々の電燈もひどく陰氣臭く見えた。

左手に珍らしく大きな洋館の銀行の建物などを見て、やがて俥がとある菓子屋の前に來ると、車夫が顔を擧げて言つた、

「四十九番地と云ふと、西尾の邸の裏通りの方でせうから、ここから曲りませう……」

俥はその更に狹い、殆んど兩側の家にすれすれになる位の横町に入つて、町裏に流れてゐる加茂川——純一はそこに昔ながらの淀んだ流れを見た——に架け渡された、澤山の町家の裏口への通路の橋の列をぬきんでた、より大きなその橋を渡つて、川添ひに左に折れて、でこぼこの上に躍り上りながら行く。純一は車上から、何處らあたりだらうと、右手のゴチヤゴチヤした小店やしもたやなどの家々を目で探した。

「何ちふ家でござりますか？」と車夫が訊いた。

「山岡といふ家なんだが……」と純一は姉の良人の姓を言つた。

「お店ですか、それともしもたやですか？」

「多分店はしてゐないだらうと思ふ、主人は鐵道の方に出てゐるさうだから……」

川を離れて右の方へ折れたところで、車夫はそこの駄菓子屋の窓障子越しに、大きな聲で、

「一寸お訊ねいたしますがナ……このあたりに山岡さんといふ鐵道に出てゐる人のお家はありませんか、番地は四十

九番地ですが……」
「山岡さんかえナ」から言つて、田舍者らしく呑氣にのこのこと出て來た女は、俥の上の純一をしげしげと見やりながら、
「山岡さんはついそこを曲つたところの二階立の、八軒長屋の五軒目でございますよ」と言つた。
俥をゆるゆると引つ張つて行きながら、車夫は同じやうなまぎらはしい、黑ずんだ紅殼塗りの格子造りの構への家を、一軒一軒その標札を見て行つた。
「あ、ここだ」と純一は、もつと引つ張つて行かうとする車夫を呼びとめた。その家の入口に張りつけてある名刺の文字はもはや讀めなかつたが、仕立物處の看板がまぎれもなかつたし、そこが敎へられた五軒目の家だつたのだ。
車夫を歸してから、純一は兩手にバスケットと風呂敷包とを提げながら、どんな顏をして母や姉が出て來るか――勿論母の顏にも姉の顏にも、久し振りに逢つた骨肉の喜びが一杯であることを想像しながら、低い聲で、
「御免なさい」と聲をかけた。
彼がかう聲をかけたのと殆んど同時に、入口の雨戶にはめられた小障子が曳かれた、純一が前屈みになつて、家の中に入らうとして、家内を見ると、そこの薄暗い土間には、此方を物疑はしげに眇目のやうにして見てゐる彼の母親の長い顏があつた。
「誰かと思つたら……」と純一の方を見ながら、おなじやうな固くなつた表情を一杯にした母親が言つた、
「俥がとまつたから、誰かと思つたら、純一だつたかや……」
黑い着物を着た母のおしまは、かう言ひ捨ててから、上りがまちを踏んで上へあがつて、のツしのツしと二階の梯子段のところへ行つて、そこで上を向いて、

「お梅、お梅、一寸降りて來いや、純一が戻つて來たけに……」と呼んだ。

二階から降りてくるのを待つ間、おしまは離れたところから、まだ土間に立つてゐる純一の身なりや樣子やをまじまじと詮索するやうに見やりながら、

「浩藏さんの手紙で戻つて來たかや……浩藏さんは待ち兼ねてござるやうだつたけに、えらい喜びだつたらうノ、どげな工合だつたナ……」

「いや、淀江には寄らないで來た……」と純一はバスケットや風呂敷を上りがまちに置いてから、上にあがつた。彼は母親がいきなり叔父の浩藏の名を持出したことが、當然な事かも知れないとは思ひながらも、そこに何だか冷たい或る物を感じて、それが彼の心持を冷たく醒ました。

「寄らんで來た？……どげしてナ？」とおしまは聲の調子を變へて言つて、怪體ナと言つたやうな眼色をして純一を見つめたが、何思つたか、もう一度前よりも大きい聲で、二階にゐる姉のお梅を呼んだ。

「嘘だらう、純一が戻つて來たなんて……」と言ひながら、二階からおりて來た姉のお梅は、大きな丸髷に結つた樣子つきが、いかにもまめまめしい女に見える。彼女は目の前にゐる若い男を確かに驚いて見て、

「ほんとだ、ほんとだ、純一だ……よう戻つて來たのね……おまへの戻つてくるのを長いこと待つとつたもんだから、待ちかねてしまつて、今ぢやほんとに戻つて來たのに、嘘だかと思つたよ。俥がとまつたやうだとは思つたが、隣の家だとばつかり思つて、まさかおまへが戻つて來てくれたとは思へなかつたんだよ……」

なつかしさうに純一の眼に見入つて、かう言つた姉の梅子の眼には、肉身の情愛の涙が浮びはじめた。

「ほんとによう戻つて來た、此間もおまへの戻つて來た夢を見た位だもの……もう何年振りになると思ふ……」かう一息に言つたが、ふと氣が付いたやうに、梅子は母親をかへりみた。

「ア、お母さん、純一に着替へを出しておやり、山岡のでもいいから」

「純一は自分のを持つとるだらう」と母親がキッパリと言つた。涙の代りに、一種の暗い冷たさをありありと見せてゐるおしまの眼は、純一のバスケットの方に走つた。

「荷物はこれだけかナ？」

「いや、東京から通運會社にたのんで行李が一つ後から届く事になつてゐる……」

なぜかは知らず、彼はその上母親とは口をききたくないので、姉の梅子の方に話をもつて行つた、

「姉さんは續いて達者でよかつたね……」

「アア、おまへも病氣しないで何よりだつたわ……けれどおまへ、お祖母さんは死んでしまはれてな……」と梅子は昂奮して言つた、「純一に會ひたいと言ひ續けて、なくなられてしまうた……ほんとに死目に會はせてあげたかつたよ……それでわたしが純一に早よ呼び戻すやうに電報を打つてくれと言つたんだけれども、みんながそれには及ばんだらうと言ふし、お母さんもそれと同じ考へだつたので、あんな歸らんでもいいつていふ電報を打つて、ほんとにお祖母さんにも氣の毒なら、おまへにも可哀相だつた」と言つて、梅子はポロポロと涙をこぼした。

「すまないと思つたが、電報もあんなであつたし、僕もあの時分は隨分困つてゐたから、たうとうお葬式にもあはないで殘念だつた……」と言ひさして、姉の涙の眼を見た純一は、あまり心を女々しく動かされまいために、母親の方に眼を轉じた。

「純一を一番可愛がつとりなさつただけに、會ひたかつたのは無理もねが……まあ、みんな寄つてように面倒を見てあげただけに、何不足なくええ佛様にならさつた……お通夜も四十九日も一周忌も立派にいとなんであげただけに、別に不足を言はさることもねだ……」

から言つた母親の言葉は、理路の正しいものであつた。が、純一にはそれが物足りなかつた。そんなものではないと云ふ氣がしきりにするのだ。

「あア、泣いたりなんかしてゐるよりか、純一に溫かいものを食べさせてやらう、晩飯はまだだらう？……」から言つて、梅子があかくなつた眼を抑へながら、薄暗い裏口の方へ出て行つた後で、母のおしまは純一に話しかけた、

「わしも苦勞してナ、お梅も山岡もようはしてくれるだが、なかなか一通りや二通りの氣兼ぢやねだし……おまへからはさつぱりおくり金はねえだし……だんだん身體は無理がきかなくなつて、他家様の仕立物もそげに仰山には出來もせんに、諸式は高なるし…… ほんに、お父さんがなくならさつてから、わしもえらい苦勞ばつかりしたことだ……」

「ほんとにお母さんはいろいろお困りになつたでせう、僕もそれは十分知つてゐたんだけれど、どうも思ふやうに出來なかつたものだから、すまないとは思つてゐたんだけれど……」と言つて、純一はもうその上何も言ふのが嫌やになつた。

彼は母親の今言つた述懷が、單に自分一人の苦勞の訴へにとどまらないで、そこにもつと別樣の意味を含ませてゐることを感じた。

純一が默り込んで、卷煙草を出して、うつむいてふかし始めると、母親は辛抱が出來ないやうな樣子で、低い聲で、

「おまへ、何か東京からの土產を買つて來たかや……」と訊きただした。

「いや、別に……」と純一は言つて、思ひもかけない事を問はれたので、吸ひさしの煙草を火鉢の中へはふり込んで、母親の顏を見た。

「買つて來ようとは思つたんですが、東京からは荷物になるし、米子に着いてからは俥だつたもんだから、つい買ふ折りがなくつて……」

「伜屋に買はせらよかつたに……」と母親は不滿さを現して言つたが、暫く考へてから、
「おまへ、お金は持つとるだらう、五圓ほど出さんかや……」と言つた。
純一は默つて、紙入から五圓の紙幣を一枚拔き出して、疊の上に置いた。
「お梅にはええだが、山岡に對して義理といふことがあるでナ」と言ひながら、おしまは立上つて、壁のところの棚から半紙を持つて來て、かがんでその紙幣を包んだ。その包んでゐる手付を見ながら、純一はいらいらした氣持になつた。かうした母親の細心な注意を感謝しなければならない筈であつたが、感謝の氣持よりも、ずつと違つた感情が、彼の胸に起つて來るのを抑へ得なかつた。
「純一、こちらへお出でよ」と裏口の臺所の方から、梅子が聲をかけた。純一がそれを幸ひにして、母から免れて、土間を下りて姉の方へ出て行くと、裏口の廂の下の流しで葱の葉をしらべてゐる姉が、にこにこして此方を見てゐた。家の中についた電燈の光を障子越しに受けて、姉の顏は年增らしいなまめかしさで浮いてゐた。小さい時は、そんなに姉が父親似であるとは思はなかつたのに、今かうして歸つて來た自分を、心からいそいそと喜び迎へてゐるその笑顏を見ると、純一にはなくなつた父親が上機嫌であつた時の面影を髣髴させるのである。
「お母さんが何かグヅグヅ言つてたやうね、叔父さんの家へ寄らなかつたのを、苦情言つたんだらう? どうして寄らなかつたの……え?」と言つて、姉はやさしく訊いて見ようとする樣子だ。
「僕が今度歸つて來たのは、少し理由があつたもんだから……」とまで言つた純一は、それ以上姉にさへもまだ言ふ折りではないと、口を噤んだ。
「寄らんだつて、お母さんの言ふ程のものぢやないんだから、氣にせんでもいいわ、後でわたしがうまく言つといてあげるから……おまんまがすんだら、二階へ上つてゆつくり寢るがいいよ……隨分長い汽車ださうだから、背中が痛

くなつたらう……」

「姉さん、山岡さんはいつ頃歸つて來るんですか?」と純一は訊いた。彼は姉の良人がどんな人であるかと思ひながら、萬事姉の引き廻してくれるようにしようと思つた。

「山岡は遲くならんと歸つて來ないんだから、明日の朝でも會つてくれるといいだらう、いい人なんだから、心配しないだつていいよ」かう言つた後で、梅子は母親のゐるずつとむかうを注意しながら、小さい聲で、

「いい人なんだけれど、お母さんと顏を合はすのを面倒臭がつて、長い間物を言はんこともあるので、お母さんがその時々に愚痴を言ふので、少し困るのよ。わたしにはわるい顏一つしないで、お母さんをかうして同居させてゐてくれるんだから、ほんとにお母さんが愚痴を言はないでくれるといいんだけれど、昔ながらの苦勞性だから、ほんとに困るのよ。もつとも山岡がお酒を飲む時には、お母さんもお相伴するのだから、その時だけは大喜びなんだけれど……年寄は面倒だわ」と梅子は言つて、眉を顰めた。

焜爐の上では、炊いだ米がふきだして、白い湯氣が盛んに立ちはじめた。

「オオ、焦げたかしら、おまへが折角歸つて來たのに、歸つた匆々、焦げたおまんまなんか食べさせちや可哀相だ」と言つて、梅子は葱の入つた笊を持つてむかうへ行つた。

梅子の甲斐々々しい働きで、夕飯のチャブ臺は一杯になつた。煮肴もあるし、葱のおつゆもあるし、白烏賊もあるし、お酒の燗もついてゐた。

「こんな處では、東京のやうにうまい物は出來ないけれど、おまへはウンと東京でうまい物は食つて來てるんだもの……ま、久し振りに話しするのが御馳走ぢやないの、さア、わたしが一つ杯をあげよう」と梅子は杯を起して純一に渡した。その後で、おしまの杯にもついで、自分は箸も取らないで、しげしげと純一を見守るのであつた。

純一が一ぱい杯を乾す樣子をニコニコと見てゐた梅子は、突然氣が付いたと言つたやうに、
「まア、お母さん、御覽なさい、純一がお父さんによく似てるぢやないの、あの杯を口のところへ持つて行く癖なんかそつくりだわ。橫顏なんかと來たら、まるでお父さんが生き返つて來たやうな氣がするわ」
「そげに言へばそげだ」と一杯飮んだおしまも、先刻より少し柔かな眼で純一を見ながら言つた、
「年とると似てくるちうことだ、おまへなんぼほど飮むかや、五合も飮むかな……お父さんに似とるなら、どちみち大酒飮みに違ひねが……」
「いや、僕はそれ程酒は好きぢやない、が、飮めばいくらでも飮める方だ……此前なんかも、ウヰスキイやら麥酒やら日本酒やら、代る代る每晚バアで飮んだことがある……」
「まア、そんな亂暴なことをしたの？」と梅子が眉を動かしながら訊いた。
「アア、少し苦しい事があつたんでね……だが、僕は飮めば飮むほど、反つて頭が冴えて來て、感情がたかぶるばかりで、一層苦しいのだから、お父さんの大酒飮とは違つてゐるだらう」
「そげな事はねえ」とおしまが、良人の淸太郞の達者であつた時分のことを、ありありと思ひ出すやうな顏をして言ひ出した、「お父さんだつて、好きで飮まさつた酒だねえ。わしがこの龍田へ來た時分は、酒よりも唄ひなさる事が好きだつたで、自分だけで三味線を彈いたり、安來節を唄つたりして、酒よりも肴の方にやかましかつただけに、うまい肴をこしらへて上げるのに骨が折れたもんだつた……おまへ達が知り出した時分のお父さんは、仕事はうまく行かんし、損は重るし、目論見は外れるし……おまへを連れて大根島へ酒を造りに行きなさつた時分は、浴びるやうに酒を飮んではつかしござつた……酒を飮むより外に何の樂しみがあるかと、口癖のやうに言はさつて、しまひには泣いてござつた……ほんとに運の惡い人だつた……純一もあげな酒を飮んどるだねかともつて、えらい心配して來ただ…

…山岡さんのやうな酒飲は、ほんとに世話がやけんでええだが……」
「どんな苦しい事があつて、そんな無茶苦茶な酒の飲み方をしたの？　よく身體をこはさなかつたね」と梅子が心配さうに訊いた。
「その時分、大分頭が變だつたのだ……」と言つて、純一は苦笑にまぎらした。けれども、心の中では、またあたらしく東京での生活を――とりわけ「自死自葬論」に筆を着けた前夜、前河や隅田と痛飲談論したときの事がかへりみられて、今ここにかうして母や姉と話してゐる自分が、反つて不思議なやうな氣がした。
「それにしても、おまへは年中筆で何か書いてゐる人だのに、手紙と來たら、ほんとに書かない人だね。わたしの手紙の返事なんか、ほんのたまにしかくれなかつたから、わたし不平だつたのよ。お母さんと來たら、いつもそれをグヅグヅ言ひ暮したもんだよ、わたしは立派な伜がありながら、まるで死んだも同然で、何の足しにもならないと言つて、口癖に言ふんだもの……」と母親のこれ迄の仕打をそれとなく諷するやうに言つた。
「そげな事はどうでもええ、それよりも」とおしまは言ひ出した、「純一は淀江の浩藏さんの處へ寄らなかつたちう事だが……若し此方へ先き來た事が知れたら、浩藏さんがどげにおこらさるか知れんがナ、困つたもんだ、あのやかましやの事だけに……」
「お母さん、そんなに心配しなくつたつていいぢやありませんか」と梅子は言つて、母親の顔をチラと見てから、「いづれにしても、明日か明後日、行つて來たがいいだらうとわたしも思ふわ。叔父さんはおまへが小さい時知つてゐたやうな叔父さんとは違つてゐるし、店の樣子もびつくりする程變つてゐるから、それを見に行くだけでもいいよ……南の話なんかはそれから後の事だ、さうぢやありませんか、お母さん」
風呂に行つて寢るがいいと梅子は勸めたが、純一は裏口でザッと身體を拭いただけで、二階に上つて、姉がこしら

へてくれた寢床に横たはつた。姉が電燈を消して下りて行つてから、純一は無理にも眠らうと努めたが、ぢつとさうしてゐるのに堪へないやうな、名狀し難い一種の昂奮が、彼の故鄕での第一夜に、平靜な安眠を與へさうには見えなかつた。つひに彼は枕を立てて、それに手をかけたまま、深い物思ひに沈んだ。

母親の口から聞かされたいろんな苦情が、丁度、塵芥のやうに、彼の心を一杯にしてゐた。これまで遠く離れてゐたために、つひぞ考へて見た事もなかつた母親が、こんなにも自分の心を苦くする暗鬱さをもつてゐる人である事を思ひ、これからそれが何處までも自分についてまはるのだと考へると、彼は救はれ難い苦惱を感ずるのである。母親の言つた言葉や、表情の中からは、明らかに、山岡に對して、自分ばかりか、意氣地のない伜までもかうして舞ひ戻つて來て、世話になるのはすまないから、一日も早く、叔父の浩藏の方に行かせたいといふ氣色が露骨に出てゐるので、純一は母親のさうした顏色を見て取つた時から、

「僕は姉の家にころげ込むつもりは少しもない、叔父の世話にもならないつもりなのだ。みんなの御慈悲で生きる位なら、死んだ方がずつとましだ。僕には僕の生き方がある。僕は自分のしたい通りにするのだ！」と反抗的に考へずにはゐられないのである。

「だが、それにはどうする？」と純一は自分に問うた。けれど彼には、直ぐにはその答が出なかつた。彼はさうした具體的な方法について、まだちつとも考へてゐない自分をかへりみて、一瞬忸怩たるものがあつた。が、直ぐまた彼は斷乎として言つた、

「今は、まづ、なによりも、敏子に會はなければならない……すべては、それからだ……」

純一の頭には、淀江からの車中で、西尾惣兵衞の家の事を噂してゐた、あの二人の乘客の言葉が浮んで來た。敏子について何事か言はれた時には、自分はドキリとした、が、それも自分にとつては、さいさきのいい事だ……敏子に

逢はんがためには、それから細心の注意をもつて、自分は西尾家の事情を詳細に探知する必要がある……

彼はあの車中で西尾惣兵衛の名を耳にした時、既に自分が敵地に乘り込んだのだと感じたが、今や、その敵の陣營は咫尺の間にあるのだ！ この前の一區劃を隔てたむかうに西尾の大邸宅は横たはつてゐるのだ！……明日は朝早く起きて、町を歩いて見よう、そして、どうにかして、敏子に逢ふ機會をつかまなければならないと、彼は覺悟した。

三

さすがに旅の疲れが出たと見えて、ぐつすりと寢込んでゐた純一が、ハッと眼を覺ましたのは、格子の入つた窓の戸が、母親の手で荒々しく開けられて、すでに晝に近い白ッぽい光線が、彼の面上にザラザラと觸れたからであつた。彼は眼を開いて、母親の姿をみとめると、自分でどうすることも出來ない憎惡に近い氣持が、ムラムラと湧き上つて來たのである。

「こんな母親だ！」と彼は自分に言つた。彼は遲くまで寢てゐた自分がわるいのだとは思つたが、一言起してから雨戸をあけてくれてもいいものを、いきなりこんなに、カラカラと、明るく外光に自分の寢姿を晒し出した母親の仕打には、母子の情愛を絶した何か意地のわるいものが感ぜられるのだ。

「おッ母さん……」と彼は自然に尖つてゐる聲で、母親に呼びかけた。

「何だな？」と、今階下におりようとしてゐた母親は、振り返つて純一を見た。その無表情と云つてもいいやうな、よく整つた冷靜な母の顏には、瑣細な氣苦勞で陰鬱にされた年とつた女の、小心翼々な世間智がありありと示されてゐる。つまり、その顏の語つてゐるのは、山岡に對する「小さな遠慮」なのである。

「山岡さんは昨夜歸つて來た？」と、純一はつとめて聲を和らげて、母に訊いた。そして、急いで着物を着けにかか

つた。
「ああ、もう起きて、朝飯もすんで、今にも出掛けると言つてだ。早よ下りて、挨拶をせないけんだが……」
「ああ、すぐ下りて行く……」
母親が其時不圖何か思ひ付いたことでもあるやうに、
「おまへ……」と少し口籠るやうに、純一に呼びかけた、「もう五圓ほど出さんかや、廣田へは三圓、南へは二圓位の見當で、土産物を買つて來てやるだけに……まア、そげにさへしとけや義理はすむだ、叔父に會つたら、萬事その言はさる通りしたがええだ……」
「ああ、分つてゐる……」と純一は苦い顏をして、「金は後で渡す」といらいらして言つた。そして、急いで蒲團を隅に片寄せてから、下におりて行つた。
下の座敷では、山岡は梅子と對ひ合つて、煙草を吸つてゐた。その樣子では、明らかに二階にゐる純一が今にも下りて來るのを、さうして待つてゐて、一通りの挨拶をすましてから出かけようとしてゐるといふ風に見えた。純一は顏を洗つてからその前に行つて、一應の挨拶をした。
「昨夜はどうも痛み入りました、あんな心づかひは要らなかつたですのに、他人の家ぢやありませんからね」と山岡は言つた。
「いや、どうも母がいろいろと……」と純一は押し出されるやうな調子で禮を言つた。
「なに、大したお世話も出來てはゐません……何分長い道中で、さぞお疲れでしたでせう、どうぞ氣兼などなさらないで、ゆつくり遊んで下さい」と山岡は親切に言つた。小柄な、丸顏の、几帳面さうな男で、色の小白い、何處と云つて特色のない顏付の中に、苦勞人らしい物分りのよさが見えた。かういふ風の男なら、姉も心から滿足してゐるだ

らう、と、純一は思つた。

彼が食事をしてゐる中に、山岡はもう時間が來たから、今晩にも詳しい話はする事にしてと言つて、支度をして出かけて行つた。

「今日は、遲いかな?」と、母のおしまが山岡を送り出しに行つて、いかにも媚びるやうにかけた言葉が、純一の頭に異樣な感銘を殘した。

「何もかも生活のためだ! 母に取つては、何の役にも立たない、仕送り一つしなかつた自分などよりも、山岡の方が大切なことは云ふまでもない。またあアして勉めなければならぬところに、云ふに云はれぬ苦しみのある事は、おれにも分る事は分るが、しかし、どうも面白くない事だ……」

純一が食事をすまして、煙草に火をつけた時、母親が食膳を片付けに來て、ガチヤガチヤと茶碗を重ねながら、モヂモヂした樣子で、

「今朝言つといた金を出さんかや……買物に出る序に買つて來てやるだけに……」と催促した。

こんな風な言ひ方をする母親の底意が何であるかは、純一にはよく分つてゐた。けれども彼は、今は一種の絶望的な諦めをつけた樣子で、默つて五圓札をそこに出して、立上つた。

その時、二階から掃除をすまして下りて來た姉の梅子が、めざとく、五圓の紙幣をその帶の間に入れてゐる母の樣子をヂロリと見た。

「お母さん、お土産買つたの、純一から……」

「そげだねえ、廣田と南へ純一が今日行くだから、その土産を買つて來てやるだ」と母親は苦り切つて、急いで事實を釋明した。

「相變らず、お母さんは律儀ですね、昨夜の五圓もお母さんが徵發したんでせう？　そんなに後へ後へと徵發してゐると、純一がいくらお金持だつて、財布が空になつてしまふぢやありませんか」と梅子は母親に輕くひやかすやうな調子で言つてから、純一の方に向いて、
「おまへ、今日叔父さんの家へ行くつもり？」と訊いた。
「今日は……行くまいと思つてゐる」と純一は帽子を取つて言つた。
「今日行かん？　どげしてな？」と母親は屹とした調子で言つた、「昨日淀江へ寄つて來たなら、此方に泊つとつてもええだが、先き此方に來ただけん、早よ行つて來んと、淀江を粗末にするる事になるだで、後で叔父からわしがどげに慍られるか知れんだに……」
純一はもうそれには答へないで、プイと家を出た。
彼は家の前に立つて、左右を見廻した。彼の目の前には、一列の高塀が連つてゐて、それが小一町もある兩端の曲り角で絕えてゐる。彼は昨日俥で來たのと反對の方向へ、その高塀について步いて行くと、四五間行つたところに、その高塀の中に、通用門が出來てゐる。純一はふとその門を眺めた。その門は嚴めしく閉ざされて、「西尾家裏門」の文字が、古びた標札の上に微かに讀まれた。それを見ると、純一は、ブルッと身のふるふやうな氣がした。彼の憶えてゐた西尾家の位置は、この裏通りとは、一列の屋敷を間に挾んでゐた筈なので、こんなについ姉の家の前まで延びて來てゐようとは、彼の豫期してゐなかつたところである。それで彼は今更に、その高い嚴めしい塀を見上げ見廻した。それは白ッぽい練塀で、その上に隙間なしに硝子の破片が植ゑ付けられてゐて、そのキラキラした光が、何だか頭を突き刺すやうで、フィジカルな痛みを覺えさせる。彼はその塀について、表通りの方へ步いて行きながら、宛かも大きな監獄のまはりを步きめぐつてゐるやうな氣がした。

「この中に、この中に、敏子がゐるのだ！　この高い嚴めしい塀に束縛されて、逃れるに道なく、彼女はとらはれの身となつてゐる……」と純一は考へた。

姉の家の前から曲り角までよりも、曲り角から大通りまでは、ずつと長かつた。この大きな一區劃を占めて、西尾の邸宅は、一大城廓の如く、巍然として聳えてゐる！

「これが自分のこれからぶッ突かつて行くべき敵陣の城壁なのだ！」から心の中で呟いて、彼はその練塀を掌で押して見た。

純一は表通りに出ると、その曲り角に再び佇んで、左の方を見遣つた。そこには、西尾本邸の表門があり、それに並んで、西尾惣兵衛の營業所の一連りがあつた。

梅雨期の雨の降り續いたあとの道路は、まだすつかり乾き切らないで、人通りとてもあまり見えなかつた。その僅かな通行人の中に、近在の百姓らしいのが、蓑笠に草鞋ばきといふいでたちで、むかうからやつて來るのに、純一は思はずしみじみと眼を注いでゐると、その百姓は今しも西尾の營業所の中へ入つてしまつた。あれも可哀相な小作人の一人なのだらうと思ひながら、純一は表門の前まで歩いて行つた。そして、鋭くその中を見込んだ。一杯に開かれてゐる凡そ一間半ばかりの間口をもつたその門は、丁度東京などの屋敷門のやうな工合になつてゐて、その奥に大きな邸宅がその正面の下部を見せてゐる、そのやや左寄りのところに玄關があつて、その前には、一臺の俥が置かれてゐて、その蹴込には、年の若い車夫が悠々と卷煙草を燻らしてゐた。玄關の左右は一帶の植込で、蘇鐵の青い飾りをつけた大きな坊主頭や、扇のやうな八ッ手の葉などが、青々と茂つてゐて、その奥はただひつそりとしてゐる。

不幸な敏子によつて知る事を得たこの大邸宅の中のいろんな事件が、今や新しく純一の意識の中に甦つて來た。彼女はいかに多くの暗い出來事を、かの都の美しい初夏の夜の邂逅の折り、自分に語り聞かせてくれたであらう。彼女

はこの大邸宅に住んでゐる暴富の一老人の卑しい愛慾と、貪婪な貨殖慾と、惡辣な理財の才能と、一種の剛膽とについて話をした。その正妻の暗愚な、しかも烈しい無智な嫉妬についても話をした。その若主人の――彼女の良人の淫蕩と狡智と淺慮とについては、一層詳しく話し聞かせたではないか。そして、さうした息苦しい、不合理な環境の中に、今なほ、彼女は介在してゐるのだ、この門の中に、この植込の奥に……東京を發つ前に出した自分の決意の手紙は、もう屆いてゐる筈である。若し無事に彼女の手に入つたものとすれば、彼女は今非常な喜びと期待とに包まれてゐる筈である。然し、かよわい女性の心をもつてしては、自分が今まさにかくばかりの間近にゐるとは、どうして想像し得ようか。今若し彼女が、咫尺の間に自分の姿と面接したならば、彼女は息も絶えんばかりの驚愕と歡喜とに色を失ふであらう。さう思つて、純一は莞爾とした。

「……これから、相良元雄を訪ねよう」

純一は相良元雄を――かの東京の生活に敗れて、空しくこの故郷に歸つて來て、今病軀を抱いて、佗しい日を送つてゐる舊友の溫顏と、その物靜かな聲音とを、この瞬間、實にはつきりと思ひ出した。抑も、敏子と自分とが、あの最初の美しい夢のやうな歡會を得たのは、あの河邊の神社の横屋ではなかつたか、何といふなつかしさであらう!

彼は次ぎへ次ぎへと、かうした事を考へながら、古風に障子張りの格子戸のしまつてゐる西尾の營業所の前をもいつか行過ぎて、加茂川が左手の町裏から通りを横ぎつて、右手の町裏へ轉じてゐる上に架つた橋際まで來ると、ピタッと立止まつた。

「今行つてもいいんだが……行くならあの東京から持つて歸つたセガンティニの畫集を持つて行つてやりたい……」

彼は元來た方へ引返して、再び西尾家の前を通つて下の方へと歩いて行つた。左右の町並を物珍らしく眺めて行くうちにも、彼はこれが自分の生れた町かと思はずにはゐられなかつた。まるで何處か遠い旅の上で、ふと一夜を泊つ

た見知らぬ町のやうな感じがするのだ。行き會ふ人々も、一人として見覺えのある人はなく、心なしか、皆何だか怪訝な眼で見て行くやうな氣がする。

岩倉町といふ町の名が、商賈の看板で眼に付いた時、純一は、その町の中程に、敏子の實家がある事を意識した。彼は眼でその家を探しながら進んで行くと、そのあたりの町の樣子は、祖母の家への往き復りに、彼が通つてゐた少年時代の面影を偲ばしめるものがあつた。少しはにかみながら、その古風な海産物問屋の前を通る毎に、敏子の祖母が――あの淸水詣での時、自分の祖母と睦まじく酒をくみかはした事のある――にこやかに自分の方を見てくれた事、とりわけ一度、敏子の美しい母親が、買物に來た子供に海苔を包んで渡してゐた靑白い病身な姿を、ありありと思ひ出した。

「今もやはりあの時のままであらうか？」と思ひながら探す眼に、直ぐ傍らに、近年改築して、その店の模樣替をしたために、特に附近に際立つてゐるかなり大きい店が、パッと入つた。

「この店は？……」と純一は、さう考へた。

店はこの町のどの店よりも、景氣付けしてゐるやうに見えた。客の影はなかつたが、小僧が二人並んですわつて、客を待つてゐる。模樣替をして、店の樣子が昔とは違ふので、純一ははぐらかされたやうな氣持がして、行き過ぎようとすると、その時、店の奥から主人らしい若い男が出て來た。眉の濃い眼付の冴えた顏である。

「あれが弟なんだナ……」

純一は敏子の打明けたこの家の內情を想起し、さうした實家の挽回が、一に彼女の結婚――富豪西尾の姻戚となつた事――によつてであるといふ事を、こんなにも鮮かに印刻せられて、今更に彼女の境涯が、いかに拔きさしならぬものであるかを、痛切に感じた。

「結婚といふものは、こんなものであつてはならない。こんな方便的なものでは……これでは、人間一人の靈魂を、物質の下に隷屬させてゐるのだ」

純一はかの夜、敏子が言つた言葉――自分の結婚は間違つてゐた、これ迄弟のためにと自分が犧牲になつて來た事も、根本的に考へ直して見れば、反つて無意味な事で、小は小なりに苦しくとも獨立してやつて行つた方がいいと言つた言葉を考へて、それはさうなければならぬとは思ひながら、自分と敏子との關聯から起る今後の事件を豫想すると、それから一番深い影響を蒙るであらうこのあはれな家を見る事が苦しかつた。

やや陰鬱な翳のさした氣持になつて、灘町の四つ角まで來た時、彼はここに、自分の祖母と住んだなつかしい家があるのだと思つて、そこを右へ折れて、その前に行つて見た。

それは四つ角から北へ四五軒目の筈であつた。けれども、純一はどうしてもそれらしい家を見出す事が出來なかつた。そのあたりはすつかり家並が變つてしまつて、立派な二階家が建ち並んで、見覺えのあるものとては、その向ひ側の低い板塀だけにすぎなかつた。

彼はそのまま元の通りを眞直に、中海ぞひの突端まで行つた。ああ、それは何といふ荒凉たる光景だらう！　むかし、彼が少年の時には、そこには長い棧橋があつて、それに松江通ひの可愛らしい小蒸汽船が横付けにされてゐるし、沖の方には、大阪商船會社の汽船も投錨してゐて、棧橋間際には、澤山の休憩所なぞもあつて、そのあたり一帶に活氣立つてゐたものだのに、それらしいものは今や跡方もない。海岸は一帶に石垣に疊まれて、そこには二三隻の和船が不景氣さうな樣子をして繫がれて、石垣の上には、炭俵や石材などが二つ三つの小さな山をなしてゐて、その傍らに、二三人の仲仕がやすんで何か話してゐるばかりで、外には人影一つない。大社行の鐵道が通じてから、この港は、殆んど全くその要を失した事が、一目で理解せられた。梅雨あけの中海は暑さうな曇つた色をして、眠つたやうに横

はつてゐる。小刻みの波がゆれゆれて來ては、微かに石垣にざぶりとかかる。一葦帶水の左手に突き出してゐる出雲の山々の上には、今しも晝すぎの日影が、灰色の雲間を洩れて、波の上に長い金の一線を落して搖曳してゐる。その山影と、右手の夜見ヶ濱の端しに高まつてゐる粟島神社の山との間には、わざわざ持つて來てうかべたやうに、萱島といふ小さな半月形の島影が、黒くはつきりとうかんで、靜かな錦が浦の口を扼してゐる。萱島の彼方に島根半島の山脈のつらなりが、漠々なる雲の重なりに沒するあたりには、純一がむかし父と不幸な日を送つたあの大根島も隱れてゐるのである。彼はその海の眺めをぢつと見入りながら、暫くの間そこに佇んでゐた。

　やがて、海岸にそうて、純一は公園の方へ歩いて行つた。梅雨の水嵩に濁つた加茂川口に架した、道より高くなつてゐる橋を渡ると、間もなく公園の入口に來た。それは公園といふより、何だか荒れた大きな屋敷跡のやうに見える。松の樹の立並んだ中央には、この公園地の大部分を占めて建てられてゐる記念館の大きい建物が、かたく四周の戸を鎖して、ひつそりと靜まつてゐる。純一はその廣い建物を一周りして、海岸に出て、セメントでかためた垣に手を置いて、左の方を眺めやつた。そこには水が入江をなして漫々として、その彼岸には、樹木鬱蒼たる城山が聳えてゐる。それは昔ながらの他奇のない姿ではあるが、純一はこの平凡な山の姿を、かの黄塵の巷に於いて、いかに深く思ひ偲んだ事であらう。その頃の若く美しかつた敏子の事を考へながら、彼は右端にある淸洞寺跡に行つて見ると、波の間に大きな巖が橫はつて、その巖の裂目から一本の松が、長く細い腕のやうに、海上に垂れ下つて、その突端に一かたまりの松葉をつるしてゐる。その巖蔭を、小さな岩を踏み越えて、波打際まで下りて行くと、そこら一面に積み重ねられた海藻が、潮くさい匂ひをプンとはなつてゐる。藻の山は、靑々とした蘆の茂みに續き、その蘆の葉は、石垣の上の靑草と亂れ合うて、風に微かに戰いでゐる。

　純一は公園を出て、停車場へ導いてゐる記念道路を、眞直に宮ノ町の方へ歩いて行つた。靜かな屋敷町の盡きたと

ころで、ふと目を擧げると、道傍に大きな鳥居があつた。彼はそれが自分達の小學生であつた頃、つい近くの學校から、放課時間に遊びに來た加茂神社だといふことを思ひ出した。彼はつかつかとその鳥居をくぐつて、古びた社の裏手に廻つて見た。あの時分、この裏手の崖一杯に生ひ茂つてゐる熊笹の幹を切つて、吹矢といふものをこしらへた事などが、なつかしく思ひ出されるのに、今來て見ると、笹の茂みなどは殆んど見えなかつた。田圃に續くその傾斜は、一帶に地均しされて、その上には夏草がひよろ長く生え出してゐるのみだ。そこを出て、小學校の前に行つて見ると、そこの校舍も新しくなつてゐた。學校をぐるりと廻つて行くと、そこの地續きの田圃の、道から道へと限られた廣大な一劃に、ずつと繩張りがされてゐて、その隅に墨痕鮮かに記された「共愛病院建築敷地」の大文字が、ハツと純一の眼を射た。言ふ迄もなく、これは西尾惣兵衞が、自ら大株主になつて計劃しつつある病院なのであつた。その繩張りについて曲らうとすると、そのむかうの角には鐵工所があるし、町の大通りへ出ようとする角には、昨日車上で見たかの石造の銀行があつた。そして、そのいづれもが、西尾の名を冠してゐる事を、純一は認めた。彼はやや疲れた苦々しい氣持になつて、姉の家の前まで歸つて來ると、今更ながら姉の住んでゐる家のみじめな事を思はずにはゐられなかつた。

「これでは、まるで西尾の家の物置小屋と言つてもいい位だ!」と、彼はかの硝子の破片を植ゑた高塀をかへりみて、苦笑をうかべた。

暗い家の中に入ると、母のおしまはゐないで、姉がひとり裁板の前にすわつて、縫物をしてゐた。彼女は、陰氣な顏をして歸つて來た純一を見ると、心配さうに聲をかけた、

「おまへ、何處へ行つて來たの? 旅の疲れがまだ殘つてゐるやうだから、少しやすんだらどう?」

「あア、少し頭が痛いが、なに、大した事はない……お母さんは?」と、純一はまづ母について訊いて見た。

「お母さんは、先刻例の淀江へ持つて行く土産物を買つて歸つてね、また何處かへ出て行つた……そら、あれをお見」と梅子は部屋の偶を指さした。

そこには熨斗のついた反物の包みが二つ、キチンと重ねてあつた。氣のない眼付で純一はそれを見たが、別に何にも言はなかつた。

「本當に困つたお母さんだ……」と梅子は純一の顏を見て呟いた、「今出て行く時も、わたしを呼んで、純一に是非今日は叔父さんの家へ行くやうに、おまへから言つてくれと、七くどく言つてゐたからね……わたし自身のお母さんを、そんなに言つてはすまんけれど、あんまりお母さんが氣が小さいので、本當に困る……もつとさつぱりしてくれるといいのだけれど……」

「いや……お母さんはあれでいいのだ、考へて見ると、昔からあんな性分の人だつた」と純一は諦めたやうに言つた。が、心の中では、あのなくなつた祖母の、あの溫かい、物にこだはらない、面白い性格が、なつかしく思ひ出でられた。彼が父を失つた後で叔父の浩藏の家に一時引取られて、農業補修科に通はせられたり、華客廻りをさせられたりした時分、一圖に上京しようと思ひ込んで、祖母に迎へに來て貰つた時の、祖母と叔父との對談を、彼は今に忘れないのである。

「これが祖母さんであつたらばなア！」と梅子がまるで彼の心持を見拔きでもしたやうに言つた。

「祖母さんの墓は何處にある？」と純一はなつかしさうに訊いた。

「あア、祖母さんの墓か、祖母さんの墓は、淀江の方に埋めてくれといふ遺言だつたので、淀江の方に立つてゐる……少し遠いので、再々詣られないで、祖母さんも寂しいだらう、おまへこそ直ぐ墓詣りをしておあげ、あの祖母さんにはおまへが一番可愛がられたんだから……」と梅子はしんみりと言つた。

「ああ、僕もさう思つてゐる」

「祖母さんの墓詣りの序に、兎に角、叔父さんの家へ一度行つて來たらどう？　南の家の話だつて、今が今きめるにも及ばないのだから、何の事なしに、叔父さんに逢つて、樣子を見て來たらいいだらう」

「ああ」と純一は氣乘りのしない返事をしたが、養子問題の事を考へると、煩はしい氣がして、壓し付けられるやうな調子で呟いた、「僕が南の家に行けば、叔父とお母さんとは喜ぶだらう……」

「おまへが南の家へ行つてくれさへすれば」と梅子は重々しい調子で、少し聲を低くして話し出した、「そりや叔父さんだつてお母さんだつて喜ぶよ。とりわけお母さんは、おまへが南の家の主人になれば、世間に對して肩身が廣くはなるし、叔父さんには大切にされるだらうし、何かにつけて都合がよくなるんだからね。そりやお母さんだつて、おまへにさうして貰ひたいと思ふのは無理はないよ。それに、おまへにしたところで、どういふ量見で歸つて來たのか知らないけれど、一寸歸つて來たのなら格別、これからずつと此方にゐるのだとすれば、先々何かはしなくちやならないんだから、今兎に角、南の家へ行つて見た方がよくはないかしらと、わたしも思ふのよ」

「その事はも少し考へさせて下さい、僕はまだその事は定めたくないのだから……」と純一は言つた。そしてこの重苦しい問題を避けるために、話題を變へた。

「僕は今、町を一まはりして歸つて來たが、今更に西尾の家の大きいのには驚いた。また、銀行を見ても、鐵工所を見ても、みな西尾の名がかぶさつてゐるのに驚いた。まるでこの町全體が、西尾の邸の延長のやうな氣がする……」

「西尾の家の事なら、誰だつて驚くよ。この近年の西尾の威勢と言つたら、それはもう大變なのよ。四五年前、わたし達がここへ引越して來た頃、大普請があつて、ついこの前通りの邸一帶をすつかり買ひ潰して、あんなに邸をひろげたんだよ。銀行や鐵工場ばかりか、魚市場だつて、製糸場だつて、電氣會社だつて、みんな西尾の持物になつてゐ

る。何しろどれだけ財産があるのだか底が知れないといふ評判だから……その癖、税金はうまい事逃げてゐるといふ話だ！」

かう言つて、梅子は眉をしかめた。

「東京なんかにも、そんな事はザラにあるが、ここは市が小さいだけに、一層その横暴が目に付くわけだ。だが、金持がどんなに專横だと言つたところで、人間の魂はどうする事も出來ないのだ、この人生には、金力をもつても左右する事の出來ないものがある……」

「そんな事は言へないよ」と梅子が反對をした、「金の力は大したものだとわたしは思ふわ。現に、あの西尾の若奧様だつて、あそこの金で無理に貰はれて來たのだもの、立派に女一人左右してゐるではないの。あのおまへも知つてるだらう、あの河野の敏子さんを。あの敏子さんが、西尾の若奧様なのよ。……知つてゐるどころぢやない、おまへが東京へ行く以前、隨分仲よく手紙のとりやりをしたあの敏子さんが、西尾の若奧様なのよ。敏子さんはあんな美人であつたから、是非にと懇望されてね、河野の家で借りてた借金を棒引にして、その上一萬圓とかの支度金附きで、それはそれは派手な御婚禮で、あそこの總領の友一郎と一緒になつた、その晩はこの市の祭のやうな騷ぎだつたのよ。市の娘達は、一人殘らず果報な敏子さんを羨んだり嫉んだりして、寄るとさはると、その噂で持ち切つてゐたが……何しろ美人に生れるといふ事がその人の德だもの、美人でないものがいくら羨んだつて何になるものか。わたしももつと美人に生れてゐたらどんなによかつたらう、そしたらあそこの息子に見染めさせて、立派にお父さんの借金を棒引させてやれたものを、さうすればお父さんもあんなに自暴酒を飲んだり、無理な仕事をして、壽命を縮めはしなかつたらうに、さう思ふとわたしや口惜しいよ、何しろ美人に生れる事だわ」と梅子は、むかし祖母がよく口にしたやうな洒落な調子で結んだ。

純一はこの姉の述懷の中から、まづ、鋭い刺のやうに、敏子の金婚に對する市の人の非難の心持を感じたので、

「けれど、當人の心になつて見れば、市の人がそんなに羨んだり、嫉んだりするやうなものぢやない……」と思はず言つた。

「當人の身になつて見れば、まだ何にも分らない娘の時分に、まはりの義理やら何やらに强ひられて、よんどころなく嫁いで行つたであらうし、氣が付いて、これは間違つてゐたと思つても、もう今は虜になつたやうなもので、何一つ自由にならない身の苦痛な境遇に泣いてゐないとは言へない……」

純一は愛するものの苦衷のために、もつともつともつと、辯解したかつた。けれども、かういふ場合、それ以上もう言へなかつた。

「まあ純一は……」と梅子は丸い眼をして弟を眺めた、「おまへはまだやつぱり敏子さんの事と言へばムキになるのね。だが、それはおまへの言ふ通りだよ、今の敏子さんの身の上は、おまへの推量通り、それは……」と言ひさして、梅子は言葉を低くした。純一は、今、少しでも多く、少しでも細く、西尾の家の事――つまり敏子の現狀を聞き知りたいとひたすらに渴望してゐる彼は、姉の口をとほして、何が聞かれるだらうかと、待つた。

「おまへは知らんだらうけれど、去年あたりから、敏子さんが家出をしたり、離婚しようとしてごたごたしてゐるのよ。新聞なんか西尾でチヤンと買收してゐるんだから、そんな事書くわけはないけれど、市中ではもう誰知らんものもないのよ。この春なんかも、敏子さんが井戶に飛び込まうとしてゐたのを、危いところで抱きとめたといふ話もあるのよ。一體が、敏子さんが友一郞と婚禮する以前から、友一郞には兒までなした女があつたんだもの、始めのうちこそ花嫁が可愛くつて、家にばかりゐたつて、長い年月になつて見れば、病身で子供一人生れぬ敏子さんよりも、子供のある女の方に惹かれもしよし、何しろ玄人上りの女のことだから……その上、友一郞は評判の放蕩者で、この米

子の市中の藝者で、その世話にあづからぬものは一人もないッていふ事だもの。だから敏子さんが、默つて目をつむつてゐるにしても、普通の夫婦の情愛から言つて、そりやどんなに苦しいやら寂しいやら賴りないだらう……西尾の家の仕立物をしてゐる近所の小母さんなんか、非常に若奥樣贔負で、いつもお氣の毒だお氣の毒だと言つてゐる、まあこんな事を考へると、あの人の病氣もそんなところから出たんぢやないかと思ふ……」

「僕もさうだらうと思ふ……」と純一は言つて、敏子の話によつて痛んで來た心持を、ぢつと手をもつて痛み所を壓し付けるやうに、支へた。

「この間も東京へ友一郎と一緖に行つて、大學のいゝお醫者さんに診て貰つて來たとかいふが、病氣は何しろ肺だといふから、なかなか癒りにくいだらう、そんなに西尾では、此頃ぢや惣兵衞さんも少し身體の加減が惡いさうで、始終醫者が要るといふから、今度病院が建つのも、自分の家の爲めだらうツて評判だ」

「ぢや、今はこちらで寢てでもゐるのか？」と純一は訊いた。

「いいや、何でも東京から歸ると間もなく、海岸の方が身體にいいとか言つて、小波村の親戚の方に養生に行つてゐるとかで、本邸にはゐないとの事よ」

「小波村へ行つてゐる！　ぢやもうこの本邸にはゐないのか！」と純一は自分の感情をそのまま露はにするやうな聲を出した。彼の待つてゐたのはただこの一言だつたのだ。この一言がパッと一條の光を彼の前路に投げた。と同時に、彼女は自分の手紙を見て行つたのだらうかどうかといふ疑念が、彼の心に閃いた。

「本當に小波村へ行つてゐるのかしら？」と純一は努めて心を抑へながら姉に訊いた。

「それは確かに行つてゐるといふ事だわ……おまへどうしてそんな事を熱心に訊くの？　敏子さんを訪ねて見たいのかも知れぬけれど、何しろあんなになつてゐる人は訪ねない方がいいだらう」と姉は分別らしく言つた、

「小波村と言へば、南の家の華客先がかなりあるだらうナ、近くだから……」と純一は自ら商量するやうに言つた。
「僕はね、姉さん、今度の歸國は、東京には斷然見切をつけて歸つて來たのだ」
「フン……なぜ？」と梅子が靜かに訊いた。
「なぜつて問はれると困るけれど……僕はここでこれ迄とはまるで違つた遣り方で遣つて行かうと思ふ、何もかも新しく遣り直さうと思ふ」
「それはいい考へだとわたしも思ふ、何しろおまへがその考へなら、先刻も言つたやうに、淀江へ行つて、一先づ叔父さんに逢つた方がいい、叔父さんも頑固ではあるが、おまへの事と言へば、あれでいつも身を入れてゐる人だし、龍田の家の事を始終心配してくれてゐる、それこそ眞身のたつた一人の叔父なんだから、何をするにつけても、一應はその意見を訊くのは順當だらうと思ふ。兎に角、明日あたり行つたらどう？」と姉は少し膝をすすめるやうにして言つた。
「ああ、明日は行かう」と純一ははつきり言つた。彼の心の中には、旣にその方向が歷然として見出されたのである。
「兎に角、お母さんの土産物を持つて行つて上げよう」
「それがいいわ」と言つて梅子が笑つた。

四

母のおしまが買ひととのへた土産物をもつて、純一が淀江の驛に下りたのは、その翌日の晝前であつた。一昨日、汽車の窓から眺めた時には、降りしきる雨の中に、俥一臺見えず、驛前のたつた一軒の茶屋の灯影さへも、いかにも邊鄙な村驛のやうな感じのした驛も、今日はカラッと晴れた外光の中に、忙しさうに驛に向つてくる二三人の人影に

も、重さうに傾斜を喘ぎのぼる荷車の堆い菰包みにも、町らしい動きが見られた。

純一は昔時々通つた事のある、驛から叔父の家に行く近道になつてゐる裏通りを歩いて行つた。兩側には平つたい農家が、時々菜園などを挾んで、ゆつくり並んでゐて、通りに面したとある家の小庭には、葵の紅い大輪の花が高く立つてゐた。彼の眼は思はずそれに惹き付けられた。こんな家に敏子がその病身を養つてゐるのではあるまいか、こんな風に考へて、彼はその家の庭に面した客間の新しい障子に目を惹き付けられた。外の家はみな障子を開け放してゐるのに、その家だけはぴつしやりしまつてゐて、しいんとしてゐるのだ。が、今にもその障子をあけて、中から彼女のほつそりした背の高い姿が現れ出て來るやうな氣がして、純一は幾度も幾度も振返つて見ずにはゐられないのである。けれども、ここは小波村ではなかつた。

かうした閑散な裏通りを、だんだん叔父の家の方に近づくとともに、純一は殆んど十年振りに見る叔父の家の變遷といふやうな事を考へてゐた。姉の梅子が、

「叔父さんもすつかり變つてゐるし、店の樣子もびつくりする程變つてゐるから、それを見に行くだけでもいいよ……」と笑ひながら言つた言葉を思ひ出した。

「多分さうもあらう……東京から歸つて、あの市郎がどんな困つた遣り方をしたか想像が出來る、釀造はどれ位の失敗だつたのだらう？」

市郎の事を考へると、彼は何がなしに微笑せずにはゐられない。あの瀧の川で彼と一緒に暮した時分の事が思ひ出されるからである。あの叔父にどうしてあんな息子が出來たのだらうと思ふほど、市郎とその父の浩藏とは、その性格が相違してゐる。しかもその二人が、一つ家で、互ひに采配を取り合つてゐるとすれば、なかなか面白い事でなければならない。

本通りに出ると、さすがに町らしく店家がずつと連つてゐるが、そのいかにも廢驛のやうな無氣力な、沈滯した町の空氣は、十年前と少しも、變つてはゐなかつた。そして人通りのあまりない事も、今迄通つて來た裏通りとさして變りはなかつた。純一が生れた歳に大火に遭つて、一町が全燒してしまつたので、その時新たに出來た町並であるから、比較的家並は老廢の觀を呈してはゐないけれど、その家の中に、店の錢箱や帳場の傍から、ぼんやり人の通らない通りを眺めてゐる人々の顏付には、家の見付よりも古びた因循の氣色がうかがはれた。純一にはさうした無事に苦しんでゐる町の人の、好奇な眼付がうるさかつた。

本通りへ出て小半丁も行くと、見覺えのある町家が目に付き出した。右側の硝子屋、蒲鉾屋、穀物屋――その向側が叔父の家である。一帶の家並より飛び拔けて背の高い、そして廂の出張つた家の昔ながらの横顏には、旺んな叔父の俤が偲ばれる。今しも家の前には、一頭の腹のへこんだ駄馬が軒柱に繫がれてゐて、その貧弱な尻尾を振つて、頻りにたかつてくる蠅を追つてゐた。

純一はその前に行つて、立止つて店の樣子を一目見ると、尠からず驚かされた。これがあの萬事手堅く引緊めて行つてゐた叔父の店であらうかと疑つた。廂の上に横はつてゐる大きな繪看板――「朝日櫻」といふ叔父の自慢の銘酒の名を大文字で現した菰包みの酒樽の左右から、爛漫たる櫻花一枝を差し交した後に、旭日を圓光のやうにあしらつたケバケバしい繪看板も、純一の記憶にないものであつたが、更にその軒先には、赤や靑の色彩の中に、會社の名を白く拔いた四角いビラが、小旗のやうにピラピラと垂れてゐるのだ。駄馬を繫いである柱には、「大阪××麥酒會社山陰代理店」と筆太に記した長い看板がかかつてゐるし、軒廂の奥の柱にも、まだいろいろな札がかかつてゐる。店の右側の土間には、酒樽の山の傍らに大きな麥酒箱が凡そ十幾つも、疊々と積上げられてゐる。その仰々しい商店振りが、まるで睡つたやうな沈滯した附近の氣配と、奇異なるコントラストをなしてゐる。

帳場は昔のところにあつたけれど、その帳場格子は新しくこしらへたもので、その上からは、眞黒な手提金庫の金具がピカピカとしてゐた。格子の中で、うつむいて頻りに帳簿を繰りながら、土間で酒を立飲みしてゐる馬子と何か話してゐる中老の人物は、正しく叔父の浩藏であつた。髯の蓬蓬と生えたその横顔の衰へと窶れとに、純一は驚いた。それは浩藏ではなくて、浩藏の父の甚兵衞ではないかとさへ思はれる程だ。彼が家の敷居を跨いだ時、叔父はふッと顔を上げて、彼の方を見た。眼を定めるやうにぢつと見てゐるうちに、その不審さうな凝視の中から、突發的な喜びの表情が見え出した。

「おお、誰かと思つたら純一だねか！　おお、よう戻つて來た！」と浩藏は言つて、直ぐ立上つて帳場から出て來た。その聲はまるで長い間居所の知れなかつた息子が突然歸つて來たのを迎へる聲のやうであつた、「よう戻つて來た……何しろ遠方なところから戻つて來てくれた……旅費もよう出來たナ……手紙にも書いといた筈だが、戻ると返事くれたら、電報爲替で送つてやる筈だつたにナ……兎に角、よく戻つてくれた、まア上れ」

「急に歸つて來ました……」と言つて純一は、次ぎの言葉を抑へた。

「叔父さんはお變りがなくつて結構でした」

「いや、わしはお蔭さまで達者だつたが、いやもう、次郎のことで……」と浩藏はまじまじと、悲しみを含んだ眼で純一を見て、

「次郎も可哀相なことをした……次郎が死んだため、わしもがつかりしとる……まア、話は後として、荷物は？」

「荷物は米子に置いて來ました」

「もう米子へ先き行つとつたのか」と浩藏は意外な顔をして、後の柱時計を見上げて、

「成程、今の汽車は上りだからナ、まア、それはそれでええ」と、浩藏は變な氣持になりかけた自分を撓め返すやう

に奥の方に向つて

「おい、おきよ、純一だぞ、純一が戻つて來たぞ」と大きな聲で呼んだ。

奥の間からは、叔母の代りに、それ迄頻りに騒いでゐた子供達が三四人、ぞろぞろと出て來た。一番上は十二三の女の兒で、その下が十位の女の兒、上の女の兒の横からは、五つ位の男の兒が、顔をチョッピリ出して、額でこちらを見てゐる、その白眼をむいたやうな眼付や、丸つこい鼻やが、市郎によく似てゐる。

「まさ子、お母さんはどげした、東京から純一が戻つて來たから、早よ來るように呼んで來い」と浩藏がその上の女の兒に言ひ付けると、純一を見て、にこツとして、女の兒は土間へ下りて、裏口の方へ駈け出した。すると外の子供も純一を見ながら、土間へ下りて行くと、五つ位の男の兒も、自分も負けないやうに、大きな下駄を突つかけようとして、そこに轉んで、ワツと泣き出した。

「おい、まさ子、勳がころんで泣いとるだねか」と言ひながら、昔ながらの子煩惱な浩藏は、急いで駈け下りて、勳を引き起しながら、

「おお、痛かつたか、泣くな泣くな」と慷してゐると、奥の間から、丸髷に結つた大柄な色の白い丸顔の二十三四の女が、その膝頭を手ではらひながら出て來て、純一のすわつてゐるのを見ると、パツと赧い顔をして、

「ようお出でになりました……」と丁寧にお辭儀をしてから、「祖父さん、勳は甘えとりますけん、そげに痛うないのに泣いとりますけんな」と言つて、勳を浩藏から取つて、その手を引いて行かうとすると、浩藏がにこにこして、

「汝れはまだよう足も立たんのに、皆と負けんようにやらうとするから、そげに毎日のやうにころげては泣いとるだ……」と勳に言つてから、純一に勳の母親を顎でさし示して言つた、

「純一、これは市郎の家内だで……」

「わたしは市郎の家内でございます、どうぞ何分よろしうお願ひ申します」と市郎の妻も言つて、あらためてもう一度丁寧に挨拶をした。

「どうぞよろしく……」と純一も挨拶をした。

三人でかういふ挨拶をしてゐると、裏の酒藏へ續いてゐる内庭の方から、叔母のおきよが、その後からぞろぞろついてくる子供達を相手に何か話しながら、大きい笊をもつて入つて來て、笊を土間に置いてから、

「これはまあ、純一かや、よう戻つて來てくれたナ、お父さんがえらい待つて待つて、もう返事が來さうなもんだと、毎日のやうに言つてござつたが、なんぼしても何とも言つて來んもんだから、とても戻らんかと思つとつたのに、よう戻つて來てくれた」と言ひながら、襷をはづして、身づくりを直してから、あらためて久濶の挨拶をはじめた。長つたらしい挨拶がすむと、叔母はぢつと純一の顔を見守つて、

「おまへも變つたナ、えらい背が高うなつて、もう市郎ほどもありやせんか、次郎とは一つ違ひだつたが、あれは小かかつたで……」と言つてから、急に聲の調子を變へて、

「次郎もおまへ死んでナ、どげにみんなで氣を落した事やら……お父さんと來たら、もう世の中が面白ない、何をする張合ひもなうなつたと言つて、お墓詣りばつかりしてござるでなア……壽命とは言ふものの、あんまり若死したで、本當ない事で……あげにナ、氣質の良え子で、折角南の家へ行つて、叔母には可愛がられるし、御來屋のええところから嫁さんもござつて、ええ女の兒まで出來て、喜んどつたに、ぽつくり死んでしまつて、考へると可哀相でならん……」と言つて、叔母は袖を目にあてて、泣いてゐる。

「今おきよも言つたやうに、あれが死んでから、わしもがつかりして、急に年とつたやうで、墓詣りするのがせめてもの心遣りで、墓詣りの歸りに南へ寄つちやア、叔母たちとあれの事を話してナ……」と言つたが、その上何も言へ

ないやうに、大きな手を眼の上に押當てたとおもふと、大粒の涙がぽろぽろと膝の上に落ちた。
純一は何とも挨拶に困つて、默つてその叔父の顏を見た。蓬々と伸び放題に伸びた髯には白いものも交つて、頰などもめつきりこけたやうで、あの元氣で剛腹だつた叔父も、こんなに老い、こんなに涙もろくなるものかと、純一は氣の毒な氣持がした。市郞の妻も氣の毒さうに、言葉もなく、勳の手を膝の上にまさぐりながら、うつむいてゐる。
「いや、まあ、話は後でゆるゆるする事として、もうそろそろ晝飯の支度をして貰はうか。今日は二階で純一とゆつくり飮みながら話をするから、一つ、うんと御馳走をこしらへてくれ。御飯がすんだら、一つ一緒に次郞の墓詣りに行つてくれ、なア純一」と叔父は言つた。
叔母や市郞の妻が立上つて、子供を連れて出て行くと、默つて酒を飮んでゐた馬子も、金を拂つて店先きを出た。
その時、チリンチリンと鈴の音がして、店の前にとまつた自轉車から、大きな男がヒラリと飛び下りた。
「若旦那、お暑いのにようお精が出ますことで……」と、バタバタする馬の綱をといてゐた馬子が聲をかけた。
「あア、暑くなつたナ」とその大男は言つて、その自轉車を引き込んで、入口の隅の自轉車掛けにかけて、
「あア、草臥れた、草臥れた」と言つて、白いパナマ帽を頭からとりながら、こちらへやつて來た。彼はその大きな顏の汗をハンケチで拭きながら、純一の方を、一寸白眼のやうな感じのする眼付で見ると、叫んだ。
「よう、君か……いつ歸つて來た？　なんぞ面白い話でもあるかネ……」
市郞は上にあがつて、そこの柱にパナマ帽を大切さうに掛けてから、父親と純一との間に胡座を組んで、直ぐさま腰から煙草入をぬきとつて、スポンとひどくいい音をさせて煙管筒を拔いて、煙管を取出した。
「竹政はどげだつたナ、ちつとは話はついたか？」と浩藏は煙草をつめてゐる市郞に訊いた。市郞は煙管の雁首でその火鉢の中をかきさぐつて、煙草に火をつけてから、ふッの一吹き煙を吐くと、そのままポンポンと煙管をはたき

ながら、

「竹政の奴、すッぺらこッぺら言つて、なかなかこつちの註文通りにや行かん、彼奴思つたより食へん奴だぜ……時に君」と市郎はくるりと純一の方に向いて、

「東京の方の景氣はどうだね、大分變つたらうナ、もうかれこれ六七年にもなるからナ、僕もこの秋ぐらゐワイフを連れて行つて見たいと思つとる……帝劇なんかええだらうナ、すばらしい建物だちう事だないか、柱は大理石で、天井には天人の繪が書いてあるちうから、えらい見事だらうナ、役者も梅幸だとか幸四郎だとかいふ千兩役者揃ひちうから、ええ芝居を見せるだらうナ、君行つて見たか？」と訊いて、彼は二服目の煙草をポンとはたいた。

純一が返事をしないで、相變らず暢氣な從兄の顏を見てゐると、折角の愁嘆の氣持を無遠慮に遮られたので、先刻から苦り切つてゐた浩藏が、純一の氣持をもう一度元のやうに取戻さうとするやうに、

「話はまア後として、今も言つたやうにナ、純一、御飯がすんだら、一つ次郎の墓へ詣つてやつてくれ、わしも一緒に行くだから……南の家でも婆さん達もどげに喜ぶやら知れんだで……南の家の店もこれからおまへにウンと見て貰はにやならんのだからナ……」と言つて、にやにやしてゐる市郎の顏を見ぬ振りをした。

「君、僕の二階へ行かう」と市郎が突然大きな聲で言つた、「僕の二階はすてきだぜ、僕の考案でこしらへたんだから、氣が利いとるぞ、來給へ」と言ふより早く、市郎は煙草入を腰にさし込んで、土間へ下りた。

「これ、竹政の話は結局どげな風になつただ？……先方の言ひ分次第では、こつちも腰を定めなけりやならんだでナ」と浩藏はいらいらするやうに訊いた。

「ウーン……別に定りやせん、明日出向いて來ると言ひよつたから、一つ直接に談判して見るがええナ」

「どうも埒があかんで困る……折角その要件で行つて置きながら、何の事だ」と浩藏が不滿さうに呟くのを後にして、

市郎はのつそり裏口へ出て行つてしまつた。

「どうも市郎は次郎のやうに優しうないもんで、一層次郎の死んだのが惜しうてならんわい、市郎も量見は惡ないだが、一體が飛上り者だで、一向相談相手にならん……だが、東京の釀造試驗所に遣つといたお蔭で、釀造の方の理屈はようく知つとるので、それはわしも喜んどる、もつともナ、始めのうちは何せよ實地の經驗の足りんもんで、二三度失敗した事があつてナ、まア市郎の所爲ばつかりでもなかつたが……」と浩藏は辯解するやうに言つて、子に甘い親心を見せたのが、純一には氣の毒に思はれた。

御飯の支度が出來たからと言ふので、純一は叔父について中の間から裏二階に上つた。

この二階は、昔純一がこの家に來てゐた時分には、天井の煤けた、汚ない一間きりの二階で、納屋のやうにゴタゴタ古道具類を詰め込んであつたものだが、今ではすつかりその面目を新たにしてゐた。近年建て増したと見えて、二間續きの小ざつぱりした部屋になつてゐた。殊に、その奥のやや挾い方の間は、天井も床柱もピカピカ光つてゐた。その床の間をうしろに、二人前のお膳立が出來てゐて、白麻の座蒲團がキチンと並べられてゐた。

「なア純一、ええ二階になつたぢらう、市郎の婚禮の節手入れしただが、これだけにするには、えらい金だつたぞ。まあこの床柱を見い、ここらでこげな床柱のある家は、谷尾や泉頭を除けたら、そげにありやせんぞ」と、浩藏はその床柱をさし示して言つた。いろんな裝飾について、一わたり自慢をしてから、今度は床の間の右手にある東北向きの窓を開いて、

「それに見晴らしもええぞ、どげに暑い日でも、海の風が入るから、汗をかく事もない」と言つて、浩藏はその窓から首を出して、仔細らしく左右を見廻した。純一も叔父の隣へ行つて、外を見た。目の下には斜めに家の裏口をかぎつてゐる一條の流れ川があつて、それからずつと海邊まで、小さな裏町の家々の屋根が低く並んでゐる、そのむかう

は一帶の海であつた。海は胥く穩かに光つてゐて、純一が歸鄕の車中で見た、あの氷河のやうな日本海のおなじ海とは思へない位、やはらかに微茫とした面には、白帆の影も點々として漂うてゐる。左手には出雲の美保の關の地藏岬が、くつきりと鮮かに紫紺の色に橫はつて右手をかぎる御來屋の方の出鼻との間に、水天髣髴たるその水平線上には、大小二つの靑螺――それは隱岐の島の前島後島である――が、まるで二點の藍を落したやうに、淸麗な姿を浮べてゐる。純一はぢつとその景色を眺め入つた。

「これ、純一」といふ浩藏の聲が彼をその忘我から呼び醒ました。

「なア、酒藏もようなつたらう……」と浩藏は、內庭に面した緣側へ出て來た純一に言つた、「あれも市郞の意見で取り擴げただ、市郞もなア、なかなか釀込には骨折つて、はじめは藏の會所部屋で寢起きしとつたが、家內が來てから、それ、あの納屋の上に、あげな異樣な二階をこしらへて、あすこで夫婦きりでゐるだ」

內庭のむかうにある酒藏の大きな建物は、ここから見たのでは、別に變つたとも見えなかつたが、ただその後の方に高く聳えてゐる大きな煙突だけは、純一の知らないものであつた。酒藏と母屋との間には、左右にずつと二つの建物を連結してゐる屋根が見える、その左手の屋根の上に、成程新しく二階が繼ぎ足されてゐて、その開け放された窓には、今しがた市郞が着てゐた着物が、だらしなく投げかけてあつた。

二人が席に着いた時分、下から銚子をもつた十八九の娘と、吸物椀を載せた盆をもつて叔母のおきよとが上つて來た。

「えらい持たしてすまんことだつた、さア、あがつてくれよ、何も御馳走はねだが……」とおきよは言つて、娘の手から銚子を取つて、良人と純一の杯に酒をついだ。

「純一、これは千枝子だが、おまへ覺えとるだらうナ、おまへが此家に來とつた時には、まだ十か十一位だつたが、

もうこげなええ娘になつてナ……」と言つて、おきよは今しも立つて行かうとする娘を純一に引き合せた。千枝子は急いですわつて、心持ち顏を赧くしながら、何だか口の中で言つて、お辭儀をした。

「あの頃にやようおまへに帶を結んで貰つたり、話をして貰つたりしとつただが、ほんに子供の大きうなるのは早いもんだ、これももう嫁入もさせなならんようになつただ……」とおきよは言つて、浩藏の顏を見て、少しく笑つた。

「そげだ、そげだ、お父さんもその事を考へとるでナ、そげなお多福ぢや、なかなか貰ひ手もねえだで……」と浩藏は急に輕い調子になつて言つて、一杯ぐつと飮んでから、兩親の言葉できまり惡さうに、すつかり赧くなつて俯いてゐる娘を見やつて、

「千枝子、おまへ純一を覺えとつたらう、純一は東京へ長年行つとつて、こげな風に立派な男になつて戻つて來ただぞ。わしが戻れと言つてやつたで、よう聞いて戻つて來てくれたで、わしも喜んどる。これから南の方へ行つて、次郎の代りになつて、南の店を見て貰はにやならんでナ……まあ一つ、純一、飮め」と叔父は純一に杯をやつて、千枝子に酌を命じた。

純一は千枝子の酌を受けながら、叔父の昔ながらの專制的な言葉に苦笑した。浩藏は杯を重ねてゐるうちに、次第に元氣がよくなつて、目なども生々として來た。

「まあ、一つ、おまへも飮め、純一がこげして、この叔父を忘れずに戻つて來たで、おまへも一つ祝ふがええ」と言つて、彼は純一の返した杯を、今度は妻のおきよに遣つた。

「次郎が死んで、わしもがつかりしとつたが、そげして純一も戻つて來たもんで、わしも急に元氣が出て來た、そげにええ工合にならうとは思つとらなんだぞ……」と浩藏は嬉しくてならないやうに目がしらにうつすり涙を湛へながら言つた。

「したが純一、これからはこの叔父の言ふ事をよう聞いてくれんと困るぞ、おまへは昔はどうも剛情で折角わしがおまへの親父の淸太郞さんのやうになるといけんと思つて、手許に引取つて、ようく仕込んでやらうと思つとつたに、あげな風に祖母さんを呼び出して、連れて行つて貰つて、それつきり戾りやせんで、東京へ行つてしまつたもんで、わしも業が煮えて、えらい事おこつとつただが、まあ昔の事はそれでええ、これからが大切だぞ、萬事このわしの方寸にある事だによつて、わしを信賴してやつてくれりや、おまへの身も立派に立つし、南の家もしつかりしてくるし、わしもそれで安心がなるといふもんだ。なア、おきよ、そげだらう？」

「そりやアもう……南の叔母さんも、純一が戾つて來てくれたら、これに越した事はないと、いつも言つてござるだで、これは大喜びだぞ、何せおまへのお父さんが、えらい迷惑をかけたもんで、その御恩返しから言つても、ここは精出して手傳はならんわけ合ひだでナ……」と叔母も口を合せて純一に說いた。

五

次郞の墓詣りにとて、浩藏はお膳が引かれると直ぐに立上つて、純一を目でうながすので、純一はその後について二階を下りた。店先きには、頭のすつかり禿げた小さな老人が、すつかり丸くなつた背中を一層丸くして、ちよこなんと腰かけた儘、丁度日向ぼつこしてゐる蝿のやうに、ぢつとしてゐた。

「爺さん、これを見るがええ、これは純一だぞ」と浩藏が聲をかけると、ひよくんと此方を向いた皺だらけの顏をした爺さんは、純一が昔ここに來てゐた時分、もういい加減老人であつた浩藏の父の甚兵衞である。

「何だナ？」と言つて、甚兵衞は目をしよぼしよぼさせながら、此方を見てゐる。

「爺さん、そら、淸太郞の息子の純一だ、純一が戾つて來ただ、わしが呼び戾したもんでナ」

「ウーン、純一か」と甚兵衞は言つて、一層まじまじと純一を見てから、「わしはまた、淸太郎かと思つた、淸太郎によう似とる……」と言つて、大きく頷いてその儘またガクリと俯き込んでしまつた。

「わしはこれから純一を連れて、南の家へも寄つたり、次郎の墓詣りにも行つたりして來るから、汝は晝飯がすんだら、金田へやる三升樽を洗つとくがええ」と浩藏は甚兵衞に指圖をしてから、奥から出て來たおきよにも何か言ひ殘して家を出た。純一も叔母の聲に送られて家を出たが、叔父のガッシリした後姿を見ながら、二三間行つたところで、ふッと母親のおしまが頻りに心配してゐた土産物の反物の事を思ひ出した。

「僕は土産物を持つて來たんですが、南の家へ持つて行きませう」と言つて、純一が後へ引き返さうとすると、

「土産物か、そげな心配はせんでもよかつただに……まあ後から千枝子にでも屆けさしてええだ」と浩藏は無雜作に言つて、肩を張つて歩いて行く。通りがかりの町の人達や、兩側の店の人達が、彼の姿を見ると、右からも左からも聲をかけて、天氣や時候の挨拶をしたり、くやみを言つたりするのを、浩藏はまた一々、それぞれの相手の身分に應じて挨拶を返して行く。これはこの町の昔ながらの風習であつたが、浩藏の格式を重んずるやうな態度も昔ながらのものであつた。純一にはこれらの人々が、さうした挨拶の間に投げかける、この見馴れぬ若い男は誰だらうと言つたやうな好奇の眼がうるさかつた。

街道一筋の町を横ぎつて、やがて大橋を渡ると、直ぐその橋の袂に、四間々口の一方に暖簾を下げた昔ながらの南の家の古風な構へが見えた。昔は字體も分らぬほど古ぼけてゐた質屋の看板は新しくなつて、死んだ次郎の名がまだその儘になつてゐた。小さい時分、純一が次郎と一緒に連れ立つて遊びに來た時、夕方になると、次郎が叔母から言ひ付けられないうちに、その叔母の名の出てゐる看板を店の中へしまひ込んだ事を、純一は思ひ出した。

叔父の言ふ通り、次郎は全く溫和な几帳面な人間であつた。彼がこの南の家にとつて、外の誰れよりも重寶な男で

かは想像に難くない。その彼がなくなつたのであるから、氣丈な叔母も、さすがに落膽してゐるに違ひない。その愁傷にまたもや心をゆだねなければならぬかと思ふと、先程から浩藏夫婦の愚痴訓戒やらに煩はされてゐる純一は、今更ながら、この田舍の七くどい儀禮を堪らなく思ふのであつた。

殊に南の家は、大家族の浩藏の家とは違つて、家内は盲目の老婆と、子供のない叔母との二人きりで、昔から寂しい陰氣な家であつたが、今また養子の次郎もなくなつたのだから、その家の中の濕つぽい沈んだ空氣は、十分に想像する事が出來る。かうした家に、これから自分が次郎の代りになつて入るといふ事は、考へて見る迄もなく、自分には堪へられない事である、否むしろ一場の茶番にすぎないのだといふ事は、純一には分りすぎるほど分つてゐるのだ、が、敏子がこの家の支店のある小波村に療養に行つてゐるといふ事を聞いては、兎に角、これからどんな事が起らうとも、今のところ、この道を進んで見る外はないと彼は思つたのだ。

暖簾を分けて家へ入ると、店には番頭も客も見えなかつた。次ぎの間の上りがまちに、大きな赤銅の火鉢を前にして、盲目の婆さんが、たつた一人、觀世撚をゆつくりした手付で撚つてゐるのが見えた。それは十年もの昔、純一が少年の日に、次郎と二人でこの家に來た時と、殆んど同じ光景であつた。殆んど名狀の出來ない、一種の恐怖に近い氣持が、純一の心に起つた。十年と云へば、いかに長い歳月であつたであらう。殊に純一に取つて、この十年の間の都會生活は、焦慮と激動と絶望とに擾亂された十年である。然るにその歳月が、この老婆にとつては、單に長い一日でもあつたかのやうに、今も依然として、ゆつくりとした手付で、觀世撚の紐を編んでゐるのだ! 昔から寢る時には横を向いて寢てゐても、寢てゐる間に、くるりと上向いてゐるので、それで見てもどんなに達者な人か知れないと言つて、叔母はじめ皆がよく笑つて話してゐた人ではあるが、それにしても、これは何といふヴイタリテイだらう、見

たところ、昔とさほど變りがないのだ。
「婆さん」と浩藏がその傍へ寄つて、大きな聲で呼んでから、「常七は何處へ行つただ」と訊いた。
「浩藏さんかえ」と老婆は見えない眼を擧げて、「常七はナ、親父さんがえらい病氣だげで、今朝、上﨟の實家へ往にましただ」とゆつくりした調子で返事をした。
「それぢや叔母は何處へござつたナ？」と浩藏がまた訊いた。
「おとみかナ、あれは裏の菜園へ行つとるだ」と言つて、老婆は膝の傍らに蛇のやうに長く輪を卷いてゐる觀世撚の紐を手で引き寄せながら、確かにもう一人傍にゐると感じたらしく、
「一緒にござつたのは誰だナ？」と訊いた。
「ウン、これか、これは婆さん、わしがいろいろ譯を言うて戻つて來いと言うて、遠い遠い東京から戻らせた純一だ、これからこの南の家の面倒を見る事になつとる、淸太郞の息子の純一だ……」と浩藏は、一段聲を高めて言つた。その勿體をつけた長い說明の中には、彼の滿腹の得意さが籠つてゐた。
「おお、純一が戻つて來たかえ、そりやようこそ……まアまア、此方へ來い、どれどれ……」と言つて、老婆は昔よくしたやうに、純一の身體中を撫でて見るために、手を差し伸ばした。
「いや、婆さん、撫でて見んでもええ、純一に違ひねえだ……」と浩藏は笑ひながら言つたが、年寄はぶるぶると少し顫はせながら、やつぱりその手を差出してゐるので、純一は、
「お達者でしたか、純一です」と言つて、ずつとその手の下に身を寄せた。
「どれどれ……」と言ひながら、老婆はそのカサカサに乾いた枝のやうな手で、純一の肩や背中を撫でて見ながら、
「こりやほんとに純一だか……えらい大きになつただねえか、次郞よりは痩せとるが、なかなかしつかりしとるナ。

…」と言つてから、少し調子を變へて、
「おまへは東京では何しとつただか？」と訊いた。
「純一は東京であまりうまい話もなかつてナ、まあ失敗だらけと言つてもええだ」と浩藏は言つて、カラカラ笑つた。
自分の生涯が一つの失敗にすぎぬ事は、よくよく認めてゐた純一ではあるが、然し、それは叔父の考へてゐるやうな意味ではないのだと、この叔父の又してもの獨斷を、それがそれ見た事かと云つたやうな得意な調子をもつて言はれただけに、少し口惜しいやうな氣がして、一言云ひたかつたけれど、やめにした。
「何の商賣で失敗しただ、なんぼほど損をしただナ、淸太郎のやに派手な事をしよつただねか？」と老婆はのろくさした調子で訊いた。
純一が苦笑しながら、何か答へようとしてゐると、表の暖簾をくぐつて、背中に子供を背負つた一人の中年の女房が入つて來た。
「今日は、ええあんばいにお天氣になりました」と奥の方をすかして見るやうにしながら、「おぐりんさんはお留守でござりますか？」と訊いた。
「ああ、おくまさんか」と老婆は聲だけでその人を知つて、「おとみは今裏へ行つとるで、まアそこへかけて休んどつて下され」と言つた。
「どれ、わしが見て進ぜう」と浩藏は言つて、つかつかと上へあがつた。その女房は純一の方を不思議さうにじろじろ見ながら、よごれた風呂敷から子供の晴衣二枚を取出して、身を伸ばして浩藏の方へ押しやつた。浩藏はそれを手に取つてひろげながら、
「なんぼほど貸サええかナ？」と女房に訊ねた。

「五圓ほど貸してつかはツさい、こりやこの正月にこしらへたばかりで、まだちつともいたんどりませんだで……」
「五圓はむづかしいナ」と浩藏は仔細らしく首を傾けて、「まあ、よう貸して三圓だろナ、それでいけんかナ……」
「三圓はいけませんわえ、もつとよう見てつかはツさい」と女房は抗辯するやうに言つた。
「浩藏さん、外ならぬおくまさんの事だもんで、三圓五十錢ほどつけてあげなされ」と老婆が口添へした。
「ぢや、三圓五十錢、ええかナ」と浩藏がてきぱきした調子で言うと、
「三圓五十錢ぢや困りますが……おぐりんさんだと、いつも此方の言ふだけは貸して下さりますだで……」と女房は
漉りながら、丁度目を覺ましてウウと呻り出した背中の子供を、
「ええ子だ、ええ子だ、そげに泣くもんだねえ」となだめながら、搖ぶりはじめた。
「ぢや、まあ叔母が戻るまで待つてござれ、わしが今呼んで來て進ぜう……」と言つて、浩藏は下へおりて、裏口へ
出て行かうとして、振返つて、
「純一、おまへも出て見んか」と命令するやうに言つた。
純一は叔父の後について、裏口へ出た。そこの右手には、奥座敷から行けるやうになつてゐる質藏の土藏があり、そ
左手には、納屋や湯殿があつて、その間の通路を四五間も行くと、質藏のうしろがかなり廣い內庭になつてゐて、そ
のむかうに、昔この家が酒屋であつた時の酒藏の名殘で、後に養蠶室に使はれたりしたが、今では何といふ事なく物
置にされてゐる、荒壁のだだツ廣い建物がある。その兩側にゴタゴタと大小雜多のガラクタ道具の積み込まれてゐる
建物の中を通り抜けると、裏の菜園に出る。もうそこは濱邊近いので、すつかり砂地になつてゐて、梨の樹や柘榴の
樹や、棗の樹などで兩側を圍まれた中に、橀柑の樹がそこここに、こんもりした影を落してゐる。とつつきは丹念に
造られた花畑になつてゐて、蝦夷菊や、常夏や、松葉牡丹などの間に、ヒヤシンスだとかアネモネだとか、その他い

ろいろな西洋草花が見えて、それに一一長いむづかしい名前を克明に書いた細長い木札を立ててある。その菜園のずつとむかうの畠に、蜜柑の樹に半ば隱れて、一人の女がしやがんで何か籠に摘んでゐるのが見えた。

物置を出た時、直ぐにその花畑に目を付けた浩藏は、ぢつとそれに見入つてから、ふイと純一の方を顧みて、

「純一、これはナ、次郎がこしらへとつた花壇だぞ、あげに丹精しとつただに、今ぢやその花をまつッて貰ふ佛様になつてしまうただ……」と感慨に堪へぬやうに呟くのだつた。彼にとつては、見る物の凡てが、次郎を追慕するよすがにならずにはゐないらしかつた。

二人が青草のムラムラと茂つてゐる砂畑の小徑を歩いて行くと、足もとの草の間から、小さな蝗がツイッイと飛び立つて行つた。

「おとみさん、東京から戻つて來たぜ」と浩藏は畑の半分位まで來た時、相手の大きな喜びを確信してゐるやうな調子で、太い聲であちらを向いてゐる人に呼びかけた。

「何だかいナ?」と言ひながら、叔母は立上つて、少し腰をのすやうにしながら、此方を見たが、そこに立つてゐる若者が純一であるのを認めると、

「おお、これは本當だぞい!」と言つて、急に袂をその眼に當てながら、

「純一、遠いところからようわざわざ戻つてくれました、わしは嬉しうて涙がこぼれる……」と言ひながら、こちらへ歩いて來て、すぐ純一の前に立止つた。その立止つた樣子を見ると、叔父の浩藏が衰へてゐたよりも、もつと著しい變り方である。以前は年よりもずつと若々しくて、頰などもつやつやして紅みを帶びてゐた人であつたのに、今は、齒が落ちたと見えて、その頰がガクリと窪んで、口のまはりに深い皺が一杯寄つて、すつかり老婆の顏色になつてしまつてゐる。

「おとみさん、まづ、これで氣丈夫になつてええぜ」と浩藏はのみ込み顏に言ひ切つた、「わしが言つとつた通りだ、これが戻つて來んちう筈はねえだ……今も自家で言つた事だが、これの親父の事もあるしナ、これもこれからウンと眞面目に商賣に勵むと言つとるもんで、それはええとわしも言つた事だでナ……」と浩藏は純一が言つた覺えのない事までもつけ足して、叔母の喜びを煽らうとするやうだつた。

「お久し振りでした……」とただそれだしか、純一は口に出なかつた。彼は子供の時、この叔母が自分の祖母よりも强いやうに思つたが、今はそれだけ一層たよりなげに見えて、氣の毒なといふ感じで一杯になつたのである。

「ほんとにまあ……」と叔母は萬感を籠めた言葉といふよりも嘆聲を發して、ぢつと純一の顏を見詰めながら、「もうおまへも萬事知つてだらうが……わしも若い時から不幸續きでナ…… 今度といふ今度は……」と言ひさして、愚痴になりかけるのを自分で制へるやうにして、急に浩藏の方を見返つて、

「何はあれ、あつちへ行つて、ゆつくり話をしよう」と言つて、歩き出した。

「さあナ、實はこれが次郎の墓詣りをしたいと言つとるから、わしが同道して墓所へ行くだで、戻つて來て、一つゆつくり話さうかナ……」

「それもさうだが、まア、さき家で佛さんに線香をあげてくれるがええだねかや」と叔母は言つて、

「なア純一」と、純一の方を同意を促すやうに振返つて見たが、ふッと思ひ浮んだやうに、

「ほんにおまへは祖母さんに一番可愛がられとつたにナ……おまへ祖母さんの死目に會はんで殘念な事だつた、祖母さんはおまへのことばつかり言つて、えらい逢ひたがつてござつたにナ……」と、死んだ姉の事を追慕するやうに、しみじみ言つたが、また一寸語氣を變へて、

「誰れも彼れもが佛樣になつてしまつてさみしい事だわい、あげに若うて丈夫だつた次郎まで、ポックリ死んでしま

うだから……」と呟くやうに言つた。

純一はこんな風に嘆息してゐる叔母に、何か言つてやりたかつたが、適當な言葉も見當らず、ただ陰氣な暗い世界に引きずり込まれて行くやうな氣がして、默つて、二人の後について母屋に入つて行つた。

母屋には、先刻の女房が、背中の子供をおろして、膝に抱きかかへながら、盲目の婆さんの傍に腰かけて待つてゐた。婆さんは女房と何かぼそぼそ話しながら、やつぱり觀世撚の紐を編み續けてゐた。すべてが恐ろしいほど遲々とした單調さである。

「これはおくまさん、お待たせしてすまんナ、長い事待たさんしたかえ」と叔母は如才なく聲をかけて、土間に立つたまゝ、店先きにひろげてあつた子供の着物を、型通り取上げて見てゐると、その女房は、

「こちらのお宅でも、若旦那がおなくなりになつて、えらいお寂しい事で……」と改つた調子で言つて、長々とくやみの文句を述べ立てた。すると叔母はその手の着物を下に置いて、丁寧にそのくやみの禮を述べてゐる。

浩藏は純一を促して上へあがつて、土間から眞正面に見えてゐる、盲目の婆さんのすわつてゐるうしろにあたる奥まつた薄暗い六疊の部屋に入つて行つた。その部屋の正面には、見覺えのある大きな佛壇があつて、新しい白木の位牌の前には、樒がその厚ぼつたい葉を横たへて、いろいろな供物を照らす蠟燭の灯に光つてゐる。香爐の中には、もう灰になつた薄靑色の線香が、名殘りのほのかな煙を、一すぢ二すぢたゆめかせてゐた。浩藏はその前に行つて、南無阿彌陀佛々々々々々々と、重々しく唱へながら、線香の箱から新しい線香を取出して、燈明の火でそれをともして、香爐の中に立てて、鉦を鳴らして、それからぴたりとその前にすわつて、その節の太い手を合掌して拜んでゐたが、やがてその後に默つてすわつてゐる純一の方を見返つた。

純一が立つて行つて燒香してゐると、そこへかの女房を送り出してしまつた叔母が入つて來た。そして、純一の樣

子をぢつと見てゐたが、純一が禮拜を終ると、そのあとへ行つて、やつぱり南無阿彌陀佛々々々々々々と唱へて燒香しながら、突然浩藏をかへりみて、

「ほんとに死んだやうな氣もせんが……」と呟くやうに言つた。

「ほんにナ、もう追ッつけ一と月になる……早いもんだなア」と浩藏も歎息するやうに言つた。

叔母がお茶を入れて行つてゐる間、浩藏も急には立たないで、佛壇の方をしげしげと見てゐる。純一は、店や中の間と並行してゐる此の奥まつた二間續きの座敷をぢつと見廻した。丁度店の戸棚のうしろにあたる處には、質物の流れでもあるのか、堆く重ねてあつて、それと向ひ合つた壁際には、大きな總桐の簞笥が二棹並んでゐて、その一つの上には、桑の鏡臺があつて、その上には、水白粉や化粧水の瓶が二つ三つ並んでゐた。

叔母が二人のすわつてゐる佛壇の前に來てすわつて、お茶を入れると、浩藏はそれをぐつと呑んでから、叔母の顏を見て、それから純一の顏を見て、

「さて純一」と、彼はあらたまつた調子で、いかにもこれから重大な事を言ひ出さうとするやうに、威儀をととのへて言ひ出した、

「ここに叔母さんもをつてくれるで、話すには丁度ええだが……先刻自家でもあらまし話した通り、一つこれから此の南の家のために働いてくれ、な、この叔父がたのむ……おまへとても、いつ迄も東京で先きの見込のない事をしとるよりか、ここでちやんと身を固めた方が、どげにええか知れやせん、若いうちは、なに、つまらんと思ふかも知れんが、先きになつて見ると、こげにしてよかつたと分つてくるだ、な、ここが分別のしどころだから、よう納得してくれ、ええかナ……次郎なども感心な奴で、その點はよう心得てをつたで、叔母さんにもえらく氣に入られて、この家に來てからといふものは、商賣大切にと心がけて、蔭日向なくよう働いとつたことだ、煙草ものまなければ、お酒も

のまず、無駄づかひ一つせんで、南の家大切と、どげに骨折つたか知れやせん、それは叔母さんがよう御存知の通りだ。そげだもんで、南の家もこれまでとは違つて、萬事積極的にあらたまつて、今にどげにええ店になるか知れんちうて、町でも評判になつとつた位だ。ほんとにナ、こげなあんばい式でやつて行つたら、店は繁昌するし、家中は圓く納つて、何言ふ事もなかつただ……」

「そりやほんに叔父さんのおつしやる通りだつただ、次郎は無駄口一つ言はん代りに、何かにつけてよう氣が付いて、わしなどにも、どげにようしてくれたか知れん、嫁のおふでよりも、次郎の方がよう氣が付いて、わしが一寸でも加減が惡いよな事があると、すぐ後へまはつて、肩を叩いてくれたり、仕事をしとると、わしがやりませうと言つて、みんな一人でやつてくれたりしてナ……萬事そげな風だつた……」と叔母が浩藏の言葉を裏書きするやうに言つた。

純一は叔父と叔母とがしきりに次郎を賞めそやすので、それも無理のない氣持だとは思ひながら、たとひ二人にその意識はなくとも、それが自分に對してどんな意味をもつかを思ふと、重苦しい壓迫を感ぜずにはゐられなかつた。此の家の中に入るまで、彼はこの養子の問題を眞劍に考へて見た事はなかつた。が、かうして此の家の愁傷と寂寞とに包まれた空氣に觸れ、叔母のたよりなげな樣子を見ると、出來る事ならば、自分として出來るだけの事はしてやりたいと云ふ氣持が、彼の心に動かないではなかつた。けれども、實直な次郎とは殆んど正反對の人間である自分に、さうした次郎のやうな生き方が出來ようとは考へられないので、彼は今の自分の拔きさしならぬ困難な位置を自覺した。

純一が默つてゐると、浩藏は叔母の方に話しかけた、

「おふでさんはいつ戻つて來るかナ？」

「もう戻つて來さうなもんだが……」と叔母は少し聲を落して、「四十九日もまだすまんうちだで、家にぢつとしとつ

てくれりやええと思ふだが、何だかだと言つては、里へ歸るもんで、今の若いもんは仕方がない……」
「さればなア……」と言つて、浩藏は一寸思案をしてから、「おとみさん、こげな話は少し早いが、ありややつぱり、四十九日がすんで、なんぼか經つたら、いなしだ方がええだ、子供はあるにはあるが、それはどうにかなる、わしの方に引取つてもええだで……」
「その事なら、此方からそげな話を持出さなくとも、むかうの方でどうもその氣らしい、まあ、そのうちに何とか話がつくだらう」と叔母は術なげに呟いた。
「根が人の娘だもんな……」
「そりやさうだ……」と浩藏は言つて、暫く默つてゐたが、「忙しいやうな時には、家の千枝子をよこすから、遠慮なくつかつてくれるがええ…まあ、何しろ氣落ちせんがええ、純一もゐるし、千枝子もゐるし、若いもんが寄り集つてやれば、また花の咲く時節が來る……さうぢやないか、純一」と浩藏は意味ありげな笑顏を純一の方に向けた。
「兎に角、僕としてやれるだけの事はやつて見ませう」と純一は叔父の顏を見ながら言つた、「次郎君のやうに萬事手落ちなく出來るかどうかは分りませんが、叔母さんのほんの手傳ひ位の事はやれるでせう。叔父さんは昔僕を仕込むんだと云つて、隨分骨を折つて、骨折り甲斐もなかつた事でしたが、今度も事によると、そんな事になりはしないかと思つて心配ではありますが……」
「昔は昔、今は今だ、見たところ、おまへも今ぢやなかなかしつかりして來とるだから、大丈夫だ」と言つて、浩藏は愉快さうにカラカラと笑つた。
三人でこんな風に話をしてゐる時、店の方から、盲目の婆さんが、
「おとみ、和平さんが戻つてござつたぞ」と大きい聲で呼びかけた。

「和平さんかナ、今日はえらい早かつたナ」と言ひながら、叔母が立上ると、浩藏も氣が付いたやうに、膝を立てて、
「どれ、墓詣りに行くとしよう」と言つて、叔母の後につづいた。純一もそのあとから店へ出て見ると、盲目の婆さんのすわつてゐる左手に、色の黒い、小柄な瘦せた老人が、紺の木綿の風呂敷包の嵩高なのを下したまゝ、上りがまちに腰かけてゐた。
「今日は早かつたナ、えらい預りが多いやうだが……草臥れさんしたらう」と叔母が言ひながら、そこにすわると、
「只今もどりました」と言つて、こちらへ振向いた爺さんの顏には、痘痕が一杯であつた。七十近いその皺と痘痕との顏は、コチコチに乾からびて、木彫りの翁の面でも見るやうであつた。
「よう、毎日精が出る事だナ……」と浩藏がその勞を犒ふやうに聲をかけると、
「や、これは……廣田の旦那で……」と爺さんは眼をしよぼしよぼさせて、こちらを透して見て、「どうも暑うなりましたので、齡が齡だで草臥れます……」と言ひながら、純一の方を見て、
「これは、旦那とこの……」と不審らしく訊いた。
「いや」と浩藏は、自分も純一の方を見返つて、何か言はうとすると、突然横合ひから、盲目の婆さんが口を出した、
「和平さん、こんたは知つとらさらんだか、こりや純一だよ……そら、あの淸太郎の總領だわいナ、淸太郎ならこんたも知つてござらうが……」
「ああ、成程々々、あの米子へ出て盛んにやつてござつた淸太郎さんの……成程ナ、丁度、これ位の息子さんのある頃合ひだナ、淸太郎さんといふと、あの方のなくなられたのはいつ頃だつたかナ……あの方もなかなか遣手だつたに、運がようなうてお氣の毒な事で……運がわるいと、思ふやうに行かんもんでしてナ」と述懷するやうに言つた。
浩藏と一緒に裏口の方へ出て行つた叔母が、臺所からバケツを提げて出て來て、

話はまあ後として、爺さん、足を洗ひなされ、えらい埃のやうだ」
「あの小波村から五軒屋までの道と來ちや、一寸でも風があらうもんなら、とてもたまつたもんぢやありませんでナ」
「ほんにあの道はなア……」と叔母は上へあがりながら、「常七もいつもそげに言つとつた、支店通ひも毎日の事だから、なかなか骨が折れてナ」と言ふと、爺さんは女主人の方に顔を向けて、
「常七さんの事と言や、今日もあの娘が來ましてナ、此頃どげしてござるか知れんと言つて、泣いたりしましてナ、困りましたわい、何しろもうよつぽどせり出して來ましただ」と言つて、爺さんはニヤニヤした。
「ほう、そげか」と盲目の婆さんが面白さうに調子付いて言つた。
足を拭いてしまふと、爺さんは風呂敷包みを持ち上げて、帳場の前にピタリと眞四角にすわつた。そして、風呂敷の黒い布を解くと、中はやはらかい鬱金の包になつてゐた。爺さんのカサカサした手が、もう一度その包みをとくと、丁寧にたたんで重ねてある質物が、さまざまの色合ひと艶とをもつて、そこに現れた。爺さんが袂から鼈甲縁の老眼鏡を取出して耳にかけながら、その質物の上に載せてあつた受渡帳簿を取上げると、
「どれ一つ引合せよう」と叔母が帳場机の前にすわつた。
そのとき、便所から出て裏口でゴトゴトさせてゐた浩藏が、水を汲み入れた閼伽の桶と樒とをさげて出て來て、
「ぢや、行つてくる」と叔母に聲をかけて、純一を促した。
「それぢやどうぞお頼み申します」と叔母は浩藏に言つてから、純一には、彼がさうして墓詣りに行つてくれるのがうれしいと云ふやうなやはらかな眼付を注いだ。
純一は叔父の手から水桶を受取つて、その後について家を出た。南の家から墓場までは、小一丁位しかなかつた。間もなく農家まじりの町家が、かうした田舍町特有の小料理屋でどぎれてしまふと、そこの左手に、一宇の荒廢した

辻堂があつて、それからさきは、街道を左右から挾んで一帶の墓地となつてゐる。街道より三四尺も高まつてゐる兩側の石垣の上には、大小の墓石が壘々として連つて、その上に夕日の光がぼんやりと黄色く落ちてゐるのが、一層四圍の侘しい影を濃くしてゐる。かなり長く續いてゐるその墓地の中ほどまで來た時、浩藏はそこに出來てゐる石段を上つて行つた。その後から石段を上り切つた時、純一は突然、

「僕はまだお祖母さんの墓に詣つてゐないのですが、お祖母さんの墓はどちらですか……何でもこちらに埋めてあるさうですが……」と叔父に問ひかけた。

「ばあさんの墓か……」と言つて、浩藏は振返つた、その顏には何だかどぎまぎしたやうな樣子が現れてゐた。

「わしもさう思つとつた、おまへはばあさんの墓詣りをせにやいけんぞ、何しろ死目にも合はんだつたからナ、それでもかうしておまへが戻つて來て、詣つてあげると知つたら、佛もどげに喜ぶやら知れん……まあ、次郎の墓詣りをしまつたら詣るがえゝ、あつちの端しの方だから……」

かう言つて浩藏は、中央のやや廣い墓道から、ずつと左の方へ曲つて行つた。こんな寂しい田舍町にも似合はず、墓地は隨分廣く、ずつと海の方に向つて、斜をなして續いてゐて、中には隨分壯大な墓石も多かつた。そして、その廣い墓地のあちらこちらには、新佛の卒塔婆が二ところ三ところ、白々と浮き上つてゐて、薄れゆく夕日の空に、白張の提灯が、今にも灯の入るのを待つてゐるやうにくつきりと立つてゐる。また靈屋のままの次郎の墓にも、同じやうに、その白い提灯が揭げられてゐた。靑々とした樒の葉が、盛り上つた土のまはりに、一杯に挿し重ねられて、その澤山の親戚の名を書いた花立の中には、紅と紫との蝦夷菊の花なども交つてゐた。

「なかなかえゝ場處だらう、南の家柄から言つても、この場處柄から言つても、一つここへ、ウンと氣張つて、何處からでも一目で見えるやうな高い立派な墓を、次郎に立ててやりたいもんだ……」と浩藏は半ば獨語するやうに言つ

た。
何處の田舍でもさうかも知れないが、殊に此の土地では、墓地を大切にして、墓石を立派にして、家門の誇りとするやうな風習があるので、負け嫌ひでもあり、子供思ひでもある浩藏が、こんなに思ふのも不思議はなかつた。

次郎の墓詣りがすんでから、二人は、その高見の墓地を出はづれて、一條の砂道をだらだらと下ると、海の音が微かに耳についた。むかうには砂丘が高く低く連つてゐて、磯馴松の黑い影が、夕空にくつきりと浮き上つてゐる。道の左手の桑畑の中に出來てゐる小規模な新墓地に入つて行くと、そのずつと端しの、半ば枯れかかつた赤松が、海の方に向つてずつと枝を擴げてゐる下に、狹い場處に、幾つかの墓標が窮屈さうにゴチヤゴチヤと並んでゐるのが、彼の祖先からの墓所であつた。その中でも、一番新しく安つぽい小さな墓石に、純一は祖母の戒名を讀んだ。

「これがばあさんのだ」と浩藏が大きな聲で言つた。

最近誰も詣つたものがないと見えて、花立の中は一杯の砂で、少しばかり枯れた樒が、寂しさうに褐色によれた葉を並べてゐる。

「墓なんていふものはどうでもいいんだが……お祖母さんにだけは、もつと立派な墓を建ててあげたいものだ……」

と純一は心から思ひながら、默つて、花立の枯れ樒を捨てて、そのあとに水をさしてから、次郎の墓の殘りの樒を、そこに挿した。

その夜、純一は南の家に泊つた。

六

叔母や、盲目の婆さんや、昨夜遲く上﨟の方から歸つて來た、常七の從妹だといふ小女などと、一緒に朝飯をすま

して、純一が店へ出て、帳場机にむかつて、その上に置いてある米子の新聞を取上げて見ると、その一面の社說の下の方に、彼が逢ひたいと思つてゐる舊友中野信太郞の論文が載つてゐた。それは「近代人の戀愛」といふ題目で、ずつと連載されてゐるものと見え、もう第六囘目で、丁度今日で終となつてゐた。

純一はこの舊友に逢つて、親しくその口吻に接するやうな懷しい氣持で讀んで行くと、それはこれ迄の中野の書いたものにないやうな激烈な文章で、性的新道德を說いたもので、結婚生活は夫婦相互の愛と理解の上に成立しなければならない、愛と理解の伴はない結婚を持續する事は、道德的行爲に非ず、寧ろ不道德であり、罪惡である、近代人はよろしく進んでかかる虛僞の結婚生活を破壞して、意義ある新生活を樹立しなければならぬと主張して、ハウプトマンの『寂しき人々』を引き來つて、主人公ヨハンネスをして、無智な妻ケエテを捨てて、理解あり敎養ある新女性アンナ・マアルを取る事を得ざらしめた周圍の束縛を痛憤し、ヨハンネスをして湖水に投身せざるを得ざらしめた運命を嘆じながらも、かかる場合この歸結を取るのは弱者の道に過ぎずとなし、强烈なる近代人は、いかなる反對や困難にも屈伏せずして、飽くまでその信ずるところに向つて進まなければならぬと結論してある。それは冷靜な論文ではなくて、むしろ在來の舊道德に對する激烈な挑戰狀とも云ふべきもので、全體に烈しい情熱が漲つてゐて、その或る部分などは、殆んど詩のやうな響をもつてゐる。學校の敎師をしてゐる彼が、よくこんな思ひ切つた事を書き得たと思はれるほど、そのラジカルな論法は、純一を驚かした。彼は東京で敏子と逢つた時、彼女が電車の中で話した事――信太郞の新しい戀愛事件を、思ひ出さずにはゐられなかつた。

「彼は愈々家庭を破壞したのではなからうか？」と純一は心に呟いた。

「兎に角、早く逢つて見たい」

この最近の數年、彼は中野信太郞には、むしろ殆んど無關心になつてゐた位であるが、今偶然この文章を見た時は

そこに多少の論理的混亂は認めながらも、彼は中野が今いかに自分に近い處にゐる人間であるかを思つたのである。
叔母のおとみは、純一がさうして帳場格子の中にすわつてゐるのを見るだけで、心强いやうに思ふ樣子で、小女を指圖して、土間を掃除させながら、自分は臺格子の棧を拭いてゐたが、その格子越しに、純一の方を見て、ふと顏が合うと、何と云ふ事なく微笑んで、
「純一がそげにしてすわつてをつてくれると嬉しいわえ……何も遠慮氣兼は要らんから、氣樂にをつておくれ、米子の方へだつて、そげに急に歸なんでもええだらうが……」と言つた。
「さうですね……」と純一は上の空の返事をした。
「おしまさんも、おまへとはえらい長い間離れとらさつただから、おまへを傍に置いときたいとは思はさるだろが……」と叔母は言ひ續けたが、純一は母のおしまのあの暗い氣づまりな顏を思ひ出して、そんな母親ならば……と言ひたい氣持がしたが、默つてゐた。
彼は母親とは、少しの間でも、一緒にゐたいとは思はなかつたが、兎に角、今は米子の方面に向つて、歩いて行かねばならぬのである。昨日ここへ來た目的は、言ふ迄もなく、敏子に出來るだけ早く會ふ機會を見付けようとするのにあつたのだから。昨夜、小波村から歸つて來た爺さんを見た時、彼は自分のおもはわくをはつきり立てる事が出來た。そして、墓場から歸つて來た時に、かの爺さんがもう自分の家に歸つてしまつてゐたのを、詳しい話の出來なかつた事をいささか殘念に思つた。が、その夜、叔母と話してゐるうちに、彼の頭の中には、そのとるべき手順は既に決してゐたのだ。
「いや叔母さん、僕は今日歸ります、まだ逢はなければならぬ友人にも逢つてゐませんし、荷物もその儘にしてありますから……」

「それもさうだらうが……もう二三日泊つてからにしたらええだねかや」と叔母は言つた。けれども、純一は、出來るだけ早く歸つて來るからと言ひ張つた。

「僕も米子の姉の家では、さうゆつくりはしてゐられないのですから……」

「さういふ事なら、まあ歸つて來るがええ」と叔母はたうとう同意した。そして、

「待つとるで、早よ戻つて來いよ」と念を押した。

暫くすると、昨夜の爺さんがやつて來た。その爺さんのコチコチした黒痘痕の顏を見ると、純一は、何がなしに微笑まれた。

「お早よございます」と爺さんは女主人に挨拶をした、そしてそのどんよりした小さい眼を純一の方に向けて、

「今日も暑さうでございますナ」と言つた。

「なかなか暑くなりさうですね」と純一は快活な調子で返事をした。

爺さんは上にあがつて、火鉢の前にコチンとすわつて、小さな煙草入を出して、小さな煙管でゆつくり一服吸ひながら、盲目の婆さんに天氣の事を話したり、奧から出て來た小女を呼びとめて、常七の父親の病氣の事を訊いたりした。

叔母は昨夜爺さんの言つて置いた受戻の品物――明石の單衣物、羽二重の帶、其他、三點――を、例の鬱金の風呂敷に包んで、爺さんの前に押しやりながら、

「ぢや、何時の汽車で發つだか？」と純一に訊いた。

「歩いて歸らうと思ひます」

「あるいて……」と叔母は驚いたやうに言つた、「そげな事すると草臥れやせんか、自轉車でもあればええだが、常七

が乘つて行つとるもんで……」
「かまひません、歩いたところで、二里半位の道ですから、久し振りに日野川の橋なんかも渡つて見たいし、それに……小波村の支店にも、寄れたら寄つて見たいんです」
かう言つて、純一は爺さんの顏を見ると、叔母の出した風呂敷を、紺木綿の大風呂敷に包んでゐた爺さんが、ふッとその黑痘痕の顏を上げて、笑顏をして、口をもぢもぢとさせて、
「そりやよござります、一緒にまゐりませう」と言つた。若い道伴れの出來たのが、爺さんには嬉しさうであつた。
二人が南の家を出たのは、朝の八時頃であつた。家を出て、昨日の夕方、浩藏と一緒に墓詣りをした時のやうに、町並を出はづれると、純一はまたこの町の入口になつてゐる墓場の廣大な事を感じながら、殆んど二町位も行くと、やつと墓場が盡きて、そこには家の前に澤山の染物を乾し並べてゐる紺屋があつて、それから先きは、もうすつかり村構へで、藁葺の農家が街道をさしはさんで續いてゐる。
「若旦那はどちらの方におつとめでございましたナ？」と爺さんが純一に話しかけた。
「僕ですか」と純一は言つて、爺さんの振向いた顏を親しげに見やつた、先刻から何とか話しかけようと思つてゐた彼は、この老人には出來るだけ打ちとけて行かねばならぬと思ふ氣持から、非常に碎けて返事をした、
「僕はつい此間まで東京へ勉强に行つてゐたのです、然し、いろいろ思ふやうにゆかないし、身體もさう丈夫といふ方ではないので、こちらへ歸つて來たのです」
「さやうでござりましたか、道理で……」と爺さんは純一の顏をまじまじと見て、「お顏色もようない……何をしたいと思つても、身體がもとだもんで、身體が弱うちやしたい事も出來んだで、そりや、お戻りになつたが、どげによかつたか知れません。わしも丁度あんた位の息子がある事はあるだが、五六年前に、大阪の方へ突つぱしつて、未だに

戻つて來んもんで、ええ年齢をして、わしがこげに働かにやなりません、今時の若い者は思ひ遣りがなうて、困ります……」

コトコトと歩いて行く爺さんの背中には、紺風呂敷の幅廣な包みが、子供のやうに載つかつて、前の方に長々と伸びてゐる影法師にも、それが瘤のやうに兩側に出張つてゐる。

兩側の農家がだんだん疎らになつて、ふッと杜絶えると、そこら一帶の砂地の、砂の畑が急に盛り上つて、砂丘になつてゐる。その傾斜に、根の强さうな夏草がむらむらと生え下りてゐる中に、ところどころ、月見草の花が、昨夜からの花を持ち越して、露にしつとりと濕んでゐる。砂丘の上には、松の樹がさまざまに枝を交へて、時々平らになる右手の畑地のむかふに、一帶の綠深い松林となるまで、絶えたり續いたりしながら、連つてゐる。

話の絶え間に、ふッと、純一は海の音を聞くやうに思つた。松林のつらなりのむかうは、むかし見馴れたあの砂濱のつづきで、そこに、波がゆるやかに砂面を嘗め、砂面に伸び上つてゐる樣が、彼の目に浮んでくる。

時々、自轉車が後から走つて來て、二人を追ひ越して行く。中には、爺さんの方を振り返つて、「やア、和平さん、お出かけかナ」と聲をかけて行くものもあつた。

パナマ帽をかぶつて、いかにも上手に反身になつて走つて行つた男のあつた時には、もしか市郞ではなかつたかと、純一はふと思つた。

「自轉車ちうもんは、便利は便利だが、あれでなかなかあぶないもんでナ」と爺さんは遠ざかり行くパナマ帽を見送りながら話し出した、「時々わしも歩くのが辛うなつて、常七のやうに、自轉車で通つたらええかと思ふには思ふだが、何しろ年寄にはこはいもんで、向きませんわえ、それにひつくり返つて自が怪我するだけならまだええが、子供を轢いたり何かしちや、人樣に對して申譯が立たんもんで……常七のやうに上手な自轉車乘りさへ、いつだつたか、此の

むかうの濱村の曲り角で、もうちよつこりで、何處やらの娘さんの横つ腹に車をつきつけて、えらいあやまつたちう事で、大しくじりをやりましてナ」と爺さんは常七の事を言ふのが、非常に面白さうであつた。

「常七といふと、あのむかしゐた番頭ですか？」と純一が輕く訊いた。

「あんたはお知りぢやないだらう、あの男は上萬から來とりますで……もうかれこれ五六年も南の御厄介になつとりますかナ、いよいよ次郎さんが相續なさつた時にや、これから仕事の張合ひがあるちうて、えらい喜んどりましたが、次郎さんが急になくなられたもんだで、がつかりしとりますだ、極く氣質のええ男ではございますがナ、時々女の事で面倒を惹起しとります……」

かう言つて爺さんは、常七が小波村の支店へ通つてゐて、これ迄も始終女の事で、何かと問題を惹起してゐたが、今度といふ今度は、たちの悪いのに引ッかかつて、女は姙娠するし、どうでも世帶を持たなければならぬ破目になつて、弱つてゐるといふ事を話した。

「そんな事もありましたか」と純一が興味ありげに返事をすると、

「いや、どうもあの村は風儀がわるうて困ります」と爺さんは一層身を入れて話し續けた、「常七もわるいにはわるいが、持ちかけた女といふのが、土臺評判のようない女で、何しろ出戻りでございまして……それも姦通をしたちう事で戻されたげで、現に常七の外にも、村の男で餘程ねんごろなのが二三人はあるちう事で、常七も今ぢや大分後悔しとります、腹の子も常七のやら誰れのやら知れたもんぢやないと、專ら言つとりますわい。ところが、その女の母親といふのが、えらいしたたか者で、娘を引取ればよし、引取らなけりや、子供の始末をつけてくれと言ひ張つて、いつぞやも南のお店に押しかけて來たやうな事もありまして、おぐりさんが、えらいお困りになつたやうな譯で……始めからたくんでやつた事かも知れませんわい」

道の左手に暫く續いてゐた田圃が盡きて、一寸した松原になつて、それが少し行つて高まつて、鬱蒼たる松山になつてゐる、そのかかりに、日枝神社と呼ぶ淀江の町の氏神樣があつて、その奥まつた境内を、街道と並行して走つてゐる鐵道線路が、樹立を隧道のやうに拓り開いて、傍若無人に横斷してゐる。純一はその奥まつた、廣い石段の上の社殿の方を、ぢつと眺めながら、

「小波村はそんなに風儀がわるいんですか？」と何氣なささうに訊いた。彼は今、だんだん村の方へ近づくと共にどんな風に自分の計畫を、この爺さんによつて遂行したらいいか、何と言つて切り出さうかと思ひめぐらしてゐた。

「いやもう、あの村は……若い者には面白え村でございますだで……わしのやうな年寄でないと、小波村の支店はつとまりませんだ」と洒脱な調子で言つて、爺さんは人の善ささうに笑つて、純一を見た。純一はなぜとも知らず、少し顔を赧くして、一寸笑つて、そして默つてゐたが、今度は少しあらたまつた調子で、

「小波村では餘程華客がありますか？」とまた訊ねた。

「さやうでございますナ、小波村ばかりでなうて、濱村、龜ノ甲からかけて、仲間、泉あたりからまで來ますもんで、支店もこれでなかなか忙しいが、華客の多い事は、やつぱり小波村が一番でして……萬事が米子風で、派手な處だもんで、どうもやりくりがえらいやうで、見かけは立派な家でも、内證は苦しいと見えて、思ひがけぬ家から持つてくる事がありましてナ……先達つても、富吉といつて、村でもかなりええ家から、隨分金目の品物が來まして、持合せの金では足りんもんで、本店まで行つてくれるように言ひましたが、翌くる日まで待つからといふ事で、えらい荷物が重うて困りましたわい」

かうした老人の管々しい話を聞いてゐながら、純一の心はだんだん焦りはじめた。彼はわけもない事に滯つてゐる、自分の世馴れない性質がいまいましかつた。

街道は山についてぐるりと廻つて、街道と鐵道線路との間に、いつか小さな岩山が曝し出されてゐた。純一はその岩山の上を見たり、右手の廣々として來た畑地を眺めたりした。
「僕は……」と彼は、思ひ切つた調子で言ひ出した、「知つてる人が、あの小波村に來てゐるといふ事で、分るなら一寸會はなければならぬ用事があるのだが……」
「何といふ方で？……小波村の事なら、今ぢやわしも大抵知つとりますだで、何處の家へおいでになつとりますか？」
「何でも身體がわるくつて、保養に來てゐるとか云ふ事ですが……」
「保養に……」と言つて、老人は首を傾けた。
濱村の小さな土橋を渡ると、廣い街道が急に右へ曲つてゐる、その突き當りに、まだ店の開けてない一軒の茶店があつて、茶店の直ぐ横から、小波村への道が眞直に伸びてゐた。
「何の病氣で……」と、その道にさしかかつた時、爺さんが訊いた。
「多分……肺の方がわるいのでせう、僕もよくは知らないのですが……」
「肺がわるいと云ふと……」と爺さんは繰返して、どの家かあの家かと、一軒々々その頭の中で、小波村の家々の事をあさつてゐると見えて、暫く默つてゐる。
純一は、それが米子の西尾惣兵衞とさへ云へば、此の土地では誰れ知らぬ者もない大金持の、跡取息子の家内であるとさへ云へば、すぐ要領を得る事は知れてゐたけれど、この老人が、どんな風にして思ひ當るか、それによつて、こちらの出て行き方を定めたいと思つて、敢て待つた。
「それぢやあなたのやうに東京へ行つてござつた若い人でせうかナ」
「いや、米子から來てゐるのです」

「米子から……」と言つて、爺さんは、『もしか』と云つたやうな顏をして、
「米子からだちうと……女の人なら來てござるが……西尾の若い奥さんがナ……」
「さう……來てをりますか」と純一は事もなげに言つた。
「あんた、はじめから女の人だと言うて下さればええのに……」と爺さんは乘氣になつたやうに笑つて、「西尾の若い奥さんなら、何でもあの富吉(とみよし)の家が、實家(さと)の御親戚とかで。この兩三年度々おいでになつとるちう話で、只今もこの間から來とられます、かう申しちや失禮ですが、どういふ御用向きで？」と訊いた。
「大した用向きではないのですが……實は、東京にゐる西尾の家の弟から、內々一寸した言傳へをたのまれてゐるので、それを一言(ひとこと)傳へたいのです……それに僕はあの人とは幼な馴染なのですから……今どんな樣子か御存知ですか？」と純一は何氣ない調子で、和平の顏を見て言つた。
「幼な馴染でいらつしやるか、あの奥さんと……」と和平は直ぐ二人の年齡(とし)を考へるやうな調子で、「成程ナ、あの奥さんも、もう二十五六にはなつとられませうナ……全く幼な馴染つてものはええもんで、「わたしどもにしてからが、もうええ加減皺くちやになつとつても、幼な馴染の婆さんに會うと、つひ昔話なんぞ出たりして、嬉しいもんでナ……」
　だんだん村に近づいたので、桑の畑や麻の畑などが續いてゐた道の兩側に、青々とした稻田が見えて來た。その田の中には、田の草取りをする村の人達の姿が動いてゐた。道の近くの田でしやがんでゐた女が、その泥だらけの手を持ち上げて、曲げてゐた腰を伸(の)して、和平の方を見て、聲をかけた。
「今日もええお天氣樣で……」と和平の方でも聲をかけながら、もう小波村の支店も近いのだと純一に知らせるやうに、背中の荷物を背負ひ上げた。

これ迄街道と並行してゐた鐵道線路が、やはり右に折れてゐる、その踏切へと、二人はさしかかつた。
「あの奥さんには、一昨日、この踏切のところでお目にかかりましたぞ、今日あたりもお見かけしさうなもんだが……いつも運動が大切だと見えて、朝涼しいうちに、海の方に歩いて行かれたりしとりますで……」と呟いて、「そげな譯だつたら、支店へ着いて荷物をおろしてから、富吉の出入の婆さんの家へ行つて、兎に角、奥さんに傳へてもらひませう、萬事その上でお定めになつたがよございませう……」
「是非さうおたのみしたいものです、龍田といふものが、東京から言傳てをたのまれて來てゐると云ふだけ、むかうの耳に入ればいいのです」
「わけはありません」と和平は呑み込んだやうに言つて、「あの奥さんも評判の御器量よしだが、此頃は病氣のためやら、大分窶れておいでのやうで、……尤も、御器量のええ人が窶れとられるのは、人間ばなれしたやうに、美しう見えるもんですがナ……あの御病氣といふのが、どだい氣から來てをりますぞ、何でも、今使ひにたのむ婆さんの話では、此間東京へおいでになつて、えらい立派なお醫者樣に診てお貰ひになつたところが、これもやつぱり氣から來てゐるから出來るだけ物を苦にせんで、靜かに養生したがええと云ふ事だつたげで、こりやア、誰が見てもおなじ事だと見えますわい、何でもナ、こつちで御養生になつとると、ようなりになるのに、米子へ歸れると、またわるうなるげで……お金のある家の若奥樣と云へば、結構な御身分だと人は思ふかも知らんが、裏に入つて見ると、なかなか、貧乏人の家のやうに氣樂ぢやないでナ……殊に西尾と云やア、因業で名代の家だで、それも無理もない事だとみんな申しとりますだ」と和平は諄々と話し續けた。
道はいつか桑畑や竹藪や雜木藪の中に入つたと思ふと、そこには一條の道が、左から右に走つてゐる。その四つ辻を過ぎると、兩側にぽつぽつ農家の藁葺がその片側を見せ出した。裕福らしい家構への農家の軒下には、雲龍水と書

く字を見せた大きな箱が、火事の用意の水をたたへてゐた。
　支店はそれから間もなく、道ばたにあつた。ありふれた一軒の農家の、道に向いた座敷の軒柱に、南質店支店とふ看板がかかつてゐた。
「ここがわたしどもの支店になつとります、一つおあがりになつて、休息して下さい、その間にわしがちよつこり行つて來ませう、婆さんの家は、すぐこの近所だで……わしが直接に行くとええだが、先刻も申したやうに、富吉からは此間も品物が來たりしたで、わしが出入りしたでは、むかふ樣が迷惑なさるだらうと思ひますでナ……」
　和平はかう言つて、そこの廣い緣側に、背負つて來た荷物をおろして、ピヨツコリと家の中へ上つて行つて、暫く奥の方で何か言つてゐたが、やがてお茶を持つて出て來て、緣側に掛けてゐる純一の手に渡して、下に飛びをり、
「どうぞ上にあがつて待つとつて下さい」と言ひ捨てにして、ツカツカとむかうの方へ行つた。
　思つたよりも早く、和平は歸つて來た。やはり緣にかけた儘待つてゐた純一の眼には、黒い痘痕の和平の顏付で、さひさきのいい事が、すぐ感じられた。果して彼は、純一の前に來ると、ニコニコして、
「ええあんばいでしたわい、婆さんに行つて貰うと、丁度奥さんは緣のところに出て、お孃さんと遊んどられたげで、婆さんがあげな風に言ひますとナ、すぐ會得が行かれたやうで、そげな事なら、家へ來ていただいてもええ事はええだが、運動がてらついそこの四つ辻まで出て行つて、お待ちしてゐるからと御返事してくれと云ふ事だつたげで、すぐだと仰しやいましたでナ、兎に角、行つてお會ひになつたがええ……そしてすんだらまたお寄りなさい」
　我が事のやうに、和平は自分の使の成功を喜んでゐるやうであつた。彼は歩き出した純一のうしろから、大きな聲で、もう一度、律儀に敎へた、
「今通つて來た四つ辻でございますぞ」

純一は振返つて、和平に禮を言つて、もと來た道へと二三丁引返して、雲龍水のある家の前をすぎて、桑の畑と農家の裏の藪とで限られてゐるその四つ辻へ出て、立止つて、右手の方に屈曲してゐる路の彼方を眺めやつた。そこには、一臺の荷車が、此方に向つてやつて來るのが見えるばかりであつた。彼は藪のかたはしにあつた木の切株に腰かけて、新しい煙草に火をつけた。

彼は凡ての事が、案外容易に行つたと思つた。殊に、彼女が自分で出かけて會ひに來るといふ返事は、彼の氣に入つた。やがて會つて見れば分る事ではあるが、彼女の今の境遇が、どれほど自由であるかを案じてゐたので、この返事が、まづ一安心を彼に與へた。そして彼はこの會見が二人のこれ迄の關係を一歩踏み込んでものにするであらうと思つたので、氣づまりな他處(よそ)の家の中でなしに、かうした靜かな田舍道を、一緒に歩きながら話す事の出來る方が、嬉しい事でもあり、また互ひに幸福でもあると思つた。

七

「今日はええお天氣樣で……」と、荷車曳きは、見も知らぬ純一に聲かけて、その前を通りすぎて行つた。それから間もなく、また同じ方から、町へでも出かけるのであらう、百姓らしい親娘(おやこ)連れが、同じやうに聲をかけて行きすぎた。白粉(おしろい)などコテコテと塗つた十七八のその娘は、幾度も幾度も、純一の方を振返つて見て行つた。

敏子の姿はなかなか見えなかつた。

「この四つ辻の筈だが……」と純一は、煙草を二三本立て續けにくゆらしてから、心に呟いた。

彼は敏子が手紙で言つて來た通り、この小波村に來て、どうにかして身體を丈夫にしようと、養生してゐるのだと思ふと、何とも言へずいぢらしかつた。

「さうだ、彼女は養生をして、丈夫になつて、新しい生活をするために、上京するといふ決心を持つてゐるのだ、その不用意な結婚をした爲めに、非常な束縛となり悔恨となつてゐるその良人との生活を捨てようとしてゐるのだ……だが、自分は東京へはもう絶對に行くつもりはない」

ぢつと靜かに待つてゐると、後の藪の中で、雀が笹の葉をサラサラ云はせて、枝から枝へ飛び交うては、チチ、、と啼いてゐる。今年竹のやや淺い綠の葉が、雜木の間に柔かにたわみ込んで、その間から、日影がうツすりと洩れ込んでゐる。不圖、子供の聲が、純一の耳に入つた。默想を破られて、目を擧げると、その子供は女の兒で、それは彼の思ひもかけなかつた前の桑畑と桑畑との間の草徑からであつた。なほも聞いてゐると、あとからついて來る姉か母親かに、何か話しかけてゐる。その刹那、純一は無意識に立上つて、その方へ二あし三あし歩いた。すると、彼の眼の前に、六つ位の可愛らしい女の兒がバタバタと飛び出して來た。「そして、眼の前に立つてゐる純一の顏を見ると、吃驚したやうな顏をして、もう一度桑畑の中の徑へ驅け込んだ。

「そんなに走るところんでしまひますよ」と、桑畑の中から、細いはつきりとしたきれいな女の聲が、純一の耳に聞えて來た。この聲、この聲が待ちかねてゐる敏子の聲であつた。彼は歩いた。敏子の聲が、もう一度續いた。

「綾子さん、そんなに母さんにつかまつちや駄目よ、母ちやんがころんでしまふぢやないの……」

女の兒の嘻々と笑ふ聲がして、靑い桑の葉の間に、ちらちらと二人の袖が見える。やがて現れた姿を見ると、丸髷に結つて、いかにもすらりとたけ高く見える彼女であつた。

彼は手にしてゐた煙草を投げ捨てた。

そのとき、彼女の面長な、窶れた頰に、パッと紅く血が立つやうな、變化が見られた。結びつくやうな、二人の眼の間の無言の換語の後に、おのづから、純一の口に上つたのは、

「お身體はどんな工合です？」といふ言葉であつた。
「身體ですか？……」と敏子は言つた。そして、自分の帶のところに頭をすりつけて、まじまじと純一の方を見てゐる女の兒の方へ、少しうつむくやうにして、
「ねえ綾子さん、さア小父さんにお辭儀をなさいな」と言つて、その兒の頭を輕く撫でながら、
「お待ちかねでしたでせう、すぐ來るつもりでしたが、この兒がついて來ると言つて聞かないもんですから……」と言つて、彼女は純一に、子供なぞを連れて來たのを不滿に思はないでくれと云つたやうな眼付を注いだ。
「どうしてこんなに急にお歸りになりまして？　お家に何か變つた事がおありになつたのではありませんか？」と言ひながら、純一の顏色の動きを、眼ざとく見入つた、そして、自分のために歸つて來たのだと知つたかのやうに、
「わたしのあの手紙を御らんになつてから？……」とささやいた。
「ええ……讀みました、そして直ぐに發つて、こちらへ歸つて來ました」と純一は言つた、「發つ前あなたに上げた手紙は、讀んでくれましたか？」
「どのお手紙？　どんな事をお書きになつたお手紙？」と敏子が氣がかりらしく訊いた、「わたしがここへ來る前に差上げた手紙の御返事でせうか？」
「その返事の手紙です、僕があなたのあの手紙で決心して、歸國するといふ事をお知らせしたのです、あまり長い手紙ではないのですが……」
「まあ、わるい事をしました……もう一日か二日、あちらでをりましたら、それを拜見いたしましたのに……わたしがこちらに來ると申しますと、直ぐに友一郎が自動車の用意をして、綾子ともどもまゐりましたやうなわけで……」と敏子は言ひさして、純一の顏に現れた咄嗟の感情にハッとしたやうに、聲を落して、繰返した、「ほんとにわるい事

をしました、でも、わたしに來た手紙を誰も讀みはしませんから、大丈夫ですわ」と言ひながらも、氣がかりらしく思案して、言ひ續けた、「明日でもわたしが取りに歸りませう……そんな事とは知らなかつたものですから、龍田といふものが、東京から弟の言傳てを持つて來たからといふ、出入のお婆さんの話を聞いた時には、吃驚してしまひました、降つて湧いたやうな話ですもの……」とほんのり笑つて、「けども……考へ直してみると、わたしのあの手紙は隨分烈しかつたから、それでお歸りになつたのかも知れないと思ひました」と彼女は言つてから、少しぢれてゐる女の兒の耳に口をよせて、やさしい聲で、

「ねえ綾子さん、あすこへ行つて、ちよつと何か摘んでらつしやいな、そら、あすこにあなたの好きな草があるでせう、あれを母さんに摘んで來て頂戴」

「母さんも一緒に……」と子供は敏子のほつそりした手を引つ張つた。

「では、少しづつ歩きませう」と敏子は純一に言つた、「この兒なのでございますよ、友一郎のあれの兒は……ねえ、いつかお話しいたしましたでせう、綾子つて云ひますの、まるでわたしのおなかをいためた兒のやうに、わたしにこんなになついてをりますのよ」

それには答へないで、歩き出しながら純一は言つた、

「あなたの手紙では隨分僕も驚きました、今にもどうかなつてゐるのぢやないかと思つて、どんなに心配したか知れません、殊にあの剃刀の事など……」

剃刀といふ言葉を聞くと、敏子はサッと赧くなつて、きまりわるさうに笑ひながら、

「あの時はほんとにひどかつたのです、あんなに氣狂見たやうになつて……自分でももう駄目だと思ひましたから、ありつたけの事を書いてお知らせしたのですわ……あれをその儘すつくり御心配になりましたの？」と彼女は美しい

眼に、悲しげな中にも、その悲しみを樂しむやうな、諧謔的な餘裕のある眼色を見せて言つた。
「わたしは手紙ではどうも誇張する癖があつていけませんわ、友一郎にいつもさう言はれますわ」
から言つて、敏子は、純一の顏に閃いたものを、ちらと見ながら、
「……でも、あの手紙で歸つて下すつたのなら、あの手紙の力ツてものは大したものでございますわ……それでは、この夏中此方においでになれますの？　わたしが丈夫になりますまで？」
「多分、僕はもう東京へは行かないでせう」と純一は敏子の黑い眼をぢつと見ながら言つた。
「そんな事が……ある筈がありませんわ」と敏子は眼をまるくして、反問した、「なぜでございますの？」
純一はその理由については、直ちに答へる事は出來なかつた。その樣子をぢつと見ながら、敏子は氣が勇むやうに言つた、
「わたしのからだがよくなつたら、御一緒に上京しませう……此間のわたしの手紙で、わたしの決心は、もう十分御存知でせうもの！」と敏子は華かな眼で純一を見た。
「東京へ行つても……」と純一は言ひかけたが、この根本的の問題は、この次ぎにゆづる方がいいと思つて、默つた。
その時、敏子の兩手にもつれてゐた綾子が、
「もう家へ歸りたいのよ」と袖を引つぱつて、訴へた。
「ええ、ええ、お家へ歸りませう、あなたもわたしの家の傍まで來て下さるでせう？」と敏子は純一を差し覗いた。
それは純一にとつても望ましい事であつた。
「そして、ちよつとお寄りになりませんか？」と敏子が言つた。
連れ立つて、先刻の場處の、桑畑の細徑に入つた時、彼女は振返つて、

「こちらへまゐつてをりますと、わたしは何の氣兼もないので、眼に見えて身體が丈夫になりますのよ……毎朝、濱村の海岸の方へ散歩するのも樂しみでございますわ、この次ぎに御一緒に歩いて下さいまして？　今、米子の方にいらつしやるのでせう？」
「まだどちらとも決めてゐないのです……ことによつたら、淀江の親類の家に足をとめるかも知れません」
「淀江に御親戚がありますの？」と意外だと言つたやうに、敏子が訊いた。
「さうです、この村にある南の質店の本店です」
「ああ、あの黒い痘痕の顏のお爺さんのゐる質店ですか？」
「え、あの質店の本店です、そこは僕の叔母の家で、最近養子に行つてゐた僕の從弟が死んだために、僕をその跡へ入れようといふ、叔父の目論見があつて、僕としては弱つてゐるのです」
「まあ」と敏子は目をみはつて純一を見た、「あなたを質屋の店にすわらせようツて……奇拔でございますわね」と彼女は心からその不調和が可笑しいと言つたやうに笑つた。
「僕としても可笑しいのです、けれど、ことによつたら、この小波村の支店に、あのお爺さんに代つて、僕が通ふ事にしようかと思つてゐますよ」
「そしたら……」と敏子がやはり笑ひながら言つた、「わたしが質入に行きませう、何でも富吉の家では、あの支店へ持つて行く事もあるやうですから、此の次ぎには、あの出入の婆さんの代りに、わたしがその使ひをしたいもんですわ」
　草徑は畑の中を曲りくねつて、やがて、ある家の白壁の土藏のうしろについて、やや廣い道へ出て行つた。その道はやはり人氣もなく、雜木の藪と農家の裏の垣とにはさまれてゐた。

「では、今日は淀江の質屋さんの方へお歸りになりますの？」と敏子は純一にぴつたりと寄りそうて、からかふやうに言つた。
「いや、今日はこれから歩いて米子の方へ歸るのです、まだ誰にも會つてゐないので、中野君や相良君などに會つて見たいと思つてゐます」
「ほんとにあなたも久し振りであの方達とお會ひになりますのね」と敏子が言つた。
その時女の兒が、不意に、
「母さん、わたしたちも米子に歸りませう」と大きな聲で言つた。
「ええ、綾子も明日は父さんが自動車で迎へに來ますから、米子の方へ歸るのよ」と敏子は子供をなだめてから、
「あなたは中野さんが此頃學校をやめてゐる事を御存知？」と純一に話し續けた。
「いや……もう學校はやめたのですか？」と純一が問ふと、
「やめてしまひましたのよ。あの問題のために……あなたに東京でお目にかかつた時、あの方の事をお話ししましたわね、あれから事件が一層面倒になつて、たうとう學校をやめたとかやめさせられたとか言つて、今では友一郎の新聞社に入つてゐます」と敏子は說明した。
「さうでしたか」と言つて、純一は友一郎の新聞社といふ敏子の言葉を、苦汁のやうに嘗めながら、
「道理で、今朝の新聞に、學校の教師としては、到底許されないやうな、大膽な議論をしてゐたやうです」
「ええ、さうでしたよ、わたしもあれを讀んでさう思ひましたわ、何しろ大變元氣でいらつしやるやうね、あんなに自由戀愛を論じたりして……もつとも、あの御說にはわたしも十分同感いたしましたわ、此頃わたしが始終考へてゐる事柄なのですもの、中野さんの仰しやる通り、ほんとに男女とも、間違つた結婚をすると、ほんとに不幸ですわ。

あの文章をぢーイッと讀んでみると、中野さんがどんなに不幸な方かッて事が、ようく分るやうな氣がしますわ。それだのに、世間ではそんな事は考へないで、ただ表面だけ見て、いろいろ非難してゐるのですもの、今どんなに中野さんが町で惡く言はれてゐるか、御存知ですか？」

「それはさうでせう、學校を逐はれただけでも、それは想像が出來ますよ」と純一は言つて、自分の方をさしのぞくやうに見てゐる敏子の切長の眼を、ぢつと見返しながら、「中野は僕が思つてゐたより勇敢な男でした、普通の結婚をして、そのまま滿足して、ゆくゆくは校長にでもなつて、納つてしまふ男かと思つてゐました……」

「わたしもさう思つてゐましただけ、今更のやうに驚いてをりますわ」

「その中野のその人と云ふのは、どんな婦人でせう？」

「何でも同じ學校の裁縫の先生で、やはり學校の先生の奥さんださうです、そんな境遇の女の方だけに、一層非難がひどいのでせう。わたしも詳しい事は存じませんが、あのおとなしい中野さんをそんなにした位ですから、餘程の決心があつての事でせう」

「それはさうでせう、かういふ事件になつてくると、大抵、女の人によるとも言へますから……」

二人の間には、暫くの間、重苦しい沈默があつた。

「然し……」と純一は、自分の眼がいつの間にか、彼女の美しい丸髷に注がれてゐたのにふッと氣が付いて、その眼をはづしながら言ひ出した、「結局はやつぱり男の方の問題です、男の力の問題ですよ、男が弱くては、どうも出來ないのですから……」

「そんなに仰しやつて……」と敏子は今迄の落着いた調子を破つた聲で言つた、「あなたはわたしをお責めになりたいんでせう！」

「いや、そんな事をしたいとは思ひません……東京からあなたがあんな風に、約束を無にして默つて歸つておしまひになつた時だつて、僕はあなたを責めるやうな氣持は起らなかつた位ですから」

「さうでせうか……わたしは非常におおこりになつたとばかり思つてゐました……けれど、ほんたうのところは、そんな無視したお氣持ではなかつたのでせう？」

「無視したと云ふわけぢやありません、ただ僕一人で苦しんだだけです、萬事僕が……持ち前の引込思案な消極的な性質から、あなたを待つてばかりゐたのがわるかつたのだと悟つて、自分を責めてゐたのです、あなたのお手紙を見てから、とりわけその氣持が強くなつたのです……自分が今迄どんなに臆病で卑怯で內氣で……つまり、考へ込んでばかりゐるやうな人間で、そのためどれだけの大切なものを取逃したか、いや、そのためつひに本當に生きる事が出來なかつたといふ悔いを、いやと云ふほど味つたのです」

「そんなに仰しやると、一層わたしがすまなくなります、仰しやりたい事は、ようく分つてゐます……」と敏子は焦つて言つてから、また相手をも自分をもなだめるやうな調子で、「あの手紙はほんとに不滿足な手紙でしたわ、ほんとに表面的な事ばかりしか書けてゐませんでしたから……ただ自分の事ばかりが氣になつて、自分のつまらない辯解ばかりしてゐるのですから、自分で考へても厭やになります、けれど今度こそ本當の事を申上げますわ……」と言つて、ふと氣が付いたやうに、連れてゐる綾子に眼を注いで言つた、

「此の次ぎに…… 此の次ぎはいつお目にかかれますの？」

「いつでも……あなたの御都合のいい時に……」

「では、わたしの方からお手紙を差上げますわ、お宛名はどちらにしませう？」

「さうですね」と暫く純一は考へて、「淀江町の南方にして下さい、もつとも二三日は米子にゐるつもりですが……」

「わたしも明日は米子に歸りますわ　でも米子ではお目にかかれますまい……そして、米子ではどちらに？」

「あなたの御本邸の直ぐ裏です」

「まあ、そんな近いところに？」と敏子は驚いたやうに言つた。

「ええ、僕の姉の家がそこにあるのです、姉の話によると、あなたのお宅に出入りしてゐる近所の仕立屋の小母さんから、あなたの事を何彼と聞いてゐて知つてゐるやうですが……」

「それは困りましたわね……」と敏子は少し顏を赧らめて、「たとへばどんな事をお聞きになりまして？」と、その切長な眼を黑く光らせて、才氣のある女がこんな場合に見せるやうな碎けた調子で言つた。

「別に深い事情に通じてゐるやうではなかつたやうです、ただ此方に養生に出てゐるといふ事を聞いたのは、僕にとつては何より好都合だつたのです、姉などからさういふ事を聞かうとは思ひがけない事でした」

「では、あなたにお言傳てしたい時には、あの小母さんから姉さんの方へ傳へるといいのぢやないでせうか、あの小母さんなら、わたしに親切な人だから……でも、あなたの姉さんの方は、どんな風におとりになるでせうか……」

「姉は僕があなたを訪ねる事をとめてをりましたよ」と純一は姉の言葉を思ひ出して、苦笑して言つた、「姉のおもはくなんか、僕はちつともかまはないんですが……」

「多分わたしを誤解なすつていらつしやるのだわ、わたしも町では評判はちつともいい方ぢやないんですから」と敏子は少し顏を曇らせて、聲を落して言つた、「これからのわたしは本當にむづかしい立場になりますわ、次々に面倒な事が起つて來るやうな氣がしますわ……あなたが突然歸つていらしつたから……」と言ひさして、純一の顏を見たが、彼の思はくなどは氣にとめぬやうに、「わたしが考へてゐた計畫がすつかりこはれてしまひましたから……さうぢやありませんか、誰にも氣付かれないやうにして、こちらでゴタゴタしないで……パッと出て行つてしまひたかつたんで

す」

「そんな風に考へない方がいいでせう」と純一は彼女の空想的な考へ方をあはれんだ、「僕はあなたのさう云つた風な計畫を、そんなにいい計畫とは思つてゐません、僕はもつといい計畫をもつてゐるのですから」と、純一は強い調子で言ひ切つた。彼は敏子の言葉に含まれてゐる、昔のやうな年嵩の女の優越的に出る態度を我慢が出來ないのだ。

「でも、此上にも周圍がいろいろむづかしくなりさうですもの……」と敏子は言つたが、自分自身でもその言葉に恥ぢたやうに、その誇りの傷ついた感情を口邊に見せて、口を緘ぢた。こんな風になつて、二人は豫期しなかつた感情の齟齬に陷つて、暫くの間、默つて歩いた。子供はその樣子で、急に心細くなりでもしたやうに、敏子の手をしつかりと握つて、おびえるやうに、純一の顏をチラチラと見てゐる。

純一はこの子供が可愛らしい子だとは思ひながらも、その目付が好ましくなかつたし、また、そんな風にして、敏子の手を握つてゐる樣子がひどく目ざはりになつて、ムカムカした氣持をどうする事も出來なかつた。さう思つてみると、なほさら、その子の面影に、友一郎の特徴がはつきり見えてゐるので、一種の憎みさへも湧いて來て、最初はそれ程にも思はなかつた、この子を連れて來た敏子の一癖ある考慮そのものが、今は腹立たしくなつて來た。

「ここでもうお別れしませう」と突然に純一は立止つて、言つた。

「どうしてですの？　まだいいんではなかつたんですか？　わたしの家にお寄り下さるおつもりだつたのでせう？」

と敏子はかすれた聲で言つて、前方を指さした。

「もうあそこでございますのに……」

そこには、こんもりと茂つた樫の樹立の中に、白い土藏と黑い塀とが、一廓をなしてゐるのが見えた。

「お寄りなすつて下すつていいのですよ」と敏子がもう一度言つた。

「この次ぎにしませう、今日はそんなにゆつくりしてゐられないのです、これからずつと歩くつもりですから」

「では……仕方がありませんわ、何だかこんな風にお別れしては、心苦しうございますわ、折角お目にかかりながら……」

「今日に限つた事はないでせう、またお訪ねします」と純一は自分でもわけのわからぬ不機嫌に陥りながら、然し、彼女にあたり散らしてゐる自分の態度を意識しながら、言つた。

「母さん、早く歸りませう」とその時女の兒が、また純一の顏をチラッと見ながら言つた。その聲が、また純一をいらいらさせた。

「早くお歸りになるといいでせう」と純一は言つた。

「ええ歸りますけれど……このままでお別れするのは……こんな氣まづい事にならうなんて、思ひがけませんでした、あなたにしたところで、こんな風にお別れして、あとでお厭やぢやありませんか」と敏子は言つて、怨ずるやうに、純一を見上げた。暫くして、純一は、

「僕はおこつてゐるのぢやないのです、ただ少しいらいらしただけです、何でもありません」と言つた。

「そんならいいんですけれど……何だか氣がかりですわ」と、敏子は言ひながら、立止つてゐる純一の前に、丁度對ひ合ふやうな姿勢で立つて、ふと自分でそれに氣が付いたやうに、少し顏を赧くした。純一もそのデリケエトな心持を理解して、少し微笑んだ。そして、それがこの場のやや鬱した氣分をおのづとやはらげた。

「それでは、此次ぎにはゆつくり會ひたいものです、みんなあなたにおまかせしますから……」

「ええ、それは大丈夫です……」と言つて、敏子も少し微笑つて、純一の方を見た、その眼にはかすかな媚びがあつた、それが今までの心持のこだはりを、お互ひの胸から拭き取つてしまはうとするかのやうに見えた。

やや暫くの間、さうして二人は默つて顏見合はせてゐたが、敏子はふと我に返つたやうに、

「さあ、綾子、歸りませう、小父さんにさやうならをおつしやい」と言つて、女の兒の肩を抑へてゐた手を放した。

すると女の兒はまたチラッと純一の顏を見て、いきなり驅け出した。

「では、さやうなら……」と敏子は言つて、歩き出さうとして、ふと氣が付いたやうに、

「中野さんにはいつお逢ひになりますの？」と訊いた。純一はそれには答へないで、

「新聞社はどのあたりにありますか？」と訊いた。

「新聞社は警察署の少しむかうですから、すぐ分りますよ」

「さうですか、では丁度道順ですね……とにかく、行つて見ませう、社長さんは毎日出てゐられますか？」と純一は何氣なげに訊いて、敏子の顏を見た。

敏子は一寸の間、默つて純一の顏を見てゐたが、妙に取りすました調子で、

「多分毎日行つてゐるんでせう、さう長いこともゐないやうですが……」

まだ何か言ひたげな樣子であつたが、何から言つて、敏子はいろいろな感情の混和したやうな複雜な眼色をして、も言はないで歩き出した。純一も默つて歩き出した。

彼は傍目も振らず、すたすたと歩いた。暫くは、足の動きさへも意識しなかつた。それほど、彼は自分の心に沒頭してゐたのだ。彼の心には、言ひ難い不滿足の情が橫はつてゐた、自分に對しても、敏子に對しても、彼は漠然たるあきたらなさを抑へ得なかつた。今にして彼は、彼女に會ふまでの自分のあまりに單純な一徹な心持が、不思議なものにさへも思れた。彼女の一々の言葉、一々の動作を考へ出すと、そのあまりに冷靜で、理性的な事が――とりわけ友一郎の子供などを連れて來た事や、自分の歸鄕をむしろ壓迫に感ずるやうな口吻を洩らした事などが、彼には最も

あきたらなかつたが、それとともに、彼女のさうした態度こそ、彼女としては止むを得ない處置でもあり、またその方が至當な事でもあり、ずつと場馴れた人の仕方であつて、一切の現實的立場を無視してゐた、少くとも輕視して來た自分のやり方が、相變らずの空想的な自分の弱點を、暴露してゐる事かも知れないといふ反省が、彼自身をもあきたらなくもしたのだ。が、それにしても、自分の歸鄕の直接の原因となつたあの敏子の手紙と、今の彼女のあの様子とを思ひ合せると、彼は何だか欺かれたやうな氣持はしないではなかつた。

「だが、こんな風に考へることはよさう……」と彼は呟いて、顏を上げて見ると、そこはもう先刻和平が、田の草取りの女と挨拶をしてから渡つた踏切のところであつた。が、純一はその踏切を越さないで、線路について左に折れて、本街道に出た。

彼は淀江から米子へ導いてゐるその街道を、左右の平野の景色を見ようともしないで、依然としてうつむき加減になつて、すたすたと歩いて行きながら、なほも彼女の上から考へを轉ずる事が出來なかつた。彼は彼女が思つたより健かであつた事は嬉しかつたが、彼女があんなにも東京に憧れてゐる事が、今更のやうに痛感されて、一種の壓迫をさへ感ぜずにゐられないのである。そしてさうした彼女の心持と、自分のそれとを思ひ合せると、そこにかなり困難な問題が横はつてゐるのを認めないではゐられなかつた。

「だが、彼女のあの考へも、愈々といふ處まで突きつめて見なければ信じられないのだ、とにかく此の次ぎには、それも多少は分つてくるだらう」

道がぐるりと左に曲つて。やや勾配になつて、兩側はこんもり茂つた立樹にかこまれて、薄暗くなつてゐる處にさしかかつた時、彼は顏を上げた。右手の方一帶は、だらだらと緩い勾配をなして、河の岸まで、立樹がすぐ一杯の竹藪になつてゐて、高い大きな竹の幹が、恐ろしいほど深々と折れ重つて、河面の視野を遮つてゐる。

「おお、もう日野川の堤防なのだナ」と彼は自分に言つた、「この堤防だナ、彼女が夜中に走つたといふのは……」と呟いて、彼は足をゆるめた。左の方を見ると、田圃の方へかなり険しい崖になつてゐて、その崖の上一面には、古木がかなり深い並木を形づくつてゐる。そして街道はその竹藪と立樹の間を、約四五町も、車力がゆるゆる上つてゆく程度の勾配をなして、河について上へ遡つてゐるのだが、その四五町といふものは、一軒の人家もなくて、この街道筋の一番寂しいところとされてゐる。昔は——純一が子供の時分までも——追剝が出たといふ話さへあつたところである。

「こんな荒寥としたところを、夜夜中、西尾の若夫人ともあらうものが、よく俥にも乗らないで、ひとりで歩いたものだ……」と思つて、純一は今更に敏子の大膽な、エクセントリックな行動を考へて見ずにはゐられなかつた。あんなに理性的であるかと思ふと、かうした思ひ切つた事をするのを見ると、どうしても彼女を普通の女だとは思へなかつた。彼女のあの冷静さも、自分のさうした弱點を自覺してゐるところから來る意識的な努力の結果ではないか、それだけそれは苦しいものに違ひないと、彼は彼女の心を思ひやつた。

兩側の藪や林がひとまづ絶えたところに、一條の橋がかかつてゐた。これは日野橋といつて、純一が數日前、汽車中から薄暮の光の中で見たあの長い長い橋なのだ。正面からむかうの橋詰の方を見やると、あまりに延長が長いため橋幅が非常に狹く見えて、そのいくらか高くなつてゐる眞中どころを歩いてゐる人影が、こちらからは黒く小さく見える。つい橋詰のところには、二臺の荷車がやすんでゐて、丸い竹の子笠をかぶつた車力は、黄色になつた手拭で、顔中の汗を拭きながら、何か聲高に話してゐた。それを見ると、純一も急に身體中が熱くなつてゐるのを感じて、そこに立止まつて、袂からハンケチを取出して、帽子をとつて、額から頰のあたりを拭きはじめた。顔を拭きながら、彼は橋とやや直角をなして、堤防をだらだらと東の方へ下つてゐる尾高街道の方へ眼を轉じた。すると、そこには、非

常に近く、殆んど眉を壓せんばかりのところに、非常に高く、非常に壯麗な一つの山が聳えてゐた。それは言ふ迄もなく、純一が少年時代に馴れ親んで來た大山の姿であつた。大山は靑く冴えた肌を空にあらはして、まだ消えやらぬ雪の襞を、幾條かに流れ落ちてゐる谷々に白く疊んで、昔ながらの秀麗なおもざしを見せて、それは山といふより、むしろ昔馴染の生きた人間の顏のやうに思はれた。そして、その靜かな山の裾野からかけて、この堤防のところまで展けてゐる簑萱平野一帶は、靑々とした稻田の間に、ところどころ森や村落やを點綴して、梅雨晴れの空の光の下に、鮮かな夏の色彩をたたへてゐる。

純一は自分の心まで急に大きくなつたやうな氣がして、暫くの間、その景色を眺めてゐたが、やがて、これからまだ長い旅をしなければならない旅人のやうに、行手の米子の方を望み見ながら、

「行くところまで行くのだ！」と心に呟いて、そして彼は日野川の長い橋を渡りはじめた。

八

橋を渡つてから、物靜かな村に添うて、小十町も行くと、そこに再び底の砂の褐色に乾き上つた河があつた。それは夜見ヶ濱の砂洲を貫いて流れてゐる、新川といふ河である。その石の橋を渡ると、左にも右にも靑い松山が持上つてゐて、その右手の山の中腹には、中學校の白い建物が見える。そこからは、もう米子の町になつてゐることを思はせるやうに、車力の往來が頻繁になつて、どこの町外れにも附き物になつてゐる一膳飯屋や、小料理屋などが、チョイチョイ目に附きはじめた。

純一は、昔寂しい場末だつた處が、やつぱり一かどの町になつてゐるのに、ここでも故鄕の町の繁華になつたことを感じながら、踏切を越して、古い家並の揃つた町並に入つて行つた時、とある商家の正面にかかつてゐる大きな柱

時計が、見るともなしに目に付いた。時計の針は、丁度一時三十分のところを指してゐた。

「中野はもう社に出てゐる時分だナ」と、彼は心に呟いた。兎に角、まづ、中野に會はねばならぬと、彼は思つた。そして、町を貫いて流れてゐる加茂川の橋を渡るとき、橋を渡つたところの左手の、川添ひの路のむかうに、路より一段高く石垣を築いた上に、一宇の祠を望み見て、その横屋にゐる舊友相良元雄を想ひ出した。けれども彼は、元雄に會ふのは後にしようと自分に言つて、おのづと足を早めた。

警察署の前を過ぎると、敏子の教へた通り、右手にペンキ塗りの三階立の新聞社の建物があつた。開け放された幾つかの窓には、色の褪めた鳶色の日蔽ひが、力なげにぐたりと垂れてゐて、午後の日影が、その上にカッキリとさしてゐた。入口の右手の羽目板のところには、古びた枠の中に、今朝の新聞が掲げ出されてゐたが、その前に立つて見てゐる人の一人もないのが、いかにも田舍の新聞社らしい感じをさせる。

彼は一寸その建物を見渡してから、少し俯向き加減になつて、その扉を押して、中に入つた。そこはかなり廣い三和土になつてゐて、左手の方に受付口があつて、その窓硝子だけ取つた上から、奥に續いてゐる工場の活字棚の重なりが見えた。受付口をのぞいて見ても、そこには誰もゐなかつた。工場の奥の方で、三四人、何か話しながら笑つてゐる聲がした。正面は直ぐ二階の上り口になつてゐて、そこの鴨居のところには、「山雨欲來風滿樓」といふ、誰かの書いた横額が掲げられてゐた。彼が暫くそれを眺めながら待つてゐると、その工場の方から、汚れた服を着た解版小僧らしい少年が、ヒヨツコリ出てゐた。

「君、編輯の中野君は來てゐませんか？」と純一は聲をかけた。

「中野さんですか？」とその少年は、一寸怪訝さうに純一を見てから、「一寸お待ちなさい、訊いて來ますから……」と言ひ捨てて、名前も訊かないで、バタバタと二階にかけ上つた。間もなく、滑るやうにして下りて來て、

「お上り下さい」と無雜作に言つた。

純一はそこにぬぎ捨ててあつた鼻緒のゆるんだ上草履をひつかけて、掃除の行屆かない階段を、二階に上つて行くと、ついその上り口のところに、中野信太郎がこちらを見下すやうにして立つてゐた。

「おお君か！」と中野は吃驚したやうに言つた。

「……僕はまた誰か……」と言ひさして、彼は一寸氣がさすやうな樣子をしたが、「君だつたとは豫想外だつた、いつ歸つた？」と、せき込んだ調子で訊いた。

「歸るのは四五日前に歸つたんだが、あれから淀江の方に行つたりして、訪ねて來られなかつた、今日、淀江からの歸りに、すぐ君を訪ねたわけだ」と少し早口に言つて、純一は眞正面からしみじみと中野の顏を眺めながら、その意外な老け方に驚かずにゐられなかつた。純一の想像してゐた中野信太郎は、さうした華かな事件の主人公にふさはしい、元氣のいい、昔ながらのいくらか上ずつて見える才子であつた筈なのに、今見る彼は、櫛目正しく七三に分けた頭髮と、身綺麗な洋服姿のキリッとした風采とに、昔の彼らしい面影を見せてゐるだけで、その小綺麗な色の白い顏には、もう昔のやうな若々しい血色は見出されなかつた。口髭は綺麗に剃つてはゐるが、その口のまはりの靑い色が、彼の顏の何處となしに漂つてゐる暗い憔悴の影をかへつて濃くして、彼をもう殆んど三十を幾つも出てゐる人間のやうに見せた。それなのに、ただ彼の眼付ばかりは、妙にギラギラと熱病じみて輝いてゐるので、それが不思議な不安な印象を與へるのである。

「突然に來たんだから……今忙しいんぢやないか……」と純一は、中野が何かの都合でも考へようとするやうに、默つてゐる樣子を見て言つた。

「いや、かまはない、君さへ差支なければ、ゆつくりして行きたまへ、そのうち一緒に外へ出て見よう」と言ひなが

ら、中野は幅の狹い廊下を、先きに立つて案內した。鍵の手に曲つてゐる廊下の右手には、二つ三つ部屋が續いてゐたが、その左側は張出のヴェランダのやうになつて、欄干がついてゐる。

「君、かういふ處は一寸珍らしいだらう、この下が工場だと言つて、中野はその欄干から下をのぞいた。純一も首を出して見ると、そこには亂雜な工場の鳥瞰圖があつた。丁度眞下に見おろされる輪轉機の傍らには、二三人の職工が、車座になつて煙草をふかしてゐたが、一齊に二階の方に顏を上げて、上から見おろしてゐる二人の顏を見ると、挨拶とも何ともつかないやうな妙な顏をして笑つた。

中野は非常に氣むづかしさうな顏になつて、欄干を離れて、そこの右手にある應接室へ入つて行きながら、廊下を曲つた向側に見える室の方を指さして、

「あちらが編輯室だ、まだみんな出てゐないが、社會部長の小池君だけはこの裏に住んでゐるから、後で君に紹介しよう、君の名前に親しみをもつてゐる男でね、君が來たといふと、是非會ひたいと言ふにきまつてゐる……今にみんな出て來るから、編輯室の方へ行つて見よう、どうせこんな田舍の新聞記者になんか、ろくな奴はゐないけれどね……」と、彼はいくらか自嘲するやうに言つたが、調子を變へて、

「兎に角、まあ入りたまへ」と言つて、そこにあつた粗末な椅子の埃を手ではらつて、純一の方にすすめた。

應接室は狹くて、薄暗くて、そして恐ろしく殺風景であつた。開け放された窓の外は、すぐ隣家の壁に遮ぎられてゐて、妙に人を壓し付けるやうな氣分にさせる。部屋の隅の方には、長いテエブルが置いてあつて、その上に新聞の綴込みが、殆んど天井に支へんばかりに積上げられてゐる。

中央の小さな圓卓にむかひ合つてかけた時、中野にはじめて嬉しさうに微笑みながら、暫く默つてまじまじと、純一の顏を眺めてゐた。

「ほんとに久し振りだつたね」と純一が部屋の中を見廻しながら言つた。
「ほんとに久し振りだね、僕が東京から歸つてから、もうかれこれ七八年にもなるからね……」と中野もいかにも感慨に堪へぬやうに言つたが、ふと氣が付いたやうに、
「然し、君は僕がここに出てるつて事がよく分つたね、僕はまだここに出てるつて事は、一般的には知らしてはないのだ、何しろうるさいのでね……」と言つて、察してくれと云つたやうな眼付を純一に向けた。
「さうだらうとも」と純一も頷いて、「君がこの社へ出てゐるツて事は、つい今日、或る特別な人から聞いて、はじめて知つた譯なんだ、それでなければ、君に會ふまでは分らなかつたらう。で、ここへはいつから出るやうになつたんだね？」
「ここへか？　まだほんの一週間ぐらゐ前からだ、まだ別に記者といつた譯でもないんだが、どうせこれからは、何處かで、新聞記者でもやるより外はないんだ……實はね君、君にはまだ言つてやらなかつたが、僕は今度學校をやめたんだ、やめさせられたと云つてもいいかも知れぬ……いつか君にやつた手紙にも書いたやうに思ふあの女の事でね、いづれ詳しい事は後で話すが、隨分いろいろとゴダゴダがあつてね、まだすつかり片が付いたといふわけでもないんだ、僕も隨分今度は苦勞をしたよ、君には是非知らせてやりたかつたんだが、何しろすつかり頭は混亂してゐるし、とても手紙なんか書いてゐる餘裕はなかつたのでね……」
「いや、その事なら僕には大凡察しはついてゐた、殊に、こちらへ歸つてから、大體の事は、人から聞いたので、それで一層君に會ひたいと思つたのだ、それに今朝の新聞で、君の論文も讀んだ……今までの君には見られなかつた大膽な推論と、はげしい情熱の力とに驚いてゐる……」
「ア、あれを君讀んでくれたか！」と、中野は嬉しさうに言つた、その聲には、無邪氣な青年のやうな得意さが籠つ

てゐた、「僕自身としても、あれは自信のあるものなんだ、あれによつて僕はこの頃のムシヤクシヤを、大分晴らした觀がある……さうだ、あれによつて、僕は頑迷な世間の奴等、特に教育界の僞善者どもに挑戰してやつたんだ、老猾な僞君子や奴隷根性の奴等が、みんな吃驚したり、憤慨したりしてゐるさうだよ、痛快だよ！」と、眉を擧げて叫んだ中野の顏には、さつと血の氣が上つて、その眼は美しく冴えかへつて、そこに、純一が有爲の才と認めてゐた昔の若い彼が見られた。

丁度その時、廊下の向うの方から、

「中野君、一寸來てくれたまへ」と呼ぶ聲がした。

中野は威勢のいい返事をして立上りながら、

「小池君なんだ、すぐ歸つてくるから……」と言つて、急いで部屋を出て行つた。が、暫くすると、また入つて來て、

「君、一寸編輯室へ行つて見ようぢやないか、小池君が君に是非紹介してくれと云ふのだ、丁度今、嫌やな人間はゐやしない、社長もゐなければ、編輯長もゐない……」と言つて、中野はふと意味ありげに微笑した。純一は勿論その微笑の意味を理解した。

「社長室は何處だね？」と、彼は平靜な調子で訊いた。

「社長室か、三階だよ、まだなかなかやつて來やしないよ、先生、なかなか忙しいんだと中野は皮肉な言ひ方をした。

「いや、僕は出會つてもいいんだがね……ただ僕は、君を西尾友一郎の社の社員として考へると、一寸變な氣がするのだよ」と純一は輕く笑ひながら言つた。

「そりや勿論、僕自身だつて變な氣がしてゐるんだ、折りも折り、この社が西尾のものになつちまつたんだからね……然し、世の中つて、元來からしたものかも知れん」と、中野も苦笑しながら言つた。

「そりやさうだね、僕だつてここの記者にならないとも限らないからね」

「君が、ここの記者に？　そりやいい、そりや面白い！」と中野は聲をはずませて言つた。

かう言ひながら、中野は開け放された編輯室の中に入つて行つた。純一も續いて入つて行くと、その室はさして狹い方ではなかつたが、表から見えたあの褪色の日蔽ひをかけた窓からさし込む強い西日の光線に、室中に舞うてゐる埃が格別目立つて、それが亂雜な室内の樣子や、隅々の汚なさと相俟つて、一層暑苦しい感じを起させる。室の眞中には、長い幅廣の机が三列に置かれてゐて、その机の上には、東京や大阪の新聞がだらしなく擴げられてゐたり、ザラ紙に刷つた社の原稿用紙がパラパラと散つてゐたり、煙草の吸殼がけし飛んでゐたり、床の上には、揉み苦茶になつた紙片なども散らばつてゐた。

三列になつた机の一番右の方の、入口に近い隅に、たつた一人、小柄な背廣服の男が、片手に鋏を持つて、片手には東京朝日をひろげて見てゐたが、二人の入つて來たのを見ると、その黑い八字髭をチヨビリ蓄へた、いかにも小ぢんまりと整つた小さな顏を上げて、

「どうぞこちらへ……」と云つたやうな眼色をした。

中野は手近にあつた二脚の椅子を、その男の傍らに持つて行つて、後の方を振り返つて、

「君、此方へ來たまへ、紹介するから……」と言つて、二人を引き合せた。

「はじめまして……僕は小池寛次です、あなたの事は、ずつと以前から、いろいろ間接には承つてゐました、どうか今後よろしく……」と小池は丁寧に言つた。

「僕がここに入るやうになつたのは、小池君の肝煎なのだ、いろいろ今度は世話になつてね」と中野は言つて、更にその後に附け加へた、「小池君は、それに、西尾宏君と昔からの友人なのださうだよ……」

「さう言はれちや困るね、友人と云つたところで、單に中學の同窓にすぎないんだから、西尾の方では、ちつとも、友人とは思つちやゐないだらうから、迷惑だと言ふよ……」と言つて、小池は笑つて、
「さあ、どうぞかけて下さい」と純一に椅子をすすめてから、
「然し、西尾君の最近の威勢は大したもののやうですなア、一躍龍門に登つた觀があるぢやありませんか！」
「全くだね、然し彼の才は兎に角、彼の富を以てしちや、あそこまで行けたのに不思議はないさ、あそこまで行けなければ、彼としてむしろ恥だと僕は思ふね」と中野が口を挾んだ。
「まさか、さうとばかりも言へまいがね……」と小池は言つて、促すやうに純一の顏を見たが、相手がただ笑つたきりで、何も言はないので、彼は話頭を轉じた、
「時に、東京では、思想界の傾向は此頃いかがです？　何か新しい變化の徴候でもありますか？」と訊いた。
「さあ別に……變化と云つて大した事もないでせうが」と純一は答へた、「さうした點では、我々よりかへつてこちらの新聞社の方がよく御存知でせう」
「そんなこともないでせうが、外に現れた事件だけは、よく注意してゐますよ。今日來た新聞にも、例の大菅左門の事件について、また誰かが批判を書いてゐますが、何しろ大變な騷ぎを惹起したものですナ、現代社會に一つの大きな問題を投げ付けたやうなもので、大菅でなければ一寸出來ない藝當でせう、あなたは大菅とはお知合なのでせう？」
「知つてゐます、こちらへ歸つて來る少し前にも一寸會ひました、奈枝子と二人で、僕のところへ訪ねて來てくれたのですがね……」
「さうか……」と中野が膝を乘り出すやうにして、純一の顏をぢつと見ながら訊いた、「大菅はどんな樣子だつたね？何か今度の事件について話してゐたかね？」

「さうだね、何だか少し寂しさうな樣子だつた、そして、別に立入つた話もしなかつたが、何かの拍子に、多少辯解めいた事を言つてゐた。つまり、自分の今度の行動は、あまりに沈滯し切つた現在の生活を破壞して、社會改革家としての自分に活を入れようとする事だといふ意味の事を言つてゐた……」

「成程、」と中野は深く頷いた、「その大菅の言葉は理解できる……だが、それに對して、大菅の周圍のものはどんな態度をとつてるね、奈枝子の良人の隅田順や、大菅の妻の岡よね子などはどうしてゐるかね？　そして、一般の知識階級の人達は、どう言つてゐるかね？」と彼は少しせき込んだ調子で訊いた。

「龍田さん、一つ詳しく話して下さい、僕等のやうな田舍者は、ただ新聞などで表面的に知るばかりで、一向深いところには觸れてゐないのですから……」と小池も傍から言葉を添へた。

　純一はかの大菅の事件が、今の時代に一つの大きな問題を投下したものとして、かうした邊鄙な故鄕の町に於いても、何等かのショックを與へ、人々の興味を喚び起してゐるのを目の前に見て、人間の一つの行爲の社會に及ぼす不可見の影響といふ事を、今更のやうに感じないではゐられなかつた。殊に、今大菅と同じやうな立場に置かれてゐる中野が、大菅自身の所信や、彼の周圍の批判なり態度なりについて、詳しく知りたいと思ふのは、無理もないと思つた。けれども、彼は今の場合、かうした場處にゆつくりと構へ込んで、さうした、今の自分としても、痛いところに觸れるやうな事件について話してゐられない氣がした。彼は早く中野と二人きりになりたかつた。

「あの事件は」と彼は言つた、「まだこれからどう發展して行くか分らないでせう、何しろあの通り複雜な關係ですからね。どちらも妻があり良人がある身の上だし、その上、大菅には神山といふ女もあるといふのですから……然しまあ、ああしたことは、第三者が口を出すべき問題ではないでせう、結局當事者間の問題でせうね」と言つて、今度は中野の方に向いて、

「世間の人達の批判などといふものは、どうせ取るに足りないにきまつてゐる。自分達は安全な高見にゐて、濁流の中を抜手を切つて泳いでゐるものを指さして、勝手な批評を下したり、一々舊道徳の物差で測つて、何かと非難してゐるやうな人達の言葉は、一切の顧慮を棄てて生の限りを生きようとするものにとつては、何の權威もない筈だ。至高の生はあらゆる理義や思惟を超越したところにあるんだ……」と純一は少し聲を勵まして言つた。さう言ひながら、彼はその自分の聲の調子と、その言葉の意味とに、現在の自分の心の波動があまりにもはつきり洩れ出たのに氣付いて、思はず耳が火照るやうに覺えた。けれども中野は、この激勵に感謝するやうな眼を友に向けて、

「全く、さうだ！」と感嘆の聲で同意した。「一切の虚僞を破壞して、本當に生きようとすると、どうしても世間と戰はなくちやならんのだね。僕も今度家庭破壞をやつて、痛切にそれを感じたのだ……どうせ取るに足らんとは思つても、ただ形に現れてゐる點ばかりを捉へて、何のかんのと非難したり、壓迫したりするんだから癪にさはるのだ、殊にそれが教育界だと一層ひどいのだから、いやになつてしまふ……」と腹立たしさうに、投げ出すやうに言つて、彼はその眼に哀訴するやうな色を浮べて、小池の方をかへりみて寂しい笑ひ方をした。

「こんな田舍で校長をしたり、郡視學をしたりしてゐる人間に、新人の道德を理解させようたつて、それは求めるものの方が無理かも知れんよ……」と言つて、小池は吸殼を新聞の下にあつた灰皿にさしこんで、少し反身になつて額の髮を撫でた。

「一體、世間ツてものは、人目にかからぬやうに、蔭でコソコソやつてをる分にや、なんでもないんだ。ところが、中野君のやうに、正々堂々とやりたい事をやるのを見ると、派手に見えるだけ嫉けるんだよ」と言つて、小池は純一の方をチラと見て、飄逸な笑ひ方をした。

「さうかね……」と中野は少し照れたやうに言つた。

「さうだよ、蔭でコソコソやる人間はいくらもゐる、ここの社長なんかも……」と、小池は純一の顔を見ながら、話に興が乘つて來たやうに言つた、「蔭では隨分コソコソいろんな事をやつておきながら、表面はえらく眞人道を重んじて、いつも教育勅語の、君には忠に、親には孝に、夫婦相和し……もつとも親には孝行さ、その點は滿點だが、夫婦相和しは、少しもなつちやをらんぜ……その癖、君の今度の事件には、まるきり同情してはをらんのだ、だから困るよ」

「ちつとも困りはせんよ、僕は」と中野は反抗的に言つた、「僕はここの記者で落着くつもりはないんだ、どうせこの土地にゐては、周圍の壓迫が堪らないから、何處か遠方へ行つてしまはうと思つてゐるんだ……」

「それもいいかも知れん……僕なんかも、今度の改革が非常に不滿なんだ」と小池は言つた。「社長が變つてから、だんだん社が惡化して行く傾向がある。尤も以前だつて、大株主として、西尾の手は入つてゐたんだが、かう西尾の金權の壓迫が露骨になつてくると、公正な社會のバロメエタアたる新聞紙の權威は、まるで地に墮ちたも同然ぢやないか……社員たるわれわれは、まるで西尾宏の幇間のやうなもんですからナ……」と彼は終りの言葉を純一の方に向けた。

純一はそれに答へるに、自分が歪んだ笑ひを以てした事に氣付いた。彼は歸鄕して以來、事毎に見聞する西尾家の此の土地での勢力といふものを、押し除け難い壓迫に感ぜずにはゐられなかつたが、とりわけこの編輯室で、彼はそれを絶えず身に受けてゐたのだ——そして今、小池の言葉は、忽ちそこに、ついその眼の前に、かの顎骨の張つた、眉目の間に一種冷薄な氣の漂つてゐる友一郎の顔を、ありありと浮き上らせたのである。彼はかの日、東京の水明館の樓上で、友一郎と對論した時の氣分が、鮮しく蘇つて來た。何氣なささうに編輯室を見廻しながら、彼は今後の自分の立場が、どんな苦しいものであるかを思はずにはゐられなかつた。それと共に、彼の心には、一種名狀しがたい

焦燥の念が湧き上つて來た。

なほ暫く、小池のいろんな不平の言葉を聞いてゐた彼は、突然、

「僕は今日はこれで失敬しよう」と中野に向って言つた。

「待ちたまへ、僕も出るから……」と中野はあはてたやうに言つて、急に事務的な調子になつて、小池に何か打合せをはじめた。それがすむと、小池は、

「では龍田さん、またお寄り下さい、僕はいつもこの社内にゐますから……こんな才能のないつまらない人間ですが、これでも文學は大變好きですから、一日ゆつくりお說を聞かせて貰ひたいと思つてゐるのです」と丁寧に言つた。

純一がそれに答へてゐる時、丁度そこへ、何か高い聲で話しながら、二人の靑年がどやどやと入つて來た。一人は赭黑い顏に、痘痕ともにきびの痕ともつかぬムラの澤山ある、脣の薄い二十五六の男で、今一人はまだ二十前後の神經質らしい冴えた眼色をした、色の白い靑年であつた。

「小池君、例の橋本げんが愈々此方へ護送されて來たぜ、今僕等は見て來たんだ」と脣の薄い男は、入つて來るなり、小池に聲をかけた。

「ホホ、さうかね」と小池もその方を向いて、興味ありげに訊いた、「どんな女かね？　して、公判の日は確定したかね？」

「それが君、素敵なんだぜ……」と言つて、彼はその薄い脣を舌なめづりしながら、そこにゐる未知の人物は、これは一體誰なんだと云つた眼付を、チラと純一の方に投げながら、

「遺憾ながら顏は見えなかつたがね、そのスタイルが素敵なんだぜ、何しろ君、紫色の覆面をして……そのまパアブル　マスクつて云ふ活動寫眞にでもなりさうな樣子なんだ……一寸凄かつたね、君」と彼は後にゐる靑年をかへりみた。

「さうだ、あんなのが毒婦と云ふやつなんだらうね、大正高橋お傳ッて標題で、いい芝居に書ける……」
「大正高橋お傳はよかつた……いい標題だ」と小池は言つた、「何しろ十も年下の男を情夫にもつて、病氣の良人を毒害しようッて姦婦だからナ、どんな顏しとるか見たいもんだナ、素敵な美人だと云ふぢやないか……」
「美人らしいナ、頸なんかもほつそりしとつて、四十女と見えなかつたよ」
純一はそれが先日、淀江からの汽車中で、話題にのぼつたかの夫殺しの女の事だと悟つた。そして、自分がつひその話に引き入れられてゐるのに氣が付いた。
けれども中野は、格別大正高橋お傳には興味を有たないらしく、しきりに自分の机のところで、何か探してゐたが、あつたと見えて、此時此方へやつて來て、
「さア君、行かうか……」と純一を促した。すると小池が急に此方へ向いて、
「ア、君、待つてくれたまへ、一寸龍田さんに紹介しよう」と言つて、純一にかの二人の靑年を引合せた。脣の薄い男が村田愁羊、短篇小說家兼歌人。色の白い靑年が岡村實、これは新思想の硏究家で、論客といふのである。
から言つて紹介せられた岡村は、その靑年らしい若々しい眼を輝かして、
「あなたが龍田さんですか……」と、さも珍らしいものを見たやうに、まじろぎもしないで純一を見詰めて、何か話したさうであつたが、中野がもう室の外に出てゐるので、純一も簡單な挨拶だけで、匆々にそこを出てしまつた。
中野が先きに立つて、廊下を階下へ下りようとしてゐると、丁度そこへ、出會ひ頭に、一人の人物が、下からヅシリヅシリと、鈍い大股で上つて來た。その男は非常に身長の高い、六尺近くもあるかと思はれる男で、大きい四角ッぽい顏に、非常に細い小さい眼と、赤黑い厚い脣をした大きな口とが、不調和に結び付けられてゐて、それが遲鈍と野獸的なヴイタルフオースとを、思ひ思ひに表明してゐるやうで、一眼見たら忘れられないやうなグロテスクな奇怪

な印象を與へるのである。
その男は、中野と顔を合はせると、
「ア、ア、ア……」と、まるで啞者が喋らうとして焦るやうな奇怪な聲を出して、何かせきこんで言つたが、何を言つてゐるものか、純一にはよく分らなかつた。けれども、中野は要領を得たやうに、
「ハハア、わかつた……」と言つて頷くと、件の男はニタリと笑つて、中野の後にゐる純一の方を、その小さな眼でジロジロ見ながら、いきなり大きな右手の親指を、鼻の穴に突ッ込んで、ぐッぐッと搔き廻しながら、無作法にすれちがつて行つた。純一はその男のさうした態度に、輕蔑か警戒か、兎に角何か敵意らしいものを直感して、奇異の念とともに、本能的な不快を覺えて、思はず振返つて、彼の不格好な後姿と、まるで跛でもあるやうな、變に調子外れな歩き振りとを見かへらずにはゐられなかつた。
階段を下りて行くと、今しも扉を押して入つて來た、灰色の塵よけ外套をはをつた紳士風の人物に、中野は輕くお辭儀をして、純一の方を見返つた。純一はその人を見た。それは西尾友一郎であつた。
「ハハア、先生、歸つて來てゐるナ……」と言はんばかりに西尾友一郎は眼色を濃くした。そして、さり氣なく、中野に向つて、
「この方は……」と促すやうに言つた。
「御存知かも知れませんが、御紹介しませう、これは僕の竹馬の友龍田純一君です」
「龍田君、この方が社長の西尾友一郎さんだ」
「私も龍田さんに違ひないと思つた、いやどうも、此間は失禮しました、私が急に出かけなくちやならなかつたので、何もおかまひもしなくつて失禮しました、あれから急に、妻が歸國すると言ひ出して、御招待申さうと思ひました帝

劇の方もフイにしてしまつて、殘念でした……」
「いや、どうしまして……」と純一は丁寧に言つた、「あの時は僕こそ失禮しました」
「もうお歸りですか……お急ぎでないなら、一つ社長室へお寄り下さらんか……ね、中野君」
「しかし……」と中野は意味ありげに純一の顏を見ながら、仔細らしく言つた、「龍田君は今日はこれから出かけなけりやならんところがあるとの事ですから……」
「いづれまた伺ふことにいたしませう」と純一は、ぢつと友一郎の顏を見ながら言つた。
「さうですか……そりや殘念ですナ、どうぞそのうちに是非來て下さい、僕の社にも、新進有爲の士が大分集つてゐますよ、よかつたら始終でもお寄りになつて貰ひたいですナ、いや失禮」と一揖した。
戸外には、友一郎が乘り捨てた自動車がとまつてゐて、鳥打帽をかぶつた、年の若い運轉手が、物珍らしさうに臺の前に來て立つて見てゐる二三人の子供に、何だか言つてからかつてゐたが、出て來た二人を見ると、中野に一寸會釋をして、純一の方をまじまじと見た。それはつくねたやうな圓い顏で、純一には何だか見覺えのある顏だつた。
中野はその運轉手を知つてゐると見えて、一寸會釋してから、純一の方をかへりみて、
「裏の方から行かう」と言つた。二人は暫く默つて歩いた。純一は自分の心の昂奮がだんだん高まつて行く事に氣が付いた。
「今の男は？」と、純一は卒然、中野に訊いた。中野はまごついたやうに、一寸默つて純一の顏を見てゐたが、
「あの運轉手の事か？　君も知つてゐる筈だ、あの安田だよ、僕等のクラスメエトに、濱の方から來てゐた、馬鹿に器用な左ぎツちよの男があつたらう、あの男だよ……」
「あの運轉手なら、僕も何だか見覺えがあつた……だが、僕の言ふのは、あの階段の上で會つた妙な男の事だ」

「ア、あの男か、あれはね、井川といふ男だ、何でも表面だけは、西尾宏の乳兄弟だと云ふのだがね、今では西尾友一郎の腰巾着なのだ。妙な顏をした男だらう、馬鹿だか利巧だか、善人だか惡人だか、わけの分らない男だよ」
と言つて、中野は何か思ひ出したやうに、笑つた。
「隨分いろんな男がゐるやうだね」と純一は言つた。
「さうだ、それで社內が二派に別れて、暗鬪があつて、困るんださうだ。殊に今度西尾の手が入つてからは、それが露骨になつてね、西尾派と反西尾派とに截然と別れて、そこへ政黨關係なんかもあつてね、殊によつたら、主筆がやめるやうになるかも知れない形勢だ。どうせ今にすつかり西尾の系統でかたまつちまふのは分り切つてゐるよ……」と一寸中野は默つてから、「僕も早く何處かへ行きたいのだ、何もかも癪にさはるばかりで、實に面白くない……」と訴へるやうに言つた。
「君の苦しい事情は、僕の豫想以上だつた……」と純一は言つた、「大體の事は、敏子から聞いてゐたのだが……」
「敏子？」と、中野が一瞬ある感じを顏に閃めかして、その名を言つた。
「さうだ、西尾友一郎氏の夫人だ、今日、僕はこちらであの人に逢つて、いろいろ話をして來たのだ……」
「今日？……」と中野はますます驚いたやうな顏をして、「今日？　何處で？」と息を呑むやうにして續けた、「何しろ詳しい事を話して聞かせてくれたまへ、これで僕は君の事は隨分心配してゐるのだ。今、君が西尾友一郎ともう東京で會つたといふ事を知つた時から、ただならぬ氣がしだして來たのだ……僕の事も聞いて貰ひたいが、然し、君の方が今差當つて大問題らしい……成程、君が突然歸つて來たのはその譯なんだね、敏子さんに會ふ目的だと見てもいいのだね？」
「さう見て貰つてもいい」と純一は言つた。

「それはいい事をしたね！」と中野は力をこめて言つた、「どんなに喜んだか知れないね……では、あの小波村で逢つたのだね？」

「さうだ」と純一は輕く肯づた、「だが、逢つて見ると一寸意外だつた、病氣だといふので、實は、どんな工合か心配して歸つて來たやうな譯だつたが、逢つて見ると、思つたより元氣で、殊に、丸髷になんかゆつて、大變取り澄ました樣子なので、ちよつとも不幸な人だといふやうな氣がしないのだ……」

「さうかも知れん、昔から勝氣――わるく言へば、虚榮心の強い女なのだから、人から憫れまれるやうな事はしたくないのだ、それだけ當人は苦しいのにきまつてゐる……だが、それにしても、他の者ならば知らず、君に逢つてやはり澄ましていられるのは、餘程どうかしてゐる！　一體、どんな風にして逢つたのだね？」

「戸外で逢つたのだがね、當人は自分一人でやつて來ないで、友一郎の娘といふのを連れて來たのだ、何でそんな事をしたのか、僕には理解が出來ないのだけれど……」

「それは君」と中野は興に乘つたやうに言つた、「自分の感情の抑制のためだつたのだ、なかなか後先きを見る人だものね……だがそれにしても、よく出て來たね、それだけでも買つてやらねばならん。あの人には一面用心深いところがあるかと思ふと、また一面思ひ切つたことをやるところがある。何しろそれだけでも、彼女としては思ひ切つた事だよ。何でも西尾は、毎日とか隔日とかに、自動車で行つてゐるとか云ふからね。ことによつたら、出會したかも知れないよ、途中で……」

「さう、途中で出會つたら、それはいい場面になつたらう」と、反射的に純一は言つた。と同時に、かう言つた自分の皮肉な言葉が、逆に彼の胸にグツと強くこたへて來た。まるで刄物で逆に胸を撫で上げられるやうな痛烈な感じである。あの日野川の長い堤に添ふて、小波村の方へ疾驅して行く自動車の影が、はつきりと彼の眼に浮んだのである。

その自動車の姿と、彼女の丸髷とが、不思議に結び付いて、彼の心を一層いらいらさせた。
二人は警察署の横を入つて、ゴミゴミした裏通りを加茂川端に出て、川端に添うて下の方へ歩いてゐた。
「君はまだ相良君には逢はないだらうね？」と突然、中野が訊いた。
「あア、まだだ、まづ君に逢つてからと思つたものだからね」
「さうか、何ならこれから訪ねてやらうぢやないか、非常に寂しさうだから、君に逢つたら、どんなに喜ぶか知れない」
「相良君の病氣は此頃どんな風だね？」
「この梅雨にはどうかと思つたが、格別ひどくもならないやうで、僕も喜んでゐる」
「それはいい工合だ、ぢや、僕は相良君にと思つて、東京から持つて歸つた繪の本があるから、それを取つて來るから、僕の姉の家まで一緒に行つてくれないか」
「あアいいとも、どうせ社の方は休んだつていいから、話しながら歩かう……」と中野は言つた。彼はかうして歩くのが、いかにも嬉しさうであつた。

九

姉の家では、姉も母親も、純一から淀江の叔父や、南の家の樣子を、いろんなこまかな點まで訊きただして、純一の南の家に行つた事が、まづいい工合に行つたと云ふ風に、喜び合つた。とりわけ母親は、叔父をもつとの事でおこらせてしまふところを、自分の才覺で、うまく取り繕ふことの出來たのが嬉しく、これでやつと一安心したと云つたやうな樣子であつたが、それでもやつぱり不滿さうに、

「こげに早よ戻つて來んで、すぐに南の店の方をしとれば、よかつただねか？」と、くどい程繰り返した。それを梅子が訊いて、

「お母さん。純一だつて、いよいよ南の家に入るときまるなら、その前にいろいろとしたい事もしとかなきやなりませんから、そのやうに苦情を言はずと、好きなやうにさせときなさいな。東京から歸つてすぐ匆々、そんなに追つ立てるやうにするのは可哀相だわ」と、その張りのある眼をうるませて言つた。そして純一の疲勞の目立つて見える樣子に眼を着けて、

「おまへ、着物がすつかり埃だらけになつてゐるのね」と言つた。

「あア、淀江からずつと歩いて歸つたもんだから……」と答へて、純一はそのまま立上つて、二階に上つて、バスケツトの底から、元雄に贈らうと思ふセガンテイニの畫集を取出して、それを持つて下りて來た。

「何處かへ行くの？」と梅子が訊いた。

「これから相良君の家へ行くつもりです」

「さう……けれど、今日にかぎつた事もないだらうにね」

「一緒に行く中野君が、外に待つてゐますから……」

純一がかう言ふと、梅子は顏中に意味ありげな微笑をうかべて、聽き取れぬやうな聲で、

「中野さんが……」と呟いて、ニヤツとしながら、何となく、好奇心をかき立てられたやうに、外の方をのぞくやうにした。それとは反對に、母親のおしまは、苦り切つてゐる——。

純一が外に出て、元來た左手の方を見ると、そこの曲り角に待たせておいた中野の姿が見えなかつた。どうしたんだらうと思つて、右手の方を見ると、そちらのずつと向うの方に、彼の彳んでゐる姿が見えた。彼は道の眞中に立つ

て、西尾の邸宅の塀の上をぢつと見上げてゐたが、純一がそちらへ近づいて、
「待たせてすまなかつたね」と聲をかけると、
「いや」と言つて、中野は我に還つたやうに振返つて、こちらへ二三歩ちかづきながら、
「君を待つてゐる間、僕はつくづくとこの邸宅を眺めてゐたんだがね……どうだ、この塀は？」と言つて、純一の顔を見た。
その灰白色の長い塀には、忍び返しに植ゑつけた硝子の破片が、午後の光に、キラキラと燦めいてゐる。塀の中には、何かの木立がこんもりと繁つてゐて、その梢で、蟬が一四、ヂヂイと鳴いてゐる。
「この宏大な邸宅を見ると、僕のやうなものでも、反抗の血が湧き上らずにはゐない」と中野はそのままその塀について歩き出しながら言つた、「僕が東京から歸つて、もう七八年になるが、その間、この町にいろんな不合理な事件が起る毎に、この塀の中の人間の名前が出なかつた事のなかつたのを知つてゐる……僕は君のやうに、社會主義者に接近はしなかつたが、貧富の問題は、いつも眞劍に考へて來た、その爲めに苦惱もし、憤激もして、社會改造の日の一日も早く來らんことをこひねがつてゐる……しかし、それにはどうしたらいいのか、僕にはその方法がわからない、いな、信じられないのだ。今の社會主義者なんかの說も、僕には何だか空論に過ぎないやうな氣がしてね……」と言つて、中野は一寸默つたが、少し調子を變へて、
「君の考へを聞かしたまへ、僕等とは違つて、君はずつと深いところまで行つてゐたのだから、的確な、しかも深刻な所信が聞かれようと思ふ……」
「中野君」と純一は少し笑みを含んで言つた、「僕は今、そんな事はもう少しも考へちやゐないのだ！さうした抽象的な社會問題などは、もう僕には何の興味もない、それにはその人があり、その時がある。僕は今、もつと痛切な、もつ

と直接的な問題について考へてゐる。そして、それは多分、客観的に見れば、一つの痴愚にすぎないだらうと思ふ。が、しかし、自分を本當に生かすものが、この外にないといふ事を、僕自身、非常にはつきりと知つてゐるのだ」

「…………」

中野は默つて、しづかに頷いたので、純一は更に話し續けた。

「君は生きてゐる、ね、さうだらう、新しい戀人を得て、二人の愛を城として、世間を相手に戰つてゐる、君は今こそ人生の眞實の價値を知つたのだ……僕はむしろ君からこそ、いろんな事を聞きたいと思ふのだ。僕は今朝新聞で君の論文を讀んだ時、君が今誰よりも僕に親しい人だと云ふ事を感じた。僕の今の心持を、くどくどしい說明をしなくつても分つてくれるのは、ただ君ばかしだといふ事がよくわかつた。僕は誰よりもさきに君に逢ひたかつたのだ……」

「有難う、さう言つてくれるだけでも僕は嬉しい」と中野は少し眼を濕ませるやうにして、「君が歸つて來てくれたので、僕もどんなに力づいたか知れない。僕等は今確かに同一の戰線に立つてゐるんだ、僕には君の眞意がピタピタとわかるんだ。僕は君の歸つて來たのが、そのためであつた事を祝したいと思ふね。僕は君が本當に生きる日が來たんだと思ふ、華かに美しくね……僕の場合は、君のよりも暗い、何しろ僕は妻と子供とを犧牲にしたのだから……もつとも、子供は祖父母に世話させるつもりだし、妻は何しろ無教育で、無智で、おまけにひどいヒステリイでね、これ迄自分の方から、出る出ると言つて騷いだ事も度々なんだから、僕はさほどの責任は持たなくてもいいと思つてゐるんだ……」

「……もう結婚してゐる人ださうだね」

「彼女か……さうなのだ、その良人といふのは、やはり教員でね、隨分年上で、しかも俗惡な男なんだ、その上に子供もないので、いつも寂寥と不滿の日を暮してゐたところへ、僕といふものが現れたのだ……」

「同じ學校の先生だつたさうだね、その良人といふのも同じ學校だつたのかね？」

「いや、あの男は違ふ…… 抑もが、彼女が僕の學校へ轉任して來てからの事なのだ、それから一年あまりずつと交際を續けて、大抵の事は一緒にやつて來たんだが、然し、本當に深い關係に入つたのは、今年の春からでね……二人がはじめてこの米子の町の外へ出たのは、玉造溫泉がはじめだ、二晩ほど泊つてね、あの時は實に樂しかつた、愛のあるいとないのとで、こんなにも同じ行爲の與へる快樂の分量が違ふかと思つて、僕は不思議な氣がしたよ。ところで、滑稽な事には、歸りに拂ひをする時、用意の金が足りなくつてね、僕はすつかり悄氣てしまつたよ。ところが女といふものは、そこへ行くとしつかりしたものだね、自分で帳場へ出かけて行つて、うまく番頭に談判して來たよ、何でも自分の銀時計を抵當に置く事にして、それで納得させたさうだが、歸つてからも、自分の手でその始末をしてくれたんだが、實際それには驚いたよ……ところが君、今丁度あれが姙娠して、もう五月になるんだ……月を繰つて見ると、てつきりその時の記念なのだ、溫泉つてたしかに女には効くね……」

中野はかう言つて、ニヤニヤと人の善い笑みをふくんで、いかにも滿足らしく、純一の顏をのぞくやうにした。

純一は何とも答へられなかつた。彼は今この中野の破目をはづした打明話を聞き、その幸福さうな笑ひを見ると、今迄中野の戀愛事件を非常に悲劇的に考へてゐただけに、何だか折角の氣持を裏切られたやうな氣がして、一種の寂寥と失望とを感ずると共に、何だか急に中野の戀そのものが安つぽく思はれ出して、なぜとはなくいらいらして來た。彼は直ぐこの一瞬の自分の心の變化に氣が付いて、これは嫉妬だらうかと自問してみた。この中野の戀にくらべると、自分の戀は何といふ戀だらう！ 中野の女にくらべると、敏子は何といふ女だらう！ 然し、それだからこそ、自分にはそれが尊いのだ、中野のやうな滿足は自分の滿足ではない筈だ、さうは思つたものの、彼はこの瞬間、自分を不幸に感じたことを拒み得なかつた。

丁度その時、二人は溝川を隔てて長く連つてゐる木造の大きな工場の前に出た。工場の大きな煙突からは、濛々たる白煙が吐き出されて、かつきり晴れた中空に棚曳いてゐる。工場の中には、廻轉する機械の轟々たる音響が、耳を聾せんばかりである。

「これは確か西尾の製絲工場だつたね？」と純一は卒然訊いた。

「さうだ」と中野は言つた、「山陰製絲會社……女工だけでも三百人ゐると云ふ話だ、ところが待遇が非常にわるいので、此の界隈のものでは來手がないので、遠く石州や備後あたりまで勸誘員を出して、工女を連れて來るつて話だが、それについちや隨分ひどい話が澤山あるよ。西尾の因業は、雨と一緒で、山陰名物に數へてもいいね。然しなにしろその勢ひは大したものさ、この製絲工場だつて、分工場だけでも、鳥取にもあるしね、蠶種會社、製氷會社、電氣會社、鐵工場に魚市場、それにまだ銀行もある……ここの土地の商工業は、まづ、西尾の獨占と云つてもいい位だね」

「……さうかね……」と純一は重い調子で言つた。

「さうなんだ、癪にさはるが仕方がない」と中野は言つて、それからまた話をもとへ戻して、彼の愛する女について話し出した。彼女がいかに聰明で、いかに熱烈な婦人であるかについて。

話の間に、二人は郊外を横ぎつて、再び加茂川端に出てゐた。橋を渡つて、かの川沿ひの道を突當つたところの石段を二三段上ると、昔はかなり廣かつたその境內は、右手の方からかけて、社のすぐ後までギツシリ二階家が建て込んで、すつかり狹苦しくなつてしまひ、正面の社殿そのものも、長い間手入れをしないと見えて、破風はやぶれ、軒も朽ちて、一見野中の廢祠かと思はれるほどの荒廢のあとを見せてゐた。そして、そのまはりには殆んど立木とてはなく、昔美しく咲いてゐた櫻の樹らしいものも見えなかつた。境內を圍んで連つてゐた田圃は、もう二階家の彼方に

遠ざかつて、昔、麥畑と靑葉との間に埋まつて、急に小さくなつたやうに見えた相良先先の家は、今は、それらの大きな家の間に、とりわけ低く古びて見えた。

中野が先きにすすんで、そこの暗い玄關の前に立つて、案内を乞うた。煤けた、けれど一つの破れ目もなく、丹念に張りつぎをした障子の中は、ひつそりとして、人のゐるらしい氣配もなかつた。少しの間待つてゐると、その障子をそつとあけて、十五六の女の子が、ほつそりした顔を出して、中野の顔を見ると、ニッコリして、默つてお辭儀を一つした。中野も會釋して、親しさうな調子で、

「秋子さん、東京からね、今度龍田純一君が歸つて來たから、一緒にやつて來ましたつて、兄さんにさう言つて下さい、今日は工合はどんな風ですね？」と言ふと、女の兒は言葉寡なに

「エエ……」と答へたきりで、純一の方を一寸眩しさうに見て、少し顔を赧くして、またお辭儀をして、そのまま顔をひつこめてしまつた。肩のほつそりとした、色の白い、眉毛のすつきりとした、いかにも上品な顔立の子で、その澄んだ眼元などが、純一には亡き相良先生の俤を痛切に思ひ起させた。昔、ここで歌の會などのあつた時分、ほんのまだ三つか四つにしかなつてゐなかつたあの女の兒に違ひない。

妙にシンとして、何だか不安なやうな氣のする空氣の中に、奥の方から、かすれた咳の音が二つ三つ續いて聞えた。やがて靜かな足音がして、開かれた障子の間の、ほの暗いところに、白い人の姿があらはれた。默つてそこに立つて、二人の方を見おろした。

「やア……龍田君が歸つて來たものだから……」と中野がまづ聲をかけた。

「龍田君……」と言つて、純一の方を凝視した元雄の眼には、物を訝しむやうな異樣な輝きがあつた。その元雄の顔は昔はむしろ圓味を有つてゐたのが、細長くなつて、眼だけが非常に大きく見え、以前は長髪にしてゐた美しい髪を、

今は五分刈に綺麗に刈つてゐるのが、何だか痛々しく、肩の尖りが際立つて眼についた。
「ほんとに久し振りで……三人が逢つた」と元雄は半ば獨語するやうに言つて、自分の書齋へ二人を導いた。
そこは昔から元雄の書齋であつたあの狹い部屋で、今ではもと障子の入つてゐたところをすつかり壁にして、正面の方が一間の窓になつてゐた。そして、その窓障子はぴつたり閉め切つて、厚い白の窓掛けを一杯に曳いてゐるので、部屋の中は薄暗くて、陰氣であつた。部屋の一隅には、六號や、八號や、二號の油繪のカンヷスが重ねて立てかけてあり、小さな棚には、パレットや刷毛などの繪の道具を一杯に挿し込んだ壺などが並んでゐた。
女の子の持つて來た色のやけた麻の夏蒲團に二人がすわると、元雄も机の前にキチンとすわつて、
「君もたうとうお歸りになりましたね……」と、胸を病む人に特有の、柔かい、殆んど物悲しさうな聲で言つた。
「君も御病氣のやうに見えますが……」
「病氣のやうに見えますか、別に身體には病氣はないのですが……」と純一は答へたが、何だか自分の心の底まで見透されでもするやうな氣がして、自分の顏色を不氣味に感じた。
「さうですか、僕はてつきり御病氣だと思つたのです……一目見て……そのためにお歸りになつたのだらうと思つたのです」
「相良君がさう言ふと」と中野も純一の顏を見て言ひ出した、「僕も先刻、社ではじめて君と久し振りで會つた時には、一寸凄いやうな印象を受けたよ」
「何だか普通でないやうなところが見えますよ、君自身氣が付かないで病氣なのかも知れませんよ……もつとも、これは僕自身が病人だから、とりわけさう見えるのかも知れませんが……」
「多分、歩いて淀江の方から來たので、疲れてゐるからでせう」と純一は答へるより外はなかつた。

「どうぞらく〱にして下さい、部屋が蒸し暑いでせうから、窓を開けませう……」と言つて、元雄は立つて、机越しにその青白い手を伸ばして、窓掛けを片よせて、障子をあけた。その少し身を傾けた元雄の瘦せ細つた身體つきを、ぢつと見ながら、
「此頃は、身體の加減はどんな風ですね？」と純一は訊ねた。
「梅雨の間ぢゆうは、ずつと寢ついてゐたんですが、この二三日は、かうして起きられるやうになりました。」と、元雄は座に着きながら、穩かな調子で言つた、「然し、夕方になると、きまつて高い熱が出て、苦しくなるのです。少しでもよくつて、起きてゐられると、繪がかきたいのですが、すぐ疲れて……自分ながら意氣地のない話ですが……仕方がないから、詩を書いてみたりしてゐます」
「あア、先達てはお手紙を有難う」と純一は言葉を改めて言つた、「いつ頃から詩を書いてゐたんです？ 僕はこれ迄君の詩を見た事はなかつたので、はじめは一寸意外でしたが、悲痛な中にも超脫した心持が出てゐるのに感動しました、成程君が詩を書いたら、こんな詩が出來るだらうと思つたのです」
「いや、ほんの恥かしいもので……それより、君の詩集をいただいて、どんなに嬉しかつたか知れません。君の詩を讀み出してから、もう自分の詩は出來なくなつてしまひました。いつも枕もとに置いて讀んでゐるんです……」と言つて、元雄は元氣よく立上つて、部屋を出て行つた。
「さうだ、君の詩集には僕も大いに動かされてね、すぐ手紙を書いて詳しい感想を君に知らせてやりたいと思つたんだが、何しろあの頃は例の渦中にあつたもんだからね、思ふに任せなかつたが……二人で一緒に讀んでは、君の噂をしてゐたんだよ、彼女も愛讀者なんだよ……」と中野は囁いた。
「世評はどうだつたかね、詩壇でも大分問題になつたらう？」

「いや、殆んど問題にはならなかつた……」と純一が言ひさしたところへ、元雄が詩集を持つて座にかへつた。
「あんまり手に持つて讀んでゐたものですから、もうこんなに、表紙が切れてしまひました」と言つて、元雄はその假綴の本の背中を二人に見せた。
「けれど、この題は僕には何だか強くこたへすぎます、何だか身が痛いやうで……どうしてこんな題をつけたんです？」
「裂けた青絹……それが僕の生涯の象徴だとは思ひませんか……あの絹を裂くときの音……僕の詩はあの音にすぎないんです……」と言つて、純一は默つた。
「成程、そんな意味ですか……」と元雄は言つて。純一の顔をぢつと見た、「さう言へば、全體の調子が隨分悲觀的ですね。あんまり絶望的なので、僕ははじめは驚いた位でした……もつと明るい、何か調和的なものが見出せないものでせうか？たとへば、信仰の微光と言つたやうなものが……」
「それが僕には見出せなかつたのです、この數年間といふものは……僕は實際、或る意味で病人だつたかも知れません」
「然し、君のあの詩の基調は、もう單なる悲觀主義といふより、むしろ虛無思想ぢやないかと僕は思ふがね」と中野が口を挾んだ、「あの中には、弱い消極的なものではなくつて、隨分積極的な強い力が動いてゐると思ふ……それがやつぱり一種の信仰ぢやないかしら？……」
「信仰とは言へないだらうが、悲觀に徹し、絶望に徹したところに、一種の寂光土とでも言はうか、或る超脱的な絶對の境地がひらけはしないかとはおもふ」
「成程、さうだね、一切のものを否定したところに、絶對の世界が生れ、そこに安心立命の境地がひらけるといふ事

は頷ける。だが、そこまで行くには、かなりの强さが要るとおもふ。もつとも、君は弱いやうには見えても、實は、一面非常に强く烈しいところがあるよ……そして、それが詩にもよく出てゐると思ふ」

「さう……龍田君にはさういふところもありますね……けれど、僕は今の心持では——多分病氣からくるのかも知れませんが——この龍田君のある詩に現れてゐるやうな烈しい反逆的な思想感情は恐ろしいのです」と元雄は言つた、「今僕は信仰の微光と言ひましたね、僕のやうな境遇に陷つてゐる人間にとつては、破壞的な否定的な思想は堪へられないのです、何かによりすがらずにはゐられないのです。人生をそのままに肯定して行きたいのです、强ひて生を貪りたいとは思ひませんが……弱りながらも衰へながらも、とぼとぼと灯つてゐる自分の生命に對する愛護の念が、一層痛切になつて、生きてゐるといふ、この事實の有難さが、しみじみと感じられてくるのです。いや、苦しければ苦しいほど、生命の意識が愈々はつきりとして來て、それだけ愈々神の恩寵といふものが感ぜられて、何とも言へない感謝の心持が湧いて來ます。そして、靜かにこの與へられた生命を支へて行かねばならない、何處迄もこの試練に堪へて行かねばならないといふ氣持になつて來ます。たつしやな方から見れば、理解の出來ない事かも知れませんが……もつとも、僕も最初、こんな風に不治の病にとりつかれてしまつた事がわかつた時は、何しろ同じ風に、旣に兄が死んで行つてゐる事實があるのですから、ああ、愈々自分の番が來た！　といふ氣がして、一時は絕望的な、自暴自棄の氣持になつて自殺なんて事も考へたのですが、いや、これではならぬ、しつかりしなくつちや……と思ひ返したのです。そして、その折り僕を引き止めてくれたのは、藝術でした……藝術に對する愛と、それから、家族に對する義務といつたやうな心持とでした……」と言つて、元雄は一寸寂しく笑つたが、默つて聞いてゐる二人の顏を見ると、また言葉を繼いで、「知らない人からみれば、隨分みじめでせうが、それでも僕はかうして生きて行くことに、十分感謝もしてゐるし、意義をも感じてゐます。然し、これは龍田君に對する抗議ではないのです、龍田君の昔の詩には、

僕のこの氣持に近いものが十分あるやうに思ひましたし、最近の詩だつて、世俗的な生活を強く否定しようとする氣持か、隨分僕には慰めにも勵ましにもなつてゐるのですから……ただ、こんな事を言つて見るのも、病人のわがままにすぎないでせうから、許して下さい」

「いや、そんな事はない」と中野が言つた、「僕も君の考へには同感する、ただ我々はいろんな眼前の出來事に忙殺されて、根本の生命の意識を忘れがちなのだが、君は嚴肅な境涯に立つて、ぢつと靜觀してゐるから、我々よりもずつと純粋になれて、生といふ大きな事實を直視し、信仰できるやうになつたのだ」と言つて、純一をかへりみた。

「僕もいつかはそんな氣持になれる事もあるかも知れませんが、僕は相良君よりずつと我執の強い、業の深い人間だから、或ひは到底救はれない人間かも知れません、それに悲しいことには、僕は藝術の愛をすら失つてしまつたのです……」と純一は言つたが、彼はその瞬間、三人それぞれの生きて行く方向を、はつきりと眼に見るやうに見た。そして、孤獨の影が心にさして來た。もう自分は語るべき時ではないのだと彼は感じた。そして、一寸默つてゐたが、急に思ひ着いたやうに、元雄の顏を見て、

「今日は君にいいものを持つて來たのですが……」と言つて、彼は座の後から、風呂敷包みを取り寄せて、その中からセガンテイニの畫集を取り出して、元雄の手に渡した。

「セガンテイニの畫集です、君のところにもあつたかも知れないが、これには評傳もついてゐるし、版も普通の本よりいいさうですから……多分君には氣に入るでせうと思つて……」

「ああ、セガンテイニ!」と言つて、元雄はそれを受取ると、その卵色の包紙を、珍らしさうに眺めながら、「さうですか、どうもわざわざ有難う、僕はセガンテイニは好きなんです。たしかセガンテイニには、『信仰によつて慰められる悲しみ』といふ畫がありましたね……」と言ひながら、心から嬉しさうに、その頁をめくりはじめた。

てゐたんです、本當に有難う」と言ひながらも、その手はもう、はじめの二三枚目のところにあつた『信仰によつて慰められる悲しみ』といふ畫のところを開いてゐた。

その畫は、日沒後のぼんやりした色彩でゑがかれてゐて、土地一面を蔽うてゐる雪が、溫かい西空から照らされて、溪間の方へは東の空の深い紺碧の反映が落ちてゐて、背景の山々は、陰影に靑く包まれてゐる。太陽はもう暫く前に、その山の後に沈んだのだ。高い空の方には、落日の餘光に金色に染められた大きな雲が浮んでゐるが、それは複製ではつきりした輪廓は現はれてゐない。そしてその雲の前には、天使の群れが、はつきりと影を印してゐる。そして、下の一面の雪の中からは、わづかに偃松のむれが、ひとり生々と濃綠の色をあらはしてゐるが、それは多分、畫家が希望なり慰めなりを象徵しようとしたものであらう。寂しいセガンティニの畫の中でも、殊に身に食ひ入るやうな寂しさと、寂寥の中の何とも言へない力との感じられる畫である。

「ああ、久しぶりにこの繪を見ます、實にいい繪ですね……」と言つて、二人の方を見上げた元雄のやはらかな眼には、淚ぐましい輝きが見られた。

「アルプスの寂しい雪と氷との中で、これをかいたのですね……アルプスの孤獨な畫家……セガンティニは本當にいいですね……本當に有難う。かうして、この繪を見てゐるだけでも、僕の心持は高められ、淨められるやうな氣がします。これからどんなに、僕の寂しい生活を慰めてくれるか知れません」

「そんなに喜んでくれれば、僕も嬉しいのです」と純一は言つて、畫家なればこその元雄の感動を、ぢつと打ちみまもつた。

その時、勝手の方から、洗髮をそのまま低くしつかり卷いて、小ざつぱりとした樣子をした相良先生の奥さんが、

そつと入つて來た。

「これはよくいらつしやいました」と中野に丁寧に挨拶をしてから、その傍にゐた純一の顏を、にこやかに眺めて、「こちら樣は龍出純一さんでいらつしやいますさうで……ほんとにお變りになりましたので、すつかりお見外れ申してしまひました、隨分長らく東京にゐらつしやいましたね、東京では、弟がいろいろお世話になりまして……」と、奧さんは、ゆるやかな調子で、挨拶を述べたり、お禮を言つたりした。かういふ言葉を、純一は痛ましい思ひで聞いた。彼には、この一人の婦人が受けて來たいろいろの不幸に對して、何と言つていいかわからなかつた、また、その場に適當な、世馴れた澤山の言葉も直ぐには見出せなかつたので、極く不器用に、簡單な挨拶しかかへせなかつた。そして、挨拶を返しながら、彼はその奧さんの粗末な身なりや、手束ねの髮や、その窶れた顏付などから、まるで尼のやうな感じを受けた。

「あの、それからね、嫂さん……」と言つて、奧さんの方に向いて何か言はうとした時、元雄は急にコンコンと續けざまに空咳をはじめた。それを見ると、奧さんはよく氣の付く看護婦のやうに、直ぐ立上つて、部屋を出て行かうとすると、その後から元雄も立上つて、

「いや、僕が行きますから……」と言ひながら出て行つたが、部屋の外で、

「元雄さん、もうお藥の時間ですよ」と言つて、その後から、奧さんが、何か小聲で注意すると、あア、あアと元雄の返辭をしてゐる聲が聞えた。

純一と中野とは顏を見合せた。あまり長居をして、病人を苦しめてはならないといふ思ひが、二人の眼には語られた。

元雄が座にかへつてくると、

「君、大分疲れたらしいね、つい長居をしてしまつてすまなかつた、今日はこれで失禮しよう……」と中野が言ひ出した。

「いや、さうでもない、いつもこんな風だから…… いつも今頃は熱が出るのだが、今日は有難い事には、大した事もない」と言つて、元雄は一方の手首をそつと握つてみながら、「お差支なければ、もつとゐてくれませんか、僕は今非常に寂しいので……」

二人は元雄のさういふ心持も分るし、自分たちも、もつと話したい事が澤山あるし、殊に純一は、まだ何かしら肝腎な事が言ひ殘されてゐる心殘りを感じたのだけれど、今迄ゐた事さへ心なき業に思はれたので、二人はまた近々に來るからと言つて立上つた。

「さうですか……ではまた訪ねて下さい」と、元雄は殘り惜しさうに言つたが、急に純一の方に眼を向けて、

「龍田君は、これからどうするつもりなのですか？」と心配さうに訊いた。

「これからと言ふと……」と純一は呟くやうに言つた、「まだ自分にはわかつてはゐないのです……なるやうになるでせう、成行次第です」

「それもさうでせうが……」と言つて、元雄は腑に落ちないやうな顏をしたので、純一は、

「いづれ近いうちにまたお訪ねしますから、その時に……」と何氣ない調子で言つた。

一種佗しい氣持で、二人は元雄の家を出たが、石段を下りて、通りの方に出て行つてからも、暫くは、中野も純一も、何とも言はなかつた。

河の向うの町家の壁には、その下の白つぽい石垣のところまでも、もうぽつと夕日がさして、その日の色が、まるで秋のやうな感じがした。二階家の屋根の物干臺には、白い干し物を取り入れてゐる女の影も見えた。純一は一寸足

をゆるめて、左手の方を見やつた、そちらの方へわかれてゐる路には、ややあつて人家の絶えたところから、やはり路上に夕日が黄色く落ちてゐて、兩側の靑草の間に、もうすつかり乾き切つたらしい埃の色をはつきり浮べてゐた。純一はその方をぢつと眺めやつて、これが昔自分が敏子と一緒に歩いた路だつたのだと思つた。

「君、これからどうするかね？」と中野が卒然として訊いた。純一はハツと我にかへつて、そこではじめて中野と顔を見合せた。

「どうするつて……なるやうにするんだ」とかう答へて、それがつい今元雄に答へたのと同じ答へである事に氣が付いて、

「今日かね？」と問ひ返した。

「僕のところへ寄らないか、隱れ家ができてるんだ、博勞町の裏の方だから、さう遠くはないんだが……」

「有難う、だが今日は大分疲れてゐるから、これで失敬しよう、これからはいろいろ話もしたいんだし、多分いろいろと君を煩はさねばならぬ事もあるだらうから……」と、純一は意味深い眼で中野を見た。そこには、中野の會心の頷きがあつた。

中野に別れてから純一は、敏子とのこの次ぎの出會ひについて考へた。敏子は明日こちらに歸つてくるやうに言つた、これから自分の歸つて行くあの姉の家の直ぐ前の家に歸つてくるのだ。あんな風に別れたにもかかはらず、彼は明日いかにしても彼女に會ひたいと思つた。姉に聞いた西尾家出入の女を通してでも、さういふ機會をつくらうかとも考へた。いろいろな方策が、次々に彼の頭に浮んで來た。けれども、次ぎの瞬間には、直ぐ彼はそれらを打ち消してしまつた。かういふ狀態になつて、さうした姑息の手段をとつて行動するといふ事が、卑怯にも、またあまりにあさはかにも思はれたし、殊には、あの西尾家のまはりをウロウロとうろつき廻るやうな遣り方は、彼の趣味としても、

また彼の矜持としても、到底堪へ得られる事ではなかつた。その上、彼女は、この米子では到底會ふことは出來ないだらうといふ事をほのめかしてゐたではないか……

彼は、今、自分の踏んで行くべき一條の路が、はつきりとその前に横たはるのを見た。

この外に路はない——

彼はその一條の路のかなたに、一人の男の顔を見た、「ハハア、歸つて來てゐるナ」と言つたやうな、さりげない凝視を投げたかの男——西尾友一郎の顔を見た。

「よし」と彼は自分に言つた、——

「兎に角、おれはこの際、ここで、落ち着くことにする必要がある！」

十

兎に角、純一は、南の家の中心人物になつた。彼は相良元雄を訪ねた翌日、米子から淀江に歸つて行つて、南の家に暮すことになつた。無斷で米子に行つたのが、我儘な至りだと、大變立腹した叔父の浩藏も、純一が歸つて來て、南の店の帳場にすわつたところを見ると、わるい顔一つしなかつた。

「おまへは倦きツぽい。親父の淸太郎が丁度おまへのやうだつた。だがナ、人間は倦ツぽいのが一番失敗のもとだでナ、人間はもう、地味に地味にと心がけて、一つ商賣にとりついたら、もう一生商賣變へをせんようにして、手堅く世渡りをせないけんぞ」と、彼は何かにつけて、亡き淸太郎を引き合ひに出しては、純一に說法をすることを忘れなかつた。浩藏は、每日墓參りの往きかへりには立寄つて、何かと世話をやくのであつたが、自分ばかりでなく、何かといふと、娘の千枝子を使によこしたり、小さな子供をつけて遊びによこしたりした。それが叔父に何かのおもはく

があつての上である事は、純一には十分推察せられた。こんなにして、南の家一軒のために、いろいろ氣をつかつてゐる叔父の心根を考へると、氣の毒にもなつたが、その遣り方が兒戲に類してゐるやうに思はれて、彼は苦笑せずにはゐられなかつた。

南の家、南の家と、叔父の口癖のやうに言ふこの南の家は、代々不祥のつづく家であつた。俗に川向と呼ばれる此の西原では、まづ最も古い家の一つであるこの家は、もう何代も前から、この川端の、大橋のたもとに建つてゐた。先々代までは、何代も引續いて、この界隈でも名だたる旅籠屋であつたが、丁度維新前の、何となく世間が物騒になつて來た時分のことである、或る晩、遲く泊り込んだ一人の若い侍があつた、凄いほど色の白い、眉の濃い、苦み走つた美男であつたが、その低い沈んだ聲には、何だか不氣味な響があつた、雲州藩の藩士だと言つたが、中庭に向いた二階の十疊に通されると、こころよく晩酌を傾けて、そのまま寢に就いた。ところが、翌朝いつまでも起きて來ないので、下女が伺ひに行つてみると、十疊の間の眞中で、腹十文字にかき切つて、見事、割腹して突ッ伏してゐた、そして鮮血は靑い疊を紅に染めてゐたのだ。その血染れの疊は、長いこと濱に棄てられてゐたといふ。それからケチがついて、間もなく宿屋をやめて、家をすつかり改築して、酒屋になつたが、酒屋になると間もなく、先々代は頓死してしまひ、その妻は底翳で眼がつぶれて、どんなに療治をしたり、神佛に願がけしても何の效もなかつた、それが今の盲目の婆さんなのである。そのあとを承けた若夫婦の苦心は尋常のものではなかつたが、その上にも、たつた一人の息子が少し足りない方だつたので、それを苦にして、先代が氣が變になつて、まだ若い盛りに死んでしまつた。かうして若寡婦になつた今の叔母は、酒屋をやめて――それは丁度純一の父の淸太郎が、米子で酒屋をはじめた時分である――あたらしく質屋をはじめたのであるが、その愚かな總領息子も、二十五六の時に、馬に乘つて、大山領の方へ遊びに出かけた途中で、馬から落ちて、それがもとで死んでしまつたので、それ以來、女手一つでやつて來て、や

うやく次郎を養子に貰つたとおもふと、その次郎もまた夭折してしまふといふ不幸續きで、どんな不幸も一向不幸にこたへぬやうな不思議な性格と、八十幾歳になる今日まで、殊にもう何十年と日の目も見ないでゐながら、病氣一つした事がないといふ程、ねばり強い生活力とを持つてゐる盲目の婆さんは兎に角として、二十あまりの時からずつと寡婦を立て通して來た今の女主人は、世にも稀らしい不幸な人と言はねばならなかつた。

ところで、純一は、かうした南の家に入つて、愈々そこに身を託することになつた。彼はこの家にひとまづ落着かう、凡てはそれからだと思つたのだ。けれども、叔母や叔父の浩藏は、彼を旣にこの家の中心人物にしてしまつた。浩藏などは、この盆がすんだら、早速入籍の手續きをして、親類を呼んで披露の宴をひらかうと言つた。そして、そのあとで、

「だがナ、純一、それまでに、ウンと精を出して働いて、叔母さんにおまへの心底を見せてあげにやいけんぞ」などと念を押したりした。

殆んど物を考へるひまもないやうな忙しい生活がはじまつた。彼はまづ、その新しい生活に慣れなければならなくつた。朝は六時頃起きて、掃除をしたり、いろいろの雜用をもした。客は遠方から、暑くならないうちにとて、隨分早くからも來るので、午前中は一番多忙であつた。品物の値ぶみや客の應待などは、一々叔母がしきつてやつてゐたが、純一はいつもその傍に引き据ゑられて、着物の疊み方を敎はつたり、それをキチンと疊んだり、またあとでそれを一々帳簿に書き込んだり、出し入れの品物を、紙に包んで、盲目の婆さんのひねつた觀世撚の紐で十文字にからんで、藏の中に入れに行つたり、入つてゐるのを出して來たりしなければならなかつた。

質藏へは、奧座敷からすぐ、庭樹の生ひ茂つた中庭と便所との間の廊下をつたつて行けるやうになつてゐた。足の裏の冷たい石段を二段ほど上つた入口の板の上は、もう長い間の足の跡で、少し窪んでゐる位であつたが、純一は每

朝そこに立つて、その丈夫な金庫のやうな鐵の大戸をひらいては、晩方になると、またピッシャリ閉めて、錠前をおろした。そして、晝間は、大戸の內側の網戸だけを開け閉てしては出入りした。藏の中はいつもやや濕つぽくて、こんな夏の最中でも冷や冷やしてゐた。空氣は妙に重たく澱んでゐて、一種異樣な黴くさいやうな陰氣なにほひが、ぼんやりと漂うてゐた。二階にも階下にも、幾列かの棚がしつらへてあつて、五六段もあるそれぞれの棚の上には、一杯に積み重ねられた質物の包みが、通路に向いた方に、そのなかみをあらはしてゐて、紅、藍、紺さまざまにとり合せられた色彩が、通路の一方についてゐる土藏づくりの明りとりの窓からさしこむ弱い光線の中に、ぽつと浮び出て、一つ一つの包みからまるで白い舌のやうにだらりと垂らした札が、壁寄りの暗い方では、殊に眼に立つた。純一は一日で、村別になつてゐる質物の區分を覺えて、その札を讀み合せることに慣れた。それで叔母は、

「純一はなかなかさとりがえゝ」と言つて、子供でも賞めるやうに彼を賞めた。

然し、彼の仕事は、さうした店の用事ばかりにとどまらなかつた。よく働く番頭の常七がゐないので、時々は裏の畠に行つて、茄子に水をかけてやつたり、馬鈴薯についてゐる蟲を取つたりもしなければならなかつた。砂地なので、畠の物には隨分手數がかかるのだつたが、裾の短かい着物を着て、跣足になつて、ほてつた砂を踏みながら、その砂に照りかへす太陽の直射を、次郎がかぶつてゐたらしい、古ぼけた經木眞田の帽子に避けながら、畠仕事をしてゐる時が、然し、彼にとつては、一番自由な、心のやすまる時だつたので、彼は家內の者が晝寢をする晝下りの一番暑い時間を、さうして働くとも、考へるともなく、一二時間も費した。絕對に自分ひとりきりになれるといふ事が、今彼には、どんなにか有難いことであつたらう。

純一が米子から歸つた日から四五日して、次郎の妻のおふでが、二つ位になる女の兒を子守に負はせて、その實家から歸つて來た。叔母からおふでをひき合はされた時、純一は叔母の顏付に、妙な暗い色の現れたのを見のがすこと

が出來なかつた。けれども、何處か感じの鈍さうな、豐かな肉つきをした、色の白い中柄のこの女は、そんな事には一向氣が付ないらしく、ただ單純な調子で、純一に挨拶をした。都會の女を見馴れてゐた眼には、あまりに間伸び間伸びした、この他奇もない若寡婦を、目の前に置いて見てゐると、純一は何となく妙な苛立たしさを覺えるのだつた。彼女は店の方のことなどには、何の關心をも持たないで、ただ子供の世話にばかりかまけてゐて、忙しさうな叔母の樣子を見ても、わざとかと思はれる程、氣を引かれない樣子であつた。そのダルな、だらけた立居振舞が、いかにも子供を生む道具と云つたやうな、動物的な感じを起させるあとから、この女はほんの少し前まで人妻であつたのだといふことが、奇妙に強く意識されて、そのねばねばした白い肥つた肉體が、純一にはいかにも暑苦しく感じられてならなかつた。

彼はおふでとは、殆んど話などしたくはないのであつたが、おふでの方では、こちらの氣分などには頓着のない調子で、まるで自分の良人でもあるやうに、ぞんざいに口をきいて、或時などは、

「純一さん、すみませんが、政子を一寸抱いとつて下さい、わし、ほし物を入れに行つて來ますだで……」と言つて、子供を連れて來て、純一の見てゐる前で、その子供の前をひらいて、おしめを一枚一枚ほどいて、新しいのに取りかへたり、自分の胸からはみ出してゐる乳房を、ちらづかせながら、その子供を純一に渡したりしたが、乳呑兒の酸つぱい小便くさいにほひ、乳くさいにほひとともに放たれる、この白く肥つた女のにほひが、純一には頭にこたへて、不快な氣持になつた。そのとき丁度叔母が通りかかつて、明らかに一種の憎みのやうな眼で、おふでを睨んで、

「留子はわしの方におくれ」と言つて、純一に店の方へ行くやうに眼顏で知らせたりした。

こんな風なおふででも、廣田の浩藏には、何かしら壓迫を感ずると見えて、彼が來ると、いつも子供を抱いて、喫茶菊などの咲いてゐる質藏の裏の中庭の方へ逃げ出して、浩藏の行つてしまふまで戻つて來ない事が多かつた。そん

な時には、叔母と浩藏との間には、よくおふでの蔭口が出た。殊に浩藏は、
「早よ彼女を、どげにか始末せんといけんナ」などと言つた。叔母の方では、別にそれに對して眞面な返事をするのでもなかつたが、叔母がおふでと純一との接近する事を好まない事だけは、はつきりわかつてゐた。けれども、おふでには、叔母のそんな心持さへ通じないらしかつた。

毎日夕方になると、家族のものは、湯殿で行水をしたが、それには叔母のいひつけで、いつでも純一がまつさきにさせられた。丁度おふでが歸つて來てから二三日目であつた、純一がいつものやうに、湯殿の中で、大きな盥の湯をザブザブかけては、身體を洗つてゐると、そこにツカツカとおふでが入つて來て、
「純一さん、背中を流してあげませう」と無雜作に言つた。純一は思はず赤面して、
「いやもう……」と言つてことわらうとしたが、おふでは、
「ナーニ……そげに遠慮なさらんでも……」と言つて、彼の手から手拭をとつていきなり後にまはつてゴシゴシと背中をこすりはじめた。純一はそれが田舍の風習とはいへ、あまりに無遠慮なことに思はれて、默つてうつむいてゐたが、彼女は別にそれに氣をかけるでもなく、一通り背中を流してしまふと、
「もうよございますか……」と言つて、まだ何か言ひたさうであつたが、媚びるやうな笑顏をのこして、あちらへ行つてしまつた。それは妻が良人に對してするのと、少しも違はなかつた。多分彼女は次郎に對して、こんな風にしてゐたのに相違ない。そして、自分が次郎の代りになつてくれるものと定めてゐるに違ひないと、純一は感じた。そして、その日、彼女が浩藏に何か苦情でも言はれたらしく、壁のところで、子供に話するやうに、
「お世話やきの叔父さんだ、わしがこの家にをられんように仕向けてゐなさる、純一さんにあんまり話はせんがええのだと……」呟いてゐたのを思ひ出した。純一は叔父の腹中を考へると、彼女が可哀相な氣がしたが、かうして夫婦

の間柄かのやうに、慣れ慣れしく自分に仕向けてくる彼女の遣り方も、彼の心持としては厭はしかつた。
浩藏は、おふでにはさうした厄介者扱ひを露骨に見せたが、孫は可愛いとみえて、
「あア、ええ兒だ、ええ兒だ、かはいさうにお父さんがなうなつたナ……」などと言ひながら、おふでの手から抱きとつて、あやしたりしたが、子供はすぐワーッと啼き出すのだつた。純一はこれからどんなにこの子供の啼き聲に惱まされなければならぬかと思ふと、少からずウンザリした。
ただひとり、かうした目の明いてゐる人達のゴタゴタとは一切沒交渉で、たまに手さぐりで便所に通ふ外は、朝も晩も、柱時計同樣に、年中すわつて、觀世撚をよつてゐる盲目の婆さんが、彼には一番煩はしくない相手であつた。彼は時々、疲れた折りなどには、この婆さんを相手に、無意味な對話をするのを好んだ。このお婆さんの外に、彼にとつて氣のおけない相手は、裏の方の出入の漁師の家から手傳ひに來てゐる、常七の從妹だといふ小娘だけであつたが、これは朝來て夜になると歸つて行つた。
或る朝、まで朝飯もすまないときに、番頭の常七が自轉車に乘つて歸つて來た。丁度店にすわつてゐた純一の顏を見ると、彼は、
「ハハア、これが……」といつたやうな顏をして、愛憎笑ひをした。
彼は背の低い、小肥りのした、眼の大きな男で、年はもう三十に近かつた。彼はその時、親父の病氣もお蔭樣で大分持ち直しましたと言つてゐたが、その日の晩に、急に改まつた調子で、女主人に向つて、自分ももういい歳ではあるし、今度はどうも家を持たねばならない破目にもなつたので、この際一本立になつて、何か商賣でもやつて見たいとおもふから、お暇をいただきたいと云ふ意味を、婉曲に持ち出した。叔母ははじめしきりにそれをなだめて、小波村の一件ならば、こちらで何とか解決の道をつけてもいいがとまで言つてゐたが、たうとう、たつてと言ふなら仕方

もないが、せめて純一が馴れるまで見てやつてくれないかと言つた。常七もそれを承知して、
「どうも飛んだ事をしでかしまして、すみません」と言つて頭を掻いたので、叔母も笑つて、仕方がないといふやうな顔をした。
一體、帳簿の方は、一切常七が見てゐたので、その引渡しの都合もあり、それにもう盂蘭盆もここ一月のうちに迫つてゐるので、一通り帳簿を整理しなければならないので、彼が歸つて來てからは、ますます忙しくなつた。純一は店で常七と差し向ひになつて、朝から面倒な帳簿の整理をやらねばならなかつた。
常七は麻でこしらへたジンペといふものを着て、白い腰巻を巻いてゐたが、肥つてゐるので、人一倍暑いと見えて始終團扇をバタバタつかつては、ジンペの前から、胸毛の上の方に風を入れてゐたが、それでも汗はだくだく流れてゐた。彼は朱筆を耳にはさんだ儘、純一に讀み上げて貰つて、器用に算盤をはじいたり、利子を計算して、流質の判を押したりした。
かうして差向ひで仕事をしながら、二人はいろいろな事を話した。常七は東京の方の樣子をいろいろ訊いて、
「何かあつちの方に面白い事はございませんかナ……」と言つてみたり、
「わしも暫く大阪へ行つとりましたが、やつぱり國の方が氣がらくで、暮しええですから、あんたもお歸りになつてよろしかつたで……」と言つたりした。
常七の志望は、菓子屋になりたいと云ふのであつた。彼はこの家に入る前、大阪の方へ行つてゐた時分、西の宮で上菓子を習つてゐたりしたので、その方では大分抱負があるらしく、或時など、何處からか煎餅を燒く型を持ち出して來て、それをひつくり返しながら何かを考へてゐることもあつた。
彼は萬事几帳面な、一見實直さうに見える男であつたが、いつかの和平の話を思ひ出すと、人は見かけによらぬも

のだと思つて、純一は彼のまるまるした顏も、面白くながめられた。多分、その菓子屋の店に、その女がすわるといふ手筈なのだらう、たうとう女の言ひ分通りになつたのだと思ふと、純一は常七が何となく愛嬌人物に思はれて來た。ところが常七は、だんだん純一と心やすくなると、かういふことを言つた、

「あんたはどうも女難の相がありますよ。いや、どうして、わしにはそれがよくわかりますよ。早い話には、おふでさんだが、亡くなられた次郎さんより、あんたを好いとりますぜ。ナニ、あの眼付きッたら、見たこともねえ眼だ、始終あんたを追ッかけとりますだ。だが、おふでさんの執念も、こりや駄目の皮ですかナ……かういつちや惡いが、亡くなつた若旦那も、おふでの自墮落にも困ると言つとられましたからナ。わしが睨んだところぢや、ここへ來られる前に、何かありましたナ、あんな風な人に限つて、何かあつたもんですよ」と常七は確信するやうに斷言して、「あんたに据膳をしたいですよ、何しろえらい男好きですでナ……だが、まゐつちやいけませんぞ、一時の事と思つても、さうなると、女ッてものはなかなか、くッついて離れやしませんからナ、まるで蛭みたいなもので……」と言つて、我ながらうまい事を言つたものだと云つたやうに、常七は笑つたが、純一はその言葉の中に、彼自身の告白を讀み取つて、一層の可笑味を覺えずにはゐられなかつた。

浩藏の口やかましいのには、常七も永年うるさい思ひをしてゐたものと見えて、純一が浩藏に何とか說法されたあとなどは、しきりに同情して、氣の毒がつた。

「かう言つちやわるいが、あの旦那は、少し立入りすぎなさるでナ……」とも言つた。そして、純一がもつと慣れて來たら、一々口を差出させないやうに、ちやんと定りをつけた方がいいなどとも注意した。

かういふ風にして、殆んど二週間近い日はたつた。その間、純一は人から見れば、質屋の仕事に餘念もないやうに見えた。かうした思ひ切つて散文的な生活の中に、どうして彼は、甘んじてじつと落着き忍んでゐる事が出來たので

胸にわだかまるもののためにどんなに苛立たしく腹立たしく思つた事であらう。

あらう。いや、彼の心の中は、決して平靜な、餘裕のあるものではなかつた。彼は何かの仕事をしてゐながら、その

敏子からは、その後約束の手紙は來なかつた。彼もはじめのうちこそ、その手紙を心待ちに待つたものの、後には、もうそれを當てにはしなかつた。今はもう手紙などを待つてゐる時ではない、どんな事情でもどんな難關でも、物ともしないで、直ぐ直接、彼女に會つて話し、彼女を引き出し、彼女をとらへてしまへばいいのだ――さう考へながら、やつぱり周圍や前後の顧慮に煩はされて、思ひ切つて小波村へ自身出かけて行く事も出來ないで、毎晩、小波村から歸つてくる和平爺さんが、何となく待たれた。

和平爺さんは、純一の顏を見ると、ただ何がなしに無暗にニコニコした。純一も愛憎よく笑つて彼を迎へたが、然し、店では爺さんにこつそり訊くといふ機會は見出せなかつた。常七が歸つて來た日の晩に老人は支店から歸つて、常七と差し向ひで帳面の引き合せをするときに、小聲で、常七に、

「あれは此頃一向見えんだが、どげな風に落着しただ?」と訊いた。常七は一寸間がわるさうに、純一の方をチラと見て、ただ笑つて何とも答へなかつた。すると爺さんは、

「まアまア、何事も時さへたてば、うまいことすんで行くだ、したら、また外の事が起る……何か言づてでもあれば、わしが言つてあげるぞ」と言つて、純一の方を見た。純一はそれを無意味には聞き流すことが出來なかつた。

彼は或る日の暮れ頃、丁度和平が小波村から、その日の貨物を背負つて歸つて來る刻限を見はからつて、何氣ない風をして店を出て、墓地を通り拔けた村はづれの、かの砂丘のあるあたりまで行つて、そこに佇んだり、松林へ入つて見たりしながら、和平の歸りを待つて見た。

暑さと、荷物とで、すつかり疲れてゐる和平は、純一を見つけると、それでもニコニコとして、

「何處へ行きなさいますナ？」と訊いた。

「いや、別に何處へも行くのではないが、あんまり頭が重たいので、かうして夕方の風に吹かれに出たのです」と純一はさりげなく言つて、和平と一緒に歩き出した。和平は連れが出來たので、いくらか元氣をとりかへして、話をつづけた。が、それは、純一には大して興味のないこと、常七の噂や、世間の景氣の話といつたやうな事ばかりであつた。

「小波村の方はどんな工合ですね？」と純一は訊いて見た。

「置はかりが餘計だもんでナ……早よ盆にでもならにや……」と和平は答へたが、ふと思ひ出したやうに、「西尾の若奥樣は、此頃ちつとも見かけねえやうだが、どうなさつたかね？」と言つて、純一の方を見た。

「ぢや、米子の方へ歸つてゐるのですね、もうこちらへ來てゐるのかと思つてゐましたが……」と純一は誘ひ出すやうに言つた。

「いんや、來とられんらしい……あの奥さんが來とられると、自動車がよく來るだで、あのブカブカいふやかましい音ですぐわかるだ……」と和平は言つた。

今以て小波村に來てゐないとすれば、もうこちらへは來ないのではあるまいか、さう思ふと、彼は急に心が險しくなつて、平靜を失ひかけたのに氣が付いて、心にもない事の方へと急いで話頭を轉じた。

此頃、彼は常七に敎へて貰つて、毎日のやうに、自轉車の稽古をしてゐた。和平爺さんに言はせれば、そんなものを稽古しないでもええといふのだが、これから度々、遠出をしなければならないと思つてゐる純一にとつては、この自轉車の稽古が、まづ何よりも必要に感じられたのであつた。

晝寢の時間や、たそがれの涼みの時などに、二人は自轉車を引き出して、人通りの少ない橋の袂から店の前にか

けて、一寸廣場のやうになつてゐるところで、常七は非常に得意で、兩手をはなして、颯と風を切つて走らせたり、きはどいところで、うまく廻轉して見せたりした。純一も常七に助けられて、思ひ切つて、ペタルをふんでやつてみたが、はじめは一間か二間で、直ぐ傾いてしまつた。が、毎日、隙さへあれば、いつでも乘りまはしてみるので、だんだんに長距離を走れるやうになつた。常七も後には店の帳場の中からそれを眺めて、勵ましたり注意したりした。

ある夕方などは、廣田から使に來た千枝子が、面白がつて、店の戸口に立つて見物してゐた。千枝子はまだ無邪氣な娘なので、純一がやうやくの事で、うまく腰が落着いて、輪を動かしはじめると、その後からついて走つた。そして、彼の自動車が倒れさうになると、笑ひながら、それをとめたり、

「まはり角のところでは、ゆつくり走らなくつては、危險よ」などと注意したりした。

あまりに純一が熱心なので、しまひには叔母も店の緣先のところに出て來て、常七と並んで、ニコニコして見物してゐた。そして、

「この分では、小波村へは純一を行かした方がええぞ」と常七に言つたりした。

筋向ひの家や、隣の家の人達も、家の中や、屋前から見物して、純一がころげる時など、笑つて見てゐた。以前の純一ならば、こんな大道での自轉車の稽古など、しようと思つても出來なかつたであらうのに、今はみんなに笑はれると、自分も一緒に笑つて、その氣輕な自分の樣子に、自分でも滿足の快感を覺えた。そして、これがあの東京で、詩集や小說の發表に焦慮し、文壇的野心に驅られて昂奮したり、社會主義の理論と實際との撞着に懊惱したりしてゐた、あの自分と同じ人間であらうかと、不思議な氣がする位であつた。あんな非實行的な、空虛な抽象概念にのみ囚はれてゐた、臆病千萬な靑年が、今愛嬌のある自轉車乘りとなつて、近所の人達を娛しませてゐる……と考へると、その中に、何とも言へないアイロニイが見出された。それは勿論、一種の自嘲的な氣持でもあつたが、また、自分自

身を突き放して眺めるやうな、超脱的な氣持でもあつた。
然し、夜になると、純一は、かうした氣分ですごした日の夜でも、忽ち、心の底に抑へ付けてゐるものが、むくむくと起き上つて來るのを見た。彼は奥座敷に、八疊づりの蚊帳を吊つて、その中にたつたひとり寢るのであつたが、疲れた身體をはふり出すやうに横になつても、なかなか寢付かれないで、今日の一日が、いかに空虚で無意味なものであつたかといふ思ひが、悔恨となつて湧き上つてくるのだ。そして、夜の更けるにつれて、頭はますます冴えかへるばかりで、思はずガバと跳ね起きて、闇の中に鮮かに浮ぶ對象に凝視することがあつた。又、時には、雨戸を半ばくりひらいて、底深い深夜の空に、遠く遠くまぎれ込んでゆく自分の靈魂のはばたきを聞く思ひすらもするのであつた。彼は敏子のことを思ひやらずにゐられなかつた。彼女は今頃どうしてゐるだらうと、いろいろ想像せずにはゐられなかつた。既に自分の歸郷してゐる事を知つてゐる彼女の良人の友一郎が、彼女にどういふ風な態度に出たであらうか、或ひは、彼女に嚴重な警戒を加へて、本邸から一歩も外へ出させないやうにしてゐるのではなからうか、そして、あの高い塀の中で、二人はどんな生活をしてゐるだらうか……そのことを考へると、純一は苛立たしい焦慮を感じて、思はず、胸の底から深い溜息をつくのであつた。それで、一度などは、丁度便所へ行かうとして來た叔母が、
「おまへ、どげしたんだ、何處かわるいだねえか？」と訊いたほどであつた。そのとき純一は、
「いいや別に……ただどうも寢られないので……」と答へたが、その時は、叔母の親切よりも、身の不自由がしみじみ感ぜられて、どうしてまたこんな家の中へ入つて來たのだらうと思つた。然し、それもなるやうになつたのだ、するべくしてしたのだ——故郷へ歸つて來たからには、彼には姉の家にもゐられないのだし（殊には母親があんなのだから）、この家に入るより外はなかつたのだ。むしろ彼は、東京を離れる時から、叔父のおもはくを利用してやる位のつもりであつたのだ。親切にしてくれる叔母の事を考へると、氣の毒な氣もするのであるが、今自分としては、自分

のやりたいやうにやるの外はない。自分の生き甲斐のある生活を見出して、眞直にそれに向つて進んで行く場合、周圍を顧慮してゐることは出來ない――否、今までの自分の破綻はみな、周圍を顧慮するのあまりに、自分自身の要求に對して、不純であり、不徹底であつたところから來たのではなかつたか。東京での生活の失敗――かの窮迫、かの失戀、かの文壇的努力の挫折、すべてが、あまりに自己に不忠實であり、自我に徹する事の出來なかつたところから發してゐるのではないか。今や、自己叛逆の途は既に踏み出された、たとひ自分と彼女との戀が、あらゆる無理の上に築かれてゐるものであつたとしても、なほかつその無理を押し破つて行かねばならぬ自分だ、今更に何を逡巡し、何を傷心するのだ……と、彼は自分の昂ぶつてゐる神經を押し鎭めて、つとめて、冷靜に、現在の狀勢を考慮し、自分の進むべき路筋を考へた。そして、

「今度こそ、今度こそは必ず……」と、さう自分を勵ますやうに言つて、彼はやうやくに眠るのであつた。

十一

叔母のおとみは、純一が食膳につく時には、大抵その側にすわつて、自分で彼の給仕をして、次郎の妻のおふでには、純一のさうした世話を、なるべくさせないやうに氣をつかつてゐるやうであつたが、また一方から見ると、かうしたおろそかならぬ叔母のとりなしの中に、自分に對する深い期待と、溫かい愛情とを、純一は見ずにはゐられなかつた。

叔母は純一の少食なのを見て、

「おまへは次郎の半分も食はんが、それでええのかえ、ちつとも遠慮せんでもええぞ」と心配さうによく繰返した。

また、時によると、

「何かおまへの欲しいものをこしらへてやるが、何がおまへは好きだ？」と訊いたり、時々、晝すぎなどに、梨や甜瓜などを、自分でむいて、彼に食はせたりした。そして、純一が沈んだ顏をしてゐる時など、その蒼白い血色を苦にして、何處かわるいところがありはせぬか、一度醫者に診て貰つてはどうかと言つたりしたが、純一は、

「いや、格別何處もわるくはないのです、ただ神經衰弱なので、夜よく眠れませんから……」と、叔母をなだめるやうに言つた。

或る朝――彼がもう一度、米子へ行つて見ようと考へた夜の朝であつた――、食事がすんでから、彼が一寸裏の砂地の菜園を見まはつて、母家へ歸つて來ると、手傳ひに來てゐる小娘が、今しも店先に投げこまれた一通の手紙と新聞とを、純一の手に渡した。新聞はそのまま上りがまちに置いて、その手紙を見ると、たつしやなふつくりした文字で、純一の名が書かれてゐたが、裏の方には、ただ日附があるばかりで、差出人の名前はなかつた。けれど、一目見ると、純一には、それが敏子から來たのであるといふ事がわかつたので、彼はそのまま、また裏の方に引返して、菜園の方へ出て行つて、そこで歩きながら封を切つて讀んで見た。

「わたしは今、夜見ヶ濱の方にまゐつてをります。昨日、ひとりでこちらにまゐりましたの。それで、とりあへず、おしらせいたします。小波村でお目にかかつてからこちら、ずつとこみいつたことがつゞきましたので、おち／＼手紙を書くことさへ出來なかつたのです。けれど今日は、やう／＼自分の思ふ通りになりました。たゞひとり、保養を名として、この濱の別莊でゐますの、大變いいところですの。前には松林があつて、その砂丘のむかふに、海が横たはつてゐます、波の音がいつでも聞えてゐます。それに山といふものがまるでないので、朝は美しい日の出が見られますし、夜は淸い／＼月夜を、思ふさまながめあかすことが出來ます。ここにゐると、ほんたうに、何もかもいやなことを忘れてしまひます。ぢつとひとりですわつてゐると、寂しくなる事もありますけれど、結局幸ひだとも思ひます。

靜かに歌を考へたり、何かいゝ本を讀んでみたりしたいと思ひます。こんな風な生活をしてゐるので、ちつとも氣兼ねがありませんし、友一郎も當分、こちらへは來ないやうにわたしが言つてありますから、お待ちいたしてゐますから、明日の午後に、おたづね下さいませ。いろ〳〵とくはしいお話をいたしたいと思ひますから、ぜひ〳〵くりあはしておいで下さいませ。場所は夜見村のうちなのですが、汽車は弓ヶ濱驛でお降りになると、それから海岸の方へ五六町で、松林のところですから、すぐわかります」と書かれてあつた。

「明日！」と純一はくりかへした。彼は手紙の日附を――それは昨日の日附であつた――ぢつと見つめて、それが今日の、この午後なのだナと自問した。彼の心は、急に滿潮になる海のやうなさわぎを見せた。彼にはもう他に何を考へる必要もない、ただ急いでそこへ行けばいいのだ、午後をも待たず、今直ぐにと、彼は思つた。そしてさりげなく、その手紙をさげて家にかへつて、勝手にゐた叔母に、只今、濱の方にゐる友達――中野信太郎といふ――から、少し相談したい事があるから、是非來てくれと言つて來たので、一寸行つて來なくちやならないから、今日出させてくれるようにと言つた。

「濱といふと、どの邊だナ？」と叔母は訊いた。

「夜見村といふから、多分境に近い方でせう」

「夜見村……大分遠方だね……でもええわ、常七も丁度もどつとる事だし、今日一日ぐらゐ、困る事もあるまい……そげな事なら、行つて來い」と、機嫌よく叔母はそれを許した、そして、なほそのあとから、

「米子へ一寸顏を見せて來てもええぞ、おしまさんもおまへの顏を見たがつてござるだらうで……」と言つてニコニコした。

純一はかうした叔母のやさしい出方に、多少のやましさを感ぜぬでもなかつたが、まづよかつたと思ひながら、米子

には寄るか寄らないかわからないが、なるべく早く歸つてくるからと答へると、叔母は、

「どうせ米子を通るだから、寄るがええ、おしまさんも寂しい思ひをしてござらうだでナ……ああしとるのも辛い事ぢやで、なるべくようして進ぜるがええぞ」と言つた。

「ええ……」と純一は返事したが、直ぐ常七にむかつて、

「車尾の方から濱へ行く近道は、どう行つたらいいだらう？」と訊いた。

「近道といふと……汽車でお出でぢやないんで……」と、もうジンペ一つになつて、團扇をバタバタさせてゐた常七は、不審さうに言つたが、自轉車で行くのだと聞いて、

「ホウ、自轉車で……」と、驚いたやうに純一の顏を見た、「そりや大變な御元氣ですナ、夜見村といや、四里位はありますぜ、だが、氣を付けてさへお出でなさりや、もう大丈夫でせうが……」と言つた。そして、自分はあつちの濱の方は、皆生までしか行つた事はないが、あの村から眞直についてゐる路を行けば、それが一番近いだらうと、大體の見當を敎へた。

純一が自轉車を引き出すと、彼も立上つて來て、

「ぢや、行つておいでなさい、今日は暑くなりますぞ、暑あたりなさらんようにナ……遠乘りは始めてだで、草臥れたらお休みなさい、もう危險はないでせうが、ただ、坂のところは、一々面倒でも下りておいでなさい、これ位と思つても、そのこれ位で失敗することがありますだでナ……」と注意した。

「氣を付けるがええぞ、油斷せんようにしてナ……」と叔母も繰返し念を押して、威勢よく挨拶して出て行く純一を見送つた。

彼の自轉車は、街道を眞直に走つて行つた。四五日前、不安な、苛々しい氣持で、和平爺の歸りを待つてゐたあの

村外れの砂丘にさしかかつた時は、その折りの自分のうらさびしい姿が思ひ出されて、それが人ごとのやうに微笑まれた。今は、背中一杯に風を孕ませて、風を切つて行く爽かさ、身體ばかりか心まで輕く躍つてゐるやうで、まるで子供のやうだナと、彼は自分でも、この初心な自轉車乘りのはずみ方を可愛く思つた。

小波村へ入る岐路なども瞬く間に通り過ぎて、日野川堤にさしかかると、さすがに尻が痛んで來たし、常七の言葉をも思出したので、彼は車から下りて、汗を拭きながら、自轉車を引つぱつて上つて行つた。彼には敏子が今自分の來るのをあてにして、待つてゐるのだと考へると愉快であつた。然しまた彼は、すぐその後から、此間會つた時のやうな他所行の彼女――レデイの假面をかぶつた彼女を見たくはないと思つた。今日こそ、彼女を赤裸のままに見たい、ありのままの彼女を見たいと思ふのだつた。

海から眞直に來る風に、帽子を取られないやうに用心しながら、絨毯の上でも行くやうな、長い日野橋を渡つてしまふと、純一は常七に敎へられたやうに、すぐその堤について右に入つて、やがて皆生の村に下りた。そこから一條の道が、靑々とした稻田と砂丘との間を走つてゐる。砂丘は行くに從つて、起伏して、その上には松林が斷續し、松林と松林との間には、畠があらはれるかと思ふと、忽ちそれが擴つて、桑の葉、麻の葉、綿の葉、芋の葉などの、趣きの變つた葉形のとりどりが、少しく隔ると一樣の靑色に融け合つて、涼しい風に飜つて、いかにも濱邊らしい生々した爽かな香りをたたへてゐる。外海を限る一帶の松林は、はてしなく續いて、それが手近の松林と連續するかとおもふと、また、畠や草地をあらはしたりする。畠や松林の間のあちらこちらには、農家の藁屋根が點在してゐて、道がその籬と籬との間に入ることもある。路は砂地であつたけれど、踏みかためられてゐるのと、まだ朝のしめりが十分に乾き切つてゐないのとで、自轉車は氣持よく走つた。

純一は大分疲れが出て、今度はハンドル持つ手がだるくなり、ペタルを踏む足も少し重たくなつて來たが、なにこ

れ位と思つて、息繼ぎもしないで、なほも走つて行くと、左から來た小徑が、海岸の方へと路を横ぎつてゐる傍の、丘の少し高まつた奧の方に、小さな神社の拜殿が、松の樹の間に暗ずんだ朱色を隱見させてゐた。それを見ると、彼はそのあたりの風物が、何だか見覺えがあるやうに思はれた。それもその筈、そこは彼が少年時代に、學友と一緒に濱灘へ遠足に來た時に、きつと通る事になつてゐるあの路だつたのである。純一はそれを思ひ出すと、俄かに足をゆるめて、なつかしさうに左右を見廻してゐるうち、思はず車體が傾いて、彼はそこに下り立つてしまつた。そして、袂から巻煙草を取り出して、やつとの事で火をつけて、一本を灰にしてしまふと、彼は次ぎの一本に火をうつして、空の袋をそこにはふり出して、そして再びそのペダルを踏んだ。そこから先きは、だんだんに漁夫の家らしいのが目に立つて來て、軒下に小魚を干してあつたり、開けッ放しの家の中に、腰巻一つの赭黑い女の身體が、まるで大きな猫か何かのやうに、おかまひなしに投げ出されてゐたりして、磯臭いにほひが何處となく感ぜられた。

夜見村に入つてから、彼は煙草の看板のかかつてゐる店に寄つて、そこで敷島を二つ買つた。そして、そこで、松林の中にあるといふ別莊を訊いてみた。それは直ぐに分つた。何でも、この夜見村の一番海寄りの、景色のいいところで、米子の方から遊びに來る人を見越して、行く行くは海水浴場にもならうかといふので、すでに四五軒の貸別莊が立つてゐるとの事だつた。

「二三日前に、米子から自動車でその別莊へ來た筈だが……」と純一が言ふと、自動車で來たといふ事が、あきらかに深い印象を與へてゐると見えて、店先に立つてゐた十二三の男の兒が、

「あ、來ただ、ありや西尾の別莊だげナ、自動車が入らんもんで、そこんところで、綺麗な奧さんが下りてござつただ、この次ぎの次ぎの小路を入つて濱の方へ出ると、ぢき松の間に見える家だよ」と言つた。

成程、その二番目の小路のところには、無理にこの道筋へ乘り入れたらしい自動車が、その上もう横へは入りかね

て、殆んど道幅一杯の轍の跡を、深く砂の中に食ひ込ませて、そこでとまつたらしい跡が殘つてゐた。それを見すごして、純一はその小路に折れたが、ものの一町も行くと、いつか砂地が漸次軟かくなつて、自轉車の車輪が、砂に深く食ひ込みだした。それで彼は自轉車を降りて、車體を引つ張りながら、少しうつむいて、松の間を歩いて行つた。

そのあたりは、一寸立て込んでゐる村の人家からも、ずつと離れてゐて、まばらに散らばつてゐる大きな松の樹の下は、一面に芒の原で、まだ穗は出てゐないが、細長い葉が入り亂れて、さらさらとかすかな音を立ててゐる、その芒の原が、兩方から白い砂をあらはして、心持ち傾斜をなしてゐる間に、少しの窪みを見せて、一條の路が海の方へ走つてゐる。そしてその傾斜から路にかけては、綺麗なこまかい砂が、始終風に刷かれるためであらう、波のやうなあとを刻んでゐるが、その上には、二三人で通つたらしく、女らしい內輪の下駄のあとが、こちらに向いてついてゐた。

砂地は、殆んど眞直に、行手の松林の中に入つてゐたが、その松林に入る間際のところには、飛び飛びに、二三軒の新築の家が見えた。多分あのうちのどれかが、敏子のゐる別莊だらうと思つて、純一は歩きながらあれかこれかと物色した。一番手前の家は、路から右手に少し引つ込んで、松林のふところに、丁度うしろを松林に圍まれたやうな地位に建つてゐた。他の二軒はいづれも路から左手に、松林の間に、殆んど相接して、新しい破目板を隱見させてゐた。純一はその右手の家の方へ入る細徑のところまで來ると、さつきからの女の下駄のあとが、ここから出てゐるのを見た。また、その家の横手の、松の樹から松の樹へとかけわたした物乾竿に、女着の中形の浴衣が二枚、眞白に浮き上つてゐるのも見えた。その振口のびらびらしてゐる浴衣を見ると、彼はこの家がてつきりそれだといふ氣がして、眞直にその細徑に入つて行つた。

見たところ、六疊に、八疊に、二疊位の、何の他奇もない平屋建の家で、そのまはりには、手輕な竹の垣根がめぐ

らしてあつて、その中の、松の影がまろく落ちてゐる砂の上を、雀が二三羽歩いてゐた。家の中はすつかりあけ放されて、座敷の方も見通しになつてゐたが、人影らしいものも見えなかつた。かたばかりの入口の門には、別に名札もかかつてゐなかつたが、純一は、間違つたつてかまふ事はないと思つて、つかつかとその中へ入つて行つて、手近の松の樹に、自轉車を立てかけて置いて、砂を踏んで玄關の格子戸の前に立つたが、事によると誰もゐないのぢやあるまいかと思つて、一寸聲をかけるのを躊躇してゐると、その氣配でわかつたとみえて、思ひもかけぬ家の横手の方から、小急ぎで出て來たのは、素足に庭下駄をつッかけた彼女であつた。

「まあ、あなたでしたの！」と敏子は言つて、爽かな顔付で、笑つて迎へた、「早く來られましたのね、手紙はいつ屆きまして？」

「今朝着きました」と純一は答へながら、この海邊の夏の鮮かな綠の中に立つてゐる、彼女の殊更らほつそりとした姿を、美しいと思つた。彼女は中形の浴衣に繻珍の半幅帶をかるくむすんで、髮といへば、洗ひ髮をそのまま額のところで割つて、後で根もとらずに、ピンでぐるぐる巻いたのをとめてある位であつたが、そんな無雜作なのが、彼女にはよく似合つてゐた。

「午後といふことでしたが、暑くならぬうちにと思つて、少し早目にやつて來ました」

「暑くならぬうちでよかつたわ」と敏子は言ひながら、目ざとく入口のところの松の樹にもたせてあつた自轉車に眼をつけて、

「まあ、自轉車でいらしつたの？」と、不思議なものを見たと云ふ顔をして、純一の顔を振りかへつた、「あなた、自轉車に乘れますの？」

「上手に乘りますよ」と純一は笑つて言つた。

「驚いたわ」と敏子は仰山に言つた、「でも、直ぐに、いつでも來られて、便利ね」と言ひながら、ふッと氣が付いたやうに、

「まあ、大變な汗よ、勝手の方へ行つて、身體をお拭きなさいな」とすすめた。

「さうですね……」

「今日はゆつくりしていただくんですから……ね」と頤で物を言はせて、そのまま裏口の方へ純一を案內した。純一はさうしてついて行きながら、彼女の細い眞白な素足をめづらしいもののやうに見た。

家の裏手は、入口の方ほどではなかつたが、それでもかなり廣かつた。そして、そのはしはしには、雜草が生え出してゐたが、その一方の隅の雜草の中に、新しい掘拔の井戸があつて、屋根とてもなく、ほんの板を敷いたばかりの井戸端には洗濯物を浸けた盥が置いてあつた。純一は直ぐその井戸端へ行つて、小さな四角な釣瓶で水を汲み上げてゐると、その間に、敏子が臺所の方から、金盥と新しい手拭とを持つて來て、彼の手に渡して、自分はそこの緣側から座敷に上つて行つた。

純一はすつかり肌ぬぎになつて、冷たい水で身體中を拭いてゐると、急によみがへつたやうな爽快な氣分になつた。彼は手拭をかたくしぼりながら、この一軒家が、まるで自分の家のやうな氣がした。丁度外から歸つて來て、親切な妻に世話をして貰つてゐるやうな滿足と、氣安さとが感ぜられた。と同時に、こんなところへ、もし友一郎が來たらどうだらうと、彼はふと思つた。痛快だといふ氣もした。けれども、今日は、まだ、來ない方がいいと、彼はそれを急いで打消した。

彼がさつぱりした氣持になつて、緣先の踏石の上に立つと、部屋の中を片付けて、麻の座蒲團を敷いたり、煙草盆を出したりしてゐた敏子が、顏を上げて、

「こんな殺風景なところなのですよ、ほんの身のまはりの物を持つて來たばつかりで、まだ一向人間の住居らしくはなつてゐないんですが……さあ、おあがんなさい」と言つた。彼女の言ふ通り、凡てが新しく、安つぽく、ぞんざいに出來てゐる家の中には、殆んど何一つ裝飾もなく、家具らしいものも目に付かないので、まるでほんの一夜の宿りででもあるやうな感じがした。

「あなたの外に誰もゐないんですか？」と純一は座敷にあがりながら訊いた。

「ええ、お婆さんと女中とが來てゐますが、今一寸買物にやつたところですよ……ここではちつとも氣が置けませんのよ……」と言ひながら、敏子は立つて表の座敷との仕切の障子を一枚、純一のすわつた側に引き寄せた。

「ここは以前から、西尾家の別莊でしたか？」と、純一はあたりを見廻しながら訊いた。

「いいえ、それが面白いのですよ、後でゆつくりお話しますわ」と言ひながら、敏子は純一と差向ひにすわつて、はじめて氣が落着いたやうに、純一の顏を見やつた。そして二人は、何といふこともなく、互ひに微笑した。そして二人とも、暫くの間默つてゐた。その沈默の間に、純一は、松林に吹いてゐる風の音と、その中に微かにそれと覺えられる波の音とを、ぢつと聞いてゐた。

「この間は、あれから米子の新聞社へおいでになりましたつてね」と、敏子が言ひ出した。

「ええ、中野を新聞社へ訪ねました……」

「そして、社の入口で、西尾にお會ひになりましたらう」と敏子は言つた、「わたしは、あの翌日、自動車で迎へが來ましてね、米子へ歸つて行くと、その晩、西尾が外から歸つて來て、今日は珍らしい人間に會つたのだ、誰だか分るかと申しましてね、わたしが默つてゐると、自分からあなたの名を申しましたよ……」

「また、御立腹ですか？」と、純一は冷やかに言つた。

「いいえ、そんなに機嫌をわるくしてはゐませんでしたけれど……どうもね、あの人の癖で、つまらぬ事で威張りたがるものですから、あなたの事を慨れむやうな口吻で、あの男も、東京で三文文士になつてゐたんでは、つまらぬ事を悟つたと見えて歸つて來てるとか、ああした人間は、どうせ何處へ行つても困るのだから、國の方がまだしも東京よりは樂だらうとか、今何も仕事がなくて困つてゐるやうだつたら、この際だし、社の方に人も要るから、社に雇ひ入れてもいいなんて言ふもんですから、わたしも一層癪にさはりましたよ……」

「さう言はれても仕方ありませんね」と純一はつとめて平靜に言つた。

「でもね、いやですよ、その口吻がそれは傲慢なんですもの……わたしも何だか苛々した氣持になつたものですから龍田さんは仕事はないことはありません、今度歸つたのは、淀江にある親類の質屋さんの養子にといふので、呼び戻されたのだといふ事ですよと申しましたの、ツイ……ね、すると、なぜおまへはそんな事を詳しく知つてゐるのだと問ひ返されて、これにはわたしもグツとつまつてしまひましたの……わたしはよくこんな失敗をするんですよ」と言つて、敏子は笑つた。けれども、それは困つたといふよりも、面白がつてゐるやうな調子であつた。一體に、今日の彼女の調子は、いろんな束縛から解放されたやうに、のびのびとしてゐて、何處か輕く浮き立つてゐるところが見えた。

「いや、僕も、新聞社で、西尾さんに逢ふだらうといふ氣はしてゐましたが、あんなにパツタリ出會つたのは、痛快な位でした、西尾さんは社長室に來て話さないかといふ事でしたが、中野君が氣を利かせて、そのまま別れてしまひましたがね……まあ、ああして出會つておいて、かへつてよかつたと思ひました、僕が歸つて來てゐることを御存じになれたから……」

「隨分大膽ね」と敏子は言つた、「いつの間にそんなにおなんなすつたの？」

「もう、大膽になるより外ないぢやありませんか」と、純一はその『もう』に意味を含めて、でも笑ひながら言つた。
斂子も心もち笑つたが、何とも答へなかつた。
「僕は西尾さんに出會つたのは、當然のやうに思ひましたが、それよりも、あの小波村で、あなたが子供を連れて來られたのには、一寸妙な氣持を味ひましたよ……」
「あなたはおこつてゐましたのね」と斂子が言つた、「あの歸る時なんぞの顏といつたら……」
「僕はあんな假面をかぶつたあなたを見ようとは思はなかつたものですからね」
「假面ですつて……」と斂子は、少しグッと來たやうな顏付をして、純一の方をキッと見た。けれども、直ぐ思ひかへしたやうに、
「わたしには、そんなところがあるのよ、假面だなんていふのはひどいわ……でも、弱いから仕方がありませんわ、もつと強くなりたいんだけど……あの時は、綾子がゐたから、わたしはあれだけお目にかかれたのよ、すつかりまごついてゐましたもの、あの時は……自分がどうなるか分らなかつたし、どうなるにしたところでいいとは思つてゐても、やはり、妙に自分の心を食ひとめたかつたのです……でも、そればかりは許して下さいね、これでわたしも隨分苦勞してるんですもの、今度ここへ來ることにしたのについてもね……それだけやはり、わたしが本當に考へてゐる證據にはなりませんこと……」と言つて、斂子は純一の眼をぢつと見た。それには純一も何とも言ひやうはなかつた。
彼女の心持はよくわかつてゐたし、今日の彼女のちつともつくつたところのない、生地のままの姿とりなしが、彼の心をすつかりなだめてあの小波村での何處かはぐらされたやうな記憶をも、その後の焦慮の日の記憶をも、拭ひ消すのに十分であつた。
「わたしはあれから今日までに、かなり心の準備をしましたのよ」と斂子は言葉をついだ、「ここへ來ることにしたの

「どうして行けなかつたのですか？」と純一は興味をもつて訊いた。

「小波村へ行つてもよかつたのですが、あそこはわたしの家の親類でせう、それでいろいろ面倒な事はありますしね、それにあそこは、今では西尾にいろいろ義理を立ててゐますから、わたしが愈々自分の思ひ通りになつた時には、あの家の人達の立場も氣の毒ですから、いろいろと考へてゐるうちに、丁度いい事を聞いたのです。夜見村の別莊地に建てた家が、最近、西尾の手に入つたといふ事を聞いたので、これは丁度いいと思ひました……」

さう言つて、彼女は、このあたりの二三軒の家が、境の或る商人によつて、今年の春建てられたものである事、その商人が相場の失敗から、破產をしたので、その債權者であつた西尾惣兵衞が、例の苛辣な手段で、遮二無二手に入れてしまつた事、その間のこみ入つた徑路を簡單に話して、

「あなたの方には、小波村よりも遠くなるかとは思ひましたが、それがかへつて、友一郎に對しては、安心を與へることにもなるし、また、こつちの方が誰に遠慮も要らないのだし、萬事わたし達に好都合だと思ひましたから、早速、小波村よりも、もつと海に近いところをといふ理由から、急にこちらに來たいと、言ひ出したものですから、友一郎もはじめはあきれたものだといふやうな顏をしてゐましたが、たうとう、そんなら好きなやうにするがいいと申しましてね、女中をつけて出してくれましたが、でも、こちらへ來た事は、絕對に誰にも知らさぬといふ條件附きなのですよ、あの人の氣やすめですけども……」

「それにしても、あんなあなたの失言が、よく無事に納まりましたね」

「その事なら、どうやらうまくごまかしてしまひましたよ、それよりも、友一郎はあなたが質屋の養子になるといふ事實を面白がつて、フン、それはいいね、あの男が質屋になる量見とは、一寸驚いたが、感心な事だなんて申しまし

てね……」と敏子は言つた、が、すぐ純一の眼を見て、「其後、お店は忙しかつたのですか、いろいろ店のことは、よくやつて行かれますか？」と訊いた。

純一は南の家のことを、敏子に話をした。彼はその舊い家の中の空氣を話して、その中で亡くなつた從弟のしてゐたやうに、帳つけをしたり、質藏に出入りしたり、また時には、畠の手入れなどもしてゐるのだと言ふと、

「ほんたうに一かどのお仕事ね」とすつかり敏子は感心してしまつた。

「でも、わたしのために、そんなつまらない事までなさるなんて、ほんたうにすみませんのね、あんな手紙なんか差上げなければよかつたのに……」

「いや、かまひませんよ、これが結局、僕にはしあはせですよ。東京にゐて、くだらぬ下受仕事などしてゐるよりも、こちらで自轉車の稽古でもしてゐる方が、氣が利いてゐますよ」

「それもさうね……おまけに自轉車の稽古までなすつたのね……」と敏子は微笑んだ。

「僕にしては破天荒の事ですよ、あの時、小波村の支店には、度々行く必要がありさうでしたからね……」

「度々行く必要がね……」と、敏子はその言葉が氣に入つたと見えて、繰返して、「うれしいのね、そんな氣持が……」と、彼女は呟くやうに言つて、幸福さうな眼を見張つた。それはチヤアミングで、美しかつた。純一はやはり嬉しかつたが、直ぐ皮肉な考へが次ぎに待つてゐた。

「でも、自動車にはとてもかなひませんよ、もつとも、この別荘の前のやうな砂地だと、どちらも役には立ちませんね」

「皮肉ね」敏子は首をまげた、「自動車なんか、パンクしますからね……」

さう言つて、彼女は洒落に笑つたが、また眞面目な調子になつて、

「それから……まだどんな事がありますの？　その質屋さんの話のつづきをおつしやいな」と純一をうながした、「面白いのですもの……」

「その質屋には、まだ從弟の未亡人といふのがゐましてね、自分が當然僕の細君になれるものと思つてゐるやうなのです。ところが、叔父の方ではまた、自分の娘を入れたいといふ思惑らしく、何だかしきりにゴタゴタしてゐるやうですよ、見てゐて可笑しくなりますよ。何處へ行つても、人間と云ふものは、まづこんなものですね……」

「その未亡人といふのは、どんな人ですの、美人？」と敏子は笑つて訊いた。

「あなたの眼から見れば、勿論美人ではないでせう」と純一も突つて、「平凡な田舍の女ですよ、それにだらしがないといふので、番頭なども、どんな眞意かは知りませんが、僕に氣をおつけなさいなんて忠告してゐました。此間も、僕が湯殿で行水をしてゐる時に、いきなり入つて來て、背中を流してくれた時には、僕も一寸めんくらひましたよ…」

「そんなことがあつたのですか？」

「ええ、それがまるで細君が自分の良人に對してするのと、丁度おなじやうな風なのです……」と純一がなほ語り繼がうとすると、

「もう澤山ですわ！」と敏子は遮つた、「そんな話なんぞは……あんまり眼に見えるやうで、聞いてゐると、とても平氣でゐられませんわね……」

「どうしてですか？」と純一はわざと訊いた。

「でも、いやですわ……」と敏子は顏をしかめた、「あんまり無智で……あなたを誘惑しようと云ふのでせう、それは……でも、あなたがおいやなら仕方がないわ、ほんたうに、おいやなのですか？」

「好きもきらひもないぢやありませんか」と純一は敏子の顏をキッと見て言つた、「もともと質屋の養子になるつもり

べきでないと思つたのである。

「然し……」と純一は言ひかけて、俄かに口を噤んだ。彼はこの場合、東京行については、まだ自分の意見を述べる

こんな處に埋もれてをられやしませんわ……」

「それはさうですとも、今に東京へ行つて、新しい生活をはじめるのですもの」と敏子は樂しさうに言つた、「とても

さへない僕ぢやありませんか……」

十二

敏子は立上つて、勝手の方へ出て行つた。暫く何か洗つたり拭いたりしてゐるやうだつたが、やがて冷した麥酒とコップ二つとを盆の上に載せて、それを持つて來て、二人の前に置いて、麥酒をぬいて、二つのコップになみなみとついで、純一にすすめながら、

「何もほかになくて……氷でもあればと思ふのですが、ここらでは駄目です、でも、もう女中たちも歸つて來さうなものですから……」と言つて、彼女は純一がうまさうに一口グッと飮むのを見て、自分もコップに少し口をつけた。

「中野さんはどんな模樣でしたの?」と、敏子はコップを置いて訊ねた、「どんなことを言つてゐましたの?」

「中野は幸福な人間ですよ」と純一は言つた、「もつと悲痛な氣分でゐるかと思つてゐたら、案外のんきに落着いてゐましたよ。生きて行かうとするには、やつぱりああでなくちやいけないかも知れませんね。僕の事情は君のよりも暗いと言つてゐましたが、然しあの樣子では、僕などよりもずつと明るくて、どんな苦勞もその幸福のかげに壓倒されてゐるやうです。二人の戀の歷史などを聞きましたが、あんまり手放しなので、聞いてゐて少し辟易する位でした。勿論、ちつとも悲觀なんかしてゐやしません」

「それなら幸福ですわね、とてもわたし達のやうな人間は、そんなに都合よく、明るい氣持ばかりではやつて行けませんわ、どうしても悲觀的になつてしまひますものね」

「中野は何事にも深く苦しむ方の人間では決してないやうです、どちらかといふと、徹底した實行家で、まあ、世の中にどんなに迫害されても、ちつとも弱らないで、ドシドシ解決をつけて生きて行く男です。世間に出て働くのには、よく適してゐる男です。それに中野のその女の人が、中野以上に、世間的で、ずつと實行的な人らしいのです」と言つて、彼は中野とその女との温泉行の話をした。すると敏子はぢつとそれを聞いてゐたが、その話を別に皮肉な考へをもつて見ないばかりか、かへつて深い眞面目な調子で、

「そんな女の人が強いのですよ、なかなかそんなに徹底して出來ないものよ、たしかにえらいわ」と言つて、その女の人を賞めた。

「中野さん達も、もう暫くすれば、世間の噂もすぎ去つて、結局は、天下晴れて樂しく暮せるのですもの。一度決心して、さうする以上は、徹底しないと駄目ね」

「ほんとに、わたしなどは、性格的にもろくて……」と、やや暗い顏になつて、彼女は言つた、

「人間としての弱點が、ありすぎる程わたしにはあるわ。それがいいと思つてからでも、ああも思ひ、かうも思ひ、つい邪魔が入つてしまつたりして……でも、わたしは、思ひ切る時には、思ひ切れるのですけども……」と、何ともつかず彼女は言つて、麥酒(ビール)をまた純一の杯についだ。

女中とお婆さんとが歸つて來たらしい。直ぐ裏口にまはつて、何か二人で話しながら、井戸端で足でも洗ふらしい水の音がパチヤパチヤする。

「奥さん、ただいま歸りました」と、若い娘が勝手から聲をかけた。

「早かつたのね」と言つて、敏子は立上つて、あはひの障子の敷居のところに、ほつそりした身體をやや斜めにして、そちらの方を見やりながら、「梨を買つて來ておくれだつたら、すぐ皮をむいてこちらに持つて來ておくれ、お客樣がおいでになつてゐるから……」

かう言つて、敏子は元の座にかへらうとして、急に氣が付いたやうに、臺所の方に出て行つた。

純一が暫く樣子を見ながら待つてゐると、敏子のこちらに歸つてくるあとから、汗で眞赤な顏をした婆さんが、はだけた胸をかき合せながら入つて來て、彼に挨拶をした。敏子がそんな風に言つたと見えて、婆さんは純一にむかつて、

「小波村の方からお出でなさいましたげで、お暑うございましたろにナ」とお愛憎を言つてから、敏子の方に眼をやりながら、「今日の暑さはまた格別で、境の町を步いとると、もう喉が渴いて渴いて……日中の出步きは、わしのやうな年寄にはこたへますだが、こつちまでもどつてくると、ソレ、こげに涼しいだもん、まるでもう噓みたやうで……」などと物堅さうに言つて、「それぢやすぐお食事の支度をいたしますだ」と言つて、心得顏に引込んだ。

敏子はその後姿を見送つてから、

「中野さんの外には、誰にお逢ひになつて？」と、丁度何もかも知らうといつた風に、純一に訊いた、「もう一人――靜子さんの兄さんの元雄さんには……」

「相良君には、中野と一緖に逢ひに行きました、病氣は思つたほど重くもないやうでしたが、やはりすつかり瘠せて……」

「胸でしたのね、わたしとおなじ……」と彼女は言つた、「もつともわたしよりずつとすすんでゐるでせうが……わたしの病氣も、すすんではゐるんでせうが、お醫者は肋膜と神經過敏とだから、今のうち養生さへしてをれば心配はな

いと何でもないやうに言ふんですが、その養生といふのが、わたしには一番不向きなことで、いつでも自分から病氣を昂進させるやうなことばかりしてゐるのですもの……西尾の家で、今度かなり大きな病院を建てることになつて、京都から內科の方のいい醫學博士を招聘するとかいふ話で、さうでもなれば、わたし位の程度の病氣はすぐ癒してくれるとか友一郎は言ひますけれど、お藥やお醫者さんばかりで、病氣がさうさう根こそげ癒るといふわけにも行きますまいから……そんなことよりも、わたしの心の持ち方をもつと毅くさせたいものですけれど、それがなかなか出來なくて……」

　話の間に、頰の紅い健康さうな若い女中が、梨をお小皿に二つづつ皮をむいて、庖丁を添へて持つて來た。そして、ぶきつちよにかしこまつて、それを純一の前に置いた。

「さあどうぞ」と敏子は純一にすすめてから、女中にもう一本麥酒を持つて來るように言ひ付けた。

「元雄さんはどんなお氣持でいらつしやるやうでしたか、あの方も隨分苦勞や惱みや、生活の心配もおありでせうのに……」

「僕も元雄君は、昔からあんな風な弱々しい人だつたから、生きて行くのに一番むづかしいのではないかと思つてゐましたが、今では、その弱さがかへつてあの人を支へてゐるやうです。つまり、あの人の溫順な性格が、與へられた運命に堪へて行く忍從ともなり、心を虛しうして神によりすがる信仰ともなつてゐるやうです。自我の念の強いものはああした境遇に陷ると、自分の意欲とその實現力の制限との矛盾から、絶望的になりやすいものですが、あの人はもともと外に求めるところが少ないから、從つて、世を怨み身を怨むといふやうな事もなく、立派に安心立命の地を得てゐるやうです。僕としては、なかなかあんなにはなれないのですが、實に立派な心境だと思ひました。此間も、元雄君はさう言つてゐました、苦しければ苦しいほど、生きてゐるといふ事實が、自分はしみじみ有難く感じられて

どんなにはたから見てみじめでも、一日生きてをれば、一日だけ神の恩寵が感じられて、どんなに弱り衰へても、ほそぼそと灯つてゐる自分の生命を愛護して行かねばならぬといふ氣がする、だから自分としては、藝術への愛と家庭への義務とを兩手にして、この人生をありのままに肯定しながら、生命を許されてゐるかぎりは生きて行きたいと言つてゐました。そして、僕が土産にと思つて持つて行つてあげたセガンティニの畫集を大變喜んで、こんな田舍に引つ込んでゐてはいい畫も見られなかつたのに、お蔭でかうしたいい畫が見られると言つて、感謝してくれました……」

「何といふいい方でせう」と敏子は涙ぐましげに呟いた、「貴いお考へね、ほんとにさうあるべきだと思ひますわ、ほんたうに、そんな中で生命をいとしむ氣持は立派だと思ひますわ……わたしも、そんな氣持になりたいと思ふこともあるにはありますが……」とまで言つて、彼女は自分の今の立場に立ちかへつて、「今のわたしの氣持では、どうせ人間はいつまでも生きられるといふのではないんですし、また長生きするからいいといふのでもないんですから、極く短かい間に、出來るだけ自分のしたい事をしたい、ほそぼそと保つて行くよりも、ありつたけの生命の火をパッと燃やすやうな華かな生き方をしてみたいといふやうな氣がします。もつとも、どちらが本當の自分だかわかりませんが、好きなのは、こちらの碎けても積極的に華々しくやつて行きたい方ですわ。あなたも屹度さうだと思ひますわ」と敏子は熱をもつて言つた、その白い引きしまつた顏には、ポッと紅い血の氣が匂つてゐる。

「僕もさうです」と純一はぢつと敏子の顏を見ながら、やはらかな調子で受けた、「僕も相良君に逢つて、その樣子や考へに接すると、心から感動はするのですが、それと同時に、自分の道の全然異つてゐることを、一層はつきりと感ぜずにはゐられなかつたのです。それは性格の相違であり、運命の相違でもあるのだから、どちらがいいとかわるいとかは言へないでせうが、人間はめいめいに與へられた道を歩いて行くより外はないと感じたことでした。僕は所詮、かうした人間なのです。あなたがおつしやる通りです。僕にも、あなたがそんなあこがれを持つてゐる事はよくわか

つてゐますが、どうもそれが、いつもあこがれだけでとまりさうですね」と純一は微笑して言つた。
「そんなことはありませんわ」と敏子は言つた、「あこがれだなんて、ひどい事をおつしやるわ。もつとも、これ迄のわたしは、そんなところはありました、けれど、いよいよ一生の大事なんていふ場合になれば、そんな弱いことですませるでせうか……わたしが中野さんの女の方の遣り方に感心するのも、そのためですわ。人一倍弱點を持つたわたしでも、いざとなれば、思ひ切つたことをやつて見せますわ。病氣なんてものは、愈々となれば、何でもありませんわ、東京の方へ行つたら……」が彼女は言ひさして、丁度入つて來た婆さんの方に氣が付いて、默つてしまつた。
やがて、二人の前には、黒塗りの膳がはこばれた。燒肴、胡瓜もみ、玉子のおつゆ、あつさりとした御馳走であつた。
「つまらぬものですが、召しあがれ」と、敏子は若い女中の手から、自分も來客のやうに給仕されながら言つた、「なにしろこんなところですから……」
食事がすんでから、また暫く話してゐるうちに、日影が西へ傾いて、松の影が砂地の庭に長々と曳くやうになつた。女中達がその庭を横ぎつて、ほし物を取り入れに行くのが見えた。
「大分長居しました、もう歸りませう」と純一が言ふと、
「でも、まだいいでせう、海の方へ一緒にまゐりませう、御案内しますわ」と敏子はかへしたくない様子で言つた。
彼女はすぐに立上つて、一寸帶や褄先をつくろつてから、新しい足袋をはき、新聞に包んである表も鼻緒も藤色のフエルトの草履を出してはいてから、
「傘はいるでせうか？」と純一に訊いた。そして、すぐに自分で、「邪魔になるからよしませう」と言つて、「さあ、まゐりませう」と先きに立つた。

二人は門を出て、かの細徑から、海へ行く道の方へ出ると、すぐに松林に入つて行つた。松林はやや濕り氣のある砂地で、大きな松の樹の根もとなどに、一かたまりになつて、芒が葉なみをそよがせてゐる外には、ところどころ磯草が、短かい莖を立ててゐる位なもので、年經た松の樹は、曲りくねつて根上りになつたものが多く、それらが上の方で枝を差し交うてゐる間には、また時折り新しく植ゑつけられた小松が、眞直な梢をつらねて、やはらかな綠の色を際立たせてゐた。やや樹立がまばらなところでは、夕日の影が木の間を洩れて、葉かげが一杯に道の上に翳りをした中に、葉洩れの光線が、チラチラと黃色な斑點をゆるがしてゐる。はるか梢の方を渡つて行く風の音が、いかにも爽かな響を傳へてゐた。

「故鄕の海はなつかしいでせう……」と敏子がささやいた、「東京で、あの長い町を——窦地でしたのね——歩いて、水のところへ急に出た時、ふたりで故鄕の海のことを話しましたのが……今ではかうして現實になつてうれしいことね」と彼女はやさしい調子で言つた。

「こちらに來る途中に」と純一はその言葉を受けて言つた、「小學校時代に、濱灘の遠足の時いつも通つて行つた道を通りすぎたので、昔の思ひ出が、閃くやうに浮び上つて來て、しばらくぢつと見入つてゐました。濱灘の遠足！　あれはあなたも覺えてゐるでせう？」と純一は、彼女の記憶をたしかめるやうに言つた。

「ああ、さうでしたね、あれはもう何年前になるでせう？　わたしは丁度あの時十三でした、ですから、今から丁度十三年ほど前になるでせう、あの時あなたはおいくつでしたか……たしか二つ下なのですから、十一でしたのね、お辨當をころがして、意地惡な子供にからかはれて、泣きさうになつてゐたのね……」と敏子はそのエピソオドを喜んで言つた。

「僕は弱蟲でしたから……」と純一は、彼女があまりによくその事を覺えてゐるので、恐縮して言つた、「あの時のあ

なたの親切は、あれからずつと忘れずにゐました……」

「ああ、あのこと……」と敏子は少し紅くなつて、「あなたが弱蟲なら、わたしは隨分おてんばさんでしたわ、今考へると、何であんなにえらさうに振舞つたか、氣恥かしい氣がして仕方がありません、いぢめられてゐるのを見ると、ほんとにわたしはあなたがいぢらしかつたのよ」と彼女はしんみりと言つた。

「一體、人の同情なんてものは、同情される身になつて見れば、大抵は嬉しいよりもいやな事なのだと、今ではわたしも分つて來ましたが、あの時分には、そんな道理さへ知らない無邪氣なおてんばさんですもの……多分、運命のした事ですわ」

「それは運命といつていいかも知れませんね」

純一もまたさう考へずにはゐられないのだ。この殆んど不用意に言はれたやうな敏子の言葉が、彼の心に、名狀しがたい感情の波を傳へた。今、十三年の後に、再びこの同じ濱邊に相會ふに至つたのも、運命の導きに外ならぬ事を思つた。そして、linked by fate……といふ言葉が、その心に浮び上つた。

行く手の木の間に、ちらちらと海が見えはじめた。折りから、夕方の地曳綱の唄聲が、餘韻かすかに傳はつて來た。悠長な、長く引つぱつたその音調は、一脈の哀音を帶びて、松風の音にまぎれ込むやうに見えた。

「地曳網ですね」と純一は言つた。

「ええ、夕方になると、あの聲が聞えて來ます、ぢつとあの聲を聞いてゐると、煙のやうに消えて行くやうな氣分になりますわ……わたしは娘時代から、さういふやうな哀愁が人一倍强いのでしたが、此頃は病氣のせゐか、また娘時代のときのやうに、センティメンタルになつて仕方がありません。もう富や、榮華やいろんな執着などみんな捨ててしまつて、あの聲が空とも水とも分らぬところに消えこんでしまふやうに、自分も何處とも知らず消えて行つてしまひた

いと思ひますわ」

「さういふやうな氣持になつた時に、そのまま自然の中に融合してしまへたら、そんな幸福なことはないと、あなたも思ひますか？……」

「それは思ひますわ」と敏子は言つた、「でも、なかなか出來ることではないでせう」

「然し、それが出來るとは思ひませんか！」と純一は調子を強めて言つた、「僕はただ一寸した心の持ち方一つで、それが出來ると考へるのですが……」

海は二人の眞正面に展開した。

見わたす前面には、出雲の地藏岬の半島が横はつて、それが夕靄の中に糢糊として、桔梗色に暮れそめて、その山なみの頂きだけが、落日の餘光に、茜色に染められてゐる。地藏岬の燈臺も、その下の方にある美保の關の町も、もとよりそれとは指呼されないけれど、それは淀江の方で見るよりも遙かに近く、丁度この砂濱の地續きが急に高まつて、反對の側に伸び出でてゐるかのやうに眺められた。海は穩かに凪いでゐたが、沖の方はもう夕暮のけはひが立て罩めて、そこには、歸りを急ぐ片帆の影が、點々とつらなつてゐた。沖からまき上つてくる波の穗が、ことさら白く、紫紺の上に移り動いて、くつきりと白い一線をつらねた波打際まで、ずつと擴がつてゐる砂濱には、漁舟が幾つとなく引き上げられてゐて、中には渚近くの磯馴松に繫がれてゐるのも見えた。その砂濱のずつとむかうは、一樣の夕靄にまぎれてしまふのであつたが、左手の一二丁離れたところに、波打際まで、小さな黑い人影が一列になつて蟻のやうに動いてゐるのが見えた。あの物哀しい唄聲は、そこから聞えてくるのである。

「あのやうに地曳網を曳いてゐる人達を見ると、まるで美しい自然の一部のやうに見えて、何とも言へず長閑に見えるでせう」と砂丘の上に立つてその方を眺めながら、敏子は言つた、「けれど、もう一度考へ直して見ると、長閑どこ

ろか、あの人達の生活がどんなに貧しいみじめなものかッてことが思はれて、可哀さうになつて來ますわ。あんなにエイエイ云つて、地曳網などを曳いたところで、いくらになるものですか……ついせんだつても、あそこあたりの漁場の網元の親爺が、西尾の家へ借金の言ひ譯に來て、頭を疊にすりつけて、も少し待つてくれと泣かんばかりに頼んでをりましたッけが……」

「さういふ事がありましたか」と純一は頷いた、「全く、そんなものでせうね、一體、詩人が田園の幸福を歌つて、まるで樂園のやうに讃美したりしてゐるのを見ると、そのあまりに迂遠なのに腹立たしい氣がしますね。僕も國に歸つて來て、まのあたりそれを見て、この狹い土地に、貧富の懸隔から來る悲劇があまりに澤山なのに驚いたのです。とりわけあなたの家――西尾家の富が非常なもので、その勢力をもつてすれば、この地方では、どんな事でも出來るし、どんな無理でも通るし、また、土地の人達にとつて、どんな大きな脅威になつてゐるかつてことも、まざまざ見ましたよ。東京などのやうな廣い土地だと、こんなにもはつきりとは目に付かないのですが、田舍は實にひどい……網元なんかの借金ならばまだしもでせうが、その日暮しの漁師や小百姓たちが、僕のゐる南の家に、質入れに來るのを見ると、そのなけなしの質草のみじめさには、目も當てられないのです。あなたは西尾家へ嫁かれる時に、考へてゐた事がみんな裏切られて、どうする事も自分たちには出來ないと言つてゐられたが……」と言つて、純一は默つた。

「弱いわたしには、何ができたでせう……」と敏子が嘆息するやうに言つた。

「私たちには何も出來ないのです、理論から言へば、社會主義であらうが無政府主義であらうが、立派なシステムは立ちます、然しそれは要するに論理の遊戲か、でなければ、一場の夢想にすぎないのです。いくら美しいユウトピアを描き出して見ても、實現出來ないものならば、その人を娯します點から云つても、一篇の戀物語にも劣るのです。そして今の社會主義者たちは、實にまづい獨創力のない詩人で、やくざな饒舌漢にすぎないのです。全體、社會の改

革だとか、人類の救濟だとか言つて、いたづらに思ひ上つて騒ぎまはるのは、身の程知らずの骨頂です。僕は東京で、他の何事は措いても、それだけは實際に自覺したのです。我々にはどうする事も出來ないのです、非常に悲しい事ですが、仕方がないのです。人間の天性が永久にこの通りであるとすれば、社會の狀態も永久にこの通りである外はない、それを思ふと、絶望せずにはゐられません。ただ殘るところは、自分自身だけです、自分自身の救ひといふことだけです、若し自分自身が全心を打ち込んで行けるものを見出して、そのたつた一つにむかつて、身も魂も燃燒し盡すとさへ出來れば、これ以上の生甲斐はないぢやありませんか、たとへ第三者から見て、それがどうであらうと、當人にとつて滿足がありさへすれば、それこそ絶對のものぢやありませんか……人生にはその外に絶對のものはない筈です、これは勿論徹底した個人主義でせう、また、最もニヒリスティックな考へかも知れません。が、僕が東京を捨てて歸つてくる事が出來たのも、かういふ考へが既に僕を支配してゐたからです。こんな風になつた以上、僕は今何にも恐れないし、何でもやりたいと思ふ事をやるのです、何が來たつて驚くものですか、たとへどんな事件でも、どんな運命でも……」

これまでになく、熱を帶びて、思ふ事を思ふがままに話し續けた純一の言葉に、敏子は魅せられたやうに、深く聞き入りながら、白い足袋を砂地の上にほの見せながら、藤色のフエルトの草履をはこんだ。行く手の砂の上に、驚くほど長くうつつてゐた二人の影法師は、見るまに愈々長くなり、愈々薄れて行つた。誰も人の歩かない砂の上には、二人の足あとのみが一筋に印しつけられた。そして、手近の網小屋のところまで二人が辿りついた時には、もう日は全く落ちて、黄昏の色はあたりをすつかり包んでしまつた。物音はもう絶えてしまつて、渚にくづれる波の音ばかりが、一際高く聞えるばかりであつた。

「ああ、御覽なさい、美保の關の燈臺がともりました」と敏子が深い夢から醒めたやうに言つた。

「ああ……」と純一が目を擧げて見ると、今は黒い影となつた地藏岬の突端に、一點の火光が、鮮かな黃白色をして、不思義な寂しい光射をはなつてゐる。ぢつと見てゐると、ふッと消えてしまふ、そしてまた急にパッと明るくなる。その一定の分秒を侯つて廻轉してくる鮮かな火光は、夕暮の海の上に何事かを語つてゐるやうに見えた。
「少し冷たくなりましたね、身體にわるいでせう……」と純一が敏子の身を氣遣ふと、
「いいえ、ちつと位ゐ冷たくつたつてかまひせん」と彼女は彼の方に寄り添ふやうにして言つた、
「でも、このあたりでやすむことにしませう、ここの網小屋はきたないから、むかうに大きな網小屋がありますから、あちらの方へ行つて見ませう」
人氣のない砂濱に、置き忘れられたやうに、黒い影を蟠まらせてゐるその網小屋は、もう餘程老廢して、藁葺きの屋根が傾いて、風よけの板壁もめくれて、そして、よろけたやうになつた入口のところは、軒下から半ば小屋の中まで引き入れられた小舟のために、すつかりふさがつてゐる程、小屋も小さかつた。その少しむかうにある大きな方の小屋は、比較的新しく出來たものらしく、殆んど一軒の家とも云へるほど立派で、軒も高く、中も廣くて、かなり大きな舟が二隻も引き入れてあるのに、眞中どころがなほかなりあいてゐる位であつた。入口のところにあつた舟は、無雜作に引き入れたままであつたが、奧の方の舟は、舟底を上に引つくり返してあつて、その上には、梁から梁へかけ渡した大きな網が、一杯にひろがつて垂れてゐた。そして、その網のむかうの方には、菰包みのやうなものや、いろんな舟道具などが、ゴタゴタと置かれてゐるやうであつた。二人が中に入ると、忽ち、咽せるやうな潮のにほひが襲つて來た。足もとには、濕つた砂の上に、一杯に海藻が落ち散つてゐて、波の引いたあとの渚のやうに思はれた。見ると、棚のやうになつた一方の壁の方に、澤山の網が、綺麗に疊んで重ねてあつたので、純一はそれを引き寄せて、小舟の艫の板の上に敷いて、

「これにかけるといいでせう」と言つた。
敏子は夜目にも白いハンケチを取出して、それを網の上にひろげて、
「これにおかけなさい」と純一に言つた。
「いや……」と言つて、彼は敏子をそこに腰かけさせて、自分は暫く立つた儘、ぢつと小屋の外の夜空を眺めてゐたが、袂から煙草を取出して、パツと火をつけた。その火光で、彼女の顔がほのあかく照らし出されて、ぢつとこちらを見上げてゐるやはらかな眼遣ひが、彼の胸に沁み入るやうであつた。
「おかけになりませんか、わたしの傍へ……」と敏子が、實に親しい聲で言つた。
彼が腰をかけると、二人の身體は、殆んど相接して、彼女の白い爪先が、彼の眼の下にあつた。
海はそこから、なだらかな砂濱のかなたに、斜めに眺められた。燈臺の火は、愈々はつきりと、明るく照らしては消え、消えてはまた照らしてゐた。海の上はもうすつかり暮れて、もうそこここに漁火がちらちらと波間に躍りはじめてゐた。
「あの漁火はほんとにいいでせう」と敏子は言ひ出した、「こちらへ來た晩に、あの漁火をはじめて見た時には、何ともいへぬ氣持になつて、長いこと我れを忘れて見入つてゐましたわ。そして、久しく出來なかつた歌が二つ三つも出來たのですよ、ちつとも氣に入つた歌ぢやありませんけれど……歌にはもう自分の本當の氣持は盛れませんわ、どうしたものですか？」
「それはその筈です」と純一は言つた、「詩とか歌とかは、感情が切實になり、生活が緊張してくればくる程、だんだん實感と表現との間のギャップがひどくなつて、不滿足に感じられてくるものですから……僕が文學をつまらなく思ひ出したのも、一つはさういふ自覺からも來てゐるんです……」

「それではあなた今、詩も何もなすつてゐらつしやらないのですか？」と敏子は少し驚いたやうに訊いた。

「僕は今何も書いてはゐません」と純一は率直に言つた、「そんな事をするより、生きた現實にぶッつかつて、刹那刹那の生を、ワンス・フォア・オールに味はつて行つた方がいいと考へますね……然し、僕以外の人の書いたものならば、それとはまた別に、それも現實の一片として味はふことは出來ますよ、ほかの人のものなら兎に角、あなたが手紙の中に書いて下すつたあの歌などは……」と言つて、彼はふッと默つた。

「あの歌……」と不意を打たれたやうに、敏子は言つた。

かうして二人の心には、かの歌が、——人の世のおきてのままに別るとも命のかぎり相合はむ君——といふ歌が、言葉の制限を飛び超えた效果によつて、生々させられた。

「あの歌は、僕は嬉しかつたのです」と純一は漲る感情をもつて言つた。けれどもその後に彼はなほそんなロマンティックな言葉だけでは滿たされぬ空しさが取殘されてゐるのを見た。

その時、彼の想念に上つたのは、彼女は既に人妻であるといふ事であつた。彼女が何もかも知り盡してゐる女であるといふ事であつた。

「どうせ自分がどんな風に出て行つたつて……」と純一は心に思ひながら、卒然として、やや戯謔の調子で言つた、「こんなとこを見たら、西尾さんが何と言ふでせう？」

「さうね……」と言つて、敏子は別にたじろぎもせずに受けた。それから、ぢつと俯向いて、自分の足もとを見てゐる横顔が、外から入るわづかな薄明に、ほのかに浮んで見えるばかりであつた。

「友一郎が見たところで、それでどうしませう、よしんばこんな風にしてゐたとて……」と彼女は殆んど彼が氣が付かないうちに、彼の手を強く握つて、それを自分の膝の上に引き寄せて、少してれたやうな風に、

「少し熱があるのでせうか、それともあなたのお手が冷たいのでせうか」と呟いた。

「さあ……」と言つて、彼は直ぐに一方の手を、彼女のやはらかな額に當てて見たが、さしたる熱のけはひはなく、さらさらとした髪の毛が、彼の手にたとへがたない愛着の感觸を與へた。かうした彼の遣り方に、彼女は明らかに刺戟されて、盛り上つてくる感情の過剩のためか、暫く默つてゐるうちに、少し呼吸がせはしくなつたやうに見えた。

いつの間にか、純一は自分の方から彼女の手を握つてゐた。たちまち彼は、電氣のやうなものが骨身にとほつて、哀切な鳥の心臟のやうに、微かに脈うつものが感覺せられた。彼の掌の中に、やはらかな、暖かいものが、わななく小音樂に打たれた時のやうな、悲しいとも嬉しともたとへがたない心持の中に沈んだ。その時、ややほつれた前髪の一束をその上になびかせた彼女の面は、つと持ち上げられた。そして、彼に渡してゐたその手を、彼の頸のところに卷いて、ぢつと瞳を閉ぢたそのほの白い顏が、水の上にゆらめく花のやうに思はれた。ある押へ難く抗ひ難い力が、彼を推した。彼は自分の腕を彼女の肩にまはした。そして、その靜かに少しく開かれた、やはらかな唇の上に、長い、長い年月の熱望が、火のやうに燃えつくのを感じた。熱烈な思ひ、この初めてのキス！　それはこれまでに、それとはあらはに考へられないものではあつたが、それこそは、二人にとつて、新生の日の誓ひの最初の典物ではなかつたか！

空に靜かに輝いてゐる銀河の流れも、渚におとづるる波の音も、すべてのものが、遠く遠く、愛する二人の心からは消えてしまつた。もはや世界もなく、我もなかつた。ただ、時處を超え、地上の制限を超えた、永遠の意識があるのみであつた。

「夢のやうな氣がしますわ……」と敏子が心持ち純一の胸にもたれかかるやうな姿勢のままで、自分が何を言つてゐるのか意識してゐないやうに、そぞろかに言つた、「何だかずつと昔に一度、こんなにしてゐたことがあるやうな氣が

しますわ……」
「多分、さういふ事もあつたのでせう、もし前世といふものがあるとするなら……」と純一は言つた。さう言ひながら、彼は少しく身を引いて、微かに溜息をして、それから、靜かな調子で、
「昔こんなにしてゐた事があつたでせうし、また後の世にも、こんなにしてゐる事があるかも知れません……僕は殊によくそんな氣がしますよ、何處かはじめての場所を通るときなどに、何だか見覺えがあるやうな、一度歩いた事があるやうな氣がする事がありますよ……醫者などといふものは、殺風景な人間だから、それは神經衰弱の特徴だと言つてゐます。神經衰弱でも何でもいい、自分の感じることだけは信じていいではありませんか……また、こんなほのかな記憶ほど、永遠といふ事をおもはせるものはないのですから……一體、健全などといふ事が、そんなに意味のある事でせうか……」と、彼はもとのやうに、彼女の手を、そのひとつひとつの指をまさぐりながら言つた。
「ただ健全なだけ、ならほんとに無益なことですわ、わたしは美しい夢のない健全なんていふものは大嫌ひです……」と敏子は言つて、心持ち肩を彼の方にもたせかけた。彼女はやつぱりうつとりとしてゐる風で、その手を彼のなすが儘にまかせながら、少し濕んだやうな調子で言ひつづけた、
「まだ年の行かない時分に、忘れられない心持で、魂の結び付く人達は隨分多いでせうけれど、こんなにわたし達のやうに、さんざん浮世の苦しみを經て來てから、破れた心を再び結ばれるやうな人はさうないと思ひますわ」と敏子は思ひ入つたやうに言つた、「わたし達はしあはせですわ……」
さうして二人でぢつとしてゐると、網小屋の何處か隅の方で、蟀の啼いてゐる聲が、今更のやうに耳に聞えた。蟀は暫く間をおいては、寂しい聲で、一しきり小刻みな啼聲を立てた。ぢつと默つたきり、見るともなしに見入つてゐる沖の方には、美保の關の燈臺の火が、今は一杯の暗の中に、愈々その黄白の光を強めて、明るくなり、また消えて

はパッと明るくなつた。
「あの……わたしはね、あの燈臺の火を見てゐると、急に美保の關へ行つて見たくなつたわ、いつそもうかうなつたんですもの、あなたと一緒に行きたいと思ふわ」と彼女が上目に、少し甘えてゐるやうな聲をしたのが、純一のある心持を促した。
「いつそもうかうなつたんですもの」といふ敏子の言葉には、此場合、およそ彼女が許し得る凡ての事が、既に言ひ盡されてゐるやうに彼は思つた。
「行つてもいいと思ひますね」と純一は言つた、「僕は故郷の方のいろんな土地をちつとも知らないから、今度は少し歩いてみたいものです。美保の關から松江の方へずつと廻つて、中海と宍道湖のまはりを歩いてみたい、それがあなたと一緒に出來るなら、こんなうれしい事はない。僕はこちらへ歸つて來て、この裏日本の自然が、何とも言へず美しいことを、今更のやうに感じました。これで秋になつたら、どんなによくなるだらう、僕は久し振りに、この裏日本の秋を見るのですから、秋の來るのが待ち遠しい位です。秋になつたら、心ももつと澄んで來るでせう、その澄んだ朗らかな心持で、あなたと一緒に、このひと秋をしみじみと味はひたいものです」
「それがいいわ、あなたには久し振りの秋ですもの……」と敏子は言つた。暫く二人とも默つてゐたが、突然、彼女は、
「まあ、あの漁火の數のふえたこと！」と言つて、つと立上つた。純一も立上つて、二人は肩を並べて、網小屋の戸口のところに立つた。純一は空を仰いで、
「星が澤山出てゐますね……」と言ふと、彼女も空を仰いで見て、それから彼の方をふりかへつて言つた、
「夜の空はもう秋ですわ、あの天の川の冴え冴えしてゐるのを御覽なさいな……七夕ももうぢきですわ、わたしはこ

ちらで七夕祭をしますから、その時ぜひいらつしやいね、一緒に歌でも詠みませう、なぐさみに……」

「さうでしたね、もうすぐ七夕でしたね」

「ええ、さうですわ……笹を立てて、稲の葉の露や芋の葉の露を硯にあつめて、美しい墨色で好きな歌を五色の紙に書いて結びつけて、お團子をおそなへして遊ぶなんて、何てやさしい慣はしでせう、わたし大變好きですわ……七夕がすむと、すぐお盆が來ます、お盆がすんだら、今度こそわたしも自由な身になれるようにしなくちやなりませんわ……」

さう話しながら、二人が砂地の上をさくさくと歩いて行くと、むかうに黒く横はつて見える松林の中に、一點の赤い火が、木の間を縫うて、こちらに近づくのが見えた。その提灯の火を見付けると、斂子は、

「あれは女中たちが迎へに來たんですわ」と、純一の袖をにぎつて言つた、

「まあ、あなたの袖も夜露でしつりしてゐますわ……」

十三

純一は東京から持つて歸つたバスケットの中から、自分の原稿を殘らず取出して、それを小脇にかかへて、裏の菜園に出て行つた。昨夜、濱から四里の夜道を自轉車を驅つて歸つて來るみちみち、彼はこれまでの自分の原稿をすつかり燒いてしまはうと思つた。あんなものを未練がましく持つてゐたとて何にならう、今は再びそんなものを必要とせず、またそんなものによつて生甲斐を見出さうとは思はない自分ではないか、今はもつと直接的な、もつと充實した、もつと熾烈なものによつて生きようとする自分ではないか。今にして、昔の自分をおもふと、腑甲斐ない事、生ぬるい事、影の薄い事が、みじめでたまらない、そんな時に書かれたものが、何かの價値を持つてゐようとは、彼には考へら

れなくなつた。そんなものにやつぱり未練を殘して、わざわざ故鄕にまで持つて歸つた自分の行爲は、實に恥かしい事にさへ今の彼には思はれた。今は一刻も早く、こんなガラクタは滅却しなければならぬ、また、さうしてこそ、自分ははじめて生活に徹したとも云へるし、それによつて、この新しい意欲への勇氣も鼓舞されようと彼は思つたのだ。

まだ朝露に濕つてゐる菜園の片隅の砂地の上に、彼はその幾綴りかの嵩高な原稿を置いて、袂から燐寸を取り出した。が、直ぐには火をつけないで、その原稿を手に取つて見た。一番上にあつたのは、かの巖本閃光に「愛嬌がない」と批評された『二重の叛逆』の稿本であつた。彼はその手擦れのした稿本を手に取ると、この小說を書いた時の昂奮狀態、幾度びとなく夜を徹しての骨を削るやうな苦心と、この小說の受けた侮辱とを、今再びありありと想起した。十年に近い自分の都會生活のあらゆる痛苦と努力との、これが結晶である事をおもへば、さすがに愛惜の情は起るのであつたが、これが自分の天分の頂點を示すものとして殘されてゐるのだと考へると、彼はこの不幸な天分に對する怒りに近い感情が胸を衝くのを覺えた。彼はそこにうづくまつた儘稿本をひらいて、ところどころ讀みはじめた、そして、その或る個所に來ると、ビリツとして、急にそこから飛ばしてしまつた。そこには、今の彼にとつて堪らない稚氣や衒氣があつたのだ。だが、缺點は啻に部分にあるのみではなく、凡てが恐ろしくくだらなく、無意味に思はれるのだ。たうとう彼はそれを投げ出して、

「やつぱり、燒いちまつた方がいい」と自分に言つた、「巖本閃光の批評は當つてゐる、『小說を書くより死んでしまつた方がいい……』その通りだ。所詮、おれは書くべき人間ではなくて、書かるべき人間かも知れない。だが、おれのやうなものの一生に、客觀的に、何かの意味を見出してくれる人もあるまい。かれの生涯は、ただおれ一個のための小說で十分だ……」

『二重の叛逆』の下には、纒めれば一二冊の本に纒められるだけの詩稿や、小說の斷片などがあり、一番下の方には、

彼が歸鄕の日の前に、細谷氏から返して貰つた草稿——今はもう故人となつてゐるかの不思議な人物、渡邊虎造のたのみによつて脫稿した『自死自葬論』が、あんなにも世に布きたいと熱望してゐたその依賴者の期待に反して、今はいかなる方法を以てしても、世に出でる望みのない狀態のもとに橫はつてゐた。彼はそれを見ると、つくづくとかの依賴者に對して、氣の毒の情に堪へられないのであつた。だが、彼が不本意な死をした以上、この稿本もそれに殉じさせた方がいいのだ、元來この種の主張や、理論は、その性質上、當然燒却さるべきものだ。尤も、これは普通の自殺讃美論と同一視する事は出來ないとしても、一體、凡ての自殺肯定論は、その論者自身の自殺によつてのみ、その意義を完うさるべきものなのだ。自ら死ぬ勇氣がなくして、死を讃美する厭世詩人や、作中の人物を悉く死なしめて卑怯な快感を貪る虛無主義の小說家などは、今の社會主義者どものやうな、偶然な去勢者に過ぎないのだ。そして、自分も『二重の叛逆』を書いた時には、正しくそれであつた。そんなものを書くつて事が、既に恥かしい矛盾ではないか。

「みな、燒かう！」

彼はさう叫んで、その『自死自葬論』の草稿を片手にかざして、咄嗟に、その一端に火を點じた。火は紙のへりをめらめらと這つて、見る間に白い煙を立てて、紙間に燃え込んで行く。半分燃え付いたのを見て、彼はそれを砂地に置いて、煙とともに立昇る焰の中に、その稿本が、端し端しから褐色の殘灰に化るのをぢつと見てゐるうちに、彼の心には、狂氣染みた異樣な昂奮が、だんだん高まつて來て、彼は物に憑かれたやうに、神經的に顫へる手付で、今度詩の稿や斷想の稿を、焰の上に盛り上げて、最後に、『二重の叛逆』の厚い稿本を取り上げて、綴目を引きちぎつて、バラバラなつた紙を、一氣にその燃えさかる焰の上に投げかけた。火は今や熱くさへ感じられ出した。かうして、自分にとつて曾つては最も尊かつたものが、今こそ灰になるのだ、愚かな野心と夢想とが、今こそ絕滅するのだと思ふと、彼は破壞の病的な喜びが、一杯に心に漲るのだつた。

「いつかは、この自分自身をも、かうして破壞してしまつたなら……」

眼がボツとかすむ程、ぢつと火を見つめてゐるうちに、それがだんだん暗くなつて行つた。が、まだ灰の上に、文字のあとが、なほありありと殘つて見えるところがあつた。片端の方のまだ燒けない片れ片れを、殘りの火の中心に持つて行つて、少しもあまさずに燃してしまはうと、彼はうつむいて手を動かしてゐた。そして、その方にすつかり氣を取られて、すぐ後へおふでが來てゐたことに、彼は氣が付かなかつた。

「何なさつとりますナ……」と、少し愛嬌を含んだ脂肪ぎつた聲付のおふでの聲が、純一を思はずハッとさせた。彼は面を擧げて、睨むやうに彼女をキッと見た。

「ナニ、何でもないのです」と彼は意識的に冷淡に言ひ放つた。

「大切な書付けぢやございませんか、そげに燃したりなさつて、後で要ることが出來たらお困りなさらうに」と彼女は、一かど自分がそんな風な立入つた事を言つても差支がないもののやうに、馴々しく言つた。それが折角の悲痛な氣分を擾亂された純一にとつて、一層不快でたまらなかつた。

「あなたには、別段關係のない事ですよ、僕が勝手に自分のものを燃やすんだから」と彼は言つた。その調子におふでは取りつく島もないやうに、手持無沙汰になつて、默り込んだが、やがて思ひ返したと見えて、

「そりや純一さんのもんだけに、どげになさらうとええけど、御心配しましたもんだで……燃してええんなら、わしにお言ひ付けになればよかつただに……」

彼女は純一がよそよそしくするのが、もどかしくて堪らないやうに、くどくどと言つたが、彼がもうそれつきりふつつりと默つてうつむいてしまつたので、不滿さうに、ぢつと灰を見つめて立ちすくんでゐるのだつた。

純一は、こんな菜園の片隅などで、おふでと二人きりで向ひ合つてゐるのを、若し叔母にでも見つけられたら、此

の場合、何と思はれるか知れないと思つたので何か言はうとして、ぢつと立つてゐるおふでを見上げた。白い縮みの單衣に、安物の繻子の帶をゆるくしめて、一目にも乳呑兒の母だと知れる大きな乳の存在を明らかにしてゐる胸から腰のあたりにかけて、何處となくしどけない姿を見ると、味のまづい御馳走を山盛りにした皿でも目の前に突きつけられた時のやうな、妙に强ひられるやうな壓迫のうらに、不思議な事には、彼が昨夜、彼女——敏子とあのやうにひたと寄り添うて、手と手とをとりあつてゐた時にも、つゆ感じなかつたやうな、荒々しい衝動を感じるのだつた。

「僕はあちらに行きますから」と彼はおふでに言ふともなく言ひ捨てにして、灰の上に砂を一通りかけてから、彼女にはかまはずに立去つた。

叔母は、純一が昨夜遲く歸つて來た事については、別に何も言はなかつたが、ただいつもより遲くなつて墓詣りに來た廣田の浩藏が、何か言つてゐたから、叔父から小言を言はれないうちにおまへが先きに顏出しをして置くがよからうと、氣を付けてくれた。叔父はどんなにおこつてゐても、こちらから詫びてさへ行けば、直ぐ心が解けるやうな性質ではあつたが、かう一寸した外出にまで一々干渉されては、面倒臭くて堪らないので、純一は馬鹿々々しいからほつて置かうと思つてゐたところが、その日の晝すぎに、千枝子が來て、純一に手がすいてゐたら一寸來るようにといふ叔父の言傳てを持つて來た。

叔母はチラと純一の方を見て、

「ちよつこり行つて來るがええ。自轉車がこはれたで遲なつたとでも言つとくがええぞ」と言つて、千枝子の方を振返つて笑つた。

純一が叔父の家へ行くと、相變らずの忙しさうな店の帳場にすわつてゐた浩藏は、一寸澁い顏をして彼を迎へて、

「此頃はどげなあんばいだナ？」と、毎晩のやうに南の家に立寄つてゐながら、ことさらに訊ねた。けれども、純一

が一向昨夜遲かつた事を言ひ出さないものだから、

「昨夜は何處へ行つとつただ？」と、浩藏は仕方なく自分から言ひ出して、そして、まだ南の家に入つて間もない此の際に、夜にかかるやうな外出は一切しない方がいいとか、もう商人としてやつて行く以上は、昔の友だちとはつき合はないやうにするがいいとか、新聞は兎に角書物なんかはもう見ない方がいいとか、店の方の事も、早く次郎がやつてゐた位に切りまはせるやうになつてくれんと困るとか、例のとほりの說教をはじめた。純一が我慢しておとなしく聞いてゐるうちに、浩藏の顏はだんだんやはらいで來て、

「わしだつて、おまへが年が年中、南の家にすくんでをれとは言はんだで、氣がくさくさしたら、遠慮なく自家へ來るがええ、そして市郎とでも千枝子とでも話をして、身體を休めるがええ、今日はまあゆつくりして、お茶でも飮んで行け」と言つた。

純一が裏の市郎の二階へ行つて見ると、彼は裸體で寢ころがつて、上の男の兒を相手にして、紙袋の中の煎餅をかじりながら、貸本屋の表紙のついた『文藝倶樂部』を讀んでゐたが、一度に澤山借りてくると見えて、そのまはりには、講談本の『猿飛佐助』だの、『カフエー夜話』だのが散らばつてゐた。

「よう」と彼は純一を見るとむくりと頭をもたげた、「此頃は景氣はどうだえ……まあ暑いから裸になりたまへ、かうしとると幾分凌げるよ」と氣樂な調子で言つた。

「君はいつも元氣でいいね」と純一が、彼の暢氣な樣子を笑ひたくなつて言ふと、

「いやア、元氣どころか、此頃は親父とは衝突して、口も利かんでをるんだぜ、それにワイフは子宮病で里に歸つとるもんで、弱つとるんだ」と言つて、彼はさも弱つたといふやうな表情をして見せた。

「子宮病が早く癒つてくれんと困る、松江の病院に入れようかと思つとるが、何分松江だと遠うてナ、米子の西尾が

病院を建てるさうなが、早よ建てりやええにナ……」と、彼はあけすけな無頓着な調子で、愛妻の病氣の事を辯じ立てた。あんなに生眞面目に商賣大切と店に構へ込んでゐる叔父と、かうしただらしのない市郎の樣子との著しい對照が、純一には今更に驚かれたが、世の中といふものはこれだから立つて行くのかも知れないと彼は思つた。

彼には、忙がしい日が毎日のやうに續いた。彼は常七を相手にして、この盆前までに質置人にくばる流質や利息の書付けをこしらへた。そして、それが出來上ると、今度はそれを一々屆けに行かなければならなかつた。遠い村々には、常七が自轉車で出かけて行つたが、近まはりには、彼が叔母から道筋を聞いて出廻つた。行つて見ると、逼迫の樣子のまざまざと見えるやうな家が多かつた。川一つ隔てたむかうには海水浴場が出來てゐて、賑はつてゐるのに引きかへて、不景氣さうに細々と並んだ漁師村や、見るからに燻んだ裏田圃の百姓家などを廻りながら、彼は質屋といふ家業の意義や、田舍の人の苦しい生活やを考へずにはゐられなかつた。

彼はかうした質屋の生活が、日増しに厭はしくなつて、たとひ一日でも、こんなに日をすごす事が、全く無意味に考へられて、早く何とかしなければならぬと思つた。彼は南の家を出てしまひたかつた、彼の性情から云つても、彼の過去から云つても、こんな生活は實際堪らないものであつた。殊に、彼は敏子と二度目に會つて以來、一刻も心が安まらない狀態にゐた。もつとしつかりした方針を定めて、方向を決定しなければならぬと思つたが、さう思ふ度びに、考へはそこで行きつまつた。或時には、

「いつそ西尾友一郎の新聞社に入つてやらうか、それも反つて面白いかも知れない」とさへ思つた。

敏子の關係が進めば進む程、彼には生きる事が困難に感じられた。彼女はやつぱり東京に出て行つて、新しい生活をはじめようと考へてゐるのだ。また、さうした方が、彼女が西尾家を出るにも出よいと云ふ事も明らかだ。自分としても、到底田舍で生きて行ける人間でない事は、この僅かな間の經驗で十分にわかつたのだ。以前、東京にゐた

時には、どんな荒れた海邊の茅屋でも、二人が一緒に住めたなら、それで生きて行けるのだと思つたが、それもやつぱり夢想家の夢想にすぎないのだ。殊に、彼の見た彼女の生活は、百萬長者の若夫人の生活であつた。彼女がその虚榮の奢りから本當に蟬脱して、自給自足の貧しい謙虚な生活をはじめ得ようか、此の地方に於てはもとよりの事、よしんば二人で東京へ行つたところで、果して彼女は自分で考へてゐるやうに生きられようか、彼には疑はしい事に思はれずにはゐないのだ。

「いやいや、そんな事は問題ではない。自分としては、要するに、彼女を得てしまへばいいのだ、自分の望むものは、彼女の靈肉であつて、彼女と共にする日常生活ではない」と、彼は心の茫漠とした視野の中に、ただ一筋に進んで行かうとする指點を定めた。

「日常生活ではない……」その考への中に含まれた矛盾は、彼の理知にとつては、測り難い深淵を指示したが、なほかつ、「生は刹那の燃燒であつて、その持續ではない」と彼は思つたのである。

七夕もあと二三日のうちに迫つた。敏子の言つたやうに、此の裏日本の地方に、今も昔のやうに行はれてゐるこの優美な年中行事は、彼にとつてもなつかしいものであつた。今は世に亡き祖母の小さな店で、彼のすごした幼年時代には、どんなにこの七夕の祭りや盆の祭りは、樂しく待ち遠しいものであつたらう! 笹を立ててそれに五色の紙を飾り、お團子をそなへて、祖母と一緒に、赤や靑の紙にいろんな繪を書いたり歌を書いたりして、もうつるすところのない迄に笹に結びつけたそんな樂しみが、彼の心にいきいきと蘇つて、敏子の言つたやうに、あの松林の中の別莊で、彼女と二人差向ひで、そんな風にして一夕をすごす事は、何といふ待ち遠しい事であらう!

そんなに彼が心で思ひながら、常七と一緒に働いて、仕事に一きりつけて、少し寛ろいで、店で話してゐた午後であつた。見馴れぬ女中風の女が、手紙をもつて純一をたづねて來た。その手紙を見ると、思ひがけない西尾宏からの

もので、「僕は昨日こちらに歸つて來た、今不老園に來て一杯やつてゐるから、直ぐやつて來ないか、皆非常に待つてゐる、いろんな話もしたいからネ」と書いてあつた。

その女中が歸つて行くと、常七が純一を振返つて、

「あれは不老園の女中ですネ」とにこにこして言つた。

米子の西尾の息子からと聞いて、叔母はそんな服裝ではいけないから、着物を着替へて行くがええと言つて、古い箪笥の抽斗から、次郎のためにこしらへて、まだ一二度しか手を通さなかつたといふ上布の單衣と、堅絽の單羽織と、それに質流れであまりよかつたから取つて置いたといふ博多の角帶とを一揃へ取出して、その服裝に、白足袋を穿くようにといひつけた。

「こんな商人風の服裝で、西尾宏に會ふのは面白い」と考へながら、純一は家を出た。

川端の農家の前を一二町下つて、大川の橋を渡ると、そこに釣をしてゐた子供達が、皆な目を擧げて彼を見た。川水は靜かに流れて、靑い蘆が涼しさうにそよいでゐた。そこから海濱へ行く道に入ると、もう海水浴場の騷がしい聲が聞えて來た。川尻の方へ小一町も行くと、砂濱になる手前のところに、新しく松を植ゑつけたり、池を掘つたりして、一寸公園のやうに作つた中に、不老園の籬がめぐらされてゐた。この料理屋兼旅館は、數年前、此の土地が海水浴場になつたのと同時に出來たのであるが、今では此の界隈でのいい料理屋の一つになつてゐた。

離れ座敷の方へ案内せられて、白砂の庭を横ぎつて行つて見ると、すつかり開け放されて、涼しい風の吹き通しになつてゐる六疊ほどの座敷の眞中に、大きいチャブ臺を置いて、もう麥酒の瓶が幾本も並んで、打ち寛ろいだ樣子で、三人の客がゐた。その正面に、床の間を背にして、胡坐をかいてゐるのが、西尾宏であつた。

「やア、暫く」と彼は純一を迎へた、「どうかと思つたんだが、よく來てくれたね」と言つて、一寸傍らの二人をかへ

りみて、「ここにゐるのは、皆僕の昔馴染だ、紹介しようか」と言つた。
「いや、もう紹介ずみですよ、何は兎に角、さあ一つ……」と、そこにゐた靑年の一人が如才なく言つて、純一にコツプをさしつけて、麥酒をついだ。この痘痕ともニキビの痕ともつかぬむらのある赭黑い顏をした、唇の薄い男は、此前純一が友一郎の新聞社で會つた村田愁羊といふ男であつた。村田の橫の方には、あの折り新聞社の二階の上り口で出會つた井川とかいふあの不格好な男が、小さい眼をしよぼしよぼさせながら、ニヤニヤと默つてゐた。
「ア、さうだつたネ、君は新聞社へ寄つたさうだからネ、ぢやア、君ももう知つてるんだらう？」と、宏はその傍らでニタニタしてゐる井川をかへりみて言つた。
「ウーン、一寸見たばかりだ……」と、彼は訥るやうに言つて、宏と純一の顏を仔細らしく見くらべた。
女中が新しい料理の皿と、煙草を四つほど盆に載せて持つて來ると、宏は麥酒をもつと持つて來るように言ひ付けた。
「君はまたひどく殊勝な服裝ぢやないか、すつかり堅氣になつたとでも云つた寸法かネ？」と宏は女中の後姿から純一の方に眼を移して言つた。
「あア、堅氣な商人になつたのだ、もつとも、まだ見習ひ中だがね」と純一は笑つて、コップをグッと乾しながら、見るともなく宏の服裝を見ると、羽織をぬいだ後は、ほんの寢卷位の手拭地の棒縞の單衣に、濱縮緬の上等の兵兒帶を巻きつけた無雜作な風であつたが、純一の言葉を受けて、
「そりや感心な事だよ、敬服するよ」と彼らしい調子で言ひながら、手をさしのべて、純 のコップに麥酒をついだ彼の手首には、およ二三百圓もするであらうと思はれる、寶石の飾りのついた純金の腕時計が、その淺黑い肌膚の上に、曇り氣のない金の光輝を放つてゐた。

「そりや感心な事だよ」と宏は繰返した、「泥坊だつて文士だつて、どちみち泥水稼業は同じだからナ、すつかり足を拔いて堅氣にならうツてのは、なかなか容易ぢやないからナ……それにしても、よく思ひ切つて宗旨替をしたもんだネ、ところで、商賣は何だネ？」

「質屋さ」

「さうか……質屋か、堅氣の中でも堅氣な商賣だよ、品物を取つて金を貸すんだから、こんな手堅いことはないからネ。から言つちや失敬だが、君としてはあんまり氣が利きすぎてるよ」

「民衆の中へですネ」と村田が口をはさんだ、「質屋はなかなかいいですよ、質屋といふと世間ぢや輕蔑するが、間違つてゐますよ、こんな貧乏人にとつて有難い商賣はありませんからネ、書齋から街頭へ出たあなたの勇氣には感心しますよ」と言つて、彼は皆の顏を一わたり見た。

純一は、こんなに自分の境遇を、一場の戲謔の種にされながら、腹立たしい氣が起らないばかりか、この自分が少しも痛痒を感じない、謂はば借着の身にむかつて、宏に彈丸を打たせるのが、面白い氣さへした。

「君がそんなつもりで東京を引上げるのだつたら、僕にひとこと言つてくれてもよかつたネ」と宏は調子を變へて純一に言つた、「君が淀江に歸つてるツて事を、つい昨日、こちらで知つたのだ」

「知らせうとは思つたんだが、急いだもんだから……もつとも、江添にだけは會つた……養育院に訪ねて行つて、預つてゐたノオトをかへしてやつた、兎に角、あの男にとつては大切のノオトなのだから……」

「フン、江添のノオトか」と言つて、宏は厭やな顏をして、純一の顏をジロリと見たが、わざとアノスケな言ひ方で、

「成程、君は几帳面な男だよ！　あんなノオトなんか、わざわざ返してやつたところで、何の役に立つものかネ、先生、死にかかつてゐるんぢやないか、よしんばさうでなくつたつて、あれで小說が書けてたまるものか……あんなもの

なんか、鼻紙にでもしッちまへ、だが紙がかたいからさうもならんかナ……全體、彼の存在そのものが誤謬だよ、何の想像力も藝術的天分もないものが、見たままの現實を、いくら丹念に書き取つたところで、それが何になるものかネ、僕もはじめはそれ程とは思つてゐなかつたんだが、先生、いつも僕の顔を見ると、いい材料があるから書け書けと言つて、ノオトを貸したがつてゐたもんだから、大阪日日から長篇をたのまれて、何を書かうかと思つてゐた時、兎に角そのノオトを借りて見たのサ、ところで、讀んで見ると、一向役に立たんのだ、下らん事にばかりムキになつてゐて、藝術的意味のある事にけてんで目を着けてゐやしないんだ、あんなものをわざわざ養育院まで借りに行つたかと考へると、癪にさはるよ」

その宏の言葉の殘忍な調子が、純一を刺戟した、然し、もう彼は以前のやうに、宏を相手に激論しようとは思はなかつた。

「江添の存在そのものが、誤謬であるとは君らしい面白い批評だね」と彼は平靜な調子で言ひ出した。「昔僕等がよく話したやうに、彼の藝術觀は確かに誤謬だつた、然し、人間の價値は、その藝術觀や、文學的天分にばかりかかつてゐるわけではなからう。君も最後に會つた一人として、屹度それを認めたらうと思ふが、彼が養育院の瀕死の床で、最後に到達した心境は、僕は立派な心境だと思つたよ。立派な作品さへ出れば、誰が書いたにしても、僕は喜ぶと彼は言つた、それはどんなに無價値なものかは知らないが、彼はそのために、自分の集めた材料を一切提供したいと言つた彼の天分はどうであらうと、私心なく藝術を愛する彼の氣持には、藝術至上主義者の君なんぞは、誰よりも同感しさうに僕は思ふがね。僕から言ふと、彼がどんな傑作を書いた事よりも、彼があの心境に到達したことに意味を認める、それだけでいいぢやないか、人間としてそこ迄行つたら、もう藝術上の問題なんかどうでもいいのだ。そこに廣い自由な天地が展けるのだからね」

「それは詭辯だ！」と、今迄默つてゐた井川が、突然唸るやうに言つた、「そんな事はえらくならんものの自慰的な自己辯護にすぎん、そんな養育院に入つてる男の心境なんかがえらいもんなら、えらい人間や天才なんかは、皆駄目になつちまふぢやないか、そんな事は卑怯な人間の逃避的な遁辭だ！」

「それはさうかも知れないがネ、まあ、そんな堅苦しい話はよさう」と村田がとりなし顔に言つた、

「井川君、一つ飲みたまへ」

「いや、僕は海へ入るんだから、麥酒は今飲まん」と井川はそッけなく言つた。

「成程、さうだつたネ、ぢや食ふ方でもウンと食ふんだネ」と村田は輕く片付けて、宏と純一の顏を見ながら言つた、「兎に角大いに遣りませう、人間は華々しく遣れるだけ遣らなくちやいけませんよ……この西尾宏君のやうに、積極的に生きて行つて、勝利の榮冠を贏ち得たら、それ以上のえらい事はないですネ」

「そんなに賞めるなよ、僕ははにかみ屋だからネ」と宏が笑つて、話を打ち切つた。そして彼は、純一の顏をぢつと見ながら、

「君は僕をいい氣持になつてウダつてゐるやうに思つてゐるらしいが、それは同情がなさすぎるよ。僕は苦しいだよ、何しろ此頃はちつとも書けないところへもつて來て、盛んに催促をされるのでネ、材料はなくなるし、東京を逃げ出す外はなくなつたのサ……」

「そんなに材料がないんでしたら、此頃米子で問題になつてゐる橋本げんの事件などは、いい材料ぢやないんでせうか？」と言つて、村田はかの良人を毒殺した女の事件を持ち出した。

「よくあるやつだネ」と宏は一向つまらなさうに言ひ捨てた、「僕はそんな醜惡な事件には、てんで興味が持てないんだ、美しいロマンティックなものでなくちや、書いてもペンが穢されるやうな氣がして厭やだ、僕は殊に此頃その傾向

が強くなつて來たんだ。ドストエフスキイのものなんか、何處がいいんだかおれには分らない、やつぱりロティやダヌンチオなどがいいね……今度『大阪日日』に書く長篇も、一寸ロティ張りのものなんだ、後半は舞臺を上海に取つて、餘程エキゾティックな匂ひの高いものにするつもりだ。それで、その準備もあるもんだから、これから長崎の方へ行つて、そこで夏をすごして、秋になると匆々上海へ渡つて、それから南京へ行つてみたり、西湖に遊んだりして、思ふさまエキゾティック・ムウドに浸つて見たいと思つてゐる……」と宏は言つた。

「上海はいいでせうネ！」と村田は單純に垂涎した、「僕の知つてゐる男で、上海へ行つてゐた男があつて、あんな面白い處はないと言つてゐましたよ。もつとも、あつちの病氣はひどいさうで、その男もすつかりやられてしまつて、頭の髮の毛がすつかり拔けしまつて弱つてゐましたから、氣を付けなくちやいけませんネ」

「うむ、そんな事はないさ」と宏はニヤリとして言つた、「駄目なものは何をしても駄目なのだよ。僕なんぞは、さう脆くまゐるやうな事はしないよ、それにはもう免疫になつてるサ」

「でも、上海なんかに一月も二月もゐちやア、どんなに金がかかるか分りませんネ、いくらでも遣へるでせうからネ」

と村田が宏の顏をまじまじと見て言つた。

「いくら要ると言つたつて知れたものサ、金は東京を發つ時、二つ三つの本屋や雜誌社から前借して來たし、途中で大阪に寄つて、新聞社からも借りて來たから大丈夫だ、それに電報一つ打てば、何處からだつて直ぐ送つてよこす位にはなつてるんだ。文學者には前借が財產みたやうなものだからネ、おれは出來るだけ前借をする流儀なんだ、まあ謂つて見れば、權利の獲得だからネ」

「そりやいいですネ、大家になると違つたものですネ」と村田は井川の方をかへりみて、「羨ましいぢやないか、君」と言つた。

「そりや當然だよ、天才者に對する當然の待遇だよ」と井川は重苦しい調子で言つた。
「ところが、文壇なんてケチな連中の寄り集りだから、井川君のやうに言つてくれやしなくてネ、おれの原稿料がいい値だからと言つて、嫉妬して困るんだ。もつとも、そんな連中に嫉妬させるのは、いい氣持でない事もないがネ」
と言つて、宏は純一の顏を見て、
「巖本閃光が既にさうなんだよ、蔭で何か言つた事が、チラチラ僕の耳に入るがネ、君には分るだらうが、實際えらくなつて見ると、人の氣も付かないやうな處に骨が折れるものだよ。來る奴も來る奴も、おれを利用して文壇に出ようとするんだから堪らない、そんな連中に限つて、おれを無茶苦茶に擔ぎ上げて、人格者だとか詩聖だとか、有りッたけの言葉で賞めるんだ、おれがそんなものであつて堪るものか、お蔭で餘計な反感を受けるし、第一世の中が窮屈になつて、やりたい事もろくにやれやしない。賞める奴に限つて、すぐ後から金を貸してくれとくる、賞め賃といつたところだネ、おれはそんな手合には、いつもかう言つてやるんだ、金は貸さん事はないが、そんな事のために、君と僕との折角の美しい友情を不純にするには忍びないからよさうと言ふと、ギヤフンとまゐつちまふよ」
「そりやうまい擊退策ですネ」と村田がつくづく感心した樣子で言つた。
「舟井がネ」と宏は調子を變へて純一に言つた、「東京を發つ時、偶然夕刊を買つて見て知つたんだが、先生、恐喝取罪で檢事局送りになつたらしい、何でも、何とかいふもぐりの通信社の連中が恐喝事件で擧げられた中に、奴の名もあるのサ、タチのよくない男だから、どうせあんな事になるだらうとは思つたが、あの男らしい行き方ぢやないか」
「さうかね」と純一は言つたが次第々々に窮迫して行つて、たうとうそんな事になつたのかと彼は最後に會つた時の舟井國之助の樣子を思ひ出した。そして、表面狡猾さうに見えながら、一向ダメがつまないで、もつと狡猾な、もつと奸智に長けた人間ならば、そんな法網にひツかかるやうなヘマな事はしないであらうに、たうとうさうした暗いど

ん底へと墮ちて行つた舟井の末路を憐れに思つた。舟井國之助によつて聯想される當時のグルウプの靑年達については、宏は殆んど思ひ出しもせぬと見えて、別に話し出しもしなかつた。けれども純一は、舟井に聯關して、宏が弄び、そして自分が同情して結婚しようとまで思つた冬子の事を思ひ出した。

「舟井といへば、冬子は請負師の細君になつてゐるといふ事ぢやないか」と純一は宏の顏を見て言つた。

「さうだつてネ」と宏はいかにも無關心に受けて、「いい世話女房になつてゐるだらうよ」と言ひ捨てにした。

「僕は女の問題なんか、實際厭やになつたのサ、十八九の若い女なんかと來ちやア、殊に堪らなく厭やなんだ。いつの間にさうなつたか知らんが、考へて見ると、おれも寂しい人間だ。最近、君も知つてゐる小花園子が、結婚を正式にしたがつてゐるんだが、僕としては、別に彼女が嫌ひだと言ふんぢやないんだが、氣がすすまないんだ。かういふ氣持を君は知つてくれると思ふがネ、全く僕はナイーヴな人間なんだ。おれのやうな男には、眞劍なラヴは出來ないんだ、實際臆病ではにかみ屋なんだからネ。君は冬子の事で、僕が彼女を弄んだと思つてるらしいが、實は彼女に僕が弄ばれたんだ、これは訂正しておかなくちやならんがネ。實際、僕はラヴの場合でも、それが遊戲的だと、大膽にやれるし、從つて成功もするが、眞劍だと、いつでも駄目になるんだ、おれのやうな人間には、自分の好きな女なんか來ないよ」と彼は實際寂しさうに言つた。

「さうだね、君はヴォルテエルみたやうなたちだらうね」と純一は少し意地わるく言つた、「君は結婚生活には不適當な人間だよ、まア、ヴォルテエルのやうにやるといい、一生獨身で、始終誰かとラヴ・アフェッアを持つて行くのだね、人の細君でもいいし、寡婦でもいいが……」

「さう言つてくれると感謝するよ、實際おれは本さへ保存しない位の男だもの、女房なんか保存出來やしないからナ……だが、冬子事件で僕をあんなに面責した君から、そんな事を聞かうとは意外だ、君は最近餘つ程えらくなつたや

うだ。尤も、以前から僕はさう思つてゐたんだ、君のやうなモラリストこそ、かへつて一層恐ろしいんだとね、例へば、人の女房と駈落する位は、正々堂々とやりさうな氣がするネ」と言つて、宏はニヤリとした。
「さうだ」と純一が言つた、「僕はそんな男なんだ、僕は今何でもやるつもりだ、どんな不道德な事でも……」
「そりやいい心懸けだ」と言つたが、宏は純一の出方が意外にキビキビしてゐたので、少し辟易した樣子で、「だが、それだけの心懸けが、もつと早く出來てゐたら、東京でもつとうまくやれたらうにナ、もつとも今からだつて遲くはないんだから、も一度東京へ行くんだナ、折角十年もゐて、サンザ苦勞して、あれだけの地位を築いてゐたんだからナ、惜しいものぢやないか」
「君がそんなに惜しんでくれるやうな地位だつたらうかね」と純一は微笑した。
「だが、天才や大家なら兎に角、さうでないものが、自分の駄目な事を自覺して、國へ歸つて來るのはいいと思ふね」と突然井川がまた口を挾んだ。その調子が愈々露骨だつたので、宏はチラと純一の顏を見てから、井川の方を向いて、
「龍田君だつて天才サ、ただこの天才は、世に容れられないのだ、と言ふより、自分で世に出ようとしないのだネ」と言つた。
「そんなのは天才ぢやない、天才ならどんなにしてゐても、世間で認めるに違ひない」と井川は強硬に自說を固持した。純一はさうした天才論を馬鹿々々しく思ひながら、此の男は何だつてかうして自分に突ッかかつてくるんだらうと、その目の細い、唇の厚い井川の奇妙な顏をぢつと見まもりながら言つた。
「僕が天才であらうがなからうが、そんな事はどうでもいいぢやないか。一體、天才とは何だね、單に一藝に秀でたものならば何處にだつてゐる、人類の教導者ならば、一世紀に一人出るかどうかだ。所詮、そんな空名はどうでもいいのだ。人間は自分の出來るだけの仕事をしさへすれば、それでいいのだ。僕は今、そんな事を大問題にしてゐる文

學者連中ほど、下らないものはないと思つてゐる、そんな事を問題にするのは、幼稚な人間の常だ。少し本當の事が分つてくると、人間は、自分が平凡人である事を感謝するやうになる」

「何と言つたつて、天才は天才だし、凡人は凡人だ」と井川は口を尖らせてどもつた。

「こりやいい、警句だネ」と宏は笑つた。

「文壇の連中なんぞは馬鹿々々しい奴等だ」と純一は井川に頓着せずに言ひ續けた、「彼等の中にまじつて、下らない事を問題にして、昂奮したり、失望したり、人の評判を氣にしたり、大家を訪問してみたりしてゐた事が、今考へて見ると、馬鹿々々しくしか思へない。第一、文學そのものが、どれだけの意味がある？　僕はもう文壇的野心なんか本當につまらないと思つてゐる」

「そりやさうだ、つまらないと言へばおれだつてつまらない。君にくらべれば、おれは幸運かも知れない、然し、やつぱりつまらないサ、だが外により氣の利いた事も格別ないぢやないか、やつぱりかうやつて、文壇の馬鹿どもを相手に遣つて行くより外はないよ。實際、おれは文壇がつくづく厭やになつたよ、今度上海に行くのも、はたから見りや、浮かれてゐるやうに思ふかも知れんが、これでいろいろ考へての事なのだ。ぼんやりしてゐると、直ぐ行き詰つてしまふ、その點にかけちや、文壇ぐらゐ不人情な處はないからネ、僕が一寸一月雜誌に書かないでも、もう彼奴は駄目になつたなんて觸れ廻るんだからやりきれない。本當にいいものを書かうと思へば思ふ程、さういふやくざな文壇の濁つた空氣が、おれの肺にはこたへるんだ。おれのやうな人間は、珠玉のやうな一篇の名作のために、一生かかつてまだあきたらないやうなタチの藝術家なんだ、それがこんな風に、後から後からと註文に追はれて、其日暮しの生活をしなくちやならんのだから堪らない、おれを持ち上げた嚴本閃光に罪があるよ」と宏は終りを例の諧謔の調子で結んだが、その述懷の中には、彼の衷心の聲がこもつてゐるやうに見えた。

「一つ海へ行かうか」と宏が氣を變へたやうに言つた、そしてムッツリしてゐる井川をかへりみて、
「君は水泳の天才だつたネ、一つ君の自慢の泳ぎ振りを、久し振りで見ようぢやないか」と言つて笑つた。
「ウーン、天才ぢやない」と井川はまだこだはりながら、「それにもう昔ほどは泳げんかも知れん」と言つた。
「當年の河童もさすがに老いたりか、村田君も泳げるんだらう？」
「僕はカラ駄目です、自分で泳ぐよりも、女達の曲線美でも見てゐた方がいいですナ」と村田は如才のない調子で言つた。

四人は打揃つて、不老園の裏門を出た。籬の外側には、一例に小松を植ゑつけてあつて、枝折り戸から砂濱に出ると、そこはもう海水浴場になつてゐて、白砂の上には、澤山の小屋掛けが出來てゐて、菓子や果物を賣る店や氷水屋の店などが、軒先きに赤や靑の旗をぶら下げて、客を呼んでゐた。砂濱の中央には、一本の高い柱が立つてゐて、その天邊に、「淀江海水浴場」と書いた大きな旗が潮風に靡いてゐた。柱の下の方には、かなり大きな脫衣所が建つてゐて、そこから海水着を着た靑年や、少年少女達が、ぞろぞろと渚の方へ往き來してゐた。

少し雜沓から離れた處へ行つてから、井川は默つて着物をぬいで、猿股一つになつて、宿屋から借りて來た手拭ひで頭を包んで、バサバサと波の寄せ返す渚の方へ步いて行つた。後から見ると、胴が長くて、足の短い彼の不釣合な體格が、格別目立つて、まるで大きな蟇のやうな感じがした。さうした異樣な體格が可笑しいと見えて、少し離れたところで、女の兒を連れてしやがんでゐた二人の女が、顏を見合せてくすくすと笑つた。彼の身體は、だんだん波の中に短かくなつて行つて、その長い胴がかなり波につかつてしまつた時分に、忽然としてその身體が消えたと思ふと、すさまじい水沫がその周圍に湧いた。

三人はそこにうづくまつた儘、ぢつとそれを見てゐたが、

「どうだい、井川の奴、よく泳ぐぢやないか」と宏が言つた。

「泳ぐ時はいいが、あとでさぞ疲れるでせう」と村田がむかうの方の女連れをまじまじ眺めながら言つた。

純一は默つて、ぢつと遠くの方を眺めてゐた。彼の眼の落ちたところには、この砂濱續きに、左手に伸びてゐる夜見ヶ濱の長汀があつた。やや對岸をなすぐらゐに彎曲した長汀には、一條白く波が線を引いてゐるのが、小山のやうに連つてゐる松林の裾に、ずつと先きまで眺められた。松林の彼方には、あの新築の別莊がある、あそこで彼女は今どんなにしてゐるであらう？……

「君は田舍の生活にひどく滿足してるやうぢやないか」と宏が突然言つた。

「さう見えるかね」と純一は彼の方を振向いて言つた、「質屋の生活は面白いよ」

「面白けりやいいサ、おれはまた、此頃人生をどう考へていいか分らなくなつた、つまり、おれは寂しいんだ」と宏は言つた、「君にはさぞおれが幸福さうに見えるだらうネ」

「そんなことはない、以前ならば兎に角、今僕は、隨分君は不幸な人間だと思つてゐる」

「君よりも不幸だらうかナ……」と宏は一瞬複雜な表情をして言つた。

「人間はみんな寂しいのだ、そして年一年寂しさが強くなるのだ、生きてゐるうちはみんな不幸だよ」と純一は、兩手で砂をすくつては、ザラザラとこぼしながら言つた。

その手付きをぢつと見ながら、宏は何とも言はなかつた。暫く沈默があつた。村田がその沈默を破つた。

「ところで龍田さん」と彼は純一に呼びかけた、「明後日の晩、私達の發起で、西尾君の歡迎會が、米子の記念館で開かれるのですが、あなたにも是非出て頂きたいものですが……」

「歡迎會か」と宏は投げるやうに言つた、「君もよかつたら出てくれたまへ、もつとも、君には精養軒の會の時にも出

て貰つたんだから、今度は大分押しつけがましいがネ……僕も實はもう會でもあるまいと思つて、村田君なんぞには斷つたのだが、何しろ親父が乘氣だし、兄貴がまた是非やりたいと言つてきかないものだからネ」

「是非あなたも出席して下さい、實は來て下さるものときめて、發起人の中にあなたの名も入れてゐるんですから……西尾君は此の鄕土の生んだたつた一人の文學者なんですから、僕等も大々的に歡迎したいと思つて、隨分骨を折つてるんです、明日の新聞には、華々しく歡迎の辭も出る事になつてゐます……是非あなたも列席して下さい」と村田がもう一度念を押した。

「明後日ですね……」と純一は少し頭を擧げて、村田の顏を見ながら、暫く考へた。彼の頭には彼女と會ふべき日が、丁度その日である事が考へられた。けれども彼は、「少し遲れるかも知れないが、出ることにしませう」と、きつぱりと承諾の返事をした。

十四

七夕の日には、一日ゆつくり遊ぶつもりで來るようにと、前の晩、浩藏が言ひ置いて歸つたのだつたが、純一は、今日こそ斂子との約束の樂しい日でもあり、また夜は、米子である西尾宏の歡迎會に出席するといふ返事をしてあるので、後で叔父がどんなにおこつたところで、知れたものだとタカを括つた氣持で、午後になるのを待つて、叔母には內情を話しして、行つて來たいと言ふと、

「昨夜、浩藏さんがあげに言つてござつたから、また後でやかましいだがナ……外ならぬ西尾の息子さんのそげなお祝ひなら、行かんわけにもいくまいだらうしナ……」と叔母は暫く思案をしてから、一人で聞き分けをつけるやうな風に言つた、

「まあ行つて來るがええ、だがナ、それがすんだら、當分お友達との附合ひは遠慮させて貰ふようにしておくれ」
しつかりした中にも、女だけに、やさしい情合のある叔母の許しに、純一は感謝しないわけには行かなかつた。そして、何は兎もあれ、かうしてゐる間は、この氣の毒な寡婦の叔母の氣の安まるやうにはしなければならぬと、彼は心に思ふのであつた。

彼は一昨日、不老園へ行つた時と同じ服裝をして、三時過ぎの境行に連絡する汽車で米子に向つた。彼は内心、場合によつては、宏の會はすつぽかしたつてかまはないと思つてゐたが、また冷靜になつて考へると、彼女の望んだやうに、暢氣に七夕遊びをするよりも、今日は彼女には一寸顏を見せただけで、直ぐ會に行つた方が、二重の効果があるかも知れないと思はれた。どちらにしても、成行次第だが、兎に角、かうした商人風の自分の服裝を彼女に見せて、彼女に何とか言はせたかつたし、また宏の會では、必ず友一郎に會ふのにきまつてゐるから、その前に西尾家の若夫人に會つて、その事の彼女に與へる効果を見る事も、彼には興味があつた。驛で汽車を待ちながら、彼は幾通りかの目算を立てて、――その中には、會に行つたなら、思ふさま自由に振舞つて見ようといふ考へもあつた――今夜は面白いぞと自分に言つて見た。

彼は米子で、直ぐ境行の連絡列車に乘り替へて、弓ヶ濱驛で下りた。その驛から、海邊の別莊までは四五町あつた。もうよく知つてゐる道を、彼は松林の方へと歩いて行きながら、あの夜のあんな夢のやうな甘い時を持つた後の彼女の樣子が、いかに變つてゐるであらうかと思ふと、樂しいやうな氣持がした。けれどもまた、芝居氣の多い彼女のことだから、どんな意表に出るかも知れないと、彼は直ぐに自分のイージイな氣持を制した。

門路に入つて、家の方を見ると、今日は障子が閉めてあつて、彼は何となく聲をかけるのがためらはれるやうな感じがしたが、

「此間まゐつた小波村のものですが……」と、彼は出て來た此の間の若い女中に言つてみた。女中は彼の顏を見ると、意味ありげにニコッとして、ぢつとまじまじと彼の顏を見ながら言つた、

「奧樣は只今おやすみになつてをりますが……」

「ひどくおわるいのでせうか？」と純一が訊くと、

「イエ……」と彼女は一寸思案らしく小首をかしげて、「奧樣に伺つてまゐりますで……」と言つて、奧の部屋に行つたが、直ぐ出て來て、

「お目にかゝりますさうで……」と言つて、障子の蔭に身を引いた。

部屋に入つて見ると、斂子は眞白なシイツの上に、水色の裏のついた輕い麻地の蒲團をかけて、ぢつと橫臥してゐた。彼女の生え際の美しい額は格別白く見えて、ほぐらした黒い髮は、白いシイツの上にくつきりと靡いてゐた。枕もとには、朱塗りの盆の上に、小さな藥瓶と並んで、葡萄酒の瓶と、コップとが置かれてあつた。

彼女は、彼の顏を見上げるために、こちらに向いて、その澄んだ眼をパッと見張つてゐた。

「どんな樣子です、寢てゐられようとは思ひがけなかつた……」と純一が言ふと、

「ええ……」と斂子はうつとりした聲で言つた、「たいしたことはございませんの、寢るほどではないんですけれど、昨夜から少し熱がございますから……」と言つて、半身をもたげようとするのを、純一は押しとめた。

「そのままにしてゐる方がいいでせう」

女中が座蒲團を持つて來たのを見ると、斂子は、

「そのお座蒲團は、そこへお敷き」と言つて、直ぐ自分の蒲團の傍らに置かせた。

「用があつたら呼ぶから、あちらへ行つておいで」と言つてから、彼女は急に思ひ出したやうに、出て行く女中の後

から、
「お勝手の水甕に、サイダアがまだあつたわね、あれをお客樣にぬいて差上げておくれ」と言ひ付けた。
「ほんとに、たいしたことはないんですよ」と敏子は、純一が傍らに來てすわつて、氣遣はしさうに見てゐるのを見ると、言ひ譯するやうに言つた、
「今日はあんなお約束をしてあつたのにね、やすんでゐてはつまりませんね、でも、七夕樣のお支度は出來てゐるんですよ、そこの障子をあけて御覽なさい、笹も立ててありますわ」
言はれるままに、純一は立つて行つて、緣側の障子を開けてみると、緣先きの踏石の傍らに、五六本の竹を柵のやうに立て並べて、その笹の葉の間に、五色の紙が結ばれて、その中には、歌の書かれてゐるのもあつた。その靑い紙に書かれてゐる歌を、純一が讀んでゐると、部屋の中から敏子が呼んだ。
女中がサイダアを持つて來ると、敏子は少し自分も飮みたいからと言つて、コップをもう一つ持つて來させて、女中が二つのコップについだのを見ると、純一にすすめて、自分は床の上に起き上つて、すわつて靜かに口を濕ほした。
「角帶しめてゐらつしやるのね」と彼女はそれに氣が付いて、めづらしさうに言つた、「そんな樣子もよく似合ひますわ、まるで何處かしつかりしたお店の若旦那のやうね、すつかり質屋の若主人になりすましてゐるんですもの……」
と言つて笑つた。
「そんなにうまく質屋になりすませましたかしら、これは死んだ從弟の着物だつたのを、叔母が出して來て、白足袋まで揃へて、すつかり商人にしてしまつたのです、こんなに質屋になりすましたやうに見える時には、當人が質屋が厭やになつて、一刻も堪らないやうになつてゐるのは皮肉ですね」と純一は投げ出すやうに言つた。
「早く生活を變へたいものですね、今の生活が一刻も厭やになつてるはおなじなんですもの」と敏子は、彼の心持を

察するやうに言つた。

「あなたはそれ程にも見えないが……然し、もうこんなになつたら、何事も遣りたいやうに遣るんですね、どうなつたつていいぢやありませんか」

「それはさうですわ」と、敏子は髮をかきあげながら言つた、「今日はゆつくりお話が出來るのでせう？」

「いや、今日はゆつくりしてゐられないのです。西尾宏君が歸つて來て、今夜錦公園で歡迎會があるとかで、僕も出席しなきやならんことになつたから……」

「さう、宏さんが歸つて來てゐるんですか？」と敏子は純一の眼色を見ながら言つた、「それでは米子ぢやゴタゴタしてゐるんでせう、お婆さんが、昨日むかうへ行つたきり、まだ歸つて來ませんもの……」

「此頃は米子の方の消息はわかつてゐないのですか？」

「ええ、誰も來ないし、新聞も見ないし、ほんたうに暢氣ですよ」と彼女は笑つた、そして調子を變へて、「では、そんな服裝で、今晩いらつしやるの？」と訊いた。

「さうです」

「皮肉ね」

「皮肉にもなるだらうし、第一、これが今の僕の身の上なんですからね、この商人姿を見たら、皆、僕の改心を信じてしまふでせうよ」

「改心だなんていふと、是まで何だかひどくわるい事でもしてゐたやうね」

「わるい事でしたとも……尤も、今の方が一層わるいかも知れないが……」

「なぜ？」と彼女はわざと解しかねるやうな顏をして見せた。

「いや、ほんたうはいい事ですよ、だから、徹底的にやるんです。一昨日、西尾宏君が淀江の不老園に來て、僕に使をよこして來てくれとの事だから、行つていろんな話をしましたがね、僕の考へが以前とすつかり違つてゐるのに驚いてゐましたよ、そして、君のやうなモラリストが、反つて恐ろしい、一層思ひ切つた事をやるなんて、あの男らしい鋭い事を言つてゐました」

「これは誰でも驚きますわ！」と敏子は深い意味を籠めて言つた。彼女の顏には、滿足さうな色があらはれて、ぢつと純一の方を見る眼には、やさしい媚があつた。彼はその上、彼女の熱のために乾いてゐる紅い唇が、もつと濕ひを求めてゐるやうに見えて、心の動くのを感じたけれども、强ひてその心を制した。

「僕といふ人間は、極端から極端に行くのです、二つの深淵を持つた心ですね、だから苦しいのだが……西尾宏君なぞは、その點では、僕のやうな危險性を持つてゐない、だから世間からは、大變危險な人間のやうに見られてゐるが、實際は、世間と相容れぬやうな事は決してしない、極くノオマルな男ですよ」

「それはさうですわ、宏さんは悧巧者ですもの……だからこそ、ああしたすばらしい成功をしたんぢやありませんか、どんなに得意だか知れませんわ」

「それは勿論、得意でせう。もつとも、僕には今の心持の寂しさや、文壇生活の苦しさなどを訴へてゐましたが、それも嘘ではないでせう、世間的にえらくなれば、人知れぬ苦しみも多くなつて行くものですから……それに、名聲といふものは、人間を束縛して、世間の奴隷にしてしまふものだから、あの男も今では昔のやうに、好き勝手に振舞ふ事が出來なくつて、不自由を感じてゐるんでせう……」

「さうでせうね、これ迄は隨分いろんな事をしてゐましたものね」と敏子は笑つた、「菊子つて女はどうなりましたかしら？　人好きのしない女でしたつけが……」

「活動寫眞の女優になつてゐるとか聞いた事があるやうです」
「そんなになつたのですか、罪ね……」と言つて、彼女は一寸默つたが、「世間つてものはほんたうにうるさいから、えらくなるのも、あんな人にとつては、かへつて自繩自縛ね」と言つた、そして、自分の言葉が餘りに皮肉だつたのに氣が付いたやうに笑ひ出した。
「あなたにあつては、西尾宏も堪りませんね」と言つて純一も笑つた。
一時間ほどたつてから、純一は急に庭の方を眺めて、
「さあ、もう何時でせう？　僕は時計を持たないから……」と彼は訊いた。
「まだ早いでせう、今日は自轉車ぢやなかつたのですか？」
「いえ、汽車で來ました、そして、今度の汽車で米子へ行つて見ませう」
「今度のは六時でしたかしら……」と彼女は言つて、自分の褥の下から、女持の金時計を出して、それを純一に渡した。そのささやかな時計のセコンドが、生物のやうに、彼の掌で音を立てた。時間はまだ五時を少し過ぎた位であつた。
「まだゆつくり出來ますわ」と敏子は言つた、「今晩は賑かでせう、友一郎も今晩行つてますわ、宏さんよりももつと得意な氣持で……そんな事極く好きな性分ですもの」
その敏子の最後の言葉は、皮肉な調子で言はれたのだけれど、それにも拘はらず、純一に取つては、愉快なものではなかつた。
「今夜會つたら、何かお話ししたいものです……僕ももう質屋の生活が我慢が出來なくなつたから、ことによつたら、西尾さんの新聞社に雇つて頂きたいから」

「今頃そんな馬鹿なこと……」と敏子は愛らしい歯の見えるやうな微笑をした、「それではあんまりいたづらが過ぎますわ」
「さうでせうか、僕はさうは思はないが……どちみち接近しなければならないのだから……然しまあ今はよしにしませう」
「ええ、今のうちは……」と言つて、彼女は思ひ沈むかのやうに、顏色を暗くした。
「もう横になつた方がいゝでせう」と純一はいたはるやうに言つた。
「では、横になりますわ……何だか疲れて、氣が沈んで來たのです、いつもこんな時葡萄酒を飲むと、氣がはつきりするんですよ、あなたもお飲みなさいね」と言つて、彼女はそのほつそりした白い手を差しのべて、葡萄酒を盆の上にあつた小さな杯に七分目ぐらゐついで、ぢつと純一の方を見ながら飲みほした。そして、その後に一杯についで、純一の方に差出して、
「さあ、あなた……」とすすめた。
その葡萄酒を飲みほしながら、
「僕があの家にゐるのが厭やになつたその理由を言ひませうか？」と、純一は彼女の心をたぐり寄せるやうに言つた。
「どういふ理由ですの、いつかおつしやつてた女の方のことでも……」と敏子は向きになつた。
「さうです、その從弟の未亡人に困るからです」
「どんな風にお困りになるの？」
「その說明は一寸むづかしいが……ただ僕としては、厭やで厭やでならないのに、むかうでは頻りに接近してくるんです」

「餘程あなたを好いてゐるのだわ」と敏子は言つて、明かに昂奮しながら言つた、

「早く出ておしまひなさいよ」

「出て何處へ行きます？」

「…… ………」

敏子は默つて、そして考へ込んでゐたが、

「此處だつていいぢやありませんか」と呟くやうに言つて、そして疲れたやうに横になつて、

「お蒲團をかけて下さいな」と言つた。

　そんな彼女の言葉が、彼には面白かつた。何とも知れずいぢらしい氣持で、彼が蒲團をその頸の傍までかけてやると、彼女は感情をこめた眼で、ぢつと下から彼の顏を見上げて、何だか込み上げてくる物があると見えて、その睫毛には、涙のやうな濕ほひが見えた。純一は、彼女のさうした情感に、巻き込まれて行くやうな氣がした。

　いつの間にか、彼の手は、柔かな蒲團の下に引き入れられてゐた。

「ほんとに今日はつまりませんでしたね」と彼女は詫びるやうに言つた、「そのうちに、是非來て頂戴ね、なるべく早く……そして今晩のこと聞かせて下さらない？　隨分面白からうと思ふわ」

「當分出て來られないかも知れませんが、然し、都合のいい日が分つたら、いつでも來ますよ……今度は僕の思つてゐる事をすつかりお話ししませう、僕の東京での生活の暗面なんかも、「すつかり話してあげませう」と純一は複雜な意味を彼女に投げかけるやうに言つた。

「みんな……どんなことでもうかがひたいのよ……」と敏子は言つて、そつと彼の手をはなした。

「もう僕は出かけませう」

「では、行つていらつしやい、あんまり遲く行つても工合がわるいでせうから……」
彼が立上ると、彼女は小さい聲で言つた、
「あの人と出來ることなら、そ知らぬ顏なさる方がいいわ、どうせつまらない話ししかない人ですもの……」
「そんなに心配になるんですか？」と彼は思はず彼女の顏を見返して言つた、「大丈夫です、馬鹿な事をしやしませんから」
敏子に別れ、別莊を出て、砂地の傾斜を停車場の方へと歩いて行きながら、彼は彼女の別れ際の所作を考へてゐた。彼女も苦しいのだ、然し、今となつては、どちみち苦しみは避ける事は出來ないのだから、一思ひにこの瀨を乘り切つてしまはなくてはならない、さう思ふと、彼は愚圖々々と時間を取つてゐる今の狀態が、我慢が出來なくなつた。
「これから引返さうか、西尾宏の會なんかどうでもいいのだ、今から引返して……女中がどう思つたつて構やしない」と、彼は停車場で汽車を待ちながら考へた。けれども、また、今日の會を避けるのが、自分としては卑怯な事に思はれるし、今更引返すのも彼女の思惑も顧慮せられるので、思ひ返して、折りから入つて來た列車に乘つてしまつた。
米子に着いた時には、もう電燈がついてゐた。彼は驛前から眞直ぐに海岸の公園の方までついてゐる奉迎道路を、傍目も振らず歩いて行つた。
公園の中央にある記念館の大きな玄關には、物々しく幔幕が張り渡されて、長い紙に書いた「文豪西尾宏君歡迎會場」の大文字が、薄暮の中に鮮かに讀まれた。玄關の上のところには、圓いテエブルが置いてあつて、そこに胸に赤いリボンをつけた幹事の村田が、いかにも張合ひありさうに腰掛けてゐたが、純一を見ると丁寧に迎へた。
「よくお出で下さいましたネ、さあどうぞあちらへ……」と彼は言つた。
指された會場に入つて見ると、それは三十疊敷ぐらゐの大廣間で、その中央に、靑疊の上にそこだけ絨毯を敷いて、

テエブルや椅子を持ち込んで、急ごしらへに洋風な座席をしつらへたのが、周圍の疊建具と奇異な對照を成してゐた。椅子の數はおよそ五十脚はあつたであらう、けれども、もう二三十人も集つてゐた來會者は、一人もその椅子についてゐるものはなくつて、皆、海に向いてすつかり開け放された大廣間の端近に、座蒲團の上に行儀よくかまへてゐた。大抵、小學校の教師や中學生などで、中には會社員らしいオールバックの頭も見受けられたが、その上座にあたるところに、一人の老人が、金緣の眼鏡に、折目正しい袴を穿いて、キチンと端坐してゐた。純一が入つて行くと、老人は振返つて、まじまじとこちらを見てゐるので、彼もよく見ると、それは彼が小さい時通つてゐた小學校の校長であつた。その時分から今に至るまで、ずつと勤續してゐるのであらう。純一は屹度自分の何處かに見覺えが殘つてゐるのであらうと思つたので、その横の方に行つて、

「先生、私は龍田純一といつて、先生にお敎へを受けたものですが……」と言つて、挨拶をした。

「成程」と、その先生は嬉しさうに頷いて言つた、「龍田さんですナ……あの造酒屋さんの息子さんでしたナ。長い間東京へ行つとられたさうだが、いつお歸りになりましたかナ？」

　純一はこの老先生の相手になつて、二言三言話しながら、不圖、むかうの方を見ると、その座の一番端しの方に、ぽつねんとすわつて此方を見てゐる、彼自身と同じやうな商人風の服裝をした一人の若い男に氣が付いた。純一は直ぐそれが彼女――敏子の弟だと知つた。それは彼が歸郷した翌日、町を歩いてみて、彼女の實家の店先で見たあの顏であつたのだ。年齡は純一よりも二つ三つ下であらうか、色の白い眉の濃いよく整つたその顏立には、彼女の面影も何處かに見えるやうに思はれたが、西尾若夫人の弟として、もつと出しやばつて、幹事の間に立交つて働いてゐても、少しも不思議はない筈であるのに、普通の參會者のやうに、かうして片隅の方に、手持不沙汰さうに控へてゐるのを見ると、勝氣で才走つてゐるその姉とは全く違つた性格である事が感じられた。そんな風な彼が、こんな會合などに

來てゐるのは、別に理解や興味があつての事ではなく、ただ西尾家に對する義理立からに違ひない。さう思つて見ると、純一はこのおとなしさうな靑年が、何だか痛々しいやうな氣がして、何か話しかけて見たいやうに思つたが、それもこの場合繼穗のない事であるし、又、そんなにこの若い男が親しく感じられるといふ事は、この自分といふものが、彼にとつて、やがてはその生活の根源を脅かす恐ろしい人間となつてゐるからではないか、と彼は考へた。この考へが、彼自身を非常に罪深いものに思はせた。けれども先方では、「純一がぢつと自分の方を見てゐるので、多分商賣の方で自分を知つてゐる人かと思つたらしく、おとなしい笑顏をつくつて會釋をした。それは純一にとつて思ひがけない事であつた。と同時に、こんな優しい仕打に對して、單に會釋を返すだけではすまないやうな氣がした、傍へ行つて聲をかけてやりたいと餘程思つたが、

「いや、そんな事はしない方がいい」と彼は思ひ返した。

玄關が騷々しくなつて、五六人の人數がどやどやと入つて來た。見ると、それは新聞社の連中らしく、かの小洲や、岡村といふ靑年の顏などが見えたが、その後の方に、純一は中野信太郎の顏をも見出した。中野は純一の姿を目敏く見付けると、つかつかと近くまでやつて來たが、純一の前にゐる老校長を憚ると見えて、別の方に歩き出しながら、眼で純一を呼んだ。

「あれからどうしてゐたね?」と中野は玄關の方へ出て行きながら、小聲で純一に話しかけた、「どうしてゐるかと氣にかかつてゐたんだ」

「有難う……實は少し君に話したい事があるんだが……」

「聞かう……是非今夜は僕のところに泊つてくれたまへ、差支はないだらう、僕も君に話したい事がある、君、僕はね……」と中野はシリアスな調子で話した、「朝鮮に行かうと思ふんだ、もう近々に立つことになつてゐるんだ、その

前に一度、淀江に君を訪ねようと思つてゐたんだ、丁度よかつた……」

「それはよかつた」と純一は言つた。そして、中野も愈々生甲斐のある新生活に入るのだと思ふと、その思ひ切つた出發を祝したい氣持がした。と同時に、自分自身の焦々しい狀態を顧みて、心骨に徹するやうな寂寥を感じた。

「君に對しては、實にすまないのだがね……」と中野はぢつと純一の顏を見て言つた。その顏には、彼の飾りのない友情が現はれてゐた。

「いや、僕の事は兎に角として……」と言ひかけたところへ、かの岡村といふ靑年がやつて來たので、純一は口を噤んだ。

「龍田さん」と岡村が馴々しく聲をかけた、「いつぞやは失禮しました、もつとお話をうかがひたいと思つてゐたのに、間もなくお歸りになつて殘念でした、實は僕一寸御相談があるのですがね……」

「無產靑年同盟會の事かね？」と中野が年輩らしい口のきき方をした。

「あ、さうなんだ」と岡村は言つてから、白いこまかい齒を見せて笑つて、純一にぐつと親しげな樣子を見せながら、「今度僕等が無產靑年同盟會といふのをこしらへて、此の山陰地方に運動を興して見たいんです、それには東京の方と連絡を取つて行きたいので、あちらでいろいろやつてゐられたあなたに、特に御盡力を願ひたいものですが、どんなものでせう。是非同志を導いてやつて下さい」

「僕にですか？」と純一は言つた、「僕はもう癈兵ですよ、それに今はもう商人になつてしまつて、社會運動など以ての外の事です」

「それもさうでせうが、ただ話して頂くだけでいいですから……近いうちに會合をしますから、是非お出でになつて、東京の主義者の狀況を話してやつてくれませんか、皆中々元氣なんですから、面白いですよ」

「元氣は元氣なんだが、何もしないうちに、觸込みばかり大きくして、檢束を食つてばかりゐちや仕方がないね」と中野が言つた、「みんな遣るなら遣るで、空騷ぎをやめて、地道にやらなくちや……僕には皆どうも覺悟が出來てゐないやうに見えるよ」

「だから、此際龍田さんのやうな先輩に、お話をして貰ひたいんだ……それにみんな大菅左門の戀愛事件について、主義と戀愛といふ事について、深い事を知りたがつてゐるんです」

「それは弱りますね」と純一は苦笑した。

「一體、戀愛の三角關係とか、四角關係とかいふ事から、果してどんな新道德が生れるものでせうか?」

「さあ……」と純一は、その返答に面倒な思ひがして、中野の顏を見た。

「そりや君、さういふもんぢやない、新道德は……」と中野がその話を自分の方に引き取つた。

暫くすると、玄關先に立つて頻りに外を見てゐた幹事の村田が、急ぎ足にこちらへやつて來て言つた、

「オイ、來たよ、みんなお揃ひで來たよ」

「社長が來たんだ」と言つて、岡村は玄關先へ飛び出して行つた。村田が出て來ると、その後からかの老校長や、敏子の弟をはじめ、外の記者達が、純一の前の方へぞろぞろと、顏を揃へて出て來た。

一臺の自動車が、二つの前燈の光を地面に投射しながら、公園の入口でカアブして、大松の下を一直線に玄關先に來てとまつた。

運轉手が飛び下りて、戸を開くと、眞先きに車內から、かの大男の井川がその長い胴をくぐめて下りた、續いて、一人のでつぷりした老人が下りた、老人の後から、西尾友一郞がゆつたりした態度で現れた、最後に、宏が洋服の姿で出て來た。この四人が玄關の敷臺に立つと、社員の賑々しい挨拶と辭儀とが續いた。

かの肥滿した老人——それこそは、西尾惣兵衞なのだ、見たところ六十近い年配だが、頭は少しも禿げず、剛い白髮が分けて撫でつけられ、その顏色はつやつやして、鋭い眼と大きな口とが、いかにも剛愎な、精力家らしい外貌を成してゐた。そして、その首を前に突き出し、足を內輪に、ノソリノソリと犀牛のやうに步く樣子は、不思議に、かの井川のそれを思はせるものがあつた。

「今晚は御苦勞ですナ」と、彼はお辭儀をしてゐる老校長に、尊大な、しかも如才ない調子で言つた。

「いや、どうも盛會で、結構ですナ」と老校長はニコニコして言つた。

「町長ももう來とられるでせうナ?」

「いや、町長さんももうぢき來られませう」と校長は氣を迎へるやうに言つた。

「いや、もう、今晚はみな揃ひますで……」

老校長はかう言つて、西尾惣兵衞を案內して會場へと入つた。その後から、和服姿の西尾友一郎が、仙臺平の袴の絹ずれをさせながら、いかにもこの地方きつての紳士然として、すましこんで足をはこびながら、兩側の社員に輕く眼をやつて、つひに、純一の顏を見た。純一は挨拶をしてもいいと思つた、然し、友一郎は直ぐ眼をそらして、素知らぬ顏で行つてしまつたので、彼はその後姿をぢつと見送つた。敏子が別れる時に言つた言葉が、彼の頭に思ひ出された。

宏と井川とが靴をぬいで、上つて來た。幹事の村田は、宏と一緖に步きながら、暫く何か話してゐたが宏が會場へ入つた後で、純一の方にやつて來て、

「龍田さん、一寸來て下さいませんか」と彼を橫の方へ呼んで、今夜の會に、友人總代として、テエブルスピイチをやつてくれないかと賴んだ。

「僕にですか？」と純一は思ひがけない事なので、問ひ返した。
「さうです、西尾君もあなたにさうして頂ければ、つまり、東京での評判ッてものが、みんなの頭に適確に入るので、願へるならさうして貰ひたいと言つてゐられるのですが……」
純一はこの宏の希望によつて、彼の複雑な氣持を見て取つた。さうして、その底意は兎に角、彼の表面の希望は、今の純一に取つては、同情してやる事が出來た。「よし、自分は出來るだけ長く、出來るだけ効果のあるテエブルスピイチをしよう」と彼は心をきめた。彼はこれ迄殆んど演説などをした經驗はないので、愈々その場に當つて、どうなる事やら分らなかつたが、どうなつたつて構ふものか、やつてやれと云ふ氣持になつた。彼はどういふ氣持か自分では分らなかつたが、正々堂々と友一郎の目の前に立つて、思ふさま自分の言ひたい事を言つて見たかつたのだ。
「僕は演説なんかした事は殆んどないんですけれど、さういふ事なら、一つやつて見ませう」
「やつて下さいますか！」と村田は純一の手を握らんばかりにして、その喜びを表白した、「それは有難い、これで今日の會は申分のない會になります、西尾君も屹度滿足しますよ」
「さあ、どんなものですか、僕は話はまづいんですから」
「そんな事はないでせう、屹度うまくやれますよ、これで僕も幹事として大いに顏が立ちますよ」と彼は單純に繰返して禮を言つた。
村田が大急ぎで立去つた後で、純一は大體の話す事を秩序立てようと、ぢつと公園の松の樹影の方を眺めながら、暫くそこに立つてゐたが、不圖ある考が頭に閃いたので、彼はそこでその考慮を打切つて、會場に入つて行つた。
會場では、村田ともう一二人の幹事が、頻りに忙がしさうに斡旋して、いづれも多少昂奮してゐるやうに、聲高になつてゐた。正面の席には、宏が無雜作な樣子で、然し幾分かたくなつて、少し俯向いてゐた。その左には、彼の父

――西尾惣兵衞が、滿足を顏に湛へて、少し首を前へ突出して、頻りに參會者の顏觸れに目をやつてゐた。その隣には、老校長がゐて、時々、惣兵衞の質問に答へてゐた。宏の右側には、一つ空席を置いて、此の町の重立つた紳商らしい人達が四五人居流れて、その次ぎに新聞社の連中が、ずつと並んでゐるやうであつた。中野はずつと末座の方に、ぢつと純一の動作を見ながら腰かけてゐた。

「龍田さんは一つ此處へ」と村田が案內をしたのは、老校長の次ぎの席で、丁度、會社員や學生たちの並んでゐる側面の卓の上座に當つてゐた。

「ここはあまり上席すぎませう」と純一は村田に言つた。

「いや、どうぞここになすつて下さい」と村田はすつかり昵懇な態度で言つて、そして彼の耳のところで囁いた。

「ぢや、どうぞ願ひますよ、私がその時には、御紹介しますから」

純一は默つて頷きながら、一わたり座を見渡して席に就いた。

西尾友一郎は、丁度宏の眞正面に當る、卓の彼方の一端にゐて、ぢつと純一の方を見てゐた。彼の右の方には、斂子の弟が、內氣さうに肩を落してゐた。

「そこに來られた若い方はどなたですかナ？」とかなり高い聲で、西尾惣兵衞が、老校長に問ふともなく、純一に聞けがしに言つた。

「この方ですかね」と老校長は純一の方を一瞥してから、「この方も矢張り私の敎へ子の一人でして……」といかにも手柄顏に言つた。

「いやもうこんなになられては、昔敎へた生徒でありながら、むかうから名のつて下さらなくちや、名前が思ひ出せん始末でした、顏には見覺えがあるんですがね……あなたも御存知の筈ですか、淀江からこの米子に來て、造酒屋を

營んでゐた龍田淸太郞といふ人の長男に當られますが、長いこと東京へ行つとられたさうで……もつとも、淸太郞さんはなくなられたといふ事を聞きましたが……」と言つて、惣兵衞にこの若者をとりなすやうな態度を取つた。
「ハハア……知つとりますわい、龍田淸太郞さんなら、私の家に多少のあれがあつて、一二回おいでになつた事もあつたで、よく知つとりますわい、あの人も生きとつたうちは、元氣な男ぢやつたよ、多少山師的な男で、大根島に行つて、酒を密造したりしちよつてね……なかなか食へんところがあつたですよ、これがあの人の息子さんですか、成程なア、東京へ行つとられたか……」その言葉の調子には、傍若無人の優越者の輕蔑があつた。
純一はこんな處で、自分の亡き父の名前を耳にしようとは思はなかつた。しかも、山師であつたといふ無遠慮極まる一言で、父の一生を批評し去つた西尾惣兵衞の此の倨傲に對して、彼は沸然とした。「おれの親父が破産して、酒の密造まで企てるに至つたのも、沒義道な貴樣のためぢやないか！」と、彼は惣兵衞を面罵してやりたかつた。然し、今はそれを制止するだけの餘裕の出來てゐる彼であつた。彼は一言も言はず、眞正面から西尾惣兵衞の、つやつやとした色艶の脂肪でたるんだ顏を見返した。その顏が彼に語るものは、かかる人物に特有のあらゆる事であつた。敏子が彼に語つた一つの事件が、今はつきりと、可能事として頷かれた。そんな戲れをやりさうな老爺だと、彼は思つた。
この一言も發せず、挨拶もせぬ、純一の長者に對する不遜な態度が、老校長の意に反したものであつたのは明らかであつた。「龍田さん、この方が西尾惣兵衞さんですが……」と彼は注意した。
「左樣ですか」と純一はただ一言それに答へて、惣兵衞の方への注意を、西尾宏の方にそらした。そこには宏が、この有樣をぢつと觀察してゐる銳い眼があつた。
閉會の辭は、村田が極めて惡い姿勢で、ニヤニヤしながら、語尾のはつきりしない調子で述べた。その時もう二三名のボオイが、麥酒瓶と定食の皿とをガチヤガチヤとはこんで來た。新聞記者達は、ついで廻る杯をグツと呷り、皿

と同時に、もうナフキンをひろげたり、フォオクを手に取つたりした。
間もなく、村田がまた立上つて、
「これから山陰時報主筆本山逸民さんの歡迎の辭があります」と紹介した。
主筆は鹿爪らしい樣子で、西尾宏の成功を慶賀し、鄕黨の一人としての歡迎の喜びを叙するに、辭令の滿艦飾を以てした。
「次ぎには、米子小學校々長宇田川先生に御願ひします」
「さあ一つ言ひませう」と校長は喜ばしさうに立上つた。そしていくらか碎けた樣子で、西尾宏さんの書いてゐるものは、自分は讀まないから知らないが、定めし光り輝くばかりのものであらうと思ふ、私のやうな老人も、時代には遲れたくないものだから、これから一年生のやうな氣持になつて、この西尾さんに就いて勉强するところあらうとするものである、といふ意味の事を言つた時は、西尾宏の顏には、苦笑が現れた。
その間に、二三の紳士風の人と一緒に、町長がやつて來て、宏の横の空席についたので、幹事が行つて、演說を依賴すると、町長は、
「私は遲くなつて參つたのですから、まあ皆さんの御說を拜聽いたしませう」と言つて、直ぐ食事にとりかかつた。
それから、二三名の話がすむと、一しきり皆な皿を平らげた。
「これはまたどうもならん、まづい料理をあつらへたものぢや、何處のだナ？　もつとええ家にはずめばええのに……」と惣兵衞が大きな聲で言つた。
「これは開盛樓のですから、これがまづいとすると仕方がないんですが……」と向側にゐた幹事の一人が、言ひ譯するやうに言つた。

「どなたか一つやつてくれませんか」と、村田はまた立つて、少し伸び上つて、首を左右にめぐらして、名乘りを待つたが、みんな口を動かしてゐるばかりで、立上りさうなものが一人もなかつた。

「では一つ、龍田さん、お願ひします」と村田は言つた。

純一は靜かにフォオクを置いて、俯目のまま立上つた。

「これから友人總代として、龍田純一さんがお話になります」と村田が言つた、「龍田さんは東京に最近までお出でになつてゐた方で、西尾さんの東京での成功の生活に就いて、十分の確證を私達にお傳へ下さる筈ですから、御淸聽を願ひます」

愈々口をきらうとして、純一は顏を上げた。そして、一順會衆を見渡した。彼の眼には、まづ、吃驚したやうに眼を大きくしてゐる中野信太郎、口を少し開けて、細い眼をキヨロキヨロさせてゐる井川、最後に、ぢつと此方を凝視してゐる西尾友一郎の顏が映つた。

「私は只今御紹介にあづかつた通り、龍田純一と申すものであります」と純一は靜かに口をきつて見て、その自分の聲調が少しも顫へないのに、一層の力を得た。立上る迄は、彼は思ひ出したやうな動悸がして、一寸胴顫ひのやうなものが感じられたのに、今はそんなものがすつかり去つて、十分に滿座を呑んでかかる事が出來たのに、自ら驚いた。

「私は西尾宏君とは、十年來の友人でありまして、同君には、長年の友として、屢々學ぶところがあつて、同君と相知るを得た事を、生涯の幸福としてゐるものであります。西尾宏君の文學的成功は、殆んど他に類のないものであつて、今から二三ヶ月以前に、私がまだ東京にをりました時、上野精養軒で開かれたその祝賀會に於ける盛大は、今日この盛んなる歡迎會に臨むにつけて、眼底に歷然として映じ來るものがあります。私はその盛大な祝賀會にも、友人の末葉として出席いたしましたが、今日また、この故鄕に於けるその歡迎會にも列席いたし、しかも今はその友人總

代として同君の東京に於ける成功を、つぶさに語る事を得るといふのは、まことに意味のある事と思ふのであります。かやうに、私は二度も西尾君を祝賀するために出席いたしました、さういふ念の入つた男は、この席上ただ私一人であらうと思はれますが、然し、それには必ず、何かの意味があるに違ひないと私は信じます。御覽の通り、私は只今一個の商人に過ぎませぬ。かやうな席上で、つまらぬ自分の身の上を語るのは、甚だ恐縮するところでありますが、西尾君の成功を語るのについては、それも聊か必要であるやうに思はれるので、敢て申上げることにいたします。私は今、一個の商人として、淀江の町で、ささやかな質屋を營んでゐるものであります。もつとも、私の親父は山師でありましたが、私には親父程の器量もないので、その山師にもなれないのであります」

かう言つて彼が言葉を切ると、向うの方からくすくすと笑ひ聲が起つた。

「ところで、その質屋も、私は好んでやつてゐる譯ではありません、實に絶對絶命、止むを得ない窮餘の手段でありまして、かくなり來つた徑路を考へれば、我ながら憫然の至りでありますが、それも身から出た錆で止むを得ません。と申しますのは、この私も、一度は西尾宏君と同じやうに、否、西尾君に負けないつもりで、一代の文豪にならうといふ大志望を抱いて、はるばる東京に出たのでありますが、才能もなければ智慧もなく、金も力もない身の果ては、御覽の通りの有樣で、實に一敗地に塗れて、復び起つ能はざるに至つて、始めて身の不覺を悟つても、「もう追ツつきません、そこで翻然、悟りました、自分のやうな才能のない、つまらない者は、なまじつか分外の野心を抱いて、東京なんぞにうろうろしてゐるよりも、深く野心を一擲して、田舍に歸つて、一個の素町人になつて、一生を安穩無事に、平々凡々に送つた方が幸福である、かう遲蒔ながら悟つたので、丁度折りよく親類の質屋から養子に來てくれないかとの話がありましたので、地獄に佛、渡りに舟といつた有樣で、一も二もなく、飛んで歸つて來たやうな譯であります、まことに申上げるさへ恥かしい、意氣地のない話でございます」と言つて、純一は前方にゐる友一郎の方を

ちつと見た。友一郎の顔は、さもこそと頷いてゐるやうに見えた。

「然るに、この際に、このみじめな失敗者である私にとつて、先輩でもあり友人でもある西尾宏君は、いかなる狀態にゐられたでせうか。私は今こそ、その光榮ある勝利の華々しさを、郷黨の諸先輩、諸師友諸君の前に語り得る事を、衷心から喜ばずにはゐられませぬ。西尾宏君は、曾つて東京精養軒の祝賀會上に於いて、當代の大批評家巖本閃光先生が申されました通り、疑ひもなく生れたる詩人、生れたる藝術家であります。ラテン人の理智とチュウトン人の情熱とを、一身に兼ね備へたる稀有の天才者であつて、古來のあらゆる大藝術の綜合者であります。かやうに巖本先生は申されましたが、恐らく、本夕、この座に列席せられてゐる諸君は、一人として、この巧妙なる批評に反對せられる勇氣のあるお方はございますまい。私といへども然りです、否、私こそは、他の誰よりも、西尾宏君を立派な藝術家、典型的な藝術家として、推重するものであります。否、私はひとり西尾宏君の作品のみならず、西尾宏君の生活そのものを、一つの立派な藝術だと見るものであります。實に、生活は一個の術です、藝術です、綱渡りが綱の上で身を保つよりもむづかしいのが、處世の術なのです。この世間といふ學校は、生やさしいことでは入れてくれません、それは全く困難な試驗です、とても中學校や高等學校の入學試驗などの比ではありません。（笑聲）ところが、西尾君は立派にそれをパスされた、第一等の成績で及第されたのであります。（宏苦笑）まことに、西尾宏君ほど世間に生きる上に於いて、ふさはしい、すぐれた天分を持つてゐる方は、他に一寸類がありませぬ、謂つて見れば、此の世の中は、西尾君のために創られてゐると云つてもよからうと思ひます。つまり、西尾君はこの世界の王樣であります。私が此の世界を肯定する時は、卽ち、西尾宏君の一切に、頭を垂れて、無上の尊敬と敬愛とを表する時であります」と言つて、純一はピタリと默つて、西尾の顔を見た、彼は宏の顔に、颯と現れた一瞬の氣色ばんだものを見のがさなかつた。

「こりや少し話が大きすぎるぞ、少しお愛憎がすぎますなア」と、惣兵衛が突然横槍を入れたが、その聲には溢れる

やうな満悦の調子があつた。宏はぢつと俯向いた。

「西尾宏君の小説『驚異の再生』や、詩集『樂園の曲』は、日本文壇でこれ迄類のない傑作として賞讃されました、少數の嫉妬深い人間を除けば、誰一人として、その價値を否定する人はありません、その事は、東京に於ける西尾君の祝賀會に、文壇の大家小家、名ある名家で、その席に列ならなかつた人が殆んどない位であつた一事によつても、立派に證明される事であります。全く、西尾君の藝術ほど本當に藝術らしい藝術はない、文學といふものは、つまり、西尾君の書かれるやうなものではないかと、私もつくづく思ふのであります。だから、西尾君の作品が、文壇の視聽を聳立たしめて、文壇の有力者が、こぞつて最高の評價を下した事も、尤も至極の事です。然しながら、彼等文壇の大家といへども、かの『驚異の再生』を全文學の綜合であると迄激賞した嚴本先生その人といへども、なほ此の一介の商人龍田純一ほど、西尾宏君の眞價を識別し得ないものである事を、敢て私は斷言いたします。なぜならば、彼等は單に西尾宏君の書かれた作品しか見てゐないし、また見得ないものでありますか、私は年來の友人として、西尾君の生活その物を見てゐるからであります。そして、西尾君の作品は、多才多能、一事として至らざるなき同君の天分のほんの一片が、たまたま小説や詩の形を取つて現れただけであつて、同君の本當のえらさは、それよりも、全人格としての西尾宏、一個の貴族主義者、一個徹底せる個人主義者、一個大膽不敵なる生活上の藝術至上主義者としての西尾宏其人の生活にこれを求めなければならぬ。同君こそ、生れたる生活肯定者、生れたる新道德の體得者である。苟くも、一人の人間として此世に生きて行かうとする者は、必ず必ず、西尾宏君の生活態度をその模範にしなければなるまいと思ひます。否、ただに西尾宏君のみならず、西尾宏君のやうな天才を、此世に與へて下すつた一大恩人である、當米子町第一の富豪西尾惣兵衞氏、並びにその事業の繼承者である、西尾宏君の令兄、山陰時報社々長西尾友一郎氏こそ、また等しく、かやうに立派な敎訓を世に與へて下さる方である事を知つて、その貢獻に對して、心から

の感謝を捧げねばなるまいと思ふのであります」と言ひ切つて、純一は友一郎の顏を靜かに見た。ぢつと純一の方を見ながら、耳を傾けてゐた友一郎は、此時その角ばつた顋を撫でて、目を逸らした。

「思はず長話をいたしまして、さぞかし御退屈でございませう、もう直ぐすみますから、一寸御辛抱を願ひます。只今も申しましたやうに、西尾宏君の生き方は、此世に生きて行かうとする人間に取つては、絕對無二の意義を持つた生き方であつて、これを否定してなほ生きようとするものは、忽ち破滅の外はないのであります、少くとも、失敗の外はありません。破滅し、失敗せざらんと欲するものは、是非ともこれを學ばねばならぬと思ふのであります。そこで失敗者龍田純一は、これからこれを學ばうと思ふのであります、そして、あらん限りの手段を用ゐて、質屋の店を大に繁昌させようと目論んでゐるのであります」と彼は言ひさしたので、一齊に笑ひが起つた。すると友一郎はつと立上つて、むかうの方の入口から、中座した。その後姿を眺めると、純一は身體中の血が新しくなるやうな感じがした。

「ところで、私の失敗に關連して、一つの滑稽な話を、思ひ出しました、それはバルザックの作、"Le Chef-d'Œuvre Inconnu." 即ち『知られざる傑作』といふ小說に出てくる無名の老畫家の話でございます。この老畫家は十年來誰にも見せないで、一つのすばらしい美人畫を描いてゐたのであります、苦心に苦心を重ねて、一生懸命に描いてゐたのであります、そして、この畫は自分の魂、どうして他人に見せられよう、この畫を見たものは殺す、自分の死ぬ時は畫も燒き捨てるのだと言つてゐたのを、或時、一人の若い畫家が、その戀人をモデルに提供するといふ條件の下に、やつと一覽させて貰つて見ると、これは又何ぞ、そこに窈窕たる美人の姿を見ると思ひきや、朦朧たる畫面は、ただ一面さながら霞を罩めてゐるやうで、何を書いたものやらわからないで、ただその下の方に纔かに人間の足らしいものが見えるばかりだつたと云ひます、Où est l'art? perdu, disparu! 藝術は何處にある？ 失せた、見えぬ！ これが卽

ち『知られざる傑作』です、しかも十年の勞作！　畢生の作！　どうです、馬鹿々々しい話ではありませんか、後でその老人が、その畫を燒いて自殺してしまつたのは、當然の事です。人力以上を企てる藝術家の、これが罰なのです、そんなものが果して藝術でせうか、斷じて否、藝術は西尾君の作のやうに、誰れが見てもその價値を承認するやうなものでなくてはならないのです。そしてこの事は、また我々の生活の方法に於いても、適用さるべきです、かの善、正義、道德などの妄想に醉ふて、人間の本能と相反する禁欲、奉仕、獻身、愛他、自己抑損、自己否定を企てるものは、またかの老畫家と同じき最期を遂ぐべきものと、覺悟しなければならない、これが愚人に與へられる天の懲罰だからです。不肖龍田純一は、今にして昔日の非を悟り、知られざる傑作を一擲して、知られたる凡作を書かうとするのであります、言ひ換へれば、あらゆる妄想をふり捨てて、質屋の商賣を一生懸命に勵まうとするのであります。そして、かやうな重大な敎訓を私に與へてくれた西尾宏君に感謝すると共に、この西尾宏君の立派な世間智が、なほ一般にも十分理解され、尊重されて、諸君が凡て立派な人生の成功者となられたならば、今晩の歡迎會は、實に此上もない尊い有難いものとなるでありませう。これでこのつまらないおしやべりを切上げることにいたします」

一同拍手をした。その拍手の少し治まつた時、西尾宏が立上つた。

「僕から一言申します」と彼は低聲に俯向いたまま言ひ出して、靜かに顏を擧げた、「今日は不肖な私のために、こんなに澤山お集り下すつて、何とも感謝の言葉がありません。厚く御禮申上げます。又、いろいろ歡迎の辭を御惠み下すつた皆樣にも御禮申上げます。皆樣の讚辭は、私にとつては、實は耳が痛いと敢て申上げます。然し、それも皆樣の御親切からであると思ひますから、ただ心から御禮申上げておきます。それから、龍田純一氏には……」と彼は純一の方を冴えた眼でぢつと見て、直接に話しかけるやうに言つた、「君は今晩仰しやつた事を、永久にお忘れにならない事を、私自身希望いたします」

「どうも若い者達は、よくしやべるナ、然し、なかなかうまい」と惣兵衞が老校長を顧みて言つた、
「商賣大切に質屋をやらうといふのは、わしは氣に入りましたわい、こりや親父よりえらいかも知れませんぞ」
「大きにさうですナ！　淸太郎さんはいい跡取りを持たれました……」と校長が合槌を打つた。

十五

「今夜の君の演說には、すつかり驚かされたよ」と中野は、會が終つて、皆よりも一足先きに公園を出て、內町の方へと歩いて行きながら、默つてゐる純一の方に話しかけた、「僕は君が村田の紹介でいきなり立つた時には、どうかしたんぢやないのかと思つて、實はハラハラしたんだ。ところが、ふだんの君とも思へないやうな雄辯ぢやないか……僕は驚いてしまつた、とても初めての演說とは思へなかつた、東京でもやつてゐたんだらう？」
「いや、今日が初めてだ」と純一は顏を擧げないで答へた。
「さうか……それにしては落着いたものだつたね、表面賞めちぎつてゐて、それが皮肉になつてゐるんだからね、實に痛快だつた、僕は西尾宏がどんな顏をするかと思つて、何遍も彼の顏を見てやつたんだ」
「僕は少し調子に乘りすぎた」と純一は少し聲を落して言つた、「いい加減にやめようと思つたんだが、やめられなくてね……」
「あれでよかつたよ、分らん奴から見れば、極端な讃美に見えるし、分るものには、此方の言ひたい事を言つて貰つたやうな氣がして、溜飲が下つたよ、殊に西尾惣兵衞がホクホクしてゐたのは面白かつたよ、宏には二重にこたへたらう？」
「こたへたらう、彼一流の言ひ廻しで、一矢酬いてゐたからね……」

「けれど、もうあゝなつては、西尾宏の敗北だね、あれは君の西尾に投げつけた絶交狀みたやうなものだつたからナ、悧巧な彼が君の言葉の裏を見ない事はない、そこで永久に覺えてをれと、意味深長な言葉をつかつたわけさ」

「勿論、僕はそのつもりで西尾の挨拶を聞いた、僕と彼とは、もともと何でもない路傍の人だからね、今更絶交狀といふのもをかしなものだ。それに僕は何もそんな意味であんな事を言つたのぢやない、はじめは西尾宏に對する出來るだけの好意を示して、彼に華を持たせてやりたいと思つて立つたのだ。ところが、しやべつてゐるうちに、だんだん皮肉な調子になつてしまつて、途中でつまらない事をやつてゐるナとは思つたが、妙に氣が立つてしまつて、自分でどうする事も出來なかつたのだ。今になつてみると、大人げない氣がして、西尾宏がむしろ氣の毒になつた……僕もまだ若いと思つて恥かしい位だ」

「いや、そんな事はない、西尾にはあれ位言つてやつていいのだ、彼の生活の根柢を衝いた實に辛辣なアイロニイだつた……もつとも君の言ひ方が餘りに巧妙だつたので、僕ははじめ君が眞面目に言つてゐるのぢやないかと心配になつたが、物兵衞の名を持出したので、成程皮肉なんだナと思つたよ。西尾の作品を最も藝術的な藝術だと言つたのも、勿論君のアイロニイだらう？　實際、西尾の作品なんかが、あんなに騷がれてゐるなんて、僕には奇怪至極なんだ。成程、手綺麗には出來てゐるが、造花のやうなものぢやないか、單に氣が利いてゐるといふだけで、淺薄な上に、彼の冷酷な性格が至るところ顏をのぞけてゐるので厭やだね。泥沼の上には綺麗な花が咲いてゐても、その下は泥だからね、花だけ見てゐると綺麗だが、僕はその底の泥が目につくので、彼の作品は讀めないのだ。僕は綺麗に澄んだ水のほとりに、だが二三本生えてゐる、そんな風な清純な藝術が好きだからね」

「君の氣持はよくわかるが、現代の文學者から、そんな藝術を望まうとするのは無理だらう」と純一は中野の比喩の巧妙を感じながらも言つた、「濁つてゐるのは、ひとり西尾宏ばかりではない、いや、西尾なんぞはまだいい方だよ。

僕は西尾の藝術家的良心を認めてゐるから、彼が現在のやうな文壇に、身を處して行く苦衷には、同情してゐるのだ。君は早く東京から歸つたし、文壇の内情は知るまいが、知つたら唾棄せずにはゐられまい。もうあなつては、文學ではなくつて、既に政治だね」

「そんなにひどいのかね？」

「さうだ、今の流行作家などと云はれてゐるものの大部分は、救ひ難い俗物で、そして商賣人だ。黨同伐異、權謀術數、雜誌記者を籠絡したり、批評家を懷柔したり、ろくでなしの文學靑年を手なづけて、競爭者の惡口を言ひ擴めさせたり、盛んに claque を用ゐて、八百長の人氣取りをやつたり、そんな事ばかりして、自分達の地位を保つてゐるのだ。そして、そんな卑劣な方便主義が、唯物史觀と合致するなどと思つてゐるのだから堪らない。少し氣骨のあるものや、純粹な感情を持つてゐるものは、そんな中に伍してやつて行くより、自殺でもした方がましだと思ふよ。第一、そんな反抗的な氣持でゐては、すぐ彼等のために排斥されて、文壇外に押出されてしまふだらう」

「文壇でもやつぱりそんな事をやつてゐるのか！」と中野は叫んだ、「ぢや西尾宏が成功した理由も分るわけだね、親爺がさんざ惡い事をして金をこしらへて、その子がその受け繼いだ惡智慧と金の力とで成功する、世の中つてそんなものかも知れないね。不合理なのは、ひとり敎育界ばかりぢやないんだね……僕は今迄文壇だけはさうではないと思つてゐたが、それぢや藝術の權威は地に墮ちたのも同然ぢやないか……」

「さうだ、少くとも僕にとつては、地に墮ちたと云つていい。一體、藝術なんていふと、何だか聞えがよくて、立派なもののやうだが、詮じつめて見ると、人間のいろんな欲望の現れで、謂はば煩惱心の結晶といつていいのだ。だから、文學者だけを俗ばなれのした、淸純なものと思ふのは間違ひだ。いや、他の社會よりも文壇の方が一層ひどいかも知れない。が、文學で生計を立てる事を是認する以上は、そんな卑劣事も容認する外はないだらう。現に天才と云

はれるヴォルテエルなど、その惡辣の親玉だからね、西尾宏なんぞは、そこへ行くと小規模なものだ。文學者としてやる以上は、ヴォルテエル位やつた方が徹底してゐるよ。それといふのも、文學が元來最も世間的なものだからだ、世俗の汚濁の中から咲き出す花だからだ、そこで文學なんて、西尾宏の書くやうなもので澤山だといふ事になるのだ、僕のあの容認は、必ずしもアイロニイばかりではなかつたのだ。文學を絶對的な、第一義的なものだと思つてゐた以前の僕は、まだ幼稚であつた、今ではこの不合理が、單に一時的ばかりでなく本質的にも、文學といふものの持つ必然性かも知れないと思ふやうになつた。だから、文學はそれでいいのだ、僕の結論は結局これだ。ただ僕自身としては、それがいやだから、文學なんて下らない賣文商賣を見限つたのだ……僕のその氣持は、今夜の演說で君も理解してくれたらうと思ふ」

「それは理解した、君がバルザックの『知られざる傑作』を持出して語らうとした眞意は、そこにあつたのだらう？作品の發表とそれに伴ふ世間の承認とを、いや、文字による表現そのものをも否定して、藝術が單に筆でばかり書かれるのでないといふ事を言はうとしたんだらう？」

「まづさうだ、生の至高至純なものは、表現を不可能とし、また表現を要しない、そこはもはや言語を超えた絕對の境地だ、そしてさうした刹那に、自分の生命を傾倒すれば足ると僕は思ふ。自分達の魂の燃燒した刹那が永遠なのだ、その永遠を短かい生の間に生きさへすれば十分だ。文學の力によつて、生の影を捕捉しようなどとは、最も間接的な迂遠な企てだが、それを以て更に世間の承認や理解を求めるなどは、愚かでもあり、弱い事だと思ふ。不合理な世間を否定する以上、藝術は一擲しなければならない。「人生は不合理であり、藝術は無意味である、これが十年の東京の生活によつて、僕が贏ち得た悲しい自覺だつたのだ。それで結局は、自分だけの世界に歸つて、自分だけの滿足を求める外はなくなつたのだ。が、もうさうなると、凡ての永續といふものが、恐ろしく散文的に思はれてくる、生命の

油を一度にパッと華々しく燃え上らせたいのだ。今はもう不朽の名聲なんてものは一笑にも値しない……つまり、僕の考は、つひに藝術そのものの否定にまで到達したのだ……」と言つて、純一は默つた。

二人は丁度、加茂川の下流に架した橋にさしかかつてゐた。橋の手前の廣場に立つてゐる火の見櫓の下には、町内の人達が緣臺を持出して、そこにかたまつて笑ひさざめいてゐた。橋の上にも、浴衣がけの人達が涼んでゐて、その中には、晴着を着た娘達が、橋のてすりに手をかけて、空を見上げては、何か頻りに喋つてゐた。その樣子が、いかにも今夜が七夕の夜だといふことを思はせた。

「ところで、君の演說の最中に、社長が中座したぢやないか、あれはどういふ意味だらうね？」と中野が橋のもとに一寸立止つて、少し微笑して、促すやうに純一の顏を見た。

「何かの意味はあつたかも知れない、今日の僕の皮肉は、宏よりもむしろ友一郞に對して言つてやつたやうなものだつたからね、彼の顏を見ると、何かもつともつと言はずにゐられなかつたのだ。彼は東京で僕が會つた時に、頻りに國へ歸つて身をかためたらいいだらうなどと、餘計なおせつかいを言つてゐたので、僕は一寸、その有難い忠告のお禮を言つてやつたやうなものだ……」と言つて、純一は笑つた。中野もその笑ひの意味を悟つたと見えて、少し小聲になつて訊いた。

「君と敏子さんとの仲を疑つてゐやしないか？」

「まだ疑つてゐるといふ程でもなからうが、僕から言へば、早く破綻が來た方が反つていいのだ」

「それもさうだが……」と中野は一寸小首を傾けて、「彼女に最近出會つたかね？」と訊いた。

「今日の午後、會に來る前に會つて來た」と純一は稍に笑つて答へた。

「ホウ、今日會つた！」と中野は吃驚したやうに叫んだ。

丁度その時、後から橋板を鳴らして疾驅して來た自動車の前燈が、二人の姿をはつきり照らし出して、警笛をブウと鳴らしたので、二人は急いで傍らに避けながら、車上を見上げた。それは會場から歸つて來る西尾の自動車で、車上には、惣兵衞と差し向ひに、宏と井川とがかけてゐた。

「君、井川があの車中にゐたのを見たかね？」と中野は疾驅し去る自動車を目送しながら言つた。

「あア、見たよ、あの男は餘程西尾の家には重んぜられてゐるやうだね」

「それには譯があるのだよ」と中野が言つた、「君は惣兵衞と井川の顏を見くらべて、何か氣が付いた事はないか？」

「あア、二人の顏が何處か似たところがあるので、不思議な氣がした」

「そこだよ、そこに曰くがあるのだ。一體、あの井川といふ男は、西尾宏の乳兄弟といふ事に表面はなつてゐるが、實は血の續いてゐる兄弟なのだ。井川の母といふのは、もと西尾の家にゐた女中だつたんだ、それがあの淫亂な惣兵衞の胤をやどして、生み落したのがあの井川で、母親が西尾家の番頭の井川といふ男の細君になつて、表面は井川の子といふ事にされて育てられて來たので、中學を出る時分迄は、當人は知らんやうだつた。然し、今は自分の親父が井川ではなくて、西尾老人だと知つて、大分要求する腹もあるらしい。いづれにしても、惣兵衞の血を享けてゐるのだから、井川もまた一個の怪物さ。社では社長からの隱し目付だらうといふので、みんなに嫌はれてゐる……」

「いろんな事があるのだね」と純一は言つた。彼は此間、淀江の不老園で西尾宏に會つた時に、井川が何かにつけて宏を持上げて、自分に突ツかかつて來るのを、妙なことに思つてゐたが、彼が宏に忠義立する理由は、それで愈々はつきりして來た。ただ、彼が自分に反感を持つてゐる理由だけは、まだ分らなかつた。

「それにしても、友一郎のゐないのは妙ぢやないか」と中野は思ひ出したやうに言つた、「今日、自分の細君が、好きな男と會つてゐる事なんか知らないで、妾宅のところへでも行つたのだらうよ、益々もつて皮肉だね……然し、考へ

て見ると、君も隨分大膽になつたものだね」

「さうだ、今ではどうなつてもいいと思つてゐるからね、まさかの時には、監獄へぶち込まれる位は覺悟してゐる、人間は生命さへ惜しがらなければ、何だつて出來ない事はないからね……考へて見ると、僕も變つたものだ、昔は善惡だとか道德だとか人道だとか言つて、幼稚な理想論を振廻して、西尾宏なんぞに笑はれてゐた僕が、こんなにならうとは、誰しも想像しなかつたらう。僕自身ですら隔世の感がある。今では、よくもあんなに、善だとか惡だとか、つまらない概念を問題にしたものだと、その頃の自分が笑ひたくなるよ」

「さうかねえ……」と中野は嘆息するやうに言つた。

「善惡の價値問題なんかを、いくら一生懸命に問題にして見たところで、世界は微塵も增減しやしない。いい加減なところで低徊してゐるから、善だとか惡だとか容易に裁斷出來るのだ、もつと徹底的に突ッ込んで考へて行けば、結局一切の事が分らなくなつてしまふばかりだ。一體、善といひ惡といふ、その差別の標準を何處に置けばいいのだ？所謂道德ならば、それは畢竟、時の便宜から生れた方便的なものに過ぎないのだ、人間の本能は、みな所謂道德と反してゐる、道德に規準すれば、死にまで到達しなければ、決して眞に徹底したものとは云へない。以前僕は、この地上で榮えるものが惡で、滅びるものが善だと、かういふ風に考へてゐたが、實は榮えるものも惡でなく、滅びるものも善ではない、絕對に、善もなければ惡もないのだ、つまり、此の世の中は、みんなこれで善いのだ、みんな善いと云ふのは、またみんな惡いと云ふ意味にもなるだらう、が、それはどつちでもいいのだ……善惡などといふ觀念に妨げられないで、もつと物を直接に見て、子供のやうな心で生をつかみたい、何の憚りなく、自由な生命の鼓動を聞き取りたいものだ。要するに、人間は本當に生きたといふ事が出來れば、それで十分なのだ、そして、本當に生きたとは、本當に愛したといふ事だ。僕には今、その外に何一つ信じられるものがなくなつた。或日或時、二つの胸がぴつたり

鼓動を合せた時、その瞬間に死んでしまへたら、それ以上の幸福はないとさへ僕は思つてゐる。おなじ愛と言つても、抽象的な人間愛などといふ注入的なものは、みじめな幻滅と自己欺瞞とで終るだけだ。僕は愛する女性の胸にのみ、人間は『我は生きた』といふ墓碑銘を書き記すことが許されてゐると思ふ……」

「さうだ、僕もさう思ふ！」と中野は欣然として肯つた、「僕がいつか新聞に載せた『近代人の戀愛』で言はうとした事もそれなんだ、君の今言つたやうに、それほど徹底しては言へなかつたけれどね……君がそんな徹底した思想を抱いて、僕と同じやうに、熱烈な戀愛の中から新しい生活を築かうとするやうになつたのは、僕は非常に力強い氣がする。今僕は、君と僕との友情が、以前よりもずつと深いところで、あらためて結ばれたやうな氣がする！」と中野は感激して言つた。

「有難う……實際、そんなに言つてくれる君の友情には、どう感謝していいか分らない」と純一は、中野の顔の輪廓をぢつと見ながら言つた、「僕は本當に孤獨な人間で、友達も少い方だ、東京などでは、殆んど一人もなかつたと言つていい。然し、考へて見ると、本當の友達といふものは、さう澤山あるものぢやない、大抵友達といふものは、利害關係で結ばれてゐるものばかりだから、友達になるのも早いが、別れるのも早い。ところか、君だけは、本當に僕に取つては、運命で結びつけられた友人であつた、子供の時代から、君はいつも僕を庇つてもくれたし、認めてもくれたし、勵ましてもくれた。僕は外面的には、昔、君の期待してくれたやうな人間には、つひになれなかつたが、その代り內面的には、今一層君と親しく結び付けられたのだと思ふと、君がかうして朝鮮の方に旅立つてしまふといふ事を、心から喜んでをりながら、ひとり殘らねばならぬ自分が、どんなに寂しいか知れない……」

「僕だつて本當に寂しいのだ……かうして愈々故鄕の地を再び踏まない覺悟になつて見ると、今更にいろんなものに愛着を感ずる、昨日なんかも、夕方にふと大山を見付けてね、そのまま小一時間も、ぼんやり眺め入つてゐたんだ…

昔、上京した時なんかとは、すつかり氣分が違ふのに驚く位だよ、僕も齡をとつたものさ、然しねえ君……」と中野は言葉を切つた。

「僕はもうここにはゐられないのだ、それに第一彼女が、此の土地にゐるのが隨分つらいらしいのだ、どんなに不自由をしても、どんな難儀をしてもいいから、僕と二人で違つた土地で、誰憚りのない生活をしたいと言ふのだ。そして僕から見れば、彼女にはさうした辛抱も出來るだらうと思ふ……それに今のうちならば、彼女の身體も、旅行して別に胎兒に影響はないと云ふのだ、彼女が姙娠してさへゐなければ、こんなに急がなくてもいいんだけれど……」と、中野は打明けるやうに言つた。

「朝鮮の方では、どういふ風にやつて行くつもりだね？」と純一が訊いた。

「あア、それは心配はないのだ、君も覺えてゐるかも知れないが、僕等が小學時代に敎へて貰つた石原先生といふ先生があつたらう、あの人が今朝鮮の新義州で、普通學校の敎師をしてゐるのだ。それで僕もあんな事で、學校にゐにくくなつたもんだから、休職願を出すと同時に、就職口をたのんで置いたのだ、それが最近になつて、丁度今都合がいいから直ぐ來ないかと言つて來たので、萬事好都合にはこんだわけだ。俸給もこちらとは比較にならん程いいのだし、第一、植民地の生活は、こんな土地のやうな因襲などもないから、どんなに自由で面白いか知れやしない、さう思ふと、實際救はれたやうな氣がするよ」

「それはよかつたね」と純一は言つた、「僕はまたどんな目當があるのかと、實は心配してゐたんだが、それは大變安心した。僕等も君達のやうに、こんなに自由にやつて行ければいいのだがね……」

「君等が？……」と中野はぢつと純一の方を見た、「君等だつて自由ぢやないか、まさか友一郎だつて體面といふものがある、君等を監獄に入れようとは言ふまい、どうせ離緣さ、そしたら何處へでも行けるさ……どうせ君等は東京へ

行くつもりぢやないかね？」
「もともと彼女はそのつもりなのだ、東京に行くといふ事が、どんなにかあこがれになつてゐるか知れないのだ、東京へ行つてああもしたい、かうもしたいと言つて、その生活の方法なんかを考へたりしてゐるやうだ」
「それは感心だね、今の身分を棄てて、自分で働かうと考へてゐるだけでも可愛いぢやないか、そりやいいよ、君ももう一度東京に行つて、しつかりやるといいよ、僕は非常に贊成する」
「然し、それがさう行かないのだ、どうせ西尾の方の始末なんか何とでもなるがね、問題はその先きにあるのだ……つまり、僕は東京なんぞへはもう出たくないのだ」
「なぜだね？」
「今夜の演說や、今の話で言つた通りの理由からだ」
「それもさうだが、それとこれとは又違ふよ……それに愛する女性と二人でする事なら、どんな生活でも忍ばれるぢやないか、實際、愛情の上で滿足がありさへすれば、また別種の勇氣が出るものだよ」
「君ならさうだが、僕はもつと困つた人間だからね、僕は筆で生活するより外の事の出來ない人間なのだ、しかもそれが嫌やなのだから困りものだよ」と純一は事もなげに言ひ捨てた。
「そんな事を言つてゐちや困る」と中野は眞劍になつて言つた、「それぢや一體君はどうするつもりだね？」
「格別どうするといふ當てもないのだ」
「そんな事を言つては困るんだが……それに敏子さんが氣がすすんでゐるのになア」と中野は困惑したやうに言つた。
何處迄もその友人のために考へてやりたいといふ中野の誠意は、その言外に溢れてゐた。
「それぢや君、僕と一緒に行かないか」と、中野は不意に顏を上げて、はずんだ調子で言つた、「むかうへさへ行けば、

どうせ何とかなるからね……それだと實にいいよ」

「朝鮮へか……」と純一は言つて、一寸間を置いて、「それは何とかなるだらう、然し、僕はこんな困つた人間なんだ、君のやうに教師の出來るといふ柄ではないし、第一、敏子が朝鮮でやつて行けると君は思ふかね？」

「さあ、それは何とも言へないが……だが、やらせるさ、君の力で……」

「さうだね、僕が君だつたらうまくやつて行けるだらう、そして、敏子が君の人のやうだつたら、尙更ら申分はないのだがね」

「敏子さんは、そんなに蠢せない人だらうか？」と中野は言ひ返した。

「身體が弱いんだ……その上、これ迄の生活があんなだし、贅澤には慣れてゐるし、僕は彼女が東京でやつて行けるといふ事さへ信じてゐないのだ」

「それは君のいつもの悲觀主義から來るんぢやないかね、もつとも、僕は最近の敏子さんは知らないが……女ッてものは、實に意外なところで勇氣のあるものだよ、僕だつて、僕のあれがあんなに周圍と戰ふ決心をした時には、實際驚いたからね。敏子さんだつて、愈々となれば、どんな生活にだつて堪へられるよ、屹度よくやるよ、それにあの人の身體だつて、あんな生活をしてゐるからあんな風なのだ、生き甲斐のある生活に入れば、屹度めきめきと丈夫になるよ、そりや心配するやうな事はない、君の決心次第なのだ」と中野はその道の先輩らしく純一を勵ました、「生活のためには、凡てを忍ばなくちやならないんだ、こんな事を君のやうな潔癖な人にすすめるのは忍びないのだが……だが、仕方がないぢやないか、世の中がこんなに出來てゐるんだからね」

「僕はその生活をやめてしまひたいのだ、つまり、生きてゐたくないのだ」

「君のその氣持はようく分るが、然し……」と中野は純一を慰撫するやうに言つた、「何事も彼女のために忍ぶんだね、

さうぢやないか君、彼女が生きてゐたいと言ふ間は、君だつて生きてゐなくちやならんぢやないか」
「それはさうだ」と純一は言つた、「ただそればかりだ…… Ah! mon ami, je m'en vais enfin de ce monde, où il faut que le coeur se brise ou se bronze ……心は裂けるか青銅化するかだ……」
「君は今晩餘程どうかしてゐるやうだ」と中野は心配らしく言つた、「そんな風で歸つてはいけない、先刻も言つた通り、是非今夜は僕の家に泊りたまへ、そしてもつと話さう、それに僕の家内も君に引合せたいからね」
「それぢや兎に角君の家へ寄らう」と純一は言つた。彼は中野ともつと話もしたかつたし、また妙に中野とそんな風になつた婦人を見たいのだつた。
中野がその新しい戀人と棲んでゐるのは、海岸の公園からずつと町を横斷して、かの相良元雄の家の近くの橋を渡つて、横へ入つた博勞町の裏の通りにあつた。家と家との間の路次を入つて、一二度角をまはつて、そこにある家の裏口の木戸をくぐると、その傍らの離れ座敷のやうな家がそれで、格子戸を開けて入ると、玄關を合せて三間の、極く小ぢんまりとした、隱居所にでも建てたらしい家であつた。
その玄關からすぐ見える六疊の部屋に、たつた一つぶら下つてゐる十燭光の電燈の下で、美しい廂髮にゆつた若い女が、針箱を前にして、白足袋を二三足、そのままはりに並べて、その指先や足の裏にあたるところの穴を、几帳面に縫ひつぶしてゐたと見えて、白絲が足袋から垂れて、その先きに針がキラッと光つて下つてゐた。
「お歸りなさいまし」と、その婦人は淑やかに言つて、立上つて、電燈の光を、笠を傾げて玄關の方に導いた。
「思つたり早かつたわ」
「あア」と中野は靴を下駄箱の上に置いてから、「お客樣だよ、めづらしいお客樣だよ」と、その婦人の喜びを期待させるやうに言つた。

「さあ、遠慮なく上つてくれ給へ、これが僕等の新生活なのさ、何一つ道具もない、みじめな家庭だよ」
かうは言つても、中野の聲の調子には、別の心持が表白されてゐた、これが僕等の滿足なのだ、誇りでもあるのだと、彼は言つたやうに見えた。
「これが僕の親友――唯一の心友なのだ、おまへにいつも話してゐる龍田君なのだ、『裂けた靑絹』の著者の……」
「まあ、さやうでゐらつしやいましたか、いつも中野がお世話になりまして！」と、その婦人は心から喜ぶやうに言つた。今、面とむかつて見ると、さつき若いやうには見えたものの、決して若いといふ方ではない、たしかに中野よりは三つ四つも年上かと思はれる、やや大柄な、平たい顏には少し雀斑があつたが、いかにも悧巧さうな顏立で、至つて堅實な、常識の發達してゐる婦人らしく思はれた。その眼づかひ、その立居は、何處迄も落着いてゐて、どんな時にでも冷靜を失つたり、感情に盲目になつたりするやうな事のないのを思はせて、何處となく女敎師らしい實直さが見えてゐた。こんな婦人が、良人を捨てて、新らしい戀人に走るものだらうかと、純一は不思議なやうな氣がした。つまり、そんなにも、この中野の愛人は、彼自身の愛人とは、その型を異にしてゐたのである。もう數日の間に迫つてゐる遠い朝鮮への旅――この故鄕を永く見捨てて行くその旅立の間近に、彼女は押入の隅にあつた足袋を一足のこらず修繕して、それを行李にをさめて行く位に用意の周到と、心の落着とを持つてゐる婦人であつたのだ。そして、こんな婦人の生活革命は、まづそんな足袋の繼ぎでもおろそかにしないやうな、だめのつんだ商量の上に樹つてゐることを思はせるのであつた。純一はこの婦人を見た事によつて、一つの大きな反省の鏡に、自分達二人の姿を映して見せられるやうな心持がした。
「ああ、すつかり彼女とは違ふ……」と、純一はその瞬間、はつきりと悲しい心で思つた。然し、彼は直ぐその心持の矛盾に氣付いて、心といふもののいかやうにも動くのを不思議に思つた。そして、彼女にはこんな建設的なところ

はない、それだからこそ、自分のやうな人間の道伴れに適してゐるのではないか、彼はさう心に思はずにはゐられなかつた。そして彼は中野に言つた、

「君の家庭にかうして來た事を、僕は本當に喜ぶ！」

「僕も今夜君に來て貰つて、本當に幸福だ、もう此際會はなければ、いつ會へるか分らなかつたんだ、また僕の家庭も見て貰へなかつたのだ……もつとも、君等が朝鮮へ來てくれれば、もつと工合はいいのだが……」

「行けたら僕等も行かう」と純一は微笑して言つた、「君の近くに住んで、互ひに助け合つてやつて行けたら、僕達も幸福だらう」

「さうだよ、是非さうしようぢやないか、お互ひにどんなにいいか知れない」と中野は言つて、妻の方に向いて、「龍田君たちも、ことによつたら、朝鮮に來ると言ふのだ、さうすると、おまへもお連れが出來て、どんなにいいか知れない」

「まあ、さうでございますか」と彼女は二人の顏を見て言つた、「さうなりましたら、どんなによございませう、では奧さんも……」

「さあ……」と言つて、純一は中野の顏を見て笑つた。

「龍田君の奧さんといふのは、いつも言つてる通り、すてきな美人なんだ、それに非常に感じのいい人でね、僕は昔からあの人を見ると、丁度櫻の花のやうな感じがしてね……昔、僕はそんな事を君に言つた事があつたね？」

「あア、あつた、誰かは月見草の花のやうだし、敏子は櫻の花のやうだと、君は頻りに言つてゐたものだ」

「さうだ、さうだ」と中野は急に笑ひ出した、「月見草の花のやうだと言つたのは、相良先生の妹さんなのだ、僕にとつては初戀人さ、僕はあの頃どんなにあの靜子さんが好きであつたか分らない。あの時分、もうあの靜子さんをお嫁

に眞面目に思つてゐたのだから、僕も考へて見ると隨分早熟だつたね」と言つて、彼は自分の妻を見返つた。けれども、彼女はもう勝手の方に行つてゐて、そこにはゐなかつた。

「さう言へば、今日相良君が出席しなかつたのは物足らなかつた……僕等よりも相良君の方が、西尾宏にとつては、ずつと親しかつたんだがナ。彼の事だから、もう相良君の事なんか忘れてゐるだらうよ」

「忘れもしないだらうが、西尾にはもう路傍の人にすぎないだらうからね……もつとも、今夜のやうな場合に——僕があんな事をやつてのけたんだから——相良君がゐたら、心配したらうから、ゐなくつてよかつた」

「それもさうだね、然し……昔の四人が、一人の成功者に、三人の失敗者が、完全に一堂に會するのも面白かつたらうにナ……だが、總決算をやつてみれば、西尾宏必ずしも勝利者に非ずさ」

そこへ細君が、皮をむいた桃を入れた皿を持つて出て、

「いろいろ昔話ではずみますね」と快活に言つて、中野の傍らから、純一にそれをすすめた。その手の指には、皮の指ぬきがはまつてゐた。娫娠だと云つても、まだ目に着くほどではなかつたが、その雀斑のある顔の色艶は、いくらかわるいやうであつた。純一はこんな風な女の人には、その賢明に感心はするけれども、彼の心持からは、さして好きではなかつた。中野にとつて、何處が氣に入つて、あんなになれたのだらうと云ふ氣さへもした。

中野は非常に滿足さうであつた。その樣子を見ると、純一は彼が朝鮮に行つてからの生活を、これで十分想像が出來るやうな氣がした。むかうへ行けば、生活も樂になり、周圍の迫害もなくなり、やがては可愛い子供が生れて、彼は曠漠とした異鄕にあつても、決して寂しいとは思はなくなるであらう。かうした名もない凡人の幸福の方が、西尾宏のきはどい投機的な生活よりも、その實質に於いて、どんなに意味のある事か知れないと、純一は思つた。彼にもそれを望む心、それに安んじたい氣持は十分ありながら、性格的に、それが自分に許されない事を意識して、彼は自

分の不幸が內在的なものである事を思つた。
暫く話をしてから、純一は突然言つた、
「もう何時でせう？　僕は終列車で歸らなきやならんから……」
「君は泊る筈ぢやなかつたか」と中野が意外さうな面持で言つた、「そのつもりで來たのぢやないか」
「本當にこんなひどい處ですけれど、お泊りになつて下さい」と細君も言つた。
「然し、さう出來ないのです、これで僕も今非常に氣苦勞な生活をしてゐるんですから。僕には口やかましい叔父がついてゐましてね、此間なぞも友人附合ひはすつかりやめて貰ひたいとか何とかと、實にうるさいお小言が出まして、今夜また歸らないと、また何かと言はれるんです。別に氣にする譯ぢやないんですが、今晩はまあ歸りませう」
「そんなに歸らなくてもいいと思ふがね、よしんば、そんな事があつたつて、今日は泊つてくれたまへ」
「さあ、僕もさうしたいんだが……」
「君もいつまでもそこにゐるつもりはないんだらう？」と中野が更に言つた、「それなら、そんなに義理立する必要もなからう」
「然し、歸らう」と純一は言つた。彼は中野の自足した樣子を見るにつけ、ぢつとかうしてはゐられないやうな氣がしたし、また、こんな狹い家で、この場合、自分なんかが泊り込むのを、心ない業だと思つた。
「それでは仕方がない」と、中野は案外無雜作に言つた。
「僕は一寸龍田君を送つて停車場まで行つて來よう、多分君はそんな工合だと、僕の發つ時に出て來て貰へなからうからね……」
「見送らなければすまないのだが、どうもそんな譯で出ては來られないやうだ、だから多分これでお別れになるだら

う」と言つて、純一はあらためて中野の細君に、その別れの挨拶をした。
「お泊り下さればよろしいのに……さやうでございますか、ではあなた樣も、隨分おからだにお氣を付けなさいまし、そして、朝鮮にお出でになる事がおきまりになりましたら、どんな事でも、わたくし達が御用に立ちたいと思ひますから、どうぞ御遠慮なく仰しやつて下さいまし」と、いかにも行屆いた言葉であつた。
停車場への途次、中野は敏子と純一との關係が、本當に何處まで確實になつてゐるのか、それを知らうとして、いろんな風に訊いた。純一は中野などから見れば、殆んど想像も出來ないやうな、敏子と自分との今のかゝりを話すのが、恥かしいやうな氣がした。
「すつかり許したのかね？」と中野の端的な問ひに對して、
「さうなのだ」と彼は敢て肯つた。

十六

二三日續けて、山陰時報には、現文壇の流行作家西尾宏の歡迎會の記事に引續いて、井川猛の『西尾宏禮讃』といふ文章が何回も續いて連載された。それは西尾宏を稀有の天才となし、かかる天才を生んだことが、どんなに我が山陰の光榮であるかといふ事を、生硬な文章で、面倒臭くなる程の七くどさで述べ立てて、その最後に、彼が今秋、上海に渡り、そこですばらしい題材を捉へて、これ迄の文壇に比類のない大作を世に出すであらうと豫告した。西尾宏の出發も、また華かに報道された。彼が松江に行つて、それから濱田を經て下の關へ出て、上海へ行くまでの間を長崎で滯在するといふ事まで書き記された。
純一が何氣なく新聞を開いてみてゐると、その三面の一番下の段の「赤鉛筆」といふゴシップ欄に――それは平常

は米子紳士の花柳遊びや、失敗談や、珍談などを掲げてゐる欄であるが——思ひがけなく、そこに自分の名前を見出して、彼は何を書いてゐるのかと讀んで見ると、

『自稱天才のなれのはて』といふ標題で、大體次ぎのやうな事が書いてあつた。

「今度大成功を博して華々しく歸鄕した大天才西尾宏君と同時に、文學志望に靑春の血を燃やし、無謀にも東京にのこのこ出て行つて、十年近くもゴロツイてゐた自稱天才の龍田純一君にかういふ殊勝な事がある。彼は此間の西尾宏君の歡迎會の席上で突如立上つて、奇拔な卓上演説をはじめた。曰く、自分は實に無能な男で、とても西尾宏氏の足下にも及びもつかぬ、そこで大いに悟るところがあつたから、これから養子に行つた先の質屋の商賣を大いに勉强したいから、諸君どうぞ今後御贔屓を願ひますと、腰を低くして皆に哀願を乞うたので、一同その奇特な發心に感嘆の聲を放つた。文士と質屋！　何と奇拔で面白いコントラストぢやないか、金が御入用の諸君は、どしどし贔屓にしてやつて下さい、高く貸すさうです」

　純一はそれを讀んでしまふと、その新聞を傍らにはふり出して、何といふ下らない事を書くものだらうと思つて、頰邊に苦笑をたたへた。それは東京の堂々たる文學者の間で、後進の靑年をそそのかして書き立たせる、かうした下品な誹謗や漫罵や嘲弄の記事を見馴れてゐた純一には、格別珍らしいものでもなかつたが、彼はその文章の露骨な害心を示してゐるばかりで、一向人の急所を衝き得ない氣の利かない書き振りで、それを書いたのが、多分、かの井川猛あたりであらうかと當りが付いたので、こんなつまらない事を書き立てて、それでしてやつたつもりでゐる男の得意さうな顏が、憫然に思ひ浮べられた。

　中野信太郎も、多分、宏と相前後して出發したであらうが、彼については、新聞には何事も書かれてゐなかつた。

盆の十三日も、愈々あと二日といふ日、南の家では、店の方ばかりでなく、新佛があるので、その魂祭の準備に忙

がしかつた。墓所には誰かが行つて、一日がかりで墓石を磨かねばならなかつた。實に、この地方では、生きてゐる人間よりも、墓の方を大切にする習慣があつて、丁度、墳墓の石が各家の家寶であるかのやうな奇觀を呈してゐた。従つて、墓石が掃除されてゐないと、あそこの家は墓をあんなに粗末にするから、罰があたるのだなどと云ふやうなことを、蔭口の種にする事があつた。金持の家などでは、屈强な下男が、二日もかかつて、墓石をこすりまはす事は、稀らしくなかつた。

叔母から、その墓の掃除を、純一は言ひつけられた。

「家は新佛さんがあるだで、別してお墓所はようく掃除して、お墓石をよう磨いて來てくれ、それから序にナ、お祖母さんの方もようしといておあげ」

祖母の墓を言ひ添へたのが、純一には嬉しかつた。「叔母なればこそ」と純一は思つて、南の家の墓を掃除しに行くと言ふよりも、むしろ自分の祖母の墓を掃除に行くといふやうな氣持で、水桶と箒とを小女に持たせ、自分は砥石を持つて、朝から墓地に出かけて行つた。彼の前後には、おなじやうに墓掃除に行く人達が、幾組となく通つてゐた。墓地について見ると、よくもこんなに墓があるものだと思ふ程、大小さまざまの墓が立列んでゐる間に、そこでも、ここでも、もう墓掃除の人達が、丹念に墓石を磨き立ててゐた。

「今日はええお天氣樣で、ええおあんばいでござります」と、純一を見かけて、聲をかけるものもあつた。

純一はいつぞや叔父の浩藏と一緒に詣でてから、今日はじめて、久し振りに來て見たのであるが、叔父や叔母が、暇さへあれば來て掃除をしたり花を立てたりしてゐるので、墓域は小綺麗に見えて、格別掃除しなければならない程ではなかつたので、彼は小女を指圖して、五六基ほど並んでゐる南家累代の石碑に水をかけて、砥石でこくめいに磨きはじめた。かうして何度も何度も、水を注いでは砥石をかけてから、最後に仕上げの水で洗ひ淸めると、墓は古く

ても石質がいいので、石の面は濡れた鏡のやうに黒くつやつやとして、碑面の文字がくつきりと浮ぶ。彼は一基から一基へと移る毎に、その文字を讀んでみたが、それらの何々院何々居士は、その俗名と終焉の年月日とによつて、それが誰であつたかと云ふことは、ほぼ知られたけれど、勿論彼の見知つてゐた人は一人もなかつた、馴染のある親しい名前すらもなかつた。ただ、それらの中の二三の人達のあらかたの生涯が、日頃の叔母や浩藏の話によつて、わづかに想像されるだけにとどまつてゐた。

思ふに、これらの人達の中に、本當に幸福だつたと云へる人は、恐らく一人もないであらう。馬から落ちて死んだ人や、狂死した人ばかりでなく、皆が皆、惱みと退屈との生から、死によつて救はれてゐるのだ。そして、さうした人達の墓碑を、このやうに肩が痛くなる程、長い間かかつて、ゴシゴシと磨いてゐる自分の恰好を考へてみると、彼は痛切に馬鹿々々しさを感じないではゐられなかつた。若し自分がこれきり南家の養子になつて納つて行つたならば、體のいい墓番に外ならないのだと、彼は思つた。一體に、この町全體の人が、死者のために生きてゐるやうなものであつた、親代々の家といふものを守つて、先祖代々の墓石を磨いては、自分もまたその墓石の下に入つて、子孫に掃除をして貰ふ、かうして永久に續いて行く人間の生涯といふものが、彼には何の意味もない、馬鹿々々しいものに思はれた。數日前、中野の家庭に行つて、平穩無事な凡人の生涯の幸福を、望ましいものに思つた彼であつたが、その凡人の醉生夢死の幸福が、今いかに退屈なものに思はれたらう。

彼は一しきり磨いてから、腰をのばして、墓石の汚汁で汚れた手を手拭で拭きながら、ふとかの渡邊虎造の持論を——彼が此間燒棄したかの『自死自葬論』の主旨を思ひ出した。あれを書いた時分は、自死説の方だけに心を傾けて、自葬說の方は馬鹿々々しい氣がして、ほんの附けたり位に思つて書いてゐたのだが、今かうして體のいい墓守となつて、墓石に奉公して一生を終る田舍人の生活を見ると、それが痛切に剴切な眞理として考へられて來た。

渡邊虎造は言つてゐた、

「一體、死者のために遺族が莫大の費用をかけて、葬式を盛大にしたり、墓地を立派にして、巨大な石碑を立てたりして、一家の名譽と心得て、かうした虚禮のために、各自多大の經費と時間とを空費するのは、實に愚かしき事であるから、病者はみな達人の悟脫を以て、海中に乘り出して、潔く自死自葬するべしぢや」と彼は慨然として言ひ放つた。

彼の主張通り、皆が皆、海中に乘り出すわけにも行くまいが、兎に角、こんなに迄人間が現在の生きた自分の生活を空しうして、既に終つた過去の生の記念のために奉仕するやうな、無智な因襲は、滅ぼしてしまはなければならぬと純一は思つた。

彼は振返つて、一生懸命に磨いてゐる小女を見ると、自分でさへいい加減疲れてしまつたのだから、どんなに弱つてゐるか知れないと、可哀さうな氣がしたので、

「少し休むがいい、僕は一寸あちらの方の墓へ行くから、その間おまへはゆつくりお休み」と言ふと、小女はホッとしたやうな顏をあげた。あまり俯向いて力を入れてやつてゐたので、彼女の顏は眞赤になつてゐた。

「若旦那もお草臥なさいましただネ、お慣れにならん事だもん……去年は次郎さんが磨きにお出でなさつたで、わしもあんまり磨いたもんで、二三日手が痛んどりましただ」と言つて笑つた。

純一は手桶を下げて、ずつと離れた海岸寄りにある祖母の墓に行つて見た。その前に立つと、あの時立てておいた樒は、もうカラカラに乾いて、海から吹いて來る風に倒されてゐた。もともと粗末な質のわるい墓石なので、角々が少しづつ落ちてそのあとが黑くなつてゐるし、墓石の頭には、鴉の糞がかかつてゐた。この墓の前に立つと、純一は墓磨きの馬鹿々々しさを忘れて、墳墓無用說なども忘れて、それの掃除に、何日かかつてもいいやうな氣がした。

彼は跣足になり、裾をからげ、筒袖の肩をたくしあげて、まづ、鴉の糞を木片れでこすり落して、そこに水をかけて、それからせつせと砥石で磨きはじめた。彼は小さい時、この墓石の下の身體を撫でさすつた時のやうに、深い肉親の情愛を感じながら、水をかけては磨き、水をかけては磨いた。こんな風にしてゐると、彼の耳には、祖母の生前の聲が聞えるやうな氣がした。祖母は南の家の叔母より、もつと情愛が深く、もつとさつぱりしてゐた。もつとも、彼は時々離れて叔母の話聲を聞いてゐる時など、祖母かと思ふやうな聲を聞く事もあり、此頃の叔母の老いた後姿を見ると、祖母にその儘の氣のする事さへあるのだつたが、それが叔母であつて祖母でない事が、その度びに彼には物足りなかつた。どんな風に考へて見ても、彼はこの故郷の地に、祖母の生き永らへてゐない事が、物足りなかつた。

彼が臺石の掃除にとりかかつた時に小女が走つて來て、

「おぐりんさんがお出でなりました」と言つて呼びに來た。

小女と一緒に、彼が南の家の墓地へ歸つて行くと、叔母は持つて來た小形の手桶を横の方に置いて、墓域の前の道のところを、松葉一つ殘らないやうに、丁寧に掃いてゐた。

「叔母さん、僕が掃きませう」と純一は言つた。

「ナニ、わしが掃くわ……」と叔母は言つて、日ざしが眩しさうな眼付で純一の様子を見て、笑顔をして、

「おまへ、えらいしやんしやんした風をしとるだねか、慣れない事で手が痛みやせんかえ……でも、お蔭で見事になつたわえ、去年次郎が掃除した時と同じやうになつた」と言つてから、傍らにある次郎のまだ墓石の立つてゐない靈屋をぢつと見て、

「次郎も去年ここでこげにして掃除しとつた時には、こげに早よ新佛にならうとは思やせんだつただろになア……」

「ほんにさうでござりますだ、こげに早よ佛様になりなさつて、もう初盆がまゐりましただもんなア」と小女は、卒

塔婆の少し斜めになつてゐるのを眞直ぐに直しながら言つた。
「純一は一足先きに歸るがええ、あとはわしがやつとくだで……」と叔母が言つたので、純一はそこにあつた空の手桶を下げて墓地を出た。
歸つて見ると、番頭の常七も誰もゐない店の帳場の上に、敏子から來た手紙が置いてあつた。
「何を言つて來たのだらう、何か事件が起つたのだらうか？」
純一はあの會の後で、もしかすると、友一郎が敏子のところへ行つたのではあるまいかと、ふと思つた。若し行つたとすれば、どんな工合になつたのだらう？　或ひは、思つたよりも破綻が早く來るかも知れない、それならそれでいい、かう思ひながら、彼は手紙の封を切つた。
「此間はやすんでゐたり何かして、大變失禮いたしました。會は大變盛會だつたさうですね。どんな模様か早く知りたいと思つて、あなたのいらつしやるのを、今日か明日かと待つてゐましたのに、いらつしやらないので、三四日中の新聞を取寄せて見たりしましたが、然し、あの集つた顔振れを見ると、あなたと外二三人を除けば、まるで西尾の家の懇親會のやうで、いかにも西尾の威勢を廣告したと云ふやうなところばかりが目に付いて、はたの人には餘りいい氣持は與へなかつたでせう。然し宏さんは、親御たちに自分の成功をあれだけに見せてお上げになれたのだから、これから萬事好都合でせう。友一郎と宏さんとの間は、やはり金の問題で何だかいきさつもあるんですから、あんな風になつて見ると、友一郎もまた違つた氣持かも知れません。
あなたが會にいらしつて、何か不愉快な出來事でも起るやうな事があつてはと、隨分心配したんですよ。けれどみんなわたしの杞憂だつたんですわね。でも、あなたは會で演説をなさつたんですつて！　本當でせうか？　會の記事には何にもそんな事は書いてなかつたのに、その後のゴシップで、記者が御丁寧にも隨分詳しく書いてございました、

思はず苦笑いたしました。けれど口惜しいやうな氣がしないでもありませんでしたわ、隨分惡意のある書き方ですもの。成功とか失敗とか云つたつて、表面的な事しか知らない田舍の新聞記者に何が分るものですか。あなたがこんな事をお氣にかけたり何かなさる事はないと思ひますわ。

二三日前米子から來たお婆さんの話では、友一郎は此頃やはりあの妾宅の家にずつと居るさうです。妾宅とは云つても、二人の間柄は、十年來の間柄ですし、子供もあつてみれば、入り浸りになるのは當り前でせう。そんな譯で、わたしの當分來ないようにと言つた通り、ちつとも此方へは來ないのですから、結句わたしはいい工合なのです。それにわたしが此頃こんなに氣の合つた人を呼び寄せてゐる事なんか、知らないのですから。わたしが離緣してくれと言ひ出したり、ヒステリイを起したりすると、その當座だけ吃驚したやうにちやほやして機嫌を取りに來るんですが、此頃のわたしは、そんな風にわたしがするのは、とりも直さず、友一郎の愛情を求めるやうなわけになると氣が付きましたから、こんな風におとなしくしてゐるのです。かうしてわたしが生きた屍のやうにおとなしくしてをれば、西尾友一郎夫人として立派な地位が保てるんださうです。以前のやうにゴタゴタやらなくなつただけ、わたしはすすんで來たのですよ。今のわたしは十分望みに生きてゐるのですもの。

お盆の十六日には、是非お出で下さい、いろいろお話しいたしませう。先だつてお約束のお話を是非ね」

純一は直ぐにこの手紙の返事を書いた。

「僕は十五日か十六日におたづねします。今度はたつた二人きりで、一晩話したいものですね。僕はそのつもりで出かけて行きます」と書いた後に、「今日は一日がかりの墓掃除で、肩が痛くて閉口しました。かうしてゐると、馬鹿々々しい事だらけです」と書き添へて、その手紙を直ぐに自分でポストに入れに行つた。

その晩、浩藏がやつて來て、純一の顏を見ると、ニコニコして話しかけた、

―おまへの事が新聞に出てゐたナ。市郎が持つて來て、これ見いと言ふもんでナ、讀んで見ると、おまへが演說して、これから質屋の商賣を勉强して、大いに繁昌させると言ッたげナ、ええ事を言つた、わしは氣に入つたぞ。どうせ文士などで物になりやせんから、早くあきらめて、おまへの仕合せだつた。これで南の家もおまへがしつかりやつてくれれば、家運挽回といふところだ」
「まあ、そげな事を純一がしましたか」と叔母が純一の顏をあらためて見て言つた、「おとなしさうに見えて、なかなかさうでないところもあるらしい」
「ところが殘念な事に、此家の屋號が出とらん、あれぢや廣告になつたやうでなつとらん、今度は一つ大きく屋號を出して書いて貰ふがええ」
「そのうち一つそのやうにしませう」と純一は苦笑しながら、叔父の言葉にさしさはりのない返辭をした。
　おふでは三人がかうして店で話してゐるのを、何か自分の事でもあるかと思つたやうに、氣をつけながら、何度もうしろの佛壇の間へ出入りしてゐた。彼女は此間の菜園での事があつて以來、もう純一にあのやうな馴々しさうな眼付をしなくなつて、いかにもつまらなさうに、子供をかかへたり、臺所でゴタゴタしたりしてゐた。
　佛壇は叔母とおふでとの手で、綺麗に拭掃除され、龕の金具をはじめ、佛具の凡ては、磨き粉で磨き立てられて、いづれも新しい時のやうな光澤をはなつてゐた。佛壇の前には、白木の机を据ゑて、それに眞菰で編んだ簀子を敷いて、精靈棚がしつらへられて、その上には、胡瓜と茄子とに麻殼の足をつけてこしらへた牛と馬とを飾り、栗、唐辛、枝豆、稻穗、栗、玉蜀黍、酸漿などが盛り上げられた。奧の戸棚にしまつてあつた盆燈籠も持出され、新佛の分には、新しい大きい美しいのが新たに調へられて、今にも吊して火を入れていいやうに支度されてゐた。食物の方も、一切叔母の指圖で、佛樣にそなへる精進料理、牡丹餅や團子など、すつかり用意がととのへられて、かうして、冥土

から立歸つてくる佛を迎へる盂蘭盆會の、昔ながらの古めかしい、しめやかな魂祭の氣分は、家の中一杯に行きわたつた。

愈々、十三日になつた。今日が愈々佛の訪れる日なので、菩提寺からお坊さんが、佛追善の棚經をあげに來るといふので、純一は例の博多の角帶に、絽の羽織をはをつて、白足袋穿きの服裝で、主人役を勤めなければならなかつた。僧侶が小僧を連れて廻つて來たのは、丁度十一時前であつた。

「ようこそお出で下さいました」と言つて、やはりキチンと服裝をととのへてゐる叔母が出迎へるのと一緒に、純一もそこに並んで、頭を下げてゐた。坊さんは一言二言、時候の挨拶をしてから、直ぐ佛壇の間に通つた。それに續いて、叔母も純一もその部屋に入つて、右側の敷居際にすわつた。おふでは子供を抱いて出て來た。盲目の婆さんも、珠數を手にかけて、純一の上座にすわつた。

坊さんが精靈棚の前に端坐して、讀經をはじめると、叔母も袂から珠數を出して、それを爪繰りながら、自分も口の中で唱名を繰返した。おふでは始終俯向いて、一刻もぢつとしてゐない子供の頭を、自分の顎で抑へるやうにして、神妙に控へてゐた。長い讀經がすんでから、

「御燒香をねがひます」と言つて、坊さんは左側の方へ寄つた。

「南無阿彌陀佛々々々々々」と唱へながら、叔母が盲目の婆さんの手を引いてすゝみ出た。それの次ぎには、おふでが子供を抱いて出て行つて、それから最後に純一が立つて、かうして順々に燒香をした。

夕方になると、純一は緣側の上の軒先に、二つの盆燈籠を吊して、それに火を入れてから、番頭の常七を相手にして、門先で迎へ火を焚いた。その火の煙は微茫として、盆燈籠のまはりに漂ひながら、遠く夕空に立ちのぼつて行つた。その時刻には、もう何處の家でも、軒先で迎へ火を焚いてゐるので、薄暮の中に、その煙が淡く棚曳いてゐた。こ

さすがに哀愁の深いものであつた。

の煙に乘つて佛が來るといふ、佛教國の長い間の言ひならはしの儀式は、今まのあたりその情景の中に入つてゐると、

十七

盂蘭盆の佛事がすむと、おふでは子供を連れて、その實家へ歸つて行つた。常七もこの盆を限りとして、暇をとつて行つてしまつた。裏の方から通つて來てゐる小女も、十五日の晝頃、一寸家に歸つて、お化粧などをして、晴着を着けてやつて來た。

「おお、まあ綺麗にお化粧をしとるナ、まるで見違へてしまうた」と言つて、叔母は盲目のお婆さんの方を振返つて、

「おばあさん、お竹がきれいになつとりますぜ、もうお嫁にゆくのも直きだわいナ……」

「あら、おぐりんさん、あげな事を……」と小女は聲を立てて笑つた。

「今夜踊るだろの」と盲目のお婆さんがニコニコして言つた。

「ええ、もう昨夜踊りましただ、今夜もふた處位で踊ります」

「ほんに娘時代は樂しみなものだ、もうわしやおばあさんのやうになると、何の樂しみもならてナ……今のうち踊れるだけ踊つとくがええ」と叔母が言つた。

「わしは長えこと眼が見えんだで分らんが、今の若いもんは、昔のやうにようは踊らんだろ、あれでなかなかむづかしいもんだでナ」とおばあさんが言ふと、

「わし、敎へて貰つといたらよかつただにナ……」と小女は首を傾げて言つた。

「昔は踊りがよう踊れて、それでええ處の息子さんに見染められて、そこのおぐりんさんになつたりした人も、よう

あつたもんだがナ、今時はそげな事もないか知れんが……」
「今時の若いもんは、みんな昔のやうに悠長でないだで、そげな事も少くなつたわいナ」と叔母が言つた。
「そげでござります、昨夜もわしたちが踊つとりますと、四五人の若い衆が取卷いて來て、ワイワイ言つて、つかまへたり引つ張つたりして、こはい目を見ました」と小女が、餘りこはくもなささうな顔をして言つた。
「今夜は何處で踊るだナ？」と叔母が訊いた。
「五軒屋の裏と、氏神さんの社と、二處で踊りますげで……」と小女は答へた。
「ほんに純一も見に行くがええ」と叔母は純一をかへりみて言つた、「この邊の盆踊りを見たところで、大した面白い事もなからうが、みんなが面白さうに踊つとるところを見ると、ちつとは氣が晴れるだでナ」
「さうですね、見に行きませう」と純一は言つた、「今夜は夕方から方々に行つて見ませう」
「夜中、何處へ行つても賑かなことだ、今夜と明日の晩とは、もう若いもんには、一年中の樂しみだものナ」
「若旦那もいらつしやりませ」と小女が誘ふやうに言つた、「こげな處でも器量のええ娘はござりますだで……」
「ああ、行つて見よう」と純一は微笑して言つた、「おまへの踊るのを見よう」
「こりやまあ、あげな事を……」と小女は赤い顔をして、「わしなんか見なさつてもつまりませんだ、それに踊る時には、手拭で顔を隱して、風を變へますもんで、若旦那には分りやしませんだで」
　こんな風に、三人が店で話をしてゐるところへ、郵便配達が一つの小包を持つて來た。純一が受取つて見ると、東京の書店から來たもので、ハトロンの包紙を開いて見ると、彼が東京にゐた時の最後の仕事であつた『モンナ・ヷンナ』の譯本が二册入つてゐた。彼は殆んどこの飜譯の事を忘れてゐた。東京を發つ時、その本屋に行つて、都合によつて歸國するから、校正が出たら送つてくれるようにと言つてあつたのだが、本屋ではそれを面倒がつたと見えて、むか

うで勝手に校正をして、出してしまつたものと見える。本の装幀は格別我慢の出來ないやうな事もなかつたが、一寸中を開いて讀んでみると、その誤植の多いのに驚いた。彼は傍らにあつた硯箱から朱筆を取つて、氣がついたままに、三四頁も誤植を訂正して行つたが、ふと氣が付いたやうに、

「こんな本の誤植など、どうでもいいのだ……僕自身の生涯が、既に誤植だつたのかも知れないぢやないか、これはなかなか朱筆ぐらゐで正誤が出來るものぢやない」と彼は自分に言つて、そして筆を擱いた。

その晩、七時頃、墓の燈籠に灯を入れに行き、夕食を終へてから、純一は、彼の僅かな財産と、『モンナ・ヴンナ』の譯本とを懷に入れて、自轉車を引出して、それに乘つて、淀江の町を出た。彼がこれ迄二三度通つた縣道は、今迄とはすつかり樣子が違つてゐた。街道ぞひの家の中には、何處の家でも、大抵一つや二つの盆燈籠がともつてゐて、子供や、子供を抱いた母親などが、前の緣側に腰をかけたり、表に向いた座敷の端近に寢そべつてゐたりした。中には、外からすつかり見通せる家の中で、團子や芋の御馳走を食べてゐるところもあつた。貧しい家の子供達が、一帳羅の縮の着物を着て、純一の自轉車の後から、バタバタと響く走つて來たりした。

月は彼が濱街道にさしかかつた時、日野川の堤防の木立の後から現れた。たちまち、あたりが明るくなつたと思ふと、砂畑の中の道の上に、彼の影法師が、自轉車の輪の影を伴うて、前驅した。右にも左にも、瓜や西瓜や麻の畑の中に、蟲の聲がしげしげとしてゐて、彼が進むに從つて、近くの畑の蟲はぴつたり默ると思ふと、また後の方で聲を立てた。路傍に杭を立てて、竹をわたして干してある干瓢の棚が、白々と月の光に浮き上つてゐて、道幅の狹いところで、走つて行く彼の袖が觸れた時、そこから蠅がブーンと云つて飛び立つた。

遠方の木の間の家には、やはり盆燈籠に灯が入つて、しめやかにともつてゐる下に、白い人の姿が二つ三つ、繪のやうに動いてゐるのを見ると、彼の心には、何がなしに淡い哀愁が感じられた。大分人家が月の光に見え出した時分に、

道の横合ひから、三四人の若い男が、手拭を手に持つたり、首に引つかけたりして、何か話しながらやつて來て、純一を見ると、

「今晩は……」とその中の一人が聲をかけた。その様子は、いかにも今夜の喜びに心が溢れてゐるやうであつた。

海の音は、絶えず耳元近くに、微かに聞えてゐたが、行くうちに、その波の音を打消して、何處か濱の方でもう踊りをはじめてゐるらしく、賑かな太鼓の音や人のどよめきが、一つになつて聞えて來た。行くに從つて、踊り場に集つて行くらしい若い男や、若い娘たちの幾組かが、あちらからも、こちらからも、街道に出て來て、彼とすれちがつた。それらの連中は、みな自轉車に道をゆづりながら、こんな時分に忙がしさうに、自轉車などで何處へ行くのだらうと云つた風に、怪訝さうに彼の姿を見送つたり、何か囁き合つたりした。

夜見村の家並に入ると、そこここに岐阜提灯を吊した家などもあつて、戸毎にあかるい光が通りに流れて、どの家を見ても、あまり人影は見えないで、いつもとは違つて、キチンと取りかたづけられた家の中に、盆燈籠だけが一きは目に立つのであつた。

彼は曲り角で自轉車を下りて、それを右手で引つぱりながら、月に暗い砂路の傾斜を、むかうに黒く見える松林の方へ歩いて行つた。林の中の別莊は、みな戸を閉して、人氣もなげにひつそりしてゐた。歩いて行く砂路の兩側には、芒の穗が白く月に光つて、靜かに搖れてゐた。そのあたりにも、盛んに蟲が啼いてゐた。

敏子の家は、門も玄關も開けた儘になつてゐた。緣側の方も、雨戸が少しづつあけてあるので、そこから中のあかりが、砂地の庭にさしてゐた。

彼は聲をかけて案内を乞ふ代りに、わざと音を立てて、玄關の入口の左寄りの羽目板に、自轉車を凭せかけた。そして、一寸中の様子を待つた。

「龍田さんですか？」と聲がして、一番端しの雨戸を少し引いて、敏子がそのすらりとした白い姿の半身を見せた、
「おあがんなさいな……」
「途中はいい月夜でした」と純一はその縁側から上へあがりながら言つた。
「ほんとにいい十五夜ですわ」と敏子は言ひながら、一寸外を見てから、「あけて置きませうか、閉めませうか？」と純一に訊いた。
「閉めた方がいいでせう」と純一は言つた。彼は自分が言つて置いた通り、彼女が一人きりでゐてくれた事が嬉しかつた。彼はこれ迄にない程、非常にゆつたりした、落着いた氣持になれた。まるで自分たちの新しい家のやうな氣持がして、彼女がいろいろと飲物や食物を出したりしてゐる間に、彼女がつかつてゐる机の前に、麻の座蒲團を持つて行つて、それにすわつて、煙草をくゆらしながら、巻紙に月といふ字や、踊りといふ字を、幾つも幾つもいたづら書きをした。
「もう方々で踊つてゐましたか？」と敏子は用意をしたものをはこんでしまつて、純一の傍らにすわつた時言つた。
「濱の方では、もう踊つてゐるやうでした、太鼓の音が聞えてゐました、ここからは聞えないやうだが……」
「そこへ行つたんですよ、家の若い女中も」と彼女は言つた、「あれはこの濱の者ですから、朋輩が誘ひに來たりして、おめかしして出て行きました。澤山踊つておいで、今夜は歸らなくてもよろしいからと言つてやると、大喜びでしたわ」
「あのお婆さんはどうしました？」
「お婆さんも、自分の家へお盆をしに歸してやりましたよ、自分でも歸りたがつてゐたので、丁度幸ひでしたから、ゆつくり行つてお出でと言つて……」と言ひさして、敏子はあでやかに笑つた。純一が氣を付けて見ると、彼女は薄化

粧をしてゐるやうであつた。

純一は敏子のついでくれる麥酒を、續けざまに二三杯乾した。

「此間はお婆さんが歸つて來て話しますには、西尾の家では、宏さんに大分お金を出してやつたさうです。惣兵衞さんは名うての吝い人ですけども、今度といふ今度は、宏さんの成功が嬉しかつたと見えて、何でもこれ迄にないお金を、その言ふままに出してやつたとか言ひます。宏さんといふ人は、何處迄仕合せだか分りませんね」

「仕合せと言へば言へるでせう、當人はさうも思つてゐないでせうが……兎に角、したいと思ふ事は何でも出來るのだから」

「けれど、極く平凡な仕合せぢやありませんか」と敏子は調子を強めて言つた、「あなたが會でなすつた演說といふのはどんなでしたの？　詳しい事が分らないものですから、今日伺はうと思つてゐたのよ」

「僕の演說ですか？」と純一は少し苦い顏をして言つた、「今考へて見ると、つまらない事をしたものです。あんな皮肉を言ふつもりはなかつたのだが、ついそんな風な調子になつてしまつて、後では大人げない事だと思つて、西尾君が少し氣の毒であつた……もつとも僕の言ひ方は、表裏二樣の意味を含ませてゐたから、大抵の者はみな極端な讃美だと思つたでせう。西尾惣兵衞さんなどは、ホクホクしてゐたやうでしたよ。ただ、當の西尾宏はムッとして、顏色を變へてゐたやうで、後で答辭に立つた時に、龍田君は今言つた言葉を永久に忘れないように希望すると言ひましたよ。中野に言はせると、僕の演說は謂はば西尾に對する絕交狀のやうなものだつたと言ひますから、先方でそれに一矢酬いたのも當然でせう。然し、僕も、出鱈目に喋つたのではなく、十分の信念を以て言つた事だから、西尾に言はれる迄もなく、永久に忘れないし、また忘れないばかりでなく、その言葉の裏に含めてゐた僕の所信は、いつでも斷行して見せるつもりです」

「それはさうでせうとも」と敏子は言つて、机に肱をかけて、自分の膝を彼の膝のところにすすめて、團扇で蚊を拂ひながら、ぢつと彼の顏を見てゐた。

「兎に角、僕は既にいろんなものを一擲したのです、實に淸々した氣持ですよ。そして、その僕から見ると、あんな風に名聲だとか野心だとかの重荷を一杯に背負はされて、一年一年世間に囚はれて、不自由になつて行く西尾宏を見ると、むしろ可哀相な氣がしたのです。あんな風だと自然、表裏のある二重生活をして、何事も祕密にコソコソやつて行くと言つたやうな、男らしくない生き方をする外はなくなるから、從つて、まだしも以前の作に見えてゐたやうな多少の誠實も失つて、これから愈々つまらないごまかしの作品に、いろんな外面的な事で箔をつけて、其日暮しにやつて行く外はないでせう」

「わたしもさうだらうと思ひます」と敏子は言つた、「天才かも知れませんけれど、裏の裏まで知つてゐるわたしから見れば、何だかをかしいんですもの」

「西尾宏の話は別として、今も言つたやうに、いろんなものを一擲してからの僕といふものは、もう何一つ恐ろしいものがなくなつて、非常に自由な、張り合ひのある氣持になりました。だから、あんな會なんかに出ても、もう昔のやうに、皆の樣子が癪にさはつたり、腹が立つたりしないで、人間のいろんな馬鹿げたところを見るのが面白い位なものですよ……會の席上で、西尾友一郎氏が、僕の眞正面にすわつて、熱心に聞いてゐましたが、僕が西尾家一門の、世間的に成功して行ける才能を賞めて、僕もこれから文學なんかはよして、心を入れ變へて、質屋の商賣を勉强すると言ふと、友一郎氏はついと立つて中座しました。もつとも、この質屋を勵むと言ふのは、考へてみれば、二重の揶揄になつてゐますね。あなたは御存知ないかも知れないが、東京で水明館にお訪ねした時、あなたのお歸りを待つてゐる間に、社會主義の問題などで、西尾さんと大分議論をしましてね、最後に西尾さんは、僕にむかつて、かうして東京

なんぞでみじめな生活をしてゐるより、國に歸つて妻帶でもして、身を固めたらいいだらうと、親切な忠告をしてくれたので、そのお禮のつもりで言つたところもあつたから、多分變な氣持がしたんでせう」

「おせつかいな事を言つといたから、弱つたんでせう……中座して後でまた入つて來たんですか？」と敏子が訊いた。

「さあ……」と純一は答へた、彼は敏子のその問ひに、彼女がやはり良人の事に何處迄も關心せずにゐられないらしいのが察せられて、みんな知らせてやつていいと思つた。

「歸りに僕と中野とが話しながら歩いてゐると、後から西尾家の自動車が歸つて來ましたが、中には惣兵衞さんに宏と井川といふ男と三人ぎりで、友一郎氏はゐませんでしたよ」

「早く歸つて行つたのね、多分妾宅の家へ行つたんでせう」と彼女は何氣もなげに言つたが、純一にはその中にも彼女の或る感情が含まれてゐたやうに感ぜられた。

「こちらは大分蚊が多いやうですね」と純一が話を變へた。

「えゝ、ひどい蚊ですわ、わたしいつも咬まれてゐるんです」と言つて、彼女はその手を出して、少し袖を引いて見せた、「今日は感心にまだちつとも咬まれてゐませんわ」

かう言つて、彼女は直ぐその手で、純一のコップに麥酒をつぎながら、

「蚊帳を吊りませうか？」とささやいた。

「まだ早いでせう……それにしても、此邊は靜かですね。ひつそりとして、夜など獨りゐたら寂しい事はありませんか？」

「わたしはこんなに寂しいのが好きなんです、かうした寂しいところで、二人きりで、いつ迄もいつ迄もお話しして

ゐたいんです……けれども、今夜は何だか盆踊りを見て來たいやうですわ」

「さうですね、これから二人で行つて見ませうか」と純一が直ぐにその氣になつたので、敏子は嬉しさうであつた。

二人が家を出て、松林の中に入ると、月の光が參差とした枝合ひから洩れ込んで、砂地の上にちらちらと白い斑を置いてゐる。歩いて行くうちに、そこらの枝から、蟬がヂヂと啼いて、純一の肩を掠めて、何處かへ飛んで行つた。

「夜蟬ね」と敏子が言つて、「蟬は此頃隨分このあたりで啼いてゐますわ」と、黑い梢をぢつと見上げるやうにした。

松林を出はづれると、砂濱は一杯に月の光を受けて、白く輝いてゐるやうに見えた。爽かな軟風の吹いて來る海の上には、今夜は漁火一つ見えないで、紺靑の色を湛へてゐるかなたの地平線に、島根半島の山影が、月の光の中に眞黑にくつきりと浮んで、その麓の方に、關の村のあかりがちらちらと見えた。半島の尖端にある美保の關の燈臺の火は、いつものやうに、ともつては消え、消えてはまたともつてゐた。今夜の海は極めて穩かに凪いでゐて、殆んど波一つ立たない程であつたが、波の音ではなしに、海の底からでも聞えてくるやうな潮鳴りの音が、幽かに耳につくのであつた。

松林ぞひに、二人が白い砂を踏みながら、東の方へ歩いて行くと、この夜見ヶ濱の濱續きが、ずつと彎曲して、殆んど對岸のやうに見えてゐる黑い松林の下の、いつもは暗い濱に、ちらちらと澤山の燈火が、星のやうに連つてゐた。そして、その上には、空一杯の月光の中に、大山の姿が優雅な曲線を描き出して、凡ての上に君臨してゐた。

此間の夜、二人が話し合つた網小屋のあるあたりまで來た時に、ぢつと關の燈臺の火を眺めてゐた敏子が、突然、「ああ、あそこへ行つて見たい！」と思ひ入つたやうに言ひ出した、「あそこへ行きたいと何度思ふことでせう。關の神樣は惠比須樣なんですよ、惠比須樣は福を授けてくれるとか云つて、みんなこぞつてお詣りに行きますが、わたしはそんなものは授かりたくもないけれど、ほんとに誰れ憚りのない自由な氣持で、遊びに行つて見たいのです。何だ

か美しい夢があそこにあるやうな氣がするのですもの」
「さう言へば、この景色は何だか傳說の中の美しいシインのやうな氣がしますね。ここから眞直ぐに舟で行けば、ほんとに一息で行けさうですね」
「境から行つても、一時間で着いてしまひますよ……あなたはあの關の傳說を御存知？」
「知りませんね、どんな傳說があるのですか？」
「それは面白い話なんです」と言つて、彼女が話すところによると、關の明神である事代主命が、關の娘と契りを交はして、毎晩小舟に乘つて通つてゐたところが、或時、鷄が時をたがへて大變早く鳴いたので、もう夜明かと思つて、急いで女に別れて、小舟のところに行つて見ると、あんまりあたりが暗いので、どうしても櫂が見付からないので、仕方なくて兩手でもつて小舟を漕いでゐたら、つい鱶に手を食ひ切られてしまつたので、事代主命はひどくおこつて、關の鷄をみんな殺してしまつた、それで關には鷄が一羽もゐないし、若しよそから鷄を持つて來たり、鷄の卵を積んで來たりすると、屹度波が荒くなつて、舟を返すより外はないので、今も關では、鷄の卵のかはりに、鶩の卵を出すといふ話であつた。さういふ話をした後で、敏子は、
「事代主命もなかなか面白い神樣ね、それでその遺風ですか、今も關はみんなが遊びに行くところになつてゐて、小さな町はみな宿屋と漁師とだけださうです」とつけ加へた。その話を、ぢつと美保の關の方を眺めながら聞いてゐると、この美保灣の幾里かの海水を隔てたばかりのその土地が、何だか美しいフェアリイ・ランドでも見るやうな氣持がして、彼もまた同じやうに遊心をそそられるやうに感じた。
　こんな話のうちに、二人はいつか踊場の方へだんだん近づいて行つた。すると、今迄は風の工合でか聞えなかつた賑かな太鼓の音や、囃しの聲が、どよめきになつて聞えて來た。そして、その澤山の燈火の群つてゐるところには、一

團の人影が、離れたり合つたりしてゐるのが見えた。
「お聞きなさい、何を唄つてゐるのでせう？」と敏子が純一の袖をひかへて言つた。ぢつと耳を澄ますと、幽かな海鳴りを伴奏にして、ゆるやかな調子で唄つてゐる聲が聞える。
突然後に人聲がしたので、振返つて見ると、後の方の松林の中から、四五人の若者たちが、みんな同じ風に白手拭で頬かぶりをして、夜目にも白く見える白足袋を穿いて出て來て、砂地を踏んで足早に二人を追ひ越さうとして、言ひ合せたやうにじろじろと敏子に目を着けて、少し行き過ぎてから、その中の一人が、
「なかなか美え女だぞ……」と聞えよがしに言ひ捨てた聲が、純一の耳に入つた。
「家の女中もあの中で踊つてゐるんですよ」と敏子が言つた。「それは可笑しいんですよ、今朝など、裏口でひそひそいふ話聲がするので、何だらうと思つて見ると、漁師らしい若い男が來てゐて、何だか打ち合せをしてゐるんですよ。だから出て行く時に、今晩は歸らなくていゝよと、わたしが言つたものだから、思ひやりがあると思つて喜んだでせうよ」と言つてから、一寸聲を低くして、
「ですから、あんまり近くに寄らないようにしませう」
「さうですね……然し、あの女中は、此間なぞ、何だか僕の顏を見て變な笑ひ方をしてゐましたよ」と純一は敏子の顏を見て言つた。
「でもかまひませんわ、そんなことは……」と敏子は少しも氣にしない風に言つた。
松林からこぼれたやうに、小松が二三本、芒や萱につつまれて生えてゐる傍らに、二人は立止まつた。そこからは、踊り場が舞臺のやうに見渡された。もうかなり大きな踊りの輪が出來てゐて、澤山の人と影とが、月夜の濱の廣い砂地の上に入り亂れて、人の姿が手拍子足拍子を揃へて、くるりくるりと廻る毎に、砂地の上の影が、繪のやうに移り

動いた輪の眞中には、大きな提灯を立てた下に、一寸した櫓のやうなものが組まれてゐて、その上に、大きな太鼓を置いて、子供が四五人懸命に叩いてゐた。その櫓の傍らには、二三人の男が立つてゐて、その中の赤い鉢卷をしめた一人の大男が、此の地方で錢太鼓と呼ばれてゐる、中に一文錢を入れた竹の筒を振り廻して、盛んに音頭を取つてゐる。と、それにつれて、そこに立つてゐる男たちの中から、唄の聲がおこつた。

「揃うた揃ひました踊り子がそろた
揃うて着て來たはれゆかた……」

その唄の一調子一調子につれて、つらなつてゐる人の身體が動いて、そのさしのばす手が、丁度芒の穗が風に靡くやうに靡いて行く。

「おもふ男にそはさぬ親は
親でござらぬ子のかたき……」

潮風に嗄れてさびた喉から唄はれる唄聲は、終りを長く引つぱられて、樂しげなといふよりは、殆んど物悲しく愁はしげな響をつたへて行く――。

踊つてゐるのは四五十人位で、その半分は若い娘らしい。顔をすつかり白い手拭でかくしたのもあれば、わざと顔をあらはにしてゐるのもある。足をひらいたり、すすめたりする毎に、白地の浴衣の裾がひらひらして脛が見える。後姿がいつの間にか輪とともに廻つて、こちらに向く、その中に家の女中がゐさうな氣が、二人にはされた。

松林に寄つた方には、岐阜提灯や祭りの折りの提灯などが、そこらの立木の枝にぶら下つてゐて、その下の方に、かなりの人數が立つたり踞つたりして、踊りを見物してゐる。そのあたりを、西瓜をくりぬいてこしらへた燈籠をふりまはしながら、走り廻つてゐる子供もあれば、丸裸の若者が、見物してゐる女達の中から、二三人騙り出してゐるの

も見える。驅り出された女達が、手際よく輪の列の中に交り込んで、踊りをはじめるかとおもふと、また、疲れたと見えて、輪から出て、離れたところへ行つて、踞るのも二三人あつた。

時のたつにつれて、輪はだんだん大きくなり、踊りの調子は、だんだんにはずんで來た。ここかしこに、とりわけ品よく踊り上手に踊つてゐるのがあつて、その後から、まだ子供あがりらしい娘が二三人、見習つて踊つて行く。

「ままになるなら松江の湖水

いつかあなたの嫁が島……」

美しい女の聲で、突如、輪のむかうの方から唄ひ出した。唄の聲は、踊り子の中からも繰り返された。そして、その中に交る音頭の太鼓は、鄙びた節を調子づけて、賑かに鳴つてゐる。

「ほんとに面白さうに踊つてゐますね」と敏子がささやいた、「憂き苦勞をみんな忘れて……」

「みんな今夜の踊りを樂しみにして、長い間待つてゐたでせうからね、御覽なさい、どの身體もどの身體も、面白さでたまらないやうに見えるぢやありませんか。あんな人達こそ、本當に幸福だ」と純一は言つた。彼は彼等の群れにむかつて、「おお樂しめ、樂しめ、人生は短かいのだ、今日のこの時を逸しないで、あらん限りの歡樂を盡すがいい」と叫びかけてやりたい氣がした。

かうして二人が見物してゐるところへ、濱の方から、二三人の子供を連れてお婆さんが、通りすがりに、

「今晩は……」と聲をかけた。

純一がそれに挨拶を返すと、そのお婆さんは、

「若えもんたちは、夢中に踊つとりますが、あんた方も踊りなさりませんかえナ、ただ見とられるばつかりでもつまりませんだでナ」と言つて、きさくに笑つた。

いつ果てるとも知れぬ踊りは、最初の踊りとは違つた踊りになつてゐて、今では子供達は輪の外に出て、かなり年とつた男や女達が交つて、七八十人位の大きな輪になつてゐた、それで櫓が眞中に小さくなつたやうに見えた。

「少し歩きませうか？」と敏子が言つた。

「さあ、僕たちも一つ踊りませうか」純一はにつこりして、敏子に言つた。

「まさか……」と敏子は言つて、自分もをかしさうに笑つたが、お婆さんが行つてしまふと、

「あなた踊れるんですか？」と言つた。

「踊りたいやうな氣分ですよ、この村の若者になりきつた氣持で……」

「さうねえ、わたしも此の村の娘のやうな氣持で……」

「さうです、若し僕たちが本當に、手を引いてあの踊の輪の中に入つて行けたら、それこそ本當に仕合せだとは思ひませんか？　踊りたいだけ踊つて、短かい生を樂しむのです、今迄の身分や、世間の見得や體裁をみんな捨てて……」

かう言つて、彼は彼女の肩に手を卷いた。すると、彼女はその手を自分の胸のところで、ぢつと自分の手に握つた。

夜はもう何時頃であらうか？　月は今、中天にかかつてゐる、その月の中の山河の隈が冴えて、はつきりと見えてゐる。その月を仰いで、純一は敏子に語つた、この靜かな海と樂しい濱とを照らしてゐるやはらかな月の光を見ると、永遠から永遠につづく無窮の時が思ひめぐらされる、その月の下で、かうして踊つてゐる人達は、ここに束の間の影をとどめて、やがては此の世から消え去つて、そしてまた次ぎの時代の人達が、かうして同じやうに、この砂濱の上に踊るであらう、遠い昔もさうであつた、長い未來の時もさうであらう、そして今、その束の間の生の中に、自分達も立つてゐるのだ、この一瞬は空しく逸するにしては、餘りに尊い一瞬であるといふ事を、彼は詩のやうな言葉で語つたのである。

「さあ、もう歸りますか」

二人が歩き出すと、再び切ない唄のメロデイが、美しい聲で、後から悲しげな哀音をもつて響いて來た。

「鬪と境に燈臺あれど
　戀の闇路は照らしやせぬ……」

「あんな唄があるんですね」と敏子が言つた、「身につまされるやうな唄ですわ、そして、さみしい調子ね」

「さう……盆踊りの唄の調子は、もつと賑かな騷々しいものかと思つたら、案外寂しいしんみりしたもので、何だか、何かどうしても滿たされないものを求めて喘いでゐるやうな、やるせない物悲しい調子ですね。人間は歡樂の極みにも、悲しい音色しか出せないと見える……」

二人は松林の中に入つて、その細徑を歩いて行くと木の間に白い人影が見えて、ひそひそ話し合つてゐるやうであつた。それが踊りの輪から離れて、二人ぎりの睦言をささやいてゐるのだといふことは、言ふ迄もないことであつた。そんな人達の邪魔をしまいために、二人はわざと話もしないで、そこを通り過ぎた。踊り場の太鼓の音やどよめきは、まだ後から響いてくる。

「月が落ちるまで、あの人達は踊り明かすでせう、どんなに草臥れるか分らないのに……」と敏子が松林を出た時に言つた。

「あの中の一人だつて、そんな明日草臥れる事なんか思つてゐるものがあるものですか」と言つて純一は笑つた。

家に歸り着くと、敏子は門の戸も玄關の戸も、ぴつたり閉ざした。そして、自分はすぐ臺所の方へ行つて、手を洗ふ音がした。純一は座敷に通つて、空のコップに殘りの麥酒をついで、一口ぐつと飮んだ。

「疲れたでせう？」と傍らに來てすわつた敏子に、彼は言つた。

「いいえ、面白かつたから少しも疲れませんでした」と言つて、敏子は自分も麥酒を飮んだ。
「先刻あそこの林の中に、二人ゐましたね」と敏子がにつこりして言つた。
「あれはここの女中だつたかも知れませんよ」と言つて、純一も笑つた。
「あんな風に逢ふのも樂しいものなんでせうね」
「あとで女中に訊いてみるといいでせう」
「だつて家の女中だかどうだか分らないのに……」と敏子は言つた、「いくら何でもそんな事を……」
この會話が二人には心から可笑しかつた。
「わたし、家の女中の踊つてゐるのを見付けようと思つたんですけども、たうとう分りませんでしたわ」
「見付けられたら、此方が困るからと言つて、遠方から見てゐたんだから、先方だつて見付かりませんよ」
「ほんとにね」と敏子が言つて、一寸間をおいてから、「家の女中もそのうちに子供なんか出來て、親達にせがんで、一緒にして貰つて、そこらあたりの漁師の家内になるのでせう。考へてみると、あはれですわ。わたし此間あれに着物をやつたんですよ、大變喜んでゐましたわ」
「それはさうでせう、どうせいい嫁入りの支度も出來ないでせうからね。さう言へば、あなたのお嫁入りは大變なことしらへで、米子の町は非常な評判で、婚禮の日にはお祭りのやうだつたとかいふぢやありませんか、姉から僕はその話を聞きましたよ」
「そんなでもありませんよ」と言つて、敏子は赧い顏をした。その顏を見ると、純一は少し自分の言ひ方がひどかつたと思つた。
「昔のことは言はないで下さいね」と敏子はその美しい眼を純一に注いだ、「あんな風な結婚よりか、家の女中のやう

な、何の支度もなくつたつて、自分の好きな處にゆけるのが、どんなに仕合せでせう。ですからわたし、いつも女中に、親がどんなに言つても、おまへ好きな人と一緒に添ひとげなくちや駄目だと言つて聞かせてゐるんです」
彼女は團扇で純一の肩のあたりの蚊を追ひながら、ふと調子を變へて言つた、
「わたしもう一度お嫁入りがしたくなりましたわ」
「昔にかへつてですか？」
「いいえ、今……」
二人は顔を見合せて、微笑した。
「先刻、いい唄をうたつてゐましたね、ままになるなら松江の湖水、いつかあなたの嫁が島……さうでしたね……」
「あなたは城山でお別れの時に、その嫁が島の事をよく僕に話しましたね、僕は嫁が島を知らないけれど、あなたの話ではつきり覺えてゐるんですよ」
「まあ、さうですか」と敏子は目をみはつた、「嫁が島はほんとに美しいんですよ、丁度一筋の糸のやうに、美しい湖水に浮んでゐる上に、辨天樣の鳥居だけが一つくつきりと立つてゐるんです……考へてみると、わたしもう長いこと行かないのですもの、今思ひ出すと、急に行つて見たくなりましたわ」
「今に行けますよ」と純一は言つた。
「行きませう、あなたと一緒に」と言つて、敏子は眼を眇目のやうにして純一を見た、「さうね、朝たつて晩までに歸つて來ればいいんですから……」
麥酒はもうみな空になつた。そして純一は少し醉が出て、いい氣持になつて、小用に立つた。
雨戸をあけて、手を洗ひながら、空を見ると、月は高いところに小さくかかつてゐて、白い雲が一二片夜空に漂ふ

ともなく漂うてゐる。ぢつと耳を澄ますと、あたりの叢の中で啼いてゐる蟲の音や、潮鳴りと共に太鼓の音が微かに響いてくる。

「まだ太鼓の音がしてゐますよ」と言ひながら、純一が部屋に歸ると、そこは綺麗に片付られてゐた。

敏子は蒲團を敷いて、靑い麻の蚊帳を持出して、その眞紅な縁についてゐる吊手の一方をむかうの隅に吊りながら

「さうでせうね、今が踊りの盛りでせう、みんな入り亂れて……」と答へて、彼女はつとこちらに振り返つて、「すみませんが、そちらの方を吊つて頂戴。わたしがこんなに言はないと、あなたはなんにもなさらないのね」と言つて、彼女はあでやかに笑つた。

十八

いつか夜が明けて、外からの明るみが、雨戸の隙からやはらかに射し込んで、靑蚊帳の縫目に疊む襞もほのかに見えるやうになつた。

「ああ、夜が明けたナ」と純一は思つた。かう思ひながらも、まだはつきりとしない、夢うつつの氣持で、うつらうつらしてゐると、彼の肩のあたりに、デリケエトな感觸を殘しながら、そつと出て行く彼女の白い頸が見えた。

「ああ、起きたやうだ」と思ひながら、彼女の出て行つた後の蚊帳のゆらぎを、彼はこころよい思ひ出と共に見入つた。そしてどれほど經つたであらう。外には朝日がのぼつたと見えて、雨戸の板の節穴から、きはやかな金色の光が、蚊帳の中に射し入つた。臺所の方では、水を流すやうな音がする。

「朝のこしらへなんかどうでもいいのに、何をしてゐるのだらう？」と彼は思つた。

あのいろいろ言ひ合つた事や、またその外の事などを考へると、彼はひとりでに顏が赧らむやうであつた。昨夜は

どうして今朝のこの心持を豫想し得たであらう。彼は彼女にどう言つて聲をかけていいか分らないやうな氣がした。それで兎に角、起き上つて、雨戸をあけようと彼は思つた。そのうちに彼女がやつて來て、何か話しかけるであらう、どんな言葉を彼女がその最初の言葉とするかといふ事を考へると、彼は無限に樂しい！

新しい雨戸は、カラカラと乾いた音を立ててよく滑つた。便所の傍にある戸袋へ、一枚一枚差入れて行つて、すつかり開けてみると、殘りの一枚が、どんな加減かよく這入らないので、彼は手を狹い戸袋の穴へ差入れて、ガタゴトさせてゐると、自分の後に彼女が來てゐるのに氣が付いた。

「そんな入れ方をなすつては駄目……みんな出して、はじめから入れ直しませう」と彼女は彼の肩のところで言つた。

「それぢやもう一度出しませう」

かう言つて彼は、もう一度雨戸をガラガラと引き出したので、部屋は再びほの闇くなつた。彼がすつかり戸を繰出してしまふと、彼女が戸袋のところで、最初の一枚をピツタリと入れて、二枚目をその白い手で引き寄せてゐた。三枚目の戸を彼が押して行くと、彼女がそれを受取つて、

「そら御覽なさい、これですつかり入るんですもの」と彼女は彼を見て、からかふやうな笑顏をした。顏色はいくらか青かつたが、脣は紅く、眼はつやつやかに輝いて、そのとりつくろはぬ顏は、これ迄にないやうな魅惑に充たされてゐた。髮は綺麗に梳づけられて、さつぱりとした女優髷に結ばれ、着物はかなり派手な、秋草模樣の中形に着替へられてゐた。

「さあ、みんな押して來て下さいな」

かう言つて、雨戸をすつかり入れてしまつて、彼の傍に來た時、後にまはつて、彼女は言つた、

「ねえ……靜かな朝！」

「ああ、靜かないい朝だ！」と純一も言つた。

二人は並んで、何といふ事もなく、松林の方を見てゐた。その松林の外側の梢の方は、陽の光りを受けて、黃金色に光つてゐる。幹から下、根方にかけては、まだ朝の靄が低迷して、ほんのり靑みがかつてゐる。庭には露が下りて砂地にこぼれた松の葉が、ここかしこに、朝日の影を反射して、ほのかに水蒸氣を上せてゐる。雀がそこを囀りながら、チョンチョンと飛んでは步き廻つてゐる。見渡す限り、何一つ淸麗に澄んでゐないものはない。空氣は一種の滋味があるかと思ふほど濃かで、そしてやはらかで、おのづと息が深くなるやうな氣がする。

純一はぢつと見てゐるうちに、むかうの方へ步いて行つて見たくなつた。彼はやさしい眼で彼女を見て言つた、

「一寸步いて來ては？」

「さあね……でも、あなたお顏をお洗ひなさいな、お湯が沸いてゐますわ」

から言つて彼女が手を引つ張つたので、緣側から座敷に入つて、靑蚊帳の中に二つの枕をほの見ながら、右手でその一杯に吊つてある蚊帳を押し分けながら、臺所の方へ出て行つた。

「お石鹼はそこよ」と彼女は棚の上を指さした。白粉の匂ひのするやうなその石鹼を、彼が手に溶いてゐると、お茶碗を拭いてゐる敏子が話しかけた、

「もう踊つてはゐないでせうよ、いくら何でもね」

「昨夜の人達ですか？」と純一は言つた、「もう歸つてぐつすり寢てゐるでせう」

「自分の家に歸つて寢た人が何人あるでせう？」

「さあ……多分殆んど他所の家で泊つたでせう」と純一はやりかへした「第一、僕がからですからね」

「まつたくね」と言つて、彼女は聲を立てて笑つた。その樣子には、少しもわるびれてゐるやうなところがなかつた。

妙に無邪氣な、大膽なやうなところがあつて、そして、それが少しも厭味ではなかつた。

「それではね」と彼女は言つた、「わたしお部屋を掃除したり、お膳立をしたりしてゐますから、あなたは一寸庭を歩いていらつしやい、下駄はあたしのふだん下駄がありますよ」

「あなたの下駄が穿けるかしら？」

彼はかう言ひながら、藤色の鼻緒のついてゐる彼女のふだん下駄を穿くと、入らないといふ程ではなかつたが、足の踵が大分出た。庭に出て行くと、そこらにゐた雀が驚いたやうに飛んで行つた。見るともなく見ると、庭の砂地には小草が這ふやうにところどころに靑く生えて、それに朝露が宿り、こぼれた松の葉が針のやうに光つてゐた。庭のずつと端しのところに行つて、家の方を見ると、あけはなつた部屋は――あの夢を祕めた靑い蚊帳のとりはづされたその部屋は、何と心をわななかすであらう。彼にはその部屋も、その部屋の中で、白い手拭ひを姉さんかぶりにして、ハタハタとはたきをかけたり、箒をつかつたりして、甲斐々々しく掃除をしてゐる彼女をも、命をかけての甘い愛撫を以てせずにはゐられないやうな心持で見入つた。

緣側まで掃き出して來た彼女は、顏をあげて笑つて言つた、

「埃が飛んで行きますよ、もう歸つていらつしやい」

「ああ」と彼は言つた。

食卓は臺所の傍の小部屋に設けられてゐた。對ひ合ひに敷かれた㡡の座蒲團が、純一の眼に嬉しかつた。

「さあ、おすわりなさい」と彼女は言つて、純一のすわつたのを見ると、その前に伏せてあるお茶碗を取つて、御飯をよそつた。それは焚いたばかりのやはらかな、溫かい御飯であつた。あれだけの朝の間に、はやもうこんなに御飯を焚いたのかと思ふと、彼はこれまで主婦としての彼女を見くびつてゐたのがわるいやうな氣がした。實際、此間の

夜、中野信太郎が言つたやうに、女といふものは、どんな風にでも強くなるものだといふ氣がして、この心盡しが、なみなみならぬ感じがした。
「なに考へてらつしやるの?」と彼女は愛らしく首を傾げて言つた、「御飯がよく焚けてゐるでせう……でも、おつゆも何もないのよ、ほんのお香の物と、海苔だけよ」
「これだけで澤山です、僕はよくあなたがこんなにしたと思つて感心をしてゐるんです」
「そんなに感心なすつたの、では澤山めしあがれ」
から言ひながら、自分の小さい茶碗にも御飯をよそつて、彼女は一口食べてから、
「まあ、今朝は朝の御飯がほんとにおいしいわ!」
「それはその筈でせう」と純一は言つた。
「さうよ、自分で焚いたんだから……こんなお客樣があつて……」
他愛のないやうな話を取り交はしながら、二人は時々顏を見合せては、につこりとした。
「あの女中は歸つて來ませんね」と純一が言つた。
「歸ることなんか忘れてゐますよ、あれも屹度今朝はまだ自分の家で寢てゐるでせう。一寸來ても、お晝すぎ位でせう……あれがゐたつてゐなくたつていいんですよ、今日はゆつくりなさるがいいわ」
「僕は昨夜盆踊りを見てくると言つて出て來たのだから、歸らないとわるいのだが……」
「そんなことかまふものですか」と敏子は一言のもとに言ひ盡した、「どうせ若い男の夜遊びぢやありませんか」
「夜遊びですか……」と言つて、純一は顏がポツと赧くなつた。それを敏子は見のがさずに、
「まるであなたは何の經驗もない人のやうね、赧くなつたりして……」と言つて、箸をおいた。お茶を入れて、それ

を純一と自分とのお茶碗についでから、
「どんなにしたら、今日一日思ひ切り愉快に暮せるでせうね、丁度村の人達が夢中になつて踊るやうに、わたし達も夢中になりたいわ、もつともつと夢中になりたいわ」
「どんなことでも思ひついて御覽なさい」と純一は言つた、「僕はあなたの言ひなりになつてあげますよ」
「まあ、うれしいこと！」
何か彼かと、敏子は暫く考へるやうであつた。そして、その興味の高潮は、彼女の容貌にあらはれて、何とも言へず甘くいとほしく純一には見えた。彼は敏子が思ひ付く事が何であらうか、豫想が出來なかつた。然し、彼はそれがどんな事であつても、たとひそれがどんな際どい事であらうとも、一歩も後へ引かうとは思はなかつた。
ぢつと純一の眼を見てゐた敏子は、突然、頷いて、小聲になつて、
「厭やとは仰しやらない？」
「僕が厭やと言ふもんですか」
「屹度ね」
「ああ」と純一はきつぱりと言つた。
「實はそれ程のことでもないの、これから支度して、あそこへ行きませう……あそこへ……」
「何處へ？」
「おわかりになる癖に」
「わかりませんね」
「わたしの行きたがつてゐるところ」と敏子は目尻を少し下げるやうにして言つた。その樣子で、純一は醉つたやう

な氣持がして、微笑した。
「わかりましたよ、行きませう」
「お家の方は大丈夫？　ひよつとかすると、むかうで泊つて、明日の朝歸るの」と彼女はやや甘えるやうに言つた。
「それでいいでせう、僕は家の事なんかどうでもいいから……けれどあなたこそどんなのです？」
「わたしだつてかまひませんわ、この家を閉めて、女中の家へ一寸寄つて、これから米子へ歸つて來るから、踊りがすんだら、家へ這入つてお掃除して、お留守をしてくれと言つときさへすりやいいのよ」と敏子はわけもなく片付けてゐるやうであつた。

愈々行く事になつて、敏子は急いで支度をはじめた。そして着物を着てしまつて、純一の前に立つた時、彼は自分の眼を疑ふやうな氣がした。やや厚くお化粧をした彼女は、すつかり生々と若返つて、濃い紫の絽縮緬の夏羽織に、すらりとしたその肩のあたりの曲線の美しさは、えも言はれぬものであつた。これが昨夜の彼女のあのやはらかな肩であらうかと思ふと、彼は自分の享受したものが、いかに無上のものであつたかといふ事を、思ひ知るやうな氣がした。

「この女一人のためだ！」と彼は心の中で幾度びか繰返した。

支度が出來た彼女は、さすがに夫人らしく落着いてゐた。机の中から、旅行案内を取出して、それをバスケットの中に入れたり、化粧道具その他何くれとなく、旅行用の小さい調度を纏めて入れたりした後で、
「もう何も忘れてはゐないかしら？」と、ぢつと純一の眼を見て、自問自答しながら、
「もう多分何も忘れ物はないでせう」と言つてにつこりした。

純一はその時、ふと、彼が昨夜持つて來て、緣側の隅に置いたままになつてゐた『モンナ・ヷンナ』の譯本の事を思

ひ出して、それを取つて來て、
「序にこれもそこへ入れといて下さい」と言つた。敏子はそれを受取つて見て、
「あなたがお譯しになつたものですね」と言つて、直ぐそれをもバスケットの中に入れた。それから、彼女はかういふ風に手筈を純一に相談した。彼女はこれから俥に乘つて、濱の女中の家に寄つて、先刻言つた通りの事を話して、それから米子の町まで行つて、そこで買物をするからと言つて、車夫を返して、自分は米子の手前にある後藤驛から、十時の汽車に乘つて行く、それで純一の方は、この八時の汽車で先きに境の方へ行つて、境の波止場で、二時間ほど待ち合せるやうにといふのであつた。
純一も勿論異論はなかつた。ただ彼は、昨夜から急轉直下して、とめどなく走り出す彼女の感興に驚かされて、彼女の持前と思はれるものによつて驅り立てられるやうな氣がして、丁度自轉車で急激に坂を下りて行く時のやうな心持であつた。
「どうなつたつていいんだ、彼女が滿足しさへすれば……」と彼は自分に言つた、彼もまた滿足であつた。
「それでは一足先きに出ませう」と純一は言つた。
「えゝ、さうして下さいな」と言ひながら彼女は小さな筐の中から、高貴な指輪を取出して、一寸純一に見せるやうにして、
「これはわたしの一番いい指輪なの、わたしは指輪なんかはめて、ひけらかすのは厭やで、いつも使ひませんけれど今は持つて行きませう、萬一のことがありますから……」と言つて、彼女はにこにこした。それは言ふまでもなく、中野信太郎とその情人とが、玉造溫泉に行つた時、歸りに金に困つて、その女が時計を置いたといふ、あの話を暗示したのに違ひなかつた。

「なかなか行屆きますね、けれど僕は中野とは違ひますよ」と純一はからかふやうに言つた。

「それはさうでせうけれど」と敏子はまだ笑つてゐた、「何もかもわたしにまかせて下さいな、そして、あなたはもういらつしやい」

「雨戶は？」

「いいのよ」

「それでは行きますよ」と言つて、彼は玄關に出て、入口の左寄りの羽目板にもたせかけてある自轉車を見て、こんなものがあつたんだと思つた。彼はその自轉車を引つ張つて、裏口にまはして、臺所の横手にある一寸した炭小屋を見付けて、その中に入れた。

少し急いで停車場へ行くと、十分程して汽車が來た。彼を乘せると、汽車は夜見ヶ濱の松林と砂丘の畠との間を走つた。車窓近くの丘の傾斜には、紫の露草がしつとりと露を帶びて、咲きつゞいてゐた。境驛までは、二十分とかからなかつた。彼は停車場を出ると、わざとゆつくりとした足取りで、驛前の櫻並木の道を、町の方へと步いて行つた。彼の步いて行く道の上に、朝の日光は白く爽かに照つてゐた。町の兩側には、ところどころ、かなり汚れて色褪せた氷と赤く書いた旗がひらひらとしてゐて、それがもう夏の終りから初秋への推移の感じを出してゐた。彼は心がうきうきとして、何を見ても、それがみんな生々して、躍つてゐるやうに見えた。考へて見ると、この境の町は古い疲れた港町なのだと思ふと、彼は自分のさうした浮き立つた心持が、微笑まずにはゐられなかつた。

彼はとある神社の横から海岸通りに出た。そこにはもう、澤山の帆前船や、五百噸、千噸位の汽船が、直ぐ岸に横付けにされてゐて、岸から板で張り出した荷揚場には、鉤をもつた仲仕が澤山立働いてゐた。彼はその海岸沿ひに、外海の方へと步いて行きながら、頻りに煙草をふかしては、あたりの景色を眺め渡した。

この境の港は、長汀五里の夜見ヶ濱が、出雲の島根半島と相對して、中江ノ瀬戸を挾んでゐるその廣大な堆洲の北端にあつて、町全體が海峽に沿うて出來てゐるので、町は東西に細長く續いてゐた。中海と外海とをつなぐ一里ばかりの長さの海峽は、四五町の幅をもつてゐて、海水はいろんな浮游物を湛へて、大きな河のやうに流れてゐた。その水の對岸の出雲の土地は、こちらが一畔廣漠たる平坦な砂洲なのと事異り、海岸から直ぐ岩山になり、樹木の鬱蒼として茂つた山地になつてゐて、その麓の方に、村落らしい人家の白壁が、朝の日影を受けて、點々と指呼せられた。この山脈が日本海に突き出したその先きの方が美保の關なのだと、純一は思ひながら、荷揚場でもあり道路でもあるその海岸通りを歩いて行くと、岸にかかつた多くの帆船の檣や帆綱が、日光の中に鮮かに浮んでゐるのに反して、日蔭になつてゐる岸の町並には、倉庫や運送店などの間に、貧しげな旅人宿や、小料理店や、休憩所などが、何處迄も續いてゐた。一通り歩いてから、彼はまた引返して來て、

「もう來さうなものだが……」と思ひながら、御休憩所の看板を揭げたかなり大きな旅館の前まで來て、その店にかかつてゐる時計を見ると、まだ九時少し過ぎたばかりであつた。彼はその旅館に入つて、小半時間、時を費してから、店で立働いてゐた女中に、關行きの船の着く波止場を訊くと、

「ぢきそこでございます、まだ時間がございますだで、御ゆつくりなさいませ、何なら切符はわたしどもで買うて來といてあげますで……」と、そこの娘かとも思はれるその女中は言つた。

「いや、まだ連れが來るんだから……」と彼は言つて、暫くしてから、彼はその店を出て、指し示された波止場の、海の上に張出した板敷の上へ行つて、そこに積んである荷物の蔭に佇んだ。目の前の海峽の上には、頻りに小舟が漕いで通つてゐて、その舟の船頭同士が、大きな胴間聲で、挨拶や簡單な會話を投げ合ふ、やや混濁した暗碧の水の色は、日光を受けてキラキラと輝いて、その上を爽かな風が渡つてくる、その水の上を低くかすめたり、帆船の檣の上

を横ぎつたりして、澤山の海鳥が啼きながら飛んでゐる。

　それらの光景をぢつと見てゐると、間もなく、中海の方から、ゴトゴトと音を立てて、波をかき分けながら、關通ひの發動機船がやつて來て、純一の立つてゐる棧橋の板敷に横付けになつた。汚れた作業服を着た男が、ヒラリと此方へ飛び移つて、同じやうな風をした男が、船の上から投げ出した太い綱を受取つて、板敷の隅にある鐵の錨どめにぐるぐると巻き付けた。それと同時に、三四人の客が、何か喋りながら、船室から出て、純一の前を通つて、町の方へ散つて行つた。やがて仲仕と船員とは、悠長な懸聲を出しながら、荷物の揚げ卸しをはじめた。そのうちに、何處からかやつて來て、新しい乘客が、四五人も船の中へ入つて行つた。

「この船と連絡してゐる筈だが、汽車はどうして遲いのだらう？」と純一は待ちあぐねた氣持で、後の町並の方を振返つた。彼はだんだんと氣が氣でなくなつて、無暗に煙草ばかり吸つて、その吸殼を海の中へ投げ込んだ。

　さうして二三分も經つた時分、汽車が停車場に入つて來たと見えて、遙かに汽笛の音がした。間もなく、だんだんと、商人風の男や、百姓らしい若者などが、手に手に荷物を持つて現れ出した、その男達を追ひ拔いて、一臺の俥が威勢よく走つて來た。その車上には、オリイヴ色のパラソルをかざして、その紫の絽縮緬の半身をくつきりと見せてゐる彼女——眩しいほど派手につくつた彼女が乘つてゐた。

　彼女は彼を見付けた時に、頷くやうにして、につこりとした。そして、俥屋に何か言つたと見えて、俥屋も純一を見て、眞直ぐに彼の立つてゐる前へ俥を引いて來て、そこで梶棒をおろした。

「間に合はないかと思つてね」と純一は言つた。

「大丈夫ですよ、ここの船はそんなに早く出やしません」と、敏子はフエルトの草履をはいてゐる白足袋の爪先を輕く地上におろしながら、ゆつたりとした調子で言つた。

車夫に金を渡してから、敏子が先きに立つて、先刻純一が休んだ旅館に入つて行くと、先刻の女中が、目をみはるやうにして、二人を見た。
「一寸、電話をかして下さいませんか」と敏子が聲をかけると、
「さあ、どうぞ、そこにござりますで……」とその女中は、やはり彼女の美しい着物をぢつと見ながら言つた。片手に持つてゐたバスケットや、オペラバックを、そこの疊の上に置いて、彼女は店の一寸暗い片隅にある電話機の前に立つて、電話をかけはじめた。その會話の樣子で、彼女の呼び出したのは、美保の闘の宿屋であることが分つた。
「それぢやその部屋でようございますから……こちらは二人です……迎へにはわざわざ來なくともようございます……それぢやお頼みしますよ」と言つて、電話を切つた。
女中が盆に載せて持つて來たお茶を、純一にすすめて、自分も飲みながら、
「部屋はお二階の海に向いた八疊と四疊半とが、丁度すいてゐたんです、いい工合ですわ」と彼女は言つた。
「それはよかつた」と純一は言つた、「僕は切符を買ひに行つて來ませう」
「それぢや一緒に出かけませう」と敏子は言つて、女中を呼んで會計をすまして、純一に續いた。
切符を買つて、二人が棧橋へ行くと、先刻の車夫が、そこで海の風を入れながら、汗を拭いてゐて、
「それぢやお氣を付けて行つておいでなさいませ」と丁寧にお辭儀をして見送つた。
船の甲板に出來てゐる特等の船室には、外に客は一人もゐなかつた。汚ないテエブルを前にして、二人は並んで腰をかけて、開いた儘の扉から、むかうの下の船底になつてゐる普通席の方を見下ろすと、此の盆の休みを思はせるやうな、闘へ遊びに行く若者や、老人夫婦や、子供連れなどが、一杯にごちやごちやとすわつたり、寢たりして、船の出るのを待つてゐる。

「萬事都合はよかつたんですよ」と、敏子は純一の置いてある敷島の袋から、煙草を一本、その美しいほつそりした指で抜き出して、それにマッチの火をつけながら話し出した、「ただね、後藤の驛で厭やな男に遭ひましてね、それが厭やな男も厭やな男も、あれなんですよ、井川！……御存知でせう、西尾の番頭の息子の井川に遭つたんです」
「飛んだ男に遭ひましたね。その井川といふ男は、中野の話によれば、西尾惣兵衞の子供だといふぢやありませんか？」
「さうなの」と敏子は頷いた、そして輕く煙草を吸ひながら、「そんな間柄の井川ですから、始終西尾の本邸へは出入りしてゐるので、わたしも度々會ふのですが、これ迄つひぞ一度も話ししたことはありません、あの顏みてからが厭やですからね。そんなのに今日に限つて、パッタリ遭つたんです」
「どんな樣子でした？」
「さうねえ」と敏子は言つた、「知らない顏も出來なかつたものですから、一寸挨拶をして、一寸買物に出たので、これから夜見村へ歸るところです、西尾の家へお出でになつたら、友一郎に身體はだんだんよろしいからと言つて下さいと、さり氣なくすましたのよ」
「まあ、それはそれでいいでせう」と純一は言つた、「それにしても、こんな場合に、選りに選つて井川に遭ふなんて、どうした事でせう。世の中は妙なものですね。兎角幸福な時には、厭やなものが顏を出すのが世の中かも知れませんね」
「でも、何でもないわ」と敏子は無雜作に言つた、「かへつて好都合な位よ」
こんなに話してゐるうちに、悠長に積荷の揚げ卸しをしてゐた船も、漸く棧橋を離れはじめた。ガタゴトといふ發動機の音が、耳ざはりであつたが、二人はやはり話し續けた。

「わたしがあんな風に井川に言つときましたから、友一郎の來ないためにはなるんですよ、あたしがヒステリイを起してゐると言つたら直ぐ飛んで來るんですから、達者だと言つてやつたんです」
「ところが、こんな時に限つて、達者だと聞いて飛んで來るかも知れませんよ」と言つて、純一が苦笑した。
「そんなことはありません」と言つて見てから、敏子は目をぢつと一處に据ゑたやうな顏をして、「どうなつたつて構ひませんわ、さうなればさうなつた時のことよ」と言ひ捨てた。彼女はそんな事では打消せない程の幸福に浸つてゐるやうに見えた。その生々とした、心をそはそはさせてゐるやうな樣子を見ると、純一は女が底の知れない恐ろしい、また頼もしいものに思はれもした。
境の港の東端にある小形の燈臺の白い姿が目についた時分には、船は丁度大きな掘割のやうな海峽を出てしまつて、あらはな外海に乘り出して、波が荒くなつて、船の動搖がきは立つて來た。船室から右の方を見ると、夜見ケ濱の長汀が、描いたやうに彎曲線を見せて、その線に沿うて、眞白な笹縁のやうに波が碎けてゐる。そして、その黑い一線のやうな陸地の上には、殆んど海岸から直ぐ聳え立つてゐるかのやうに、端麗な大山の山姿が望まれた。船は左の方の島根半島の斷崖に沿うて進んで行く。斷崖の上には、樹木や岩石が連亙して、ところどころの赭土や人家も、それと指點し得られる程である。
暫くすると、扉を開けて、大きな四角い箱を持つて、ボオイが入つて來て、二人にお茶をついでから、箱の中の菓子をすすめた。
「もう關まではどれ程ですか？」と敏子が純一の前に菓子を押しやりながら、ボオイに訊いた。
「もう二十分もすれば着きませう、今丁度境から半分がとこですから」
「もつと波の荒いところがあるんですか？」

「いや、もうこんなもんです、今日は凪ぎですから」と言つて、ボオイは立去つた。その後を見送つて、敏子は暫く默つてゐたが、ふと思ひ付いたやうに、につこりして、懷から懷中鏡を出して、紙白粉で顏のむらを直しながら、
「ねえ、あなた」と純一を呼びかけた。
こんな風な呼びかけに馴れない純一は、妙に間がわるかつた。そのはにかんだやうな樣子をぢろりと敏子は見て、極く小さな聲でささやいた、
「新婚みたいにしませうね、そのつもりでゐなさらなければ厭や！」
「さう、新婚もいいが、もつと古い間柄のやうにしたらもつといいでせう」と純一は言つて見て、こんな風に言へる自分が可笑しい氣がした。
「でも、よく思ひ切つて出て來られたことね」と敏子が今度は聲を大きくして言つた、「愈々實現させてしまひましたわね」
「あなたといふ人が、僕には今度こそえらく見えた！」
「さう……さうですか、ほんとにえらいでせう、こんなに思ひ切つて出るんですもの」
「かうと思ひ切つたら、無茶苦茶なところがありますね」
「さうなの」と敏子は欣然として言つた、「そこがわたしの馬鹿なところでもあり、えらいところでもありますかしら」
關に着いてからの事を、なほ二言三言話してゐると、普通席の方で、關が見え出したといふ聲がした。そして、二三人甲板に出る樣子である。
「ねえ、五本松を見ませう」と敏子が純一の手を握つて、引つ張つた。その手を握りかへしながら、純一も立上つて、扉を開いて外に出た。敏子のさし示すところには、目の前に近づいてくる山の上に、そこら一帶は草生らしく、なだ

らかに、牛の背のやうになつてゐる丸みをもつた一點に、高い四本の松が恰好よく立つてゐる。――その四本は、何處からでも直ぐ分るやうな位置にあつて、三本だけは綺麗に並んで、あとの少し太い一本は、やや離れてゐるやうであるが、もと五本あつた時には、五本が一かたまりになつてゐたであらうとは、直ぐに想像される。風に折れたのか、人に伐られたのか、五本松と言ひ慣はしてゐるこの「關の五本松」は、四本しかないのだつた。

「あれが五本松ですよ、御覧なさい、四本きりでせう、だからさう言ふんです。關の五本松一本きりや四本、あとはきられぬ夫婦松ツてね……」と敏子は言つて、純一の肩に手をかけて、「なかなかよく言つてあるぢやありませんか、ほんとに二組の夫婦松よ」と言つてうきうきと笑つた。

船は港内に入つて行つた。港口は丁度貝殻の口のやうに、美保灣に向いて開いてゐて、淸澄な濃藍色の深い水を湛へてゐた。高い六枚屛風をめぐらしたやうな鬱蒼とした山の下の、僅かな平地を工夫して築かれた、半圓形の石垣のつらなりの上に、町並は櫛比して、小さな環状を形造つてゐる。そして、その樹木の溢れ落ちさうなほど豐かな山と、家々の裏手にそれぞれ小舟を繋いである石垣の上の町並とは、幽邃な水の上に、綸のやうな影を涵して、およそ人間が想像し得られる限りの美しい港をつくり上げてゐた。やや左寄りには、海中に築き出された防波堤と、その先きの高燈籠とが、昔の湊の面影を偲ばせてゐた。

「いいところね！」と敏子はぢつと見惚れながら呟いた、「こんなところで今夜泊るのだと思ふと、どんないい夢を見るか知れないと思ふわ」

「いい夢を見ますとも」と純一はそれを受けた。そして心に、彼女が昨夜話をしてくれた事代主命の戀物語を、どんなになつかしく思つたであらう。古代日本のプリミテイーヴなレヂエンドが、どんなに生々と思はれたであらう。彼は町の左手に一きは高く際立つてゐる美保神社の淸麗な社殿を木の間に仰いで、神話の國に入つて行くやうな思ひがした。

そして、彼は神話時代の神々の端的な自由な生活を、羨ましいと思つた。もう一度その時代にかへつて、赤裸々な心で、何の顧慮もなしに、欲しいものは取り、したいことはして、無邪氣に、生命の限りを遊び戯れることが出來たなら、どんなに樂しい事であらうと思つた。この裏日本の誇りである神話と、美しい山水とが、彼を深いエクスタシイに導いた。我れを忘れて、一眸の下に見える滿山の樹木と、豐かな一灣の碧水と、美しい町並との第一印象に、身も心もまかしてゐる時、敏子がやや高い聲で言つた、

「ねえ、あれがわたし達の宿ですよ」

それは家並の間に見える美保神社の鳥居に近く、福間館と屋根に館名を高く掲げてゐる二階屋で、その海に面した二階はすつかり明け放されて、客を待つてゐるやうであつた。

「先刻電話をかけたんですから、待つてるでせう」

「なかなか行屆いたものですね」

「だつて、さうしとかなくちや困るかも知れませんもの」と敏子が皮肉を言はれたと思つたと見えて、言ひ譯するやうに言つた。

船が棧橋に着くと、そこに出迎へてゐた五六人の旅館の番頭や女中達の中から、銀杏返しに結つた年増の女中が、二人の方へやつて來て、

「こちら様でございましたね、境からお出でになりましたのは?」と言つた。

「さうですの」と敏子がすまして答へた。

「お待ち申してをりました、さあどうぞ……お荷物はわたくしが持ちますで……」と言つて、バスケットを受取つて、女中は先きに立つた。

棧橋から出ると、左の方へ續いてゐる一條の狹い通りは、いかにも參詣路らしく、石疊を敷きつめて、その兩側には、旅館や、料理屋や、土產物の貝類や竹細工や燒物やその外いろいろな物を鬻いでゐる店などが、ずらりと軒を並べてゐる。そのやや上りになつてゐる道を步いて行くと、何處の家からともなく、三味線の忍び音がポツンポツンと聞えてゐた。

女中の入つて行く旅館――福間館は、ここでも一流の旅館と見えて、かなりの間口をとつた店先から、ずつと見渡される奧の方には、中庭の立木が見え、綺麗に磨き上げた板間には、上草履が幾足も並んでゐた。奧から出迎へた番頭に案內されて、二人は廣い階段を二階にのぼつて、その長い廊下をずつと奧まで入つて行くと、突當りの見晴らしのいい廣い部屋に入つた。女中が型通りのお茶菓子を持つて來た後で、

「直ぐお支度を持つてまゐりませうか？」と訊いた。二人は顏を見合せた。そして敏子が、

「さあ、さう願ひませうか」と言つた。

女中が行つてしまつた後で、敏子は紫の羽織をぬいで、衣桁にかけて、するすると夏帶をときながら、

「あなたもぬいだらいいでせう」と言つた。

純一が羽織をぬぎかけると、彼女は後にまはつて、それを受取つて、輕く袖疊みにして、衣桁にかけた。

お茶を飮んだ後で、二人は海に臨んだ欄干に立つた。左右に展いた港口の前面には、遙か對岸のやうに見える地平線上に、二人が後にして來た伯耆の陸影が橫はつてゐて、その中央には、この縹渺たる自然の額緣を統一するやうに大山の姿がくつきりと空に浮いて、その靑々とした山容は、正午の強い陽を受けて輝いてゐる。その手前の港外には、今しも三枚帆をかかげた帆前船が、その白い帆に一杯の風を孕みながら、悠々と動いてゐる。港口に突出した防波堤の突先きの常夜燈の蔭には、三百噸位の汽船が一艘ほど碇泊してゐるし、そのむかうには、和船が澤山重なり合つてゐ

る。ここから眺めると、港の水は一層藍碧の色を濃くして、岬角の間に、丁度壺の底のやうに感ぜられる。つい目の下は、石垣の上が、一間ばかりの幅に石が疊んであつて、多分波の高い時はすつかり浸されてしまふであらうが、今はカラカラに乾いてゐて、棧橋の方から美保神社の方へ拔ける通路になつてゐる。そこをその時丁度、島田に結つた一人の若い藝者が、美保神社の方から歩いて來た。その藝者が、ふと思ひついたやうに、二人の方をチラと見上げて、しづかに歩いて行つた。

十九

晝餐をすましてから、美保神社に二人は詣でた。

宿の前の敷石道を、左にやや上つて行くと、丁度一の鳥居の前に出る。一双の狛犬がその前に並んでゐるその鳥居をくぐると、境内には、石燈籠や御手洗のまはりに、鳩が澤山人怯ぢもせず、飛んだり歩いたりしてゐる。二の鳥居をくぐると、突當りの菊花の紋章の入つた幕をゆるやかに垂らした拜殿は、延喜式內の立派な建物で、その背後に二棟の本殿が、千木を立てて鎭座ましまして、古雅な中にも何處となく淸麗な感じを與へる。この二柱の神、事代主命と美保津姬命とを祀つてあるこの神社は、この神々の國でも、出雲大社に亞ぐ舊社で、俗に惠比須樣とも關の明神樣とも云はれて、水難火難を攘ひ除け、福運をたまふとて、遠近から詣るものが頗る多い。每年四月七日には靑葉垣の神事、十二月七日には諸手船の神事を執行するので、その日の雜沓は非常なものだといふ事である。

拜殿の石段にも、鳩が澤山下りてゐて、二人がのぼつて行くと、首を搖りながら、木の葉の寄るやうに、あちこちに寄つて行つた。

「靜かなお社ですね」と敏子は、拜禮を終つて、廻廊を歩きながら言つた。そこから見ると、二の鳥居、一の鳥居のむ

かうに、直ぐ岸に打ち寄せる海の水が見えて、そこには小舟が澤山、舳先を並べてもやつてゐた。

「ああ、こんなにしてゐると、昔のことが思ひ出されて來ました。わたし達が子供の時分、あの出雲の宇賀の莊の清水寺で遊びましたわね」

「さうでしたね、僕が祖母に連れられて行く途中で、あなた達に出會つて、參詣がすんでから、あの高い石段を下りたところの茶屋で遊びましたね。何しろあの頃から、あなたは年嵩で、この僕を引廻してゐましたね」

「そんなことを言はれると困つてしまふわ」と敏子は笑つた、「あの時二人が脊くらべをしてゐると、祖母さん達が、酒を飮むのをやめて、にこにこして何か言ひましたね、その祖母さん達はみんなもう此世の人でなくなりましたわ」

「あなたの祖母さんも？……」

「さうなの、わたしが婚禮をすますと、直ぐぽつくり死んでしまひましたの、安心したせゐでせう」

「今頃こんなにならうなんて御存知にならなくて、お仕合せでしたね」

「それはさうでせう」と言ひながら、敏子は少し俯向いて石段を下りて行つたが、下りきつたところで、純一の方を見て、「あの祖母さんは、あなたを好いてゐましたよ」と言つた。

鳥居の方へと歩いて行く二人の頭上には、滿山の松籟の聲が、颯々として寂しく鳴つてゐた。

「これから何處へ行きませう？　わたしは燈臺に行きたいんですけども……」

「燈臺に行くのだつたら、宿へ歸つて出直しませう。兎に角、これから少しあちらの海岸を歩いて見ませんか」

「それがいいわ」

敏子も同意したので、純一が先きに立つて、鳥居前から、宿の方とは反對の側に入つて行つた。そこは岬角をめぐつて、島根半島の山裾を切り開いた道が、松江の方へ通じてゐるのであつた。そちらの方は、もう漁師の家ばかりで、

山のやや窪みになつたやうなところから、海岸の岩の上にかけて、道を挾んで、丁度海から出て來た龜が、群がり寄つて甲羅を干してゐるやうに、小さな家がゴチヤゴチヤ重つてゐる。そこを暫く行くと、海岸の岩山をめぐつてゐる道の下が、だらだらと海へなぞへになつて、岸近くに、大小の岩が澤山飛び飛びにあつて、その岩の間には、碎け散る波を浴びながら、五六羽の大きな鵞が、グワツグワツと無氣味に啼きながら、ばちやばちやと水をかぶつたりしてゐた。

「まあ、鵞ですよ、こんな海の中に……」と敏子が驚いたやうに言つた。

「海の中で飼つてゐるんですね、ここには池もないでせうから……」と言つて、純一は昨夜敏子に聞いた鬪の話の鷄のことを思ひ出して、「これが鷄の代りに飼つてゐる鵞なんですね。でも、よく平氣で海の中なんぞにゐますね」

「仕方がなければ、鵞でも、海の水に馴れると見えますわ」と敏子が感心したやうに言つた。

岬角をくるりと廻つたところには、左手に水難救濟所があつて、その海へ乘り出した建物の屋根の下には、救濟船が二三隻、いつでも出せるやうに用意が出來てゐた。

「あの船が救濟に出かけて行く暴風の時なんかどんなでせうね？　一寸想像も出來ないけれど、これで波の荒い外海なんだから……」と純一は通りすぎてから言つた。

「十二月時分には、いつも海が荒れて、澤山難船があるんですよ。思ひもかけない難船で死ぬ人の身になつて見れば、隨分厭やでせうけれど、わたしなんかは、どちみち死ぬのなら、海を選びますわ」と敏子が言つた。

先刻から何か考へ込んでゐた純一は、その時顏を上げて、

「敏子さん、あなたはよくそんな風に言ふが、ほんたうに、さう思ふんですか？」と訊いた。その語調で、敏子は純一の方に顏を向けた。

「思ひますのよ」と彼女ははつきりと言つた、「わたしのやうなこんな境遇のものから見れば、若し生きるよりも死ぬのがいいと思へたなら、いつでも……」

「そんなに生きるよりも死ぬ方がいいと思へる時があると思へますか？」と純一はもう一度訊いた。

いつの間にか、話が自分達の身の上の大事に及んでゐるので、敏子はぢつと考へながら歩いた。

やがて、立止まるともなく立止まつたところは、道の上も下もが斷崖絶壁になつてゐて、目の下の突兀たる岩石に波が眞白くなつて碎け散つてゐるところであつた。もうここらは美保の關の灣の外なので、直ぐ前を日本海の波が一直線に押し寄せて來てゐた。行手には二つ目の岬角が、五六町むかうに出張つてゐて、その少し手前のやや平地になつてゐるところには、海に向いて一團の人家が密集してゐて、その磯際に、大きな網小屋が一つあつて、その中へ海から直ぐに引き上げてある舟の影も見えた。

「今迄わざと僕はそれをあなたに聞かなかつたが、今はもうそろそろ考へてもいい時だらうと思ふ。僕達の先き先きの事を、もつと實際的に考へて見る……と云ふよりは、打ち合せをしたいのですが、あなたはどうしても東京へ行かなければなりませんか？」

「行きたいと思ひますわ、それがわたしの第一の望みなんですから」と敏子は答へた、「今頃どうしてそんなことをお訊ねになるの？　あなたはそのおつもりで、一時こちらに歸つて來て下すつたのぢやないの？」

「僕がそんなつもりで歸つたのでないと言つたら？」

「それではどんなつもりで？」と敏子は言つた、その聲は少し顫へを帶びてゐた。その樣子が、純一には痛々しく思はれたので、彼は調子をやはらげて、

「なに、そんなに心配しなくつてもいいんです。僕はいつかもあなたにお話ししたでせう、東京の文筆生活が、實に

つまらなく無意味になつてしまつたことを。それでもう二度とは東京の土地を踏まないつもりで、こちらに歸つて來たのです。こんな氣持で歸つたのだけれど、あなたが强つて東京へ行きたい、東京へ行かなければ生き甲斐がない、是非行くと言はれるなら、僕は行かん事はない……然し、私達はよく考へなければならないのです。第一、東京に行けば、直ぐ私達に襲つて來るものは、生活の不安だ。かう言ふと、勝氣なあなたの事だから、わたしがどうともすると言ふでせう。然し、東京では、あなたが考へてゐるやうに、女が自活して行くといふ事は容易ではないのです。それは職業婦人として働いてゐる人も、かなりある事はありますが、それとて本當に自活の出來る程の報酬を得てゐる人は極く僅かで、大抵は徒らに身體を苦しめたり、心を荒ませたりするばかりで、滿足な生活は出來やしないのです。それにあなたのよく言はれるタイピストだとか、何だとかといふ思惑も、なかなか實現出來にくい事です。それに第一、この僕が、そんな風に身體の弱いあなたを働かせることが出來るとおもひますか？　僕には出來ません。かう言ふとあなたは、共稼ぎをするんだからいいぢやありませんかと言はれるだらう……」

「それはさう申しますわ。どんなに困つたつて、自分のしたいと思ふことをすれば、それが幸福なんですもの。不自由を厭ふわたしなら、今の境遇に滿足しますわ」

「それはよく分りますよ。この間、會の後で、僕は中野の家に行きましてね。中野はあの女の人と一緒に、朝鮮へ行くといふ事なので、みちみちいろんな話をした事でしたが、僕達の事情を話しすると、中野の言ふのには、君は敏子さんの言ふ通りにすればいいぢやないか、君が死にたいと思つても、敏子さんが生きたいと言へば、君は生きてゐなくちやならんぢやないかと中野は言つた。勿論、僕はその考へです。どんなに東京の生活が厭やだと言つたところで、あなたが行き度いといふなら、僕は行かうと思ふ。その上で、東京での生活が辛くなつて、あなたが國に歸りたいとか、外へ行きたいとか言へば、僕も一緒に行かうと思ふ……この僕の心持は分るでせうね……僕は何處へでも

行くのですから」

「分りましたわ」から言つて純一を見た敏子の眼には、涙が一杯にたまつてゐた

「このことは暫く考へさせて下さい……今さう急にいそいできめなけりやならぬ問題ではないでせう。わたしは東京へは行きたいのです。それはあなたの仰しやる通り、東京の生活はむづかしいでせうし、わたしのやうな性分と、弱い身體とでは、切り拔けて行けないで、屹度たまらなくなるものかも知れませんわ。いつでもわたしは自分の考へが、一つの夢かも知れないとは知つてゐますわ。それでも、それの方へ目ざして行つて見たいといふ此の氣持を理解して下さいね……それはあなたが東京の生活がどんなに厭やだらうかといふことはよく分るのよ、そんなにあなたが厭やで辛いものを、わたしが行きたいからと云つて、行つていいものかどうか……そこのところが、わたしにはまだきまりません、若しあなたが東京の外に行けるところがあるのだつたら、それは何處ですの？」

「僕にもそれは分つてゐないのです。此間中野が、東京へも行かず、此の土地にもゐないとすれば、朝鮮の方へ來ないかと言つてゐましたがね。中野君達とは違つて、僕達には朝鮮はどうもね……」

「朝鮮だつて愈々となれば行つていいぢやありませんか……何もかも捨ててしまへば、何處だつていいわけですもの。生きて行かうとおもふなら、何處でだつて生きて行けますわ……ただ少し考へさせて下さい」と言つて、敏子は蒼白い顏を海の方に向けた。その樣子には、非常に思ひ惱むやうな痛々しいものがあつたので、純一は默り込んだ。

こんな話の間に、空は灰色の雲にどんよりとして來て、岸打つ波がやや荒くなつて、二人の頭上の松籟の聲が、物凄いほどに高くなつた。

「歸らうぢやありませんか、雨が來るかも知れませんから」と純一が言つた。

「あひにくね、雨が降るんでせうか？」と敏子が純一を見て言つた。

「燈臺へは行けさうもありませんね」

「近いといいのだが……」

二人は海岸の道をもとへ引返して、宿へ歸つて行つた。

部屋に通ると、女中がついて來て、お湯が湧いてゐるといふので、

「あなた先きへ入つていらつしやいな」と敏子が言つた。

純一が湯に入つて、宿の浴衣で部屋へもどつて見ると、チャブ臺の上に本をひろげて、それを讀んでゐるのか、それとも何か考へてゐるのか、敏子がぢつとその本の頁を見てゐた。その本を見ると、それは純一が淀江から持つて來た『モンナ・ヴンナ』であつた。

「これはいつ譯したんですの？」と敏子が彼を見上げて訊いた。

「こちらへ歸る少し前です、丁度あなたが東京に來てゐた時分、その後半を譯してゐたんです。そして、これが僕の東京での最後の仕事になつたわけです。本屋で勝手に校正をしたもんだから、誤植が多くて讀みにくいでせう？」

「そんなこともありませんわ……」と言つて、敏子は本をピタリと閉めて、「どれ、わたしもお湯に行つて來ませう、お湯から上つてゆつくり見ませうよ」と言つて、につこり笑つて、部屋の隅にある純一のと揃ひの浴衣と、化粧道具とを持つて、出て行つた。

純一はチャブ臺に頬杖を突いて、ぢつと考へ込んだ。そして、先刻海邊で聞いた敏子の言葉を思ひ出して、

「あんな風な考へかナ、勝氣なやうでも、いつの間にか自分をたよつてゐる……何といふあはれな氣持だらう」から考へると、彼は愛情と責任とが犇々と感ぜられて、彼女をそんなにしてしまつた自分といふものが、罪深いもののやうにも思はれた。

「さうだ、中野の言つた通りだ、彼女が行くといふなら僕も行く、ただそれがあるばかりだ」

再び東京でのあの生活！　あの身をすりへらすやうな無理な生活！　然し、それも敏子が一緒ならば、敢て辭さないのだと彼は思つた。彼は敏子が湯から上つて來たら、まづ第一に、その事を言つて、彼女を喜ばせてやりたいと思つた。

障子をあけて海を見ると、もういつか雨になつて、海面は靜かに雨にけぶつてゐる。沖を見ると、微茫として、遠いところの陸地や山影は、もう見えなかつた。さつき歩いた岬角の上の樹木なども、やや煙つて、汀に舳先を並べた一灣の舟が、みなしつとりと雨に濡れてゐる。鷗が慌しげに目の前を掠める。目の下の石垣の上には、波が少し飛沫を飛ばしはじめてゐるので、雨傘をかざした宿屋の番頭らしい男が、大急ぎで通り拔けて行つた。

彼は障子をしめて、チヤブ臺の上に置いてある『モンナ・ヷンナ』を手に取つて、その最後の幕を讀みはじめた。これを讀むと、あの敏子の手紙を待ちながら、これを譯して行つた時分の心持が、ありありと思ひ出された。その時にはそれ程にも思はなかつたが、今の身になつて見れば、この譯をして置いたといふ事が、非常に意味深く思はれた。この雨の旅の宿で、二人でそれを讀むのもいい、この本が今の彼女に對して、どんなに多くの事を語つてくれるか分らないと彼は思つた。

やがて敏子が湯上りの浴衣姿で歸つて來た。顏がほんのり櫻色になつて、いつも美しいもみあげのあたりが、くつきりと描いたやうに見える。彼女は部屋の片隅にある姿見の前にすわつて、もう一度手拭ひで顏を直しながら言つた、

「熱いお湯でしたわ、よくあんなに熱いのに、あなたお入りになつたのね、わたし隨分うめましたのよ」

「僕はまたあなたの湯の長いのに驚いてゐた」

「だつて、女はお化粧をするんですもの」と言つて敏子は笑つた。

「東京へ行つたら」と彼は言つた、「あなたもそんなお化粧なんかに身をやつしたりは出來なくなりますよ」

「東京へ行つたらですか？」と彼女は彼を流眄に見た、「すつかりわたしは遣り方を變へるんです、大丈夫ですよ」

「さあ、どうだか……どちらでもいいんです」

「そんな風に言ふもんぢやありません」と言ひながら、敏子は身支度をすまして、彼の前にすわつた。そして、やつと氣が落着いたやうに、純一と顔を見合つてにつこりして、

「お茶でも飮みませうね」と言つて、女中を呼んで、お茶を持つて來させた。女中はそこらを一寸片付けてから、

「まだ少しお早いやうですけれど、お夕飯にいたしませうか、御酒はめしあがりになりますので……」と訊いた。そして敏子の返辭を聞いて引下つたと思ふと、間もなく酒肴の用意をととのへて持つて來た。料理は、土地柄とて、鮮魚の方が多かつた。鯛の刺身、鮪のてり燒、蛸の酢の物、松茸のおつゆ、他所の土地では食べられぬやうな、潑剌とした味のものが、次ぎ次ぎにはこばれて、酒もいい酒であつた。

敏子も少しは飮める方なので、ほんのりあかくなる位になつた。さうして幾つか杯を重ねてゐるうちに、パッと電燈がともつた。

お銚子を代へに來た女中が、氣をきかして引つ込んで行く時に、敏子が訊いた。

「ここの土地では大變にいい唄が聞けるのださうですね」

「さやうでございます、ここでは他處と違ひまして、藝者さんは他處から入れないで、みな土地で仕込んで出しますので、藝はなかなか出來てをります。何でしたらお呼びいたしませうか、よく御夫婦連れのお客樣で、唄を聞きたいからとおつしやつて、お呼びになりますよ」と言つて、純一の方を見た。

「呼ぶんだつたら後から、また言ひますから……」と彼が言つた。

「お呼びになるんでしたら、料理部の方へお出かけになつて頂きます。ここでは旅館の方では、藝者を入れない事になつてをりますから、別にこの一つ置いた隣へ、料理部を設けときまして、皆さんがそちらの方でお遊びになります。何でも今の島根縣の內務部長さんが、やかましうございまして、こんな御規則になつたのださうで……」と女中は言ひ殘して出て行つた。

「藝者の唄よりも、『モンナ・ヷンナ』でも靜かに讀みませうね」と敏子がその後を見送つて言つた。

「あなたはそんなにこの『モンナ・ヷンナ』が讀みたいのですか？」と純一は杯を置いて言つた。彼は醉がまはつて心持が快活になつてゐた。

「さうなの、でも、話して下さるならもつといいわ」と敏子が銚子を取りながら言つた。

「ぢや、大體の筋を話しませう」と言つて。彼は彼女のついでくれた杯をぐつと飲みほして、ゆつくりした調子で話し出した。時は十五世紀の末、伊太利のピザの城がフィレンツェの大軍に包圍されて、落城も旦夕の間に迫つた時、敵將プリンチヷルレに會つて歸つて來たピザ軍の司令官ギドオの父マルコオが、プリンチヷルレの意志をつたへる、それはギドオの妻モンナ・ヷンナに、單身、自分の陣營まで來てほしい、そしたらば、直ぐさま圍みを解いた上、百輛の糧食を送つて同盟を結ばうと云ふのである。そこで評議がはじまつて、つひにヷンナは愛する市民のために犧牲になつて行く事を承知する。行つて見るとそのプリンチヷルレといふのは、彼女が子供の時に一緒に遊んだ事のある少年ジャネルロだつた、彼はただヷンナを得たいばつかりに、いろんな艱難辛苦を凌いで、今日の地位まで經昇つて來たので、その切ない心を打明けて彼女の愛を求める。はじめは固く心を鎧つてゐたヷンナも、彼の情熱と、その純潔な心情とに動かされて、つひに、味方に疑はれて身の置き所のない彼を、ピザに連れて歸る。そして、良人のギドオに貞操の全き事を誓ふけれど、ギドオがどうしてもそれを承認しないのに、すつかり失望して、つひに欺いて身を汚されたと言

つてその復讐がしたいからとて、プリンチヴアルレを牢屋に入れさせて、その鍵を自分が預つて、「これ迄はみんなわるい夢であつたが、これからは美しい夢がはじまる……」と言ふので、この戯曲は終る。

「わるい夢が終つて、美しい夢がはじまるといふモンナ・ヴアンナの言葉はここにあります」と言つて純一は本の最後を開いて見せた。敏子はそれを手に取つて、その最後の二頁をぢつと見た。

「こんな戀愛はそんなにありませんわ、これが本當なんでせうけれど……」と敏子は、本から目を放さないで言つた。

「さうですね、このプリンチヴアルレとヴアンナとの愛も、熱烈な愛の恍惚の中に、冷たい死の呼吸を感ずるといふやうな愛ですね。一體、メエテルリンクの戯曲は、大抵愛と死とが背中合せになつてゐるんですが……」

「そして、これで二人はどうなるのでせう？ 美しい夢といふのは、どういふ意味の夢なのでせうか？」

「これを書いたメエテルリンクは神祕主義者だから、この美しい夢といふのも、神祕的な意味に解釋すべきものかも知れませんね。然し、一般の批評家は普通これをヴアンナがプリンチヴアルレと一緒に逃走するのだ、駈落をするつもりなのだと解釋してゐます。また、作者がマルコオに生きることが正義だと言はせたのが、作者自身の見解だとすればさうかも知れませんが、それなら僕は不徹底な考へだと思ひますね。この美しい夢はもつともつと深い意味を持つてゐなければなりません。單に駈落といふだけならば、折角の美しい夢も、或る批評家が言つたやうに嘘の土臺に立つといふ弱身が出來ますからね。一體、逃走といふのは、單に普通の牢屋からの逃走にとどまるでせうか？ 僕はむしろ此世といふ牢屋からの逃走ではないかと思ふ。またさうでなければ意味をなさないと思ひます。なぜかと言へば、此世では美しい夢は絶對にはじまらないか、はじまつても永續はしないからです。ヴアンナ達にしても、ギドオが生きてゐる限り、わるい夢はやつぱり二人と共に殘つてゐますからね。またよしギドオが死んでも、二人が生きてゐる限り、美しいと思つた夢も、いつかはまたわるい夢に變つてしまふのです。永遠に續く美しい夢は、ただ死の外にはな

いとかういふ風に僕には思はれるんです」

「では、ふたりは死んだといふことにして……こんな風にして、戀し合つた二人が、死んで行くといふことは弱いぢやないでせうか？　そんなに强い戀愛があるなら、たとへ先きになつてどうならうとどんなことが起らうと、愛のある限りは、そんなに死んだりしないで、墮落してでも生きて行くといふのがいいぢやありませんか？」と敏子が訊いた。

「それは皆さう言ひます、そして、またそれが本當でせう、生きて行くものの立場から言へば……だが、死んで行くものの立場から言へば、そこで凡ては引つくり返るのです。死んで行くものは、此世を輕蔑し、放擲して、死の中に永遠を見出すのだし、生きてゐるものは死んでゆくものを輕蔑して、弱者だと嗤ふ。そこへ行くと、結局水掛論になつて、どちらが正しいとも言へなくなります、多分兩方とも正しいでせう。然し、外の事なら兎に角、戀愛になると、僕一個の考へとしては、どう見ても死が究極ではないかと思ふ……」

「それはさうでせうが」と敏子が聲を入れた、「もつとはつきり分るやうに話して下さい、戀し合つた人達が、浮世の義理にからまれて死なずにはゐられなくなつて死んで行くのなら、別に聞かなくても分るのですが、あなたの仰しやるのは、さういふ風なのではないのでせう？」

「勿論です、さういふ死ならば、戀の死には違ひないが、何處迄も受身で、消極的で、確固たる自覺がないから、或る意味から言へば、世間から死に强ひられる狀態に置かれて、逃れるに途なく死んで行くところから、弱いとも言へようし、敗北者とも言へるでせう。そして、さういふ人達ならば、さうした差迫つた事情さへ無かつたなら、無論生きて行くでせう。然し、僕の言ふのは、世間のどんな壓迫を除けて見ても、死によつてその愛を完うするやうな死です、死によつて互ひの自我といふものを無くしてしまつて、本當に一つの靈と融け合つて、運命からも何からも妨げられる事のない絕對の世界に入つて行くのです。彼等には死が恐怖ではなくて、非常な渴望となるのです、敗北者として

でなく、勝利者として、その戀の歡喜の絶頂で死ぬのです、その瞬間を永遠にするのです。かう言ふと、人は詩人の夢だといふでせう、またあまりに理想的すぎると言ふでせう、然し、それがこんな醜い現實の中で實現し得られる、たつた一つの美しい夢ではないでせうか？　そしてそんな美しい夢に入つて行くといふ事が、今の僕にとつては、他のどんな事よりも ― 文學的事業や、社會主義運動などよりも、比較の出來ないほど意味のある高貴な事だと思はれるのです」

「どんなものよりもですか？」と敏子は言つた、「女とは違つて、男は戀愛の外に、もつと意義のある仕事があると、よく言ふぢやありませんか？」

「それは世間を肯定すればこそです。ところが僕は、それを否定して、そしてそこまで考へてゐるんです」

「大分わかつてまゐりましたけれど……」と言つて、敏子は暫く默つてゐたがやがて、半ば呟くやうに言つた、「あなたがそんなに突き詰めた考へになつてゐようとは、わたしは少しも知らなかつた……」

「それはさうでせう……然し、僕が人間が變つたやうになつたのは、ここまで突き詰めて來たからです、若しこんな考へにならなければ、僕は東京からも歸らないし、あなたともこんな關係にはならなかつたでせう……」

「それではあなたは……」と敏子は言つて、何とも名狀の出來ないショックに打たれたやうな引き緊つた顏をした、「そんな風なお心をわたしに投げかけて下すつたのですね！」

「恐ろしいのですか？」と純一は聲を詰めて言つた。

「恐ろしいなんて、そんなことよりも、わたしはすまないと思ふのですよ、あなたにくらべたら、わたしはもつと不眞面目でしたもの……あなたツてものを踏臺にして、東京で氣儘な生活をしようと云ふ極く世俗的な考へが大部分でしたもの……あなたはわたしをつまらない女だと思つてゐらしつたのでせう？」

「そんな風には思はなかつたのです、反對に、あなたこそ僕を理解してくれるたつた一人の人だと思つてゐました……ただこれ迄話しする機會を待つてゐたのです、僕はあなたと生も共にしたいし、死も共にしたい、だから、あなたが東京へ行きたければ、一緒に行つてもよく、どちらでもあなたの言葉通りになるつもりです」

「わかりましたわ……感謝いたしますわ」と彼女は言つて、頷いた、「二人で死にませう、いつでも……」

「いつでもです」と純一は言つた、「敏子さん、お互ひに生きてゐたいだけは生きてゐませう、僕は決して死を急いではゐません。然しまた、あなたが死ぬ氣になつたならば、今直ぐ、ここでもいい、みなあなた次第ですよ」

「わたし次第ですか」と敏子はぢつと純一を見た、さうなれば……どうせ、わたしたちがどんなにいい理窟を持つてゐたところで、わたし達のかういふ關係は、ことによつたら死ななければならないかも知れないとは、わたしも思つてゐました、どうせ世間の人の口を借りれば、不義なのですもの」

その睫毛には、いつか一杯の涙がせぐり上げてゐる。「何もかもみなわかりました、そしてわたしは滿足ですわ、

「そんな考へ方は、僕は極く狹いものだと思ふ、そんなものではありません、そんな事は悧巧な道德家達にまかせておけばいいぢやありませんか。僕は今自分達のやつてゐる事がわるい事だなどとは、ちつとも思つちやゐませんよ、善いとか惡いとか云ふ問題ぢやないのです。そんな意味から、僕は死なうと思つてゐるのぢやありません」

かう言つて純一は、眼の前にうなだれて、雨に打たれる白い百合の花のやうに泣いてゐる彼女をぢつと見た。

「悲しいのですか?」

「いいえ、悲しいのぢやありませんわ、多分、嬉しいのでせう……」と言つて、敏子は涙の顏で派手に笑つた。

「これから極く短かい間、樂しく暮しませう、見たいところを見たり、したい事は何でもして……」

「さうですとも、今度の旅なんか、だから大出來なんですよ、こんな風に幸福に、短かい間が樂しめるツて事は、僕も

なら幸福ですわ」

「わたしの氣まぐれが丁度よかつたんですもの……よしんばここで死んだつて、こんな美しい景色のところで死ぬ想像しませんでした」

「あんまり美しい景色を見てゐると、そこで死んでしまひたくなりますね、丁度自然の中に同化して行くやうに……感情が極まれば死です、快樂の限度も死です、さうは思ひませんか？」

「さうおもひますの」と敏子が言つた。その聲の調子には非常に素直なものがあつた。彼は敏子の手を取つて言つた、「死ねばもう離れない、私達は何度も何度も離れ離れになつて、そして、多分かうして生きてをれば、いつかはまた離れてしまふ事もあるでせう。また、たとひそんな事がないにしても、本當に二人きりの、誰にも妨げられず煩はされない自由な生活は出來やしないし、悲しい事には、時とすると心と心がちぐはぐになつたり、互ひに心を讀みあやまつたりまする、けれど死んでしまへば、もうそんな悲しい人間の制限を超越してしまふ……そんな高いところまで、生命を高めて行きたいぢやありませんか」

「何もかもそれできまりましたわ、何だか心が非常に輕くなつたやうな氣がしますわ、自分でも分らないやうな暗いものが、これまでわたしの心にあつたんですけれど、今はそれもなくなりました。」

「さうなつてくれて僕もうれしい」と純一が靜かに微笑して言つた、「人間といふものは、覺悟がきまると、さういふものなのです。だから死なんてものは、辛いものでも恐ろしいものでもなく、何でもないものなのです、厭やな世の中は後に消えてしまつて、私達の前には、美しい夢しかなくなるんですからね……今年の秋はどんなに樂しい秋でせう、美しい裏日本のひと秋を、小鳥のやうに樂しみませう。僕の讀んだ或る本に、かういふ面白い說があつた、それによると、若し自分が男と女とを創造することが出來るなら、現に存在してゐるもの、高級な哺乳動物とはすつかり

異つた形式を人間に與へたい、昆蟲を手本にして、全く別種のものに創造したい、そして毛蟲としての生活から、蝶に變化し、その生涯の最後の時間を、ただ美しく愛することにのみ送らせたい、青春といふものを、人間の果敢ない生涯の最後に置きたい、或る種の昆蟲が、その最後の變態の時に、翅だけを持つて胃を持たないやうに、人間もそんな淨化した形式で再生して、その最後の極く僅かの間だけ愛して死ねるやうにさせてやりたいといふ事でしたが、僕はこの說を大變に面白いと思つたんです」

「美しく短かくつていふことは、わたしも好きですわ、それはわたし達のやうなものには丁度いいのです、そんなに自由な輕くなつたやうな心持で、昔の少年少女の時分にかへつて、短かい間を樂しく暮しませう、二つの蝶のやうにね……」

かう言つて彼女は立上つて、姿見の前に行つて顏を直してから、女中を呼んだ。

外はもうすつかり暮れて、雨はやつぱり降つてゐる。先刻女中の言つた料理部の方からでもあらう、客の笑ひ聲や、三味の音がする。そこばかりでなく、今はこの町全體が、絃歌と笑聲に活氣付いてゐるやうに見えた。

十時、十一時と、時のたつにつれて、絃歌の聲はますます高まつた。

おなじ褥に、この騷がしい町のざわめきをよそに、二人は靜かに話しつづけた。

〽一夜ながれの仇夢も、別れは惜しき人ごころ、まして馴れ染めもう五歳の……

さびた女の哀音を帶びた美しい聲が、冴えた三味の音とともに、聞えて來る。

この南裏日本きつての歡樂鄕美保の關の町は、雨によつて一層その情趣を加へてゐた。とりわけこの頃は盆なので遊びの客も一きは賑はふやうに見えた。その湧くがやうな絃歌の伴奏の中に、二人の情感は、今や制し切れぬ程に高まるのを覺えた。

雨はいつの間にか暴風雨となつて、波の音が高くなつた。そして絃歌の聲は、だんだんその音に消されてしまひ、つひには全く音絶えてしまつた。日本海の怒濤は、この島根半島の突端にある小さな港町を、その儘海へ攫つて行くかと思はれるばかりに、鏜鞳たる音を立てて、荒れ狂ふ。時々間を置いては、轟々と凄まじしい雄叫びの聲を揚げて、風が滿山の樹木を震撼する。港外から逆卷き寄せる怒濤の音が、それに呼應して、部屋の直ぐ下の石垣に打碎ける激瀾の音は、家の羽目板に飛び散つて、飛沫はさながら枕に灑ぐかと疑はれる。

「恐ろしい暴風雨になりましたね、大丈夫でせうか?」と敏子がささやいて、枕を寄せた。

「大丈夫ですよ」と言つて、純一はぢつと敏子を見て、……。

二十

雨の霽れるのを待つて、翌日の午後、二人は松江行の發動機船に乘つた。暴風雨の後の海は、さすがに波が荒かつた。彼方に見える大山の山姿は、雨雲にとざされて、その裾の方が、わづかにそれと知られるばかりである。

「えらい暴風でござりましたナ」と船底の中では、口々に昨夜の話をしたり、盆の景氣を話してゐたりした。

船が港口に出て行く時、純一は最後の一瞥を美保の關の全景に投げた。彼の心には、言ひ知れぬ悲しみの情が一杯に漲つてゐた。敏子も彼と並んで、ぢつと眼を注いでゐた。忽ち景は一轉して、彼等があの物凄い暴風雨の中で、悲しい狂歡を味はつた古風な美しい港は、二人の眼界から消えてしまつた。

船はきほひ立つた高い波に搖られながら、やがて海峽に入り、境の港をも後にして、中海に入つて行つた。ここまで來ると、波は內海らしくやや穩かになつて、右にも左にも、陸地が間近に見える。左手には、波の上に、ところどころ赤土の崖を見せた、平坦な畠ばかりの一續きの陸地が橫はつてゐる。それが二つの大根島であつた。純一が少年

時代、そこで父と一緒に冬を過し、そこで父を失つた、あの思出の深い島である。その頃の生活を、彼は新たに思ひ出して、敏子に、その島でゐた頃、彼女と既に手紙のとりやりをしてゐた話をした。

「島に一寸寄つて見ませうか？」と敏子がその話を聞いた後で言つた、「あなたが小さい時ゐた家は今もあるでせうか？」

「多分、その儘あるでせう、あの時僕達の世話をよくしてくれた鹿太郎も無事でゐる事でせう、寄つて見たいとも思ふが、ここからかうして眺めるだけでいいでせう」

船の進行につれて、大根島の形は變つて、やがてぐるりと島を半廻轉して、船がとまつたところは、嘗つて彼が父とともに此の島に來た時に上陸した入江であつた。その碇泊地の右手に當つて、三つ四つ聳立つてゐる大きな海中の岩も彼の記憶に殘つてゐるものであつた。けれども、彼がぢつと見入つた彼方の入江の掘割に沿うた家並の中には、鹿太郎の家らしいものも見えなかつた。彼は思ふともなく、こんな處で寂しく死んだ自分の父の一生――西尾惣兵衛の所謂「多少山師的な」その一生の浮沈を考へた時、父が最後にこんな孤島に來て、酒の密造などを思ひ立つたのも、自分の今度のこんな心持なり遣り方なりに、一味相通ずるものがあると思つた。父にしても、自分にしても、謂はば自分の性格に對する反抗の血で繋がつてゐると考へるところに、彼の興味があつた。彼にはこれ迄あんまり感じた事もない父に對する親愛の情が、胸に一杯になるやうであつた。

入江を出て、再び船は出雲の海岸に沿うて、中海を横ぎつて、馬潟の瀬戸にさしかかつた。もうそこは中海と宍道湖とをつないでゐる大橋川の河口で、一面に蘆荻の生ひ茂つた川尻の洲が、綠色もやや衰へて、もう秋の感じを出してゐた。

「わたしはねえ」と敏子がその景色をぢつと眺めながら言ひ出した、「小さい時、母に連れられて、米子から松江通ひ

の船で、この川口へさしかかる度に、いつも不思議な氣がしたんですよ、こんなに二つの湖がつながつてゐますから……」

「さう……中海は湖水といふより入海でせうが、二つの湖水が繋がつてゐるやうな感じがしますね、入海だけに中海は男性的に見えるし、宍道湖は僕はまだ知らないけれど、嫁が島などの事を考へて見ても、美しく穩かで女性的なやうに思はれますね」

「さうですわ、まつたくそんなに思はれますわ、あの宍道湖はほんとに美しい女のやうです」と敏子は言つて、一寸默つてゐたが、ふと思ひついたやうに、「わたしは此頃、自分が女だといふことが、ほんとに嬉しいのですよ。昔は女に生れたことがくやしくて、わたしが男だつたらとよく思ひましたわ、けれど今は女でよかつた、女なればこそ、こんな幸福を味はふことが出來るんだと思ひますわ……それは女の身になつて見なくては誰にも分らない幸福です」と微笑んで言つた。

大橋川が幾條の掘割に分れてゐるところに來て、船がその眞中の本川に入ると、兩岸は、直ぐに平かな稻田になつてゐて、その秋の稔りが豐かに黄金色の穗を垂れてゐる上を、蜻蛉が飛び交うたりしてゐた。小さな横堀には、田舟が繫いであつたり、水車がめぐつてゐたりするあたりの光景が、いかにも水鄕らしい感じを與へた。水面はずつと低くなつてゐるので、稻の葉や莖のつらなりが、その儘に見ることが出來た。これで空の高く靑々と晴れてゐる日に、このあたりを歩いたら、どんなにいいだらうと、純一には思はれた。

大橋川を溯るのには、かなり時がかかつて、一日曇つてゐた空は、いつしか夕暮の氣配になつて、松江が近くなつた時には、もうその町のあたりには、電燈があちこちにともつてゐた。船は新大橋の下をくぐつて、大橋の少し手前の左岸に繫留された。

「わたしの育つた松江の町をよく見て下さい、それは本當にいい町ですから」と敏子が言つた。
船室の人達はもうみんな立上つて、どやどやと出て行く。その後から二人はゆつくりと出た。
「靜かないい宿へ行きたいものだが、あなたは心當りはありませんか？」と純一が訊いた。
「ええ、わたしは宿のことはあまり知りませんけれど、こんな旅ですから、本當の一流の宿に泊りませう、ここでは皆美館が一等いいさうですから、そこへ行きませう」
その乘船場の前で、二人は俥をつらねて、皆美館へと向つた。俥をつらねて、大橋の上にさしかかつた時、純一はその橋の左方に、暮色の中に糢糊として、夕波を立てる靜かな宍道湖の水面を見た。そこには、早や點々と漁火がつらなつて、夢のやうに漂うてゐる。橋を渡ると、俥は靜かなきちんとした町並を直ぐ曲つて、間もなく湖畔に立つてゐる宿の前に來た。皆美館といふのは、町並から細い石疊の路次によつて、ずつと奧まで導くやうな構へに出來てゐて、その玄關に二臺の俥がとまると、型通りの大旅館らしい出迎へと案內とで、二人は二階の湖水に面した八疊の間に通された。
「ここまで來て母の實家に寄らないのは變な氣がしますけれど、まさか寄れませんからね」と座敷にすわつてから敏子が言つた。
「行きたいのだつたら行つてもいいでせう、一人で來たやうな顏をして……」
「いいえ」と敏子が言つた、「かへつてかうして宿で泊つて、松江を丁度知らぬところの市街のやうにするのが樂しみですもの、本當は行くのがいいんですけれど……どちらでもいいんです」
勾欄から湖上を見ると、直ぐ目の下からずつと右手にひろがつてゐる湖水の彼方に、丁度その水面の眞中どころに、純一が敏子から話されて、長い間夢寐に浮んでゐた一片の島影が、絲のやうに淡い影を暮色の中に描いてゐた。島の

一端には、一基の鳥居が、恰好よく蝸牛が角をあげてゐるやうに見える。
「あれが嫁が島ですね」と純一は言つた。
「美しいでせう、あの島のまはりには、蘆が一杯に生えてゐるんです、明日あれがつい目の前に見える袖師の浦へ行つて見ませう」
女中がこの旅館の自慢らしい料理を持つて來て、いろいろともてなした。その中には、この前の宍道湖でとれる白魚をあしらつたものや、鯉の糸づくりなどもあつた。
「この皆美館では、友一郎が松江に來る毎に泊つて、藝者を呼んだりするんですよ」と敏子が女中の行つた後で言つた、そして純一の杯に酒をついだ。
「さう言へば、米子の方はどうなつてゐるでせう？」と純一が少しいたづららしく言つた、「友一郎氏が別莊に來てゐさうですよ」
「さうでせうか？　まさかそんなことはないとは思ひますけれど、蟲が知らせてるかも知れませんね。來てみたらもぬけのからで、吃驚するでせう……でも、さうなつたらさうなつた時のことですわ、あの人はあれで非常に世間的な體裁をつくることが上手な人ですから、わたしがゐないといふことが分つても、それであわてて大騒ぎするやうなことはありませんわ。屹度すぐにいい智慧がまはつて、そこのところをうまくやりますわ。そんなところはいつもあの人に感心してゐるんです」
「そこが西尾流のずばぬけた才能ですよ、友一郎氏も今にもつともつと腕が冴えて、親父以上の事業家になるし、財産もこしらへるでせう」
「さうだらうと思ひますわ、わたしなんかも、友一郎の家内でぢつとしてをれば、兎に角、人に羨まれる身分ですわ。

けれど、そんなことはつまらないんですもの……生きて行くのには、友一郎のやうな男が、わたしには必要なのですが、好きなのはあの人ではありません、何だか近づけば近づくほど危險な感じがして、深い淵にでも飛び込んでしまふのぢやないかとは思ふけれど、好きな方の人にやつぱり引き寄せられてしまひますわ……心がいつも張り切つて、感情が生々するこんな生活が、わたしは好きです、丁度崖の上で命がけのダンスをするやうで、樂しみが深いのです」

「こんなところまで引つ張り出してしまつて、僕はあなたが可哀相なやうな氣がする」と純一はしんみり言つた、「破滅は目に見えてゐるんですからね」

「それはお互ひですわ、引つ張り込んだのは兩方からと言へるでせう？ 兩方から相寄つたのですもの……そして、破滅も破滅ではないんですもの、あなたが昨夜仰しやつた通り……」と敏子は微笑んだ。

「僕はすつかりあなたの氣持の變つたのが見える、本當に僕はあなたに信頼が出來る」

「わたしもあなたをさう思つてゐます、あなたにわたしの死を捧げますわ」

から言つて、敏子は自分でも杯をあげた。

「わたしはねえ」と彼女は微笑んで言つた、「こんな風に世間のどんなことでもみんな知つてゐる女ですわ、人間の暗い祕密も、男の人のいろんな生活も、みんなわかるつもりです。こんなわたしが、自分の今迄踏んで來たあとを、みんなあなたに見せもしたし、話しもしたんです……愛してゐる人のことを、何も聞かないでゐるといふのもいいのかも知れませんけれど、わたしはみんな知りたいんですよ……あなたの昔愛した人のことなど……」

「それは話してもいいけれど、そんな事は聞いたつてつまらないでせう、「それに僕の過去はみんな滅びたやうなものですから」

「あの人とあなたとはどうだつたんですの？ 宏さんがよく言つてゐたあの娘さんは……」

「冬子ですか？」と純一は少し赧くなつて言つた、「そんな娘がありましたよ、母親が藝者にするとか言つて、氣の毒な事情でしたので、僕もそれに同情して、結婚しようかと思つたのです、今考へてみると馬鹿々々しい事ですが……然し、その娘は僕よりも宏君を愛してゐたのです、關係があつたのは僕ではなくつて、宏君です」
「まあ、さうですか」と敏子が驚いたやうに言つた、「宏さんの口吻では、あなたがその娘と關係があつて、餘程何かあつたやうに匂はせて話しするので、わたしは嫉妬深い方ですから、わたしといふものを忘れて、何といふ氣の變りやすい男の方だらうと、あなたの事を恐んでゐたんですよ」
「西尾友一郎といふ立派な良人のあるあなたがですか？」
「だつて……それとこれとは違ひますわ、わたしはいつ迄もあなたツて人が、昔通りで純な青年のままでゐてくれることを願つてゐたんですもの、無理なことでせうけれど……」
「ところが僕は大いに不純になつてしまつたんですよ、冬子でなく……その冬子に別れて、別のところで、ある家の留守番に行つてゐて、そこに二三ヶ月ゐる間に、お千代といふ女にふと妙な譯になりましてね」
「そして？……」と敏子は少からず變な氣持になつた樣子で、先きを促した。
「もう話すのをやめませう、あなたに厭やに思はせるから」
「だつて、そこまで言つておきながら」と敏子が笑ひながら睨んだ、「さあ言つて頂戴、ちつともおこりませんよ」
「それがあなたがおこるやうな問題ぢやないんです、極くありふれただけの事です、誰も氣が付かないうちに、僕はそんな風になつて、その女も別に一緒になるといふ氣もなかつたし、それなりになつてしまつて、それからの僕は、もう昔のやうな品行方正ではなくなりましたよ」
「その女の人はどうなりました？」と敏子はまだ前のところにこだはつてゐた。

「どうなつたか僕は知りません、ただあとで何處かへ嫁いて、子供が生れたのを連れて、その家へ來て、僕によろしくと言つたさうです」

「どんな風にその人と最初さうなつたんです？」と敏子は變な笑ひ方をしながら、まだそこに聞かねばならぬ事が澤山あるやうに言つた。

純一は成程女はそこを氣にするのだナと思ひながら、彼が林田先生の家で暮してゐた時の生活を話して、本宅の方からそのお千代が三度々々の食事をはこんで來た事、洗濯や身のまはりの事を面倒みてくれた事、身體の丈夫な極く親切な女であつた事などを話して、

「夜など蒲團を敷きに來てくれたんですからね、それ迄の僕の生活と、急にすつかりが違つてしまつて、何もかもそんな風になつたものだから……」

「それぢやまるでそこの家でさうさせたやうなものですね」と敏子が苦笑した。

「そんな譯でもなかつたのですが、若しあの時僕があの女と一緒にならうと言ひ出しさへすれば、それは好都合にはこんだでせうが、僕はそれ程その女が好きでもなかつたので、ついその儘にしてしまつた譯です。ああした關係は、謂はば水の上を行く舟の水脈のあとのやうなものですよ、あなたにすまないと言へばすまないが……」

「そんなことはありませんわ、わたしにだつて、友一郎といふ人があつたんですもの。でもね、どうして二人とも、そんなに知らなくてもいい人を知つたのかと思ふと、怨めしくなりますわ」

「それは仕方ありませんね、人間の約束がさういふものですから……一緒になりたい人とは一緒になれず、何でもない人と一生を共にするのが普通ではありませんか？　それにくらべれば、たうとうかうしてここ迄來た自分達は、幸福だとは思ひませんか？」

「それはさう思ひますけれど……」

「それに僕の過去はすつかり滅びたんです、もうないのです。多子のことでも、お千代のことでも、僕にとつては、もう考へてみる事さへないのです。けれどあなたには、まだあの人がある……今は兎に角として、日數を經て行くうちには、何と言つてもあの人は、これ迄あなたの生活の基礎になつてゐたのだから、あなたの上に濃い影を殘してゐて、何かにつけて、あなたについて廻る。東京へ行つて、二人が一緒に暮すやうになつても、さうだらうと思ふ。嫉妬深いものならば、それだけでも堪らないでせう。然し、僕はそれを問題にするわけではない」

「そんなにわたしにあの人が濃い影を殘してゐるかしら？」

「今は氣が付かないけれど、それはさうです。一寸した事にでも、あなたの頭には、あの人と僕とは一緒に出て來るに違ひない。そして、それは人間として仕方のない事ですよ」

「さうだとすると、わたしが自分の心で、一人の人だけを思つてゐようとすれば、生きてゐる限り、それは出來ないといふ事になりますね」と敏子が俯いて言つた。

すつかり夜になつてから、二人は宿を出た。

「ここにはわたしの見知りの人がかなりありますから、出會ふと困りますのよ。暗い方を歩いて行きませう」と敏子は京橋を渡つた時に言つた。

松江はこの南裏日本でも、一番賑かな市街で、全體の感じは、極めて閑雅で、いかにものんびりとやはらかであつた。藩祖松平不昧公の遺風が今でも殘つてゐて、人情も敦厚であると云はれてゐる。町の目貫の大通りは、末次本町から殿町にかけて、米子の町などよりも、ずつと美しく整つてゐて、かなり大きな商店の建物が並んでゐたが、その中には、まだ古風な商店が多くて、いかにも純日本的な町の面影をとどめてゐた。

「ここは一寸京都に似てゐるんですよ」と敏子が言つた。
「あなたは京都に泊つたさうですね」
「どうしてあなた御存知？」
「忘れたのですか？　あなたの手紙に書いたぢやありませんか」
「あア、さうでしたね。京都で泊つて、友一郎がゆつくり嵐山の溫泉に入つたり、桃山にも行つたりしようと言つたんですけれど、わたしが行きたくないと言つたもんだから、大變機嫌がわるくつて、自分一人で夜遲くまで何處かに行つて、お酒を飮んで歸りました、祇園にでも行つたんでしたらう……こんな風に言ふとをかしいんですが、わたしは友一郎が何處へ行かうと、その行先が分つてゐても、別に何でもないんですよ。もつとやきもちやいてくれなければ張合ひがないと、いつも言つてゐました」
「そんな風に直ぐあの人を考へ出しますね、僕としては、何と返辭していいか分らない……」
「御免なさいね、つい……」と敏子が笑つて言つた。
二人は寂しい濠端の方に出た。その時、むかうから二三人連れの女が、やつて來た。そして、通りすがりにぢつと此方を見る樣子に、敏子は身をかはして、純一の肩の蔭に寄つた。そして、むかうが行つてしまつてから、
「あまりわたしを見るので、知つてゐる人かと思つて、ハツとしましたわ。でも、さうではなかつたやうです。もし知り人に會つたつて、別に困りはしませんわ、何とでも言ひますもの」とささやいた。
公園の入口を入つて、暗い木下路を行くと、むかうの廣場の方に歩いてゐる人影がちらちらと目に入つた。石段を上つて行くと、更にまた廣場があつて、茶店などがあちこちにあつた。そこからまた石段をあがつて行くと、白堊のお城の天守閣が、夜空に繪のやうに見上げられた。

「お城にもあがれるんですよ、明日の朝來て、ここから方々を見ませう」と敏子が言つた、「明日はこの城と、神師の浦とをまはる事にしませう」

「そこから石段を下りて、もとの廣場へ引き返して、公園を出る時に、敏子は自分の母の實家に行くのはここからあちらへ行くのだと、左手の方を指した。

「それぢやこれからその傍までで行きませうか?」と純一が言つた。

「かなり遠いんですよ、ここから普門院橋をわたつて、三四丁行つたところで、北田町といふところですが、行くのはよしませう」

そして、二人は元來た町とは道をちがへて、宿の方へと歸つて行つた。みちみち敏子は、いろんな建物を見る度びに、知つてゐるだけの說明をした。彼女と西尾宏とが通つてゐたといふ小學校の前も、二人は通つた。

「あの頃から、西尾宏といふと、隨分才のある子供だと言つて、先生など隨分大切にしてゐました。學藝會などでは、いつも目立つてえらく見えたもんでしたよ」と敏子が言つた。

宿へ歸つて來て、部屋に通ると、湖水に向いた雨戶はすつかり閉ざされて、電燈の明るくともつてゐる下に、絹の夜具が敷かれて、その掛蒲團の友禪縮緬の模樣が、水に紅葉のあでやかな色で、部屋全體をなまめかしくしてゐた。

「お千代さんに蒲團を敷いて貰つたりして……」と突然に敏子が言つた、そして純一の弱つたやうな樣子を見ると、からかふやうに、

「どんな氣持だつたんでせうね?」と面白さうに言つた。

「あなたに飛んだ事を知らせてしまつたもんだから……」

「これから澤山虐めてあげませう……もうおやすみになりませんか、昨夜は波が荒くつて、恐ろしい氣持でしたわ。

ひとりでないから大丈夫だとは思ひましたけれど、ほんとにひどい暴風雨でしたものね」

そして、彼女は、その恐ろしかつた夜の、忘られ難い情熱を偲んでゐるやうであつた。

「今夜の波の靜かなこと、まるでささやいてゐるやうでせう……宍道湖の波は、どんな暴風雨にだつて、決してあんなになることはありませんわ」

かう言つて、敏子は純一が横になるのを見ると、電燈を消した。

純一は長いこと眠られなかつた。やさしい、疲れ切つた寢息がする。彼はこの三夜、夜毎に親しみが深くなる、その氣配が身にまつはるやうな氣がして、言ふに言へない悲しみを感じた。身も心も投げ出しての時……息づかひの荒くなる時…… 生とも死ともわからない時……そんな時に、その直ぐ後に、この悲しみが彼には感じられた。

「ああ、ここまで自分は思ひ通りにやりおほせた、これから先きは、もうどうなつてもいい」と彼は思つた。

外には美しく照る月に、湖の水は、瀲波を立てて輝いてゐるであらうと思つた彼は、雨戸をあけて、その月を眺めて、自然の中に融け込むやうな、あの甘い悲しい情感に、もつともつと浸りたいやうな氣がした。けれども、今はもう自分ひとりでは物足りなかつたし、彼女を喚び起すのには、あまりによく彼女が眠つてゐるので、遙かにその月光と煙波とを想ひやりながら、彼は自分の腕の中にある彼女の肩に、掛蒲團を卷いてやつて、長いことその寢亂れ髮をいぢつてゐた。

翌朝、朝飯をすましたところへ、女中が氣を利かして、この土地の新聞『松陽新報』を持つて來た。敏子が受取つて、三面をひらいてから、突然純一の方にその新聞を見せるやうにして、

「御覽なさい、大菅左門刺さるとありますよ……葉山の日蔭の茶屋で……」

「大菅左門が殺されたつて？　誰に？　國粹會の者にですか？　同志にですか？」と言つて、純一が非常なショックを受

けたやうに、敏子と一緒に、その新聞に眼を通すと、それには東京電話として、二十行位に、その概略が報道されてゐる。それによると、無政府主義者大菅左門は、葉山の日蔭の茶屋に於て刺殺された、その下手人は、彼の情婦神山高子(三〇)である、なぜ彼女がこの兇行に及んだかと云ふと、大菅左門を中心として、今春以來葛藤を重ねてゐた自由戀愛問題のためらしく、大菅を取卷く彼の妻岡よね子、新しい戀人江東奈枝子、及び今回の下手人神山高子の關係は、極めて奇怪なものであつたが、最近高子が大菅に疎んぜられ、奈枝子の方が愛される事深きに及び、嫉妬の情遣る方なく、この刃傷に及んだものらしい云々。

「神山高子に殺されたのでは、あの大菅左門も浮ばれまい、いかにも主義者らしい死に方がしたかつたらうに」と純一は新聞から眼をはなして呟いた。

「三人の女を一様に愛するのが自分の戀愛の態度だと、大菅左門は言つてゐましたね、でも女の身になつて見れば、そんなことは滿足が出來ないでせうから、こんな結果が來たのでせうね」と敏子が言つた。

「大菅左門は唯物論者だから、格別問題もなしに、三人の女を愛し得られると思つてゐたかも知れない。が、それもやはり人間の精神的な方面を閑却した考へなのだから、こんな破綻を來したのも無理はない」と言つて、純一は遙かに東京の同志達や、新聞記者達の往來を想ひ遣つて、一代の立役者だつた大菅左門の最期を弔つてやりたかつた。

「大菅も絞首臺に上らないでしまつたのは、無政府主義者の彼としては、殘念な事だが、然し、アナルキズムの理論などは、要するに理論に過ぎないのだ、そして、彼の主義そのものが、彼の理性の投影ではあつても、彼の情熱の發現だつたかどうかには、かなりの疑ひもあつたのだから、彼がその所謂新道德に殉じて、「女に刺されたのが、反つて彼としては本當だつたかも知れない」と純一は考へた。

「それにしても、隅田順はどうしてゐるだらう？」

大菅の事を思つてゐると、純一は忽ち隅田のあの陰鬱な顔を思ひ出した。彼は大菅の死をどう感じてゐるだらう？大菅の死によつて、彼の事は再び人の話題に上るであらう、然し、彼はやつぱり默つてゐるに違ひない。人が何と言はうと、彼は痛痒を感じない筈だ、彼には彼一人の世界があるのだ、そこで彼は絶對の、唯一者であるから……さう思ふと、純一は、自分もいつか隅田とおなじやうな思想の徑路に立つてゐるのを見た。さうだ、隅田は彼一人の世界を持つてゐる、然し自分は、一人でなく、二人の、自分達二人だけの世界をつくり上げて、この二人だけの世界に、自分は殉ずるのだと、彼は強く思つた。

二十一

「それぢやお城の方へ先きへ行つて、それから袖師の浦の方へまゐりますので……」と車夫は車臺に上る純一に訊いた。

「さうして貰ひませう」と純一は言つて、敏子を振返つた。

敏子は式臺に出て來て、行つていらつしやいませといふ女中や番頭に見送られて、純一の傍に立つて、

「それぢや俥屋さん、よろしくおたのみしますよ」と言つて、自分も俥に乘つた。

「お靜かに行つていらつしやいませ」とわざわざ立つて來て、俥の傍にゐた番頭が頭を上げた。

「今日はいいお天氣だで、お城はいい眺めだらうナ、俥屋さんもいい工合だ」

「大きにさうでござりますでや」と年とつた方の俥屋が、俥を引出しながら、馬鹿に大きい聲で言つた。

二臺の俥の走つて行く道筋は、昨夜の夜の町とはすつかり感じが變つて、何處となく爽かな、いきいきしたところは見えたが、それでもあまりに靜かできちんとしてゐるので、まるで舞臺の上でも行くやうな氣がした。間もなく、

公園の入口に來て、その少し入つたところで、二人は俥を下りて歩きはじめると、俥屋の若い方は茶店に入つたが、年とつた方は、手拭を片手に握つて、案内顔について來た。石段にさしかかつた時、そこを歩いて行く若い男女が眼に付いた。その樣子は、何處か近在の豪農の跡取り位が、花嫁を貰つたばかりで、かうして見物に來てゐるやうな風である。この二人連れと後になり先きになりして、一番上の廣場に來ると、その正面に、昨夜見た千鳥城が、今朝は鮮かに日光の中に浮んでゐた。まはりを一列の樹木にめぐらされた上に、五層の天守閣がぬきんでて、その下の土臺を疊んだ石垣の間に、城の入口が見えた。車夫が入口のところの札賣所へ行つて、二人の切符を買つて、敏子に渡して、自分はそこにしやがんだ。

純一はそこに澤山並んでゐる草履をはいて、敏子を振返ると、フェルトの草履を穿いてゐる彼女は、その儘先きに立つた。

稍々仄暗い階段を上つて行くと、城の内部は到るところに、太い木組が斜めに突張つてゐて、そこにもここにも階段があつて、それをめぐつて上つてゐるうちに、いつの間にか二階、三階と來てゐるのだつた。階上の中央の廣いところには、いろいろな由緒ある甲冑や、武器や、その外の器具が置かれてあつて、その中には、瀧川一益が背負つて來たといふ、ぼろぼろになつた大きな笈や、松江藩の藩士達の記念物や、大形の奉納船などもあつた。

「笈なんてものは初めて見た、こんなものだつたんですね」と純一が振返つて言ふと、

「さうですねえ、わたしが小さい時分來た時と同じ風に埃をかぶつてゐますわ、こんな大きなものがよく背中に背負へるものですね、昔の人は隨分力が强かつたのですね」と敏子が言つた。

かうした二人の會話のあとで、後から續いて來る若い二人連れも、何かひそひそと話してゐる。

又もや階段を上つて行くと、開け放した窓の太い格子の間から、秋の明るい外光が美しく眺められた。そのさし込

んで來るあかりで、様々に浮んで見える縱横の木組は、その荒削りの中に、何となく雅致があつた。たうとう最上層に上りつくと、かなりの廣い板敷で、そこはこれ迄の下の方の階とは違つて、周圍は殆んどすつかり戸をあけてあるので、その城獨特の粗大な勾欄のところから、四方の景色を眺望することが出來た。

敏子の歩いて行くところへ純一は行つた。見下すと、城を圍む常盤樹や落葉樹が、こんもりとその梢の茂みをひろげてゐて、その上に輪をゑがいてゐる鳶の茶色の背中が、二人の眼の下にあつた。鳶はその翼を十分にひろげて、颯と下へ落して行くかと思ふと、また浮み上つて來て、その游泳には、おのづからなる抑揚のリズムがあつた。

「あそこを昨日船で來たんですよ」と敏子のさし示すところには、中海をかぎる山々の翠巒が横はつて、その下から右手の山の間にかけて、一帶の低地を縱斷する數條の水流があつて、左方の山の下の方は、殆んど小さな湖水のやうになつてゐる、その稍や右寄りに、大橋川が幅廣く朝の空氣の中に、その水色が明碧に見える。

「大橋は少ししか見えませんが、あそこですよ、ですから宿はあそこになります」と敏子が言つた。宿の皆美館のある町の屋根の上は、直ぐ宍道湖の水面になつてゐて、あだかも一葉の木の葉が浮いてゐるやうに、嫁が島が見える。湖の彼方は、幾層にも高まつた山地で、鬱蒼たる樹木が一色に融け合つて、その麓の湖岸には、點々として人家の白壁が見え、炊煙が靜かに立ちのぼつてゐる。

「昨夜泊つた玉造溫泉はあの山の彼方だ」と、先刻の若い男が、その花嫁にささやいた。敏子と純一は、思はず顏を見合せて笑つた。

「中野さん達の泊つた玉造へこれから行きませうか？」と敏子がそれとなく言つた。

「あなたはまだ玉造へ行く元氣があるんですね」

「ないことはありませんわ」と敏子が微笑した。あの盆踊りの夜から續けて三日、感情の高調と、狂はしい抱擁とが、

彼女の容貌の上に、惱ましい疲勞の影を投げてゐることが、一層彼女を美しく見せた。

「あの山のむかうには、八重垣神社があるんですよ、あの歌、（八雲たつ出雲八重垣つま籠めに八重垣つくるその八重垣を）といふ歌で名高い、稻田姫を祀つた神社で、縁結びのやさしい神樣ださうです。何でもそこには鏡が池といふのがあつて、その池の水面に、白紙を浮べて、その上に一厘錢を載せて、その紙が早く沈んだ人には良縁が早く纒まるとか、自分の思つてゐる人と早く添はれるとか云ふやうな言ひ傳へがあるさうです。それからそこには、根元の少し上から二股になつた椿の古いのがあつて、それを夫婦椿と云ふんださうですよ」と言つて、敏子は笑つた。かの若夫婦は、敏子の話を耳をすまして聞いてゐる。

「そこへ行きませうか、大橋を渡つて、袖師の浦へ行く途中から、山の方へ入つて行くのです」

「今更ら緣結びもをかしなものですね、今はもう八重垣神社よりも、出雲大社の方へ詣つた方がよささうですね」

「さうでしたね」と敏子は笑つた、「出雲大社がありましたね、わたしとしたことが、すつかり忘れてましたわ、普通みんな御婚禮をすますと、眞先きにお詣りをするのに……」と言つて、彼女はその切長の眼を、かの若い男に注いだ。その男は少し赧くなつて、自分の花嫁の袖を一寸引張つて、先きに坡を下りはじめた。二人が下りてしまつた後で、敏子は言つた、

「御覽なさい、あの二人は出雲大社にお詣りして、そこで泊つて、翌る日玉造へ行つて、そこで泊つて、そして、今日ここへ來たんですよ、赧い顏をして下りて行きましたね」

「あなたがからかふものだから弱つたんでせう」

二人は下りはじめて、階段のところでは、手を取つてゆつくりと歩いた。

「ではね」と敏子が窓のあるあかりの下で立止まつて、「これから袖師の浦を見たら、それできりをつけて、宿を引上

げて、松江の驛から汽車に乘つて歸りませう」
「さあ、さうしませう、もう大分疲れてもゐるし、僕はかまはないが、あなたの身體がたまらないでせう」
「そんなことはありませんが……もうこれ位にして置きませう、そして美保の關で言つたやうに、あのことは、あたしにも少し考へさせて下さい、兎に角、米子に歸つて見ませう、そして、かうなつた以上は、この四五日中に、支度をして東京へ出ませう……」
「行きませう」と純一は言つた。
「兎に角、先きは先き、今は今として、東京へ飛出しませう、あなたも質屋さんの方の暇を取つて、別莊へ出かけて來て下さい、かまひませんから」
「さうしませう……暇を取つてね」
「わたしも暇を取つて……」と敏子が言つた。
城の札賣所まで二人が下りて行くと、札賣人と話してゐた車夫がそれを迎へて、先きに立つた。
公園の入口で、二人は俥に乘つた。それから一直線に町を横ぎつて、やがて大橋を渡り、白潟本町を眞直ぐに突切つて、右手に天滿宮の鳥居を眺めながら、鐵道線路を越え、天神橋を渡つて、いかにも町外れらしい街道へ入つて行つた。
「何處でお下りになりますか？」と車夫が敏子に訊いた。
「さあね……以前はわたしはこのあたりよく知つてゐたんだけれど、汽車がついて、線路が出來てから、大分樣子が變つてゐるわね、兎に角俥で行けるところまで行つて頂戴」
「さうだでや、汽車がついてから便利にはなりましたが、眺めは大分わるうなりましたでや」と松江訛で車夫は言つ

た。

　或る家の門構への中に入つて、そこの小路を湖岸の方へ近づいて行くと、路の傍は稻田で、黄に熟れた稻の穗が、重さうに垂れてゐる。そこの畷道の一寸低くなつて曲るところまで行つて、車夫は梶棒をおろした。

「直ぐ歸つて來ますから……」と敏子が言ふと、老車夫は、

「ナニ、わしもまゐりますだでや」と言つて、ついて來た。少し歩くと、左手に山があつて、その山が湖寄りの一端で横斷されて、その掘り切つた下の方を線路が走つてゐる。山の切口の一端に、標柱の立つてゐるのを、見るともなく見ると、「一寸待つて下さい、早まつたことをしてはなりません」と大きく書いて、その下に何か小さく書いてある。

「まあ、こんなものが立つてゐるわ」と敏子が言ふと、車夫がにやにやして、

「ここでは澤山死にますでや、ついこの間も若い娘がお恥かしいお腹になつて、添ふに添へぬ譯があつたとかで、飛び込んだださうでナ、ここでは年中、心中だとか、そんな往生がありましてナ……どうもあんな風に山を切つて線路がついとるから、上からとツとと飛込むには工合がえらしいでや、ここまでやつて來て、湖に死なんで、ここで死にますでや」と言つた。

「まつたくね、ここは難なく飛び込めさうですね、やはり死ぬのもしくじらないやうな死に方しないといけないと思ふからでせうね」と敏子が言つた。

「死ぬのにもなかなか用意が要りますよ、あまりまづい事はしたくないでせうから……どうでもいいやうなものではあるが……」と純一が言ふと、敏子が振返つて、

「さうですわね、けれどここからは大丈夫死ねさうですよ、わたしもここへ死にに來ませうかね、俥屋さん」

「緣起でもねえだでや……おしあはせの眞中に、そげなこと言はんもんだでや」

踏切を越えて、畷道を湖岸に出ると、そこには、自然石を集めて、高い臺石を築いて、その上に丈餘の地藏尊の御尊體が二つ、湖にむかつて、その慈眼を注いでゐる。これはこの附近一帶の溺死者の靈の供養のために建てられたもので、その傍に碑が立つて、建立の由來を刻記してある。その地藏尊の横の方を通つて、渚に下り立つと、そこは山裾の方に、わづかに土や木草が見えるばかりで、水に近い方は、一面に小石が露出してゐるので、二人はその山裾の方に立止まつた。車夫が少し離れたので、敏子は小聲で、

「ここを昔わたしはよく歩いたんですよ」と、しみじみと昔を思出すやうに言つた、「あの時分のわたしは、隨分煩悶したものですよ。友一郎からの結婚の申込は、のつぴきならないやうにはなるし、あれを思ひこれを思ひして、隨分苦しんだものです。あの時ここから湖へ入つてしまひたいと、どんなに思つたでせう、あの時のことを今更に考へ出すわ」

「さうでせう、あなたのあの時の手紙を僕も思ひ出しますよ……どう考へてみても、仕方のなかつた事でせう」

「それはさうかも知れませんけれど、わたしがもつと妙な野心がなかつたら、あんな風にはならなかつたんでせう、つまらない虚榮心で、自分の半生を滅茶々々にしました……然し、もうそれはそれでいいわ、新しい生活に入るんですから……」

純一は何か言ひたかつたけれど、むかうの山のはづれの方から、車夫が歸つて來たので、それきり默つた。彼はつい眼の前にある嫁が島が、全島蘆にかこまれてゐると思ひの外、近く來て見ると、その大部分の外緣を、石垣に疊まれて著しく風致を損じてゐるのを惜しい事に思つた。車夫の言葉によれば、それは某殿下の行啓の際、巨費を投じて、そんな風にしたのだといふ。

ここから殆んど對岸になつて見える松江の市街の方を見ると、その數千の甍の後に、今見物して來た千鳥城の天守

閣が、繪卷物のそれのやうに、都雅な姿をして、白くはつきりと浮んでゐる。それは戰爭のためよりも、美しい眺めのために造られた城のやうに見えた。

宿に歸つて、晝餐をすまして、二人が俥で、再び大橋を渡つて、松江の停車場に着いたのは、一時半頃であつた。敏子は時計を出して、停車場の時計と見くらべて、そのねぢをしめながら言つた、

「丁度いいわ」

車夫を歸してから、彼女は純一に言つた、

「汽車の中でね……もし誰かわたしの知つてゐる人があつたら、わたしはずつと離れますから、そのつもりでゐて下さいね。では先刻のことはあれでよろしいのね、もう何も話すことはなかつたでしたかね？」

「もう何もありません……僕はこの汽車でずつと淀江の方に歸ります、そしていろんな事を準備して、遲くとも明日の晩には、あなたの處へ行きませう、それでいいですか？」

「結構ですわ、お待ちしてゐますわ……かうなると、もうどんなに早くても構ひませんから」

純一は切符を買つて敏子に渡した。そしてプラットフォオムに出た。間もなく汽車が來て、二人はその二等車に乘り込んだ。車内には、三四人乘客があつた。みな遠方の旅客らしく、二人の見知りの顏はなかつたけれど、二人はわざと並ばないで差向ひに腰かけた。そして、汽車の窓から、外の景色を見てゐた。汽車は昨日二人が通つて來た大橋川の右の方を走つた。河面が低くて見えないので、丁度そこを通つてゐる發動機船が、あだかも田畑の上を滑つて行くやうに見えた。間もなく馬潟に着いて、それからは中海沿ひに東へと走つた。白い波の立つてゐる中海のむかうには、夜見ケ濱の平沙が、斜めに横はつてゐて、その直ぐ上には、それを壓するやうに、かの島根半島の山脈が、遙かにつらなつてゐるのが、模糊として見えた。

揖屋、荒島の二驛を過ぎて、汽車が安來の驛に着いた時、そこから乘り込んだ客の後から、その驛の助役らしいのが、官服の姿で歩いて來て、純一のゐる車窓の下に立止つて、左手を擧げて發車の合圖をして、ピイと笛を鳴らした。汽車が動きはじめた時、敏子が純一のところへ寄つて來て言つた、

「あれ誰か御存知？　あの笛を鳴らした助役ですよ」

「さあ……」と言つて、純一は汽車の動くにつれて、退つて行くその男の横顏を見た。それは色の黑い角ばつた顏で、その年恰好は、彼よりも二つ三つ上らしく見えた。

「あれはよくあなたを虐めた子供ですよ、濱であなたの辨當をころがしたあれですよ」

「小山ですか」と言つて、純一は少し身を伸ばして、再び、もう驛とともに既に遠ざかつてゐる彼の小さな姿を見た。

「成程ね、あれが小山ですか」

「出世して助役になつてゐますね、この以前はまだ驛夫でしたよ。今日はわたしが隱れてゐたから、氣が付かなかつたやうですけれど、ずつと以前は、わたしを見付けると、窓下に來て聲をかけましてね」

「以前あなたに附け文をしたりしたさうですね」

「そんなこともありましたが……わたしが西尾へ行つてからは、それは恐ろしく尊敬してゐるらしいんですよ」と言つて、敏子は笑つた。

汽車がだんだん米子に近づくと、敏子は純一の顏をぢつと見ながら話し出した、

「井川は屹度、友一郎にわたしが後藤の驛でゐたといふことを話したに違ひありませんわ。わたしがあんな事を言つたから、それだけは確かですわ。友一郎がやつて來て、何處へ行つてゐたと訊けば、何とでも言ひますわ、わたしのことは本當に心配なさらないで下さい。それよりも、多分あなたが大變でせう、あなたの方はどんなになつてゐるん

でせう？」

「どんなになつてゐたつて構ひません、どうせ出るんですから」と純一は言つた。

米子に汽車がとまつた時、敏子は乗客の一番あとに立上つて、

「それでは……」と言つて、一寸頭を下げて笑つた。

「うまくなさいよ」と純一が言つた。

「大丈夫ですわ……」

かくして彼女は汽車を下りた。

一人になつてから、純一は、車窓に頬杖を突いて、暫くの間、悲しい氣持で、何を見るともなくぢつとしてゐた。彼は全く疲れてゐた。敏子と一緒にゐた間は、始終彼女の微笑と言葉とに刺戟されて、次ぎへ次ぎへと重なりかかるやうな情熱のとめどないものに、押し流されてゐるやうなものであつたが、彼女の聲と姿との消えるとともに、潮の引いて行つた後の渚のやうな空虚の感が、あとに殘つた。けれども彼は、その間にも、自分を押流してゐる運命の流れを、ひたひたと感じてゐた、そしてその奔流は、なほ果て知れぬ氣がした。彼は東京へ行くのが望みではなかつた、どんな事があつても、再び東京の土地は踏まない考へであつた。けれども、美保の關での彼女の約束を、彼は心に繰返した。

「兎に角、東京へ行つて見よう、あんな彼女の心持や樣子を考へると、自分が苦しいからと云ふだけの事で、東京へ行くのを拒むのは、餘りに利己的でもあり、彼女に對する愛情のある遣り方でもなからう。どうせ破綻するのは知れ切つてゐる……だが、彼女に殉じてやればいいのだ、東京へ行つて彼女のしたい通りの生活をして、見たいところは見せてやり、したいと云ふ事はさせてやらう。彼女は長い間あんな生活に、その心持を緊縛されてゐたのだから、出

來るだけ自由にいきいきと生きさせてやらう……さうでなければ、彼女があまりに可哀相だ。ああは言つたものの、此儘彼女を自分の死の道連れにしてしまふのは、餘りに可哀相だ」

彼は美保の關で、彼女がもつと自分の考へを主張して、もつと利己的なものを支持するだらうと思つてゐたのに、案外素直に、こちらの言葉に共鳴もし、同意もしたので、もともとさういふ傾向の强い彼女であつたとは思ひながらも、あんな事のあつてからは、その何處迄も戀人として殉じてくれるのが嬉しくもあり、可哀相でもあつたので、彼は一緒に東京へ行つてやる事を、彼女に對する彼の感謝の表示したかつた。中野が言つたやうに、彼女が生きたいと言ふなら生きる、と云ふ事が、此際彼には自分を導くたつた一つの燈明のやうに思はれた。

彼は長いこと敏子の事を考へて、夜見村の別莊の夜から、美保の關、松江の夜毎の、あのうちとけたかねごとを思ふと、まるで身體中に彼女の溫かな愛らしい息吹がかかつてゐるやうな氣持がした。彼女が下りて行つてから、まだ僅かしかならないのに、彼は彼女なくしてはゐられないやうな氣がして、次ぎの伯耆大山の驛で下りて、直ぐにも彼女の別莊に行かうかとさへ思つたが、然し、今はさうした感情にのみ耽つてはゐられないと彼は思ひ返した。

「僕が東京へ歸ると言ひ出したら、叔父は、叔母はどうだらう？」

彼には老人達のいろんな樣子が、まざまざと目に見えるやうであつた。叔母に對しては、氣の毒な思ひもしないではなかつたが、然し、仕方がないと思つた。

汽車はいつの間にか淀江驛に着いて、彼は停車場に下り立つた。

二十二

叔父の店に入つて行くと、店には市郎がその息子の勳を膝に上げて、その子供に顏中撫でまはされたり、またその

子供を自分の頭の上高々と持上げたりして、他愛もなく遊んでゐた。

「よう……戻つて來たね……何處へしけこんどつたね？」と彼は大きな顏中に、一杯にやにやしたものを湛へてゐた、「君は遊ぶとくると無茶苦茶だナ。君が戻らんちうので、家の親父も、南の叔母貴も、探しまくつとるぞ。僕は屹度遊んどるから、今に戻つてくると言つて、君のために辯解してある」

「それはどうも有難う」と純一は輕く調子を合せた、「早く歸らうと思つたんだが、ついね……」

「ナニ、遊んどると戻る事なんか忘れるからナ、僕なんかのやうに、家内や子供があると、もう歸り時にはちやんと歸るが、君はまだ若いんだからね……金はよう持つとつたナ？　三日もをつたら餘つ程遣つただらう、灘町か和田見か？」

「なに、そんな處ぢやない、友達の家へ行つてゐたのだ」

「友達だなんて僕に隱す必要はない、僕は君の同情者ぢやないか。年が年中あげな陰氣臭い南の家にかしこまつとつちや堪つたもんぢやない、ちつたア發展しなくつちや、ねえ君」

「そんな譯ぢやないが……」と純一は市郎の例の通りの樣子に辟易しながら、暫く默つてゐたが、不圖、東京へ行くことを切り出すのは、直接叔父に言ひ出すより、まづ市郎に言つて見て、出來るだけその口を通す方が、餘計な不快を釀し出さぬやうな氣がした。

「時に、君に少し頼みがあるんだがね」と純一は切り出した。

「金か？」と市郎は大きな聲を出した。

「なに、金ぢやないんだ、君から一つ君の親父さんに、かういふ事を言つて貰ひたい」

「フン……」

「僕は南の家で、もつとゐるつもりではあつたんだが、どうも勤まらんから、東京へ歸つて行くつもりだ。いろいろ面倒は見てくれたんだし、言ひにくいんだけれど、僕はどうしても東京へ歸るから、君からさう言つてくれないか」
「フン、急に歸る氣になつたもんだね……そりや僕が言はう、だが、親父はおこるぞ、それはいいか？」
「いいんだ、仕方がないからね」
「僕も君は今に逃げ出すだらうとは思つとつた、早晩ね……だが、こげに早やからうとは思はなかつた、まあ親父には僕が言つて見よう……もつとも、昨夜なんか純一はもう逃げ出して、東京に行つてしまつたぢやないかと言つとつたよ……一寸待つてゐたまへ、親父は今二階で晝寢しとるから、起して話して來よう」
市郎は子供をそこにはふり出した儘、どしどしと二階に上つて行つた。子供の勳は暫くの間、その白い眼で額越しに純一を見てゐたが、純一が何にも愛憎しないので、寂しさうな顏をして、二階の階段の上り口に行つて、片言で父を呼んでゐる。
さすがに純一は、やがて下りて來る叔父との談判に、心持を張り詰めずにはゐられなかつた。然し、これさへすんでしまへば、後はどうでもいいのだ、叔父が何と言はうと、平氣で聞き流してゐたらそれですむと、彼は思つた。
間もなく、市郎が二階から下りて來て、上り口にゐる勳を抱き上げて、ひよいと背中にまはして背負ひながら、
「君、二階に上り給へ、えらいおこつたやうだけれど、どうせ仕方がないや。君の言ひたいだけの事は言つた方がいい、話がすんだら僕の二階へ來給へ」
「ああ、どうも有難う」から言つて、純一は直ぐ二階へ上つて行つた。
叔父は蒲團も敷かないで晝寢をしてゐたと見えて、そこには座蒲團が二三枚散らばつてゐた。折角寢てゐたところを起されて、思ひもかけぬ事を聞いたのと、その當人の純一が目の前にすわつたのとで、彼は眼に見えて怫然として

ゐた。暫くの間、彼は何とも聲をかけないで、一服煙草を吸つた。その樣子では、叔父からは何とも切り出しさうもないので、純一は、
「今、市郎君に一寸お話して貰つた事についてですが……」と言ひ出した。
「フン」と叔父は言つて、暫くの間默つてゐて、じろッと純一の樣子を見てから、「おまへ今迄何處へ行つとつただナ？」と訊いた。
「僕ですか？」と純一は言つた。
「十五日の夜に出かけてから、十六日、十七日、今日を寄せて四日も戻つて來んだ、そげに長い間何處へ行つとつただナ？」
「友達のところへ行つてゐたんです」
「どげした友達だナ？」と叔父は問ひ返した、「どげなええ友達の家でも、四日も厄介になれるもんぢやねえ、どげした友達だ？」
その問ひ方がいかにも詰問的なので、ムッとした純一は、言ひ返した、
「どんな友達だらうと、いいぢやありませんか……僕はさう思ひますが」
「それはええ……」と叔父は言つた、「したが、どげして默つて行つただ？　行くなら行くと、なぜ叔母なりわしなりに、これこれだと言ふやうな風に言つて行かぬだナ？　あんまり勝手が過ぎるぞ」
「子供ぢやあるまいし、そんな事まで一々言ふ必要もなからうと思ひますが……それに十五日の晩は、叔母も盆踊りを見て來るがいいと言つて出してくれたんですから」
「それはその晩ぎりの事だ。四日もそれなり戻らんどるとは、法外な事だと思はんか？　わしの言ふのはそこだ。そ

げな無責任な事が、南の家に對して、おまへに出來るもんかどうか、ようく考へて見い。おまへはナ、南の家には重い義理がある身分だぞ」

「南の家、南の家と、叔父さんは言はれるが、僕には何の事だか分りません。そんな義理は僕にはないと思ひます」と純一は今はちつとも用捨しないで言つた。

「義理がない？」と叔父の聲は荒くなつた、「どげしてないだ？考へて見い、おまへの親父の淸太郎が、どげに南の家に迷惑をかけたか知れんぞ、何千圓といふ借金の受判をさせて、南の家の財産を大分無うしただ、それでも義理がないとは、どの口さげて言ふだ？」

かう言つて叔父は、もつと言ひたいのを我慢するやうであつた。然し、純一は父の事をそんな風に持出されたので、默つてはゐられなかつた。

「父の借金の事をそんなに言はれるが、父は父です、私は私です。父の義理まで私は背負ひたくはないんですが……」

「何だと……」と叔父は氣色ばむだ、「そげな勝手な話はないだ……純一、よう考へて言はんと、わしはおこるぞ、よう考へて言へ」

「おおこりになつても仕方はないと思ひます、どうせ言はなけりやならぬ事ですから」

かう言つて純一は、叔父をぢつと見た。その時彼の眼には、もう昔のやうに元氣のない、衰へた叔父の様子が、ありありと映つた。かうしてこちらが冷靜に言へば言ふ程、叔父の昂奮と疲勞とが思ひ遣られるので、彼は出來るだけ早くすませたいと思つた。

「僕はこんな事非常に言ひたくはないんですけれど……」

「そげならどげしてそげな事を言ふだ……まあ、家をあけた事は勘辨してやるから、早よ南の家へ歸つて、店の事を

するがええ。番頭の常七はもうをらんし、叔母一人でどげに困つてござるか知れやせん……まあよう考へて見い、汝(わ)れをこつちに戻したのは、次郎が死んだからだぞ、次郎さへ死なしなけりや、汝(わ)れを呼び戻したりなんかせんだつただぞ……」

「それぢや僕といふものは、一體何なのですか？ 親父の義理と、次郎さんの死んだためとで、あなた達の都合次第で、いいやうにされてゐなけりやならんのですかね？ あなた達にも都合はあるでせうが、こちらにも都合はありますよ」

「フン……」と叔父は言つて、ぢつと純一を見た。

「僕は先刻(さつき)も市郎君に言つて貰つたやうに、東京に行きます。いろいろ面倒は見て下すつたとは思ひますが、僕の都合でもう東京へ歸りたいんです。それに僕のやうな者のゐない方が、南の家のためにはいいでせう。いづれ叔父さんは、僕なんかと違つて、もつと南の家に適當な人をお探しになれるでせう」

「後は困りやせんだ」と叔父は默つてゐられなくなつて言つた、「横着者(わうちやくもの)めが！」

「僕は横着者です」と純一が言つた、「こんな僕ですから、叔父さんももう諦めて下さい、どうしても僕は東京へ歸るんですから」

その純一の言ひ方が餘りにテキパキしてゐたので、叔父は無念さうな顏をして、

「勝手にせい！」と怒鳴(どな)つた。

暫くの間、純一も浩藏も默つたきり、向ひ合つてゐた。純一は何だか肩の荷が下りたやうな氣がした。もつと叔父が立腹して、手でもかけるかと思つてゐたが、さうもしないところを見ると、叔父の老いた事が思はれた。

「おまへがそげに横着者だとは思はんだつた、たつた今まで思はんだつただ。どげしておまへ見たいな横着者が、此

の親戚に出來た事だ？　おまへに比べると、おまへの親父の淸太郎は、勿體ないほど正直者で、義理が堅かつただ」
「さうですか？　親父はさうでしたらう。けれど僕から言はせると、そんな親父だから駄目だつたのだと思ふんです。親父が失敗したのも、その所爲ぢやありませんか、現に叔父さんもその點をこれ迄非難してゐたぢやありませんか？それをお忘れにはならん筈ですが」と純一は言つて、もつと言ひたいのを我慢した。
「親父の事をそげに言つちや罰が當るぞ、そげな不孝者かおまへは？」
「多分、不幸者でせう……だが、叔父さん、もうこの話はよしませう、僕は兎に角東京へ行きます、默つて行つてもいいんだが、それぢや餘りに叔父さんに對して惡いと思つたから、かう言ひに來たんです」
「ああ言へばかう言ふ、かう言へばああ言ふ……」と叔父は突然感情が高ぶつて來たと見えて、煙管を持つて立上りさうにしたので、純一はどんなに叔父がしてもかまふまいと思つて、ぢつとしてゐた。
「腹が立つてかなはん……これが我が兒なら、土性骨をぶち折る程打つて遣りたいだ、汝れの言ひたい事ばつかりッケッケ言ひくさつて、此方の言ふ事はどげでもええと思つとる……」
「さうです、僕は此頃こんな風にやつて行かうと思つてゐます、すつかり遣り方を變へたのです」
「ええ變へ方だ」と叔父は嘲るやうに言つた、「だがナ、まあよう考へて見い、汝れは此間新聞に、商賣繁昌に質屋を勵むちうて、人樣の前で廣言しとつただないか。そげな事しときながら、その口も乾かぬうちに、もうはや飽きが來て、東京へ行くとは何ちう事だ！……もう今日限り汝れとは叔父甥の緣を切るからさう思へ……まるでゴロツキ同樣の根性だ、そげな風な考へでやつて行つて見れ、碌な事はありやせん、どうせ東京で碌でない暮しをして、末は野たれ死するにきまつとる……阿呆め！」
「それはさうでせう、多分そんな事になるでせう。然し、僕はそれでいいんです」

から言つて純一は、叔父にお辭儀をして、二階を下りた。すると叔父が立上つて來て、階段の上から、
「南の家へ行つとれ、わしが後から行くだでナ……」と少し折れたやうに聲をかけた。
純一はその上叔父の言ふ事を聞きたくないと思つたから、その儘叔父の家を出た。
南の家へ行くみちみち、彼は叔父の來ないうちに、叔母に別れてしまひたいと思つた。叔父があんなにおこつたもの、屹度思ひ返してやつて來て、叔母と一緒に賺したりたらしたりして、泣き落しにかける事は目に見えてゐた。それで叔母には、東京へ行くとも何とも言はないで、それとなくすまして、早く行つてしまひたいと彼は思つた。考へて見ると、彼は叔母が氣の毒でならなかつた。けれども、もともと南の家には、いつ迄もゐる氣は無かつたのだし、これだけでも手傳つた事を、せめてもの事に思つて貰ひたかつた。
愈々大橋を渡つて、南の家の前まで來ると、三日もあけてゐたその家へ入るのが躊躇されたが、思ひ切つて中に入つた。店には少女と盲目のお婆さんとがゐた。
少女は純一を見ると、眼を圓くして言つた、
「お歸りなさいました……おぐりんさんがお待ちかねで、昨日わしは米子へ迎へに行きましただ」
「米子へ？」
「へえ……おぐりさんが行つて來いとお言ひになりましたもんで……米子にもお出でなはらんもんで、えらい御心配でござりましただ」
「それは大變だつたね」
から言つた時、盲目のお婆さんが、見えない眼を突出すやうにして、
「純一だか、よう戻つて來たナ、もう戻らんかと思つとつただ……もう東京へ往んだとばつかり思つとつたに、よう

戻つてくれた、わしは嬉しいわえ」と、お婆さんはホクホク喜んでゐる。
からした話聲が聞えたと見えて、叔母が奧から出て來て、純一と顔見合せると、叔母のおとみは、ホッとしたやうな顔をして、
「オウ、戻つたかや……踊り見るのはええだが、四日も戻らんちふのは、どげした事だつたナ……もしや米子のおしまさんの處かと思つて、これを遣つて見ると、をらんといふし、何處へ行つただかと思つて、えらい心配しとると、和平が來て、そりや小波村に行かれたに違ひないと言ふだ……おまへ小波村に何かあるちうだねえか？」
「そんな事はないんです」と純一は言つて、和平がそんな事を言つた場合を想像すると、微笑せずにはゐられなかつた、それで少し笑ひながら、「小波村には別に知合ひがないんです」
「そげでもなからう、根もない事を和平も言ふ筈もねえだ。したが、先様は何處かの奧様だと言ふだねえか、そげな人とあんまり懇ろにするちふのは、わるい量見だぞ、どげな風になつとるだか、この叔母に話してくれてもええだねかえ？」
「和平が勘ちがへをしてゐるんです」と純一はあつさりと逃げてから、調子を改めて、「實は叔母さん、僕は暫くの間、米子の方へ行つてゐたいんですが、さうさせて下さいませんか。今はもう叔父さんの家へ行つて、その話をして來たんですから、いづれ後から叔父さんが來て、詳しい話をしてくれるでせうが……」
「ホウ……もう叔父さんに話して來ただかえ」と叔母は言つて、純一の見る眼の前で、厭やな顔をした。そして、暫く考へるやうな樣子であつたが、やがて、
「そりやもうおまへのしたい通りにするがええ、わしも血をわけた子供のやうにおまへを思ふ譯には行かんだでナ……いづれ叔父さんからお話を聞かう」と叔母は言つたが、その聲は妙にかすれて冷たかつた。

「何處へ行くだ、純一？」と盲目の婆さんが大きな聲で言つた。

「あのね、おばあさん」と叔母が盲目の婆さんの耳のところに口を持つて行つて言つた、「純一は暫く米子へ行きたいと言つとりますだ、そげだもんで、わしもそげにするがええと言つとりますだ……また直きに戻つて來てくれるだらうと思ひますだでナ」

「そげかナ……まあちよつこりなら行つても仕方がねわえ、だが、早よ戻つて來いよ」

「本當に早よ戻つて來ておくれよ……わしはもうおまへは東京へ行つたもんだと思つとつただが、まあそげな事でなうてよかつた……さう言へば、昨日妙な人がおまへを訪ねてござつたぞ」

「どんな男が來ました？」と純一は問ひ返した。彼は咄嗟に「來たナ」と思つた。

「えらい大きな男衆で、顔の割りに眼の小さい、口の大きな人だつた」と叔母が言つた。

「どんな事を言つてゐましたか？」

「さうだナ、何でも米子の新聞社の者で、おまへの友達だと言つとつた。そして、わしが一昨日から留守だと言ふと、何處へ行つただと、しつこく訊いとつただ。それから女の人が訪ねて來なかつたかなんちふ事も訊いとつたから、わしはそげな方は見えられないと言つといたが、その女の衆といふのは、和平が言つたその奥樣なのかえ？」

「さうではないでせう」と純一は逃げた、「あまり僕の懇意な男ぢやないんです、このあたりを通りかかつたから、寄つて見たんでせう」

「そげなやうではなかつただ、何かこみ入つた用があつた風に見えただ」と言つて、それ以上叔母は何にも言はなかつた。

純一は話が一きりついてから、奥座敷の押入のところに行つて、手まはりのものをバスケツトに詰め込んだ。その

中には、彼が東京を發つ日に買つたアミエルの『日記』もあつた。
「たうとう此本もこちらで讀めないでしまつた……」と彼は呟いてバスケットの蓋をして、それを提げて、叔父の來ないうちにここを出たいと思つて、店へ出ると、叔母は驚いたやうに彼を見て言つた、
「おまへもう行くだか、そげなものを提げたりして……」
「ええ、この中に本が入つてゐるんです、叔父さんが來る迄ゐようと思ひましたが、僕が米子へ行き度いと言ふと、橫着者だとか阿呆だとか言つて、ひどくおこつてましたから、またここで衝突したら、叔母さんにすみませんから、どうぞよろしく叔父さんに言つておいて下さい」
「それぢや仕方がない、行つて來るがええ」と叔母は諦めたやうに言つた、「そして、來られるやうになつたら、また來ておくれ」
純一はそれには答へないで、
「お身體を御大切になさい」と言つて、盲目のお婆さんにも、小女にも、別に何とも言はないで、外に出た。

二十三

純一は米子の停車場に降りて、バスケットを驛の一時預けにしておいてから、眞直ぐに姉の家に向つた。みちみち彼は、こんな風にして、姉の家に行つて、姉に會つたり母親に會つたりするのが、非常に面倒な氣がした。殊に叔母の家から、昨日小女に自分を訪ねて行かせたといふから、屹度例の母親のヒステリイを搔き立ててゐるに違ひないと思つた。そんな處へ今自分が顏を出せば、またあの苦情が際限なく繰返されるに違ひない。けれども、今日にでも東京に發つかも知れないとすれば、姉の家に預けてある行李の始末もしておかなければならないし、また、その外にも、

姉にいくらかの金を融通して貰ふ必要もあつた。南の家から相當の金を貰へば貰へる筈であつたが、出方が出方だつたので、そんな事も言へなかつたし、彼がこれ迄用意してゐた金も、敏子との三日の旅に、彼女ばかりに出させたくなかつたので、その殆んど全部を費つてしまつたので、今は自分一人の東京行の旅費位しか殘つてゐなかつた。勿論、彼女にも相當の準備のある事は知つてはゐたが、それにしても、此際金は出來るだけ欲しかつたので、姉の優しさに極力もたれ込んで、頼んで見ようと思つたのだ。

姉の家では、姉と母のおしまとは、裁物板を眞中にして、その內職の仕立物をしてゐた。母のおしまはもう大分眼が薄いのだが、例の氣性で、一生懸命に縫つてゐるのだ。純一が座敷に上つて行くと、姉も母も、同時に見上げた。
「何處へ行つとつただナ？　昨日、淀江のおとみさんから、おまへは來とらんかと言つて、訊きに來てだつたぞ……ここにはをらんだで、えらい工合がわるかつただ……」
「何處へ行つとつたの、純一？」と梅子が針の手をやめて言つた。
「僕は友達に引つ張られて、松江の方に行つてたんです」と純一は言つた。
「友達つて中野かえ？」
「ああ」と、純一は、姉が中野の朝鮮行を知らないのを幸ひに、そこをいい加減にすました。
「中野といふ人は變な人だね、あんな事を起しておきながら、またおまへと松江に遊びに行つたりして……」
姉の梅子には、中野信太郎の信用は、殆んどなかつた。
「誰とだ？」と母は今初めて耳に入つたやうに問ひ返した。
「中野といふわるい友達に誘はれて、松江へ行つとりましたッて」と梅子が言つた。
「そげな贅澤な事をして……叔母さんはじめ、浩藏さんは、さぞおこつとりなさるだろに、ほんにすまん事をしたも

んだ……早よ淀江へ行くがええ、早よ往んで、叔母さんや浩藏さんに、ようあやまるがええぞ、そげな勝手な事をしたら、すまんだけに」と母親は縫物の糸をしごきながら言つた。

梅子は立上つて、お茶の支度をしながら、

「おまへだつて若いんだから、遊びたいのに無理はないけれどね、年寄達つてものは、隨分そんな事にやかましいんだから、厭やだらうけれど、直ぐ歸つてあやまるがいいよ。あんな頑な叔父さん相手に、喧嘩したつてつまらんから、蟲を殺してあやまつておくがいいよ」

「いや、もう淀江へは行つて來たんだ。そして、僕は叔父さんにも、お別れを言つて來たし、南へも暇乞ひをして來たんです」

「そりやまたどうした事なの？」と梅子が純一の前にお茶を持つて來て、吃驚したやうな顏をして訊いた。

純一は姉の襟のところに差してある針をぢつと見ながら、一寸笑ひを浮べて、

「姉さん、僕にはとても南の家は勤まらんのです。僕もせいぜい一生懸命になつてやつて見たんだけれど、どうも質屋の商賣なんてものが僕には向かないんです。それに南の家は陰氣だし、叔父は始終來てやかましいし、いくら僕でも辛抱が出來ないんです。ですから、折角歸つて來たんだけれど、僕はまた東京へ行かうと思ふんです」

「東京へ？……またどうしてさう急に思ひ付いたの？　此間東京から歸つて來たばかりぢやないか、そして東京ではおまへ失敗したんだらう？　それだのに出て行つておまへ何をするつもりなの？」

「失敗と言つたところで、文筆の生活は、外の商賣と違つて、ただ澤山金が取れないとか、思ひ通りえらくなれないとか云ふだけで、遣つて行くだけは遣つて行けるんです。それに今度は僕も決心をしましたから、今度こそは堅實に、家内でも貰つて、しつかり遣らうと思ふんです。そしたら今度はお母さんにも仕送り位ゐ出來るだらうと思ふ……」

「おまへの言ふ事は當てにならんでね」と言つて、梅子は母親をかへりみた。母のおしまは、もう顏中に不滿の色を漲らしてゐた。

「それはいけんだ」とおしまは冷たい重い聲で言ひ出した、「そげな勝手な事が出來るもんだねえ、こげな風に浩藏さんにはお世話になつとるし、南の家には、お父さんからの義理もあるし、どげに辛いと言つたところで、我慢せななら ん。それにいつぞやも浩藏さんがわしに話してござつた事だが、浩藏さんの腹の中では、おまへの身の上は定つとるだ。當分のうち純一に南の家の仕事に馴れさせて、行く行くはあの浩藏さんの姉娘の千枝子をおまへの嫁に添はせて、わしを引取つて氣樂にさせてくれるといふ話になつとるだ。おまへは何とも思つとらんだが、おまへはわしの跡取りだでナ、南の家に養子に入つても、そげな風にうまい事してくれると云ふ話になつとるだ。いつまでもわしもこげしてお梅のところに厄介になつとるのは、お梅はまあえゝとしても、山岡さんにすまんだで……」

「けれどお母さん……」と純一が言つた、彼は母親に對しては、何を言つても甲斐がないといふ氣はしたが、言はずにはゐられなかつた、「そんな風に行けば、叔父さんやお母さんはいい工合でせうが、僕がたまりませんよ。千枝子に添はせるなんて、あんな小娘を僕に添はせるなんて、滑稽ですよ。ねえ姉さん、さうぢやありませんか？」

「それはまあさうだが…… 千枝子のことはどうでもなるよ……南の家だつて厭やなら出たつていいんだが、折角東京から歸つて來たんだから、もつとゐてくれないかね。わたしも折角おまへが歸つて來たので喜んでたのに、それぢやつまらないからね…… 考へ直しておくれ」

「けれどもう淀江の方はすつかり始末をつけて、荷物を持つて來たんですから」

「そげな事言つて、浩藏さんやおとみさんが、そげなら行くがえゝと言はさつただか？」と言つて、母のおしまはぢつと眞正面から純一を、いらいらした眼付で見た。

「叔父はひどくおこつて、僕を横着者とか、叔父甥の縁を切るとか言つて、カンカンおこつてゐましたから、僕は言ふだけ言つといて來たんです。叔母にはそれと言つて言はなかつたけれど、叔父がもう今頃は話してるんでせう」
「何ちふ無茶苦茶な事だ……と母は呆れ返つたやうに言つた、そして梅子を見て、「浩藏さんが今頃は遣つてござるかも知れんで……こつちから一足先きに純一を連れてあやまりに行かんだと、義理が立たん……わしがこれから純一を連れて淀江へ行くだ」
「だつてお母さん、純一が行かんと言や、仕樣がないぢやありませんか」と梅子が母と弟とを見ながら、落着いて言うた。
「純一、こんなにお母さんが心配しとるのが可哀相ぢやないか、長いさきざきの事は兎に角として、もう少し辛抱したつていいぢやないか、もう一月辛抱して見たらどうだね……」
純一はそれには答へないで言つた。
「僕は明日の晩の汽車で發ちたいんだが……」
「おとみさんにもすまないこツた」と母のおしまが喞ちはじめた、「どげした子供だらう、こげな子供が出來て……ちつともわしの言ふ事も聞かんし、わしの事なんか思つとらん。お父さんが死になさつてから、わしもえらい苦勞をするこツた。もうちよつこりしたら樂になるかと思つとると、樂にはならんで、一年一年苦しうなるばつかりで……」
と言つて、おしまは袖で眼を抑へた。
純一は默つて立上つて、二階に上つた。そして、そこの押入の中にある自分の行李を引出して、麻繩を解いて、その中からいろいろなものを取出して、一應整理をしてから、再び麻繩でしつかり荷づくりをしてゐると、梅子が下から一通の手紙を持つて上つて來た。

「こんな手紙がおまへに來てゐたのを忘れてゐた……一週間ほど前に來てをつたやうだが……」と梅子は純一の荷ごしらへをぢつと見ながら言つた。そして、純一がその手紙を受取ると、

「おまへ、ほんとに東京に行くつもり？」と言つた。

「ああ、どうもさうするより外仕方がないんだ、僕も東京へは二度と行かないつもりで歸つて來たんだけれど、急に事情が出來て、明日にも發たねばならぬ事になつた」と言つて、純一は事情を打明けようか打明けまいかと思つて、ぢつと姉の顏を見た。

「どんな事情？　その事情次第で姉さんが贊成するよ、何も遠慮する事はないから話したらいいだらう。下ぢやお母さんが泣いてるよ、そして、山岡が歸つて來たら、どうでも意見をして貰つて、明日の朝おまへを連れて、淀江へあやまりに行くんだと言つてるよ」

「何から何までお母さんはくどいので厭やになつてしまふ、僕の事は僕にまかせてくれたらよかりさうなものだ」

「さうは行かんだらう、生みの親だもの」と梅子が言つた。

「僕はお母さんをちつとも生みの親らしく有難く思はせられた事がない」

「まあ、そんなに言ふもんぢやない」と梅子がたしなめるやうに言つた、「あれでお母さんは氣の毒な人なんだから」

「僕の方だつて氣の毒ですよ……外に仕方がないんだから、山岡さんが意見してくれたつて、やめるわけには行かないのだから」

「そんなに行かなければならぬ事情があるだらうか？　どんな事が起つたの？」

「どんな事か姉さん當てて御覽なさい」

「まるで譯が分らないのだから、當りさうもないけれど……おまへ東京でかかり合ひのある女の人があつて、出て來

いと云つて來たの？」

「まあ、それに近い」と純一は微笑した、「さうだつたら、姉さんは賛成してくれますか？」

「それはもう東京で家を持つんなら、堅い話に違ひなからうから、それ迄不賛成するわけぢやないわ。どうせ國では樂に暮せるといふだけで、面白い事はないんだから、苦しくても東京の方が、おまへにはよからう。けれど、それもその女の人次第だね、どんな人なの？」

「それはもう姉さんが大變氣に入る人だ、年も僕より上だし、なかなかしつかりもしてゐるし、美しくもあるんだ」

「寫眞がそこにあるんだらう？　見たいわね」

「いや、ここにはない、停車場に預けたバスケットの中にある」

「何だつて、停車場にバスケットを預けたりするんだね、をかしな人だね」と梅子はあつさりと笑つて「夕飯が出來たら呼ぶから、それまでゆつくりしておいで」と言ひ捨てて、下におりた。その後姿を見送つて、純一は、これなら屹度金を融通してくれると思つた。

彼は押入から蒲團を引張り出して、それを敷いて横になつた。そして、非常に困憊した身體を休めながら、今姉が持つて來た澤山の附箋のついてゐる手紙を何氣なく見ると、それは滿洲の朝川英夫からよこした手紙であつた。

その文面によると、彼は今度生活を變へて、一寸變つた方面に入る事になつた、そして此處で知合ひになつた或婦人と共同で、旅館兼料理屋を開業するといふのだ。そして彼はその婦人との關係やら、抱への女達の事やらを、小說家風の筆で面白く書いてから、その終りに、

「僕がこんな風に生活が變つたのを君は驚くだらう。然し、今度こそ僕は本氣なのだ、これから本當の生活が始まらうとしてゐる、從つて非常に愉快だ。ただ一つ殘念な事は、僕の持病は、此の土地の極寒には堪へられないらしいの

で、多だけは內地へ一寸行かなければならんかと思つてゐる。そちらへ歸つて行つたら、君に會ふ機會もまたあらうかと思ふ。今になつて考へてゐると、東京で社會主義の末輩になつて、ワイワイ騷いでゐたのは、實に赤面だ、幼稚だつたからね。僕は今綺麗に主義は卒業してしまつた。かうして本當に生きた人生に觸れて見ると、社會主義の理論なんか、とんでもない間違ひだと分つて來たのだ。僕はたしかに誤つてゐた、今迄、人間に對する知識もない癖に、世界を改革しようなんて考へてゐたのは、實に恥かしい。これからはもう考へをすつかり變へて、本當に遣つて見たいと思ふ。君も多分僕と同じやうに變りつつあるだらう、君の近情が知りたい」と書いてゐた。

それを讀んでしまふと、純一はおのづと微笑が口角に浮んだ。彼はあの單純だつた朝川が、一人前の男になりつつある事を思つて、何とも知れずいい氣持がした。そして、あの朝川の人好きのする丸顏を眼の前に思ひ浮べながら、うとうとと深い眠りに陷つた。かうしてどれ程眠つたか彼には分らなかつたが、何とも知れない胸苦しさを感じて、思はず魘されたやうな氣がして、ハッと眼を醒ますと、身體中に冷たい汗が出てゐた。彼はそこに起上つて、もう餘程前についたらしい電燈の灯をぢつと見ながら、彼女の事を考へずにはゐられなかつた。

「あれからどうしたらう？　何か面倒な事が起つたのぢやなからうか？　今夜これから兎に角あの附近まで行つて樣子を見て來よう」と彼は言つた。そして、蒲團を疊まうとしてゐるところへ、母親が上つて來て、

「山岡さんが話があるちふ事だけに、ちよつこり下へおりて來い」と聲をかけた。

姉が先刻言つたのはそれだナと思ひながら、純一が下へ下りると、夜遲くまで勤める山岡が、やうやう今歸つて來て、夕飯を食べ終へたところであつた。

「さあどうぞこちらへ」と山岡は純一を見ると、親切さうに言つた、「梅子、純一さんの夕飯は？」

「純一、ここで夕飯をおあがり、あんまりよく寢てゐたから、起さないでゐたのよ」と、梅子が言つた。

純一は寢起きではあつたし、妙に食慾がなかつた。けれど姉のすすめで、一寸かたばかり食べ終へてから、お茶を飮んだり、煙草をふかしたりした。その時、母親は待ち切れないと云つたやうな風に言ひ出した、

「今度はどうもえらい心配な事になりましてナ……どげしたらええかと思ひまして、困つとりますだ、この純一が東京へ行くと言ひ出しましたもんで……」

「一つあなた、いい意見をしなくちやいけませんよ、何でもあなたの力で引止めなければ……」と梅子がとりなすやうに言つた。

「いやどうも」と山岡は言つた、「私のやうな者が意見なんて云ふやうな事は、烏滸がましくて言へやしません。今もお母さんの話で、御承知はしたものの、何から何までよく御存知のあなたに言ふ事は別になささうでしてね……それにあなたが東京に行つて、うまく遣つて行けるやうでしたら、もう一息の事ですから、お出でになつてもいいだらうと思ふんです。これ迄お母さんのお世話をしたんですから、もう少し位のお世話は何でもありません」

「どうぞ僕がしつかりしないで、あなたに母の面倒を見て頂いて、實にすまないと僕は思つてゐるんです……今度東京へ行つて、どうかしてよくなつて、母を樂にしたいと僕も思ひますから、どうぞ御了解願ひます」

「では東京でどんな風に遣つて行かれますか？　兎に角、心配はないんでせうね？　お母さんが苦しいのも、そこだらうと私も思ふのですが……これが普通なら、あなたもそろそろ妻帶なさつていい年輩ですから、まあお母さんからして見れば、早う安心したいと思はれるのも無理はない氣がします。それに出來る事なら、東京よりも此方で家を持つて、朝晩お母さんもあなたと一緒にゐられるとお仕合せですからね。ここのところをよく考へてあげて下さるといいと思ひますが……」

「考へて見ませう」と純一は素直に言つた、「實は、明日にでも發たなければならないんですけれど……」

「ねえあなた」と梅子が突然に言ひ出した、「純一がわたしに話したわけぢやないけれど、純一には東京に氣に入つた女の人があるらしいんですよ。こんなに急に東京に行きたがるのも、その女の人との打合せだらうと、まあわたしは察しるのです。さうだとすると、その女の人次第ですから、何でもかでも純一を國へ縛りつけなければならぬと云ふと、あまり純一が可哀相ですよ」と梅子がぐつと純一の味方になつたやうに言ひ出した。

「そんな事があるんですか？」と山岡が微笑して言つた。

「まあ、それに近い事はあるんです」と純一も言つた。

「お母さん、さうなんですよ、それでもお母さんは純一を東京へ遣りませんか？」

「わしはそげな他國の土地の女を純一の嫁には氣がすすみませんだ。やつぱり浩藏さんの娘の千枝子を貰つて、南の家を繼いでくれりやええのに、えらい皆に心配をかけます事だ……これはどげしても東京行をやめて、南に歸つて貰はな、わしの義理が立ちません……」

「お母さん、兎に角僕に考へさせて下さい」と純一が少しいらいらして來て言つた。

「さうだ、それがいいわ。純一だつて、さうさうお母さんや叔父さんの御都合次第にされては、苦しうて仕樣がないわ、可哀相だもの」と梅子も言ひ足したので、暗い顏をして、母親はそれきり暫く默つてゐたが、また思ひ出したやうに、

「えらい心配をかける事だ……」といかにも胸に餘るやうに呟いた。

二十四

純一は東京に出發する前に、相良元雄に、それとなく別れを告げて行きたいと思つた。彼は前の晩、その場の工合

で、どうも外へ出るといふ譯に行かなかつたので、翌朝直ぐにも氣がかりな彼女の別莊に行つて見ようとは思つたが、元雄の事を考へると、二度と再び會へないといふ氣がしたので母のおしまが、これから連立つて、淀江へあやまりに行くと言ふのを、一寸散歩してくるから、その後で出かけようと、一寸逃れのやうな事を言つて、彼は姉の家を出て、少し早く訪ねすぎるやうな氣がしたけれど、九時頃に、元雄の家を訪ねた。

奧さんが出て來て、しとやかに迎へて、

「さあおあがり下さい、元雄は今緣側で日光浴をいたしてをります」と言つた。

その部屋に入つて行くと、障子をすつかり取拂つた緣側には、午前の暖かな新しい光線が一杯にさし込んでゐて、そこら一帶に、白布を裏に縫ひつけた蒲團が、みんなひろげ立てて、日光に當ててある。その眞中どころに、綿の澤山入つたメリンスの座蒲團を敷いて、その上に、元雄は白のフランネルの上に羽織を着て、ぢつとすわつて、いかにも快ささうに見えてゐた。

純一を見ると、彼はにつこりとして、

「氣持のいい日ですね」と言つた。

「本當に今日はいい秋日和です、ただ少し暑くなりさうですけれど……」と言つて、純一がそこにすわると、奧さんが急いで座蒲團を持つて來て、襖際に敷いて、そこにすわるようにすすめた。

「僕のやうなものには、お天氣のいいのが何よりの惠みでしてね……」と元雄は、自分の位置を直しながら言つた。見るとその頸には、輕いやはらかな白いハンケチを卷いてゐた。

「此頃は大分工合がいいらしいですね」と純一が言つた。

「さうです、此分では、或ひは少しづつよくなるのかも知れません」と元雄は言つた。

その話のうちに、奥さんがお茶を持つて來て、純一にすすめてから、元雄には一寸買物に出るからと言つて、あちらに行つた。

「いつかはどうも有難う、あの畫集は實に有難いと思ひました」と言つてから、元雄は暫くセガンティニや、雪の中の孤獨な生活について話したが、雪といふ事から、話はいつか朝鮮の新義州に行つた中野信太郎の事に移つた。

「君はどう思はれるか知らないが、僕は中野君の今度の戀愛問題には、大分不服があるんですよ」と元雄は純一の顏をぢつと見ながら話し出した。「僕はああいふやうな有夫の婦人との戀愛關係といふものは、どうも是認が出來ませんね。何も普通の道德問題から言ふのではありませんが、もつと高い道德から見て、つまり、人間の靈魂の清淨を汚すといふ上から、それだけでも罪でないでせうか？　自分の欲望を滿たす爲めばかりに、おなじ一人の人間であるその良人の心を傷つけるといふ事は、考へなければならぬ事だと思ひます。殊に中野君の場合は、相手の女の人も有夫の婦人であるし、中野君にも妻子があるのですから、なほ更の事です。そのためにどれ程の人が、苦しまなければならぬかを考へて御覽なさい。第一、そのために最も苦しむのは、當事者の中野君なり、その相手の婦人ではありませんか。だから中野君が若し本當にその婦人を愛するのなら、そんなにわざわざ苦しい境遇に陷るやうにさせたりしないで、その人の生活をその儘にして置いて、その上で、少しでもその人が幸福になるように考へて遣るといふのが本當ではないかと思ひますよ」と元雄は、靜かな調子で諄々として言つた。純一にはそれが何だか、元雄が自分に對して言つてゐる言葉のやうに感ぜられた。

「それはさうでせう、君のやうに、宗教的な心持になつてゐる人には、全く、そんな戀愛などは同情出來ないに違ひないでせう」

「いや、或る意味では、同情も理解もしても、その行爲はちつとも善いとは思ひません。やつぱり人間の悲しいあや

まちだと思ひます」

「その悲しいあやまちが、人間全體の背負うてゐる運命だとすれば、われわれはその運命に服從する外はないでせう」

「そんな事を運命に歸するのはどうかと思ひますよ。僕はそれは運命に服從するのでなくて、運命を破壞するのだと思ひます。ですから中野君にも、僕の考へをいろいろ言つて見たんですけれど、中野君はこれが正しい道德に合ふ事だと言つて聞きませんでした。けれど、その中野君の新道德といふのは、何處迄も個人本位、自己本位で、自分の幸福といふ事ばかり考へてゐるのです。君はどういふお考へですか？」

「僕の考も大體中野君と同じ事です。僕は人間が自分の自我を沒して、他人のため、世のために犧牲になつて、自分の幸福を棄てて、他人の幸福のために骨折ろといふ事を、昔は大變立派な事に思ひ、さうなるようにと心懸けたものでしたが、今ではそんな事は下らない事だと思つて來ました。本當にその犧牲的行爲を徹底させれば、自分の生活を破壞し、自分の生命を絕つ外はなくなりはしませんか？　もつとも、此の問題は、その人の性格にもより、その場合にもよるから、一概にはどうとも定められはしないでせうが……」

「それはさうです。然し、君はあんまり物を片付けすぎる、極端であり過ぎる。他人のために盡すから、自分の生活が壞はれるといふ事は言へなからうと思ひます。僕から言へば、愛が足りず、犧牲が足りず、力が足りないところから、そんな風になるとすればなるので、その場合、當事者はもつと自分の愛の足りない事、犧牲の足りない事を反省してみる必要がありはしないでせうか？」

「然し、中野君はさうではないでせうが、僕は此の人生その物が無意味に思はれるんです。だから、わざわざそんな犧牲をしたり、努力をしたりする必要もないと思ふんです」

「なぜ無意味です？　そんな事はありません。そんな風に思はれるのは、あなたが自分の天職を捨てて、詩に遠ざか

り、文學に遠ざかつてゐるせゐぢやありませんか？　此頃では何も書いてゐられないんでせう？」
「何も書いてゐません、書かないばかりか、これ迄書いたくだらない詩や小說の原稿も、此間すつかり燒き捨ててしまひましたよ」
「燒いたのですつて……なぜそんな事をなすつたのです？　實に思ひ切つた事をしますね。僕はその話を聞いただけでも、君のそんな氣持が恐ろしいやうな氣がします……それぢや君の心は何を支へにして生きてゐるんです？……」
「僕の心の支へですか？　それはそんな詩とか文學とか云ふやうなものよりも、もつと端的な、强いものがあるんです」
「それでは中野君が言つてゐたあの事件が本當に……そのあなたの心の支へなのですか？」
「中野が話しましたか？」
「話して行きました。然し、僕はまさか龍田君に、そんな悲しいあやまちがあらうとは、どうして考へられたでせう。然し、中野君はそれが本當だと言つて、君とあの婦人との事を、多分近いうちに何かの問題になるだらうから、萬一さうなつた時、君に出來る事だつたら、二人のために考へてやつてくれと、くれぐれも賴んで行きました……自分があんな風になつても、人がそんな風になると心配になると見えます……多分、それだから一層心配になつたかも知れません」
「さうでしたか、中野君がそんなに心配してゐましたか？　なに、もう心配な事はないんです。多分、明日位ゐ彼女と僕とは、東京へ行く事になるでせう。それで今日は、君にお別れを告げに來たのです」
「さうですか……そして、その良人の人の方の問題は？……」
「成行次第です、それはどんなになつたつていいんです。若し先方が法律の制裁に訴へると言へば、それも構はない

つもりです。此事には、僕はもう生死を顧みるつもりはないのですから」
「そして、あの人——敏子さんは、君とおんなじ考へなのですか？」
「さうです、僕よりもつと進んだ考へです。彼女はもういつ死んでもいい位に思つてゐます。そして、僕達の東京の生活も、ことによつたら、砕けてしまふかも知れません。そしたら一緒に死んでしまふでせう」
「實に何と言つていいか……私にはあなた達の氣持が分りません」
「それは君には分りますまい、まるきり反對ですから」
「さう、まるで反對です……僕は君の敏子さんに對する愛情は、何處迄も精神的なものでなくてはならない、從つて犧牲的なものでなくてはならないと思ふ。ですから君は、君のいろんな情熱も抑制し、彼女から愛の告白を受けても、それをなだめ、それを淨化して行つて、彼女と彼女の良人とを等しなみに愛して行つて、その生活の平和と幸福とを祈らねばならぬと思ひます」
「ああ、あなたのやうな心が持てたら……僕も幸福になれるでせうが……僕はあなたとはすつかり違つた人間で、さういふ愛は、僕には餘りに空虚すぎます、寂し過ぎます」
「本當の高い愛といふものは、その寂しさです。愛もそこまで行かなければ、本當ではないぢやありませんか？ 戀愛は何と云つたつてエゴイズムです。僕が戀愛といふものを重んじなくなつたのは、そのエゴイズムのためです。戀愛は自分のエゴイズムのために、相手を犧牲にし、周圍を犧牲にして憚らない狂暴な情熱です。僕は情熱からは、決して人間の平和と幸福とは生れて來はしないと思つてゐます。そんな暗い愛からは、ただ互ひの不幸と惱みとが生れるばかりです。だから私達は、その愛を純化し、淨化して、もつと高く、もつと廣い、もつと輝く愛にしなければいけないと思ふが、どうでせう？」

「然し、僕には戀愛をおいては、愛といふ事は考へられないのです。この情熱が苦惱を生んで、幸福や平和を生まないといふあなたの說は承認します。また事實、僕は自分を幸福だと決して思つてはゐません。然し、僕にはそれもどうでもいいのです。僕の求めるものは、平和や幸福ではなくて、むしろ悲壯な一つの激動です、生命がけの悲痛な陶醉です。たとひそれがどんな盲目的な、また動物的な衝動だとしたところで、僕には戀愛の外に、意味のある事は考へられないのです……僕は一體、この世界といふものを否定してゐるんです。そして僅かに戀愛といふ一點で、辛うじてそれを肯定してゐるだけです。つまり、この背理な、不道德な世界を肯定する道は、それを美的現象として見る外はないのです。そして戀愛を除いて、此の人生に美的現象があり得ますか、この暗い、卑しい情熱を除いては？」

「美的現象だといふのですね？　だが、僕には戀愛はちつとも美的現象だとは思はれませんが……僕は戀愛ほど醜い、不調和を示してゐる現象はないと思つてゐますが……人間の一番厭やなところが、一番はつきり出るものですからね」

「人生その物が、元來醜惡なものなんです。人間の存在その物が、既に厭やなものなんです。人間は多分、宇宙の調和を破る一つの不調和、つまり、鏡の面の一つの塵、時計のバネにはさまつた餘計な針のやうなものかも知れないと、僕は思つてゐるんです。君の好きな言葉で言へば、『神』の『悲しいあやまち』ですね、神が天地創造に疲れ切つてしまつた時の、つまらぬ氣まぐれな思ひ付きだつたかも知れませんね。その人間が何をしようとも、醜くて、厭はしくつて、間違ひだらけになるのは當然です。ただ僕には、その人間のあらゆる行爲のうち、戀愛だけが纔かに人間を一層高い世界に連れて行く事の出來るものだと思ふのです。つまり、人間に人間の悲しい運命を忘れさせる事の出來るものだと思ふのです。人間の心の中に、時空を超越した永遠の意識を喚びかへすものは、此外にないと思ふのです。君から言へば、もつと純化された宗教的な愛ならばさうだが、戀愛は人間の一番厭やなエゴイズムの現れだから、そんな事はあり得ないと言ふでせうが、僕にはそんな利己を絕した博大な愛といふものが信ぜられない以上、同じエゴ

イズムでも、二つのエゴオが一つに融合して、そこに第三の新しいエゴオの世界を創る事の出來る戀愛といふものが、最も神のみ心にかなふものだと思ひますね」

「君は恐ろしい異端者ですね。そんな風に、神といふ言葉を、皮肉な調子で口に出してはいけません。君は一體、神の存在を信じてはゐられないのでせう？」

「勿論、僕は無神論者です。元來、我々日本人には、神は無いのですからね」

「そんな事はありません。神はあります、信じようとさへすれば……」

「然し、僕はそんな神などといふ抽象的な概念では滿足出來ないのです。僕も形而上的な世界を認める事は認めますが、それは單に自分の生活を豐富にするためばつかりで、それを信仰しようとは思ひません。神は要するに一つの思辨ではないのですか？　人間が自分の無力や空虚に堪へられなくなつて、やつと案出した案山子ではないのですか？僕はそんな幻影に信仰するよりも、むしろ一人の婦人の肉體を信仰します。これほど具體の具體はありませんからね」

「君は恐ろしい事を言ひますね……僕は君とは反對に、人間の肉體なんてものこそ、本當に幻影に過ぎないと思つてゐますよ。僕は肉體なんてものが無くつて生きてゐたいとさへ思つてゐるんです」

「僕も勿論、眞面目に婦人の肉體を信仰するものぢやありません。彼女の靈のゆゑに、より多く彼女を愛するのです。然し、彼女の肉體は彼女の靈の顯現ではないでせうか？　否、僕は、むしろ靈と肉とは渾一のもので、二つに分つべきものではないと思つてゐるんです。だから僕は彼女の肉體を得るまでは、彼女の靈をも本當に得てゐるとは信じなかつたのです。そして今僕は、二つの靈が完全に一つに融合する道を、或るたつた一つの方法の中に見出したと思つてゐます」

「君の戀愛は、本當に僕の想像の出來ないものらしい……何とも言へず僕は悲しい氣がしますよ、そして、それ以上

何とも言へないといふ事が、非常に寂しい氣がします」

「本當に君にこんな事をいろいろ言つて、君の心を悲しくしたりして、すまなかつた……でも、僕はもう君には再びお目にかかれないやうな氣がするから、是非會つて話して行きたいと思つたんです……僕は何だか終りが近づいたといふ豫感がします。今度東京へ行つたところで、どうせ長くは東京にも生きてはゐられないやうな氣がします。僕の世界はもうあの女一人に縮まつたのです。そして、あの女が生きてゐないと言へば、僕も生きてゐるつもりはないんですから」

「どうか生きてゐて下さい……敏子さんが死なうと言つても、死んぢやいけない、生きなければと君は、言つてやつて下さい。自殺といふ事は許されません、どう云ふ意味から言つても、許されません」

「許す許されないと云ふ問題ではないでせう」

「そんな事はありませんよ。考へて御覽なさい、人間の身體といふものは、自分の身體であつて、自分の身體でないのです。それは大きな宇宙の調和の一部分なのです。だから自殺は、大きな建築の一本の柱を伐り倒すやうなものではありませんか？ そんなに自分勝手に始末をしていいものでせうか？ 考へて御覽なさい、自殺する人は、自分だけの問題のやうに思つてゐても、その人が人の子であれば、それは人の子を殺す事であるし、人の良人ならば人の良人を殺す事であるし、人の親ならば人の親を殺す事ではありませんか？ 自殺は戀愛と同じやうに、人間の最もエゴイズムな行爲です。ましてや、戀愛と自殺とが一緒になつた日には、こんなエゴイスティックな事はない……」

「成程、それは面白い、うまい事を言ひましたね、確かにそこだ……僕は今最もエゴイズムに徹しようと思つてゐるんです、戀愛と自殺、愛の死……こんな徹底したエゴイズム、こんな徹底した生命感の高調はない、僕はそれが味はひたいんです」

「…………」

元雄が何とも言はないので、純一はぢつと庭を見やつた。そこには初秋のやはらかい日影が、靜かに落ちてゐて、その片隅には、二三本の葉鷄頭が眞赤に色づいて、そのまはりを蜻蛉が一四、とまつてゐたり、飛んで見たりして、その薄羽の影を、地上に時々印してゐた。

「君は本當に不幸な人ですね。君のやうな人を、不幸な天才と云ふのだらうと僕は思ふ。君の天才は、その不幸な君の性格の中にあるんですね」

「天才！……いや、そんな言葉は許して下さい、僕は半端物です、出來損ひです……ひねくれてもゐるし、皮肉にもなつてゐるし、偏狹でもあるし、エゴイストでもあります、そんな弱點だけが天才に似てゐるんでせう……不幸な天才といふのは、人のわるい洒落です……」

「いや、そんなに皮肉に取つて貰つては困ります。君は或ひは此世に適しなかつた、然し、君が天才を持つてゐたといふ事は言つていいぢやありませんか？」

「此世に適しなかつた人間が天才ならば、僕も天才でせう……つまり、僕は此世の餘計者だといふだけですね。一日早く此世を去れば、一日だけ僕は生甲斐があつた事になるでせう……」

「本當に明日出發するんですか？」と元雄は調子を變へて訊いた。

「多分、さうなるでせう、これから彼女のところへ行くつもりですから……みんな彼女次第なんです」と純一は答へた。

「ああ、敏子さんはどんなになつてゐられるだらう？　私は隨分長く會はない、やつぱりあんなに冴えた美しい顏をしてゐらつしやるでせうね？」

「大分窶れてゐます、あれもやはり病氣ですから……」
「さうださうですね、然しそんなにひどくはないでせう？　大切になされば癒りますよ」
「さう……大切に……」と言つて、純一は眼の前にゐる優しい病友に、感謝の眼を投げた。
「どうもつまらない事を言つて、すみませんでしたね……お疲れになつたでせう、どうぞこれから寒くなりますから、身體を大切にして下さい」
「僕よりも君こそ短慮な事をしないで下さい、そして君の愛してゐらつしやる人に、私からよろしくと言つて下さい」

二十五

相良元雄の家を出て、その足で、純一が米子停車場に着いて、一時預けのバスケットを受取つて十二時三十分の發車時間を待ち合せてゐると、やがて十一時四十六分の境發の汽車が、構内に入つて來て、その乘客が陸橋を渡つて、こちらの改札口にぞろぞろと出て來た。純一がホオルの中の硝子越しに、見るともなく見てゐると、その一番後の方に、一人の若者が、やや俯向き加減に、暗い顏をしてやつて來る。
「ああ、敏子の弟だ！」と思はず純一は言つた。
「何處へ行つたんだらう？　あの樣子、そしてあの暗い顏！」
彼は汽車が境發なのを思つた。さう思ふと直ぐに、彼が姉のゐるところ――あの夜見村の別莊から歸つて來たのに相違ないと思つた。それに關聯して、南の家に井川が來たといふ叔母の話を、また更に想ひ起した。
「やつてゐるんだナ……」
純一はかう思ふと、身體中が張り切つて來るやうな心持になつた。そして彼は、早く敏子のところへ行かうと思つ

て、汽車が待たれた。

彼には夜見村の別莊に、ことによつたら、西尾友一郎がゐるかも知れないと思はれた。だが、さうなれば、結局早く落着がつくわけだと思つた。

發車時間になつて、彼が車内に乘り込んで、その眞中どころに席を取つてゐると、その後から來て、肩を叩くものがあつた。振返つて見ると、あの西尾宏の會で、何か話をしてくれと言つた、あの無産靑年同盟の岡村實であつた。

「何處へお出かけです？」と彼は純一の前の空席に腰をかけて訊いた。頭を長髮にして、和服に袴を穿いてゐる。

「一寸、夜見村まで……」と純一はわざと正直に言つた、「君はどちらへ？」

「僕は社用で大篠津まで行きます、少し探訪しなけりやならん事がありましてね」

「何かあつたんですか？」

「なに、大した事ぢやありません、いつかの本夫殺しの橋本げんの事件のやうな事があると、新聞記者も一寸張合ひがあるんですがね」

「さう……さう云ふ事件がありましたね、あれは其後どうなりました？」と純一は、彼が歸國當時から度々聞くその毒殺事件の成行を訊いて見た。

「あれもたうとう判決が下りましたよ、それが今日の新聞に載つてゐます」と言つて、岡村は懷からその新聞を引つ張り出して、純一に渡した。それを見ると、こんな風に書かれてゐた。

上細見本夫毒殺事件

毒婦げんは死刑

姦夫作造は懲役十五年

西伯郡上細見村五十九番地
　　橋本げん（四一）
同　郡幡郷村大字大殿
　　岡本作造（三九）

主　文

被告げんは死刑に、被告作造は懲役十五年に處す、押收物件は各所有者に還付し、控訴に關する訴訟費用は、全部被告兩名の連帶負擔とす。

その理由………

處刑の理由が、落もなく書かれてゐるところに、いかにも地方の新聞らしいところが見えた。

「死刑にしなくたつていいやうに思はれもしますがね」と岡村は言つた、「情狀酌量の餘地はあるやうな氣がしますね。たとへば、女なんですから、無期徒刑位でいいぢやありませんか。僕なんかは、こんな事件を處罰する必要はないやうに思ふんだけれど、何しろ姦通なんですから……日本では姦通の制裁が一番嚴しいですね」

「嚴しいやうですね」

「社會主義の世の中になれば、第一にこんな點なんか變つて來ますよ。少くとも、こんな毒殺の必要が無くなりますからね」

「それはさうでせう」

「さうですよ、大菅左門や隅田順みたいに、みんななるでせうからね」

「然し、大菅は毒殺しないですんだ代りに、自分が女から刺殺されたつて事を、昨日松陽新報で見ましたが……」

「やられましたね……だが、今日の東京電報によると、一命はとりとめたらしいと云ふやうな話ですよ。何でも首を切られて、血が流れてゐるのに、飛んで來た女中に助けられてから、煙草がのみたいから持つて來てくれと言つて、スパスパとそれをうまさうにふかしたさうです、やはり大菅だけにえらいですね」

「そんな事がありましたか？　成程、大菅らしい芝居だナ……そんな風なら大丈夫死なないでせう」

「然し、あの大菅は、今の社會主義運動では、どんな地位にゐるんでせうね？」

「大菅ですか？　僕もはつきりした事は言へないけれど、實際運動の方からは、アナアキストの勢力はあまり無いやうですよ。然し、よしんば今勢力があつたにしても、愈々運動が白熱してくれば、ああした理論家は、一番後へ取殘されてしまふでせう。だから、僕から言へば、大菅はそんな時代が來ないうちに、彼らしい華々しい最期を遂げた方が幸福だらうと思ひますね、たとへば、國粹會の連中に殺られるとか……」

「いづれにしても、主義者は一命を懸けなくちや駄目だといふ事は確かですね」

「それはさうですとも、今ではただ口先きで騷いでゐるばかりで……殊に、文學者なんかが、急に左傾したやうな事を筆にして、得意になつてゐるなどは、見てゐて滑稽ですよ」

話の間に、汽車は弓ケ濱驛に着いたので、純一は岡村に挨拶をして、汽車から下りた。

彼はやや濕りを帶びた道を、別莊の方へと歩いて行きながら、自然と注意深くなつた眼で、路上を見ると、自動車の轍の跡が二條、そこにまざまざと殘つてゐる。

「來たんだナ……だが、あの曲り角に自動車の影のないのを見ると、今ではないらしい」

彼はまづ、友一郎の今現に來てゐない事だけは確かめたが、その次ぎの瞬間に、彼女がもう既に拉し去られたのではないかと云ふ疑念が湧き起つた。

「連れて行かれたなら、どんな事をしても、それを見付け出すはかりだ。兎に角、行つて見るより外はない」

別莊の前に來て、その開かれてゐる門を入つて、構ふ事はないと、表の椽のところへ入つて行つて、そこから聲をかけた、

「僕ですが、ゐますか？」

「ゐますわ」と、思ひがけなく、直ぐその障子の中で聲がして、やがて障子が開いた。敏子はやや亂れた髮をして、そこに立つてゐた。見ると、その眼のまはりが、紅く脹れて、何となく顏の感しが違つたやうで、妙にその脹れた瞼が、丸顏の女のやうにさへ思はせた。

「泣きましたね」と純一は座敷に上つて、敏子の傍らで小聲で言つた、「どうして泣いた？」

「そんなに見えますか？」

「こんなに脹れてゐるんだもの」と純一は言つて、敏子の重さうな瞼を撫でた。二人は一緒に奧の部屋に入つて、そこにすわつた。

「僕はもう連れて行かれたのぢやないかと思つてね」

「連れて行かれさうなんですよ」と敏子は言つて、純一の膝の上に、自分の顏をあてて突伏した。

「何しろむかうでは、わたしの弟を差向けるんですもの」

「あなたの弟さんに僕は先刻會つた……」

と純一は言つた、「米子の停車場で、丁度下りるのと入れ違ひになつた……」

「さう……多分さうでせうね、あれはずつとこちらに來てゐて、昨夜泊つて、この十一時二十九分の米子行で歸りましたから」

「それぢやあなたが歸つて來た時も、弟さんは來てゐられたんですね？」
「ええ、わたしが歸つて見ると、ちやんとここに來て、わたしの歸つて來るのを待つてゐました。そして、わたしが歸れば、直ぐ米子へ知らせる役目を持つてゐたんですけれど、わたしが賴んで、昨夜一晩こちらにをらせて、今朝むかうに言ひに行かせたのです。そして、昨夜一晩話し明かしたんです」
「大分事情が分つたんですか？」
「ええ、大體分りました」
「どんな風です？」
「弟の話によると、わたしを停車場で見かけた井川が、直ぐそれを友一郎に話したといふ事です。何處へ行つたんだらうと心配になつたと見えて、友一郎が自動車で來て見ると、わたしがゐないで、女中ばかりがゐたのです」
「それぢやまるで僕が船の中であなたに言つた通りになつたんですね……」
「ええ、さうです、何しろあの井川に遇つたんですから堪りませんわ」
「それからどんなになつたんです？」
「友一郎がここへ來て見ると、女中もわたしの行先を知らないと言つて、まあいろいろわたしの工合のいいやうに言つてくれてゐると、自動車の運轉手が、裏口からあなたの置いて行つた自轉車を見付け出して、それを友一郎のところへ持つて來たといふのです。この自轉車は誰のものだと女中が問はれて、たうとう小波村からお出でになつたお客樣のものだと言つたのが、騷ぎのはじまりだつたさうです」
「僕のゐた南の家へ、どうも井川らしいのが、一昨日やつて來て、女の人は來ないかとか、僕は何處へ行つたかとか、しつこく訊いたさうですから、多分小波村から廻つて來て、そんなに訊いたのでせう」

「そればかりではないんですよ、井川は十七日の日に、小波村から引返して、今度は後藤の驛を探索して、それからずつとわたし達の跡を追つて行つたさうですから、屹度關、杁江といふ風に、わたし達とは一日おくれにまはつて行つて、方々心當りを調べてゐると見えて、まだ歸つては來ないさうです」

「井川一人で探してるんですか？」

「それはもう外に洩らすまいと思ふからでせう。片一方では、弟をここへよこして置いて、わたしの歸りを待たしてあつたんです。で、弟の話によると、友一郎の量見は、まだ誰もこの事件を知らない、知つてゐるのは、井川と弟と當人達と、女中、運轉手位なものだから、世間にパツとしないうちに、それを始末しようとかかつてゐると言ふのです。これがね、そんな事實がなくとも、噂が高くなれば、その儘ではすまされないが、今は多少の事實はあつても、世間には知れてゐないのだから、口留めしなければならぬ人間には口留めをして、急にわたしを他處へ移して、揉消してしまひたいと云ふ意向だつたさうです」

「友一郎氏の考へさうな事ですね。多少の事實はあつてもと言つたやうな處が、實にどんなに見得を重んじるかつて事が分つて、氣の毒なやうな氣がしますね」

「それは弟もさう言つてゐました、ただ見得ばつかりらしい、その點にかけては、ひどいもので、どんな手段でも取るつもりらしいと言つてゐました。勿論、新聞に出るなんて言ふ事はありはしません。たとひわたし達がこの濱で一緒に死んだつて、あなたの名は出ても、わたしの名前を隱す位のことは、平氣でしさうな氣がしますよ」

「それで弟さんは、僕達の事をどう言つてゐました？」

「弟はあなたの事をよく知つてゐましたよ。あの會の時に、お辭儀もしたし、あの演説もよく聞いたと言つてゐました。あれはかう言ふんです、姉さんが長い間離縁して貰ひたがつてゐるといふ事は、十分知つてゐるんだし、辛い氣

持も分るから、さういふ人と一緒に東京へ行くなら行つたらいいでせう、後はなるやうになるから……そんな風にやさしく言はれると、わたしは本當にすまない氣がして、昨夜はそれで弟と一緒に、お互ひにいろんな事を話しては泣いたんです」

「あなたが東京へ行つた後で、弟さんが西尾の家から壓迫される程度はどんなのです？どれ位の借金があるんです？」

「借金はそんなにありはしません、家の增築は、わたしの分として借りて廻してあるんですから、それはあれの借金にはなりません。ただ、わたしがそんな風になれば、いろんな場合に、多少虐められたり、いろんな便宜を失ふ位なもんです。昨夜もいろいろ店のあんばいを聞いたんですが、どうやらかうやらすごしては行けると言つてゐました」

「さう……それで僕も安心した。實はそれが僕は心配になつてゐたのです。先刻も停車場で聲をかけたかつたんですが、今度の事件で、非常に自分を罪深いと思つてゐるから、僕はどうもさう出來なかつたんです……會の時もさうでしたが」

「もつと弟がをつて會ふと、どんなによかつたでせう、でも、それはどうでもいいでせう……弟には、何處へでも行く事は行くけれども、今非常に身體が疲れてゐるから、一寸待つてくれと、西尾の方へ言ひにかへらしました。だから、わたし蒲團を出して、大病人になつちまつて寢ようと思つてゐたところです」

「なかなかあなたは芝居が出來ますね」

「そんな事言ふもんぢやないわ」と言つて、敏子は純一の頰を輕く打つた。

「あなたの方は？」と敏子が訊いたので、純一はかいつまんで、叔父と喧嘩をした事や、南の家を出た事や、昨夜姉の家で泊つて、今朝、相良元雄に會つて來た事やを、順を追うて話をした。

「元雄君が僕に、あなたの愛してゐらつしやる人によろしくと言ひましたよ」

「まあ、さう……いつでも本當にやさしい人ですね、わたしお目にかかりたいやうな氣がするわ」
「會はない方がいいでせう、會へば戀愛を否定されるし、今後の生活も否定されるし、あんまり私達と考が違つてゐるのに悲しい氣がするだけでせう。こんな風に違つてしまへば、もうどうする事も出來ないものですからね」
「それはさうでせうね」
かう言つて、敏子は押入をあけて、蒲團を引つ張り出さうとするので、純一はそれを手傳はうとして傍へ寄ると、敏子はこちらに向いて、小さい聲でささやいた、
「あの皆美館のお蒲團は綺麗でしたね、わたしあの友禪の模樣が本當に好きでしたわ」
「僕があの晩、あなたの髮をいぢつてゐたのを知つてゐますか？」
「そんなこと知らないわ」と言つて、敏子はパッと顏を赧くした。
「女中は？」と純一は襖の方を一寸目で示して訊いた。
「ゐるんですよ……お婆さんもゐるんです、けれど二人ともわたしが味方にしてあるから、ちつともかまはないのよ、かうしてぢつとこの部屋でゐませう」
「僕がここにゐても……」
「ええ、泊つても……」と言つて、敏子が枕を出して、蒲團の中に入りながら言つた。
「東京行の荷物はどれ位にしませう？」
「あまり荷物は持たない方がいいでせう、ほんの着替位で澤山です」
「でも、なかなかあるもんですよ、行李の二つや三つ位ぢき出來てしまひますよ。明日の朝、わたしが荷ごしらへをしますから、あなた停車場へ持つて行つて、東京へ送る手續を取つて下さいませんか」

「それでは發つのは明日の晩ぐらゐ？」

「ええ、さうしませう。わたしも弟には會つてしまつたから、お別れしなくちやならん人も外にないんだし……それにあなただつて、もうみんなの人に會つたんでせう。だから早く發つたつていい譯です……ねえ」

「早い程いいでせう」と純一は言つた。

なほ二人がいろんな手順を相談したり、とりきめたりして、小半時も經つた時に、若い女中がそつと襖をあけて、顏を出して、ぢつと純一を見てから、敏子に言つた、

「奥さん、自動車がまゐりましたやうでございますよ」

「さう……ぢや、いつものやうにお迎へに出るがいい」

「いいんでございますか？」と女中はただならぬ顏付で、二人を見て念を押した。

「いいでせうね、あなた？」と敏子は純一の顏をぢつと見た。

「僕は構ひません」と純一は別段に樣子も變へないで言つた。

「それからおまへね、旦那樣のお座蒲團をそこへ持つて來て、それからお茶の支度なんかどうでもいいから、お婆さんと一緒に、停車場の方へ少しの間出かけて行つとつてくれ、わたし達はお話があるんだから……」と敏子は女中に言つて、女中が出て行くと、純一にむかつて、

「わたしはかうして蒲團をかぶつて、むかう向いて寢てゐますから、それでいいでせう？」と訊いた。

「それがいいでせう、心配する事はない、僕にまかせときなさい」と純一は言つて、彼は女中の置いて行つた座蒲團を、自分の眞向に置き直した。

二十六

間もなく、家に入つてくる樣子がして、女中の聲がした。すると友一郎の聲がして、
「奧さんはひどくおわるいのか？」と女中に訊いた。
「大分おわるいやうでございます」と言ひながら、女中が襖をひらいたので、友一郎がそこに現れた。洋服に夏外套をまだ取らないで、革の鞄を携へてゐた。
純一がぢつと見ると、彼は明かに、彼女ばかりがやすんでゐると思つてゐた寢室に、純一がすわつてゐるのを見て、宛かも悚然としたやうな蒼白の硬直したやうな面色を發して、一瞬入るのを躊躇するやうな樣子が見えた。
「さあ、どうぞ」と純一は言つた。
かう言はれて見ると、友一郎はムッとしたやうな顏をして、默つてその夏外套を荒々しく投げるやうにぬぎ捨てて、そして、そこに胡坐をかいた。
女中が何處かに出て行つたやうな氣配がして、家の中がひつそりとする迄、友一郎はぢつとその儘、自分の膝のところを見てゐた。純一は煙草に火をつけて、それをすつかり吸つてしまつた。丁度正に蹴合はんとする二羽の雄鷄が、その全身の羽毛を逆立てて、ふくれかへつて氣合をはかるやうな、暴烈な靜止があつた。
純一は友一郎が何か言ひ出すまで、何も言ふまいと思つた。そして、次ぎの煙草に火をつけた。
「いつかは會で失禮しました……」と友一郎が、かすれたやうな聲で言ひ出した。
「いや、私こそ」と純一が短かく言つた。
「あの時のあなたのお話は、實に雄辯でしたナ」

「いや、どうしまして」と純一は同じやうな調子で言つた。その時、友一郎がその角ばつた顔に歪んだ笑ひの影を見せて、
「あなたの御商賣の方はいかがです、お盛んでせうナ？」
「質屋の方ですか？」
「さやう……質屋の方は景氣はいかがですか？」
「お蔭さんで、大分繁昌のやうです」
「それぢやなかなかお忙しい譯ですね、一日も店をあけてはをられない譯ですね」
「まづ、さうです。然し、僕はなかなか勝手者ですから、遊びたい時には、勝手に遊ぶんです」
「それぢや、いつかの會のお話にはもとる譯ですナ、なかなか言行の一致は困難と見えるですナ、ハハ……」
「いや、こんな風な僕だから、あの時西尾さん御一統に學びたいと言つた譯です」と言つて、純一は微笑した。
この對話で、友一郎は、ほぼその場の對策が浮んだにちがひない。彼は敏子の方に少し寄つて行つて、
「ひどくわるいのか？……敏子」と小聲で訊いた。
「……………」
敏子の答は殆んど誰にも聞えない位であつた。
「熱はそんなにもないやうだ」と友一郎はその手を差しのべて、敏子の額を押へてから言つた。
「ナニ、大した事はない、いつもの通りだ。少しの間ぢつとしてをれば癒るよ。昨日おまへの弟に言傳てしたやうに、今度は僕も少し社用といふ事にして、おまへと一緒に、別府の溫泉へ當分保養に行かうと思ふ。やつぱり遠い方へ行かないと、靜養にはならんからナ」と言つて、彼は純一の方を意味ありげに見た。純一は彼が敏子の熱を見た時から、

氣が立つて來たが、ぢつとしてゐた。

「これはどうも我儘者でしてね」と友一郎は聞けよがしに言つた、「別に不自由も苦勞もない身の上でありながら、いろいろの事を思ひ付いたり、いろいろな事をして見たりして、そのためますます自分のヒステリイを昂進させて、自分で自分の身を傷つけるやうな事ばかり遣る……これではどんないいお醫者でも、癒しやうがない譯だ。まあ、溫泉が一番いい、溫泉で一二年ブラブラしてをれば、そのヒステリイが癒るにきまつてゐる」

さう言つてから、友一郎は純一の方に向いて、一寸下目に見るやうな語調で、

「どうもあなたには失禮ですナ、折角お出で願つて、こんな有樣ですから……いづれこれの身體が達者になつてから、お出で頂き度いもんですナ。お店の方もお忙がしいんだし、殊に、御養子の身分ぢや、一日家をあけるといふ事も、お困りでせうから、どうぞまたお出直し願ひたいもんですナ」

「ナニ、僕はもう質屋の養子といふ譯ではないんです、そこを出てしまひましたからね、急いで歸らなきやならんといふ必要もないんです」

「然し……ですナ」と友一郎はゆつくりと言つた、「かうして私もをりますし、女中達もゐますし、當人は寢てゐるといふ次第ですから……一つすみませんが、お歸りを願ひたいものです。こんな病氣の際は、どうしても病人が昂奮しますから、やはり家の者ばかりでないと……」

「まあ御主人のあなたが歸れと仰しやるなら僕は歸ります……然し、僕は歸る前に、敏子さんに話があるんです、それにあなたにも申上げたい事があるんです」

「然しですナ、それは今度にして頂きたいですナ。それから私にならば、新聞社の方へ來て頂きたい……一人や二人位の社員は、僕の考へ次第で、いつでも採用いたしますよ」

「僕はあなたに新聞社に雇つて貰ひたいとはちつとも思つてゐませんから、さういふ用ではありません……西尾さん、もういい加減にそんな見え透いた僞紳士風な口のきき方はおやめになつたらいいでせう」と純一は切り出した。
「何と言はれます？」と友一郎がそれを受けた、「あなたが僕の社にお入りになりたいのかと思つた迄の事です」と言つて、彼はいかにも苦しさうに眼を逸らした。
「そんな事ではありません。あなたが御覽になるやうに、僕はかうして敏子さんの傍にゐますし……實は四日前から、敏子さんと二人で、美保の關から松江の方に遊びに行つてゐたのです。そして、明日の晩あたりには、二人で多分東京へ行くでせう……かう言つたやうな私達の關係といふものを、あなたはもうお氣付きになつてゐらつしやる筈です……」
「それは……」と友一郎は言つて、次ぎの言葉をぢつと嚙んだ、「それはあなた一人の言はれるだけでは信用が出來ない、それだけでは私は認めません……ここに當人もゐるんですから……敏子、おまへは龍田さんとそんな風に行つたといふのか？」
敏子は蒲團の上に、その白い寢卷に紅い伊達卷をしめつけながら、そこに起き上つて、覺悟したやうな調子で言つた、
「すみません……わたしは龍田さんと一緒に家をあけてゐました、その通りでございます」
「本當にその通りです」と純一が言つた、「僕達は本當にあなたにすまないとは思ひます。けれど、もうかうなつてしまつたのですから、仕方がありません。あなたがしたいやうに、僕達をどんな風にでもなすつて下さい」
「どんな風にでも……」と敏子が言つた、「お氣のすむやうになすつて下さい」
「私はそんな事は信じたくない……敏子がそんな事をしたとは思ひたくないんだ……おまへが四日前から家をあけて

ゐた事は、後藤の驛でおまへに會つたといふ井川の話で分つたから、直ぐにここへ來た。どうかと思つて來て見ると、おまへはゐないので、それからと云ふものは、世間に知らさないで、おまへを連れ戻らうと思つて、井川にも頼んで、あつちの方にも行つて貰つたし、隨分探すのに骨折つてゐた……おまへが龍田さんを連れて行つたのも、それは本當だらう。だが、おまへは西尾友一郎の妻だ、おまへに伴をしたいといふ男を一人連れて、美保の關や松江に遊んだからと言つて、別に差支はないぢやないか、此頃は年の若い男に、よくさういふ男がある。キチンと妻帶するといふやうな事を嫌つて、金があつて美しい令夫人などに可愛がつて貰はうと云ふ事を念がけてゐる者がある……そんな男はそんな男でいいのだ」

「その言ひ方は何です?」と純一が、友一郎のナフキンのやうに蒼ざめて、妙に眼を逸らしながら言ひ續けるのを遮つた、「僕を侮辱なさるつもりですね……僕をそんな男だと言はれるのですか?」

「さう言つたのではありません、それはただ話です。私はこれでその點ではなかなか進歩した考へは持つてゐるんです。東京では、いい家の夫人が、役者を買ふといふ事でよく非難されてゐますが、そんな事は大局から見れば、どうでもいい事ぢやありませんか。主人公が藝者や女優に戯れる、從つて寂しいから、夫人がさういふ事にもなる。どつちもどつちですからね。實業界で働くやうな人間は、そんな小さい事にケチケチするやうな量見はありませんよ。そんな事を問題にして、何のかんの言ふのは、神經質な文士とか云ふ連中に多いやうです。僕なんかの考へから見れば男が藝者を買ふ程度で、女が少し位ゐ遊んだつて、それでやれ離婚だの、やれ監獄へ入れるだのと云ふやうな野暮な事に考へませんよ。だから、おまへが此方と一緒に遊んだといふなら、それでいいぢやないか。僕はそんな事でおまへを離縁しようとはちつとも思はない」

「わたしはそんなあなたのお考へは嫌やです」と敏子が言つた、「そこがわたしとあなたと違つてゐるんです。ですか

ら、どうしてもあなたとわたしとは、一緒に暮しては行けません。あなたはいつもそんな考へです、たとへ多少の不正や横暴があつても、お金を蓄めるに限るとか、多少の事實があつたつて、世間にパッとしなければ、離婚しなくつたつていいとかいふ、そんなのがわたしには本當に嫌やなのです。そんな本當に愛のない事なんてないんですから」

「おまへには分りませんよ」と友一郎が言つた、「御安心なさい、龍田さん、僕は決してあなたを監獄に入れようとかどうしようとか言やしません。あなたの出方次第で、私にもあなたの身の立つ道を講じてあげる方法はいくらもありますよ。御存知でもあらうが、戀愛なんていふやうなものは、男のほんの若いうちのニキビのやうなもんですよ。もつとえらくおなりなさい。實業界の名だたる人達は、女を遊びはするが、女に遊ばれはしませんよ。これはあなたへの忠告ですよ」

「そんな御忠告の必要はありません。僕は今迄敏子さんからあなたの事を聞いてゐたが、もつとあなたを尊敬してゐた。今ではもうすつかり輕蔑します。あなたのやうな人間がある限り、此の世の中は救はれやしません。あなたばかりでなく、あなたのお父さんもさうだ。敏子さんがあなたを捨てたといふ事は、當然な事です。何といふ下劣だ!」

「貴樣こそ」と友一郎は怒鳴つた、「もう辛抱せんぞ……貴樣こそ、惡黨だ、畜生だ! 人の家へ忍び込んで、泊つて見たり、そこの細君を引つ張り出して見たり、勝手に家宅侵入罪、誘拐罪を形成してゐる。まだその上に、勝手氣儘な理窟をほざいてゐやがる。貴樣のやうな人倫をわきまへぬ馬鹿靑年は、打ち殺してもいいのだぞ……歸れ、早く歸れ」

「まあ、あなた」と敏子が、その惡罵を聞くに堪へぬやうな、そのあられもないやうな取り亂した友一郎の姿を見るに堪へぬやうな樣子で制した、「何といふ事を仰しやるのです」

「おまへも毒婦だ、淫婦だ。何を言ふも糞もあるものか……わしは辛抱してゐたのだぞ、こらへられるだけはこらへ

ようと思つてゐたのだぞ。おまへのために金も費つたし、親父には氣まづい思ひもしたし、世間からは笑はれるしナ、始終腹は立てさせられるし、この十年近くもの間、本當にわしは苦勞したぞ。それにまだ、するに事おいて、今度はこんな大それた事をして、わしの面に泥を塗りやがつた。打つても打つても打ち足りないやうな氣がするぞ。監獄へはふり込む位で、わしのこの胸が晴れると思ふか！」

「まあ、そんなに……」と言つて敏子が、友一郎の振上げようとする手を押へようとすると、反對の方の手で、彼は彼女を突き飛ばした。

「歸れ、おまへが言はなくつたつて、わしの氣のすむやうにする！」

「歸りませんね。もつと冷靜におなりになつたらいいでせう。僕はあなたにすまないと思つてゐたから、かうして話をしたんですよ。あなたも案外男らしくありませんね。どうです、敏子さんに離緣狀を出して、綺麗に緣を切つてはくれませんか？」

「そんな事は差圖は受けん……離緣する時には離緣する、だが、まだ離緣する理由はないのだ。貴樣のやうな惡い蟲が、ほんの一寸ついてゐるだけの事だ。殺してやりたいのだが、このわしの生命は、貴樣のやうなつまらない人間の生命と取り換へッこするには、勿體ないからナ。まあそろそろ貴樣がどうも出來んようにしてやる……」

「それは面白い、あなたの家の財力で、それは出來たら面白いでせう、金でね……だが、金の力の及ばない事もありますよ」

「力もない癖に、言へるだけは言へる奴だ」と友一郎は言つて、そろそろ革の鞄を取りながら、

「敏子……よく考へて見よ。こんな馬鹿な小僧とあんまり芝居が過ぎると、取りかへしのつかん事になるぞ。わしと一緒に別府溫泉に行く氣になつたら、わしはいつでも自動車を差向ける……」

「ええ、有難う、考へて見ませう」と敏子は胸を抑へながら、着物の襟をかき合して言つた。その樣子を、歸らうかどうしようかと云つたやうにして、ぢつと見てゐるうちに、友一郎は心が落着いて來たと見えて、

「よう考へて見てくれ……わしがおこるのが無理もないと云ふ事をよく考へて見てくれ、わしがおまへを本當に離しともないと思ふからではないか。それはおまへがいつも言つてゐる通り、おまへとわしとはうまく氣の合はんところもあるだらう．ここにゐる龍田さんの方が、おまへの氣に入るかも知れない、それに此人は若いのだし…… それにいつもおまへに言はれてゐる通り、わしにはおまへの外に綾子の母親がある。然し、よう考へて見てくれ、あれはおまへが嫁入りして來ぬ時からの關係だし、あんな年寄だし、また、この米子では、妾宅の一つ二つは持たんと、附合に困々といふ事があるのぢやないか。夫婦だからと言つて、朝から晩まで、いちやいちやしてゐなければ、愛がないと言ふのなら、あまりに氣が狹いよ。もつとも、そんな風なおまへの考へは、考へて見ると、可愛い事は可愛いんだが……それはわしも惡かつた、その點はあやまる、だからよう考へて見てくれ」

「ええ、考へて見ます、すまないとは重々思つてゐるんです、そしてあなたの辛いのも分りますわ」

「おまへは昂奮すると、物をあんまり極端に考へすぎるからいかんのだ。この問題も、そんなところから來てゐるんだ。おまへが戻つて來てくれるんなら、わしは無條件で滿足するつもりだから、……そして、都合のいい事には、まだこれは誰れにも知られてをらん、內密にするには丁度いいのだ」

かう言つてから、友一郎は一寸てれたやうな顏をして、純一に言つた、

「あなたも考へて見て下さい。そして、どうしても敏子があなたと一緒でなければいかんと云ふのであつたら、それもまあ仕方がないと思ひませう。いづれにしても、あなたもお若いのだし、敏子も氣まぐれだしするから、今直ちにどうかうッて云ふ事は輕卒のきらひがあると、私は思ひますから、ここ暫らく、お互ひに考へて、その上に適當の方

法を執りませう、それでいいぢやありませんか？」
「それで結構です」と純一は言つた、「僕達は先刻も言つた通り、あなたにすまないッて事は思つてゐますから、どんな風にでも、あなたのしたいやうにして下さい。敏子さん、あなたもさうでせう？」
「ほんとにすみません」と言つて、敏子は俯向いて、さめざめと泣いた。

二十七

いづれ後から敏子の弟をよこして、萬事を定める事にするが、出來るだけ別府溫泉の方へ行く事に定めて貰ひたい事、出來るだけ二人が此際別れて貰ひたい事、自分は決して表沙汰にもしないし、二人のために惡いやうな事はしないからと云ふやうな事を言ひ置いて、先刻あんな風に怒號したのとは打つて變つて、物分りよく、後に心を殘すやうにして出て行つた友一郎の後姿は、何ともなく哀れに見えた。
敏子が羽織を上に着て、友一郎の後から、自動車に乘るところまで送つて行つて、暫くして歸つて來た。彼女はそこに腕組みをしてすわつてゐる純一の顏をぢつと見て、ハラハラと淚を落した。
「歸つて行きましたわ……さみしさうな、つらさうな顏をして……」
「歸つて行かれたので、僕は氣の毒でなりません」
「さうなの……ちつとも外の事は言はないで、身體を大切にするように言つて、自動車に乘つた時に、友一郎の眼には、淚が一杯でしたよ」と言つて、彼女はつらく、また更につらくなつたやうで、障子のところにヒタと寄つて、忍び音に泣いた。
「みんなわたしがわるいのです。友一郎には、それは厭やなところはあります、けれどあんな親切な人は、そんなに

澤山あるもんぢやありません。十年近いもの間、わたしが言ふなりに何でもしてくれました。最初の結婚だつて、あの人がわたしを望んで、強つてと言つて、あんな風にしてくれたんですもの。何處か兒のやうなところがありましたわ。それのにわたしは、こんな風にあの人を傷つけてしまつたのです」

「そんなにあなたが思ふやうに、友一郎氏は根本的に傷ついたのぢやない、あんな風な考へ方の人だから、いくらか月日がたてば、またあの人として、どんな風にでも出來るでせう……」

「それは多分さうでせう、けれど、あの人はわたしが無くつちや行けないところもあるんです。わたしにはちやんとそれが分るんです。けれど、そんな事をあなたに言ふのは、ほんとにあなたにすみません……でも、少しの間許して下さい」と言つて、彼女は緣側の方に出て行つて、いつまでも悲しみが制し切れないやうに見えた。

女中が歸つて來て、夕飯の支度をはじめた時分には、彼女はもう泣いてはゐなかつたが、恐ろしいほど蒼ざめて、力なげに見えた。

「わたし何だか消えて行つてしまひさうな氣がする、御飯も何もほしくはないのよ……どうかなるんぢやないでせうか？」と、夕飯の時に、彼女は彼に言つた。

「お醫者さんを呼んでまゐりませうか？」と女中が心配しきつて言つた。

「いいえ、いいの、ぢつとしてをれば癒るでせう。御飯がすんだら、此方のお寢間も、このお部屋に敷いておくれ」と彼女はその女中に言つた。

翌日、朝飯の後で、女中達をまた買物に出してから、彼女はいろんな荷物をみんな座敷に引つ張り出した。持つて來てゐないと言つても、そこには、立派な着物がかなり澤山あつた。帶だの、伊達卷だの、羽織だの、夏のコオトだのの間に、半襟や、いろいろな髪飾りなどが、小筐に入つて、詰められてゐたのを、彼女は一つ一つ取出して、部屋

中に散らかした。そして、純一に一々それを見せて、いつ買つたとか、いつこしらへたものだとか言つては、それを新聞に分けて包んで、その表にそれぞれの名前を書いた。その中には、小波村の親戚の家だの、友一郎の妾のお梅だの、その娘の綾子だの、女中達の名までもあつた。まるで亡くなつた人の物をかたみわけするやうな工合であつた。

「なぜ、そんなに分けてやるんです？　持つて行くものがなくなるぢやありませんか？」と彼が傍らから訊いた。

「わたしにはもうみんな要らなくなるから……」と彼女が言つた。

「だが、東京で困るでせう、そんな髪飾りなどは、直ぐ要るのだから……」

「ええ、生きてゐるつもりなら要るんですけれど……東京へはもう行かないのです、わたしたちは、もう着物なぞ要らないところへ行きたいと思ふのですよ。そんな風な氣持にわたしがなつたら、いつでもさうして下さると仰しやつたのね？」

「ああ、いつでもね」と彼はさみしく笑つた。

「わたしはもうさうしたいんです。なぜかと言ひますと、わたしには二人の主人は持てませんから……一人の人は可愛いんだし、一人の人にはすまないのだし、心が丁度裂けてしまひさうです。それにこんな二重になつた心は、わたしには重すぎます。こんな心持を樂しんだり、こんな中を切り抜けたりして行ける女の人はいくらでもあるんでせうけれど、わたしは純潔が好きですから……」と言つて、彼女はぢつと彼を見て、「ただあなたひとりだけについて行きたいのよ、それにはどうしても生きてはゐられません……わたしはひと思ひに、こんな世の中からぬけ出してしまひたいんです。此間あなたが仰しやつたやうに、人間のいろんな制度や不純を飛び越して、自分を高めてしまひたいんです……こんなに直ぐと言つたら、あなたは困りますか？」

「いや……僕はいつでもいいのだが……」と彼は答へた、「けれど、あんなに東京に行きたがつてゐたのに、急にさう

なつたのは、どういふわけなのです？　もつと外に何かありさうですね？」
「いいえ、別になんにもありません。ただ此の上生きてゐない方がいいと思ふだけですの。あなたの仰しやつたことが、本當だと思ひますから……考へてみると、美保の關であの儘死んだ方がよかつたと思ふ位ですわ。もう何處へも行かないで、この儘ここで……わたしはこんなに愛してゐる自分の故郷で、そんな風になるのが、どんなにしあはせかと思ひます……ねえ、わたしの言ふ通りになつて下さい」

二十八

ほのかな霧が靜かに降つてゐる。
松林はその霧につつまれて、暗い深夜の靜寂にしづんでゐる。
風もなければ、羽搏く鳥の羽音もない。
ただ、聞えるのは、高まつて行く波の音ばかりである。
濱は一帶に黑い夜の色に沈んで、かすかに舟の影が見える。
長い渚に寄せてはかへす白波のほさきが、空に漂つてゐる下弦の月をかへして、かすかに光つて見える。
雲がときどき、その月の面を通るので、その度びに、波の光はかつ見え、かつ消える。
對岸の燈臺の灯も、水の上ほのかに漂ふ秋霧のために、その光がなごめられてゐる。
暗い松林から、二つの影が、波打際にあらはれた。
男の影、そして、女の影。
二つの影は、ピッタリと寄り添つて、恐れる樣子もなく、濱を行く。

ほのかな霧が靜かに降つてゐる。
何の物音もない、ただ、波の音が高まつて行くばかりである。
二つの影が、舟のところに立止まつた。
ぢつと波を見てゐる。
波は引き去つては、また寄せてくる。
ほのかな霧が靜かに降つてゐる。
「ああ、だんだん霧が深くなる」と男が言つた。
「もう秋もおしまひですね」と女が言つた。
空は薄靑く、小さい月は靜かに移る。
冷たい光が、ほのかに二つの影を照らす。
「あの月のしづむ頃には、行けるところまで行けるでせう」と男が言つた。
「ええ、後には何も殘さないで……」と女が言つた。
ほのかな霧が靜かに降つてゐる。
渚から舟ははなれる。
パッとはねかへる波が白くきらめく。
二つの影は一つになつた。
一つの影が沖に出て行く。
靜かにゆるく艪の音が遠ざかる。

やがて、霧の中に、その影も消えてしまつた。
あとには、ただ波の音のみが、單調な永遠のひそめきを捲きかへしては、やむことのないうねりをつづけてゐる……
……

大正十年一月起稿
大正十二年十一月脱稿

生死相伴

無智と煩惱との物語

Homo Sum; humani nihil a me
alianumputo.　　Terentius.

我は人間なり、されば人間の事とし聞けば、
（善きも惡きも）みな他所事とは思はれず。

テレンティウス

第一部

三人の女性通

女性の無智と、男性の煩惱とが、人生を火宅とする。あらゆる悲喜劇は、二つの個體の接觸から生れた。

或る詩人の備忘錄

なだらかな丘の傾斜、黒ずんだ杉の林、色鮮かな麥畠、これらのものの上を、五月の軟かな風が、波立ちながら吹き過ぎて行く。

この武藏野の新住宅地、阿佐ヶ谷(あさや)の、ここかしこに點在する農家の古朽ちた藁葺は、おほよそ、こんもりした老樹に包まれてゐるので、その屋根が透いて見える位である。

これらの農家が、この土地の先住者の落着をもつて、何となくしつかりそこにすわり込んでゐるやうに見える。それに引き替へ、なになに住宅地といふ標柱の立つてゐるあたりから、停車場の方にかけて、今建ちつつある家、また既に建つてゐる家は、大抵、亞米利加松などの間に合せな建物で、その上、何の蔽ひもなく、その時々の風に吹き曝されてゐるのが、一層落着のない感じを與へる。

然し、こんな粗惡な建物の中にも、しつかりと建てられた、庭の廣い、中には裏に畠地なぞも持つてゐる邸宅がある。かういふ邸宅は、申し合せたやうに、バンガロウ風なものとか、コッテエジ風なものとかで、日本建築の家でも、きまつてその一部分が洋館になつてゐる。云ふ迄もなく、それらは資産もあり、相當教養もある人々の邸宅で、いづれもその主人の好みをはつきり示してゐて、かの樹木に圍まれた農家の古風な藁葺とは、趣きのあるコントラストを示してゐる。

さうした邸宅の中でも、片山繁雄といふ標札の出てゐる、二階建の赤瓦の洋館を傍らに持つた、五間位の平屋建の家が、その裏に廣い花畠を持つてゐることによつて、何となく人の眼を惹く。その花畠は、三十坪位あつて、それが三ところに仕切られて、その一つ一つに、花壇が三つ宛つ作られてゐる。東南の一部分は、深く掘り込まれて、硝子

の屋根の小舍が設けられてゐる。設備はこんなに行屆いてゐるが、この花畠全體の感じは、綿密な園藝術を證明してゐるものではなかつた。花壇の上には、殆んど何も植ゑられてゐないところがあり、また、草むらのやうにごみごみ植ゑ込んだところもある。とらのをや、せんのをや、コスモスなどの靑い苗に混つて露草がのびのびとその葉を張つてゐる。今咲いてゐる花は、チュウリップである。ここの主人は、餘程この花の栽培に興味があるらしく、花壇は二つまでこの花に與へられてゐる。紅、白、黃、絞り、色さまざまの花が、一本の莖に一つ宛つ、おほらかに咲いて、咲き續いてゐるのは、見るからにパッと明るい。

花畠の他の一隅には、かなり大きな塵芥溜の穴が掘られてゐて、その底には、四五日前の雨水が、ちよつぽり溜つてゐる。あたりには、月見草が五六株、丈高く茂つて、その根のところから、穴の中にかけて、牛肉の鑵詰、パインアップルの鑵詰、ジヤムの鑵詰、さうした舶來食料品の空鑵らしいのが、夥しく棄てられてある。瘠せて骨立つた野良犬が、隣家の方から、垣根をくぐつて入つて來て、この新たの空鑵を、一つ一つ嗅ぎ立てたり、前足で搔き起したりしてゐる。

「あア、今日はチュウリップがよく咲いたナ」

かう云ひながら、家の方に續く木戸口から、セルの單衣をなげやりに着た、三十歲前後に見える、顏の靑白い、中脊の男が少し眩しさうにして出て來た。それが此家の主人の片山繁雄であることは、そのうちくつろいだ樣子で、一目に知られた。彼はチュウリップの花壇に近づいて行つて、少し小腰をかがめて、とりわけ花の恰好のいい、黑みがかつた赤のチュウリップを、まるで美しい少女の面に見惚れる時のやうに、ぢつと凝視してから、その白い手を差し伸べて、彼女の頤を愛撫するやうに擡げて、その顏を傾けさせて、暫くその溺愛に耽つてゐたが、なほ、それだけでは滿足出來ない衝動に驅られたやうに、彼はその華奢な指先きで、彼女の美しい天鵞絨のやうな花瓣の感觸を樂しんだり、

あだかも彼が處女の尖つた乳をいぢる時のやうに、その杯形の花を兩手の掌で包んで見たりした。
その時、彼の後を、野良犬がすたすたと驅け抜けた。小石を投げつけた。この犬のために、折角の苗床をさんざんな目にあはされた苦い經驗のある彼は、この犬が憎くて憎くて堪らないのであつた。この一匹の犬の爲に、すつかり犬嫌ひになつた彼は、世界中の犬が無くなつてしまへばいいとさへ思ふのだつた。犬の外に彼は毛蟲をも憎んでゐた。彼が丹精して作つた苗が、うつかりすると、その毛蟲のために、その大切な芽を食はれてしまふ。やはらかな芽に吸ひ付いたやうになつて、汁液を吸つてゐるこの忌はしい蟲を見つけると、彼は堪らなくなつて、踏み殺したくなつて、その蟲が下駄の下ではぢけて、靑や黄色のねばねばした液を逆らすのを見るのが、何とも云へず痛快でもあり、地上に印したその色彩に、一種の美感をも見出すのであつた。今日もその毛蟲のついてゐるかどうかを見ようと思つて、次ぎへ次ぎへと、花壇を見て歩いてゐるうちに、彼はダリアの苗の傍らに、此間の雨に打たれて色の褪せた五六株の櫻草を見出すと、厭やな氣持して、それを他の目障りにならぬところへ移してしまひたくなつた。そんなにして度々移植することは、花のためによくない事は、十分知つてはゐるのだが、彼の氣分としては、それがどうならうとも、今日この花をここに置くことは、許し難いことであつた。彼は園藝用のシャベルが要つた。今直ぐ――。ところが、そのシャベルは、妻の手で溫室の中に藏められてゐる。そして、彼は自分でそれを取りに行く習慣を持つてゐなかつた。それで、彼はいつものやうに、大きい聲で妻を呼んだ、
「しッ！　畜生ッ！」と彼は思はず叫んで、この氣分の攪亂者を、五六歩追ひかけた。
「よし子さん……來て下さい、用があるんだよ、早く早く」その時既に、よし子はこちらに出て來るところであつた。彼女は花畠に出る度に自分を呼ぶ良人の習癖に慣れてゐた。花畠の方へと出て來た彼女は、脊の高い、肉附の豐かな、押出しのいい女であつた。

眼が大きくて、その頬の線が顎にかけて豊かに張つてゐるので、何處か外國人の好みさうなタイプの女に見えた。

「なんですの？」とゆつくりした聲で云つて、彼女はそこから良人の方を見た。

「御覧、今日咲いたチュウリップはすばらしいよ、黒みがかつた赤なんだ、僕はこの色を見ると堪らないね、まるでプロヴアンスあたりの生娘のやうだよ」

「さうね……」とよし子は云つた。

この手ごたへのない返事に、片山は物足りなくつて、もつと自分の氣持を語らずにはゐられなかつた、彼は赤いチュウリップのところへ戻りながら云つた、

「あんたこの花を見ると、どんな感じがするえ？　僕はねえ、何だかかう甘い顫へるやうな感覺が、僕のからだに傳つて來て、僕のからだ中の血がこの花にむかつて、飛び付いて行かうとする欲望を持つんだ、だから僕はこの花をぢつと見てゐると、輕い眩暈を感じて、恐ろしくさへなつてくる……」

「いけないわね、昨夜徹夜なすつたからですわ」とよし子が云つた。

「わからないナ……あんたは鈍感だから……」と片山は一寸寂しさうな顔をして默つたが、

「さうだ、さうだ、僕はあのシヤベルを取って貰ひたいんだつたよ、直ぐ取つて來て下さい」と云つた。

「どうなさるの？」

「なにね、あの櫻草がみつともないから、他へやつさまふんだ、ナニ、枯れたつていい、あんまりいい花ぢやないからナ、醜いものをその儘にしとくと、氣にさはつて仕樣がないんだ」

「まだそんなにみつともないやうに見えませんけどね……」

かう云ひながら、よし子はシヤベルを取りに、溫室の方へ足をはこんだ。その時、木戸口から、ゴム毬のやうに、

一人の男の兒が飛び出して來て、
「ママさん、僕も來ちやつたのよ」と云つて、よし子の袖をつかまへた。年は五つ位で、臑をすつかりむき出しにした白い小兒服を着てゐる。
「勇、パパさんの方へおいで、玲ちやんはどうしたの？」と片山が云つた時、バタバタと女の兒が、やはり同じ方から驅け出して來て、これは直ぐ彼のところに來て、その肩に飛び付いた。七つ位で、父親に似て、細面の纖細な神經質な顏立で、何處かひよわさうに見える。髮をゆさゆささせながら、父の顏をさしのぞいて、はしやいだ聲で、
「ねえ、パパさん、今あたしは勇ちやんと通りから驅けて歸つて來ちやつたのよ、あたし留子小母さんと一緒に、上野へ行きたいわ、お隣のお孃さん達が今上野へ行つたんですもの、あたし行きたいのよ、上野の動物園へ……ねえ、やつて頂戴な、ねえ、やつて頂戴な、あたしパパさんにお賴みするわ」
「ああ、いいだらう、そのうちママさんとパパさんとが連れてつたげる」
「だつても、今日、留子小母さんとあたし行きたくて行きたくて行きたくて……」
から云つて、彼女はパパの耳を引張つたり、頰つぺたに自分の手を持つて行つたりして、キャッキャッと笑つた。
「玲ちやん、そんなにふざけるといけませんよ」と、シャベルを持つてこちらに來たよし子は、男の兒に袖をつかまれて、歩きにくさうにしながら云つた。
片山はシャベルを妻の手から受取ると、もとのところへ引返して、櫻草を掘り起した。そして、それを塵芥溜に近いところの空地に持つて行つて、投げ出した。そして彼はシャベルをよし子に渡して、櫻草が彼女の手で植ゑられるのを眺めながら、
「あ、これで氣分がせいせいしたよ……」ところで、ダリアにもつと肥料をやつとかなくちやいけないね、去年はも

う少しで花の咲くところを、嵐にやられて、ひどい目にあつたね、今年こそよく咲かせようね」

こんな風に云つて、彼はダリアの苗の方に歩いて行くので、よし子も子供達も、その方について行つた。

この親子四人の睦まじさうな樣子を、親しげな眼付で眺めながら、一人の靑年が、こちらにやつて來て、少し離れたところから聲をかけた、

「先生、花壇が大分よくなりましたね」

「いや、どうも行屆かなくてね……」と片山は振返つて彼を見て、一寸頭を下げた、

「でも、チュウリップがすばらしくいい花を持ちましたよ」

から云つて、彼はぢつとその靑年の顏色を注意深く覗やりながら云つた、

「君、大分元氣ですね、もうすつかりいいやうぢやありませんか？」

「ええ、おほよそ癒つたやうです、それに今日はこんなにいいお天氣ですからねえ……先生はお出かけかと思ひましたよ」

「こんな日は、僕は、外光が强すぎるので、かへつてのぼせてね——」

から云つて、彼はその靑年を誘つて、もう一度チュウリップのところに引返して、彼の自慢の花を見せてから、よし子の方を振返つて、云つた、

「よし子さん、僕もう歸るよ、咽喉が渴いたから、何か飮みたいんだ……さあ並木君、あちらへ行きませう」

片山は先きに立つて、花畠を出た。並木はよし子と一寸言葉を交してから、その後に續いた。

二人は木戸から右に廻つて、花の咲いてゐる躑躅や、若葉の楓のずつと植ゑ込まれた住宅の方の庭を、洋館の方へ向つて、母屋の三室ぶつ通しの廣い緣側の眞中どころにある踏石のところに立つた。

「オイ、水を持つて來てくれ」と片山は云つた。
「お手をお洗ひになるの？」とそこの部屋の中から、女の聲がした。
「ああ、僕、土いぢりをしたんですよ、松に水を持つてくるように云つて下さい」
「まあ！……あたしが持つて行きますわ」
暫くして、障子をあけて、顏の淺黑い、すらりとした腰つきの若い女が、水の一杯入つた洗面器を持つて來て、緣側の端しに置いた。そして續いて石鹼とタオルをも持つて來た。「並木さん、あなたもお洗ひになるの？」と彼女は訊いた。
「いや、僕はお手傳ひしなかつたから」と並木は二重瞼のやはらかな眼で彼女を見ながら云つた。
「それぢやここからお上りなさいな」
「君、お上りなさい」と片山も云つた、「留子さん、すぐシトロンかサイダアを拔く用意をして下さい」と云つて、彼は洗面器の中の靑く靜脈の浮いた自分の手に眼を注ぎながら、石鹼を溶いて、その泡を搔き立てた。
留子が並木を八疊へ案內して行つた後で、片山は手を拭いて、緣側に上つて、緣側傳ひに便所の方に行かうとすると、その一番端しにある三疊の部屋の中で、急に赤ん坊の泣く聲と、それをあやす女の聲がした。
彼はふと思ひ付いたやうに、その部屋の障子をあけた。そこには、彼の次女の、去年の暮に生れたばかりの、まだひよわい房子を、メリンスの蒲團の上に寢かして、その傍にすわつてゐた丸顏の、何處かひどく窶れの見える若い女が、彼の聲に眼を上げた。
「房子は泣き蟲だね、また泣いてるのか」かう云つて、彼は房子を抱き上げた女に云つた、
「節子さんも、房子を抱いて出てくるがいい、みんなでお茶にするから……」

「ええ、有難うございます」とその女が云つた。
「よし子が今こつちへ來るから、房子を渡すといいでせう」と云つて、彼はそこを通り過ぎた。
彼はこんなに、今日は誰れにでも優しい聲をかけたい氣分であつた。そして、彼のこの氣分には、相當の理由があつた。彼のところには、今日、もうすぐに、一人の若い婦人が訪ねて來ることになつてゐるので、彼は今朝からそれを心待ちにしてゐるのであつた。

二

片山が八疊に入ると、部屋の眞中の大きい紫檀の机を間にして、並木と留子とがすわつて、話してゐるので、
「何の話？」と片山が訊いた。
「何ね、留子さんの芝居の話を聞いてゐるんです、留子さんはなかなか芝居通ですから」「まあ、さう云へばさうだが……」と片山は云つて、稍やからかひ氣味に、留子が目白の女子大學に在學中から、どんな工面してでも、芝居には毎月行つて、今ぢや樂屋から入る位に、その道の人と附合つてゐるのだと云つた。
「アラ、いやですよ、そんな事はありませんわ、ただね、學校の同級生に、ひどく吉右衞門びゐきの人がありましてね、わたしもそれにかぶれちやつたんですわ」
「とにかく、留子さんの劇論なんかくだらないさ、みんな聞き噛りなんだから」と片山が頭から壓へ付けるやうに云つた、「そんな事より、シトロンかサイダアを拔いて貰ひたいナ」
「あ、さうでしたわ、でも、シトロンよりか麥酒でも持つて來てはどう？」
「さあ、……君飲みますか？」

「いや、僕はいいんです」と並木は云つた。留子が立ち去つた後で、片山は机の上にあつた卷煙草の箱を引き寄せながら、
「この頃、君の仕事の方はうまく行つてゐるんですか？」と云つた。
「ええ、矢張り面白くない事が多いんですが、今の場合ですから、我慢してゐるんです」と並木は陰氣な聲になつて云つた。
「まあ、我慢するんですね……とにかく君はいいさ、細君がしつかりしてゐて、働くんだから……」
「それもさうですが……」と云ひさして、並木は一寸厭やな顏をした、「だが、いつまでも家內を働かしたくないのでしてね」
　こんな風な話をしてゐるところへ、留子がシトロンを持つて入つて來た。
「何か食べるものを欲しいナ」
「なにを！」
「よし子さんに訊いてみて下さい、まだ花壇にゐるのかしら」
　そのところへ、バタバタと男の兒が庭に驅け込んで來て、緣先に飛上るやうにして云つた、
「パパさん、僕にもシトロン頂戴」
「あア、あげるよ、だが、手や足を留子小母さんに洗つてお貰ひ」と片山は云つた。
「さあ、坊ちやん、洗つてあげませう」と留子が立上つた。
「僕、これで洗ひたいの」と男の兒は云つて、先刻片山が手を洗つた儘になつてゐた、石鹸の泡の一杯に立つてゐる洗面器の中に、手を突込んで、ばちやばちやさせた。

やがて、よし子が玲子を連れてそこに來た。

「まあ、厭やですよ、勇ちやん、そんなきたない水をばちやばちやさせては」

「坊ちやん、小母さんがいい水で洗つたげるわ」と留子が云つて、その洗面器を取り上げた。

「さうしてお貰ひ、玲ちやんは母さんと一緒にお勝手で洗ひませう」

このよし子の聲を聞いて、八疊の部屋から片山が出て來て云つた、

「ねえ、よし子さん、餅菓子を買はせにやりなさい、そして何か果物の鑵詰でも開いて吳れないか」

「ええ、さうしますわ」

「ねえ、パパさん、僕に櫻んぼを買つて頂戴」と男の兒は緣側に腰かけて、足をばたばたさせながら云つた。

「ねえ、ママさん、玲ちやんにはドロップ買つて頂戴な、あたしドロップが大變好きなのよ」と玲子の方は、母親にねだりながら、むかうへ行つた。

片山が部屋に入つて、暫く並木と話してゐると、女中の松が入つて來て云つた、

「旦那樣、重田さんといふ方がおいでになりました」

「さう……ではね、今日はここへお通しするがいい」と片山は云つて、並木の方を見た、「君には多分はじめてでせう一寸面白い婦人でね……」

その片山の聲の調子で、並木は片山がまた新しい興味の對象を見出してゐるのを感じて、また騷ぎが起らなければいいがと思つた。やがて、その女の來客は入つて來た。

上京したこの女學生上りの娘に見える、丸顏の、鼻の薄手なために一寸平たい感じのする、色の白いきめのこまかい女で、薄藤色の粗い縞のセルに、紫の絽縮緬に水玉を散らした單衣羽織を着てゐた。このみなりが、パッとこの部

屋の空氣をいろどつた。

「此間はいろいろ有難うございました」と彼女は他に相客があるからか、妙にかたくなつて挨拶した。その眼を落して自分の膝をぢつと見てゐる横顔を眺めて、片山は、今日は大分おめかしをして見せるんだナ、この間來た時より今日は美しいよと考へた。

「ここにいらつしやるのは、並木君と云ひます、君、重田兼子さんですよ」と物馴れた調子で、片山は二人を紹介した。

彼は今朝から待つてゐた此の婦人の訪問客に、この間から心持が絡まつてゐるのであつた。彼はこの女をもつと知りたい、この女の氣質、その感情の動き方、その肉體の感覺、果して處女であるかどうか、一言にして云へば、彼女の持つてゐる一切のものを究めたいと思つた。そして、女の方でもまた、自分にもつと親しくしたいと思つてゐる事を、彼は十分に悟つてゐた。彼はその點では、あだかも獵犬が獲物を嗅ぎつけるやうな天禀のセンシビリテイを持つてゐた。從つて、彼は大抵の女性に對して、格段の自信を持つてゐた。

彼が初めてこの若い女の訪問を受けたのは、この二月頃であつた。それ迄には二三度その郷里の伏見の方から手紙を貰つた事があるが、その一番あとの手紙には、帝劇の女優の試驗を受けに上京するから、その時にはお寄りするといふ事が、いかにも樂しい期待として記されてゐた。その頃、彼は友人達にも、帝劇の女優になる女が自分の處へ來るといふ事を、吹聽したものであつた。それ程彼はその事によつて、女に對する期待を高められてゐたのである。ところが、愈々その女の訪問を受けて、會つてみると、その女は、彼が描いてゐた女の容姿とは、餘りにかけ離れてゐた。

「へ、こんな女が女優になるつもりなんかい！」と、彼はその女を嘲笑してやりたい氣持になつた。その女は色は白

いが、田舍びた、くすんだみなりだつた。けれども、女の鑑識について、非常に眼の肥えてゐる事を自慢にしてゐる彼には、その女の獨得の美點も直ぐに分つた。どちらかと云へば大柄で、稍や猫背なのが目觸りになつたし、眼鼻立は何處か不均整で、病的な感じさへして、彼の眼から見れば、決して美人ではなかつた。然し、彼女の白い艶のいい皮膚は、見るからに柔かで、薄桃色の半襟の間からずつと下へすべつて潜んでゐる肉の感じには、何だか手を觸れずにはゐられないやうな魅惑的なものがあつた。この女は餅肌だナと彼は直ぐに思つた。それに、さしたるとりえがないにしても、彼にとつては、それが若い女で、これ迄知らなかつた女だといふ事だけで、興味は湧いたので、その折りも、そんなに無愛想にあしらつた譯ではなかつた。初めての女の來客が彼の家に來ると、口に出しては云はないが、いかにも不愉快さうな樣子になる彼の妻のよし子が、その日も同じやうに氣分をわるくした位であるから。

「此頃はどうしてゐます？」と片山はやはらかな調子で彼女に云つた。

「格別な事もせずに遊んでをりますの、國の母からは、歸つて來いと申しますけれど、歸るとまた一寸出て來られませんから、も少しゐようと思ひますの」と兼子は云つた。

「さう、それもいいですね、どうせ田舍は單調でせうからね、東京にゐて、好きな事をなさるがいいですね」

「ええ、わたくしもさう思ひますの」と兼子は氣の乘り出した聲で云つた、「此頃少し眞面目な勉强をしたいと思つてをりますの、英語を個人敎授して下さる方はありませんでせうかしら？」

「さあ、誰れかないかナ……」と片山は云つて、不圖、並木の方を見た、「君一つ敎へてあげてくれませんか？」

「僕ですか」と並木は一寸苦笑して、二人の顏を見た、「僕は駄目ですよ、それに忙しくつて……僕よりもつといい人があるんでせう」

「君の友人でも誰れかないかね？」

「ない事もないでせうが……」と並木は云つて、不圖、友人の塚本進吉が頭に上つて來たが、片山の性格をよく知つてゐる彼は、正直に塚本か誰かを推薦するの愚は敢てしなかつた。

「先生に敎へていただいた方がいいでせう」と並木は呟くやうに云つた。

「さうだナ、僕がしてもいいが、それなら佛蘭西語の方にしたらどうです、フレンチの方が英語よりも、女の人にはいいですよ、僕、ひまひまに敎へてあげられない事もないが……」と片山はうなづいてゐる兼子の顏をぢつと見ながら云つた、そして急に思ひ付いたやうに、「ア、さうだ、僕のところで、週に二回位、フレンチの會をする事にしよう、佛蘭西語の夕とか云ふ事にしてね……」

丁度その時、留子がお茶を持つて入つて來た。彼女は旣に兼子が二度目に來た時から、親しく話をしてゐる間柄であつた。馴れ馴れしく聲をかけて、彼女は兼子の傍らにすわつて、その羽織の染めのいいのを賞めたりした。「ねえ、留子さん、いい事があるんだよ」と片山が云つた。

「何なんですの？」

「佛蘭西語の夕といふ會を家でするんだ、あなたも少しフレンチを勉强して、いい本を讀めば、今のやうに芝居の話に夢中になるやうな事もなくなるだらうからね」

「それは結構な事ですわ、わたしこれでも勉强するのは厭やぢやないんですよ」と留子は輕く云つて、彼女も矢張り、それを片山のいつもの座興と看て取つたやうに笑つてゐた。

「その會をやると、玲子も一緒に、今のうちから佛蘭西語に馴らせられるから丁度いい、語學は幼い時に習はせる程いいからナ……」と片山は樂しさうに云つた。

その玲子が、襖のところにやつて來て、はにかんだやうな小聲で云つた、

「ねえパパさん、玲ちやんそこへ行きたいのよ、行つてもよくつて？……」

「ア、いらつしやい」

「玲ちやん、ここへいらつしやいな」と留子が呼んだ。玲子が兼子の方にしいれしいれと眼をやりながら遣つて來て、留子の傍にすわると、

「お孃さん、おいくつ？」と兼子がこの女の兒に親しくならうとする樣子で聲をかけた。「留子さん、もう松は歸つて來てるんでせう？」と片山は注意した、「多分歸つて來てる筈だから、ここへみんなあなたが搬んで來て下さい」

「ええ、さうしますわ」と留子は氣やすく立上つて、部屋を出た。やがて、玻璃器に盛り上げられた櫻んぼだのゝ立派な菓子器に入つたチョコレエトの銀や、ドロップのいろんな形をしたのなどが、紫檀の机の上に並べられた。それに續いて、林檎も出たし、餅菓子も出た。櫻んぼを頰ばりながら、勇も出て來て、父の傍にすわつた。

「留子さん、一つ珈琲を入れて下さい、そして、よし子さんにここへ來るように云つて下さい」

「ええ、さうしますわ」と云つて、留子は易々として立上つて部屋を出た。

「さあ、みんな好きなものから食べませう……それから玲ちやん、一寸お父さんの御用しておくれネ」

「あア、してよ」

「洋館のお二階へ行つてね、父さんの書き物卓の上にあるベルモットの瓶を持つて來て頂戴な」

玲子ははしやいで、バタバタと出て行つた。

これが此の家特有の「お茶」の時間であつた。この「お茶」は、大抵、午後三時頃催されたが、然し毎日きまつてと云ふ譯ではなかつた。それは主人の片山自身が一番氣に入つた客のある時に限られてゐて、客によつては、子供や子供の世話をしてゐる節子などは呼ばれない事もあつた。

それだけに、今日は子供達が喜んでゐるのであつた。

片山繁雄は、いつも「美しい生活」とか、「アーチフィシャルな生活」とか云ふ事を始終口にする男であつた。彼に云はせると、日本人が今のやうに體格がわるくて、醜いのは、その長い間の不自然な、禁慾的な生活のお蔭なのであつた。衣食住に亙つて、ミゼラブルな貧窮に甘んじてゐた結果なのであつた。そして、そんな程度の低い醜い生活に滿足してゐるのは、要するに日本人が馬鹿だからだと彼は思つてゐた。だから、彼は高い、美しいレファインされた生活をしようとするものは、少くとも、食物だけでも豐富にしなくちやならない、それでなければ、生活の意義はないのだ、今のやうな日本人の遣り方は、人生に對して最も不忠實なもので、自分自身を餘りに虐待しすぎてゐるのだ、そんな空虛な生活の中からは、決していい文化は生れて來ない、と云ふやうな事を、彼はいつも云つてゐる。

こんな考へからして、彼は食物にかけては隨分贅澤であつた。それは全く濫費といふ名で呼んでいい位であつた。從つて、その月々の牛肉店の拂ひ、鑵詰屋への拂ひ、八百屋への拂ひなどは、夥しい金高に上つた。そのため、妻のよし子は月末になるとつけを持つて來る出入の商人達に、そのことわりを云ふのに一苦勞しなければならなかつた。

けれども、この家の內情を飮み込んでゐる彼等は、よし子から待つてくれるやうにと云はれると、强つてと云ふものはなかつた。その月々の支拂はわるくとも、盆と暮とには、手の切れるやうな新しい紙幣を揃へて突出してくれる事を、彼等はよく知つてゐたからである。

「何しろあのお家は、金持の息子さんの家だから、信用貸をしても大丈夫だ」と、この界隈の商人達は云ひ合つてゐた。

三

「玲ちやん、どうも有難う」と片山は、娘の手から、ベルモットの細長い瓶を受取つて、「コップ……」と留子の顏を見て云つた。留子が立上つて部屋を出ようとすると、眼をくるくるさせてゐた玲子も立上つて、

「あたし、ママさんを呼んで來るわ」と云つて、一緒にそこを出た。

やがて、玲子と一緒に、よし子が入つて來た。彼女がこんなに直ぐに出て來なかつたのは、いツときお化粧をしてゐたためであると云ふ事が、誰にも直ぐに分つた。いつどんな時でも、朝起きて髮をゆつたり、化粧をしたりするのに、小一時もかかるのが彼女の常であつたが、とりわけ良人が興味を有つてゐる若い女の客が來た時には、おほまかな性質の彼女が、妙に神經質になつて、出來るだけ念入りに色艶よく化粧するのである。

「またお邪魔にあがりました」

「よくいらつしやいました」

かうして挨拶をすまして、よし子は今日の兼子の扮裝が、これ迄よりも派手なのをぢつと見て、そして良人の樣子をちらと見た。

「ねえ、よし子さん、これから家で週二回程、佛蘭西語を僕が敎へようと思ふんだがね、そして、玲子を今のうちから佛蘭西語に馴れさせるのがいいと僕思ふよ、それに、兼子さんだの、留子さんだの、あなただの節子さんだの、みなもつと勉强したがいいんだものね、人間勉强しないと馬鹿になるばつかりだよ」と云つて、片山は、化粧したために、先刻裏の花畠で見た妻とは別人のやうにみづみづしく見えるよし子を、まじまじと見て、やはりおまへの方が美しいよと云ひたげな眼付で、

「ねえ、いいでせう?」と云つた。

「ええ……よございますわ」とよし子は、かうした思ひ付が、玲子のためと云ふよりも、もつと違つた目的から出て

ゐる事は、よく知つてゐたので、いい氣持はしないのだが、そんな事には馴れてゐるので、顏に表(あら)はさないで受け流した。

留子がコップを持つて來て、皆の前に並べてしまふと、それをぢつと見てゐた片山が、

「玲ちやん、節子小母さんも呼んでいらつしやい、赤ちやんが起きてたやうだから……」と云つた。

「あア、呼んで來(く)るわ」

「節子小母さんにも時たまうまいものを食べさせてあげなくちや、たださへ色艶(いろつや)のわるい人が益々青くなつて、營養不良になつてしまふと可哀相だからナ」

かう云つて、彼は云ひ過ぎたと思つて、口を噤んだ。そして、少し調子を變へて云つた、

『ねえ、よし子さん、何かうまいものはないかね、こんなものだけぢや、うまいものだとは云へないよ」

「さあ、何がいいでせうね……」とよし子は輕くあしらつた。

「僕だけはこれで澤山です」と並木が云つた。彼は貧しい者に對して少しも同情のない片山の、いつも云つてゐる美的生活論を思ひ出して、おれも營養不良の仲間の一人なんだと思ひながら、少し微笑して云つた、

「僕のやうな舌の感覺の鈍いものは、どんなうまいものを食べても何にもなりませんよ、米の飯が一番うまいと思つてゐる側の人間ですから……」

「米の飯……」と片山は云つた、「然し、並木君、米といふものは、人間のからだにさういいものではないんですよ、玄米ならとにかくね、米の飯を食べてるから、日本人が體格が劣弱になつたつて事を學者が云つてゐるが、僕もさう信じるね、だから近いうちに、僕の家(うち)ぢやパン食(しよく)にしようと思つてゐる位ですよ」

「それもさうでせうが、パンだと副食物が大變ですね」

「なアに、さうでもないですよ、それに食事だけには、出來るだけ金をかけるのがいいと僕は思ふね」
「それもさうでせうね……」と並木はあつさりとすました。
「ねえ、ママさん、赤ちやんがボカーンとおめめをあけてたわよ」と玲子が歸つて來て云つた、「そして、今ちよつと笑つたわよ……すぐ來るつて……」
彼女のためにコップを取りに行つた留子と一緒に、嬰兒を抱いた節子が少し遠慮しながら入つて來た。そして、よし子に嬰兒を渡した。
「さあ、節子さん、これはあなたのよ」と留子がそのコップにベルモットをついで云つた。
「ええ、有難うございます」と節子は云つて、まづ兼子に挨拶をして、その後で並木に云つた、「御身體はいかがですか、ほんとに御無沙汰してすみません、政子さんはどうしてゐらつしやいますの」
「ええ、貧乏ひまなしで、いつもよく働いてゐますよ」と並木は云つた。
みんな顔が揃つて、思ひ思ひに好きなものを食べたり、談笑したりしはじめると、ひどく機嫌のいい片山は、こんな時のおきまりの、その場にゐない知人達の棚下しをやり出した。誰それは橋の下の泥龜みたいだとか、誰それの歩きつきは、お小用のしたくなつた七面鳥みたいだとか、誰それはよくあんな乾大根のやうな細君に満足してゐられる、彼奴は馬鹿だからサだとか云ふ風である。
並木は此の片山の人のアラをその場の座興にして樂しまうとする惡癖がはじまると、片山自身に格別惡意のない事は十分に知つてゐながらも、そこにあの子供の有つてゐる一種の殘酷さと共通のものを思はせられて、嫌やな氣持にいつもさせられるのだ。一體、子供といふものは、人の外貌だとか、生活狀態の弱點だとかに、妙に敏感なもので、またそれをヅケヅケ云つて憚らぬものだが、片山にもその傾向が强かつた。そして、この家に出入してゐる青年達の

中には、そんな時に片山に調子を合せて、益々さういふ事を云はせるやうに仕向けたり、自分も云つたりする者も多かつたが、並木には、さうした某々のやうな卑しい眞似が出來なかつた、また、したくもなかつた。彼は片山が調子に乘つて、奇拔な比喩を新しく持ち出す度に、苦笑して、眼を伏せた。そして、そんな時彼はいつも、自分はこの缺席裁判では、何と云はれてゐるのだらうと、心の中で考へずにはゐられないのだ。

「骨董と云へば、家にもいい骨董品があるよ」と片山は誰かを骨董品に比喩した後で云ひ出した、「僕は節子さんの穿いてゐる下駄は、古物展覽會に出したら、確かに一等を取るに違ひないと思ふね」

「わたくしの下駄でございますか？」と節子は云つて少し暗い顏をした。

「あア、あんたの下駄は確かに價値があるよ、あんなに低くなるまで穿けると云ふ事を、下駄のために證明してやつてゐるものね」

これは少しきびしいと思つた並木が、その場を繕ふやうに云つた、

「僕等も下駄は穿けるところまで穿くと云ふ方ですよ」

「然しねえ君、そんなにちびた下駄を穿いてゐるのは、ケチ臭くつて厭やなもんですよ、殊に女にとつちや下駄つてものは、どうでもいいもんぢやないですよ、どんな美しい足の女でも、汚ない下駄なんか穿いてゐると、折角の美人が臺なしになつちまふ、女といふものは、下駄とか足袋とか半襟とか云ふやうなこまかいところにも、極くデリケエトであつて欲しいナ、ただ用を足しさへすりやいいと云ふだけなら、殺風景極まるぢやないでせうかね」

「それはさうですがね」と並木は云つて、うつむいてゐる節子の方を氣の毒さうに見た。もともと節子は、彼の妻の政子の知合ひで、この家の子供の世話に來たのも、政子の紹介からであつた。彼自身聞いた譯ではないが、いろいろと不幸な女で、これまでに結婚した事もある女で、上京してからは、職業婦人になつて、あれこれと苦勞して、生活

に難儀してゐるのを、政子が同情して、丁度その頃この片山の家で、赤ん坊が生れて、人手が無くて弱つて、誰か子供の世話をしてくれる女の人はないかと、片山に賴まれたのを幸ひ、節子に勸めてみると、彼女も長い間の孤獨と不安定とに疲れ切つてゐたので、ぢつと家にゐられると云ふだけでもいいからと云つて、進んで來る事になつたのであつた。そして、その時の片山の條件は、女中もゐる事だしするから、餘暇に十分勉强の時間を與へるし、家人同樣に待遇する代り、報酬は出せないと云ふ事であつた。それで片山は、節子が小遣ひだけは、國許から貰ふか、蓄へがあるかして持つてゐるものと思ひ込んでゐるやうであつた。

「わたくしはほんとに構はずやでいけませんわ」と節子が云つた。

「そんな事はどうでもいいんですけれど……」とよし子が節子の感情をやはらげるやうに云つた。

「さあ、みんなで一つ鬪球をしよう、留子さん、一つ鬪球盤を出していらつしやい」と片山は座が白けたので、氣分を變換しようとした。

「兼子さん、あんた鬪球をなさるでせうね？」

「いえ、よく存じませんの」と兼子がてれたやうに云つた。

「ナニ、ぢき覺えますよ、家ではよし子が非常に强いんですよ、玲子も相當やれるんです、並木君も弱い方ぢやなかつたね」

「いや、僕はもう久しくやりませんから、駄目です、それに遊び事には、だんだん不向きになるやうです」

「そんな事はないね、さあ、一つやりませう」

留子の持ち出した鬪球盤の上で、玲子がパチリと珠を彈いた。勇も負けないで彈いた。

「いけませんよ、もうほんとに遣るんだから」と片山は云つて、盤の上の整理をした。

この鬪球遊びは、片山の家では、大抵の來客の時に持ち出されてゐるものであつた。そして、夜などは、一時二時近くまでも、遊び耽る事が多かつた。夜晝の區別もないかうした遊戲と、ほしいままな美食との中にすごされる片山の不規則な生活は、彼の健康を奪つてゐた、それは彼の靑白い、滑かな、妙にすさんだ顏色に現れてゐる。それに彼がこの怠惰な生活を支へるには、詩人としてかなり名聲を馳せてゐる彼自身の得てゐる詩の稿料や、選料や、某少女雜誌の顧問としての謝禮などの報酬は、あまりに僅かなものであつた。彼自身の事情から、別居してゐる彼の父のところから、盆と暮とに取つて來る金なしには、やつて行けない派手な生活なのだ。

彼の父は、かなり名の知れた銀行家として、かなりの資產を擁してゐる人で、宏壯な、屋敷門の邸宅を麴町の方に構へてゐた。それで、その長子である片山繁雄も、本來ならば、その邸宅の若主人として、父の相談相手ともなつてゐるべき筈であつた。また實際、彼はさうした父の後繼者として、親類一同からも信賴されてゐたのだし、父の意志通り慶應の理財科を卒業して直ぐ、そちらの方へ眞直に行つてゐたなら、今頃は少壯の實業家として、朝も晚も自動車といふ身分であるべきだつた。ところが、彼はすべてのものの豫期に反して、すつかり別の方面に出てしまつたのである。彼の父に云はせれば、墮落が、彼自身に云はせれば、自覺が、彼をそんな路へと導いたのであつた。

その當時、三田の方では、文學熱が盛んになり出して、一時廢止されてゐた文科が復興されて、その機關の文學雜誌さへ發刊されると云ふ風で、理財科の學生の中にさへ、さうした氣運が旺盛になつて來た。彼もその影響を受けて、佛蘭西の象徵派を模倣した詩を作つたり、音樂を聞いて廻つたり、繪の展覽會や、新しいキネマの封切などと、流行を追ひかけてゐるうちに、次第に學校の方の成績がわるくなつた。かうなつてみると、實業なんか大嫌ひになつて、詩人として世に立たうと思ふやうになつて、そして、いつそ文科に轉じようと考へるやうになつた。そんな間に、彼は盛んに詩を發表した。そして、その詩の評判はよかつた。批評家は、その感覺の新鮮な事と、態度の自由で囚はれ

ない事とを擧げて、彼の自信を一層煽り立てた。

かうした轉機の前後から、彼には年上、年下、さまざまの女の友人が出來た。そして最後に、彼は音樂會の方に通してゐる友人の紹介で、一人の若い婦人と知合ひになつた。そして、父親のないその婦人の家へ遊びに行つてゐるうちに、彼はその婦人よりも、家で母親の手許にゐる、まだ子供上りのあどけない樣子をしたその妹の方に心を惹かれるやうになつた。そして、彼はその家に遊びに行く毎に、だんだんその妹のよし子に接近して行つた。

彼に云はせれば、母親にその意があつたのである、兎に角、見て見ないやうな態度を取つて、彼が行くと、下にも置かぬやうなもてなしをする母親であつたので、彼は自分の家同樣の氣で入り浸りになつて、その家から學校に通ふ事も多かつた。この頃が、彼とよし子との一生忘れられない樂しい時代であつた。まだ十八といふ若さで、姙娠の身となつたよし子は、世間の體裁をつくるため、その遠緣のものが住んでゐる仙臺の方に一時身を隱して、そこで身二つになる時を待つた。

やがて、男の兒が生れたといふ知らせがあつた。彼はその男の兒が、どんなに見たかつたか知れない。けれども、この結婚の承諾は、彼の父によつて峻拒されてしまつた。こんな風になると、同情する友人も出て來て、いろいろな奔走もしてくれたが、父も母も、頑として受けつけなかつたばかりでなく、反つてその娘の母を腹黑いと云つて、金で片を付けてもいいから手を切つてしまへ、若しそれが出來なければ勘當すると迄云つた。

「勘當！　古臭い言葉だナ」と繁雄は一種の反感と侮蔑とを、その親達に投げつけた。そして全然親の家へは歸らずに、下宿生活を始めた。金だけは矢張り親の家から來たので、結局この方が氣樂だと思つた彼は、よし子が仙臺から歸つて來ると、世田ケ谷に一軒の家を借りて、そこで新しい生活を始めた。こんな事情で、彼の妻となつたよし子は、良人の實家へは、一步といへども踏入ることを許されなかつた。そして、長男が學齡に達して、この兒は兎に角大切

な家の相續人だから、こちらで敎育すると云つて、祖父の方に引取られるやうになつた頃から、次第に和解して來た。今でも、自分ひとりで舅の方を訪ねて行くといふ事が殆んどなかつた。時たまやつて來る良人の妹なんかの口を通してみても、自分がいかに輕蔑されてゐるかを知らなければならなかつたからだ。「貧乏人の娘」「大切な息子を墮落させた女」として一家の憎惡の的になつてゐる事を考へると、彼女は自分さへ世に亡いものになれば、良人も自分の子供も、幸福になるに違ひないと、自分に呟く事があつた。

はじめよし子は、良人はただ自分だけのものであると信じてゐた。ところが、長女の玲子が生れた頃から、單純な何も知らなかつた彼女にも、良人の持つてゐる祕密が、はつきりと分つてくるやうになつた。彼女には良人が自分と結婚する以前に、もう既に關係してゐた女もあつたし、自分と一緒に暮すやうになつてからも、自分に知らせないで愛した若い女が、かなりあるやうに思はれ出した。誰も彼女にその事を云つてくれるものはなかつた。が、彼が有名になるにつれて、彼を慕つて訪ねて來る若い女が多くなつて、その女達がみんな彼に心を傾けてゐるやうなのが、彼女には苦しい負擔になり出した。そして、彼女はその女達を通して、自分の良人が、いかに若い女達の上に、一種の魔力を有つてゐるかを知らされた。彼女に對しては、何處迄も優しくしてくれる彼の半面に、そんな恐しいものがあると云ふ事は、彼女としては信じられないやうな氣がするのであつたが、この發見のために、彼女は自分を見捨てられまいとする努力から、自分の容貌の美に心を專らにせずにはゐられなかつた。

いろいろな思ひ出の中でも、今でも彼女の心の痛みになつてゐるのは、まだ世田ケ谷にゐた時に起つた事件である。その女は年とつた良人を持つてゐた、ほつそりとした美人で、女でも見惚れるやうな水際立つた人であつた。隣同士だつたので、行つたり來たりしてゐるうちに、その女が、自分よりも良人の方にずつと打ちとけて來た。時によつては、良人の書齋で、二人きりで話し込むやうな事があつた時には、彼女は苦しくて苦しくて堪らなかつた。突然、隣

の家の人達が、遠い遠いところに引越してしまつた、その夜の繁雄の狂氣じみた擧動が、彼女に或る事をはつきりと物語つた。だが、彼女は何も口に出しては云はなかつた。そして、一月あまりこの惱みのために、ヒステリイの狀態になつてぶらぶらした。

もう既に、彼女の一人の母親はなくなつてゐた。姉は高等師範を出た男と結婚して、家を疊んで、地方の町に行つてしまつてゐた。外に近しい親戚のない彼女は、今はもうこの廣い世界で、ただ自分を愛してくれる良人の繁雄一人が頼りの身であつた。それで彼女は、ぢつと辛抱した。ぢつと辛抱した。

然し、繁雄が彼女のこの忍耐を知らないのではなかつた。いや、誰よりも彼女のこのよるべない寂しさと、その苦しみとをよく知つてゐたのだ。それだけに一層、彼はよし子を妻として愛してゐた、自分の妻はよし子の外にはないと、彼は思つてゐた。それでは、その愛する妻を苦しめるやうな情事は、しない方がいい筈ではないか？

不幸にして、片山繁雄は、鋭敏な感覺を授けられてゐた。のみならず、彼はそれに誇りを持つてゐた。彼にとつては、視覺、聽覺、觸覺、嗅覺、味覺、すべて五官を以て觸れ得られるだけのものが、人生の總量であつた。そして、官能の力の及ぶ限り、それを享受する事の外には、彼の人生の意義を認め得なかつたのである。しかも、とりわけ彼を惹き付けたものは、女性の持つてゐる美であつた、女性の與へる官能の刺戟であつた。彼はその接觸する機會をもつた若い女性の美に對しては、これを空しく見すごす事は到底出來なかつた、いかなる犧牲を拂つても、その花の蕚（しべ）から、殘らずの甘味を吸ひ盡さずにはゐられなかつた。こんな譯で、彼は始終何かの事件を起してゐない事がなかつた。すべて官能の滿足といふものは、繰返（リピイト）によつてその價値を減ずるのが常であるから、彼は更に新しい對象にその滿足を求めるとともに、その一旦得たものに對しては、飽滿の嫌惡と責任の囘避とに終るのが常であつた。つまり、その凡ては、一時的な情事（アフアンチユウル）に過ぎなかつたのだ。彼は妻のよし子が嫉妬のために苦しむ毎に、妻は妻、愛人は愛人で別

なんだから、何も心配するやうな事はないと云ひ聞かせて、その心を落着かせようとするのであつたが、それは彼女の苦痛を輕くするだけの理由にはならなかつた。

ただ彼女は、長い年月の間には、いくらかは無關心にさせられて來た。そして、良人の興味を有つてゐる對象が、容貌やその他の點で、自分より有利でさへなければ、不快は不快として、まだ堪へて行けるやうになつた。良人の友人である人の妹である留子が、この頃のやうに、出かけて來ると、四日五日、或ひは一週間も泊つて行くと云ふやうな事にも、彼女は馴れてゐた。それに留子は、氣のいい女で、警戒を要するやうな相手ではなかつた上に、何處までも片山の家の手助けにならうと云ふ心持で何くれとなく立働いてくれるので、今では彼女の一番に心を許せる人にさへもなつてゐた。そして、子供の世話にと賴んだ節子には、片山の興味を刺戟しさうな點もなかつたのだけれど、なほ留子の口を通して、彼女に、主人の片山に何か云ひたい事や聞きたい事があつたら、主婦のよし子の口を通してするやうにと云ふ事を云ひ置いた。そして節子自身も、結局その方を氣やすく思つてゐるらしいのが、よし子には滿足であつた。

こんな狀態のところへ、新しく現れたのが、今日の女客重田兼子であつた。

四

「これはうまい！」と片山は、兼子がむかうの隅から球を彈いた時云つて、今度は自分が彈いた。

「ねえ、よし子さん、しつかりしないと負けるぜ、兼子さんは初めてださうだが、なかなかうまいんだものね」

「今のはまぐれ當りですわ」と兼子はおだてられたと思つたと見えて、一寸赧くなつて云つた、「もしこちらが勝ちますなら、留子さんのお蔭ですわ」

「ええ、ええ、勝つて見せますとも、わたしこれでおしまひになればなる程、上手になるんですもの」
「ホ、さうかね……留子さんがそんなに強いとは知らなかつたね、いつもしまひになる程、下手ぢやないか」と片山は輕く嘲つた。
この勝負が、いふ迄もなく、片山とよし子との勝に終つて、この次は、玲子と並木とが組になつてするやうにと定められたけれど、並木は疲れるのを恐れて、體よく逃げた。
「僕は勝負事するとがつかりしますから、今日だけ許して貰ひませう」
「それもさうだね、それぢや僕が兼子さんと組みませう、玲ちやんは留子さんと組むといい、しつかりしないと負けるぜ」
かうした調子で、またもう一度勝負が續けられた。今度も片山の方が勝つたので、留子がいまいましがつて、
「一度勝つて見たいわね、くやしいわ」とそれほど感情の伴はない聲で云つた。
こんな勝負事がはじまると、いつが限りといふ事のないのが、此の家の常なので、並木は歸らうと思つて、一勝負の切れ目を待つた。
「僕はもう失禮します」
かう彼が云つた時、夕飯を一緒にして歸るようにと、片山は頻りに留めた。よし子も久し振りだからと云つて引留めたけれど、また今度の事にと云つて、並木は立上つた。彼は片山の家を辭して、電車の方へと歩いて行きながら、妙に心が沈んでゐた。
彼は阿佐ヶ谷の停留所の構内に、うつむきながら入つて、切符を切らせた。そして、待合室の腰掛にかけて、電車を待つた。

「相變らずだつたナ」と彼は今見て來た片山の家庭の空氣を想ひ浮べて呟いた。そして、それが今の自分には、全く別世界としか思はれないのを意識して、なぜ今日片山の家を訪ねようなどと思ひ付いたのだらうと、自分で自分を不思議に思ひさへもした。勿論彼は、これ迄だつて、片山繁雄が、その境遇と云ひ、その生き方と云ひ、自分とはすつかり異つた種類の人間である事は十分に知つてゐたのだけれど、暫く會はないでゐたうちに、今迄二人を繋いでゐた僅かな接觸點すらも無くなつてしまつた事を、彼ははつきりと感ぜずにはゐられなかつた。彼にとつては、今日のやうに、片山の口にする言葉の殆んど一つ一つに、自分の心が反抗せずにゐられなかつた事は、これ迄なかつた經驗である。彼としても、片山の性格の愛すべき點は、十分に知つてゐた。それだからこそ、その情事のために、兎や角世間に非難されてゐる片山のために、辯護して來た事も度々であつたのだ。ところが、今はそれだけ寛大になり得られないやうな氣がした。片山の情事は兎に角として、彼の生活そのものに、これ迄のやうな意味が見出し得られなくなつた、それがひどく淺薄なものに思はれてならないのだ。

「あんなのが本當の生活である筈がない」

彼は不圖、自分の心が頻りに片山を非難してゐる事に氣が付いた。その瞬間、彼は非常に、非常に寂しい氣持がした。以前は、片山の家で、自分も愉快を感じてゐた、彼の冗談なども、喜びはしなかつたにしても、無邪氣な子供のいたづらを見てゐるやうな、晴れやかさは失ひはしなかつた。兎に角、片山の家庭の明るい空氣に惹き付けられてゐたのだ。それが最早その快活を失ひ、あの空氣に自分がそぐはなくなつた事に氣が付いた時、彼は病氣が自分の生活をも心持をも、すつかり變へてしまつた事を感ぜずにはゐられなかつた。

今の自分にとつては、人生は遊びではなく、なぐさみではなく、眞劍な勞苦であり、精進であり、試練である。それを知つたのだから、今日見たやうな片山の家庭のふわふわした遊び氣分が堪らなかつたのだ。實際、人生の事を眞

劍に考へたり、生活の苦惱を身に犇々と感じてゐるものにとつては、一言たりとも、片山の云ふやうな無責任な揶揄は口に出來るものではないと彼は思つた。

ぢつと考へ込んでゐる彼の前へ、電車が來てとまつた。乘らうと思つて、彼が眼を上げると、それは東京から下つて來た電車で、むかう側のフォオムに、どやどやと下り立つた人々は、その概ねが、勤めの退けて歸つて來た洋服の人達で、買物の包みや革の鞄をさげてゐたが、みな疲れた顏をしてゐるやうに並木には見えた。その電車が出て行くのと入れ違ひに、東京行の電車が來たので、他の乘客の後から並木も車內に入つて、端しの方に腰をかけた。

彼が代々木の自分の家に歸つて來ると、自分が出る時に鍵をかけて出た家が開かれてゐるのを見た。彼はあア歸つて來てるナと思つた。玄關から入らないで、裏口の方の庭に廻ると、そこの緣側に、白足袋がぬぎ捨ててあつた。開け放した障子の中では、妻の政子が帶をしめてゐた。彼女は良人を見ると、その眉のまるい、よく整つた顏に、ニッコリと笑ひを見せて、

「何處へ行つてらつしたのよう……」と云つた。

「片山の家へ行つてゐた」と云つて、彼は緣側に腰をかけた。

家は三間しかなかつた。庭も狹かつた。だが、日當りがいいので、庭には紫陽花だの、山吹だのが靑々と茂つてゐた。

「どんな樣子だつたこと？」と、彼と一緖に緣側にしやがんだ政子が、さしのぞくやうにして云つた。

「相變らずサ、ただね、今日は妙に嫌やな氣分にさせられちやつた」

「ぢや餘程嫌やなことがあつたのね」

「なアに、僕の氣分が變つたのサ、何で片山の家なんぞへ行く氣になつたらう、どうせ分つてゐる筈なんだにね」

「でも、あそこの家の氣分は、わたし好いと思ふわ、あの家の明るさには、何處か人を惹き付けるところがあるわ」と政子は云つた。

「あなたにはさうだらう、僕も病氣以前はこれ程でもなかつたんだがナ」と並木は云つて、一寸默つてから、「今日また若い見馴れぬ女が來てゐたよ」と云つた。

「さう……何といふ人なの？」

「さア、何といつたかナ……兼子とか云つてゐたやうだ……」

「兼子ツて云ふと……それぢや、あの女優にならうとか云つて出て來た人ぢやないこと？」

「さあ、どうだか、或ひはさうだつたかも知れんね、派手にしてゐたよ……」

「それで、よし子さんはまた心配が一つふえた譯ね……考へてみると、氣の毒な奥さんだわ」と政子は女らしい同情をした。

「それぢや今日は片山さんは御機嫌だつた譯ね」

「あア、さうなんだ」と並木は云つた、そして苦々しさうな顏をして、

「あまり機嫌がよすぎて、また例の惡口がはじまつたのさ、そしてたうとうしまひには、節子さんを眼の前に置いて、あの人の下駄が古いからと云ふので、古物展覽會で一等賞をとるとか、あんなに低くなるまで穿けるのに驚くとか、ツケツケと云ひ出したので、節子さんが昻奮してね……」

「フン……それは手きびしかつたのね、節子さんだつて、いい下駄を穿きたいにきりはないけれど、買へないんでせうものね、そんな事云ふよりか、下駄なんか片山の家でどうにかしたらいい筈だわ」

「そんな事に氣が付くやうなら、あんな思ひやりのない事は云はないよ、金が無いと云ふ事のために、人間がどんな

に苦しまなければならないかつて事は、考へてみた事もないだらうよ、萬事がいつもその通りなんだ」
「金の無いつて事が惡いんだわ、わたしなんか、明るい華かな生活の好きな點にかけちや、片山の人達に負けはしないけれど……」と政子は呟くやうに云つて、ぢつと良人の顏を見て、その眉のあたりに漂ふ暗影を見のがさなかつた、
「あの人達とわたし達とは、全く世界が違ふと云つてもいいわ」
「僕もさう思ふ、あそこの家の氣分は、僕には益々離れたものになる、妙に寂しい氣持にさせられるから、これからはあんまり行くまいと思ふ」と並木は沈んだ聲で云つた。
「それもいいのね」と政子は云つてから、臺所の方で音立ててたぎつてゐる鐵瓶をおろすために、急いで行つた。
彼女は鐵瓶を持つて來て、ココアを入れる支度をした。そして、
「今日の夕飯はお精進よ」と彼女は云つた。
「ああ、それでいいよ」
かう云つて並木は、ココアを飲んでゐる妻の健康さうな顏を見て、自分がこの女にどんなに庇護されて來たかといふ事を考へた。妻といふよりは、まるで母か姉のやうな感じがする事があつた、それが時には多少の煩はしさになるやうな事もあつたが、かうして對ひ合つてココアを飲んでゐると、何となく心が落着いて來て、なだめられるのを感じるのだ。そして、ふつと、今若しこの妻が自分になかつたら、自分はやつて行けないだらうといふやうな心持が、痛切に起つて來た。
彼と彼女とが結婚したのは、今から三年程前であつた。郷里から出て來て、外國語學校へ行つてゐたその頃の彼は、自分の泊つてゐた叔父の家の娘の珠子とは、小さい時から許嫁と云ふ程ではなかつたが、公然許されてゐるやうな未來があつた。ところが、兄と妹のやうな風に親しんで來たといふ事が、愈々になつて、妙な結果になつた。彼は珠子

に馴れて、いつとなく、他の女の方に惹かれるやうになつた。その彼の心を強く囚へた女性が、その頃駆け出しの婦人記者として敏腕と云はれてゐた政子であつた。
結婚して一年程といふものは、互ひに相手に夢をかけ合つて、それと氣も付かないですごした。ところが、二年目の春頃から、さうした生活に變化が來た。それは彼が肋膜を患ふやうになつたので、その療養のために、東京の家を疊まねばならなくなつたからである。二人は鵠沼に家を借りて、そこで一年近くの佗しい日々を送つた。その間ずつと、政子は汽車で東京の社に通つて勤めてゐた。彼はこの豫期しなかつた障害に、すつかり心を挫かれて、暗く寂しく、妻の庇護のもとに、心にもない日々を送らねばならなかつた。そして、彼はだんだんと憂鬱になり、懷疑的になつた。そして、彼もまた、かうした病人の持つひがみや、焦立たしさや、氣むづかしさやの凡てに左右された。彼はどんなに働いても疲れる事を知らない妻が憎いやうな氣持がしたり、妻に對して妙にいぢけてくる自分が憎くなつたりした。彼は自分の身體を大切に感ずれば感ずる程、妻との交渉を淡泊にしたい心持が強くなつて行つた。そして、その感情の過剰から、時々荒い線で愛を求めてくる妻の態度に重苦しい壓迫を感じて、一層の陰鬱に陥らずにはゐられなかつた。
時々、彼女が在宅の日などに、彼が机に凭れて考へ込んでゐると、彼女はぴつたりと彼に寄り添つて來て、喉を鳴らすやうな聲で云つた、
「ヨウ、何を考へてらつしやるの……ヨウあなたツてば」
「別に何も考へてはゐないよ」
「嘘よウ……また例の祕密の思ひ出だわ、ねえ、さうでせう、お珠さんの事思つてらつしやるんでせう、あなた病氣になつてから、とりわけあの方が懷しくなつてらつしやるんだわ……ええ、屹度さうよ、わたしにはよく分るわ、わ

たしと違つてお珠さんは、あんなに女らしい方ですもの、あんな方だつたら、この頃のやうなあなたには、どんなにいいでせう、あなたが思ひ出すのは當り前ですわ、わたしのやうなバルガアな職業婦人なんかと一緒になつたのが、あなたの不幸だわ」

「またそんな事を云ふ」と並木は云つて、眉を顰める。彼にはそんなに云ふ妻の心持はよく分つてゐる、珠子と自分との間柄が、ほんの淡いものであつた事は、彼女もよく知つてゐるのだから。彼にはまた、そんな時、妻の感情をなだめるには、どうしたらいいかと云ふ事もよく分つてゐる。だが、それすらも彼には煩はしかつた。默つてをればをる程、妻の方では何處迄もからんで來るので、彼は苦しくなつて、逃げるやうにして外に出る。そして、砂丘の上を一人ぶらぶらと、何處迄も何處迄も歩いて行く。疲れ切つて、反對に、今逃れて來た妻の事を、堪らなく懷しく思ふまで、海を見てゐる。

かういふ寂しい人間が、彼並木信三であつた。然し、彼の病氣がだんだん快方にむかふにつれて、彼の心も引立つて來た。二人は鵠沼を引上げて、東京に歸つて來て、この代々木に、兎に角家を持つた。そして信三は、薄給ながらも、或る雜誌社に勤めるやうになつたので、もう以前程に妻に對して苦しまなかつた。

「ねえ、マアシヤ」と彼はこの家に移つた最初の夜に、再起の喜びに包まれて、彼女を抱いて、彼女の一番好んでゐる愛稱で、彼女に呼びかけた。この愛稱は、彼女が露西亞の小說に心醉したあまり、自分から呼び出した名なのである。

「わたしのマアシヤ、これはみんなあなたのお蔭だつたね、これからは僕の番だ、僕はこれから働くぞ、一生懸命に働くんだぞ、いつ迄もマアシヤに養つて貰つてゐては、僕は苦しいからね、僕が働いて、マアシヤを少しでも樂にさせるんだ」と彼はしつかりと彼女を抱きしめて、囁いた。

「有難うよ、ほんとに有難うよ、そんなにあなたが仰しやると、マアシヤは泣けてくるわ、それはもうマアシヤは幸福なのよ、これからは二人で一緒に働くんですもの、何もかもよくなるわ、何もかもよくなつて、お金が出來たら、二人連立つて、靜かな山の溫泉へ行きませうよね、二人ともいい下駄を買つて、そして、あなたにはやりのネクタイ、わたしははやりの半襟買つて……だから働きませうね」

かう云つて、政子は彼の頭を抱へて、長い長い接吻を返した。

兎にも角にも、彼は今元氣であつた。そして、この病氣のための蹉跌から再起しようといふ決心で一杯であつた。彼は朝は早く起きて、冷水摩擦をした、運動は出來るだけした、いいと云ふ藥は、出來るだけ取寄せて飲んでゐた。

「もう一息だ」これが彼の口癖になつてゐる。

精進とは云つても、夕の食卓の上には、やはらかな菜の玉子とぢとか、煮豆とかの外に、彼女が勤めの歸りに、銀座の方で買つて來たうまい野菜の漬物もあつた。一體に政子は、こんな家庭的な事に興味も持つてゐたし、器用でもあつた。極く僅かの金で、身體の爲めになるものを調理しようといふ彼女の心遣ひは、信三にもよく分つてゐた。

二人は食卓に向つた。何かと話し合ひながら食事を終つて、お茶を飲んでゐる時、政子が云ひ出した、

「ねえ、あなた、今晩久し振りに神樂坂へわたし行つて見たいわ、あなたも一緒に行つて下さらないこと……わたし達の樂しいお買物へ！　ココアももうあと少しで無くなるし、何やかや大分缺乏品が生じたわ」

「ああ、行つてもいいね」と信三は云つた。晝間片山の家へ行つて疲れて來てゐる自分には、また外出する事がものうかつたけれど、わたし達の樂しいお買物と云つて眼を輝かした妻に對して、いやとは云へなかつた。

「さう、行つて下さるの、それぢや白ちやん、おまへお留守番をするんだよ」と云つて、彼女はいつのまにか來て自分の膝の上でゴロゴロ喉を鳴らしてゐる白い小猫の頭を輕く叩いた。そして、その小猫が立上つて、むつくりと背中

を持上げて、前足を伸ばして背伸びをしてから、彼女の手に戯れかかるのをコロッと轉がしながら云つた、

これからは、夜の散歩がだんだんによくなるわ、神樂坂もいいし、銀座もいいわ、ねえ、あなた、わたし今日銀座のショウヰンドウで、馬鹿にいい女持の時計を見付けましたわ、そりやいいッてすばらしくいいの、ぶらぶらと銀ブラして、あんなきらびやかなものを見るだけでも、ほんとにいい氣持だわ」

夫婦が揃つて東京の町へ買物に行くといふ事は、郊外生活者の大抵が好むところであるが、政子にとつても何よりも樂しいことであつた。彼女は生れつき明るい華かなところに心を惹かれた。それで、良人の信三が寂しいところが好きで、ともすれば明るい華かな方へ背を向けて行かうとする風なのが、物足りなかつた。かうした心の方向の相違は、結婚の最初には、そんなにはつきりしたものではなかつたが、信三が病氣になつてから、だんだん際立つやうになつた。殊に、一年の間、鵠沼にゐたために、揃つて賑かな夜の町を歩きたいといふその欲望は、今の彼女には何よりも强かつた。

「でも、あなた、大丈夫?」と彼女は默つてゐる信三の顔をぢつと見て、一寸氣遣はしさうに云つた、「疲れてらつしやるんでせう? さうだとやめてもいいの」

「ナニ、行くさ、氣分はよくなつたからね」と信三はつとめて云つた。

二人は外出の支度をした。そして、信三が出たあとで、政子は猫を家の中にしめ込んで、露地口のおかみさんに一寸聲をかけてから、信三に追ひ付いて、ひそひそと話しながら、夕闇の中を停車場の方へと、手を取らんばかりにして歩いて行つた。

五

二人は牛込驛で電車を降りた。そして、プラットフォオムから外へと出ると、そこの兩側に立つてゐる櫻の並木は、もうすつかり靑葉となつて、枝々の大きな層が、夜の闇に濃い陰影をつらねてゐた。橋を渡つて、外濠に沿うて歩きながら、左の方を見ると、そこの岸には、五六の短艇の影が漂つてゐて、その水の上遙かに、むかうの外濠線の電車軌道の灯が、燈影を長く搖曳させてゐる。坂の下へ出ると、急にあたりが明るくなつて、兩側の店々のつらなりは、宛かも燈火をもつて綴られてゐるやうで、かなり急な勾配の遙かな坂の上あたりは、その火光のために、ポッと霞んだやうに見える。つい近くを歩いてゐる人影は、白つぽいセルの單衣、袷、羽織着などの區別が出來るのに、遠景では、人々の影は宛かも影繪のやうになつて、それらの影が上つては消え、上つては消えするのと反對に、こちらへ下りて來る影が、だんだん近づくとともに、眼鼻立まではつきりしてくる。さうした人混みの中に入つて行くと、溫かい都會の息吹に觸れるやうな氣がしてくる。

「人間はかうしてみんな明るい賑かなところに集つて來るんだね」と信三がむかうの方をぢつと眺めながら云つた。

「だつて、自分の家にぼんやりしてたつてつまらないんですものね」と政子は自分の事を云はれたやうに云つた。やがて坂の中頃まで來ると、政子は信三の袖を引いて云つた、

「ねえ、一寸御覽なさいな」

それは小間物店であつた。このあたりに澤山ゐる藝妓などを顧客としてゐるその賑かな店の飾り窓には、意氣な蟇口とか、手袋とか、莨入とか云つたものが、手巧よく並べられてゐた。政子はその前にぢつと立止まつて、あれがいいとか、これがいいとか云つて、信三の注意を引廻した。

「ねえ、あなた、今度サラリイが貰へたら、わたし、あなたにあの革の蟇口を買つてあげたいわ、ほんとにいい形ですもの」

「だつて、金もないくせに、蟇口だけ立派でもつまらないよ」

「そんな事云ふもんぢやないわ」

政子はかう云つて、一寸睨むやうに信三を見た。彼女はそれを彼に買つてやりたいといふ自分の心持を察しないやうな信三の打消し方が氣に入らなかつた。けれども、今夜は彼女もそんな事にはちつともこだはらなかつた。

「さあ行きませう、まづずつと坂の上まで上りきつてしまつて、何か飲むのよ」

かうして連れ立つて、樂しさうに坂を上つて行く二人の姿に、眼を着けるやうなものもなかつた。なぜなれば、この時刻には、二人連れのかうした半分は買物、半分は散歩氣分の人達が、この町に集まる客の大部分であつたからである。

地面一杯から湧いてくるやうな快い足音のコオラス、光と陰影との落着いたカァプ、飾り窓のしつとりとした彩り、とりどりの品々の美しさなどが、何とも云へず心を豐かにした。その上、そこここにある喫茶店や、レストオランからは、匂ひのいい飲料の香りが漂うて來るし、夜店の花屋の屋臺には、眞紅な西洋の花や室咲の薔薇などが眼を惹いた。

「やはりわたし達には、銀座よりもここがいいわね」と政子は云つて、信三の方をニツコリして見た。そして、自分で先きに立つて、とある喫茶店へと入つて行つた。それは大きな菓子店で、その二階と三階とが喫茶店になつてゐて、極くあつさりした飲みものだけをこしらへてゐた。二人はその三階に上つて行つた。そして、その室の通りを見おろす事の出來る隅の卓に腰をかけて、そこにある棕梠竹などの植木鉢や、カアテンの模様などを、いい氣持で見やつた。

「ねえ、珈琲でいいわね……それとも甘いものにすること？」

「なんでもいいさ」

「ぢや甘いもの……」

こんなに云つて、女給におしるこを云ひ付けた政子の調子は浮々としてゐた。

「ほんとにいい氣持だこと、かうしてゐると、わたし達がまるで巴里なぞで貧しく暮してゐる畫家や作曲家ででもあるやうだわ、思ひがけなく繪が賣れたり、作曲が認められたりして、やや得意になりかけた氣持で、夫婦が連立つて、暗い屋根裏の部屋を出て、巴里のモンマルトルあたりで珈琲でも飲む氣分がわかるやうな氣がするわ」

「そんな事を空想したりすると、一層みじめだな、自分達のことが……」

「だつて、それはいいぢやありませんか、どうせ空想するなら、いい事を空想した方がいいわ」

「あんたは幸福だよ」と云つて、信三は眼を伏せた。

「では、あなた幸福でないの、え？ 幸福でないの？」と政子はその信三の眼をのぞき込むやうにして云つた、が、直ぐまた調子を落して、「もつとも、あなたは醉へない人ですわね、身體のせゐもあるんでせうし……」と云つた。

「醉へないと云ふより、醉つてゐる餘裕がないと云ふのが本當なんだ、だが、そんな事はどうでもいいんだ」

女給がおしるこを持つて來たので、二人は話をやめて、箸を取つた。

室には一つ二つしか椅子のあきがない程、客が入つてゐたが、大抵、何かを飲んでしまふと、直ぐ下りて行つて、始終、新しい客と入れ變つてゐた。

「それから何を食べる？」と政子がおしるこを食べてしまつて云つた。

「僕はもうこれでいいんだ」

「さう……ぢやわたし、も一つおかはりをするわ」

かう云つて、政子は女給におかはりを云つた。

丁度その時、長髮にした色の白い一人の靑年が上つて來て、あいた椅子を探しながらこちらにやつて來たが、ふと

この二人を見ると、つかつかと傍に寄つて行つて聲をかけた、
「いいとこで見付けましたよ」
「まあ、長島さんだわ」と政子が云つた、その聲ははずんでゐた、「あんた、おひとり？」
「ええ、ひとりよ」と長島は女の云ふやうにやはらかに云つて、信三に話しかけた、
「この間は遲くまで失禮しましたね」
「いや……」と信三は答へたが、彼の顔にも親しさうな喜びの色が現れた。
「ねえ、長島さん、あんた何をお飲みになる？　冷たい珈琲？　さもなくば、曹達水？　苺？」
「さあ、君達のお好み次第にきめて下さい」
「さう、ぢやミルク苺を三つ」と彼女はおしるこを持つて來た女給に註文した。
　信三と長島とが、話をはじめると、政子は時々滿足が二倍になつたやうな氣分をたたへた眼をあげては、良人から長島へ、長島から良人の方へと視線を轉じながら、おしるこを食べてしまふと、はしやいだ調子で、自分も話の仲間に入つた。
　やがて女給がミルク苺を持つて來ると、彼女はそれを二人の前に置きながら、長島に向つて、
「此間お話しの繪はもう完成なすつたこと？」と優しく訊いた。
「いいえ、まだなの……どうもむづかしくつて困つてゐるんです、でも、待つてて下さい、今にすばらしいものをこさへて見せます、今度の畫題は、僕大いに自信があるんです、今度の繪で、僕は確かにヴァン・ゴッホのあの灼くやうな強烈な精神を捉へ得たと確信してゐますよ、畫けば畫くほど、今度の繪は畫き甲斐のあるやうな氣がするのでね……こんな愉快な事、僕今迄なかつたんですよ、力は十分に溢れ出るんです……むづかしいけれど、屹度完成すると、す

ばらしいものになりますよ」と彼は熱のある調子で、ぢつと政子の顔を凝視めながら話し續けた。
「まあ、いいわね、ぢや屹度すばらしいものが出來るわよ」と政子は高調子にそれを受けて云つて、長島の顔を愉しさうに見てゐる。
政子は信三の友人の中では、この長島が一番えらいと思つてゐた。今はまだあまり名のない畫家であるけれど、屹度えらくなる人に違ひないと思つてゐた。殊に、彼女には、長島の自由な、若々しい感激的な態度が氣に入つてゐた。彼はどんな時でも、自分の仕事について語らぬ事はなく、仕事の話をする時に、過度の感激と昂奮とを示さない事はなかつた。そして、それが彼女には、何だか新しい時代の先觸れのやうにさへ思はれて、一種崇拜に近い氣持をさへ持たずにはゐられなかつた。少くとも、彼に會つて話してゐる時は、何だか自分も元氣を鼓舞されるやうで、彼女には樂しかつた。今も彼女は、波々とたたへた乳の中に、紅く濡れ輝いてゐる苺を匙ですりつぶしながら、ぢつと耳傾けて長島の話を聞いてゐると、心が浮上つて行くやうであつた。けれども、それが彼女の良人の信三に與へる効果はまた別種のものであつた。彼は長島のさうした昂奮には、一種の壓迫を感じて、時によると、微かに反感のやうなものが起る事さへあつた。
信三は二人の樣子を眺めながら、自分は默つて煙草をふかしてゐたが、
「さあ、出ようか」と政子をうながすやうに云つた。
「ええ……少し歩きたくなつたわ」と彼女は云つて、長島が立つたあとから、自分も席を立つて、會計をすまして、二人の男たちのあとについて、長い階段を下りた。
通りは今が人出の盛りであつた。その中を縫ひながら、三人は歩いて行つた。そして、電車通りまで行くと、信三は一寸政子の方に目くばせして、電車道について左の方に入つて行つた。政子は彼がいつも神樂坂に來た時立寄る習

慣になつてゐる、ついその六七軒目にある古本屋に行くのだと知つた。
古本屋にも、客が四五人入つて、棚の本を思ひ思ひに拔いて見たり、もとへ戻したりしながら、好きな本を漁つてゐた。信三がその店の中に入つて行くと、顔馴染の主人が、
「大分暫くでございますね、近頃はどちらで……」と聲をかけた。
「ええ、今は代々木の方にゐます」と信三は答へながら、むかうの棚の方を見ると、そこで本を開いて見てゐた靑年が、こちらへ振向いた。その男は細長い、瘦せた、また極く若い二十二三の男で、その振向いた顔は、蒼白く、神經質だつた。
「塚本君ぢやないか」と信三は呼びかけた。
「あ、並木君」と云つて、彼はその手に持つてゐる本を元のところにかへした。
「何かいい本があるかね？」と信三が訊いた。
「欲しい本がないんでね」
「何を探してゐるんだね」
「ナニ、一寸獨逸の本が見付かつたもんだから」と云ひながら、塚本はこちらに出て來た。
「どうもお氣の毒樣でした、つい一足ちがひで賣れてしまつたもんですから」と人の善ささうな主人は、信三に云つてから、塚本の方に目を轉じて、「では、只今の分は今お持になりますか？」と訊いた。
「ええ、頂きませう」と塚本は云つた。
店さきに立つて、雜誌を見てゐた政子と長島とが入つて來て、塚本に聲をかけた。塚本は一寸きまりわるさうに赧くなりながら、その時主人が出した一圓札を受取つて、そのまま袂に入れた。

「何か本をお賣りになつて？」と政子が訊いた。
「ええ、見付けて置いた本を買はうと思つて、代りの本を持つて來たら、もう賣れてゐたんです」
「相變らず哲學の本かね？」と長島が横合ひから口を出した。
「ええ」と塚本はわざと長島の顏を見ないで答へた。彼は長島とは、並木の家で二三度落合つた事があるきりで、別に親しみを感じてゐないので、相手の言葉の中から、輕い侮蔑しか見出し得なかつた。
信三はむかうの棚の本を一通り見てゐたが、別に買ひたい本も無かつたと見えて、直ぐこちらへ出て來た。それから、四人は連立つて、その店を出た。
「長島さんは、まだ何處かへお寄りになるの？」と政子が長島に訊いた。
「いや、僕ももう歸りませう、今日は友人を訪ねたが、あいにく留守だつたので、そこらをぶらついてゐたんです、もう御一緒に歸りませう」
「それぢや丁度いいわね」と政子は云つて、二人は並んでもと來た賑かな通りの方へと歩き出した。その後から、信三と塚本とは並んで歩いて行つた。
「その後、身體の工合は？」と塚本が卒然訊いた。
「有難う、近頃は元氣は元氣ですがね……」と信三は云つてから一寸調子を變へて、「然し、塚本君はいいね、一人身だし、勉强はしてゐるし……」と云つた。
「僕が……」と塚本は怪訝さうに信三の顏を見た。
「さう……僕は今日妙に一人身の幸福つて事を考へたんですよ、やはり本當の自由は一人ゐる事です、家庭なんか持つてゐると、後へ後へと、つまらない事に心を勞しなくちやならなくて、煩はしくてね……」

「さうですかね、僕にはさうは思へないんだけれど……」と塚本は前の方を揃つて何か話しながら歩いてゐる政子と長島との後姿をぢつと眺めながら云つた、「僕は誰でも結婚して、自分の家といふものを持つた方が落着が出來て、仕事にも張合ひが出來て來るんぢやないかといふ氣がしてゐるんですが……」
「それがうまく行けばいいんだけれど、空想と實際とは、すつかり違つてくるんだから……ナニね、僕だつて結婚そのものを全然否定する氣はないんだけれど、それぞれに自分の考を持つた男と女とが、一緒に暮して行くといふ事は、實にむづかしい……そして、それが理想通りに行つてゐる家庭といふものは、世の中にさうないんだからな……」
から云つた信三の語調には、何だか病人らしい弱々しい嗟嘆の響があつた。二人がむかうを見ると、政子が振返つて、ニツコリと笑つて、立止つて待つてゐた。長島も笑顏をしてこちらを見てゐた。その二人のところまで行つた時、政子が、
「わたし一寸買物して來ますからね、みんなここで待つてて下さいな」と云つて、直ぐその近くにあつた洋食料品店に入つて行つたので、三人はそこに立止つて、數限りなく行つたり來たりしてゐる人達を眺めてゐた。
「これからはだんだん人出が多くなつて行くだらうね」と長島が云つた。
「暫く來ない間に、この通りはすつかり立派になつたやうだね、あんまり賑かだから、何だか大晦日の晩のやうな氣持がする」と信三が云つた。
「大晦日の晩は面白い、確かにお祭りの晩ではなささうだね」と長島が云つた。そんな話をしてゐるところへ、政子が買物の包みを二つ三つかかへて歸つて來て、信三の顏を見て云つた、
「これからどうしませう、も一度何處かへ寄らうぢやありませんか、ねえあなた」
「あ、いいだらう」と信三はその云ひなりになると云つたやうに返辭をして、促すやうに長島と塚本との顏を見た。

「折角ですが、僕はこれで失敬しませう」と塚本が云ひ出した。
「なアぜ、塚本さん……いいぢやありませんか、お附合ひなさいな」
「ええ、然し……」
「ぢや君、兎に角坂の下まで歩いて行かう」と信三がやはらかに誘つた。
「そんなに御自分の孤獨を主張なさらなくたつていいでせう、行きませうよ」と政子がもう一度誘つた。それで塚本もそれに從つて、四人はまたもや人混みの中を、ゆつくりした足取りで縫ひながら、明るい灯に全身を照らし出されながら、何處かにもう一度入らうと云つた政子の言葉を實現しないで、坂下の濠の方へと下りて行つた。
「近いうち君來たまへ、ゆつくり話さうぢやありませんか、今度の日曜ぐらゐに」と信三が塚本が別れようとする時に、何か物足りなさゝうに云つた。
「ええ、行きませう、今度の日曜なら丁度いいから」と塚本は答へた。
三人が停車場の方へ行くのを、一寸見送つてから、塚本はうつむき加減に、町の片側を、元來た道へとのぼつて行つた。

六

塚本の下宿は喜久井町にあつた。その通りに向いた門を入ると、兩方の家と家との間の狹い石疊を、四五間も入つて行つた突當りに入口があつて、その上には、おきまりの止宿人の名前が揭げ出してあつて、その中程に塚本進吉の名もあつた。四五足の汚ない下駄の踏み散らされた土間に入つて行つて、彼が自分の下駄を、右手に造りつけてある下駄箱の中に入れてゐると、左手の四疊半から、障子越しに、

ゐた。

「おかへんなさい……」とおかみさんが聲をかけた。それを聞き流しながら、彼はつきあたりの廣い階段を、二階の方へと上つて行つた。階段の傍らの部屋では、友人が三四人も集つてゐると見えて、何だか頻りに聲高に論じ合つてゐた。

塚本の部屋は、二階の古廊下をその端しまで行つたところにある六疊の、一つ手前の四疊半であつた。立てつけのわるい障子をあけて、彼がその部屋に入ると、天井の眞中からぶら下つた十燭の電燈の光が、ガランとした部屋を照らしてゐた。窓際に据ゑられた恰好のわるい、妙に平たい古机の上には、部厚な辭典と、黄色い假綴の小さな洋書が四五册積まれてゐる傍らに、赤インキや靑インキの壺と一緒に置かれた目醒時計は、コチコチと鳴りながら、電燈に鈍い光を反射してゐた。

彼は默然とその机の前にすわつて、四角な木造りの火鉢を引き寄せて、埋めておいた火を搔き起した。そして、袂から取出したゴオルデン・バットを机の上に置いて、その一本を引出して火をつけた。そして、煙草を吸ひながら、彼は机の上にある假綴本の一册を取上げて、そのこまかい活字の一面に、赤や靑やのアンダアラインを引いたり、細字の書入れのしてある頁をバラバラとめくりながら、暫くその本のあちらこちらを見てゐたが、間もなくまたそれを机の上に投げ出して、後の方を振返つて見た。そこには、壁に寄せて、今ではあまり見かけない和本用の古い本箱と、下に二つ抽斗のついた頑丈造りの黑い本箱とが並べられてゐた。黑い本箱の上には、竹の三段の本立が乘つかつてゐて、それには背中のすり切れた假綴の大判の洋書だの、古雜誌だのが入つてゐた。下の二つの本箱には、も少し書物らしい書物もあるにはあつたが、新しい金文字のキラキラするやうなのは、一册も見當らなかつた。もつとも、時によると、さうした新刊の書物の入れられてゐる事もないではなかつたが、それはいつか影をかくしてしまふのであつた。今夜も彼はさうした少し金目の本を二三册持出して、あの神樂坂の古本屋へ行つて、その店で見付けておいた洋書と

交換して貰ふつもりであつたところが、行つてみると、その本がもう賣れてしまつてゐたので、ひどく失望してしまつた。

彼にとつては、今、書物の外に、自分を慰めてくれるものを有たなかつた。謂はば彼は書物によつて生き、書物の上にその未來の希望の一切をかけてゐたのだ。殊に、今日手に入れ損ねた本は、彼の研究上に最も必要な、この一年近くも探してゐて、やつと見付けた本だつたので、彼はその本を買つて歸つて、今夜は遲くまで讀み耽らうと樂しみにしてゐたのであつた。それだけに失望も甚しく、非常に寂しい不如意な氣持がして、並木夫婦や長島に別れて、下宿に歸つては來たものの、なんにも手につかず、何をしていいか分らないのだつた。

こんな佗しい氣持をまぎらすために、彼は本箱の前に行つて、その藏書を入れ替へはじめた。彼は氣が屈したり、退屈だつたりする時には、いつもかうして本をいぢる癖があつた。時によると、すつかりの本を疊の上にずらりと並べて見て、一々そのにほひを嗅いで見たり、表紙を撫でて見たり、ところどころ頁をあけて讀んで見たりしてゐるうちに、つい引き入れられて、その本の列の中に寢轉びながら、いつまでもいつまでも、それに讀み耽る事などもあつた。が、今はいつものやうに、二つの本箱の幾つかの棚から、一册また一册と、出しては入れ、入れては出し、右にやり左にやり、上におき下におきして、その多くもあらぬ書物を、丹念に整理し直すのであつた。そして、こんなにしてゐる時が、彼には一番幸福な時であつた。彼はいろんな苦しい事をみんな忘れてしまつて、それを購つた時の思出と愛着との籠つた一つ一つを、自分の愛好の度合によつて分けてみたり、讀んだのと讀まないのとで分けてみたり、また、その本の種類項目によつて分けてみたりした。

そして、その種類の中では、哲學の本が一番多かつた。

黑い本箱の二段近くは、机の上にあるのと同じ黃色な假綴本――それは獨逸のレクラム文庫であつた――で占めて

ゐて、洋書ではこれが一番多く、およそ四五十册はあつたが、それも大抵は哲學書で、カント、プラトオン、スピノザ、デカルト、フイヒテ、シヨオペンハウエルなどをはじめとして、シユエグラアの哲學史まで、めぼしいものは揃つてゐた。

このレクラム本は、薄い一册分のが十錢、厚いのでもたかだか五十錢位で買へるので、彼がまだ本郷にゐた頃には、夜など散歩した歸りに、屹度一册二册づつ、南江堂や南山堂、或ひは古本屋を漁つては、買ひ集めたものであつた。それにレクラムに入つてゐない新しいもの、クノオ・フイツシヤアや、オイケンなどの著書もあるし、ニイチエの全集の端本もあつた。なほ、それらの英譯書や、ホオム・ユニヴアシテイなどの簡單な解說書もあつたし、それに日本のものでは、姉崎博士のシヨオペンハウエル三卷、大西博士の西洋哲學史二卷、波多野博士のスピノザ研究、西田博士の善の研究、グリインの倫理學や、ヘフデイングの近世哲學史の譯本などをはじめ、博文館の帝國百科全書中の哲學關係のものだとか、夜店で二三十錢で買へるやうな古い出版の哲學書がいろいろあつた。これらの外に、文學書も多少あつたし、一向哲學とは緣の遠い雜書類もあつた。そして、これが塚本進吉の心を囚へてはなさぬ、彼の眷愛の書庫(ビブリオテエク)であつた。

そして、この書庫の主人は、何者であつたらう?　何處の大學の學生であらうか?　文科大學の哲學科の學生であるか、それとも、他の私立大學の文科の生徒でもあるのだらうか?　いや、彼はこの幾年を、どんなにそれになりたいと思つた事であらう!　それは大學生の何不自由のない豐かな境遇が羨ましいからではなかつた、ただ大學生だけが、自由に哲學の門戶を出入できるやうに思はれたからである。彼もあの名高い大學の赤門を、こはごはくぐつて見た、その正門から裏門へと拔けるとき、赤煉瓦の嚴めしい敎室の方を仰ぎ見ながら、長いことイんでゐた事もあつた、インキ壺とノオトとをさげて通る角帽の大學生の姿を、羨望の眼をもつて目送した事もあつた。が、彼等は彼のみす

ぼらしい姿をかへりみだにしなかつた、大學の門戸は、この貧乏な、中等學校の課程さへ踏まない一靑年の前には、かたく閉鎖されてゐたのだ。若し哲學的教養が、大學の講堂でなくては修め得られないものとすれば、彼の境遇は絶望の外はないものであつた。そこで彼は、そんな筈はないと叫ばずにはゐられなかつた、所謂學問は學校でなくては受けられないかも知れないが、眞理は大學の中にだけ閉ぢ籠められてゐるものではない筈だ、自分の求めてゐるのはその眞理なのだ、眞理に到る道は、大學に納める月謝ではなくつて、熱烈な探求心と、倦まない思索とだ。要するに、學生達は近道しようとしてゐるのだ、それを自分の手で摑まうとしないで、先生の手から授けて貰はうとしてゐるのだ、だが自分は、どんなに遠い嶮しい道でも恐れないで自分の手でそれを摑んでやらう、それには何より原書をしつかり讀まねばならぬ、大學教授がどんなにえらくても、つまるところ原書を澤山讀んだ人に過ぎないではないか。さう思つて、彼はますます語學の勉强に懸命になつて行つた。

けれども彼は、その原書も今は容易に買へない身分であつた。レクラムのやうなテイパア・エデイシヨンを除けば、一冊の哲學概論を買ふにも、古本屋を漁つたり、前から用意をしたりして、非常な苦心が要つた。それだけこの貧弱な書庫は、彼にとつて貴重なものであつたのだ。彼はこんなに書物をいぢりながら、時々、今の時分とはすつかり違つた境遇を夢想してゐる事があつた。彼が知つてゐる二三の人達のやうな自由な、何の妨げもない、學者の研究生活を――必要の書物は殘らず丸善から買ふ事が出來て、書齋の壁一杯にとりつけたその書棚には、金文字背革の書物がぎつしり並んでゐて、あらゆる辭書や參考書が完備してゐて、その中で悠々としてその研究に耽つてゐる年少の哲學者の姿を――想像すると、暫らく自分を忘れて、夢想の幸福にひたるのだが、すぐそのあとから、今の自分の不如意な境遇が立ちかへつてくると、今度はその夢想の姿に對して、嫉ましく思はずにはゐられないのであつた。

彼れ塚本進吉は、東北の生れであつた。福島の市から四里あまり北に離れた、半田山の麓に近い一村落の農家の次

男であつた。彼の家は相當の田地を所有してはゐるが、その代りその田地を耕やさなければ食つて行けない程度の農家であつた。彼は小さい時から學問が好きで、學校の成績はいつも優等で、ずつと級長で通してゐたので、學年を通じての優等生に縣廳から褒美が下つた時には、祖父が附き添うて、郡役所へ出頭して、金蒔繪の硯箱を貰つた程であつた。それで、村の小學校を終へると、彼は師範學校に入らうと思つて、父に無斷で入學の手續きをして、その入學試驗の準備をはじめた。ところが愈々試驗といふ間際になつて、事情を知つた父親に嚴しく叱られて、たうとう思ひ止まらねばならなかつた。

「おまへは百姓の子だ、鍬を持つてさへをりや食ふに困る事はねえのに、教員になつてどうするといふだ、とんでもない不心得な奴だ」と云つて、父は彼をいましめた。そして、それからの彼は父や兄の後について、鍬をかついで田圃に出なければならなかつた。彼は一人の百姓として、田の草とりをした、稻刈りや麥打ちもした、晝過ぎには山に草刈にも行つたし、馬を牽いて柴刈りにも行つた。けれども、そんな間にも、彼は懷から書物を離した事はなかつた。同窓の友達が、中學校や師範學校やその他の專門學校に入つて、夏休みなどに歸省して來る制服の姿を見るとかうしてひとり田舍に朽ちて行く自分といふものが、つくづく情けなく思はれた。が、たとへ百姓はしてゐても、自分は學校へ行つてゐる友達に負けはしないと思つた。勉强しよう、ひとりで勉强しよう、さう自分を勵まして、彼は草の上に腰をおろして、土にまみれた手で懷の本を取出して開くのだつた。その本も、小說や文學書類ではなくつて、いつもむづかしい倫理や哲學の本に定つてゐた。

はじめ彼は、小學校を出た時には、ただ何がなしに、上の學校へ行けなくても、獨りで勉强してえらくならうとと云ふ單純な考へから講義錄などを見てゐた事もあつたが、彼の知識慾と好學心との底には、單にさうした皮相な功名心とは全く別に、もつと根强い要求が潜んでゐた。一體、彼は極く小さな子供の時から、物事をグリユウベルンする

傾向が強かつた。自分の見たり聞いたりする事、自分の周圍に起るいろんな出來事について、一々その意味を考へて見ずにはゐられなかつた。

何事でも、その根源を究めなければ氣がすまなかつた。なぜこれはかうであるか、それは何の意味を持つか、その事がいつも心の問題となるのだつた。そして、さういふ事を獨りで考へて行くにつれて、彼は學校で敎へられる先生の言葉に、疑ひを挾まずにはゐられなかつた。先生の言葉と實際の社會とは餘りに相違してゐたし、また、それ程抵觸しないやうな事でも、一々實際に當つて見ると、どう考へていいか分らなくなる事が多かつたのだ。

はじめてさうした大きな疑問にぶつつかつたのは、彼がまだ十二三の時分であつた。彼の生ひ立つた家庭は、あまり平和な家庭ではなくつて、兩親の間には、始終いざこざが多かつたが、その日も、父と母とは何かの事から喧嘩をして、さんざん云ひ爭つたあげく、母は六つ位の小さい弟を背負つて、實家に歸つてしまつた。それはまだうそ寒い初春の夕方であつたが、彼はその時背戸で泣いて母に別れた時の何とも云へない悲痛な氣持を、今でも忘れる事が出來ない。その翌日は學校へ行くには行つたけれども、母の事で心が一杯になつてゐて、先生の言葉などは少しも耳に入らなかつた。そして、たうとう堪らなくなつて、晝食をすますと直ぐ學校を驅け出して、村から一里程離れてゐる母の里へ行つて見た。母は思つたより元氣で、その晩泊りたさうにしてゐた彼に、明日は學校があるからお歸りよと云つたので、本意なかつたけれど、夕方家へ歸らうとすると、弟が背戸まで追つかけて來て、「兄さん、兄さん！」と云つて、泣いて引きとめたので、彼はまだ薄氷をたたへてゐた母の里の苗代のそばで、弟を抱いてどんなに泣いたか知れない。その後も、かうして母が里に歸つて行つた事は、一度や二度ではなかつた。そして、その度びに、彼は小さな胸を痛めて、だんだん憂鬱になり、だんだん物思ひに耽るやうになつた。それとともに、學校で敎へられる孝といふものに疑ひをもつて、孝とは何ぞやといふ問題が、頭にこびりついてしまつた。それで或時、校長先生にむかつて、

「若しお父さんとお母さんとが離縁になつた時には、その子供はどつちについた方がいいのでありますか、お父さんにつくのが孝でありますか、お母さんにつくのが孝でありますか」といふ質問を出した事があつた。すると先生は、暫く考へてゐたが、

「それはおれにも分らない、然し、おまへは何故そんな事を考へてゐるんだ」と云つた。校長先生ならば、何でも答へてくれると思つてゐた彼は、その時非常に失望した。そして、やつぱり自分で考へるより外はないのだと思つた。かうして獨りで考へてゐるうちに、いろんな疑問が後から後からと湧いて來た。人間が生きてゐるのは、一體何の爲めだらうとか、人間は互ひに仲善くしなければならぬといふのに、互ひに爭つたり憎み合つたりしてゐるのは何故だらうとかいふ疑問が絶えず起つて來た。それで少しむづかしい本が讀めるやうになると、まづ差當つての問題になつてゐる孝の研究を始めようと思つて、倫理の本を讀みはじめた。母にねだつて僅かばかりの小遣ひを貰つては、四里あまりある福島市まで歩いて行つて、倫理學の本をいろいろ買つて來て讀んだ。勿論、何の豫備知識もない一少年の頭に、さうした高遠な學術書の意味がはつきり分る筈はなかつた。が、小學校を出て、百姓をしながら、根氣よく讀んでゐるうちに、倫理の根本の解決は哲學に俟たねばならぬといふ事が分つたので、それから哲學を研究しようと思ひ立つた。哲學は單に倫理ばかりでなく、あらゆる學問の根本となるもので、同時にあらゆる學問の總和でもあるといふ事が分つて見ると、彼がこれまで抱いて來たあらゆる疑問――人生の意義、人生の一切の祕密を明かにする鍵が見出されたやうな氣がして、彼は勇み立たずにはゐられなかつた。そこで、哲學といふ文字のついたものなら何でも讀まうといふ熱烈さで、いろいろな哲學書を一册づつ福島の本屋から買つて來ては、繰返し繰返し讀み耽つた。だが、それは愈々むづかしく、愈々分らないものであつた。彼は田に水引きをしながら、畦に腰を下ろして、姉崎博士のハルトマンの宗教哲學を讀んだ時に、「範疇」だとか、「規範」だとか、その他無數のかうした術語の直譯語がさつぱり分

らないで、たうとう悲しくなつて泣き出してしまつた事さへあつた。

たうとう彼は決心をした、思ひ切つて東京へ出よう、こんなにして獨りで本を讀んでゐたつて、哲學の研究は出來やしない、東京へ出て、學校へ入るか、いい師につくかして、本式の勉强を始めよう、そしてウンと語學をやつて、原書が讀めるやうにならなければ駄目だと思つた。それに百姓の仕事は益々苦しくなるばかりで、堪へられなかつたので、こんな田舍で無意義な勞働をしてゐるより、美しい都會で充實した生活をした方が、どんなに意味があるか知れないといふ考へも强くなつたので、丁度彼が二十歳になつた春、この決心を父に告げて、その許しを乞うた。それを聞くと大變立腹して、はじめは絕對に不賛成を唱へた父も、彼の決心の牢乎として飜へせないのを見ると、つひに我を折つて、母方の叔父の口利きで、最初の一年間だけ、生活を保證するだけの仕送りをする都合にまで、うまく運びがついたので、彼は自分に約束されてゐた少許の財産を抛つて、東京へ出る事になり、大きな風呂敷包を二つ三つ持つて、兄や弟に送られて、村から一里ほどある桑折の停車場から、上野行の汽車に乘つた。

東京では、母の從弟に當る人が、或る官省の官吏をしてゐて、駒込の方に住んでゐたので、ひとまづそこに落着く事になつた。彼が並木信三と知合つたのは、丁度その時の事であつた。遠藤といふその母の從弟は、彼の上京の目的を訊いて、哲學の勉强に出たと話された時は、一寸見當のつかないやうな顏をしたが、差當つて英語か獨逸語を勉强したいといふ彼の志望を聞くと、それならこのお隣の甥といふのが、英語をやつてゐる人だから、丁度いいから行つていろいろ話をお聞きなさいと云ふ事で、さきに細君が行つて話してくれたので、隣の家へ行つて並木に會つた。當時並木はまだ外國語學校の學生で、英語科であつたが、第二外國語として獨逸語も少しやつてゐたので、まづ獨逸語をやつて見たいといふ進吉の志望を聞くと、そんならア・ベ・チェの手はどきだけしてあげませうと云つて、發音と初步の文法とを敎へてくれる事になつた。

並木はその頃二十四五であつたが、心持はずつと老成してゐた。彼は進吉に對して、單に語學を敎へたばかりでなく、いろいろな東京の事情を親切に云つて聞かせた。そして或る時などは、

「君、哲學では飯が食へないかも知れないよ、さうでもいいかね」などと云つた事もあつた。

彼が並木をたづねて行くと、玄關へはそこの家の娘が出て來た。色の白い內氣さうな娘であつたが、

「よくお精が出ますのね」などとお愛想を云つたりした。彼女は並木の傍についてゐる事が多くつて、二人はまるで兄妹のやうに仲が善いやうに見えた。けれども、或る時、進吉が並木の部屋へ入つて行つた時に、その娘が眼を泣きはらした顏をして、默つて部屋を出て行つたのを見た時は、不思議な氣がした。その日、並木は何のつぎ穗もなく、

「人間てものは、いつも一緒にゐると、どんな可愛い娘でも、自分の妻にする氣がなくなるものだね」といふやうな事を云つた。それが彼の今の細君との問題の起りかけてゐた時だつたのだ。そのうちに進吉は並木と相談して、神田の夜學に通ふ事になり、それと同時に遠藤の家からも出て、その近所に間借をして、自炊生活をはじめた。かうして一年間もみつしり獨逸語を勉强したなら、研究の基礎も出來、將來自活する時の便宜ともなると思つたので、傍目も振らず文法の複習や單語の暗記に沒頭した。そしてその間にも、相變らず並木とは往來をして、何かにつけて世話をして貰ふ事が多かつた。彼が今のやうに、兎に角、曲りなりにも、自活の出來るやうになつたのも、並木の配慮に負ふところが多いのだ。並木はそれから間もなく叔父の家を出て、今の政子と結婚をして、澁谷の方に家庭を持つて、自分も或る雜誌社に勤める事になつたが、その後も進吉は時々彼を訪ねる事を忘れなかつた。また、進吉をその社の方の關係で知つた大學方面の二三の哲學專攻の人達のところに連れて行つてくれたのも並木であつたし、彼が不幸にして結婚の二年目に病氣になつて、鵠沼に轉地をしなければならなかつた時に、その雜誌社の後任に彼を推薦してくれたのも並木であつた。もつとも、その仕事は彼には長く勤まらなくて、今は田邊といふ學者のところへ、その助手

といつた風に通つてゐるのだつた。が、それも並木のお蔭と云つてよかつた。それだけに、進吉にとつては並木の病氣が氣の毒であつたし、彼が今年になつて、鵠沼から歸つた時には、どんなに喜びもし、力強くも思つたか知れない。

「それにしても、今日並木君は妙に寂しい顔をしてゐたな……やつぱりまだ身體が十分恢復してゐないからぢやなからうか……それとも……」と彼は呟いて、ふと或る事を思ひ浮べて、その友人にとつての厭やな豫感を振り棄てようとでもするやうに首を振つた。

「今度の日曜にゆつくり訪ねて話をしよう……並木君の云ふやうに、性格の違ふ夫婦といふものは、或ひはむづかしいものかも知れない」

塚本は何となく暗鬱な氣持になつて、急いで取り散らした書物を片付けて、寢支度にとりかかつた。

七

翌朝、進吉が眠を醒ました時には、もう例の下宿屋特有の騷々しさが始まつてゐた。と云ふよりは、この騷々しさによつて、彼はいつも呼び醒まされるのであつた。

何十枚といふ澤山の雨戸を、一枚々々容赦なくぶツつけては、四五枚宛つも一度に軋ませながら、ガタビシと繰りあける音がひとしきり續いて、パツと部屋が明るくなると、もうそこら中が掻き立てたやうに騷々しくなつてくる。廊下をパタパタと草履を引きずるやうにして、女中が走り廻る、と思ふと、二人が立止つて、何か頻りにお喋りをはしめる。

「花ちやん、御飯まだ出來ないかね」と隣りの六疊の部屋から、大きな聲で女中を呼ぶ。

「大層お急ぎね、今日は何處へいらつしやるの?」とその女中が彼の部屋の前を通りながら云つて、隣の部屋の障子をガラリとあけて、中へ入つて行つて、

「まあ驚いた、まだ蒲團の中なんだよ、お床の中から御飯の催促なんかあきれるわよ、やアな人……」と云ふと、

「そんなに云ふない、今起きるんだ」と客が云ふ、と、それに續いて、何か小聲で云つて、キヤツキヤツと無意味にはしやいで笑ふ聲がする。

進吉はぢつと天井を眺めた儘、さうした物音やつまらない會話を聞きながら、直ぐには起きなかつた。彼は朝の洗面所の混雜が嫌ひなので、大抵の客が起きてしまふ迄、床の中で、また眼をつぶつて、とりとめのない冥想に耽つてゐる。そして、朝、かうしてゐる時と、夜、眠られない時とが、彼にとつては一番貴い時間で、この時に彼は頭にひつかかつてゐる問題を考へたり、その讀んだ書物の內容を要約してみたりするのだが、さうした思索は、ともすれば詩人らしい空想に陷つてしまふ。それに氣がつくと、彼はずつと手を伸ばして、女中が差入れて行つた新聞を取り上げて、それを讀みはじめる。そのうちに、客が出かけて行つた部屋々々で、女中が朝の掃除をバタクサやり出すので、彼はやうやく起き出して、窓の外に置いてある洗面器を取つて階下へ下りて行く。

洗面所は階段の下をくぐつて、右の方へ入つた突當りにあつたが、そこにはまだ二三人、だらしのない寢卷姿で、立ちはだかつて齒を磨いたり、ばしやばしや顏を洗つたりしてゐた。顏見知りではあつても、別に挨拶をするでもなく、ジロジロと顏を見合せてゐるのが厭やなので、進吉は傍らの便所へ入つたが、出てもまだ人がゐたので、いつものやうに石鹼などはつかはないで、急いで顏を洗つて部屋に歸ると、そこには朝飯のお膳と小さなお櫃とが、無雜作に置いてあつた。その型通りの膳部を見ると、もううんざりして食慾が起らないのを、無理にお茶漬けにして、まづい若布の味噌汁を喉に通した。

十時頃、彼は下宿を出て、いつものやうに麹町上六番町にある田邊邦彰(たなべくにあき)の家へと出かけた。彼はこの春頃から、ずつとかうした田邊の仕事の助手にと通つてゐるのであつた。この仕事は主として哲學に關するものだつたので、これ迄の雜誌社やその他の下受仕事などにくらべると、割合にらくでもあり、興味もあつて、報酬もまづわるい方ではなかつた。で、この仕事をするやうになつてから、彼の藏書は著しく增えもしたし、また、田邊其人も哲學專攻の學者であつたから、その書庫から任意の書物を借りて讀む事も出來たので、彼の志望の哲學研究にとつては、極めて有利な狀態にあつた。田邊の家には、彼にとつてまだ一つ都合のいい事があつた。それは田邊の妻登美子が、極めて優しい美しい人で、彼に親切であつたからである。

東鄉坂を下りて暫くして、右に入つて少し行つたところの橫丁を入つて、奧の方へと步いて行くと、大きい邸宅の門が、三方から向ひ合つてゐる、その左側の古びた石の門の家が、田邊邦彰の家であつた。彼は門を入つて、內玄關の方のベルを押した。女中が出て來て、彼の顏を見ると、もういつもの事なので、

「お早う」と云つて、彼が上るとすぐ、下駄を揃へた。彼はいつものやうに、ひつそりとした部屋の間の廊下を、ずつとその端しまで步いて行つて、庭に面した廣い書齋に入つて行つた。十疊の間(ま)とおぼしい書齋の中は、同時に大きな書庫と云つてもよく、そこには進吉の心に對して無限の魅力を有つてゐる幾千卷といふ書物が堆積されてゐた。部屋の三方には、高い大きな書棚が幾つといふ事もなくずらりと並んでゐて、その中には、洋書の背革の金文字が、硝子障子越しに入つてくる光線に、きらびやかに浮き上つてゐたが、書物は單にその書棚ばかりではなく、入口の近くに置かれたテエブルの上にも、またこの下にも、山のやうに積み重ねてあつたし、部屋の半ばを蔽うてゐる綠色の絨氈の上にも、その堆積ははみ出してゐた。

部屋の眞ん中のやや左寄りには約半間もある紫檀の大きい机が据ゑられてゐて、その前には、白布に半ば卷かれた

紅の入つた友禪縮緬の大きい座蒲團が置かれてゐたが、そこにすわるこの書齋の主人の身邊をも、ほぼ同じ高さをもつて積まれた和洋の書物が、凹字形に取り卷くやうになつてゐた。机の上には、卓上時計が、その裝飾の金の光を靜かに放つてゐるまはりに、いろんなこまかなものが、順序正しく並んでゐた。そして、手前の正面に擴げられた大判の洋罫紙を半ば蔽ふやうにして、大形の洋書が開いた儘になつてゐた。この机のところから右に寄つて、ずつと部屋の隅の障子の近くに、彼れ進吉のために與へられた机があつた。その上には、一二臺見かけておいた校正刷が、昨日の儘になつてゐた。彼がその前にすわつて、煙草を一二本吸つてゐると女中がお茶を持つて來た。

「先生はまだやすんでゐらつしやるんですよ」と女中は彼を見て、小聲で云つた。

「何處かおわるいんぢやないんですか？」と進吉が訊いた。

「さあ、どうですか……わたしにわからないわ」とその女中は云つて、ニヤリと笑つて、出て行つた。

こんなに田邊がまだやすんでゐるといふ事は、珍らしい事ではなかつた。そして、田邊がゐなくても、彼の今日の仕事はもうきまつてゐた。それで彼はお茶を飲んでしまふと、すぐペンを手に取つたが、ペンを取りながらも、こんな時には、大抵、田邊の夫人が顏を出すのが常なので、今にあのしとやかな足音が廊下にしはしないかと、彼は何となくそれが氣がかりになつた。が、そのうち彼はすつかり仕事に沒頭してしまつた。

「塚本さん、少しお休みなさいませんか」と彼の後ろに、優しい聲がしたので、振り返つて見ると、そこには田邊の若い美しい夫人が、その手に黄色い薔薇の花を挿した一輪挿しの瓶を持つて、こちらの方に向いて、立つてゐた。

「え、有難うございます、もう直きに一きりつきますから……」と彼は云ひさして、夫人の方を見上げたが、むかうが自分の方をまともに見てゐるので、急いで眼をそらしてしまつた。

「今日は田邊が朝寢坊をしましたのよ、でも、もう起きてますから、今にまゐります」

から云つて、夫人はその黄色い薔薇の花瓶を、むかうの隅の書棚と書棚との間にある小さな飾り臺の上に置いて、進吉の傍らに來てすわつた。こんなに夫人が間近に來てすわると、女性といふものに馴れない進吉は、一寸どうしていいか分らないで、かたくなつてしまふのであつた。この夫人に對しては、一種崇拜に近いやうな敬愛と同情とを抱いてゐる彼には、こんな時に、輕く物の云へない自分を、なさけなく感ぜずにはゐられないのであつた。

「先生は何處かおわるいんぢやないんですか？」と彼は自分でもオークワアドに思ひながら、から云つて夫人を見た。

「いいえ……この頃はまづいい方なんですの、お蔭樣で……」

から云つて、夫人はその瞳の色の非常に黑い艶やかな眼付に、親しさを見せて、一寸微笑んだ。眼鼻立のよく整つた、面長なその容貌を一目見たものには、この夫人が京都に生れた人だといふ事を、いかにもと首肯するに違ひない。進吉はこの夫人を見ると、こんな古い美しい日本婦人のタイプの人は、今はもうあまり無いだらうと思はずにはゐられなかつた。そして、何處迄も淑やかで、そして從順で、忍從的なものが、この夫人の凡てであるやうに彼には思はれたのである。

「こんなにあなたが一生懸命になすつて下さるので、仕事がはかどつたと云つて、田邊が喜んでをりますの」

夫人はから云つて、それからそのほつそりとした手さきで、彼の前にある湯呑を取り上げて、立上つた。

「いやどうも……」と彼は云つて、もう何も云へなかつた。そして、その自分の口調が横柄に聞えはしなかつたかと、そればかりが氣になつて、彼はせかせかと煙草を吸ひきつて、またペンをとつた。

夫人が部屋を出て行つてから、二三十分も經つた時分、廊下に少し濁つた太い男の聲で何か夫人と話してゐる聲がした。やがて、夫人と一緒に、その背中が弓のやうに彎曲して、夫人の肩のところまでしかない男——頭がすぐその胸の上に見える、顏の靑黑い骨張つた男が、セカセカした神經的な步き方で入つて來て、ばたつとその大きい座蒲團

の上に乘つかつたと思ふと、大きな聲で、進吉の方に話しかけた、
「まあ一服としませう、塚本君」
こんな風に、田邊が進吉に聲をかけるのは、いつも朝の習慣になつてゐた。かうして、それから十分か二十分位、彼は進吉を相手にいろいろな世間話や、學問上の話をした。話好きな彼は、時とすると、仕事をさしおいて、話に半日位つぶしてしまふやうな事もあつた。
「まあいいでせう、その校正はさう急ぎはしないから、一つ話しませう」と云つて、田邊は夫人の方を見返つて、熱いお茶をと云つた。
「それがよござい ますわ」と夫人も云つて、部屋を出て行つたが、間もなく、女中が熱いお茶と、綠色の小粒の餅の入つた菓子鉢とを持つて來た。
「さあ君……これは京都の家内の實家から昨日屆いたんですが、柚の匂ひがしてなかなかうまい」と田邊は云つて、楊枝で自分が取つて、あとで進吉の方に押してやつた。
「さあどうです、この柚餅などを見ても、京都ののんびりした古典的な氣分が感じられるぢやないですか、僕もこの秋ぐらゐ家内を連れて、今度は少し逗留して、ゆつくり京都の氣分を味ひたいと思つてゐるですがね……君もいつか京都へ行つてみるといいですね、宿なんかいいところを僕が紹介してあげていいですよ、君のやうに東北に生れた人は、あの明るい、やはらかな、圓みのある風光に接しただけでも、新しい世界が開けたやうな驚異を感ずるに違ひない。我々にとつて、京都や奈良は、丁度西洋の哲學者や文學者にとつて、伊太利や希臘が持つやうな索引力と、文化史的の意義を持つてゐる。僕はそのうち京都を中心として、日本文化の發達のあとを哲學的に考察してみたいと思つてゐる……」

話はだんだん熱をもつて來て、相手を卷き込まずには置かないやうなところがあつた。その巧妙な話し振りと、やや濁つた太い聲とは、その姿を見ないものには、五尺何寸といふ屈強な體格を持つた、一見頑健な活動家を想像させるに違ひない。然し、まづ彼の姿を見たものも、この聲この話し振りを聞いた時には、いかに旺盛なヴァイタルフォースが、この肉體的の制限にも屈しないで、そのはけ口を見出さうと、彼の中にもがいてゐるのを、容易に看取するに違ひない。

その一代で何十萬といふ財産をつくつた人物を父に持つて生れた彼――田邊邦彰が、若し幸ひにして、父とおなじく五尺何寸といふ立派な健康體の持主であつたなら、彼がその父の勢望を背景として、實業界、或ひは政治界に打つて出て、敏腕家の名を博し、三十二歲といふ今の年配の許すだけの地位には進んでゐたであらう事は、彼の人物を知るものには想像されない事ではなかつた。

「ねえ塚本君、僕はこんなに哲學なんかやつてゐるから、世間の者は、世間に疎い變屈者のやうに思つてゐるらしいが、これで僕が實業界にでも打つて出たなら、親父などよりも、ずつとうまく切り廻して見せる自信を有つてゐるんだ」と、彼は時々、進吉にむかつて述懷する事があつた。進吉はじめそれを聞いた時には、思ひがけぬ事なので。それをどう考へていいか分らなかつた。田邊の病身に對する彼の同情心と、哲學者といふものに對する彼の觀念とに、それは餘りに背馳したものであつたからである。けれども、彼が田邊の性格や才能をいくらか知つてくるにつれて、それが當人の自信に値するものである事だけは、彼にも分つて來た。それと同時に、この才能と境遇との間の悲痛なコントラヂリションについて、密かに考へずにはゐられなかつた。

然し、この田邊の性格と才能とは、彼の學者としての仕事のやり口にもよく現れてゐた。ぢつと書齋の中で沈思冥想に耽つて、高遠な眞理を追求する、何とも考へず寂しく、地味なものであるべき哲學者の職分が、この田邊の場合

では、反對に、彼の生活を賑かにし、彼の存在を世間的なものにしてゐた。今の彼にとつては、哲學者は既に自己目的（ゼルフストツエ）ではなくなつてゐたのだ。彼は謂はばその書齋を街頭に持ち出す事によつて、その止むに止まれぬ內心の要求を鎭めようとしてゐたのだ。それは彼のやうな境涯の人間にとつて、外に見出し難いたつた一つの道路として役立つてゐたのだ。それでは、その道路は、何に向つての道路であつたか？

　田邊邦彰は、生れながらの佝僂者ではなかつた。彼はその生れ落ちた時には、むしろ血色のいい、健かな、美しい兒であつた。云ふまでもなく父母の寵兒でもあつたし、その俊敏な早熟な天禀は、田邊一族の誇りでもあつたのだ。ところが、その小學校の四年生の時、彼の生涯を決定したあの致命の打擊が來た。はじめは何とも知れぬ熱が出て、それからその熱がなかなか輕くならないで、學校なども休んで、醫者にかかつてゐるうちに、病氣は脊髓の方に食ひ込んで行つた。美しかつたこの子供は、そのために血色を失つて、だんだん醜くなつて行つた。大學病院に連れて行つて手當の出來るだけは手當されたが、病勢は思つたよりも惡性で、長い横臥の間に、彼の脊髓はだんだん彎曲して行つて、胸部が壓迫されはじめた。こんなに自分の身體が變つた事をはつきりと知つた時、彼は子供心にも、悲しさ辛さに堪へられなくなつて、二日も三日も、母がすすめる食事もとらないで、彼はその蒲團の中で、死んだやうに横はつてゐた。いや、死なうとさへもした彼の枕のもとで、

「これ邦彰、それではこのお母さんが、どんなに辛いかつて事を考へておくれ、ねえ、母さんがわるかつた、おまへをこんな弱い身體に生んだんだもの、ほんとに母さんがあやまるから、どうかお母さんのために元氣を出しておくれ、おまへがそんな風にするなら、いつそお母さんが死んだ方がましだ……」

　かう云つて、彼の母がオロオロと泣いて、蒲團をめくり上げて彼の顏をのぞき込んで、熱い涙を彼の頰の上に滴らした時、彼は自分も一緒になつて、聲をあげて、長い長い間泣いた。けれども、彼はつひに生きようと思ひ直した。

その翌年の春になつて、彼の身體は大分かたまつた、もうその醜い形の外は、元の丈夫さに立返つた。「學校に行きたい」と彼は父母にせがんで、たうとう或る日、學校への出席の朝を迎へた。もう元のやうに洋服に靴といふやうな姿が、彼には許されなかつた。和服を着て、袴を穿いて、下駄を穿いて、彼は書生に連れられて學校へ行つた。そして、この日から、彼の對世間の苦難と戰ひとの日は始まつた。

彼は絶えず皆のものから浴びせられる冷たい好奇と侮蔑の眼を意識せずにはゐられなかつた。だが、彼にとつて、その眼よりももつと情けない恨めしいものは、學校の廊下にかかつてゐる大きい姿見であつた。冴え冴えとした靑みがかつたその舶來の鏡が、照り返して見せる彼の姿は、彼の眼に、まあ何といふ殘酷な醜さであつた事か！　彼が恐れてその鏡に近寄らないのをよく知つてゐる意地のわるい友達が、或る時、わざとのやうに、彼をその鏡の前の眞中どころに押し出した事がある。こんな時、この鏡の意地惡さ、冷酷さは、その意地惡の子供よりも、ずつと彼には憎く思はれた。鏡は容赦しなかつた、どんな姿が前に立たうとも。鏡はかまはないのだ、どんな姿が映らうとも。

「こんな鏡砕いちまへ！」

彼の怒は爆烈した。彼は鏡に向つて拳を上げた。彼は狂氣のやうになつて、泣いて叫んだ、地團太を踏んだ。その勢ひに辟易して、意地惡の子供達は、先生のところに知らせに駈けて行つた。その先生が出て來て、彼をなだめるまで、彼は泣いてゐた。この時以來、彼は鏡といふものに對して、一種特別の憎しみを持ち、かうした鏡をはじめて發明したその人間に對して、憎惡を抱かずにはゐられなかつた。

辛い事、悲しい事の數々は、彼の行くところに横はつてゐた。運動會の時、(彼は本當に運動會の競爭が樂しみであつた)彼はチャンピオンになる事が出來なかつた。學藝會の時、(彼は公衆の前に立つて、話しするといふ事が、非常に好きであつた)彼は演壇に立つ事が出來なかつた。その成績が遙かに自分に劣つてゐる同級生が、晴れやかな顏をして、

歌を唄つたり朗讀したりするのを見て、彼はいかに羨ましく腹立たしく思つたであらう。

父親ゆづりの負けじ魂は、かうした煩悶に油を注がれたやうになつて、年を經ると共に、野心の火を燃え立たせた。中學校に進んだ頃には、もう彼は孤獨な自分の立場を嚴守して、傲慢な眼つきで、皆を見返して、心で叫んだのだ、

「今に見ろ！　この俺がどんなえらい人間になるかを！」

かうして彼は生命を打ち込んだ勉强にとりかかつた。學校から歸つて來ると、自分の部屋に閉ぢ籠つて、家族のものが心配するのもかまはないで、その精力の全部を傾けて、讀書した。その手には、文學書が來、次いで哲學書が來た。論理、倫理、心理、美學――かうした學問のむかうに、彼は自分の確乎たる未來を見た。彼はつひに哲學者として立たうと決心した。そして、その研究の基礎として、彼は父の雇うてくれた家庭教師によつて、英、獨、佛の三ケ國に亙つて、熱心に語學を學んで、中學の課程を終へた時分には、そのいづれもで、原書を相當に讀みこなすだけの力を得た。次いで彼は專門學校に入り、大學に進んだ。彼はまるで手負ひ猪のやうだつた。前へ、前へと彼は進んだ。彼の齒は絕えず齒ぎしりされてゐた。

「ナニ糞ッ！　俺は生きて生きて生きぬいてやる、もう母のためのみぢやない、自分のためだ、このいとしい自分のためだ。運命といふものに虐げられた自分のためだ。この自分を幸福にしてやるといふ事に、おれの努力が全部かかるのだ。俺は幸福な人間になつてやるぞ、そして、運命に復讐してやるぞ！」

こんなにして、彼が火のやうな渴望をもつて渴望してゐるその幸福は何であつたか？　それは普通の人間から見れば、殆んど氣のつかない、極くありふれた、日常茶飯事にすぎないのだ。普通の人間のやうにやりたい、生活したい、とりわけ、普通の人間の營む家庭の生活が――美しい妻と、可愛い子供とが欲しい、ただそれだけに過ぎないのだ！彼の求める榮譽も、名聲も、結局は、この彼の人間的な欲望を滿足させるための方便として必要なのに過ぎなかつた

のだ。
彼にとつて、女性の存在は、これに越すものもない重い惱みであつた。女性の美を想ふと、彼の不幸は二倍にも三倍にもならずにはゐなかつた。中學に進んだ時分から、彼は美しい女性に眼が着きはじめた。けれども、さうした女性とは、どうあつても、何の交渉をも有ち能はない自分なのだと考へると、さすがの彼も、絶望的な心にならずにはゐられなかつた。だが、その後では、必ず奮然として、彼は心に叫んだ、
「だが俺は、この俺の力で、一人の女を得てやるぞ、美しい妻を得てやるぞ！」
「美しい妻！」と考へただけでも、彼は身體中の血が沸き立つかのやうに、勵まされて來るのだつた。彼の心には、確かにこの道さへ行けば、美しい妻を得る事が出來るといふ、一種病的とも云ひたい確信が養はれた。彼は屢々、その友に鼻柱を碎かれて、戀愛を斷念してゐたミケランゼロと、そのヴィットリア・コロンナとの戀を思うた。そして、彼は逸りたける自分の心を、今に……今に……とおしなだめた。
時とすると、彼は孤獨と思索とに堪へられない事があつた。こんな時には、曾つて見た二人三人の若い女性の微笑みが、眼の前にちらついて、彼を惱まし苦しめた。彼が詩を書き、小説のやうなものを書きさへもしたのは、そんな惱ましい倦怠の時であつた。けれども、そんな感情の耽溺を、哲學者にふさはしからぬ放恣だと反省した彼は、直ちにペンを擲つて、ショオペンハウエルや、ワイニンゲルを取つて、その卓拔な女性心理の解剖に讀み耽けるのであつた、女性への憎惡、女性への執着――その卓拔な推論と分析との背後に潛むものはそれであつた、スタンダアルにも、ニイチエにも。そして、かうした研究は、エリスのセクスアル・サイコロジカル・スタデイヤ、ブロッホ、フォーレル、クラフト・エービング等の著書より、カサノワ、フォーブルの自傳などの如き種類にも及び、彼が大學にゐた頃には、彼の興味を純正哲學の本道から、フロイド一派の精神分析學の方面に向はせようとさへもした程である。その頃、彼

は密かに、各家の令嬢の寫眞の載つてゐる婦人雜誌を集めたり、藝者の寫眞と花柳界の内幕とを載せた娛樂雜誌などをさへ讀んだ。そして、夜の床の中で、タンホイゼルが惑はされたエヌスペルグの歡樂をさへ想像した。そして、それを反省する時、彼は自ら恥ぢ、自ら嘲らずにはゐられなかつた。

ところで、かうした過度の勉强と、かうした感性の昂奮とは、彼の身體にとつて、いい結果を齎さなかつた。彼が大學の二年の時、常に壓迫されてゐる彼の胸の方に、故障が生じた。そこで、さすがの剛情な彼も、一時學業をあきらめて阪神に移り、そこの香櫨園に假寓を定めて、二年あまり保養の生活を送つた。そして、その間に、彼は『新時代の戀愛哲學』といふ著述を書いて、公けにした。それは誇張された戀愛至上主義の讃美であつて、冷靜な哲學的研究と云ふより、むしろ通俗的な文學書に類してはゐたが、兎に角、その方面に於ける彼のこれ迄の蘊蓄と、彼の抑壓されてゐた激情とが、そこに適當のはけ口を見出したのであるから、その詩的な華麗な文章には、思想上の獨創性の有無を問はせないだけの力があつた。殊に、當時にあつては、この種の著述は類のない事でもあつたので、その書は忽ち讀書界の注意を喚起して、彼は一躍して、その多年の渇望してゐた名聲を贏ち得る事が出來た。この成功は彼を刺戟し、彼の勇氣を鼓舞せずには措かなかつた。また、書肆も彼を徒然にしては置かなかつた。そして、この良劑によつて健康をも恢復した彼は、『或る哲學者の手記』と題して、その涙の多かつた半生の悲痛な體驗を書いた自叙傳を公けにした。この書は、その最初の著作の愛讀者であつた若い婦人の間に、同情の渦卷きを卷き起した。彼のところには若い女の手紙が澤山來るやうになつた。そして、中には花束を持つて、彼を慰問に來る娘さへも現れた。然し、女性に對する彼の望みは高かつた。自分を訪ねて來る女性でも、また父や母から勸められる良家の處女でも、その容貌と體格との點で、彼の望みに近いものは殆んどなかつた。「自分の理想通りの女でない限り、自分は結婚しない」と彼は誰にでも公言した。それを聞いた友人達は、彼が結婚を避けたい爲めに云つてゐるものと解釋してゐた。だから、彼等

は彼が今の細君――登美子と結婚した時には、少からず驚かされたのである。

この結婚は、彼にとつては、偶然と云つてもよかつた。はじめ、彼の『手記』を讀んで、その夜一夜、どんなに同情して泣いたか知れないといふやうな事を、つつましやかに、美しく書いた手紙が、京都から彼のところへ來た時、彼はまた例のやうなものだらうとタカをくくつて、その手紙を机の抽斗にはふり込んで置いた。すると四五日たつて、今度は寫眞と手紙とが來た。一寸した好奇心から、彼がその寫眞を引出して見ると、彼はハッとしたやうに眼がすわつた。それは廂髮のありふれた姿ではあつたが、その眼の黑やかなのが、ぢつとこちらを見て、何か話しかけたさうにしてゐるやうに感じられた。よく整つた眼鼻立には、京都の女性特有の洗練があつた。

「これは美人だ、この娘なら氣に入つた……」と彼は自分に打明けた。そして、長い長い心を籠めた手紙を書いた。かうして、この二人の相見ぬ戀は結ばれた。それから一年程たつた時、當時なほ此世に在つた彼の父が、その病兒の一世一代の願ひをかなへてやるために、その金を惜しまぬやり方で、兩親のないその娘の後見人である伯父夫婦の承諾を得たのであつた。

然し、田邊はナイーヴな人間ではなかつた。彼はその新婚の當時に於いてすらも、友人達の前に、自分がその美しい新妻に決して滿足してゐるのではないと云ふ事を示さうとした。彼は彼女を一寸荒い言葉で呼んで、彼女が何處迄も從順に貞淑に見える事を、心密かに誇つてゐた。そして、その結婚から二三年たつた此頃では、彼の妻に對する不平は殆んど口癖のやうになつてゐた。

「女つていふものは仕様のないものだね、ニイチエが女は淺薄とさへも云へないと云つたのは當つてゐる、女は魂のない動物だよ。先天的に虛僞で、自己欺瞞者で、自分で非常に高尙な事を斷言しながら、無意識的に打算を忘れる事の出來ないのが女性だ。女はよく人に同情したがる、が、女の同情なんてもの程、安つぽい下らないものはない。ワ

イニンゲルも云つた通り、女は沈默によつて他人の苦痛を尊敬する事を知らないほど無恥なのだ……」

かうした田邊の一般的な女性侮蔑は、哲學者としての彼には、勿論許されなければならない。が、彼がその後に、自分の妻に對する不平と非難とを附け加へて憚らないのは、明かに彼の不用意と云はなければならない。それは彼の言葉の尊嚴を傷つけて、聞くものをして、間々反感を起させる事があつたからである。しかも彼が、年少の塚本進吉などにまで、それを云はずにはゐられないのは、彼がいかに自分の肉體的弱點に敏感で、その傷つけられた虛榮心のためにいかに苦しんでゐるかを推知せしめて、彼もまた氣の毒な人と云はなければならない。

塚本進吉は、はじめて田邊のかうした言葉を耳にした時には、この二つの見解を別々に受取つて、後者にはさして重きを置かなかつた。が、彼がこの家庭にしげしげ出入するやうになつてから、田邊の打開話には、正直な不滿足の感情の籠つてゐる事に氣が付いたので、彼は何とも云へない不愉快な、憤りに近い感情が湧き起つた事を忘れ得ない。そして、それが田邊に對してかけてゐた彼の幻想を著しく減殺すると共に、登美子夫人に對する彼の敬意と同情とを、一層高めるのであつた。夫人の田邊に對するはじめからの關係を、彼も聞き知つてゐたので、まのあたり見るその生活は、彼には何だか痛々しいものにさへ思はれた。不幸なもの、傷つけるものに對する女性の絕對的の獻身と愛とは、非常に美しく思はれると共に、また非常に悲しくも思はれた。女性といふものに對して、非常に鬪高く考へてゐる彼にとつては、それは確かに驚くべき事であつた。

八

次ぎの日曜日の晝過、塚本は並木信三の家を訪ねた。並木はいつものやうに、うちとけたやはらかな顏つきで、この年下の友達を迎へて、自分の机の傍らにすわらせた。

「政子さんは？」と塚本はそこらを見廻しながら訊いた。
「あれは……」と並木は何か云ひにくい事ででもあるやうに、一寸澁つて云つた、「つい今しがた、或る婦人の會合へ行くと云つて出かけました、やはりあんな仕事をしてゐると、日曜日でも出なくちやならないのでね……」
それから並木は立上つて、臺所へ行つて、瓦斯を出して鐵瓶をかけた。そして、ココアの茶碗を持出したり、茶戸棚から菓子を出してすすめたりした。政子がゐない時には、いつも並木はかうして、政子がするのと殆んど同じ手順をもつて、客をもてなすのだつた。そして、そんなにする樣子が、いかにも彼らしくしつくりはまつてゐた。
「あれから君は何を讀んでゐる？」と並木はココアを注ぎながら訊いた。
「あまり時間がないのでね、纒まつたものが讀めないのだ、讀みたい本は澤山あるんだけれど……」と塚本が答へた。
それから二人はココアを飮みながら、心おきない調子で、雜談をはじめた。塚本進吉は一體に寡默なたちであつたが、並木と話してゐる時だけは、何となく氣持がなごやかになつて、自分でも驚く程よく話した。
やがて、その雜談が、知人の噂になつた時に、並木がふと云ひ出した、
「田邊さんでは、やはりあの夫人は、あの人を崇拜し同情した氣持でやつてゐるんかね？」
「さうなんだ、だから見てゐて辛くなるやうな事もある……それなのに、田邊さんは、一向その氣持を認めようともしてゐないやうだ。僕はあんなに戀愛至上主義を說いてゐたあの人が、あんな女性侮蔑家であらうとは意外だつた。いつも女は虛僞で、淺薄で、女の同情なんてものは、安價で下らないものだといふ意見なんだ、そして殊に惡いのは、そんな場合、よく夫人が引合ひに出される事だ。けれど、僕には、あの人の結婚は、夫人が同情したからこそ成り立つたやうに思はれるんだから、田邊さんは、結局、自分で自分の生活を鞭つてゐる事になりはしないかしら……それに僕ははめじ田邊さんがそんなに云ふのは、あの人のヴニテイからではないかしらと思つたので、同情して聞いてゐた

のだが、どうもさうばかりではなくて、本當にあの夫人に不滿足らしいので、僕は何だか妙な氣がして、この事實をどう考へていいか分らないのだ……」

「さうかね、僕はまたあの夫人に非常に滿足してゐるとばかり思つてゐた……然し、聞いてみると、それはそんなものかも知れないナ。まあ一般的な女性論は別としても、どんな女性にだつて缺點はあるんだもの、その上男が女性から同情される立場にゐると、それは決して嬉しいと單純に云つてしまへるものではあるまいと思ふ。それは嬉しくない事はない、然し、そこにはまた、何とも云へない屈辱に似た苦しいものがあるのだ。田邊さんにしても、あの夫人に最初からあんなに同情され、いたはられて來たのが、苦痛なんぢやなからうか、さう思ふと、ますますあの人が氣の毒な氣がする。男には妙なプライドがあつてね、女に對して自分がひけめを感ずると云ふ事が、既に男にとつては堪らない事なのだ。だから、美人の細君を持つた男が、人の前でその妻を貶さずにゐられないのは、むしろ可哀相な位のものだ……」

かういふ風に云つた並木の顏をぢつと見て、塚本は彼が自分の心持を語つてゐるのだと思つた。そして、此間の晩の彼の述懷を思ひ出した。「夫婦の間はむづかしいナ」と云つた彼の言葉を。

「僕のやうな一人身の者にはよく分らないが」と塚本は云ひ出した、「結婚生活といふものは、そんなにむづかしいものだらうか？　そんなに互に不滿を抱いたり、非難を投げかけ合つたりしなければならないものだらうか？　それではあんまり寂しいと思ふ。そんな事はみんな、何處かに何か無理があるからぢやあるまいか、二人の間の狀態があんまり懸け離れすぎてゐるからぢやないかと思ふ。田邊さんの場合なども、そんな氣がする、僕から見れば、田邊さんはあんな美しい夫人を持つべきぢやないやうに思ふ」

「君はまるで田邊さんを審判するやうだナ。だがね、君の云ふやうに、さう理論通りに行かないのが人生だよ。田邊

さんのやうな境遇であつて見れば、一層美しい人を求めずにゐられない氣持も、僕は無理はないと思ふね。ただ僕から見れば、問題はむしろあの夫人の方にある、あの夫人が、本當にあの人を心から愛する事が出來るかどうか、それは隨分疑問だよ。女性一流の感傷的な同情心は美しいには美しいが、それは結局自ら欺く事に終りはしないか？　自分の心の中に偶像をこしらへて、一生懸命にそれにすがりついてゐるんぢやあるまいか？　自分は美しい犧牲的な行爲をしてゐるんだと自分を說得して、その滿足だけで凡ての補ひをつけようとしてゐるんぢやあるまいか？　さうだとすると、隨分不幸だナ」と並木は云つて、塚本の顏を一寸眺めてから、少し調子を變へて云つた、

「君はいつかさう云つてゐた事があるぢやないか、あの夫人は、靑年達が田邊さんを訪ねて行くと、屹度、それとなく出て來て、樂しさうに話をするツて……君はそれをどう思ふね？」

「さあ……」と云つて、塚本は一寸赧い顏をした、「つまり、あの夫人は自分では何にも知らないんだ、そこが僕なんかに痛々しく思はれるところなんだらう。そんな事から云へば、田邊さんの女性觀は、よくあの夫人には當つてゐると思ふ。しかも、それが當つてゐるからこそ、あの夫人があゝして、あそこにゐられるんだと思ふと、悲しいアイロニイを感ずる。君が云ふやうに、女に對してひけめを感ずるのが、男には苦痛だと云ふ事は、僕にもよく分る。さうしてみると、田邊さんのやうな人は、結婚をしない方がよかつたかも知れない、僕なら確かに結婚はしなかつた……」

「君はひどく田邊さんを非難して、夫人の方の肩を持つんだね、君はその自分の氣持をどう批判してゐるかね？」と並木はやや微笑んで訊いた、揶揄の調子ではなかつたけれど。

「どうと云つて？」と塚本はややどぎまぎして云つた、「それは何でもないんだ、ただあの夫人が可哀相だと思ふばかりだ、僕が田邊さんだつたら、あの夫人と結婚はしないと思ふばかりだ」

「それはさうだらう」と並木は云つた、「然し、君は知つてゐるかも知れないが、シエクスピアにこんな句があるよ、

Pity is akin to love つてね、可哀相から可愛いになると云ふのサ……」

「成程」と云つて塚本は一寸考へてから、笑つて云つた、「してみると、田邊夫人を可哀相だと思ふのは餘計な事なんだね、夫人はやつぱり田邊さんを愛して居るんだから……」

「それはさうだ」と並木は一寸はぐらされたやうな顔をして、「まあそんな事にしときたまへ」と云つて、彼もまた笑つた、

「ところで君は、どんな女性と結婚するかね？」

「僕は結婚なんかしないつもりだ」

「どうして？」

「哲學者が結婚するものぢやないから」

「だつて皆結婚してゐるぢやないか、日本の哲學者を見たまへ、田邊さんを始めとして、みんな結婚して、その著書よりも子供の數の方が多い位だよ」

「それはさうだが、然し、カントやスピノザは結婚してはゐない。本當の哲學者にとつては、知識が妻でなければならないからね」

「そんな事を云つたつて仕様がない、カントやスピノザは格別だよ、普通の人間にはさう行かないよ」

「それはさうかも知れない、僕だつて何もカントのやうにやれようとは思つてゐない。が、要するに、僕には當り前の結婚など出來さうにもないのだ」

「どうして？」

「だつて僕のところなんかに誰が來てくれるだらう？　いくら結婚したくつても、相手がなければ仕様がないもの…

……」

「そんな事はないよ、君に結婚する意志さへあれば、相手はいくらでもあるよ。もつとも、田邊夫人のやうな美しい人をと云ふなら、一寸むづかしいがね」と並木は笑つて云つた。

「勿論、僕はそんな事は思つちやゐない、けれどね……どんなんだつて、僕にとつては何だか尊すぎるやうな氣がするのだ、僕には一人の女性を自分の妻と呼ぶだけの資格がないと思ふ。僕には何一つとして、女性の心に滿足を與へてやれるものがないんだもの……貧乏ではあるし、醜い田舍者なんだから……」

「そんなに謙遜する必要はないよ、貧乏だから結婚が出來ないとしたら、僕なんかどうするんだ？」

「君と僕とは違ふよ、それに僕は、君にいつも云はれる通り、飯になりさうにもない哲學なんかやらうとしてゐるんだから、なほさらだよ。僕のやうなものには、自分で女性を選擇する權利なんかない氣がする、むかうでそれでもかまはないと云つてくれたら、感謝していいんだけれど、それでも何だかすまない氣がする、あんまり可哀相だからね……でも、僕は時々そんな事を考へる事はある、何處かの町はづれの夕闇の中で、ほろほろと泣いてゐる不幸な貧しい娘があつたら、それが僕の妻になつてくれるかも知れないと……また、夕方に小石川の植物園の方に散步してゐる時などに、よく工場歸りの女工等に出會ふ事があるが、あんな貧しい女工の中には、或ひは僕の妻になる女があるかも知れないと……僕はこんなにみじめな男なんだから、僕の妻もみじめな女の中にしかないといふ氣がする。僕には自分の愛の對象として、幸福な美しい女性はどうしても考へられない……」

「君はそんな事を考へてゐたのか」と並木は云つて、その次ぎを促すやうに、ぢつと塚本の顏を見てゐた。

「いつか僕はかうした自分の考へを、あのR――社の黒田君に話した事がある。すると黒田君は、それは君大間違ひだよ、人間は誰しも美しいもの、價値のあるものが好ましいのが當り前だ、それが人間性だ、力の限り美しいものを

取るやうにしてこそ生き甲斐があるぢやないかと云つて僕を非難した、そして君は甘い男だと云つたよ。然し、僕はこの僕の考へが間違ひだとはどうしても思はれない。貧しいものは貧しいもの、醜いものは醜いもの、弱いもの、不幸なものは不幸なもの同士一緒になつて、互ひに助け合ひ慰め合つて、人生の路を歩いて行くところに、人間の本當の幸福があるんぢやなからうか？　またそれが本當の愛ではないだらうか？　美しいものを自分の汚ない手で汚したり、幸福なものを自分の不幸の中に引入れてしまつたりするのは、決して正しい事とは云へないと思ふ。それでも愛と呼べるだらうか？　僕はむしろ卑しい本能に過ぎないと思ふ、僕はそんな利己的な愛を好まない」

「その君の心持は純でいいナ」と並木は云つた、「然し、實際問題に觸れてみると、君の考へてゐるやうには行かないね。人間といふものは、それ程に自分を空しうして、ただ相手の幸福のためにだけ結婚するといふ氣にはなれないものだから……自分が女に對してひけめを感ずるのも苦痛だが、君のやうに、女が不幸で貧しくつて、自分の助けを必要とする事を、愛の條件のやうに考へるのもどういふものかね？」

「さう云はれると困るけれど、愛といふものについて僕のやうな考へ方をすると、結局さういふ事にはなるね。僕も自分がこんな事を考へるのは、やつぱり一種の傲慢なのぢやなからうか、相手に對して自己の優越を保持しようといふ虛榮心なのではなからうかと反省してみる事はあるんだ。けれど、僕は何も自分だけが相手を救はうと云ふのではなくつて、救ふ事によつて救はれたいと思つてゐるのだ。同じやうな不幸な貧しい境遇の人間が相寄つて、互ひに助け合ひ、互ひに救ひ合つて行くところに、本當に深い愛情の絆は結ばれるのぢやないかと思ふ。それは苦しい試練であるかも知れない、が、その試練に堪へてこそ、はじめて男は女を理解し、女は男を理解し得るのぢやあるまいか。そして、結婚といふものは、その試練による魂の淨化の道のやうな氣がする。だから、多くの人のするやうに、單に外部の要求だけで、美人の妻を求めようとするのは間違つてゐる、幸福はそんな外面的なものにはない筈だ、女性の美

はその外貌よりも、心の中にある、その心さへ美しければ、僕はどんな醜い女でも愛したい、どんな貧しい、みじめな、倫落の淵に沈んだ女でもいいと思ふ。そんな女を救ひ上げて、自分の愛で温めてやれたなら、どんなにいいだらうと思ふ。もつとも、僕にはそんな資格はないのだが……」と塚本は云つて、少し上氣した顔をしてゐた。

「成程、君は恐ろしい詩人だね、哲學者よりも君は詩人になつた方がいい位だよ」と並木は云つた、「君のその心持は尊いと思ふ、僕も病氣以來、人生の一切を嚴肅な事實として受取らねばならん事を痛感した、そして、結婚の問題にしても、君のやうに眞面目に、重大に考へるのは、確かに正しい事だと思つてゐる。僕自身も、妻との問題を、これは前にも君に話したかも知れないが、病氣の間中、隨分深く考へて見た、そして、君の云ふやうな人道的な愛といふ事を考へて、それが最も正しいと思つた、そして出來るだけさういふ風に努力して行きたいと考へた事を忘れない。だが、實際に當つてみると、なかなかそれが理想通り行かないのでね……」と並木は一寸眼を瞑るやうにして云ひ續けた、「二人の人間が、一緒に住んで生きて行くといふ事は、なかなか容易な事ではないんだ、君もやがては經驗するに違ひないと思ふが、こんな風に嚴肅に考へれば考へる程、結婚生活は苦しい、苦しい事實だ。生れつきの性格といふものは、どうする事も出來ない、二人の性格の相違は、時のたつとともにだんだん著しくなるばかりで、そのためどんなに互に愛し合つてゐたところで、二人の魂が完全に理解し合ひ、完全に結びつくといふ事は考へられない。さう思ふと、何とも云へない寂しい、絶望的な氣持にさへなつてしまふのでね……」

「さうだらうか？　僕には君と政子さんとは、違つてゐるので反つてうまく行くやうに思はれるのだが……」と塚本はひかへ目に云つた。

「政子はあんなに快活でがらがらしてゐるやうに見えて、その一面、非常に神經質で、案外物にこだはるので、それが僕の神經質なのと始終ぶッつかるのだ。もつとも、それも結局性格の相違のためだがね……それに體質の相違など

といふ事も、これでなかなか重大な問題なのでね君」と並木は云つて、直ぐ語調を變へて、「だが、僕はかうあきらめてゐるよ、何處の家庭でも、うまく行かないのは同じ事だらうとね、要するに外に現れるのと現れないのとの違ひだけで、何の苦情もない、圓滿な幸福な家庭が、世の中にあるだらうかしら？　僕には結婚は愛の幻滅にすぎないとさへ思はれるのだ、その意味で、君が結婚を試煉だと云つたのは本當だ、結婚は謂はば戀愛の贖罪のやうなものかも知れないね」

並木はかう云つてから、お茶を入れに臺所へ立つた。その後で、塚本は彼の今云つた憂鬱な言葉の意味を考へながら、見るともなく、部屋の反對の一隅にある政子の机の方を眺めてゐると、その机の傍らに、こちらに向けて立てかけてある一枚の油繪――今迄何ともなく見すごしてゐたそのカンヷスの繪に、ふと眼がついた。赤の强烈な色彩で、花瓶と林檎とを畫いて、K・Nのサインのある畫、それが彼にはなぜだか見たくないのに、見る事を强ひるやうな壓迫を與へるのである。

「政子さんは、此頃繪を稽古してゐられるんぢやないかね？」と塚本は並木がこちらにやつて來た時に訊いた、そして、どうしてそんな事を訊く氣になつたのか、自分でも分らなかつた。

「いや……かいてはゐないがね」と並木は自分も繪の方を一寸見ながらすわつて、お茶をつぎながら、「此間長島君に敎へて貰つて、これからかくんだといふので、僕がこんな貧乏暮しぢや女流畫家になるのも困難だねと云ふと、少し機嫌がわるかつたやうだが、女ツてものは、氣まぐれなもんでね、いろんな事を思ひ付いてゐるらしい」と云つた。

二人は暫く默つてお茶を飮んでゐた。すると、玄關の方で、二度ほど、案内を乞ふ女の聲がした。

「女の客だね」と並木は一寸塚本の顏を見てから云つた、「誰だらう？」

そして、彼は玄關に出て行つた。その玄關の中には、一人の若い女が立つてゐて、格子戸の外に立つてゐる今一人

の若い女の方を見て、何か囁いてゐた。
「ああ、留子さんでしたか」と並木は云つた、そして、戸の外の女を見て、その會釋に答へた。それは此間、片山の家で會つた兼子と云ふ女である事を、彼は忘れないでゐた。
「政子さんはお留守ですの？」と留子は、その身體を妙にくねくねとさせながら、笑顔をつくつて訊いた。
「ええ、政子は留守ですが……」
「まあ、さう……困つたわね」と彼女は言葉のやうに困つた顔もしないで云つた。
「おあがりなすつたらどうです？」
「でも、お客さんでせう」
「いや、僕の友人ですから」
「あがる？」と留子は振り返つて、戸の外の兼子に訊いた。そして、そのそぶりに表れた樣子で、あがるのをやめる氣になつて云つた、
「また、今度まゐりますわ……」と云つて、また兼子の方を一寸振返つてから、並木の顔を見上げて、「あのね、政子さんでなくてもあなたでもいいの、この方がね、何處かこちらの方に貸間を探してらつしやるの、政子さん氣を付けといて下さるやうに云つて下さいね、今急でなくつてよろしいの」
「ええ、さう云つて置きませう」
「では、どうぞね」と云つて、彼女は外に出て、格子戸越しに、「片山さんがよろしく云ひましたの……」と云つた。
「ああ、有難う、あなたからよろしく云つて下さい」
「またいらつしやいな、夜分お二人でね、いいでせう？　思ひッきり遊びませうよ、お待ちしてるわ」

「ええ、有難う」と並木は少し苦笑して云つた。

留子はまだ何か話す事でもあるやうに、格子の棧を指でいぢくつてゐたが、後にゐる兼子が並木に默禮して、彼が「さやうなら」と云つたので、自分も「さやうなら」と云つた。そして、二人の女は歩き出した。

「生憎だつたのね」と通りに出てから留子は云つた。

「でもいいわ、今日にかぎつた事ではないんですもの」と兼子が答へた。

そして、暫く默つて、二人は町の方へと歩いて行つた。

「あなた、あの並木さんどう思つて？」と留子が並んで歩いてゐる兼子の方を見て訊いた。

「おとなしさうな方ね、けれどああいふ風な人は、覇氣がなくつて齒がゆいんぢやないの」と兼子が云つた。

九

この二人の女が、代々木から千駄ケ谷の細長い町へ出て、そこから青山の原にぬけると、ずつとむかうの青山御所に添うて走つてゐる電車が、小さく見えた。

「ねえ留子さん、隨分歩いたからお疲れになつたでせう？」と兼子が振り向いて云つた。

「いいえ、ちつとも」

「いつそわたしの家へお寄りになりませんこと？　もうぢきそこですもの……」

「さうねえ、お邪魔してもいいんですか？」

「いいんですとも、あんまり感じのいい家ぢやないんですけれど……」と兼子は線路のむかうに重なり合つてゐる洋館や二階屋の屋根の方を眺めながら云つた。

兼子の下宿は、四谷の信濃町にあつた。通りから五六丁右に入つた靜かな屋敷町で、二階建の家が四棟ほど建つてゐる、その端しの家の二階が、彼女の借りてゐる部屋であつた。

「隨分とり散らしてゐるでせう」と兼子はその二階に上つた時に云つた。それは六疊の、日射しの强い時はのぼせさうな部屋で、何一つ飾りらしいものもなかつた。ただ窓下に置かれた更紗の机掛けに蔽はれたかたばかりの机の上に、二三册の雜誌や小說本らしいのと一緒に、針箱や小さな手鏡などがごちやごちや置かれてゐるのと、その机の前のメリンスの座蒲團の上に、ふだん着らしい派手な袷だの帶だのが無雜作につくねて置いてあるのとが、わづかに若い女の部屋である事を思はせた。

「明るくていいお部屋だわ」と留子は部屋の中を一寸見廻しながら云つた、「これだけのお部屋なら、おかはりにならなくつてもいいやうなのね」

「ええ、部屋はわるくはないのよ、ただ家の人があまりよくないのよ」と兼子は小さな聲で云つた。

「やはり？……ね」と留子がうなづいて云つた、「家の人がよくないと落着けないわね、わたしも芝の方に自分の間はあるんですけども、やはり厭やでしてね」

「まあ……わたしはずつと片山さんの家にあなたゐらつしやるんだと思つててよ」と兼子は耳あたらしげに云つた、

「勿體ないのね、寢泊りもしないお部屋を借りておくなんて……」

「だつて、やはり自分の部屋だつて要りますわ、そんなにしよつちう、片山さんの家にばかりもゐられないのよ」

「それはさうでせうけれど……」

兼子は今途中で買つて來た餅菓子の包みを机の上に開いて、それを留子にすすめてから、

「わたしお湯を貰つて來ますから……」と云つて、戸棚からお茶道具を出して、藥罐を提げて下におりた。そして間

もなく上つて來て、お茶の用意をしながら、

「あなた芝の方のその部屋へ歸ると、やつぱり自炊？」と訊いた。

「わたしには自炊出來ないのよ、大抵外で食べてしまひますわ、どうせ不經濟ですけれど、わたしのやうなものには、その方が氣樂でいいんですもの」

「ほんとね……」と兼子が笑つて云つた、

「それは氣樂ね、わたしも時々面倒臭くなつて、いつそ賄ひを頼まうか、外食にしようかしらんと思ふんですけれど、これでわたしは胃腸を時々こはすもんですから、自分でお粥をこしらへて食べたりするでせう、ですからやはり自炊しちまふの……あなたは胃はお丈夫さうね……」

「わたし……胃は丈夫ですとも、いつか片山さんが、なぜあなたはそんなに胃が強いのに、顏色がわるいんだらうと云つたわ、顏色はわるいんだけれど、わたしこれで丈夫なのよ」

「それはさうと、片山さんは隨分美食家ね、あんなにしてると隨分物いりでせうね」

「ええ、でもお金持の家の坊ちやんですもの、そんな事はどうでもいいんでせう」

「まあ、片山さんはそんな家の方なの？」と兼子が問ひ返した。

「さう大したお金持ぢやないんでせう、けれど片山さんは、遊んでゐたつていい人なのよ」

「さう……でもね、留子さん、それにしては、片山さんの奥さんは、着物はあんまり持つてゐらつしやらないやうだわね」

「ええ、さうなの、ちつとも着物持つてゐませんわ、いつかなんか、誰かお友達の結婚式のとき、わたしの長襦袢だの帶だのを貸してあげたわ、御紋付はわたし持つてなかつたので、誰かに借りてゐたやうでしたの」

「なぜ片山さんは、そんな事心配してあげないんでせうね、出來ないんでもないんでせうのに……」と兼子が云つた。
留子は片山の家の特別な事情を説明して、
「よし子さんは、それはよく辛抱する方なのよ、わたしなんかに、とてもあの眞似は出來ないの」と云つて、それから彼女は、何が厭やだと云つても、世話女房になる位ゐ厭やでみじめな事はないと云つた。
「世話女房でいいのは、舞臺で見る秀調だけよ、舞臺だけなら、わたしも黑襦子の襟のかかつた小紋の着物を着て……ねえ一寸いいでせう？」と云つて笑つた。
「あなたは暢氣ね」と兼子は輕く微笑んで云つた。
「暢氣なのがいいとは思はなくつて？　どうせ短い人の一生ぢやないこと……何も齷齪することはないわ、わたし暢氣に暮したいの……」
「まつたくね」と兼子はうなづいた、「わたしも出來るだけ自分の好きなやうにしようと思つて、國から出て來たんですよ、でも、わたしは矢張りあなたとは違つて、どうしたつて苦勞性ね」
「そんな事もないでせう……あなた女優の試驗をお受けなすつたんですつて？」
「片山さんにお聞きになつたの」と云つて、兼子は一寸赧くなつた、「駄目だつたのよ、でも、うまく行かなくつて結句よかつたのよ、わたしのやうに身體の弱いものには續かないでせうもの」
「それはさうですよ、舞臺に立つのは、隨分烈しい勞働ですもの、その上芝居の方の附合ひといふものが、また一種特別なものですもの……わたし友達に女優があつて、その人に連れられてあちこち行つて、かなり內幕を見て知つてゐるのよ、やはり夢の世界として眺めて樂しむ方がいいんだわ、あのフットライトに照らされて、花道から魂ぬけてとぼとぼと出て來る橋屋はいいぢやないの、あんな美しい歌舞伎の世界に何もかも忘れてしまへる位ゐ幸福なことはな

いわ、梅忠だの紙治だのがかかると、わたしはどんな工面してでも見に行くの、わたしあんなに男のために苦勞してみたいわ、あなたどう思つて？」

「さあねえ……」と兼子は笑つて云つた、

「今度いい芝居がかかつたら一緒に行きませう」

二人の頭の上で電燈がパッとついた。そのとき兼子はふと思ひ付いたやうに、

「あなたおなかが空いたでせう、何を食べませう？」と留子に訊いた。

「さうね、何でもいいわ、あんまり欲しい事はないのよ、それよりか何か輕いものの方がいいわ」

「それでは何か西洋料理にしませうね」と云ひながら、兼子は立上つて下りて行つた。暫くして、彼女は上つて來て、話を元に戻して、片山繁雄の結婚の事情をいろいろと留子に訊いた。留子は問はれる儘に、自分の知つて居るだけの話をした。

やがて西洋料理が來た。二人はフォークをがちやがちやさせて食べながら、話しつづけた。

「あなたいつから片山さんの家に行つてらつしやるの？」

「二年程前からですわ、わたしの兄が片山さんの友達でしてね、はじめは兄に連れて行つて貰つたのよ」

「今のやうに始終行つてらしたの？」

「いいえ、はじめはさうぢやなかつたのよ、兄が國へ歸つてからですわ、國の方ではわたしが學校を卒業するとすぐ歸つて結婚しろと云ふんですけれど、それが厭やで、何か仕事をして一人で氣樂にやつて見たくつて、片山さんに相談すると、丁度いいとこがあつて、そこで一年程の間、訪問記者のやうな事をしてたのよ。そこを出てからは、もつと氣樂に自分のこさへた原稿をあちこちに買つて貰つて、それでお化粧品を買つたり、お芝居を見たりする金を儲け

てるのよ。そしてどうにもかうにも仕樣がなくなると、金の出來るまで、片山さんの家へ行つて遊んでるのよ。あそこに行つてると、いろんな人が來て、話したり遊んだりするから面白いのよ」
「片山さんの家には、若くて美しい男の人が來るでせう？」
「さあ……靑年は來ますけれど、美しい人ツてないものね、わたしから見れば、やつぱり片山さんが一番綺麗だわ、あなたさう思はないこと？」
「さうね、美しい方だわね」
「ぢやあなた、片山さんの何處が美しいとお思ひになつて？」
「そんなに問はれると一寸困るわ」と兼子はくすぐつたさうに云つて、片山の顏を空に見つめるやうに、暫く考へてから、「やはり眼が美しいのね……」
「わたしも眼がいいと思ふの、普通男の人は、あんなにやはらかな綺麗な眼をしてゐないものよ。その上片山さんの眼は、どんな感情でも相手の胸に流し込まうとする魅力を持つてゐるのよ。あの方がぢつとあのやはらかな眼で、こちらの眼を見ると、死んでしまひさうな氣がするわ……」
「そんな眼をお貰ひになつて、お仕合せねあなた……」
「あら、いやだわ」と留子は不意を打たれたやうに齶をはづませた、「あなた、からかふのね」
「どうしまして……そんな事位ゐいいぢやないの」と兼子は上手に出て云つた、「あなた片山さんとは隨分心持の上で打ちとけてゐらつしやるのね」
「まあさう云へばさうよ」と留子はにこにこして云つた、「でも、片山さんはわたしを虐めたり、からかつたりばかりするわ、眞面目な話相手にしないのですもの……でもわたしはちつともおこつた事ないわ、かへつてそんなに云はれ

れば云はれる程、親しい氣がするのよ」
「そんなものかも知れないのね、愛があれば……」
「いいえ、愛なんて云ふものぢやないのよ」と留子は急いで打ち消した、「でもあの人、何處にだつて憎めるところはないいんですもの、あれでゐて痒いところに手の届くほどよく氣の付く人なのよ。時によると、そのたつた一言で、こちらの氣持がぐらッと變つてしまふんですもの……」
「それはわたしもさう思つたのよ、はじめて片山さんに會つた時の態度がさうでしたもの、女の氣持をよく知つてらつしやるのに驚くわ……こちらの方で思つてゐる事を、先きへ先きへと感じてゐてくれるんですもの、恐ろしい程愉快な氣持にさせて下さるわ、さうかと云つて、藝者なんかで人ずれしてゐるやうな上手さぢやないんですよ」
「ええ、さうなの、あの人あれでちつとも遊びませんもの、これ迄關係のあつた女の人は、みんな素人ですもの」
「餘程澤山あるの？」
「さあ……どうですか、わたしもよくは知らないのよ、ただかなりあると人はみんな云つてるでせう、世間の評判ぢや、あの方は色魔なんですつて、でもそれはかはいさうですわ、そんなに女をひどい目に遭はしてゐやしませんわ、それにどれもこれもみんな短い關係ばかりなの……」
「それぢや本當に深い戀愛とは云へないのね、一人の戀人を滿足さすだけでも大變ぢやないこと？　やはり片山さんは浮氣なのね」
「浮氣？　まあさうでないとは云へないけれど、あの方を知れば知る程、さういふ事で非難は出來ない事よ、非常に優しくつていい人ですもの……あの人とさうしたわけになるのは、女の方に罪があると云つてもいいわ、それに片山さんだつて、浮氣でない戀愛があるわ、そんなに薄情な方ぢやないんですよ」

「それは薄情といふのとは違ふでせうよ、でもわたし、かう思ふのよ、あの方は屹度、自分に一度許した女には、何處までもタイラントに出るでせうよ、女の感情を何處までも支配しなけりや承知の出來ない方だわ、つまり我儘なのね、さうぢやないこと？」

「ええ、さうなの」と留子はうなづいた、そして感情の籠つた聲で云つた、「あなたに對してもそんなだつたこと？」

「さうねえ、自分の思ひ通りに相手を引き廻さうと云つた風に出て來るのね、そして、自分だけの男に惹かれない女はないと云つた氣持で物を云ふのね……」

「…………」

「もつとも、そんな風に出てくるのは、片山さんばかりに限らないのでせうけれど……」

「ねえ兼子さん、あなた此間片山さんと銀座で會つたと云つて、一緒に片山の家へ夜いらしたわね」留子はぢつと兼子の眼を見た、「あの時の詳しい事よかつたら話して頂戴な」

このまともの質問に、兼子は眼をそらしながら、「あの時の事は、何から何まで偶然なのよ、わたしが銀座へ買物に行つて、日比谷の方に出て、停留所のところへ立つてゐると、むかうから綺麗な人が來たの、ふツと見ると、その人が片山さんでせう。それから誘はれて、もう一度銀座の方に出て、ぶらぶらと歩いたり、カフェ鴻の巣に入つて一緒に食べたりしたのよ」

「それから何處へいらしたの？」と留子がおづおづした調子で訊いた。

「留子さん、あなたどうしてそんなこと根掘り葉掘り訊くの、どうだつていいんぢやないの？」

「…………」

二人は暫くの間、互ひに顔をそらして默つてゐた。やがて苦しくなつたやうな調子で、留子が云つた、

「おこらないで下さいね、實はよし子さんがあんまり心配してるからなの……此間ぢゆうずつとあなたが片山さんの心の問題になつてゐるのよ、だから一寸した事があつても、奥さんが心配するんだわ」
「それぢや一層わるかつたのね、わたしあんなに阿佐ヶ谷までついてなんか行くつもりはなかつたんですよ、でもね、一緒に淺草の方に遊びに行かうと云ふのをお斷はりしたもんですから、僕の家へ行かうと云ふのまでも斷はるわけに行かなかつたんですよ、何だか自分ながら變に動いたんですもの……あの時の事はわたし責任が持てないわ」
「でも……それはあなたが片山さんに惹かれてゐらしたからぢやないこと？」
「さうねえ、或る意味ぢや隨分惹かれてゐますわ、それはわたしも知つてゐるわ、此間あんな時刻に、片山さんの家へ行つて、玄關を入つて、開いた障子のむかうで、ヘーンな眼付でこちらをぢつと見てゐる奥さんと、まごまごしてゐるあなたとを見た時に、わたしさう感じたのよ、だつて仕方ないんですもの……」
「ねえ兼子さん、あなたがほんとに片山さんを好いてゐらつしやるのなら仕方がないんですけれど……」と留子は少しかすれたやうな聲で云ひ出した、「若しそんなでもないのでしたら、此際暫くの間、片山さんから遠ざかつて頂けないこと？」
「…………」
「何だか云ひ難いんですけれど、若しさうして頂けたら、わたしあなたに感謝しますわ、あんな風に片山さんは、此頃あなたに熱中してゐるんですもの、あんな風に熱中すると、屹度あの方は相手の女を征服してしまひますわ、これまでだつてさうでしたもの……みんな引きずられて、そんな風になるんですもの、そして一度そんな風になれば、どうなるでせう？　ねえ兼子さん……それによし子さんだつて可哀相ですもの……」
「そんな事おつしやるつもりで、あなたわたしを送つていらしたのね……」とムッとしたやうな調子で兼子は云ひ出

した、「どうしようとわたしの勝手ぢやありませんか、ねえ留子さん、わたしはそこの奥さんがお氣の毒だからつて云ふんで遠ざかるのぢや厭やですわ、一たん深入りしてしまへば、そんな事なんかで心が變へられやしないわ、人間の心つてそんなものよ」

「まつたくですよ」と留子は殊勝に云つた、「それはよし子さんだつて、そんなことをあなたに云へやしませんわ、わたしだつて、あなたにそんな事を無理にとはお賴み出來やしませんわ……ねえ兼子さん、片山さんに對するあなたの本當の心持をおつしやつて下さらないこと？　あなたが片山さんをどう思つてゐらつしやるか……」

「氣持のいい方だとわたし思つてゐますわ、それから先きの感情がどうなるかつて事が、わたしに分るものですか」

「それは誰にだつて分りませんわ……」

かう云つて、さしうつむいた留子の長い顏は萎びて、その頰には隱し切れぬ苦惱の影がわなないた。それをぢつと見てゐる兼子の眼には、優越の感情と同情のそれとが浮び上つた、

「留子さん、あなた片山さんを愛してらつしやるのね」と彼女は囁くやうに云つた。

「……………」

「そんなに心配なさらない方がいいわ、留子さん、わたし決して進みませんから、何だかかうあなたに氣の毒なやうな氣がしてくるんですもの」

「わたしに！……」

かう云つて留子は、パッとその眼に涙をやどした。涙は彼女の睫毛にキラキラと光つた。

「さうなのよ……あなたはあの方とさうなんでせう……え？」

「ええ……」と云つて、留子はその兩手で顏を押へた。涙は指の間からハラハラと零れた。

「多分わたしさうだらうと思つたの、さうでなければ、あなたがそんなに感情を動かす筈がないんですもの、この間なんかも、變な顏してゐたのは、あなたの方が目立つてゐたわ、その時からわたしほぼ分つてゐたのよ……どうしてわたしが片山さんとそんな事なんかするでせう？　此間なんか、わたしが淺草の方へ行かないと云つたもんだから、隨分機嫌損じてゐらしつた位なのよ、だつてあんまりわたしを見くびつてゐらつしやるから一寸積よ、だから心配なさらないがいいわ」

「ええ、有難う、ほんとに有難う」と云つて留子は、とめどもなく流れる涙を袖で蔽うた。

もうかなり夜が更けてゐた。

留子は机の上の小鏡を取つて、その涙でよごれた顏の化粧を直してから、

「わたしもう歸るわ」と云つた。

先刻から彼女の樣子を、あはれむやうな眼付で、ぢつと見てゐた兼子は、二人の眼が合ふと、急にとりつくろつた笑ひを浮べて、

「よかつたら泊つてはどう、一緒にもう少し話しませうよ、ねえ留子さん、今から歸るのも大變でせうもの……」とつとめてやさしく云つた。

こんな風にやさしく云はれると、留子は歸るのが厭やになつた。そして、もつとここにゐて、もつともつと話したい氣持になつて、そこにすわり直した。そして、兼子と顏を見合せて、何といふ事なく、二人で笑顏を交した。

「もう床を取つて、横になつて話しませう」と兼子は云つて、一寸そこらを片づけてから、下から蒲團を借りて來て、留子に手傳つて貰つて、二人の床をつくつた。

二人の女は、枕を並べて横になつて、暫く互ひに默つてゐた。

「電燈を消しませうね」と云つて、兼子は、立上つてスキッチをひねつた。そして、蒲團の中に入りながら、彼女は囁くやうな聲で、留子に云つた、
「片山さんはあなたを本當に愛してゐらつしやるんでせう？」
「どうですか……でも、優しい時もあるのよ」
「それはさうでせうね……」と兼子は云つた、そして暫くして、「いつ頃から、そんなになつて？」と訊いた。
こんな風にして、兼子に問はれる儘に、留子はいろんな事を、ぼつぼつと話しだした。二年程前の夏の夜——片山の家に行きはじめてからまだ間もない頃、よし子が女中と買物に出て行つた留守に、思ひがけもなく片山の熱い接吻を受けた事、その腕の中で自分が泣き出した事、片山がやはらかに背中を撫でさすりながら、やさしいやさしい言葉で、許してくれと云つた事——そんなこまかい思出を、彼女は今一度味はひ返すやうに、樂しい氣持になつて、話し續けてゐると、今迄、いかにも興味ありげに、一々返辭をしながら聞いてゐた兼子が、少し聲を變へて、
「そんなになつた事を、あなたちつとも後悔してゐらつしやらないのね」と非難の調子で云つた。
「ちつとも悔いてゐないのよ、だつて片山さんの云ふやうに、これがわたしの一番いい生活なんですもの……」
「そんな事仰しやるの？」
「ええ、だつてさうですわ、わたしこんな女ですもの、當り前の結婚したつて、とてもあんな人の奧樣にはなれやしませんもの……」
「だつて今のやうなのは、わたしなどから見れば、一寸みじめに見えてよ、よくあなたはよし子さんに對して、苦痛な氣持をもたないでゐられるのね」
「それは仕方ありませんわ、それにわたし、もともと片山さんを獨占してしまふ氣はないんですもの、わたしは世話

女房になるのは厭やですもの……」

「わたしには、あなたのそんな氣持分らないわ」と兼子は少し高調子に云つたが、また元の調子にかへつて訊いた、「それにあなたの方はそれですんでも、よし子さんの方でそれですむでせうか？　勿論、もう知つてらつしやるんでせう？」

「それはさうよ、ずつと早くから分つてたのよ、でも、あの人はわたしだけに許してゐてくれるの……そして、まるで妹のやうに、わたしを可愛がつてくれるのよ。その氣持もわたしにはよく分るわ、そして、知れば知る程、よし子さんの立場には同情せずにゐられないんです、だから、あの人の手の廻らないところを、わたしが出來るだけして、何事もみな片山さんの爲めにと思つてやつて行けば、よし子さんとわたしとの利害關係は、同じ事になるんですもの……二人が思つてゐたからッたつて、片山さんがへ減るわけぢやないんですものね」

「それでもあなたのお家の方ぢや、あなたが一人でゐるのは不賛成ぢやないこと？　知れた時どうなさるの？」

「先きの事はどうでもいいのよ、ただ今だけ幸福でゐられれば、わたしいいわ……」

兼子は何だか不愉快な氣持になつて、默つてしまつた。彼女にとつては、かうした留子の考へ方は、一人の女の誇りを全く棄ててしまつた、齒がゆくもあり痛ましくもある屈從のそれであつた。相手を獨占しない以上、どうしてそれが戀愛であらうか、かういふ事を云はうとして、彼女は留子を呼んだ、が、もう返辭はなかつた。彼女はもう寢てしまつてゐた——輕い寢息を立てながら。

十

「もう何時位ですの？」

から云つて留子は、蒲團の中から、その寢亂れ髮の頭をむつくり持上げた。
「さあ、何時頃かしら、今日のやうに暗い日は、一寸見當がつかないのね……でもゆつくりやすんでいらつしやいよ」
窓下でその髮を結ひあげてゐた兼子は、振返つてから云つて、その拔毛をくるくると卷いた。
この二人の心持は、昨日までとはまるで違つて、ずつと昔からの友達ででもあるやうに、今朝はすつかり親しい打ちとけたものになつてゐた。留子には兼子にかけてゐた不安の取去られた氣やすさと、何もかも話してしまつた後の親しみとがあつたし、兼子は留子のあまりの氣の善さと、そのみじめな境涯を可哀相に思ふ事によつて、これ迄になく不思議に氣をくつろげてゐた。
「あの節子さんて人は、片山さんとどういふやうな譯合ひがあるの？」と兼子が訊いた。
「何でもないでせう」と留子は氣のない聲で云つた、「片山さんの家では、子供の世話に手が足りないから、頼んでゐるんでせう、あの人は並木さんのお世話であそこに來て、もう半年位になるんですよ。何だか此頃國へ歸るとか、外で職業を持ちたいとか云つてゐるわ、片山さんの家とは一寸不調和に見えるでせう？」
「さあ、さう云へばさうね、何だか寂しさうな人ね、いぢけてゐたやうだわ、それだのに片山さんは妙に虐めてゐたわね」
「虐めるのは、節子さんばかりぢやないのよ、よし子さんでもわたしでも虐められてるわ、鈍感だつて……」
「でも、あなたやよし子さんが苦情云はれるのと、あの人の場合とは違ふんでせう」と云つて兼子は笑つた。
留子は起きて、顏を洗つたり、髮を撫でつけたりしてゐる間、今日はどうしようかと考へた。昨日は、もう一週間あまり歸らない芝の自分の部屋に歸らうかと思つて、片山の家を出たのであつたが、今日は妙によし子に會ひたかつ

た。別段よし子から頼まれて兼子の部屋に來たわけではなかつたが、自分の安心を彼女にもつたへて、早く彼女を安心させてやりたい氣持で一杯だつた。

朝飯をすまして、兼子に別れを告げて留子が信濃町の停車場に來た時には、もう十二時に近かつた。彼女はとりとめのない安易な氣持で、電車を待ちながら、心に思つた、

「兼子さんは思つたよりいい人だつたわ……」

彼女は片山にも早く會ひたかつた。昨日兼子の家について行つて、そこに泊つたりした事を知つたら、彼がどんなに云ふであらうかと考へると、一寸興味があつた。少しは心配なやうな氣もしたが、片山の弱身をつかまへたやうな心強い氣もするのである。そして、どんな女に對してでも、絶對的の自信を有つてゐる片山が、兼子と日比谷から銀座の方に歩いた時の事情が、あんなものに過ぎなかつたと云ふ事が、何だか笑ひたくなるやうな氣がして、何となく嬉しいと同時に、彼に對して、少しでもそんな疑念を持つた事が、すまない氣もするのである。そして、兎に角、早く片山の顔が見たかつた。

空は妙に重苦しく灰色に垂れて、陰氣に曇つてゐた。けれども、彼女は輕い明るい氣持で、電車から下りると、急ぎ足に、片山の家の門をくぐつた。そして、玄關をあけて家の中に入ると、ベルの音を聞きつけて、足音を立てないやうにして驅けて來た玲子が、いきなり彼女の胸に頭をくつつけるやうにして、大きな口をあけて、そのくせ小さい聲で、

「ねえ留子小母さん、お父さんが御機嫌がわるいのよ、靜かにしてないといけないのよ」と囁いた。

「いつから？」

「昨夜からなの、お父さんもお母さんも、昨夜はおやすみにならなかつたわよ……」

「まあ、さう……」と留子は云つて、急に目のさきが暗くなるやうな氣がした。そして、玲子の可愛らしい小さい頭を抱へるやうにして、片山が今そこで不機嫌に陷つてゐるといふ部屋の襖の方をそつと見ながら、玲子の 張つて行く儘に、ずつと離れた子供達の部屋へと入つた。そこには、節子と女中と男の兒とが、あかんぼを中にして、默つてすわつてゐた。何だかお通夜でもしてゐるやうな感じであつた。

「おかへりなさい」

かう云つた節子の調子も、玲子と同じやうな憚るやうな聲だつた。

「つひ泊つてしまつて……」と留子は强ひて笑顏をつくつて、わざと輕い調子で云つた、「例の憂鬱ですの、先生は……」

「さあ、どうですか」と節子はやはりシリアスな、陰氣な顏つきで云つた。

「先生も奧さんも、昨夜はずつと起きてゐらつしやつたんですつて？」

「そのやうですよ」と女中が云つた、「時々大きな聲で、旦那樣がオイと仰しやるのと、奧樣が御返辭なさる聲とが、明け方になるまで時々聞えるので、わたしちつとも寢られませんでしたわ、節子さんは？」

「わたしもでしたわ」

「わたしも」と玲子が云つた。

「僕もですよ、小母さん」と何にも知らない男の兒までが負けないやうに云つた、「母さんがねむくつて可哀相だよ」

「シッ、何でそんな大きな聲出すの、お父さんがお叱りになつたらどうして？」と玲子がギョロッと眼をむいて、弟を睨んだ。

留子はこんな事には、はじめてではなかつた。それは謂はば片山の家の低氣壓で、一二月目位には、きまつて襲來す

る避け難い災厄であつた。けれど、今日のは、何だかいつものよりもひどいもののやうな氣がした。殊に、今迄妙にはずんだ氣持であつただけに、一層それがこたへて、急にいろんな事が暗く恐ろしく考へられ出して、妙にふさいでくるのをまぎらさうとして、彼女は節子や女中を相手に、昨日並木の家に寄つた事や、そこから四谷まで歩いた事などを、ひそひそと話しはじめた。

その時、緣側に足音がして、障子越しに片山の聲がした、

「留子さんが歸つてゐる？」

「ええ……」と留子が云つた。

「さう……一寸話があるから、僕の部屋にいらつしやい」

「…………」

片山の引返して行く足音が、むかうの部屋の方に消えた時、玲子が暗い顏をして云つた、

「さあ小母さんがおこられるのよ、昨夜あんなに他所で泊つたからだわ」

「さうかしら？　何でもいいわ……」と留子はわざとのやうに輕く云つて、部屋を出た。

留子が行つて見ると、その部屋の眞中で、むかうに向いてすわつてゐたよし子が、こちらに向いて、その瞳孔の開いたやうな艶を失つた眼に、つとめて笑顏のやうなものを見せようとしたが、その眼も顏の筋肉も、云ふ事をきかなかつた。

片山も同じやうにどろつとした眼をして、少しも睡りを取らなかつた疲勞と、昂じ盡した不機嫌とを、その靑白い皮膚の荒れのカサカサと目に立つ顏に苛立たせて、留子のすわつた姿を、少し後に凭れるやうにして、机の前にすわつた儘、ぢつと眼を据ゑて見て、默つてゐる。

留子は何と云つていいか分らなかつた。ただ胸が重く壓しつけられるやうで、息がつまるやうだつた。こんな場合にぶつかるのが、彼女にとつては一番厭やだつた。これがありふれた夫婦喧嘩で、何かはつきりした理由から、兩方が云ひたい事を云ひ合つて、不和になつてゐるのであつたら、第三者の入つて行ける餘地もある。然し、片山の家では、それが全く違つてゐた。いつの場合でも、はつきりした理由は表面に出なかつた、いろんな理由があつても、それが爆發する時には、それはみな感情であり、氣分であつた。片山の所謂憂鬱であつた。そして、片山自身の感情がさまり、氣分が明るくなるまではその憂鬱の雲が重たく垂れて、かうした陰鬱な沈默の日が續いて行く。それとともに、食事は不規則になり、不眠の夜は幾夜も續くので、美しいとみんなから云はれてゐる片山のその顔が、まるで別人かと思ふほど、暗く醜くなるのであつた。そんな時の片山を見る事は、留子は厭やだつた。

かうした三人の壓し付けられるやうな沈默を破つて、片山が鋭くなつてゐる聲で訊いた、

「芝の家へは歸らなかつたんですか？」

「ええ……」

「何處へ行つてゐたんです？」

「…………………」

「あなたは實にぐうたら女だね」と片山は少し早口に云ひ出した、「もういい加減に、自分の事位は、もつとしつかりしたらよささうなもんぢやありませんか。いつまでも子供ぢやあるまいし、もうそろそろ三十女になるんぢやないか……行けば行つたところで腰を据ゑて、あつちでぶらり、こつちでぶらりしてゐる、まるで女の浮浪人見たいぢやないか。僕はあなたの兄さんから、あなたの監督をたのまれてゐるんだ、そんな風なやり方をされると、僕はそれを何と辯解したらいいと思ひます。僕はあなた位ゐ無智なぐうたら女を見た事がない、人間はもつとしやんとしたところ

がなくつちや、誰からも愛想をつかされる……僕がこんなに云はなくつたつて、それ位の事の分らないあなただらうか！」

「…………」

「僕には昨日あんたが誰と一緒に出かけて、何處へ行つて泊つたかつて事位は、見當がつく……あなたは兼子さんの家へ行つて泊つたらう……そして、一晩中バカなお喋りをしてたでせう？　相手に輕蔑されてゐるのも知らずに……あなたはむかうの人をいい人だとすぐに思ふんだ、そして正直に何でも喋つてしまふのだ、そんなところは、あなたといふ人は、まるで栓のしてない醬油樽のやうだ。女として、人間として一番恥かしい事は、さういふ無智と無反省なのだ……」

かう云ひ續ける片山の聲は嗄れてゐた。彼は昨夜一晩、どんなにこの女の無智といふ事について、その妻のよし子を責めた事であらう。彼のこの不機嫌は、昨日重田兼子が來た時に、自分が留守をしてゐたといふ事と、留子が兼子について行つたといふ事を聞いたのとに基いてゐた。彼は何で自分の歸つてくる迄、兼子を引留めておかなかつたかと云ふ事をきつかけにして、書齋に呼びつけた妻を、その時からずつと今まで、一晝夜、行かせないで責めてゐるのだ。彼は妻のよし子の來客に對する無愛想を責めた、適宜な時に適宜な處置を取りえない彼女の遲鈍を責めた、良人の感情に對する無頓着を責めた。

「そんな事では困るぢやありませんか、あんたは僕といふものと、もうかうして一緒になつてから何年だと思ふのです。それなのにまだ僕といふ男がちつとも分つてゐないんだ、いや分らうとさへしないんだ、僕の生活を愛し、僕のラヴイを共感しようとする氣がないんだ。あんたはただ型通りの事を習慣的にやつて、それでいいと思つてゐる。ちつとも生そのものに對する感激を有たない、まるで人生の色盲のやうなものだ。感覺を粗末にし、感情を殺して、ちつ

ともそれを恐ろしいと思はないほど鈍感なのだ」

然し、彼のかうした懸命の力を籠めた強い言葉に對して、彼の妻はうなだれて、ぢつとして聞いてゐるばかりで、少しも手應へがないので、これでもかこれでもかと、彼は益々責めずにはゐられなくなる。けれども、妻のよし子は、良人がいきり立てば立つ程、丁度木彫りの女ででもあるかのやうに、愈々堅い硬い沈默をもつて、彼に應へる。

「オイ、どう思ふんです？」と彼は彼女の返答を迫る。然し、彼女はやはり何にも云はない。ただ、「ハイ、ハイ」といふ無意味な返辭ばかりをする。その機械的な返辭が、彼には一層腹立たしく苛立たしい。

かうした苦しい一晩を後にした今は、もう云ふべき事も何もないのだ。ただ、行きがかりの意地で、自分で自分の感情を制御が出來ないで、やつぱりかうして苦しい對坐を續けてゐるのだ。そこへ留子が歸つて來たので、彼の感情は、今や猛然と彼女の方に方向を變へた。何といふ怠惰な女だ、何といふ醜さだ、何といふ愚かさだ、かういふ風に、彼は言葉を盡して彼女を非難した。

「なぜ僕の家には、こんなに氣の利かない、無智な女ばつかり揃つてゐるんだらう？　あなたはあなたで、そんなにぐうたらで、だらしがないし、節子さんは節子さんで、田舍者で馬鹿だし……あなた達の鈍感と無智とは、あの十一にしかならない玲子の聰明に對して、恥かしい事はないですか。ねえ留子さん、僕は本當にあなたのそのぐうたらの爲めに苦しんでゐるんですよ、僕はあなたが恥かしいんだ、僕がこんなに恥ぢ、こんなに苦しんでゐるのに、なぜ當人のあなたが、そんなに氣樂なのかね……え？」

「ほんとにすみません」と留子は云つて、しくしくと泣き出した。その泣き出すために、顏の筋肉が、眼や鼻や口のところで引きつるのを、片山はぢつと見てゐるうちに、その醜さに堪へられなくなつて、彼女のだらしのない長い顏に、ペッペッと唾を吐きかけてやりたい氣がしてくる。いや、それよりも顏をそむけてしまひたい、いきなりどうか

して、そこに泣いてゐる彼女の存在を、一息に拭ひ消してしまひたい、――それなのに、やつぱり彼女から眼が離せないのだ。

彼はほつと溜息ついて、手で額を抑へた。いつも彼は、直ぐに泣いてしまふ留子と、どんなにしても泣かない妻のよし子とを、こんな唾棄したいやうな狀態で見出すのであつた。直ぐ泣き出してしまふ留子に對しては、彼は氣味のいい手應へを感じる事が出來た。打ちおろした鞭が、ピシリと肉に喰ひ込むやうな快感があつた。が、よし子の絶對的な沈默と忍從とは、彼はどうする事も出來なかつた。そして、つひには彼の方で恐ろしい氣にさへなつて來るのだ。そして結局は、彼女のこの恐ろしい硬化を、感情と顏面との死のやうな氷結を、どうにかして、もとのやうに溶かしやはらげようと努力してゐる彼自身を見出す彼であつた。そして、その努力は、彼自身の自己鞭打の言葉によつて始まるのだつた。

彼はよし子を非難し、留子を非難してゐるうちに　その言葉が、次第に自分自身を罵る言葉になつてゐる事に氣が付く。今迄自分が後から後からと投げつけてゐた言葉が、一つ一つ自分にはね返つてくる事に氣が付く。そこに泣いてゐる留子の顏の醜さを、憎惡の眼で見てゐるうちに、彼はこんな女をかうした離れられない關係にしてしまつた自分の愚かさが堪らなくなつて、この自分といふものをそこに投げ出して、鞭ちたい氣持になつてくる。何といふ弱いおまへだ、何といふ淫蕩なおまへだ、どんな言葉を以てしても責め足りないやうな自己嫌惡の情に、彼はその心を苛まれるのだ。彼にとつて、この留子ほど容易に手に入つた女はなかつた、また、これほど從順に、どんな事でも、どんな馬鹿げた痴態でも、云はれる儘にして見せた女はなかつた。彼はどんなにこの女を相手に、妻はもとより、どんな女に對しても、自分に許せないやうな、放埒な遊びをやつたことか！　まるで骨のないやうな柔軟なこの女の肉體には、彼のさうした淫蕩な心を掻き立てるものがあつた。それだけに、心のしらけた後の彼にとつて、その女の無智が愈々

厭はしかつた。かうした繰返しによつて、彼はどんなに言葉と行爲とで、彼女を侮辱し、また自分自身を侮辱して來たことか！　その彼女が、人もあらうに、重田兼子について出かけて、その家に泊る――彼はどういふものか、直ぐに彼女が兼子の家に泊るだらうと直覺した――それを考へただけで、彼は恐ろしい不機嫌に陷らずにはゐられなかつた。そして、それには理由があつた。

重田兼子――彼が最近に最も興味を持つてゐるこの女に對する今の氣持は、彼がこれ迄のどんな女にも感じなかつたやうな、苦いものであつた。はじめ彼はその女を、やはりこれ迄のやうな田舍の女學生上りの單純な女のやうに見くびつてゐた。ところが、此間、日比谷で偶然出會つたのを幸ひ、一緒に歩いたり、食べたりして、一歩立入つて見た彼女は、彼にとつては、すつかり勝手の違つた、しかも不愉快なものであつた。その時の彼女のいかにも彼の腹の底を見透してゐるやうな、そんなにお安くまゐる自分ではないと云ふ誇りを見せつけて憚らないやうな態度は、豫想してゐなかつただけに、一層彼には小憎らしく、小癪にもさわつて、自分をどれ程の美人だと思つてゐるんだと、心で云はずにゐられなかつた。また、この女は處女ぢやないナとも思はれた。が、今は彼女の高慢ちきな、冷たい意地の惡さが憎くて、その意地を折つてやりたい、その意地づくから、愈々進まずにはゐられない氣持になつた。そして、彼女を際どいところまで引きずり寄せて、そこでポンと彈き飛ばしてやるか、又は彼女の肉體に大きな烙印を押して、一生癒えない傷口をあけてやりたいと云つた氣持であつた。こんな複雜な氣持は、彼がこれ迄どの女にも感じない事であつた。で、その日は兎に角、自分の家まで誘つて來て、それで自分のはぐれた感情もごまかし、彼女の心持も後を惹くやうにとしたのだが、今度來たらどうして、それからかうしてと云ふ作戰は、その時既に立つてゐたのだ。ところが、生憎自分の留守にやつて來て、しかもそれについて留子が出て行つたと聞いた時、彼はもう駄目だといふ氣さへした。あの女の事であるから、素知らぬ顏をして、留子を釣出して、いろんな事を聞き出したに違ひない――さ

う思ふと、彼はゐても立つてもゐられない氣持になるのだ。あの女に先手を打たれた氣がして、自分の男性としての誇りが、恢復出來ない程に傷つけられた氣がして堪らないのだ。が、さうかとて、その事に關して留子に訊き正すと云ふ事は、自分に對する誇りからでも、彼には出來なかつた。

彼は兼子の意地惡が憎く、留子の無智が憎く、妻のよし子の鈍感が憎く、女達を罵つてゐるうちに、そんな女どもを相手にして、感情を苛立たせてゐる自分自身が、一番愚劣な、一番醜惡な人間だといふ氣がして來る。たうとう彼は自分も沈默してしまつた。この上何か云ふのは、みな自分を鞭つにすぎないと氣が付く。この一切が、みな自分の感情だと氣が付く。さうなるとすつかり氣が挫けてしまつて、彼は一晩責めぬいたよし子の前にあやまるか、大きな聲で自分の愚劣を怒鳴り立てるかせずにはゐられなくなる。が、彼にはその兩方とも出來ない。彼はもう二人の前にゐるのに堪へられない、一人でゐたい、一人で考へたい、さう思つて、つと立上つて、部屋の外へ出て、洋館の二階へと喘ぐやうに上つて行く。そして、そこの書卓の前の安樂椅子にずつと身を埋めて、彼は兩手で頭を押へた儘、長い長い間、ぢつと身動きもしないでゐる。

「これぢや破滅だ……生活を變へなくちやいけない、何もかも間違つてゐる……」と彼は沈吟する……

十一

たうとう片山の家から、節子が出て行く日が來た。それは長い長い雨期がすんで、カツと暑くなつた七月の中頃であつた。

「それではあちらの方に引越して行かうと思ひます、長い間いろいろお世話になりました……」

彼女がかなり長い前から探してゐた職業が――或る週刊新聞の訪問記者の口が見付かると共に、大久保の方に貸間

を見付けて、愈々自活してやつて行く事になつた時、片山ははじめそれを危ぶんでゐたが、愈々となると、

「人間はしたい通りするのが一番いいんだから、仕方がない、まあ一生懸命にやる事だね」などと云つて、親切な言葉をかけた。

「だが、時々いらつしやい、さみしくなつたらいつでも來るがいい、あなたが馬鹿な事をすると、僕も折角骨折つた甲斐がない事になるから、氣をつけてやる事だね、僕の知つてゐる處へ行く時には、いつでも紹介狀を書いてあげる……」

かう云つた後で、彼は傍にすわつてゐるよし子を振返つて、

「節子さんが新しい生活に入るんだから、今日はうんとうまい物を食べさせたいね……自炊生活をすれば、どうせろくなものは食べないだらう……うまい物が欲しくなつたら、いつでもいらつしやい、一人ぽつりと女がしてゐるつて事は、考へてみても、心持のすさむ事だよ」とあはれむやうに云つた。

支那鞄や、小さな机や、風呂敷包などを俥に積む時には、片山の子供達が眼をくるくるさせて、

「節子小母さん、またいらつしやいね」と袖に飛びつくやうにして云つた。

節子は愈々皆に別れを告げて、片山の門を出て、皆の姿が見えなくなつた頃振返つて、この家でゐた半年程の間の生活を思ひ返すと、いろいろな事が、とりとめなく思出される。中でも、彼女にとつて忘れる事の出來ないのは、片山の鞭韃であつた。

「何といふ田舍者だらう、何と云ふ無智だらう」

かういふ風に、片山はいつも彼女に向つて云つた、

「あなたのやうな感情に盲動するといふ事は、實に恥かしい事なのだ。理智の光を有つてゐない女といふものほど與

ざめのするものはない、反省のない女ほど醜いものはない。僕がいつもかう云つてゐるのに、あなたはちつともよくならない、それに實に勉强が足りない、それではあなたのはじめ云つてゐた決心とすつかり違ふぢやないか……」

から云つて片山から訓誡される度びに、彼女はその言葉があまりに概念的で、はつきり頭に入つて來ないので、默つてゐる。すると、片山は仕樣のない女だと云はんばかりに、一層力を籠めて云ひ續ける、

「あなたは僕の家庭から離れて行きさへすれば、勉强が出來て、いい生活が出來ると思つてゐるらしい。然し、僕は斷言してもいい あなたには聰明さが足りない、誠實が足りない、すぐ目前の事に氣迷ひがする。殊に、田舍者の一番缺點である粗野な性情が、あなたにはとりわけ目立つてゐる。僕はあなたの幸福のためを思つて忠告したい、あなたは國へお歸りなさい、國へ歸つて、あなたに相當の婚家を見付けて、眞面目な農夫の妻になつてはどうです、あなたは農といふものをいやしみますか？ 僕は土地そのものから、直接その生活の糧を得てくる點から、農ほど尊いものはないと思ふ。僕も今の生活が非常に亂雜で、放恣で、現代の輕薄な文化のために、すつかりスポイルされてゐるのが堪らなく苦痛になつたから、さきざきでは、東京をずつと離れた田園に隱栖して、もつと大地に親しんだ生活をしようと思つてゐる位です。あなたが本當に自分といふものを自覺するなら、自分の生れた土地へお歸りなさい……」

片山は最近になつて、とりわけかうした百姓讃美を口にしだした、そして節子に對しては、だからあなたも國へ歸るがいいと頻りに忠告しはじめた。それは彼にとつて丁度詩のやうなものであつた、そして、よし子や留子に云つてゐる時と同じやうに、結局、自分自身に云つてゐる言葉に過ぎないのであつた。けれども、節子には、そこ迄洞察する事は出來なかつたので、この頭ごなしに命令的に云はれる言葉には、ただ重たい壓迫と侮辱とを感ずるばかりで、心はかへつてそれに反撥するのだ。そして彼女は思つた、

「田舍の生活のいいといふ事は、わたしも知つてゐる、けれども今のわたしは、もつとこの都會でしてみたい事があ

る。片山さんの云ふ通り、わたしは無智かも知れない、また野性まる出しの無反省な人間かも知れない。けれども、それはわたし自身の問題なのだから、これから獨りでよく考へて、直して行けばいいので、それよりも、自分といふものが、この片山の家庭とはあまりにかけ離れてゐるから、それで兩方の重荷になるのだから、一日も早く、この家庭から出て行きたい。明日から困るといふ事が知れてゐても、ここを出るのがいいやうな氣がする……」

こんな風に、片山の說諭は、結局、彼女の早くこの家を出たいといふ氣持を强めただけに過ぎなかつた。が、今かうして愈々その家を出てみると、さすがに彼女には名殘惜しかつた。そして、片山のいろんな言葉も、つまりは彼の親切な心から出たものである事を思はずにはゐられなかつた。が、兎角、彼女は解放された小鳥のやうな喜びを感じて、俥の後から步いて行つた。

大久保の彼女の借りた部屋は、もと軍人の家であつたといふ、石の門のあるかなり大きな家の一室で、廣い玄關の傍らの三疊であつた。昨日までそこに大久保郵便局に勤めてゐた靑年がゐたといふ事で、疊にインキのこぼれた痕などがあつた。何處からも日の射さない部屋で、その上天井の板がひどく黑かつた。然しこの部屋は、自炊をするには丁度いいやうに、片一方の障子をあけると、そこに一間の廣い緣があつた。その緣の上には、この部屋の代々の自炊者が、水甕を置いたり、炭俵を置いたり、混爐を置いたりした痕跡が、いろんな條(すぢ)や傷で歷然としてゐた。

その夜、彼女はおかみさんの部屋に行つて、お茶をよばれた。そして、いろいろ話を聞いてゐると、そこへぞろりと銘仙の着物をおひきずりに着た十七八の、色の白い、丸顏の女が入つて來て、引合はされた。おふぢさんといふその若い女が、相場師の妾であるといふ事は、後で聞いた事であるが、その初對面の時に、その女は驚いたやうな顏をして、

「まああんた、一人働いてやつてお行きになるの、えらいわね……でも、早く旦那樣をお持ちになるのがいいんぢや

ないこと？　屹度あんた、お望みが高いから、ひとりゐなくちやならないんだわ」と云つた。

節子は笑つてゐるより外仕方がなかつた。およそ六間ほどあるこの家の東西南北に、それぞれ間借人がゐた。一番いい部屋を借りてゐるのが、この相場師の妾で、その次ぎの部屋を借りてゐるのが、明治大學に行つてゐる三人組の學生で、その部屋におふぢさんが始終入り浸りするので、旦那が來る毎に、それを叱るのだと、おかみさんが後で節子にひそひそと話をしたが、その夜、十二時近くになつて、その相場師といふ男が來て、酒を飲んで、ろれつのまはらぬやうな調子で、いつまでもいつまでも、襖のむかうで、何か話し續けてゐるのが、處の變つたために、どうしても寢付かれない節子の耳ざわりになつてならなかつた。明方に少しうとうとして、眼をさますと、今日も暑くなるらしい日の光が、障子を開いて見通しになる隣家の屋根の南側に光つてゐる。昨夜バケツに一杯汲み込んであつた水で、手を洗つて、それから彼女は焜爐に火をこしらへた。たきつけの新聞紙からもくもくと出る白い煙が、樋合ひを通してのぼつて行くのをぢつと見ながら、彼女はこの自由な、はじめての自炊の朝の爽かな喜びを感じてゐた。食事をすまして、彼女が机の前にすわつてゐると、玄關の間のむかうの、おふぢきんの部屋からは鼾の聲が聞えてくる。

「ちといらつしやいまし」と障子の外から庭の掃除に來たおかみさんが聲をかけたので、彼女が茶の間の方に、長い緣側傳ひに行つた時は、もう十一時に近かつた。

「昨夜おやかましかつたでせう……醉つぱらつて來ましたからね」とおかみさんは、その部屋を顎で示しながら、ニヤニヤして云つた、「うるさいんですよ、あの二人は……何でもあの娘さんは、橫濱の宿屋の娘で、十六の時からあんな風にお妾さんで通してゐるんださうですよ、なに、商賣のお妾さんでさ、今の旦那は三人目だと云ひますよ、そんな癖に、自分の器量を鼻にかけて、實に癪にさわりますよ」と、のべつにこれ迄のお妾さんに對する鬱憤を洩らすのだつた。

たつた一日の違ひで、かうしてすつかり違つた世界に入つて來た節子は、何もかもが物珍らしかつた。兎に角、彼女は自由で嬉しかつたので、誰に憚りもなく、かうしてゐられるといふ事が嬉しくて仕方がなかつた。けれども、彼女には、これと同時に差當つての不安と心配とがあつた。二三日して勤めに出なければならない仕事のために、今すぐに要るものは着物であつた。片山の家にゐた間に、大抵の着物は着古してゐた。もうセルや羽織などは要らない代り、何よりも帶のいいのが必要であつた。然し、彼女は田舍から持つて來た古い母親ゆづりの博多の帶の外には何もないので、かうしたいろいろの事を考へると、胸が重くなつた。兎に角、まとまつた金が欲しかつた。彼女としては、こんな着物や金の事を片山の家で云ひたくはなかつた。國へ歸れと云ふ片山や、いつもゴタゴタしてゐるよし子や、話し甲斐のない留子に、助けて貰へるといふ當てがなかつた。それにまた、都會に慣れない彼女には、かういふ場合のやりくりの才覺もつかないので、やはり毎度の事ながら、並木夫妻のもとへ行つて相談して見るより道はなかつた。

夕方、早く食事をすまして、さう遠くもないので、彼女は歩いて代々木の並木の家へと訪ねて行つた。

「まあ節子さん、あなたもう片山さんの家を出たの？」と彼女を迎へて、並木の妻の政子は云つた。

「仕事の方はうまくまとまつたこと？」と政子は何よりも先きにその事を訊いた。その仕事は、はじめの彼女が仲に立つて、話して置いてくれてあつたものだからだ。

「ええ、有難う、お蔭できまりましたのよ、明後日(あさつて)から行く事になつてゐるのですよ、それで今いろいろ支度をしてゐるんです」

「それはよかつたのね、思つたよりうまく行つたわ」と政子は世話好きな女の特有の姉(ねえ)さんらしい優しさで云つた、

「ほんとによかつたわ……やはり一人になつて自由にやるのが愉快でせう？」

「ええ、さうですとも」と節子は心からうなづいた。

並木は何か勉强でもしてゐたのか、机の上に開いてあつた横文字の本を見ながら、團扇をばたばた使つてゐたが、こちらの方を振返つて、

「さうばかりも云へんだらうが……兎に角、片山さんの家を出られたのはよかつたですね」と云つた。

こんなにして、八時頃まで、節子は政子と片山の家の事や、留子の事などを話し込んで、それから今日の用向の事を話すと、政子は「あまりいいのぢやないけれど」と云つて、帶だのその外こまごましたものを出してくれたので、當分貸して貰ふ事にして、それらを包んだ小さな風呂敷包をかかへて、彼女が歸らうとする時に、政子が一緒にそこまでと云つて、家を出た。

「お土産買つて來てあげるわよ」と彼女は玄關をしめる時に、良人の方へかういふ優しい言葉をかける事を忘れなかつた。

並んで歩きながら、政子は訪問記者としてのいろんな苦しい場合の切り拔け方とか、人との應接などに心がけなければならない事などを、いろいろ注意した。節子はそれを心から感謝しながら、注意して耳にとめた。

「馴れれば何でもない事よ……一寸した機轉がききさへすればいいんですからね、それからあゝり神經過敏ぢやいけませんよ、女の人がしつかりした働き手になれないのは、大抵の場合、神經や感情が細くつて物にこだはるからですよ、大膽になる事が一番です」と云つたりした。

政子は節子と歩く時にいつもするやうに、いかにも引き廻すやうにしながら、明るい廣い通りよりも、ほの暗い横丁を選つて、いろんなお話をしながら、角筈の方へと出て行つた。そのとき、節子が云つた、

「もう並木さんは、すつかりお丈夫なやうに見えるわ」

「もういい加減丈夫になつてくれないと困るのよ……身體の方はもう後がへりするやうな事はないでせうけれど、あ

の人此頃氣持が暗いのですよ、だから一寸困る事があるの、鵠沼から歸つた當座の元氣が、大分なくなつたやうで……」
さう云つて彼女は暫く默つてから、少し悲しみを帶びた調子で呟くやうに云ひはじめた、
「わたしはつまらない女よ、愛が足りなくて……わたしといふ女は、ちつとも並木を幸福にはしてゐないのよ、それならわたしが並木を愛してゐないかと云ふと、いいや、さうぢやないのよ、わたしあの人を愛してゐるんです、けれど、あの人のあのさみしい心持や、嚴格なほど、ピュリタンなところが、恐ろしすぎるんだわ……わたしの心は、あの人の持味にちつとも適してゐないのよ、だからわたしの心ひとりが躍つたり、騷いだり、泣いたり笑つたりしてゐるだけで、ちつともあの人をわたしの伴侶に引つ張り出せてゐないわ、人間はかうも孤獨なものかと思ふ程だわ……唇と唇を押付け合つてゐたつてさへ、冷たいものが、すーッと入つてくる、なぜでせう？」
かう云つて、政子はそこに立止まつた。人通りのない暗いとこで、眼には生垣の長い連りが、門燈に照らされて、ぼんやりと連つてゐるところであつた。
何と云つていいか分らないで、節子も一緒に立止まつて、氣遣はしさうに、仄かに浮んで見える友達の顏を見てゐると、政子はまた歩き出しながら、獨白の調子で云ひ續けた、
「ねえ節子さん、この人生つてものは、ほんとにむづかしいものね、あなたはさうは思はなくつて？　人生と云ふよりか、人間の心つてものが恐ろしいんだわ、深い深い淵のやうで……のぞいてみると、何があるんでせう？　そこには恐ろしい恐ろしいものがあるわ……」
かう云つて、政子はそれきり默つてしまつた。節子も何と云つていいか分らないで、默つて歩いた。彼女は政子がいつも、それ程でもない事にでも、何か深い意味をつけては、物事を大袈裟に誇張して考へたがる癖のある事を知つてはゐたけれど、先刻のあの寂しさうに見えた並木の樣子と思ひ合せると、今夜は政子の述懷が、何だか妙に身につ

まされるやうな氣がした。

やがて、いろんな店のあるところに來ると、そこで政子は、菓子だの、野菜だのを買つて、それをメリンスの風呂敷にしつかりと包んで、出て來るとニッコリして、

「お待たせしたのね」と云つた。

町のはづれの停車場まで送つて來てくれて、プラットフォオムの柱にもたれて、風呂敷包み片手に、ぢつと見送つてくれる政子の姿を、驛の灯の下に小さく見かへつた時、何とは知らず、節子は孤獨の感じがした。

「あんなに云つてても、やはり滿足さうに幸福さうに見えるではないか、どうもあの人は、幸福を幸福だと云はないで、不幸だと云つて、二倍に悲壯味を加へた幸福を味はうとしてゐるやうに見えるわ……」と彼女は心の中に呟いた。

十二

節子の乘つた電車を見送つてから、政子は風呂敷包をかかへて、停車場を出た。彼女はこの頃の自分の屈託を、すつかり節子に話したので、何だか胸がスーッとしたやうで、あんなにあきたりない氣持のしてゐた、家で本を讀んでゐる良人の信三の事が、今は頻りになつかしく思ひやられる。いつか彼女は舞臺で見かける世話女房の姿を自分の上に投げかけて、その影像を享樂しながら自分の家に歸つて行く。そこらの樹立にも家の上にも、ほんのりと夜靄がかかつて、それが實に柔かで快い。まるで自分が水の中にうかぶ魚族ででもあるかのやうな氣がして、政子は暫くうつとりと何も思はないで歩いてゐたが、ふと良人を誘ひ出して、これから一時間位、そこらを歩いて見たいやうな氣がした。で、彼女は自分の家に入るや否や、

「ねえ、あなた。どんなに美しい夜の靄だかお分りになれて！　とてもその儘見すごせないわ、あの美しい靄の中を、

二人で一寸歩いて見ない？　何處かからモスクワの郊外でも歩く氣分が味はれるわよ」と云つた。

「…………………」

机に向つてゐる並木は、それには何とも答へないで、讀みさしの書物の頁を一枚めくつた。

「ねえ、あなた」

「何かい……」

「まあいやだ、今わたしの云つた事、ちつとも聞いて下さらなかつたの？」

「アア……」

「つまんない、つまんない……と突然、政子ははぢけたやうに呟いた。その刹那に、彼女は、若しこれがあの人だつたならば、かういふ時は、すぐ一つの息のもとに賛成してもくれ、喜んでもくれ、何處までもおなじ空氣、おなじ氣分に浸つてくれて、自分の折角の感興を見殺しにするやうな事は決してしないに違ひないといふ考へが、もやもやと胸一杯につき上つて來たのだ。

「つまんない……つまんない」となほも繰返しながら、彼女は暗い臺所に入つて風呂敷包をといた。けれど、そのおみやの菓子を良人のところに持つて行く氣もしないので、わざとガタンガタンさせながら、そこらあたりを片付けてゐると、飼猫の白が甘えるやうに啼きながら、彼女の脚にその毛をすりつけて來た。

「あア、白ちやんか……白ちやんか、よしよし」と云つて、彼女はいきなりその猫を抱きあげて、力限りにキュッと抱きしめた。そして猫の冷たい鼻のあたりを、自分の頰でべたべたと撫でまくつたので、猫は苦しみもがいて、頻りに啼き立てた。

並木はちらと目を上げて、一寸眉をしかめたきり、何も云はないで、本を讀みつづけてゐたが、この時、また顔を

上げて、
「オイ」と硬い聲で臺所の方に呼びかけた、「そんなに啼かせないでくれね」
「いいぢやないの、少し位ゐ啼いたつて……」と彼女は不機嫌に云つて、猫をはふり出した。
夫婦の間の關係といふものは、こんな自分達の間柄のやうなものだらうかと、政子はいつもいらいらして考へる。何につけても、寂しい寂しいと思ふ。腹が立つなら立つで、いつそ思ひきり地面にはたき付けてくれればいいのに、可愛いいなら可愛いいで、息づまる程に抱きしめて、燃えるやうな接吻で、身體中を蔽うてくれればいいのに、その どつちともつかぬ生ぬるい物優しさが、彼女にはいつも物足りなくて、不滿でならないのだ。勿論かういふ氣持の時には、よく氣を付けなくてはいけないといふ事を、政子は百も二百も承知してゐる。然し、若しここに自分にピッタリ心の合ふ男性があつたなら、それをしつかり友人に持つてゐたい、それは罪でも何でもない、さうした氣持が、彼女の良人の友人の一人を、ずつと自分の手もとに引きつけさせたのであるが、その友人がだんだんと心の奥深く入り込んで來るのにつれて、それが罪ではない、罪ではないといふ事の考察――むしろヂャスティフィケエションが、どんなに彼女の心の底に重たく横はつてゐるもののまはりに、聲を擧げて走り廻つてゐた事であらう。實に政子は、この事のために、男女關係の更新を說いた新刊の書物や、夫婦の問題を取扱つた露西亞の小說などを、どんなに注意して讀んだか知れなかつた。
「最後のただ一步――ただ一線、それをさへ踏み出さず、踏み越さなければ、何の罪があらう、何を恥づる事があらう！」
かういふ風に、やつと考への定まつたのは、かなり後の事であつた。そして、これからは、もつと安らかな、もつと自由な氣持で、生きて行きたいと思つた。その時分には、彼女の友人は彼女の心から、切つても切れぬものとなつ

てゐたのだ。

とは云へ、良人には、何處までも何處までも、母のやうに姉のやうに、心やさしい彼女であつた。そして、いつのまにか、一種の慣れが出來たと云はうか、感情にもつとゆとりが出來たと云はうか、もうそんなには、感情の滿足が得られないからと云つて、良人に飛び付いて行かうとする、あの一種異常な昂進の狀態に、自分を露骨にして見せるやうな女ではなくなつてゐた。そして、あの人——一週間に一度か二度は必ず訪ねて來る長島に對する心持も、もう前のやうに苦しい、壓し付けられるやうな無理を持つたものではなくなつてゐた。

何處までも何處までも、自由に、こだはらないで行かう！　若し私の心が、どんなに長島に惹かれて行く心であつたからとて、この人妻としての最後のものさへ離さなければ、その最後の一線をさへ踏み越さなければいいんだもの……これが彼女の自己辯解であつた。また、長島さんとても、そこまで突つ込んでまで、私を愛する人であらうか？

それには政子は否定したいやうなものと、肯定したいやうなものとの二つの心の動きを感じた。

「ねえ、あなた、もしねえ……わたしたちがお互ひに、ほかにいい人が見付かつたとしたならば、どうして？」

いつかの夜の寢ものがたりに、彼女がかう云ひ出した時、

「その時は、その時の事サ、でも、まさかね……」と、いかにも寂しげに云ひ捨てた良人の心持といふもの、それが政子には淚ぐましかつたのである。ああ、どうして、この人を捨てて、他に私の心のすみかがあり得ようぞ…

「何もかもわたしのバカらしい幻想なのだわ！」と彼女は心に呟いた。

だが、かういふ時だけは、さすがの彼女も、その日一日靑い顏をしてゐた——あの恐ろしい夢を見た夜のその翌日の重苦しい惱ましさ。云ふに云へないおちつき、たのしさ、そして柔かさ、手には手をかけ足には足をかけて、ただの一言ものは云はずに、荒い息づかひをからみ合せ、そのままぢつと生きてゐるとも死んでゐるとも知れないやう

な狀態で、何とは知らず、溫かい湯槽の中にすつぽり浸つてゐるやうな感じで、何だかずつと遠方に小さく、何かぼんやり白く見える……ふッと何かに驚かされたやうに、見るともなく見ると、自分をぢつと見まもるその顏が、ありありと、あの長島ではなかつたか！

「ああ、あなたとは知らなかつた…… あなたとは知らなかつた……」

から叫ぶやうに云つて、ツイとそこを離れて立上つた時に、夢もまた破れて、苦しい息づかひの彼女は、ぐつたりと眠つてゐる良人の傍にすわつてゐたのである。夢は五臟の疲れとは云へ、かうもまざまざと恐ろしい夢を……と、彼女は寢卷の袖で顏を蔽うて、自分の心のこのあさましい姿にわななかれて、そのあまりにもまざまざしい感覺的なものを振り落さうとして、彼女はもがいたのである。こんな事があつてからは、ただほんの心の上の友達だとばかり考へてゐた長島の存在が、こんなにも自分の魂に蛇のやうに卷きついてゐるのかと思ふと、空恐ろしい氣がして來て、彼女はそれをさへ踏み越さなければといふその一線の守りの安心も搔きむしられて、又もや新しい苦しみの中に投げ込まれてしまつた。

時候の變り目――秋口の冷えで、彼女はいつも冷え性の身體が、格別冷えたやうで、その冷えから感冒にかかり、胃腸の方をもそこねたやうで、なかなか寢込んだりする彼女ではないのであるが、或る日、たうとう社を休んで、床を取つて寢てしまつた。

「なに、大した事ぢやないのよ、でも、ひどくなるといけませんから、今日一日寢てるわ」

かう云つて、良人が出て行くのを寢床から見送つて、そして彼が玄關の方に行つた時分に送りの接吻のやうにして、「おみやよウ……」と、あの特別の感情のこもつた慣用語を投げた。けれど、この寢床の中から良人を送り出す氣持は、彼女にはどんなにか眞新しいものであつたらう、今迄あまりにも長い間、良人に送られて出てゐた彼女には！

「もうどれ位行つたらう？……」

かう心で、良人の距れて行つたほどをおほよそ測りながら、肩つきのほつそりした、何かかう、薄か萱かのやうに靡きやかに見える、小さく小さく消えてゆく影――それを心の中でぢつと見送つてゐると、ふとホロホロと涙のこぼれてゐる彼女の頰であつた。

かはいさうな、かはいさうなと思はずに、何とあの人を思はうか……かう心に呟いて、彼女は何とは知れず、無性に悲しい、辛い、佗しい氣持になつて、ぢつと天井を仰いだ儘、冷たい雫が頰を濕ほすのにまかせてゐた。

だが、どうしてあの人は、あんなにいつも寂しさうなんだらう？　いつも靜かに默つて、ぢつと一つところにすわつてゐられるやうな人……心がいつも平衡を保つてゐて、潮のさしひきのやうに、冷熱の度合のわからない人……それがあの人を寂しく見せるのだらうか？　それにしても、どうしてあの人のあの顏も、あの心も、あんなにサバサバしすぎてゐる事であらうか、もつと脂ぎつてゐるとよいのに、もつと血の氣が燃え溢れてゐるとよいのに、パッとその黑い双眼に熱情をこめて、强い抱擁にと、物狂はしく迫つてくる人であればよいのに……だが、それはあの人の持ちまへのものではない。あの人にはそれが許されてゐないのだ。享樂のため、感激のためではなくつて、自制のため禁欲のために生れたと云ふやうな人なのだ。何處か淸らかな澄んだ感じのする人ではある、そしてその淸らかさは立派なのに、なぜ私はそれを尊び、それをあがめないのだらう？

「でも、あまりに寂しいわ……もの足りないわ、あまりに弱くつて、生き甲斐がなくつて……」

かういふ風に考へてゐると、彼女は又しても、いつものやうに、もつと違つた男性について考へずにはゐられなくなる……

この思ひは暗い、甘くして暗い……

蒲團をすつぽりと頭からかぶつて、彼女はやや熱ばんで、ねばねばする乾いた脣を感じながら、とりとめもない思ひを追うてゐるうち、いつとは知らず夢路に入つたやうであつた。

………………

「え……」

かう彼女が高い返辭をしたのは、誰かの訪ひの聲を感じて、眼ざめたからであつた。

「お留守なんですか？」

聲。

「え」

彼女は首をもたげた。

「政子さん、ゐて？」

聲。

「ええ……」

かう云つて、政子はパッと赧くなつたが、すぐ褪めた。

「上つて行つてもいい？」

聲。

「ええ、いいんだけども……」

「どうしたの？」

聲。

「かぜ……」
「かぜ……いけないね」
聲。
そして、もう入つて來た。
あの長島が入つて來て、そして、政子の枕元にすわつた、なれなれしい樣子で。そして、その顏には、一杯の愛をたたへて。
「それはいけないね、熱があるの？」
「さあ……あるかも知れないわね」
「苦しい？」
「いいえ、そんなでもないの」
沈默。
…… …… ……
時計の音。
この苦しいやうな甘いやうな、泣きたいやうな悲しいやうな、二人きりの時間の味は、あまりに濃い。政子はむせかへるやうな氣がする。磁氣のそばにゐる塵のやうな身のあぶなかしさと云ふやうなものを感ずる。どうすればよいか……今さらに、長島を上げた事がくやまれる。とりかへしのつかない事をしたんぢやあるまいか？　この心のときめきは、どうしていいのだらうか？　たまらないやうな氣がして、政子は寢返りを打つた。
「苦しいの？」と長島は、いかにも氣遣はしさうに云つた、それが何かから、手を差し伸べて、彼女の額の熱をはか

らうとするやうに思はれた……

　政子は發作的に云つた、

「あのね、すまないけど……」

「なアに？」

「おひやがほしいわ」

「さう……」

　かう云つて、長島は氣輕に臺所の方へと立つた。

　あゝ行つてくれた、かう思ふと、彼女はほつとした。そして、彼を、この次ぎには、歸つてもらはうと思ふ、その口實を思ふ……もつとゐてもらつてもいいかしらとも思ふ。

「少し一杯すぎたかナ」

　かう云つて、長島はなみなみと冷水の入つたコップを持つて來た。そして、起き直つて、首をもたげて、上眼にこちらを見る政子を、しみじみと見て、その熱のために上氣して赧くなつてゐる顔を美しいと思ふ。

　コップの水は、冷たく喉に流れて、政子の心持をはつきりさせた。彼女は心の餘裕をとりもどして、そして、もう先刻(さつき)のやうな、わけもない不安は消えてしまつた。枕もとに長島を置いて、かうして寢てゐるといふ事が、少しも心配したり苦しんだりするやうな事ではないのを感じる。

「此の風邪(かぜ)は、ただの風邪(かぜ)かしら？」と政子は上眼に、壁の方と、彼の顔とを等分に見ながら云つた。

「なぜ？」

「でも、少し胸が痛いから……」

「胸の痛い位なんでもないだらうね」と長島はなにげなく云つた。
「さうかしら、わたし、もしかしたら、あの人のがわたしに來たのぢやないかしらと思ふの」
から云つて、彼女は少し冗談のやうに、からかふやうに笑つた。
「そんな事はない」と長島は眞面目な顔のままに、急いで打消した、「でも一度、よつく病院で見てもらふといいね」
「さう、わたしもさう思ふんだわ」
暫く沈默が續いた。
この重たい沈默をはらひのけるやうに、政子が少し高調子の聲で云つた、
「いいのよ、心配しなくつたつていいのよ、このわたしがあんな病氣になんかなるものでせうか、それに並木とわたしとは、何から何まで違つてる人間ですから、おなじやうな風になりつこなしよ……ねえ、さうでせう」
「さあ、どうだかね」と長島は云つて、苦しさうな顔をした。そして、小聲でシリアスに云つた、
「並木君は此頃あなたを愛してくれますか?」
「ええ、愛してゐるだらうと思ふわ!」と政子は云つて、どうして愛してゐるわと云ひ切らなかつたのだらうと思つた。何だか急所を衝かれたやうな、苦しい面伏なやうな氣がして、話を變へるために、彼女は繪の事を持出した。長島の繪の方の事については、彼女は何から何まで通じてゐた。それで彼女の質問や激勵は、彼の興味の焦點に觸れるので、彼は彼女の言葉に、それと知りながらも導かれて、だんだん話に調子づいて來るのだ。
「まあいいこと!」と政子は長島の話の切れ目を待つて、嬉しさうに云つた、「いつもいつもあなたは、生活が張り切つてゐて、生きられるだけの幅で生きてゐるやうでいいわね、わたしさういふ生き方が好きなのよ、どんな沈んだ心でも、あなたとお話してゐると、引き立つて來るのよ。なぜでせう、あなたが純で眞實だからだわ」

から云つて、政子はぢつと彼を見た。すると長島は、燃えるやうな眼で、政子の凝視を迎へて云つた、
「それは僕からあなたに云ひたいと思ふ言葉ですよ、僕こそあなたにどんなに慰められ、勵まされてゐるか分らない……僕いつもあなたの共鳴にどんなに感謝してゐる事でせう……ただ、僕のデリカシイが、今迄その事をもつと大膽に云はせなかつただけです」
そして、ぢつとその眼を政子の眼の上にやすませる……それは「情熱の眼」と、政子が心ひそかにやさしく呼んでゐる輝やかしい二つの眼である。その眼が、今は堪へられないその眼が、あの強い言葉を語るのではないかと思ひまどふ、「ためらはないで……僕の方へ來たらばどう？……」その眼が、あの惱ましい恐ろしい言葉を語るのではないかと思ひまどふ、「罪でもいいぢやありませんか……一緒に強く勇ましく生きようぢやありませんか、二人の幸福な生甲斐のある生活……そのみちは、ただあなたの決心次第で展けるのだものネ……」して、そのおそれ、思ひまどふ眼を避けられない、見かへさずにはゐられない自分の眼よ、——今日か、今日か、ああ今日が、この長い間からの抑へれたものの、心の焔の燃えひろがる時ではないかと、おそれ、惱んで、自分の眼を防がう、防がうと彼女は、たうとう枕の上でぢつと眼をつぶる、眼をつぶりながら、
「まあ、そんなに云つてはいけないわ、もう……もうその上云つてはいけないわ……」と熱にうかされた譫語のやうに云ふ。
「なぜ？　いいぢやないか」と長島は云ひ續ける、「僕はあなたの心といふものを、どんなに自分の生活の中でいつくしんでゐるでせう……この頃中、ずつとあなたは、僕の生活の眼でした、そして、僕のあれでした……あの力のもとでしたよ、僕の魂を點火する火でしたよ」
「厭や……もう云つては厭や……」

「いいのよ、いいのよ、云つてしまひたいのだ、ねえ、云つてしまひたいのだから……」

「いけないわ」

「…………」

「いけないわ」

「…………」

「なんにも云はないのがいいわ、云はないでも分つてゐるんぢやないの……」

「…………」

「分つてるのよ、だから……だからね」と彼女は一生懸命に云つて、そして蒲團の中に小さくなつて、そして、燃えるやうな身體の熱、熱の匂ひにポツと顔を赧らめながら、その赧らんだ顔を心持ち長島の方からそむけながら、ぢつと眼をふさいだ儘、この恐ろしい時間を、どうか、ただこの儘に、ただこの儘にとねがふ……

が、その時、突然、彼女は少し蔭の方に向つてゐた自分の顔の上に、××××××……その重たい額の上に、×××××××を感じた、と同時に、××××……

「ああ……いけないわ、そんな事をしちや……」と殆んど反射的に彼女は云つて、パツと眼を開くと、その眼のつい上に、殆んどすれすれに、長島のカツと赧くなつて顫へてゐる顔が……

「いけないわ」

「…………」

「×××、×、×××……××××××」

「…………」

「分つてるのだから……」

彼女は自分の頸に觸れてゐる長島の手をパッと振りはなして……そして、××××××、また急いで眼をふさいで、

「ね、もう歸つて……もう歸つて……」とくりかへした。

そして、病氣の熱は、夢うつつの彼女を、苦しい深い眠りへとみちびいて行つた。そして、間もなく彼女はすべての意識を失つてしまつた。

名状の出來ない厚い闇のかたまりの中に、浮きつ沈みつして、手毬のやうにころがつてゐるのだ――彼女の眠りの中の心は……

十三

ここに一人の寂しい彼――並木信三が、その日の苦行、それは恐ろしく單調な、機械的な、何の目的もないパンのための勞働である、それをそのまだ十分健康でない身體で耐へ忍んで、たうとう夕方の解放される時が來て、同じやうな澤山の勤め人たちと一緒に、それらの人々の揉み合つてゐる省線の電車で、その後部車掌臺の隅のところに立つて、もう電燈のついてゐる街上の夕景色を眺めてゐた。そんな時の彼の心には、いつも疲勞とも哀愁ともつかぬ沈んだ感情があつた。萬世橋を出て、電車がずつと低い方へ下りて行くと、心なしかお濠の水もうすら冷たく白みわたつて見え、その上から吹いてくる夕方の風が、彼の襟首のあたりにまとひついた。

電車がお茶の水驛でとまつた時、そこでもどやどやと乘り降りする乘客の後から、一人の女が慌しく入つて來て、そこの扉の傍らに立つた。信三が何氣なくその方を振り向いて見た時、

「今お歸りですか？」とその女は親しさうに微笑んで、彼に聲をかけた。

「あ、節子さんですか、あなたもお歸り……？」

「いいえ、わたしはこれからまだもう一軒お訪ねしなけりやならぬ家があるんです、今夜の七時頃に時間をあけて待つてゐるから來てくれと云ふ事ですから……」

「それは大變ですね、夜までも訪問するんぢや堪りませんね」と並木は云つて、節子のかうした職業にやや慣れて來たやうなものごしをぢつと見ながら、

「もうどれ位になりますか、あなたがお働きになるやうになつてから？」と訊いた。

「二月と少しになります……まだどうもまごまごしてゐますわ、政子さんのやうにてきぱきやれない性分ですから困りますわ」

「そんな事もないでせうが……」

「政子さんはどうしてらして……」

「あれは此間中やすみました、でも、大した事はないんです、今日も寢てはゐたやうですがね……多分寢て、退屈がつてゐる事でせう、もしおひまがあつたら話に寄つてやつて下さい」

「まあさうですか、ちつとも知りませんでしたわ」と節子は一寸驚いたやうに云つた、「あんなお丈夫な方ですもの……屹度お疲れが出たんですわ」

「さうかも知れません、あれもこれまで隨分無理をして來ましたから……」

そして、電車が四谷まで來たとき、節子は、

「どうぞよろしく仰しやつて下さい、近いうちにおたづねいたしますけど……」と云つて、下りて行つた。ものやさしい並木を、何となく寂しく思ひながら。並木は並木で、その後姿を見送つて、「彼女も今日一日の奔命にしたたか

疲れてゐるナ、あんな荒んだ顏をしてゐる……やつぱり女に外の勤めは無理かナ」と、節子の身の上を佗しく思ひやつた。

彼が歸つて來ると、家の中は明るかつた。そして、彼の膝のところには、すぐ猫が來て、その身體をすり寄せる―寒い夕はいつもかうするのが猫のならはしである。

書齋の片隅には、彼の妻があちら向きになつて寢てゐる……あゝ、あかりに顏をそむけて……

「今、歸つて來たよ……」

「………………」

「寢てゐるのかい？」

「………………」

もしやと信三は、その方にすり寄つて、蔭になつた顏をのぞくやうにして、手を彼女の額に當てて見ようとして、それが不圖彼女の頰のあたりに觸れた時、そこには彼の掌を濡らす何か冷たいものがあつた。

「おや、泣いてるの……」

「………………」

「政子は泣いてるの……」

「………………」

「僕の歸りが遲くつてわるかつたね……」

「………………」

何と云つて見ても、彼女からの返辭はなかつた。それで彼女はもう寢てしまつたのだらうと思つて、彼は自分で夕

飯の支度にとりかかるつもりで、臺所の方へ行かうとすると、そのとき不意に、政子がむつくりと起き上つて、赤くはれた眼をしばしばさせながら、かいまきの襟を、きゆつきゆつと首のところに引き寄せながら云つた、

「今日、どんな事があつて？」

　それは彼女がいつも彼の歸りを迎へる言葉であつた。良人の事はどんな事でも訊かずにゐられないのが、彼女の習慣であつたから……けれど、今はそれが餘りに不意であつたので、信三は吃驚したやうに彼女の樣子を眺めながら、

「今日は別に何もなかつたが……氣分はどう？　今起きたの？」と訊いた。

「ええ」と政子はうなづいた、「別に何にも……ほんと？」

「ア、さう、歸りに電車の中で節子さんに會つたよ、よろしくと云つてゐた……」

「フン、さう……その外に？」

　それには答へないで、信三は訊いた、

「留守に誰か來た？」

「いいえ、誰あれも……」と政子は心持ち眼を白くして云つた、「誰も來なかつたわ」

「長島君が來やしなかつたか？」

「いいえ」と政子は首を振つた、「あの人來ないわ……」

　……來ないわ、來ないわ、來ないわ……と、彼女は繰返し自分の心に云つた。そして、その後で、いつもならば、何氣なく云へた事が、云つたつて別に差支のない事が、――單に長島が來たといふだけの事が、どうして自分に云へなかつたのだらうと、彼女は思つた。いや、云つてしまはうとも思つた。今云ひ出したら、かへつて變だ、良人の心に暗い影を投げ、あの寂しい心を一層寂しくしてしまふに違ひない、こんな事で彼の心を苦しませて、それが何にな

るだらう、どうせ何でもない事なんだもの、どつちでもいい事なんだもの……と、一生懸命に自分に云つてゐるうちに、彼女は發作的に云つた、

「ねえ、わたし、明日にでも旅へ出るわ」

から云ひ出してから、政子は自分でもそれがあまりに突然なのに驚いた、驚きながらも、その言葉によつて、旅をしたいといふその考へが、強い實感となつて彼女の胸に湧き上つた、

「ねえ……こんな風な生活をしてゐちや、二人のために惡いんですもの、折角あなたの病氣がなほつて、いい狀態になつたばかりのところですもの、隨分今は大切の時ですもの……少し位ゐ借金したつていいわ、ねえ、わたしを旅に行かせて下さい……」

「なぜ、急にそんな事を云ふの？」と並木は氣づかはしさうな顏をして、なだめるやうに云つた、「そんなに熱があつては、行けるかしら……」

「熱なんて、心の持ち方で、いくらでも高くもなるし、抑へる事も出來るわ……遠い旅はそれでも駄目ですけども、房州あたりならば、氣樂に行けるのぢやないかと思ふの……それに、空氣のいいところへ行きさへすれば、なほるわ、わたし、前からよくさう思つてたの、——あの房州の千倉へ行きたい行きたい行きたいと……」

「千倉へ！」と並木は繰返して、默つた。

それは、いつか畫家である長島が、一夏寫生のために滯在してゐた事のある砂濱で、そこからの彼の繪葉書が、政子や自分宛てに一二枚も來てゐる。そこへ行きたい行きたいとは、政子が前に時折り云つてゐた事であつたが、今かうした時に、思ひがけなくその「千倉」の名を聞いたやうな氣がした並木は、妙に、自分でも理由の分らない不快な氣に襲はれてしまつた。

「千倉もいいだらうけれど……僕は」と並木は云つた、「伊豆の方が、伊豆山か、長岡か、それともずつと南の谷津あたりの方がよかアないかと思ふね」

「でもね」と政子は佗しげに云つた、「少し遠すぎるわ、まさかの時に、あなたが直ぐとは來られないぢやないの……伊豆は暖かくていいんだけれど、それぢや寂しすぎるわ、やはり、日曜には、いつでもあなたがたづねて來てくれる事の出來るところが……千倉だと丁度いいとおもへるわ……」

「ぢや、そこに定めていいよ……」と強ひて彼女の心に逆らひたくなかつた彼は、素直に同意した、「出かける人にとつて、一番氣に入つたところがいいからね」

「さうよ……」と云つては見たが、政子は良人のあまりのもの和らかさに、何だか氣負けがして、一寸きまりわるさうに呟いた、「わたしは何處まで我儘だか知れないわね……」

けれども、この旅に出るといふ不意の思ひ付きが、彼女の昏迷した心を、どんなに輕くし、平靜にしたか知れない。あの暗い長い時間——深い眠りから醒めて、そこにはもう長島もゐない、自分ひとりの家の中で、熱にうかされたやうな一種異樣の昂奮で、一生懸命に彼を、と云ふより自分の心を押し止めてゐたあのシインを、夢のやうに想ひ出してゐると、何とも云へない佗しい、うつろな心持になつて、まるで世界に自分だけが生きてゐるやうな孤獨感に襲はれて、そして、どんなに良人の歸りが待ち遠しかつた事であらう。それなのに、良人が歸つて、聲をかけて、そして、額に手まで當てたとき、その時すぐには返辭が出來ないで、默つて、寢てゐる風を裝つてゐた間の苦しさ！　こんな事は、彼女のこれ迄にない經驗であつた……けれど、それも過ぎてしまふだらう、また、過ぎてしまはなければならない、早く早く……そして、旅に出て、暖い海岸を、やはらかな日を浴びながら、なんにも思はずに、ゆつくりゆつくりとさまようて行く、その自分の姿を想ひ浮べると、解放されたやうな明るさを覺え、それが何とも云へない幸福

に感じられる。いつも心の乾くやうな仕事にばかり追はれて、まるで輪轉機みたやうに廻轉してゐた自分のほんたうの生活が、そこではじめて取りかへされるやうな氣がする……

「ねえ、いいぢやないの……白い波の打ち寄せる海邊を、鴉がカアカア……あまの子供が眼をパチクリ……ねえ、みんな暢氣で、莫迦らしいほど暢氣で、みんなわたしの方を見て、何でそんなに屈托なんかしてるのつて、不思議さうに訊くのよ……」

こんなやうな事を、妙にはしやいだ氣持になつて、――一つは妙に上機嫌の自分を良人に見せたいと思ふ心も手傳つて、彼女はとめどなく話した。それからいろいろ旅の事や、これ迄見た田舍のいろんな思ひ出やを――が、話せば話す程、後が寂しくなるのをどうする事も出來なかつた。氷よりも冷たく冴え返つてゐる頭のしんの何處か一角から、誰かが、意地のわるい皮肉な調子で、嘲つてゐる聲を聞く、

「なかなかいいお芝居が出來ますね……」

どうしてもごまかせないものが、そこにゐるのだ。そして、鋭い眼で自分を監視してゐるのだ。そして、彼女はすつかり疲れて、ぐつたりしてしまふ。そして、やはりやさしい調子で返辭はしてゐるが、やつぱり同じやうにがつかりして、ねむけがさしたやうな樣子で、良人が自分の前にすわつてゐる事が、彼女には次第にくさくさして、たまらないものに見え出してくる。その時、もう何處か近所の時計が一時を打つた。

「あなた、もうやすんでね……」

「アア、寢よう、何かしておかうか？」

「いいえ、いいの、ただ、この手洗に一杯いい水を入れかへて下さればいいの……」と政子は云つて、ぢつと蒲團の中に横たはり、天井の節穴を見まもりながら、

「すまないわ、明日働かねばならぬ人なのに……」と呟いた。

その翌日、政子はその持ち前の勝氣から、病氣も忘れて起きてゐたが、さうして起きて見ると、さう苦しくもなかつたし、さう大した病でもないやうに思はれた。また、昨日、自分の云つた事、思つた事がみな、何でもなかつた心配のやうな氣がして、わざわざ無けなしの金を費ひ果しに旅に出るのでもないといふ氣持もされた。けれども、家の前に誰かの足音がすると、その度びに彼女の胸には妙な影が曳いた。彼女はまた寢床についてから、心の中で、

「いつそどつちかにきまれば、かへつていいんだわ、こんなに苦しんで、身も世もなく瘦せて行く氣のするのは、氣がきまらないからだわ、旅に出れば、きつとただあの人のみの……」と呟いた。そして、事もなくその日は暮れた。

その次ぎの日は、ずつと起き通して、そこら中を整理したり、いろいろ旅支度に本氣で取りかかりながら、いろいろな雜念を抑へるやうに、並木のあの寂しさうな後姿を想ひ出しては、丁度彼に呼びかけるやうに、

「あなた、かはいさうなあなた、わたし、あなたを捨てようとはちつとも思つてないわ……」と、政子は熱い涙の眼で、ぐつと睫毛を濡らしながら、良人の方に愛を誓ふのだつた。けれど、こんなに云はずにゐられないだけに、心の何處かに動き搖れるもののある事を、彼女はよく知つてゐた。あの日から、ぷつつり來ない長島の事が、ふと思ひ出されて氣になつて、何だか苦になつて仕様がなくなる……なぜ、こんな心になるのだらう、追はれれば逃げ、逃げれば追ふのが戀するものの常だといふ事が、一瞬心のおもてを掠めて通る、と、彼女は急いで、發たうと思ふ。一人になりたい、一人で靜かな海邊を歩きたいと思ふ……

かうして、並木が歸ると、妙にはしやぎ氣分になつたり、一人になると、ふさぎ込んだりしながらも、少し宛つ旅の支度はととのへられて行つた。留守中、良人の用ゐる肌着やら、いろんなこまごましたものも、二かはり位は洗ひもし、こしらへもしたし、留守中の良人の自炊に困らぬやうにとの心盡しもすむと、今度は自分の着物の方もなほし

たり、持つて行くものをあれこれと定めてみたりして、そして、何となく落着かぬやうな、慌しい旅心地になつて行つた。

やつと三日目の朝、車を呼べる位になつた。

「わたしひとりでいいんだけど……」政子は、やはり自分も送つて行かうと旅支度をする良人の身を見て、「やつぱり氣になつてついてくる人の氣も考へなくつちや……ほんとにあなたの心配するやうな事は何もありませんよ」と云つた。

するとその言葉をどういふ風に解釋したのか、

「さういふ譯ぢやない……」と並木は急いで云つて、「はじめてのところへ、女ひとりで行くと、むかうの者が莫迦にするからね」

「まあ、莫迦にするつて……いいえ、そんな事ないわ……莫迦になんかされるもんですか……」

から云つて、政子は快活に笑つた。何と云つても、久し振りに二人で旅立つのは、やはり嬉しい事でなくてはならなかつた。鵠沼から一緒に歸つて以來、二人で汽車に乘るやうな事はなかつたのだから……それにあの時分は、今よりもつと苦しかつた、良人はまだすつかり健康といふわけでもなく、自分はもう餘裕もない緊張した心で、良人の方を心配の眼で見守つてゐたばかりだつた。それが今はそのあべこべになつて、良人の氣遣はしさうな顏!

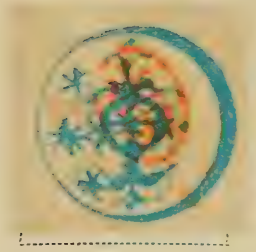
これでまづ、二三週間は、ここへは歸らないのだから…… と、愈々發つといふ間際に、彼女は知人の住所を書いた手帖を取り上げて云つた。

「これ持つて行きますよ、さみしいとき、みんなに手紙書くわ……手紙書くだけを仕事にするなんて、いいわね……」

「………………」

そこへ俥が二臺來たので、二人の話はとぎれた。

かうして二人で俥をつらね、兩國驛に向つて乘りつけて行く氣持は、樂しいやうでもあり、また、心細いやうでもあつた。これが自動車だつたら、もつとすてきだらうと、政子は考へる。ブルジョアの氣分は厭やだけれど、あの自動車のつやつやしい黑塗、アメリカ直輸入の、新型のその自動車の中で、二人さしむかひで……窓には幸福の象徵の紅い花が……政子はそんな空想が好きだつた。が、その對坐する相手の聲が、張り切つた熱の籠つた聲が、燃えるやうな若々しい眼が、すぐに長島のそれが浮ぶ……彼女は心持ち赧くなつて、見るともなく、幌の間から外を見ると、俥は今や牛込肴町を、電車線路に沿うて、築土八幡の方に走つてゐる。彼女の前には、何を思うてゐるのやら、良人の瘦せた肩が、はつきりと車上に浮んでゐる……

生田春月全集

第五卷

昭和六年六月廿三日印刷
昭和六年六月廿八日發行

編輯者　生田花世
同　生田博孝
發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町七十一番地
發行所　新潮社
電話牛込 長八八五番 八八六番 八八七番 八八八番 八八九番
振替東京 一七五二番

印刷者　佐々木俊一
富士印刷株式會社
製本者　大出清次郎

全十巻目次